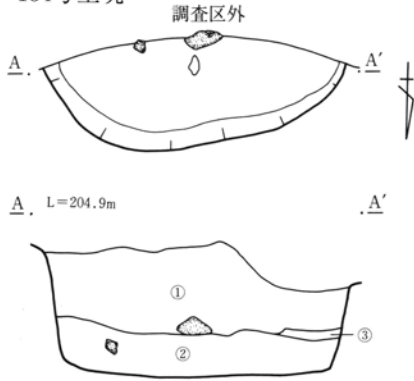


第4章 検出された遺構と遺物

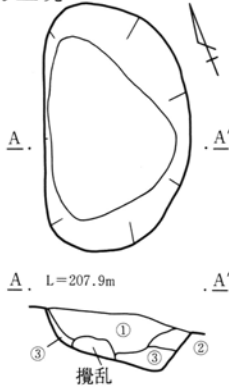
154号土坑



154号土坑

- ① 暗褐色土 As-YP、白色鉱物粒少量含む。
- ② 暗褐色土 As-YP、白色鉱物粒多く含む。
- ③ 攪乱

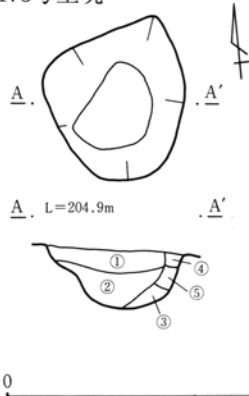
164号土坑



164号土坑

- ① 黒色土 黄色軽石、ローム粒僅かに含む。
- ② 暗褐色土 ロームブロック多く含む。
- ③ 暗褐色土 黄色軽石僅かに含む。ローム質。

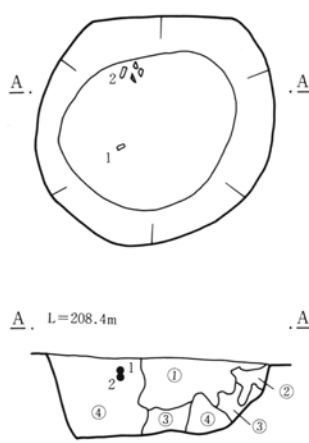
173号土坑



173号土坑

- ① 暗褐色土 白色鉱物粒少量含む。
- ② 暗褐色土 ロームブロック僅かに含む。
- ③ 茶褐色土 ローム土多く含む。
- ④ 暗褐色土 橙色軽石粒少量含む。
- ⑤ 暗褐色土 橙色軽石粒少量含む。ローム土僅かに含む。

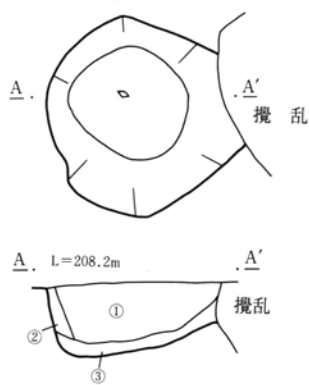
159号土坑



159号土坑

- ① 暗褐色土 白色鉱物粒多く含む。
- ② 暗褐色土 As-YP 多く含む。
- ③ 黄褐色土 白色鉱物粒、As-YP 少量含む。
- ④ 攪乱

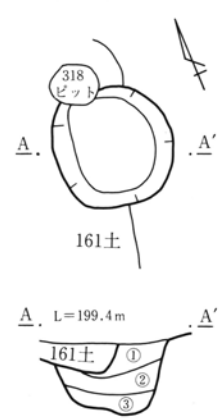
165号土坑



165号土坑

- ① 黒褐色土 黄色軽石少量含む。ローム粒僅かに含む。
- ② 黒褐色土 黄色軽石多く含む。
- ③ 暗褐色土 ローム質。①を少量含む。

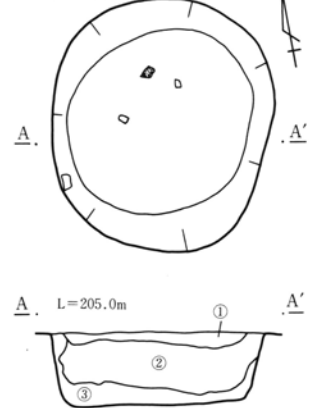
162号土坑



162号土坑

- ① 黒色土 白色軽石僅かに含む。
- ② 黒色土 白色軽石、ローム粒僅かに含む。
- ③ 黒色土 ローム粒多く含む。

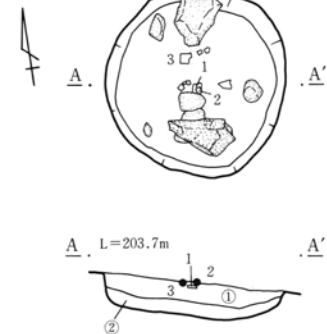
171号土坑



171号土坑

- ① 暗褐色土 白色鉱物粒多く含む。
- ② 暗褐色土 黄色軽石粒少量含む。炭化物僅かに含む。
- ③ 暗褐色土 ローム土少量含む。黄色軽石僅かに含む。

178号土坑

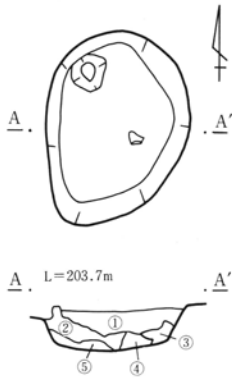


178号土坑

- ① 黒褐色土 ローム粒僅かに含む。白色鉱物粒少量含む。
- ② 暗褐色土 ローム粒多く含む。

第192図 154・159・162・164・165・171・173・178号土坑

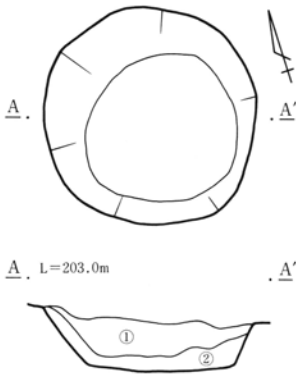
181号土坑



181号土坑

- ① 黒褐色土 白色鉱物粒少量含む。
- ② 暗褐色土 白色鉱物粒少量含む。橙色軽石粒僅かに含む。
- ③ 暗褐色土 ローム土含む。
- ④ 暗褐色土 ローム土多く含む。
- ⑤ 暗褐色土 白色鉱物粒少量含む。橙色軽石粒僅かに含む。やや粘質。

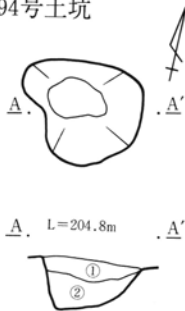
191号土坑



191号土坑

- ① 暗褐色土 白色鉱物粒少量含む。
- ② 茶褐色土 ローム土多く含む。粘質。

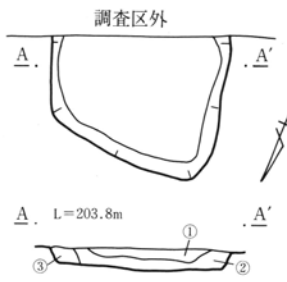
194号土坑



194号土坑

- ① 暗褐色土 黄色軽石多く含む。
- ② 暗褐色土 黄色軽石少量含む。ローム粒多く含む。

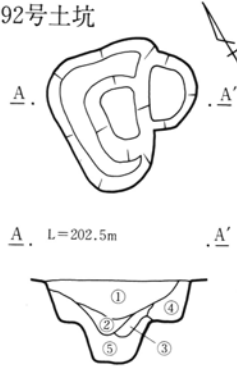
185号土坑



185号土坑

- ① 黒色土 ローム粒少量含む。
- ② 茶褐色土 ローム粒少量含む。
- ③ 茶褐色土 ローム粒多く含む。

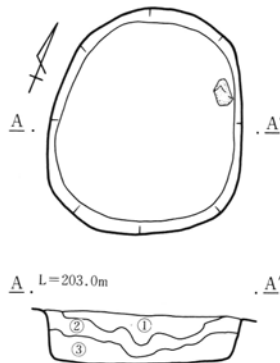
192号土坑



192号土坑

- ① 黒褐色土 ローム粒、白色鉱物粒僅かに含む。
- ② 黒褐色土 ローム粒少量含む。
- ③ 暗褐色土 ローム粒僅かに含む。
- ④ 黒褐色土 白色鉱物粒僅かに含む。
- ⑤ 暗黄褐色土 暗色帯主体。②を僅かに含む。

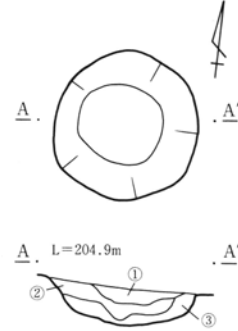
195号土坑



195号土坑

- ① 黒褐色土 黄色軽石、ローム粒僅かに含む。
- ② 黒褐色土 黄色軽石、ローム粒多く含む。
- ③ 茶褐色土 暗色帯主体。②を僅かに含む。

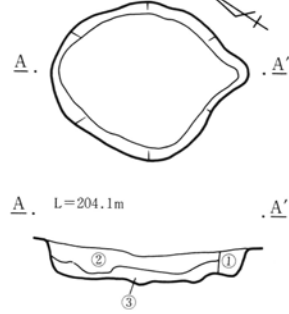
187号土坑



187号土坑

- ① 暗褐色土 ロームブロック、白色軽石少量含む。
- ② 黒色土 ローム粒僅かに含む。
- ③ 暗黄褐色土 ロームブロック多く含む。

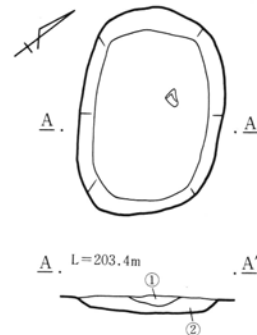
193号土坑



193号土坑

- ① 黒褐色土 ローム粒僅かに含む。橙色軽石僅かに含む。
- ② 黒褐色土 ローム粒少量含む。橙色軽石僅かに含む。
- ③ 暗褐色土 ローム粒多く含む。

196号土坑



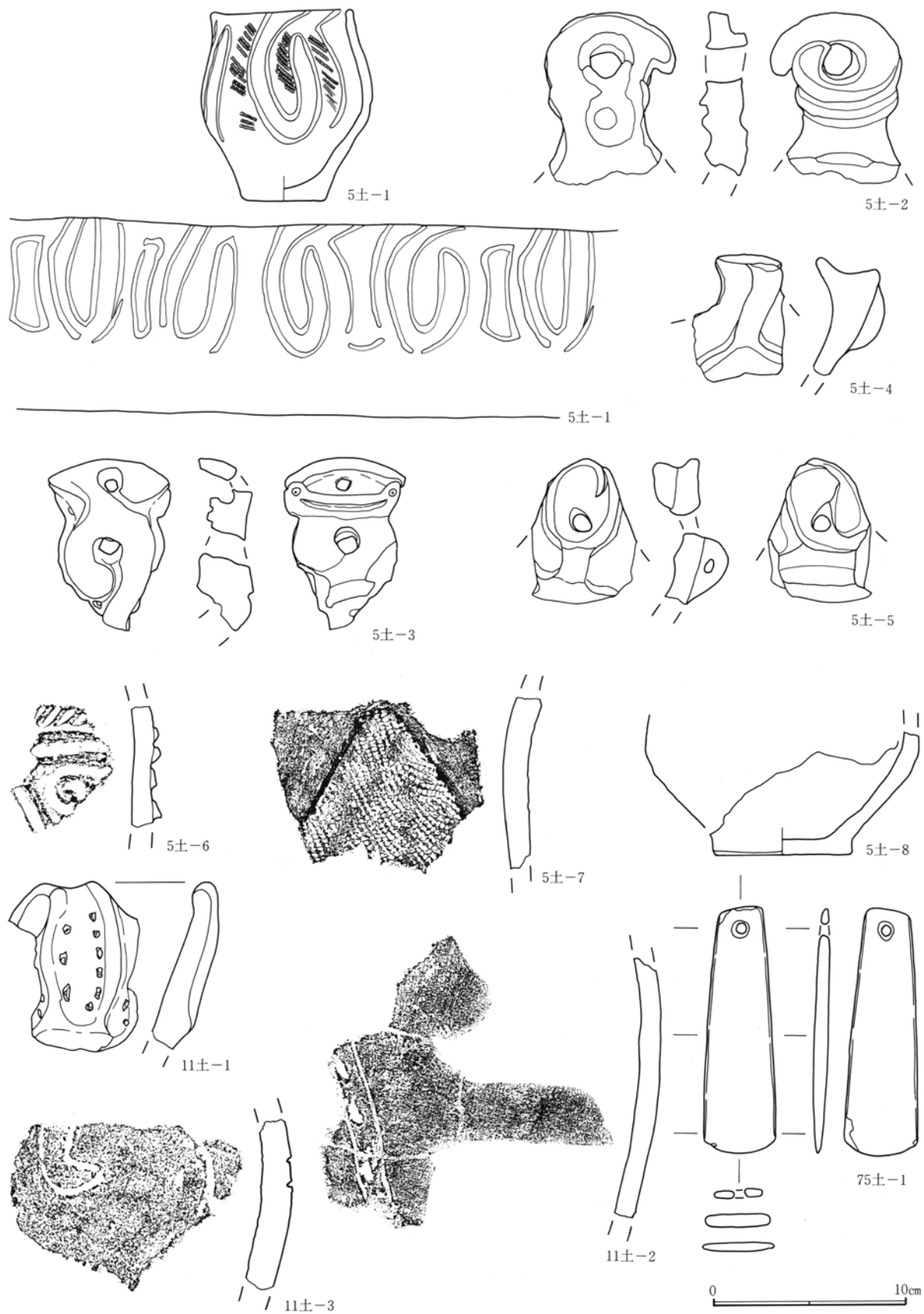
196号土坑

- ① 暗褐色土 ローム粒、黄色軽石僅かに含む。
- ② 暗褐色土 ローム粒多く含む。黄色軽石僅かに含む。

0 2m

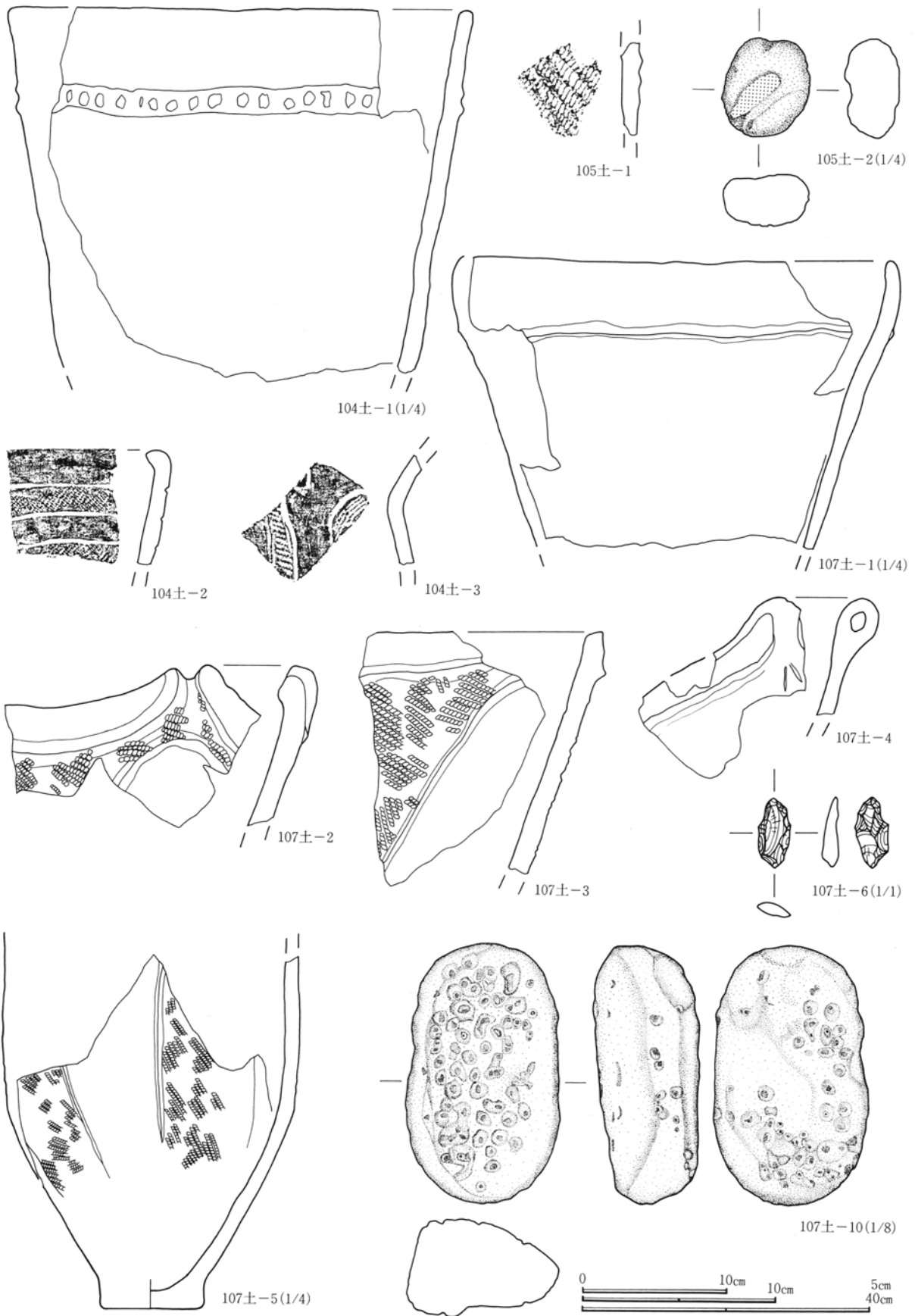
第193図 181・185・187・191～196号土坑

6 土坑出土の遺物



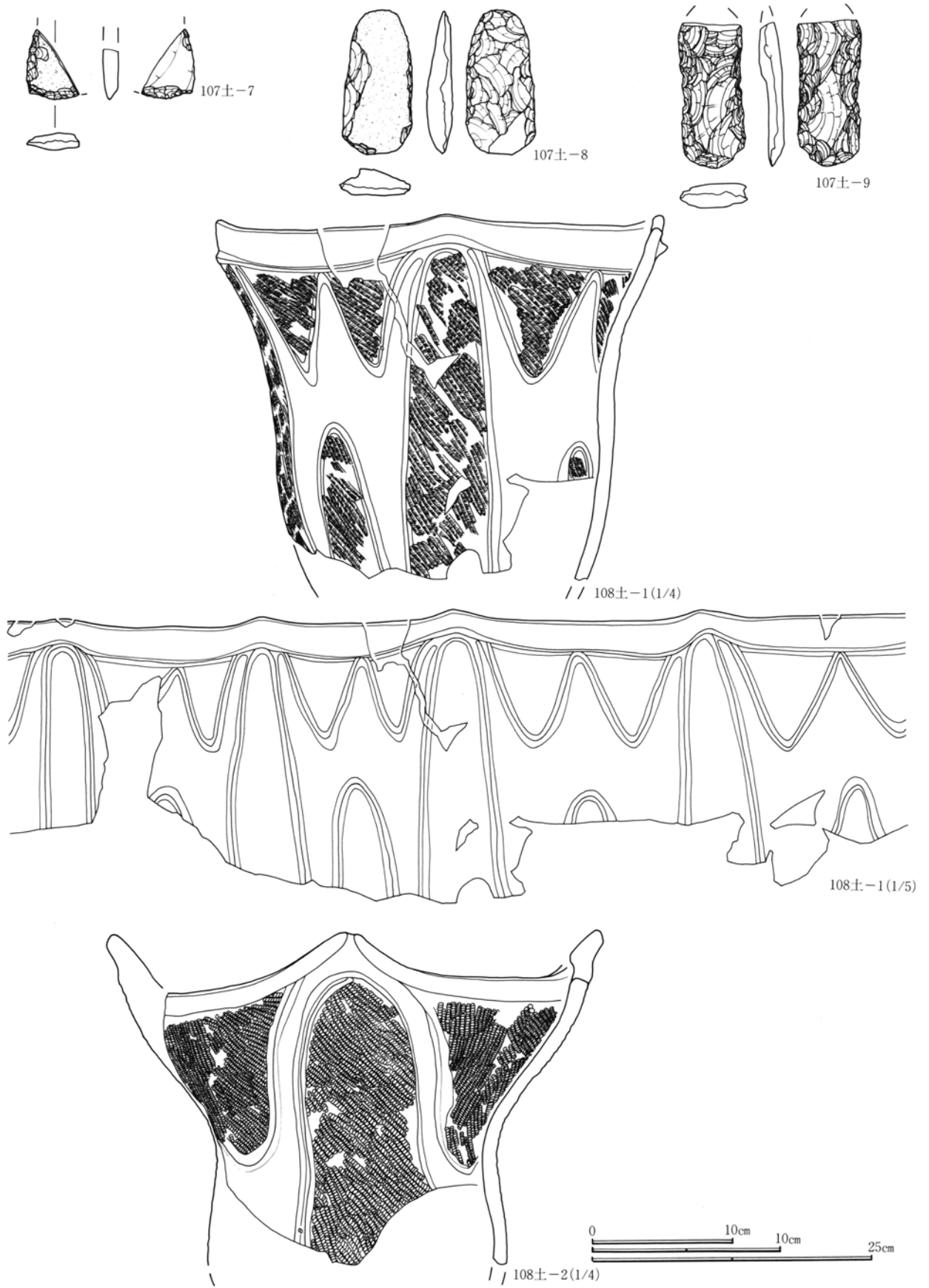
第194図 5・11・75号土坑出土遺物

第2節 縄文時代

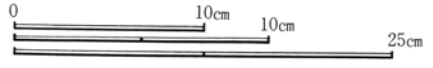
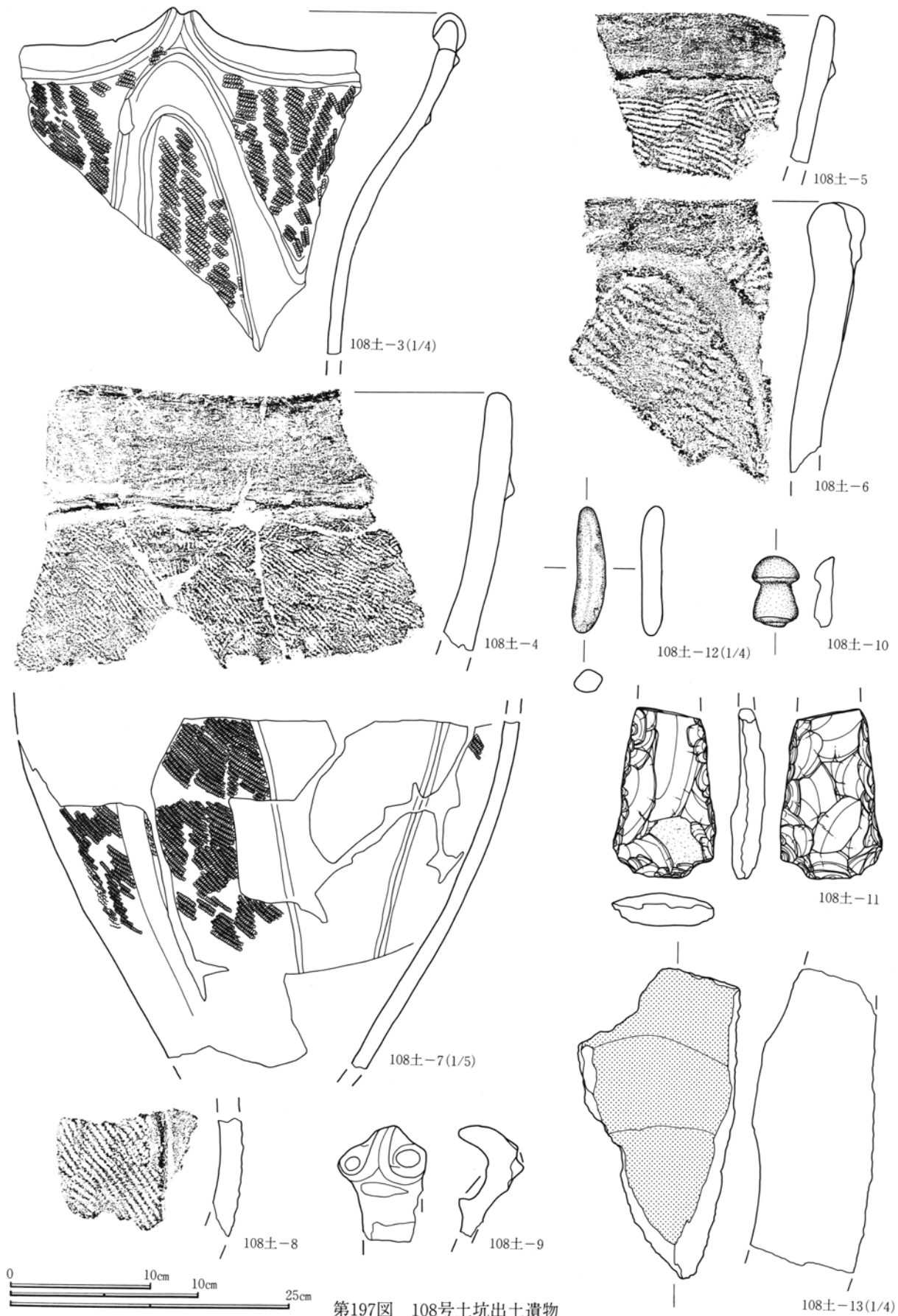


第195図 104・105・107号土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

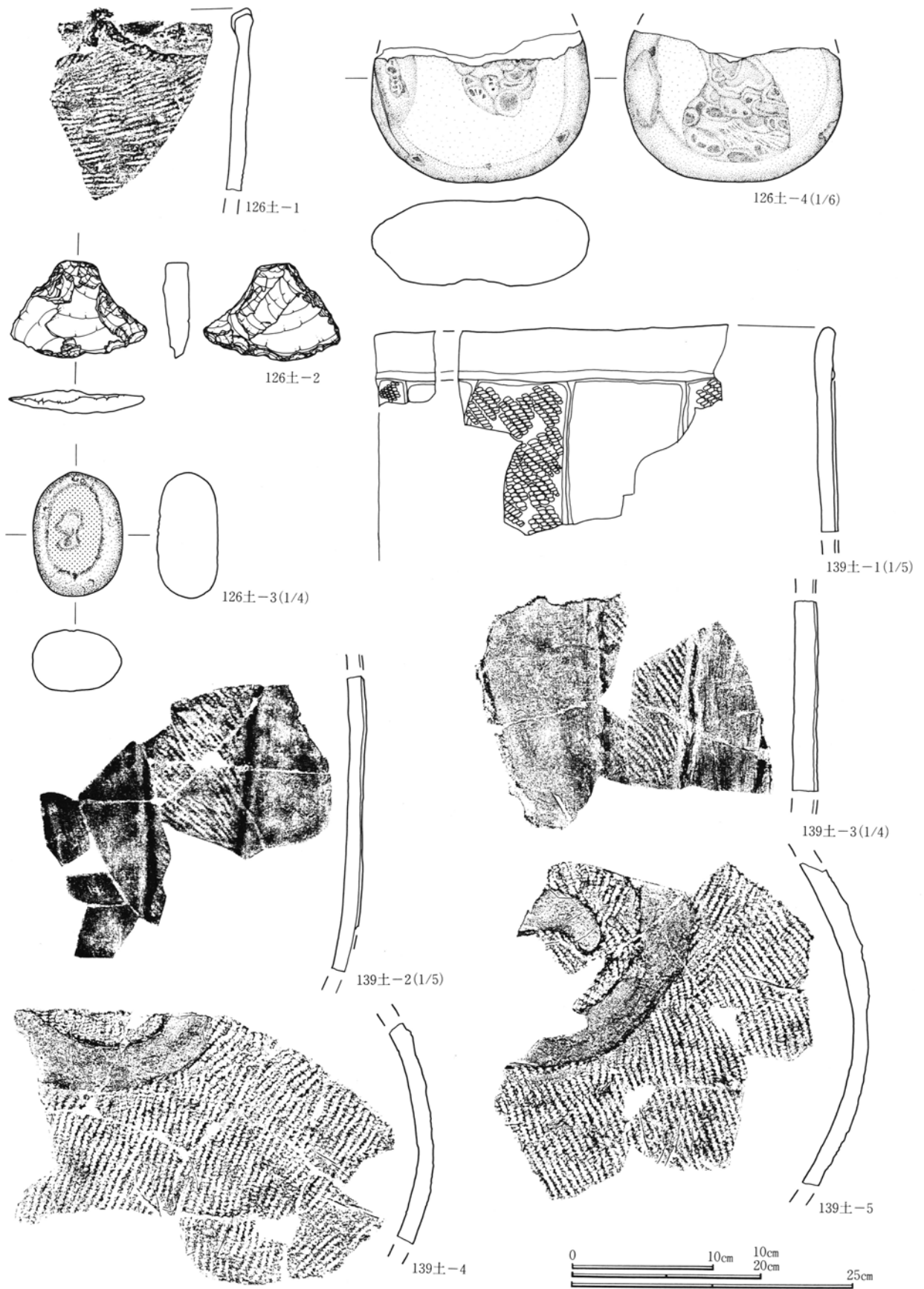


第196図 107・108号土坑出土遺物

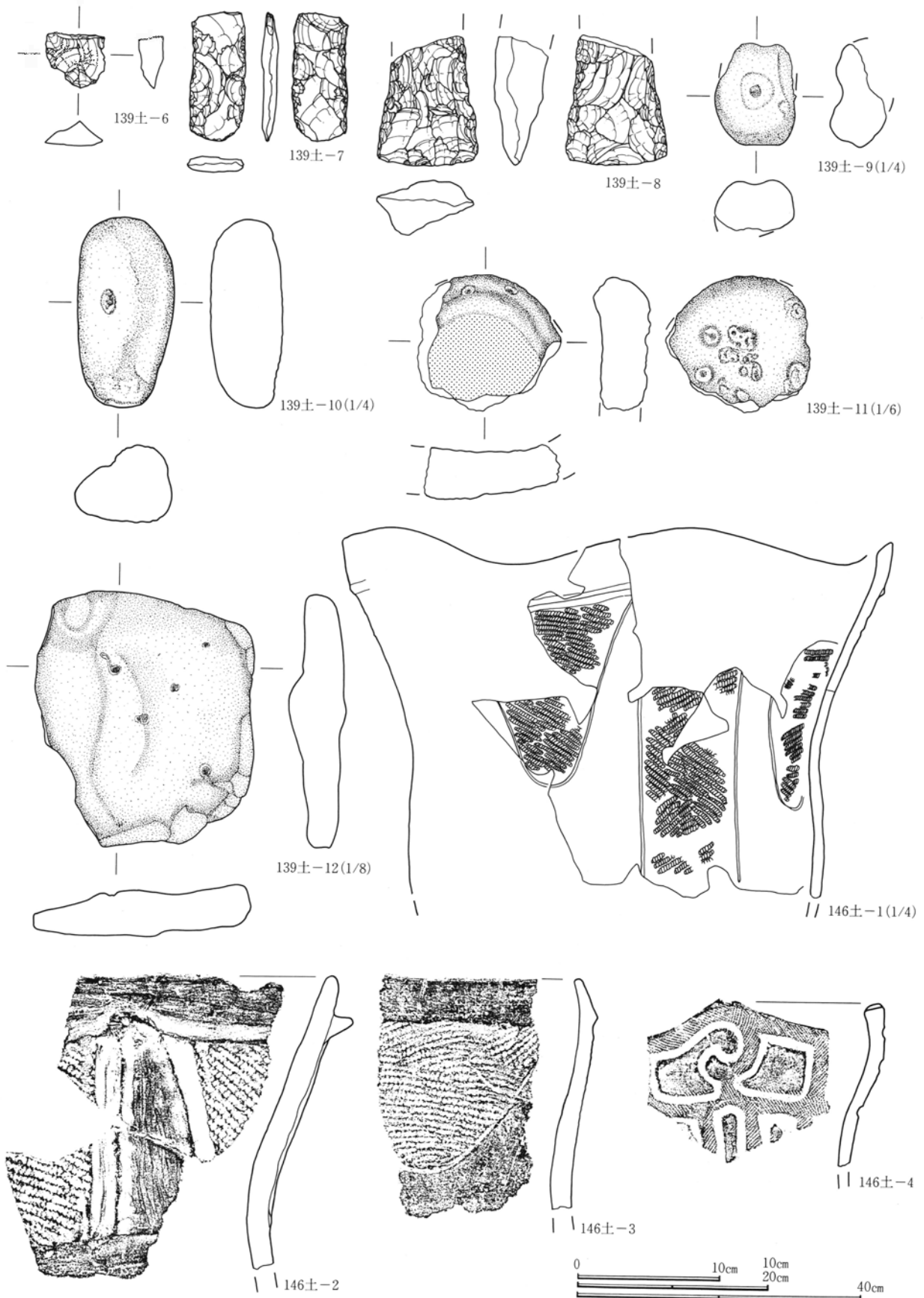


第197図 108号土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



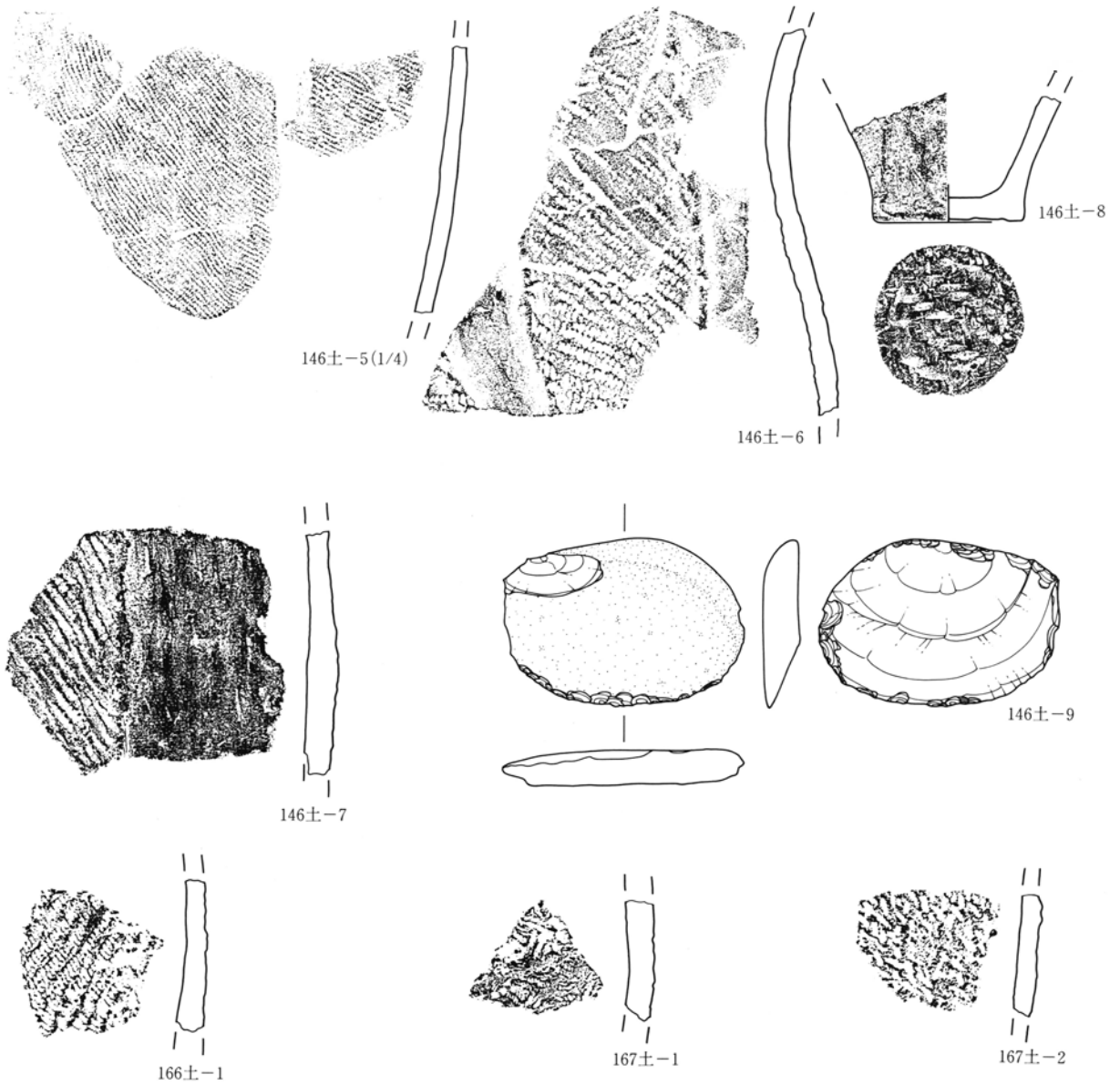
第198図 126・139号土坑出土遺物



第199図 139・146号土坑出土遺物



第4章 検出された遺構と遺物



第200図 146・166・167号土坑出土遺物



5号土坑出土土器観察表 (第194図 P L 89)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 小型深鉢	完	①良好 ②灰白色 ③細砂を含む	口径7.2cm。器高9.8cm。底径4cm。原体LRの単節斜縄文を縦位に施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。文様は4単位。内面磨き。	称名寺Ⅱ式
2 深鉢	把手	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂を含む	環状の把手。	称名寺Ⅱ式
3 深鉢	把手	①良好 ②にぶい黄褐色 ③砂、少量の雲母を含む	環状の把手。棒状工具による沈線文と刺突文を施す。	堀之内式
4 深鉢	把手	①良好 ②暗赤褐色 ③砂を少量含む	スタンプ状の把手。断面台形の隆帯を貼付する。内、外面磨き。	後期前半
5 深鉢	把手	①良好 ②にぶい橙 ③細砂を含む	環状の把手に橋状の把手を付す。	堀之内式
6 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	断面三角の隆帯と棒状工具による沈線で文様を描出する。	堀之内式
7 深鉢	胴部片	①良好 ②黒褐色 ③砂、少量の雲母を含む	断面三角の隆帯で三角形の区画をなし、区画内には原体LRの単節斜縄文を充填する。	加曾利E 4式
8 深鉢	底部	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	底径7.1cm。無文。1に蓋をした状態で出土。	中期末～後期初頭

11号土坑出土土器観察表 (第194図 P L 89)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を多量に含む	断面台形の隆帯を貼付し、棒状工具による刺突文を施す。	称名寺式か
2 深鉢	胴部片	①良好 ②黒褐色 ③砂を含む	棒状工具による沈線で文様を描出し、角棒状工具による刺突文を施す。	称名寺Ⅱ式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	棒状工具による沈線で文様を描出する。	称名寺Ⅱ式

75号土坑出土石器計測表 (第194図 P L 89)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
1	玉斧	完	① 12.6 ② 3.8 ③ 0.75 ④ 62	蛇紋岩	

104号土坑出土土器観察表 (第195図 P L 90)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部 1/4残存	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	断面半円の隆帯を巡らし、その上に縄文の押圧による円形の凹みを施す。	称名寺Ⅱ式
2 深鉢	口縁部片	①良好 ②赤褐色 ③細砂を含む	口縁は内側に肥厚する。棒状工具による沈線で文様を描出したのち原体LRの単節斜縄文を施文する。内面磨き。	称名寺式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③細砂を含む	原体RLの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。内面磨き。	称名寺式

105号土坑出土土器観察表 (第195図 P L 90)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい褐色 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条RLの単節斜縄文を施文する。	有尾式

105号土坑出土石器計測表 (第195図 P L 90)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	磨石	完	① 7.0 ② 6.2 ③ 3.9 ④ 166.0	粗粒輝石安山岩	

107号土坑出土土器観察表 (第195図 P L 90)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁～胴部1/2	①良好 ②赤褐色 ③砂を含む	断面三角の隆帯を巡らす。内面磨き。	中期後半～後期初頭
2・3 深鉢	口縁部片	①良好 ②褐色 ③砂を含む	波状口縁。断面三角の隆帯で文様を描出したのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曾利E 4式
4 深鉢	口縁部片	①良好 ②灰黄褐色 ③砂を含む	波状口縁。橋状の把手を有する。断面三角の隆帯と短沈線を施す。	加曾利E 4式か
5 深鉢	胴下半～底部	①良好 ②赤褐色 ③砂を含む	断面三角の隆帯を垂下させ、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曾利E 4式

第4章 検出された遺構と遺物

107号土坑出土石器計測表 (第195、196図 P L90)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
6	加剣		① 1.2 ② 0.6 ③ 0.3 ④ 0.2	黒耀石	
7	スクレイパー	破片	① (3.45) ② (2.7) ③ (0.9) ④ 9.1	黒色頁岩	
8	打斧	完	① 7.6 ② 3.8 ③ 1.4 ④ 41.5	細粒輝石安山岩	
9	打斧	刃部欠	① (7.8) ② (3.5) ③ (1.8) ④ 42.7	黒色頁岩	
10	多孔石	完	① 36.4 ② 21.9 ③ 13.7 ④ 13800	粗粒輝石安山岩	

108号土坑出土土器観察表 (第196、197図 P L91)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵等	備考
1	口縁～胴 深鉢	①良好 ②赤灰色 ③砂を含む	口径32.2cm。4単位の波状口縁。断面三角の隆帯を頸部に巡らし、断面三角の隆帯でV形と∩形の4単位の文様を描出したのち原体Lの単節斜縄文を縦位に施文する。	加曽利E4式
2	口縁～胴 深鉢	①良好 ②浅黄橙 ③砂を含む	口径35.1cm。4単位の波状口縁。断面三角の隆帯でU形と∩形の4単位の文様を描出したのち、原体LRの単節斜縄文を横位に施文する。	加曽利E4式
3	口縁部 深鉢	①良好 ②黒褐色 ③砂、小礫を含む	波状口縁。断面三角の隆帯でV形と∩形の文様を描出したのち、原体LRの単節斜縄文を縦位に施文する。	加曽利E4式
4	口縁部片 深鉢	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	断面三角の隆帯を巡らしたのち、原体LRの単節斜縄文を縦位に施文する。	加曽利E4式
5	口縁部片 深鉢	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	波状口縁か。断面三角の隆帯を巡らしたのち、原体LRの単節斜縄文を乱雑に施文する。	加曽利E4式
6	口縁部片 深鉢	①良好 ②橙 ③砂を含む	低い隆帯で文様を描出したのち、原体LRの単節斜縄文を縦位に施文する。	加曽利E4式
7	胴部 深鉢	①良好 ②橙 ③砂、小礫を含む	低い隆帯を垂下させたのち、原体LRの単節斜縄文を縦位に施文する。胴部の文様は6単位。	加曽利E4式
8	胴部片 深鉢	①良好 ②橙 ③砂、小礫を含む	断面三角の低い隆帯を垂下させたのち、原体LRの単節斜縄文を横位に施文する。	加曽利E4式
9	把手か	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	カマキリの意匠の把手か。橋状の把手が付していたと思われる。	—

108号土坑出土石器計測表 (第197図 P L91、92)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
10	石棒	1/2	① (3.8) ② (2.6) ③ (1.1) ④ 12.7	緑色片岩	
11	打斧	一部欠	① (9.1) ② (5.5) ③ (1.9) ④ 103.0	粗粒輝石安山岩	
12	石棒状石器	完	① 9.1 ② 2.5 ③ 1.7 ④ 54.0	変玄武岩	
13	石皿	1/5?	① (22.0) ② (11.3) ③ (8.7) ④ 2930	粗粒輝石安山岩	

126号土坑出土土器観察表 (第198図 P L92)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵等	備考
1	口縁部片 深鉢	①良好 ②にぶい橙 ③細砂を含む	口縁に小突起を持つ。低い隆帯を巡らしたのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	中期末～後期初頭

126号土坑出土石器計測表 (第198図 P L92)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	スクレイパー	完	① 5.1 ② 7.35 ③ 1.5 ④ 47.6	黒色頁岩	
3	磨石	完	① 8.9 ② 6.4 ③ 4.4 ④ 392.1	粗粒輝石安山岩	
4	台石	約1/2	① (16.0) ② (23.2) ③ (9.4) ④ 4900	粗粒輝石安山岩	

139号土坑出土土器観察表 (第198図 P L92、93)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徵等	備考
1	口縁部 深鉢	①良好 ②にぶい赤褐色 ③細砂を含む	口径(41.1)cm。直線的で円筒状の器形を示す。口縁に断面三角の低い隆帯を巡らしたのち、垂下。原体LRの単節斜縄文を施文する。内面磨き。	加曽利E4式
2	胴部片 深鉢	①良好 ②にぶい橙 ③砂、少量の雲母を含む	断面三角の隆帯を垂下したのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曽利E4式
3	胴部片 深鉢	①良好 ②橙 ③砂、少量の雲母を含む	断面三角の隆帯を垂下したのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曽利E4式
4・5	胴部片 深鉢	①良好 ②橙 ③細砂を含む	張りの強い胴部。渦巻状の凹線を施したのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。内面磨き。	加曽利E4式

139号土坑出土石器計測表 (第199図 P L 92、93)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
6	加剝	完	① 2.75 ② 3.0 ③ 1.2 ④ 9.9	チャート	
7	打斧	完	① 6.7 ② 2.95 ③ 0.8 ④ 20.6	黒色頁岩	
8	打斧	基部欠	① (6.7) ② (5.3) ③ (2.8) ④ 100.7	黒色頁岩	
9	凹石	1/2	① (7.2) ② (5.7) ③ (4.1) ④ 169.1	粗粒輝石安山岩	
10	凹石	完	① 13.4 ② 6.9 ③ 5.5 ④ 708.4	粗粒輝石安山岩	
11	石皿	約1/4	①(14.4) ②(15.4) ③ (6.0) ④ 1526.5	粗粒輝石安山岩	
12	多孔石	完	① 31.0 ② 35.4 ③ 8.2 ④10900	粗粒輝石安山岩	

146号土坑出土石器観察表 (第199、200図 P L 93、94)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部	①良好 ②橙 ③砂を含む	波状口縁。断面三角の隆帯を巡らしたのち、棒状工具による沈線でV形と〇形の区画をなす。区画内には原体LRの単節斜縄文を施文するが、一部施文方向を変えて羽状に施文している。	加曾利E 4式
2 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい黄色 ③細砂を含む	舌状突起を持つ断面三角の隆帯を巡らしたのち、垂下。原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曾利E 4式
3 深鉢	口縁部	①良好 ②にぶい黄褐色 ③砂、小礫を含む	断面三角の隆帯を巡らしたのち、棒状工具による沈線で半円状の区画をなす。区画内は原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曾利E 4式
4 深鉢	口縁部	①良好 ②黒褐色 ③細砂を含む	原体RLの細い縄文を、施文方向を変えて施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。内面磨き。	称名寺式
5 深鉢	胴部1/3	①良好 ②にぶい橙 ③細砂を含む	原体LRの単節斜縄文を縦位に施文する。	後期初頭
6 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄褐色 ③細砂を含む	断面三角の隆帯を垂下させたのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	中期後半
7 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	断面三角の隆帯を垂下させたのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曾利E 4式か
8 深鉢	底部	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	底径6.6cm。胴部は無文で磨き。底部に網代痕有り。	—

146号土坑出土石器計測表 (第200図 P L 93)

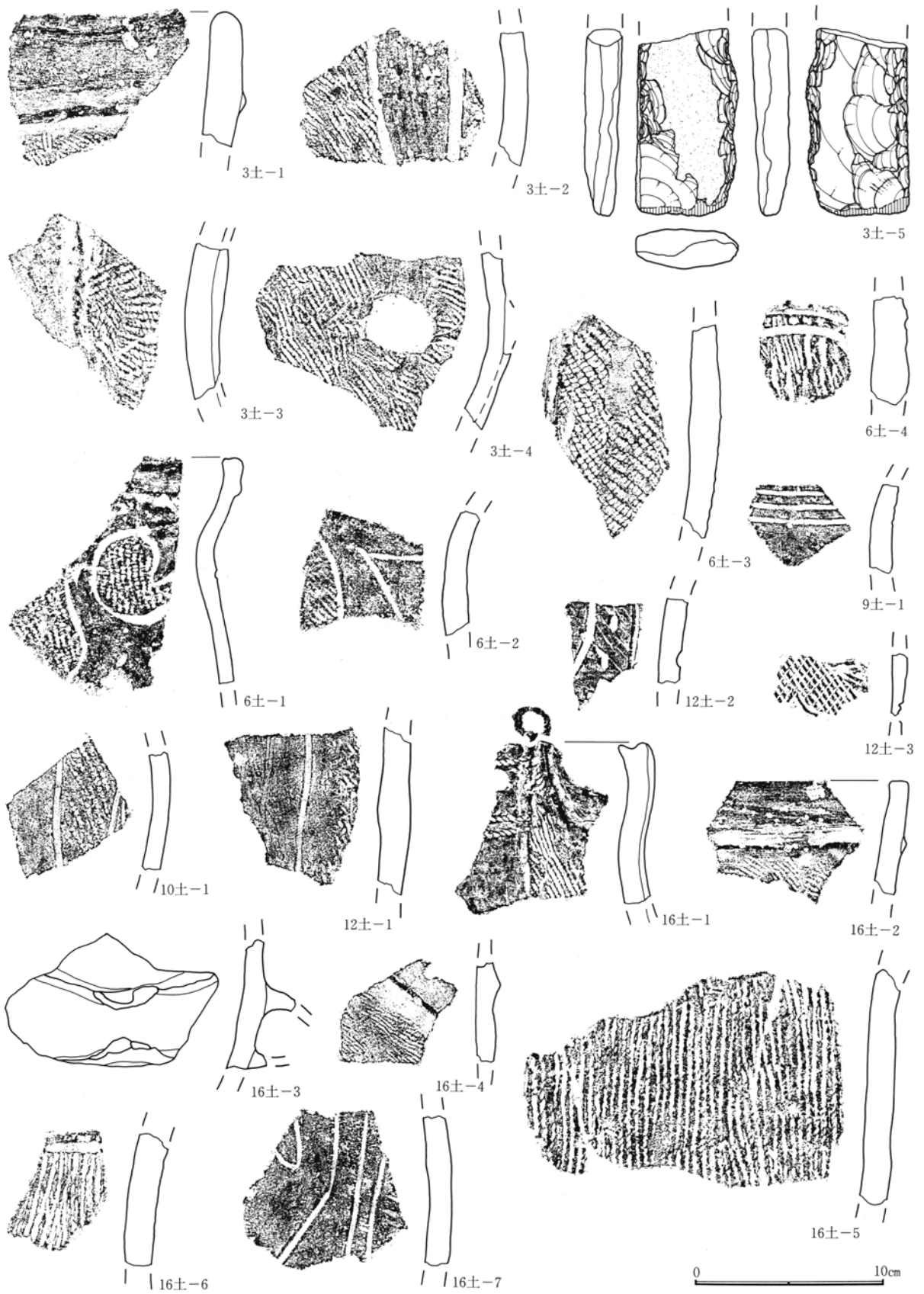
番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
9	スクレイパー	完	① 7.2 ② 10.4 ③ 1.6 ④ 158.9	黒色頁岩	

166号土坑出土石器観察表 (第200図 P L 94)

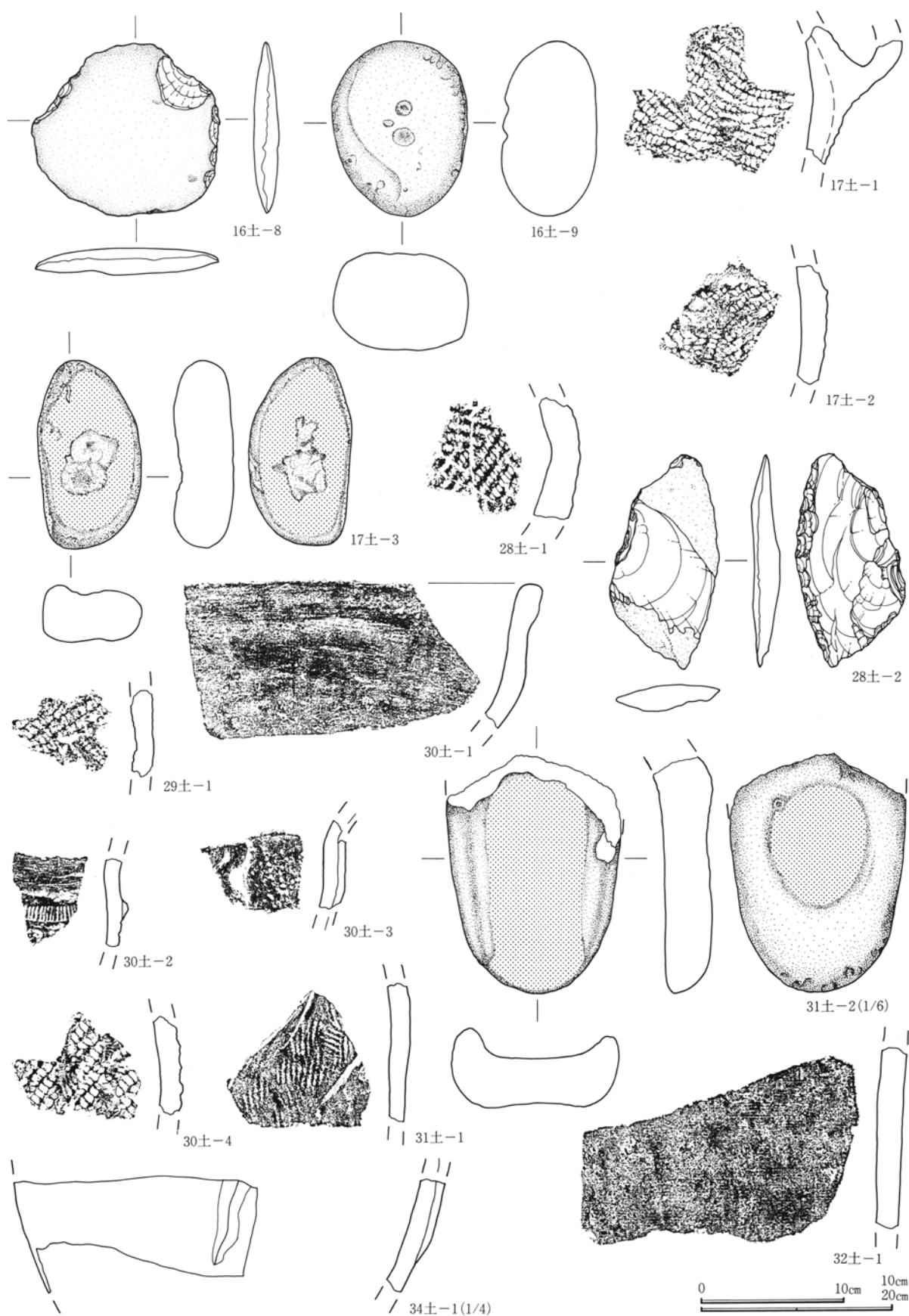
番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①やや不良 ②橙 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条LRの単節斜縄文を施文する。	前期前半

167号土坑出土石器観察表 (第200図 P L 94)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③繊維、細砂を含む	原体RLの単節斜縄文の側面圧痕文を乱雑に施文する。	前期前半 (花積下層式か)
2 深鉢	胴部片	①やや不良 ②明赤褐色 ③繊維、細砂を含む	原体RLの単節斜縄文を乱雑に施文する。	前期前半 (花積下層式か)

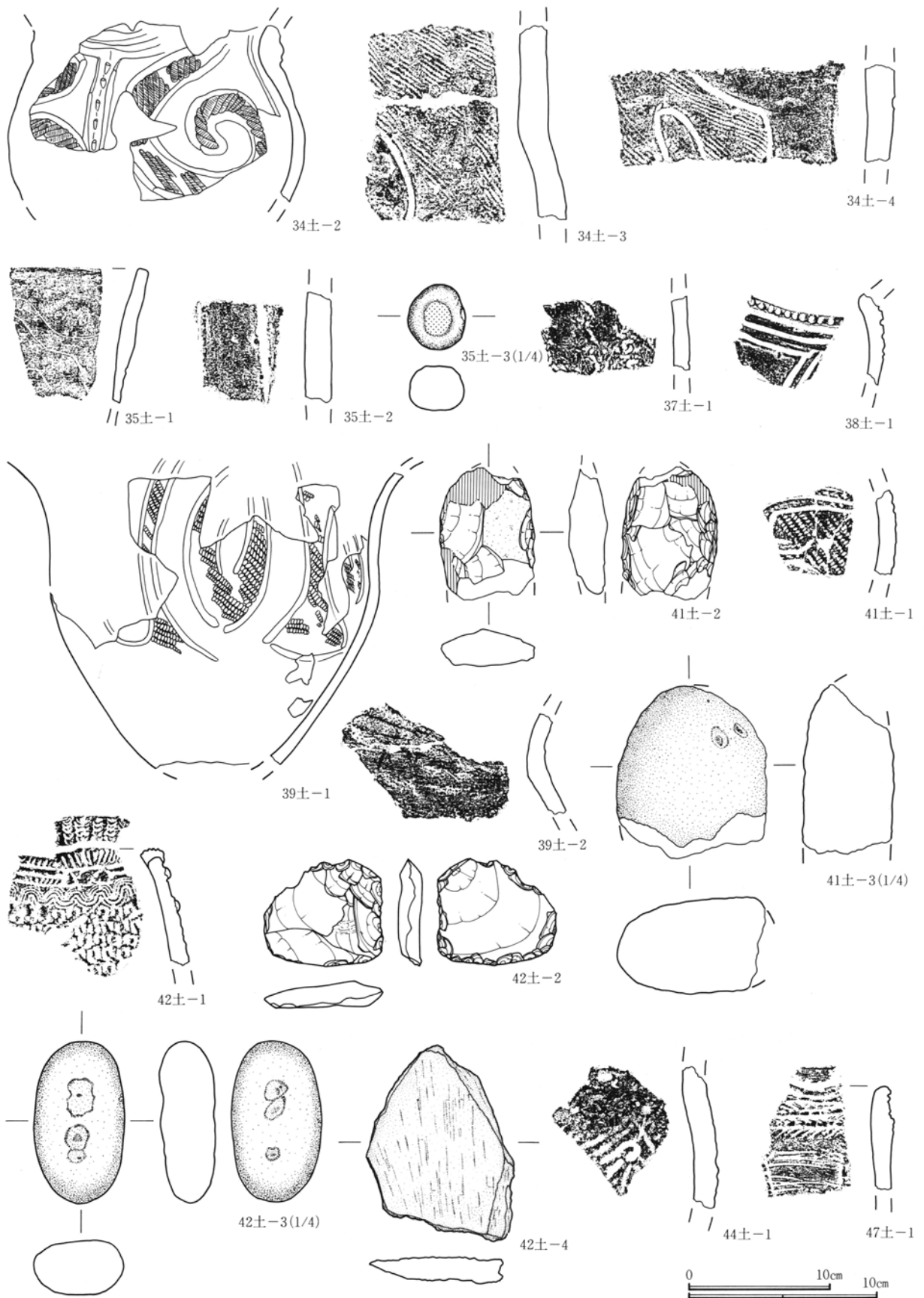


第201図 3・6・9・10・12・16号土坑出土遺物

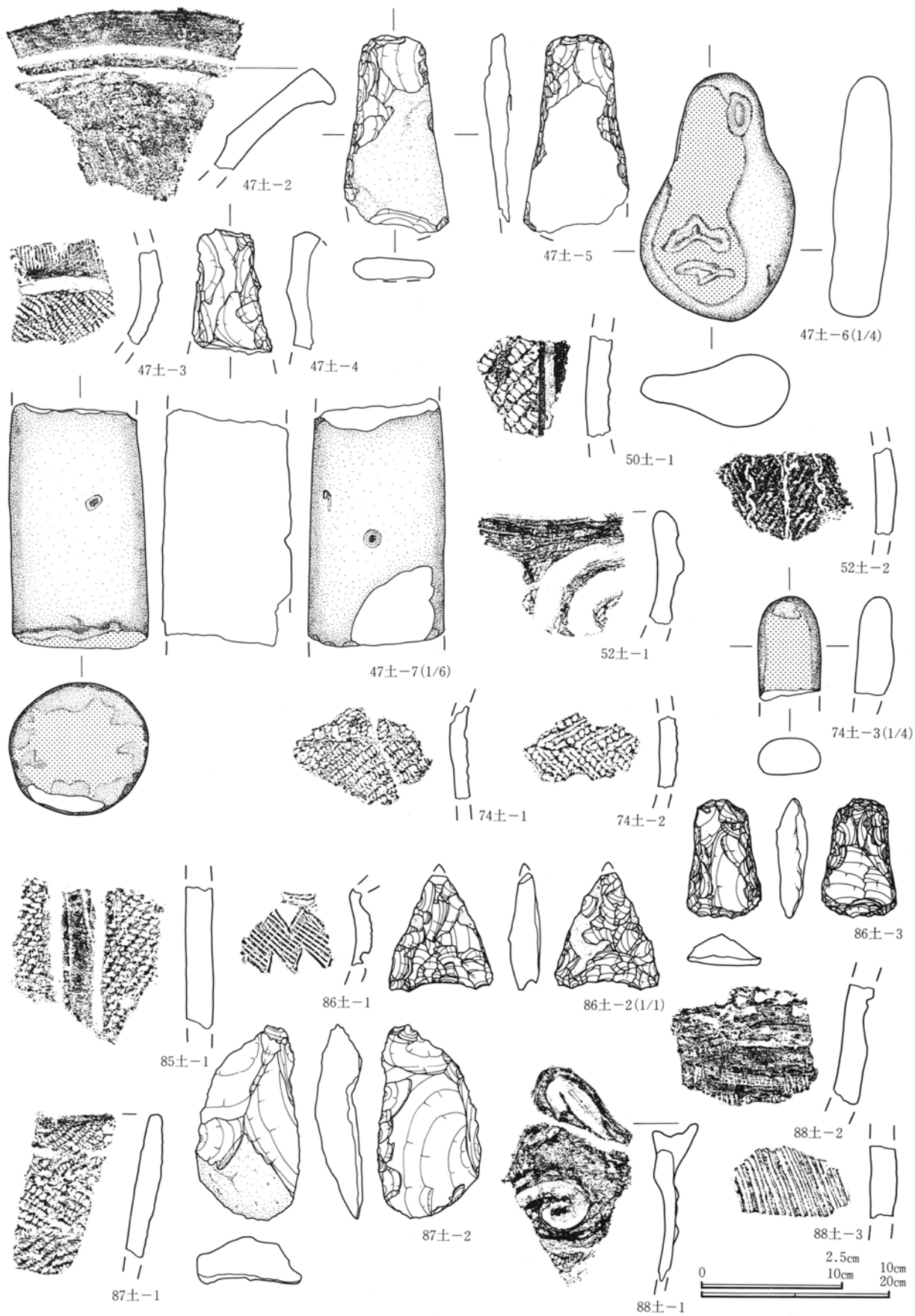


第202図 16・17・28～32・34号土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



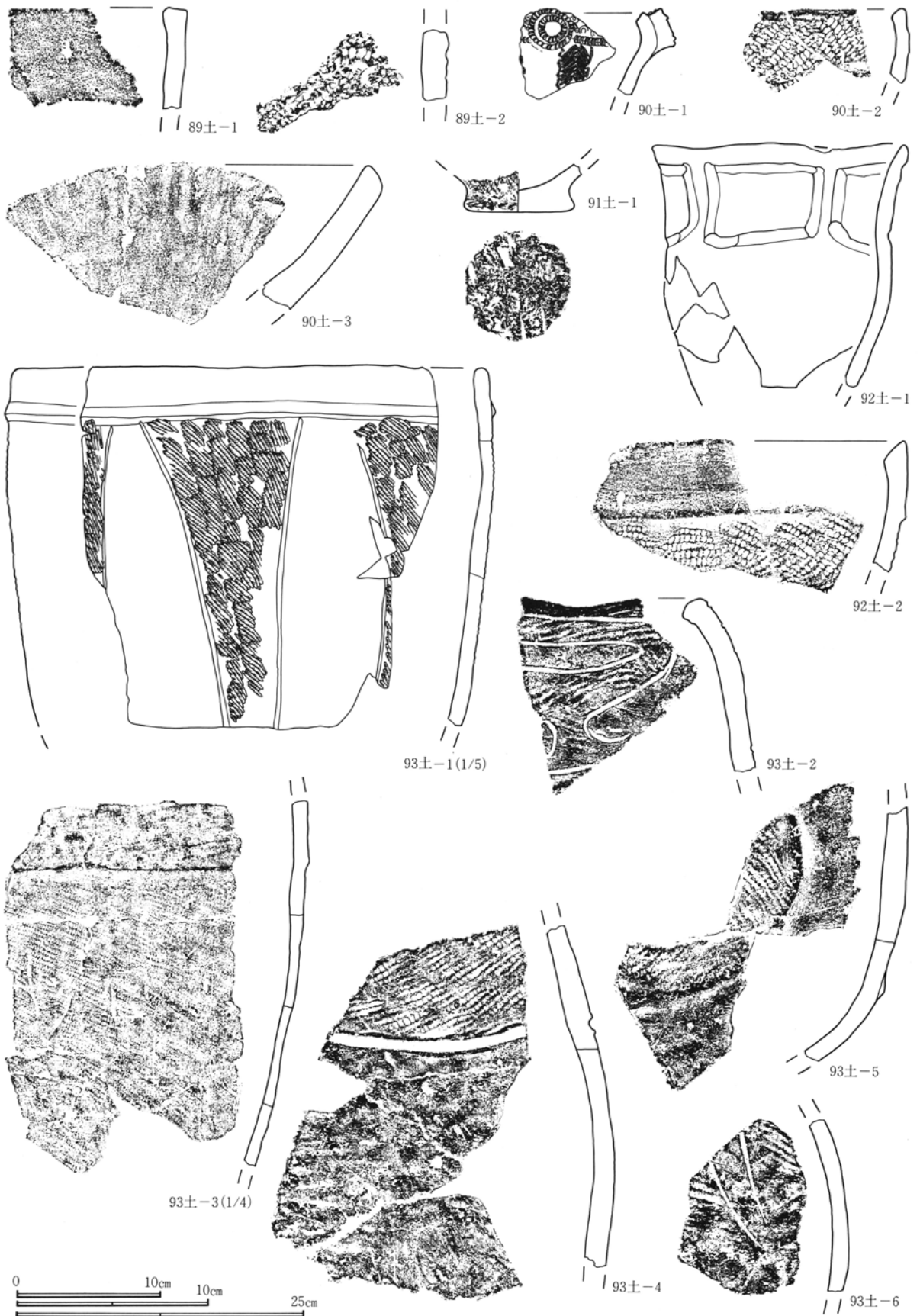
第203図 34・35・37~39・41・42・44・47号土坑出土遺物



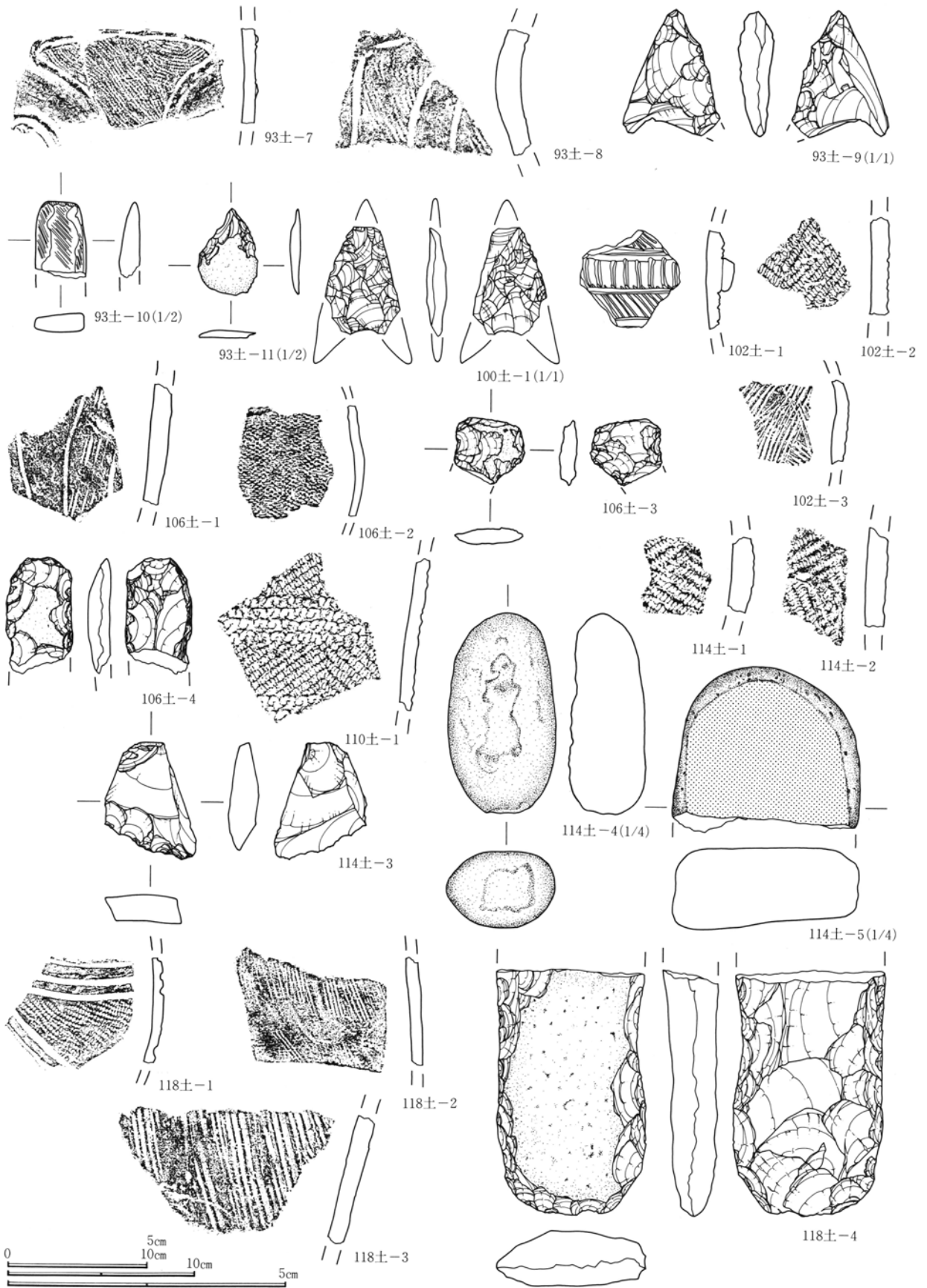
第204図 47・50・52・74・85～88号土坑出土遺物



第4章 検出された遺構と遺物

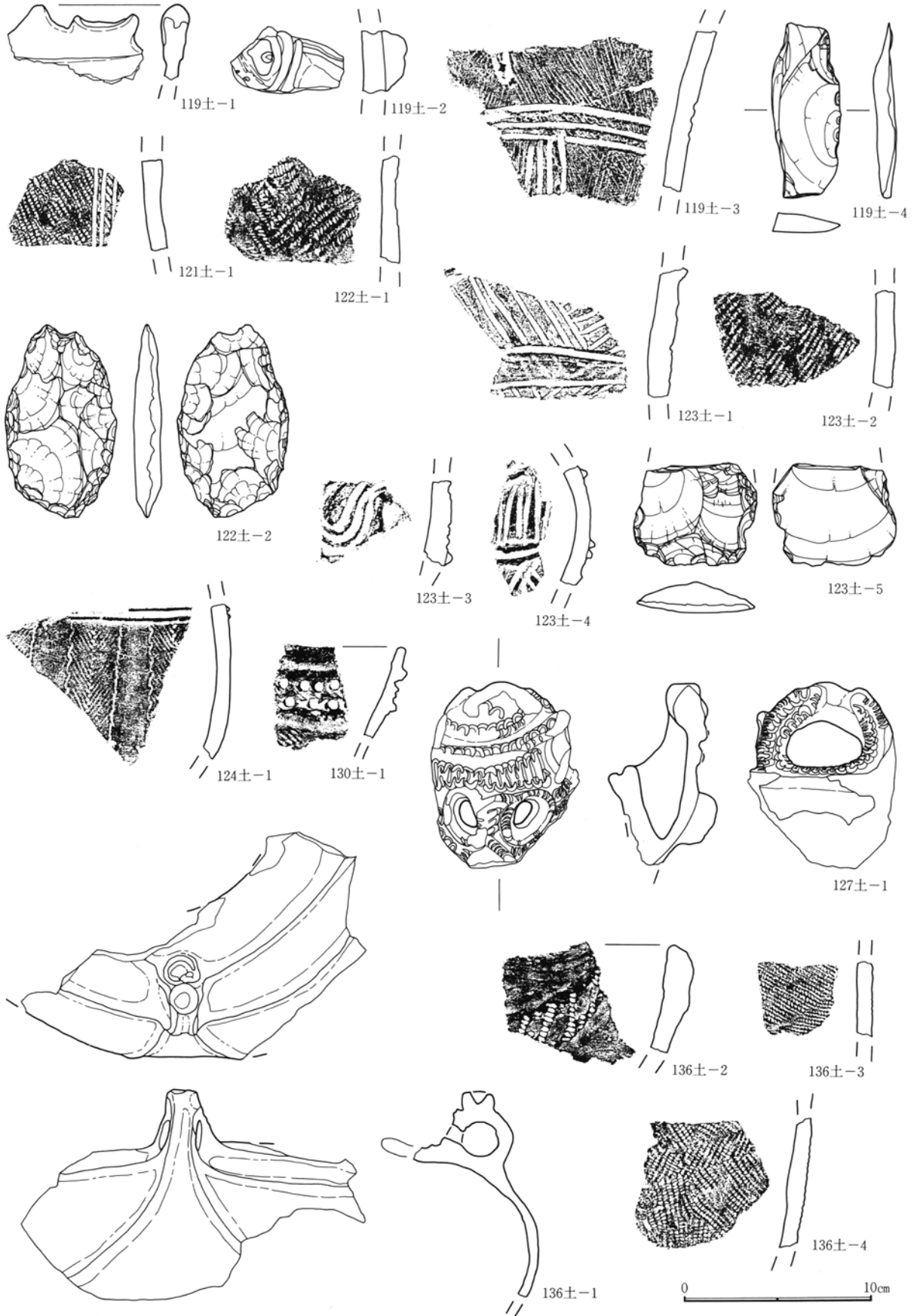


第205図 89~93号土坑出土遺物

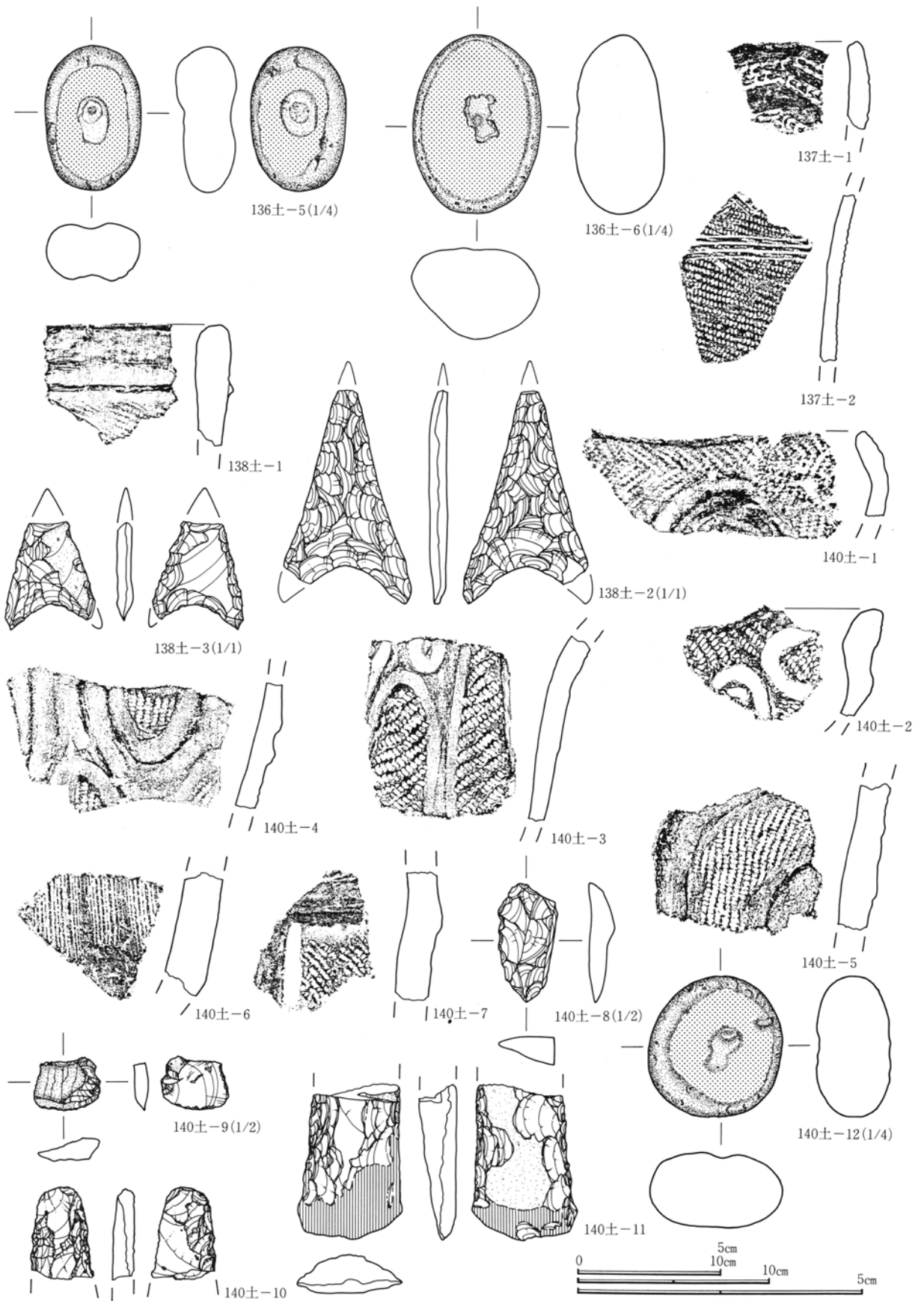


第206図 93・100・102・106・110・114・118号土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

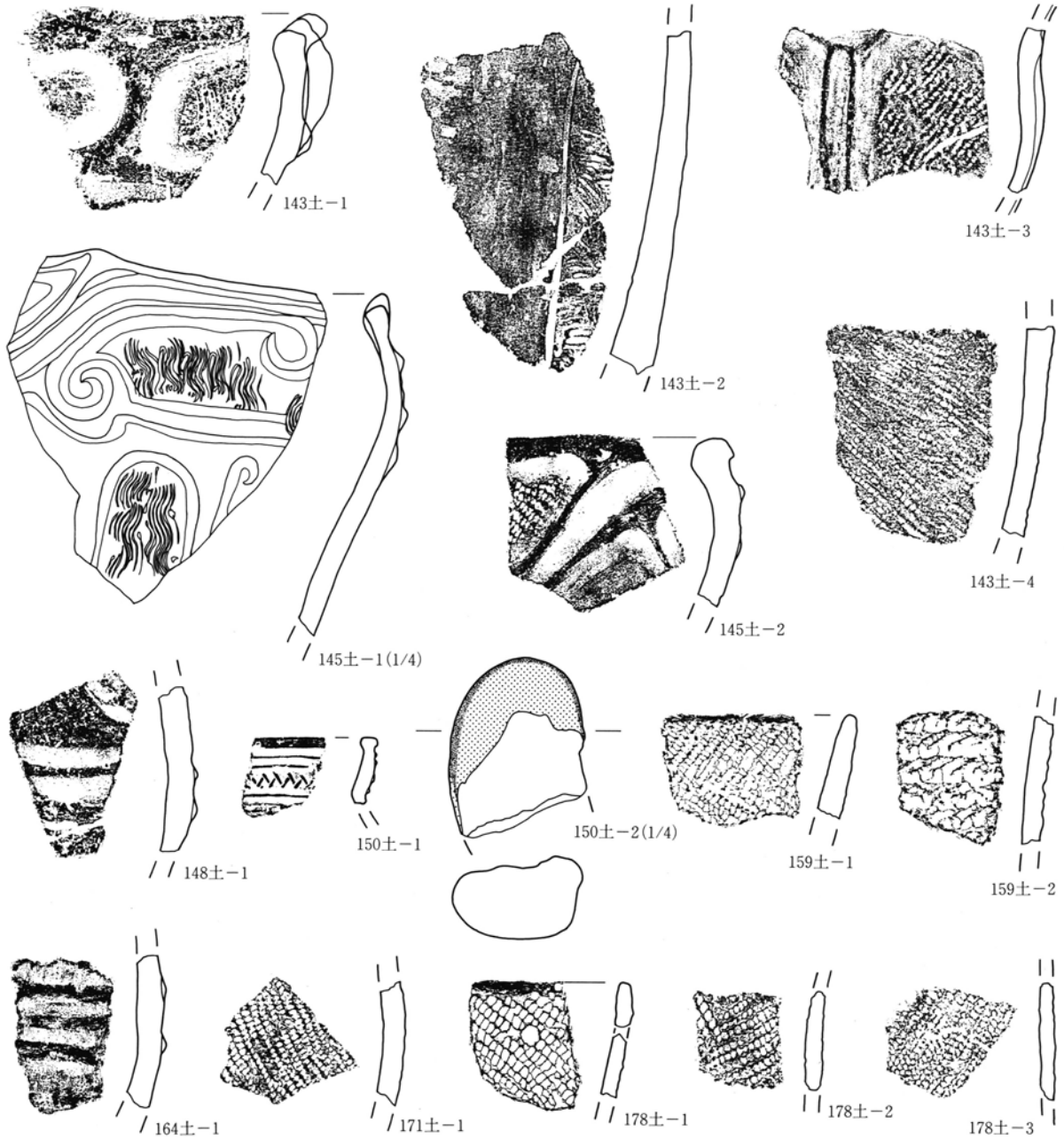


第207図 119・121～124・127・130・136号土坑出土遺物



第208図 136~138・140号土坑出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第209図 143・145・148・150・159・164・171・178号土坑出土遺物

3号土坑出土土器観察表 (第201図 P L 94)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②赤褐色 ③細砂、小礫を含む	断面三角の隆帯を巡らしたのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曾利E4式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③砂、小礫を含む	浅い沈線を2条垂下させたのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。沈線になぞり痕が認められる。	加曾利E4式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂、少量の石英を含む	断面三角の隆帯を垂下させたのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。	加曾利E4式
4 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	原体RLの単節斜縄文を施文する。橋状の把手と思われる痕跡有り。	加曾利E4式

3号土坑出土石器計測表 (第201図 P L 94)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
5	打斧	1/2	① (9.3) ② (5.0) ③ (2.0) ④ 146.1	黒色頁岩	

6号土坑出土土器観察表 (第201図 P L 94)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②黒褐色 ③細砂を含む	波状口縁。棒状工具による沈線で文様を描出し、原体LRの単節斜縄文を施文する。	称名寺Ⅱ式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	棒状工具による沈線で文様を描出し、原体不明の単節斜縄文を施文する。	称名寺Ⅱ式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を少量含む	断面三角の隆帯を垂下したのち、原体LRの単節斜縄文を縦位に施文する。	加曽利E 4式
4 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂を少量含む	棒状工具による沈線文と原体LRの単節斜縄文を施したのち棒状工具による沈線で文様を描出する。	加曽利E 4式

9号土坑出土土器観察表 (第201図 P L 94)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	棒状工具による浅い沈線を3条平行に巡らす。	—

10号土坑出土土器観察表 (第201図 P L 94)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②黒褐色 ③砂、少量の雲母を含む	棒状工具による浅い沈線を垂下させたのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	称名寺Ⅰ式

12号土坑出土土器観察表 (第201図 P L 94)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂、少量の雲母を含む	棒状工具による沈線を垂下し、原体RLの単節斜縄文を施文する。	加曽利E 4式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②淡黄色 ③砂を少量含む	棒状工具による沈線で文様を描出し、同様の工具による刺突文を施す。	称名寺Ⅱ式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂、小礫を含む	半截竹管状工具と楕円状工具による格子文を施す。	五領ヶ台式

16号土坑出土土器観察表 (第201図 P L 94、95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②灰褐色 ③砂、少量の雲母を含む	波状口縁。波頂部には円形文。断面三角の隆帯で文様を描出し、原体RLの単節斜縄文を施文する。原体Rの燃り糸を横位に施文する。	加曽利E 4式
2 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂、小礫を含む	断面三角の隆帯を巡らし、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曽利E 4式
両耳壺	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	断面三角の隆帯に橋状の把手が付すと思われる。	加曽利E 4式
4 深鉢	胴部片	①良好 ②赤褐色 ③砂を含む	断面三角の隆帯を貼付したのち、原体Lの無節斜縄文を施文する。内、外面磨き。	加曽利E 4式
5 深鉢	胴部片	①良好 ②灰黄褐色 ③砂、雲母を含む	原体Rの燃り糸を縦位に施文する。	勝坂式
6 深鉢	胴部片	①良好 ②灰褐色 ③砂、少量の雲母を含む	原体Rの燃り糸を施文したのち、棒状工具による浅い沈線を施す。	加曽利E 3式
7 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③細砂を含む	棒状工具による沈線で文様を描出する。	称名寺Ⅰ式

16号土坑出土石器計測表 (第202図 P L 95)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
8	スクレイパー	完	① 8.9 ② 9.7 ③ 1.3 ④ 114.3	粗粒輝石安山岩	
9	凹石	完	① 12.3 ② 9.7 ③ 6.9 ④ 1112	粗粒輝石安山岩	

17号土坑出土土器観察表 (第202図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	橋状の把手が付す。原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曽利E 4式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曽利E 4式 1と同一個体

17号土坑出土石器計測表 (第202図 P L 95)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
3	凹石	完	① 13.2 ② 7.4 ③ 4.4 ④ 567.5	変質安山岩	

第4章 検出された遺構と遺物

28号土坑出土土器観察表 (第202図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②黒褐色 ③繊維、砂を含む	原体R LおよびL Rの単節斜縄文を羽状に施文する。	黒浜式

28号土坑出土土器計測表 (第202図 P L 95)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	スクレイパー	一部欠	①(11.1) ②(5.4) ③(1.3) ④ 90.1	黒色頁岩	

29号土坑出土土器観察表 (第202図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①やや不良 ②にぶい橙 ③繊維、細砂を含む	原体L RおよびR Lの単節斜縄文を羽状に施文する。	黒浜(有尾)式

30号土坑出土土器観察表 (第202図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②明赤褐色 ③細砂を含む	無文。内、外面とも磨き。	—
2 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂、少量の雲母を含む	断面三角の隆帯に篋状工具による刻みを付す。	勝坂式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②暗褐色 ③砂を含む	断面半円の隆帯を貼付し、原体L Rの単節斜縄文を施文する。	勝坂式
4 深鉢	胴部片	①良好 ②黒 ③砂を含む	原体L Rの単節斜縄文を施文する。	勝坂式

31号土坑出土土器観察表 (第202図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	原体L Rの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。内面磨き。	堀之内式

31号土坑出土土器計測表 (第202図 P L 95)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	石皿	2/3	①(24.9) ②(18.5) ③(8.3) ④ 4087	粗粒輝石安山岩	

32号土坑出土土器観察表 (第202図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②浅黄色 ③砂、小礫を含む	無文。該期の粗製土器。	中期後半

34号土坑出土土器観察表 (第202、203図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	断面三角の隆帯を貼付。内、外面磨き。	後期初頭
2 深鉢	胴部片	①良好 ②灰褐色 ③砂、小礫を含む	頸部に棒状工具による平行沈線を巡らしたのち、棒状工具による刺突文を付した隆帯を垂下。胴部には棒状工具による沈線で文様を描出したのち原体Lの無節斜縄文を施文する。	称名寺式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②黒 ③砂を含む	原体R Lの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	称名寺式
4 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	原体L Rの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	称名寺式

35号土坑出土土器観察表 (第203図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂を含む	棒状工具による細沈線で文様を描出する。	後期初頭
2 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄褐色 ③砂を含む	棒状工具による沈線を垂下。	中期後半

35号土坑出土土器計測表 (第203図 P L 95)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
3	磨石	完	① 4.6 ② 4.1 ③ 3.2 ④ 84.7	ひん岩	

37号土坑出土土器観察表 (第203図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	結節縄文を縦位に施文する。	勝坂式

38号土坑出土土器観察表 (第203図 P L 95)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	頸部に棒状工具の押圧による刻みを付した隆帯を巡らし、棒状工具による沈線で文様を描出する。	後期(加曾利B式か)

39号土坑出土土器観察表 (第203図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	原体RLの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	称名寺式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂、小礫を含む	無文。頸部に撫で状の痕跡。	—

41号土坑出土土器観察表 (第203図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい褐色 ③細砂を含む	棒状工具による沈線で区画をなし、区画内には原体LRの単節斜縄文を充填する。	加曾利E3式

41号土坑出土石器計測表 (第203図 P L 96)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	打斧	1/2?	①(6.9) ②(5.0) ③(2.0) ④86.6	黒色頁岩	
3	多孔石	1/3	①(12.1) ②(10.8) ③(6.8) ④111.5	溶結凝灰岩	

42号土坑出土土器観察表 (第203図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②橙 ③繊維、細砂を含む	口唇部には半截竹管状工具による連続爪形文を付した小突起が付く。口縁部には半截竹管状工具による沈線を巡らしたのち、櫛歯状工具によるコンパス文を施す。その下位には原体0段多条RLのループ文を施文する。瘤状の貼付文を付す。	関山I式

42号土坑出土石器計測表 (第203図 P L 96)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	スクレイパー	完	①5.6 ②6.2 ③1.3 ④45.6	黒色頁岩	
3	凹石	完	①11.4 ②6.5 ③4.0 ④404.0	粗粒輝石安山岩	
4	石棒状石器	1/3	①(10.3) ②(7.7) ③(1.5) ④161.8	緑色片岩	

44号土坑出土土器観察表 (第203図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③砂、少量の雲母を含む	棒状工具による沈線で文様を描出する。	中期後半

47号土坑出土土器観察表 (第203、204図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を多量に含む	口縁部に半截竹管状工具による押し引き文と短沈線を施文する。胴部には篋状工具による沈線文を施す。	諸磯c式(新)
2 浅鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂、小礫を含む	口縁は外側に肥厚する。無文で内面はていねいな磨き。頸部の内面に稜を持つ。	—
3 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	櫛歯状工具による沈線文の下位に凹線を巡らしたのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。	加曾利E3式

47号土坑出土石器計測表 (第204図 P L 96)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
4	打斧	1/3	①(6.2) ②(4.2) ③(1.7) ④44.0	頁岩	
5	打斧	刃部欠	①(10.4) ②(5.5) ③(1.3) ④75.1	黒色頁岩	
6	敲石	完	①17.7 ②11.0 ③5.2 ④1133	粗粒輝石安山岩	
7	凹石	1/2	①(26.1) ②(14.7) ③(13.8) ④782	デイサイト	

50号土坑出土土器観察表 (第204図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	原体LRの単節斜縄文を縦位に施文したのち、棒状工具による沈線を垂下。	加曾利E4式

52号土坑出土土器観察表 (第204図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂、少量の雲母を含む	凹線と断面台形の隆帯で文様を描出したのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。	加曾利E3式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③細砂、小礫を含む	結節縄文を縦回転で施文する。	前期末～中期初頭



第4章 検出された遺構と遺物

74号土坑出土土器観察表 (第204図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①やや不良 ②明褐色	原体0段多条RLのループ文を施し、その下位に原体0段多条RLおよび0段多条LRの単節斜縄文を羽状に施文する。 直前段合燃 $R < \frac{R}{L} = \frac{R}{L}$ および $L < \frac{L}{R} = \frac{L}{R}$ を羽状に施文する。	関山式
深鉢	胴部片	③繊維、小礫を含む		有尾式
2	胴部片	①良好 ②黒褐色		
深鉢		③繊維、細砂を含む		

74号土坑出土石器計測表 (第204図 P L 96)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
3	敲石	1/2	① (7.4) ② (4.5) ③ (2.8) ④ 119.5	粗粒輝石安山岩	

85号土坑出土土器観察表 (第204図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①良好 ②橙	原体RLRの複節斜縄文を縦位に施文したのち、棒状工具による沈線を垂下させる。	加曾利E4式
深鉢		③砂を多量に含む		

86号土坑出土土器観察表 (第204図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①良好 ②暗赤褐色	三角形の陰刻文を施したのち、半截竹管状工具による格子文を施文する。内面磨き。	前期末～中期初頭
深鉢		③細砂を含む		

86号土坑出土石器計測表 (第204図 P L 96)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	石鏃	一部欠	① (2.05) ② (1.85) ③ (0.55) ④ 1.6	黒耀石	
3	打斧	基部欠	① (6.3) ② (3.9) ③ (1.6) ④ 37.0	黒色頁岩	

87号土坑出土土器観察表 (第204図 P L 96)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好 ②にぶい褐色	原体0段多条LRおよびRLの単節斜縄文を羽状に施文する。	有尾式
深鉢		③繊維、細砂を含む		

87号土坑出土石器計測表 (第204図 P L 96)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	スクレイパー	完	① 10.2 ② 5.5 ③ 2.5 ④ 115.4	黒色頁岩	

88号土坑出土土器観察表 (第204図 P L 97)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好 ②褐色	波状口縁。凹線で渦巻状の文様を描出したのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。	加曾利E4式
深鉢		③砂を含む		
2	胴部片	①良好 ②黒褐色	棒状工具による刺突文を施した隆帯を巡らし、その下位には橢圓状工具による沈線文を施す。	加曾利E4式か
深鉢		③砂、少量の雲母を含む		中期後半
3	胴部片	①良好 ②黒		
深鉢		③砂を含む		

89号土坑出土土器観察表 (第205図 P L 97)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好 ②橙	無文の粗製土器。口縁は内側にわずかに肥厚する。	—
深鉢		③砂を含む		
2	胴部片	①やや不良 ②橙	原体LRの単節斜縄文を施文する。	前期前半
深鉢		③繊維、細砂を含む		

90号土坑出土土器観察表 (第205図 P L 97)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好	半截竹管状工具による連続爪形文を施した筒状の突起を持ち、下位には結節縄文を縦回転で施文する。突起の上部には径5mm程の環状の粘土紐を貼付する。内面磨き。	前期末～中期初頭
深鉢		②にぶい赤褐色		
2	口縁部片	①良好 ②にぶい橙	原体0段多条RLおよび0段多条LRの単節斜縄文を羽状に施文する。	前期前半
深鉢		③細砂を含む		
3	口縁部片	①良好 ②橙	無文。内、外面磨き。底部に近い胴部で、破損したのち、再利用していると思われる。	—
深鉢		③砂を含む		

91号土坑出土土器観察表 (第205図 P L 97)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	底部	①良好 ②にぶい黄橙	底径5.8cm。緩い立ち上がり。原体RLの単節斜縄文を施文する。	中期後半
深鉢		③砂を含む		

92号土坑出土土器観察表 (第205図 P L 97)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁～胴	①良好 ②褐色 ③砂を含む	口径13.2cm。棒状工具による沈線で方形の文様を描出する。文様の単位は5単位。	中期後半
2	口縁部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	断面三角の隆帯を巡らしたのち、原体LRの単節斜縄文を方向を変えて羽状に施文する。	加曾利E4式

93号土坑出土土器観察表 (第205、206図 P L 97)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部	①良好 ②にぶい褐色 ③砂を含む	口径(40.6)cm。断面三角の隆帯を巡らしたのち、棒状工具による沈線を垂下。原体Lの無節斜縄文を縦位に施文する。	加曾利E4式
2	口縁部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	波状口縁。棒状工具による沈線で文様を描出したのち、原体不明の縄文を乱雑に施文する。	称名寺I式
3	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂、小礫を含む	断面三角の隆帯を巡らしたのち、原体0段多条RLの単節斜縄文を横位に施文する。	加曾利E4式
4	胴部片	①良好 ②橙 ③砂、小礫を含む	棒状工具による沈線で区画をなし、区画内は原体LRの単節斜縄文を充填する。	称名寺I式
5	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	断面三角の隆帯で文様を描出したのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。内面磨き。	加曾利E4式
6	胴部片	①良好 ②明褐色 ③砂を含む	棒状工具による沈線文と原体不明の縄文を施文する。	称名寺式
7	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂を含む	断面半円の隆帯で区画をなし、区画内は原体LRの単節斜縄文を充填する。	称名寺式
8	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂、少量の石英を含む	棒状工具による沈線で文様を描出したのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	称名寺式

93号土坑出土石器計測表 (第206図 P L 97)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
9	石鏃	未製品	① 2.2 ② 1.7 ③ 0.6 ④ 1.8	チャート	
10	磨斧	刃部欠	① (2.6) ② (1.8) ③ (0.75) ④ 6.4	変質蛇紋岩	
11	ドリル	完	① 3.05 ② 2.05 ③ 0.35 ④ 2.3	チャート	

100号土坑出土石器計測表 (第206図 P L 98)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
1	石鏃	先端部、基部欠	① (3.6) ② (2.2) ③ (0.35) ④ 0.9	黒耀石	

102号土坑出土土器観察表 (第206図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①良好 ②黒褐色 ③砂、石英を含む	突帯の上に粘土紐を貼付し、楕円状工具による刻みを付す。上下には楕円状工具による沈線文を斜位に施文する。	中期初頭
2	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条RLおよび0段多条LRの単節斜縄文を羽状に施文する。	前期前半
3	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③小礫を含む	楕円状工具による沈線文を乱雑に施文する。	中期中葉

106号土坑出土土器観察表 (第206図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③少量の砂を含む	棒状工具による沈線と短沈線で文様を描出する。	称名寺式
2	胴部片	①良好 ②にぶい黄褐色 ③細砂を含む	原体LRの単節斜縄文を施文する。	後期初頭

106号土坑出土石器計測表 (第206図 P L 98)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
3	スクレイパー	1/2	① (3.4) ② (3.8) ③ (0.85) ④ 13.9	黒色安山岩	
4	打斧	刃部欠	① (6.15) ② (3.5) ③ (1.25) ④ 34.4	黒色頁岩	

110号土坑出土土器観察表 (第206図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条RLおよび0段多条LRの単節斜縄文による羽状縄文とループ文を交互に施文する。	関山式

第4章 検出された遺構と遺物

114号土坑出土土器観察表 (第206図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条RLおよび0段多条LRの単節斜縄文を羽状に施文する。	有尾式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②灰褐色 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条RLおよび0段多条LRの単節斜縄文を羽状に施文する。	有尾式

114号土坑出土石器計測表 (第206図 P L 98)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
3	スクレイパー	1/2	① (6.2) ② (4.6) ③ (1.5) ④ 48.6	黒色頁岩	
4	凹石	完	① 14.2 ② 7.9 ③ 5.4 ④ 758.7	粗粒輝石安山岩	
5	磨石	一部欠	① (11.8) ② (13.3) ③ (5.8) ④ 1446	粗粒輝石安山岩	

118号土坑出土土器観察表 (第206図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	棒状工具による沈線を施文したのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。内面磨き。	後期前半
2 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	櫛歯状工具による浅い沈線文を施す。	後期前半
3 深鉢	胴部片	①普通 ②橙 ③砂を含む	棒状工具による浅い沈線文を施す。	中期末

118号土坑出土石器計測表 (第206図 P L 98)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
4	打斧	刃部欠	① (13.0) ② (8.0) ③ (3.0) ④ 426.3	粗粒輝石安山岩	

119号土坑出土土器観察表 (第207図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	波状の突起を作り出し、頂部に背割り状の凹みをつける。	中期初頭
2 深鉢	口縁飾り	①普通 ②にぶい橙 ③砂を含む	粘土紐を貼付して文様を構成する。棒状工具による刺突文を施す。	中期
3 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③細砂、少量の雲母を含む	棒状工具と櫛歯状工具による沈線で文様を描出する。	中期中葉 (勝坂式か)

119号土坑出土石器計測表 (第207図 P L 98)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
4	スクレイパー	一部欠	① (9.2) ② (3.6) ③ (1.3) ④ 39.0	黒色頁岩	

121号土坑出土土器観察表 (第207図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい褐色 ③砂を含む	原体RLの単節斜縄文を横位に施文したのち、棒状工具による沈線を垂下。内面磨き。	加曾利E式

122号土坑出土土器観察表 (第207図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい褐色 ③砂、少量の雲母を含む	原体LRの単節斜縄文を施文方向を変えて羽状に施文する。	加曾利E式

122号土坑出土石器計測表 (第207図 P L 98)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	スクレイパー	完	① 10.0 ② 5.9 ③ 1.4 ④ 97.6	粗粒輝石安山岩	

123号土坑出土土器観察表 (第207図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②灰褐色 ③砂、小礫を含む	棒状工具による沈線で文様を描出する。	中期後半 (曾利式か)
2 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	原体LRの単節斜縄文を横位に施文する。	中期後半 (曾利式か)
3 深鉢	胴部片	①普通 ②橙 ③砂、少量の石英を含む	棒状工具による沈線でS字状の文様を描出する。	中期後半 (曾利式か)
4 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	棒状工具による沈線と細い隆帯で文様を描出する。内面はていねいな磨き。	中期後半 (曾利式か)

123号土坑出土石器計測表 (第207図 P L 98)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
5	加刺		① 5.4 ② 6.5 ③ 1.7 ④ 63.1	粗粒輝石安山岩	

124号土坑出土土器観察表 (第207図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂、石英を含む	結節縄文を縦回転で施文したのち、細い隆帯を2条巡らす。	中期初頭

127号土坑出土土器観察表 (第207図 P L 99)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁把手	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	釣り手状の把手。半截竹管状工具による爪形文、平行沈線と籠状工具による刺突文を施文する。	勝坂式

130号土坑出土土器観察表 (第207図 P L 98)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②黒褐色 ③砂を含む	断面三角の隆帯を2条巡らしたのち、棒状工具による刺突文を施す。胴部には原体RLの単節斜縄文を横位に施文する。	加曾利E4式

136号土坑出土土器観察表 (第207図 P L 99)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 壺	口縁～胴部1/3	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂を含む	橋状の把手を持ち、断面三角の低い隆帯で文様を描出する。	堀之内式
2 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい橙 ③細砂を含む	波状口縁。低い隆帯を施したのち、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曾利E4式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	原体RLの単節斜縄文を施文する。	後期初頭
4 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂、小礫を含む	原体RLの単節斜縄文を乱雑に施文する。	後期初頭

136号土坑出土石器計測表 (第208図 P L 99)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
5	凹石	完	① 10.3 ② 6.8 ③ 4.3 ④ 405.2	粗粒輝石安山岩	
6	凹石	完	① 12.7 ② 9.4 ③ 6.4 ④ 1095	粗粒輝石安山岩	

137号土坑出土土器観察表 (第208図 P L 99)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②橙 ③繊維、細砂を含む	波状口縁。半截竹管状工具による連続爪形文を施文する。	黒浜(有尾)式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②灰褐色 ③細砂を含む	原体RLの単節斜縄文を施文したのち、半截竹管状工具による平行沈線を巡らす。	諸磯式

138号土坑出土土器観察表 (第208図 P L 99)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②赤褐色 ③砂、小礫を含む	断面三角の隆帯を巡らしたのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。	加曾利E4式

138号土坑出土石器計測表 (第208図 P L 99)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	石鏃	一部欠	① (3.7) ② (2.3) ③ (0.3) ④ 2.4	黒色安山岩	
3	石鏃	先端部欠	① (2.8) ② (2.25) ③ (0.3) ④ 0.8	黒色頁岩	

140号土坑出土土器観察表 (第208図 P L 99)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂、小礫を含む	内湾する口縁部。凹線で円形の文様を描出したのち、原体RLの単節斜縄文を施文方向を変えて、羽状に施文する。	加曾利E4式
2 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	波状口縁。凹線で文様を描出したのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。内面磨き。	加曾利E4式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂、小礫を含む	凹線で文様を描出したのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。一部になぞりが見られる。	加曾利E4式
4 深鉢	胴部片	①良好 ②褐灰色 ③細砂を含む	凹線と低い隆帯で文様を描出したのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。内面磨き。	加曾利E4式
5 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂、小礫を含む	原体RLの単節斜縄文を施文したのち、凹線と断面三角の低い隆帯で文様を描出する。	加曾利E4式
6 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	櫛歯状工具による沈線を縦位に施文する。	加曾利E3式
7 深鉢	胴部片	①良好 ②黒褐色 ③砂を含む	断面台形の隆帯を巡らしたのち、棒状工具による沈線を垂下させ、原体LRの単節斜縄文を施文する。	加曾利E4式

第4章 検出された遺構と遺物

140号土坑出土石器計測表 (第208図 P L 99)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
8	使剣		① 2.1 ② 1.1 ③ 0.5 ④ 0.9	黒色安山岩	
9	使剣		① 1.7 ② 2.2 ③ 0.5 ④ 2.9	黒耀石	
10	打斧	1/2	① (4.9) ② (3.4) ③ (1.2) ④ 21.6	黒色安山岩	
11	打斧	1/2	① (7.9) ② (5.5) ③ (2.0) ④ 108.2	灰色安山岩	
12	凹石	完	① 9.9 ② 9.6 ③ 5.3 ④ 734.7	粗粒輝石安山岩	

143号土坑出土土器観察表 (第209図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好 ②黒褐色 ③砂を含む	波状口縁。断面半円の隆帯と凹線で文様を描出したのち、櫛歯状工具による沈線文を施す。	加曾利E 4式
2	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③細砂を含む	棒状工具による沈線を垂下したのち、原体Lの無節斜縄文を乱雑に施文する。	加曾利E 4式
3	胴部片	①良好 ②にぶい褐色 ③細砂を含む	断面三角の隆帯を2条垂下したのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。一部朱塗りか。	加曾利E 4式
4	胴部片	①良好 ②にぶい褐色 ③砂を多量に含む	原体LRの単節斜縄文を縦位に施文する。	加曾利E 4式

145号土坑出土土器観察表 (第209図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好 ②灰褐色 ③細砂を含む	波状口縁。断面三角の隆帯と凹線で文様を描出したのち、櫛歯状工具による波状の沈線を施文する。	加曾利E 3式
2	口縁部片	①良好 ②灰黄色 ③砂を含む	断面三角の隆帯で区画をなし、区画内には原体RLの単節斜縄文を施文する。	加曾利E 3式

148号土坑出土土器観察表 (第209図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	断面三角の隆帯と凹線で文様を描出する。	中期後半

150号土坑出土土器観察表 (第209図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③細砂を含む	細い隆帯を巡らし、粘土紐を貼付して鋸歯状の文様を構成する。内面磨き。	前期末～中期初頭

150号土坑出土石器計測表 (第209図 P L 100)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	凹石	1/2	①(10.7) ②(8.3) ③(4.9) ④ 593.2	粗粒輝石安山岩	

159号土坑出土土器観察表 (第209図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好 ②褐色 ③繊維、砂を含む	原体LRおよびRLの単節斜縄文を羽状に施文する。	前期前半
2	胴部片	①やや不良 ②にぶい黄褐色 ③繊維、細砂を含む	原体LRのループ文を施文する。	前期前半

164号土坑出土土器観察表 (第209図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③砂、少量の雲母を含む	断面三角の隆帯が巡る。	中期後半か

171号土坑出土土器観察表 (第209図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	胴部片	①良好 ②灰黄褐色 ③砂を含む	原体RLの単節斜縄文を施文する。	後期初頭か

178号土坑出土土器観察表 (第209図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①良好 ②橙 ③繊維、細砂を含む	原体RLの単節斜縄文を施文する。径約8mmの補修孔が穿孔される。	黒浜式終末期
2	胴部片	①良好 ②橙 ③繊維、細砂を含む	原体RLおよびLRの単節斜縄文を羽状に施文する。	黒浜式終末期
3	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③繊維、少量の細砂を含む	原体LRの単節斜縄文を施文する。	黒浜式終末期

7 その他の遺構と遺物

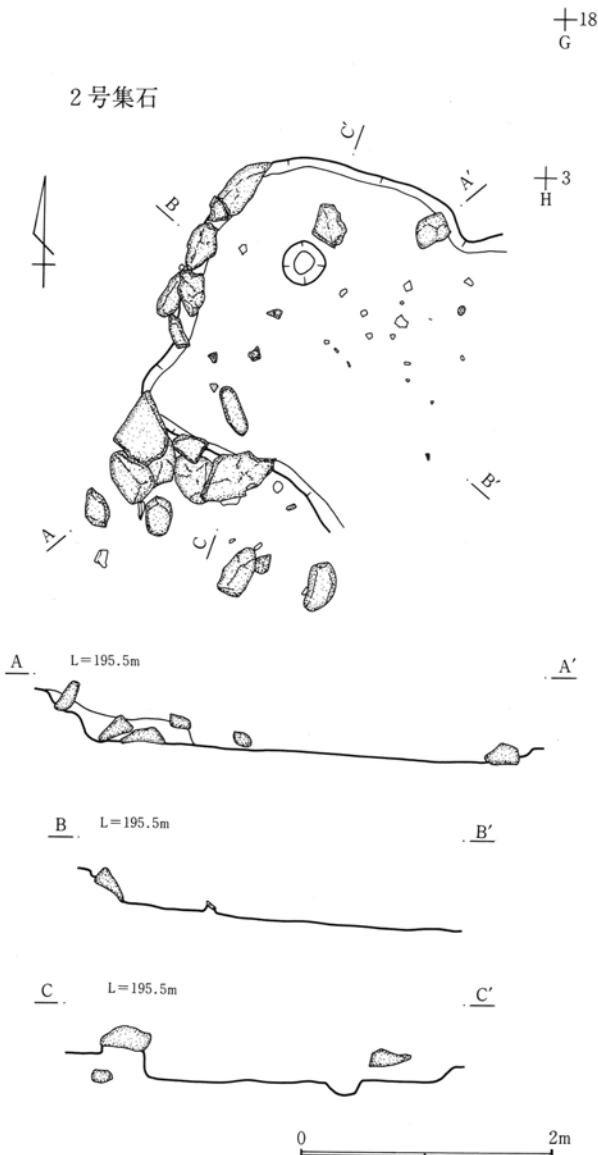
1号集石



1号集石

位置 66区G-18グリッド 規模 東西3.3m、南北1.9mの範囲に大小合わせて20個の礫によって構成される。石の配列は散漫な状況を呈し、規則性は認められない。遺物 中期の土器片15点と石器類3点が出土しているが、全てがこの集石に伴うものではないかも知れない。4の多孔石は2つに割れた状態で出土している。考察 4の多孔石が含まれていることから、自然礫が単に集中した可能性は低いであろう。しかし、石の集中の状況は散漫で規則性も認められないことから、何らかの意図を持って構成したものではないと思われる。

2号集石

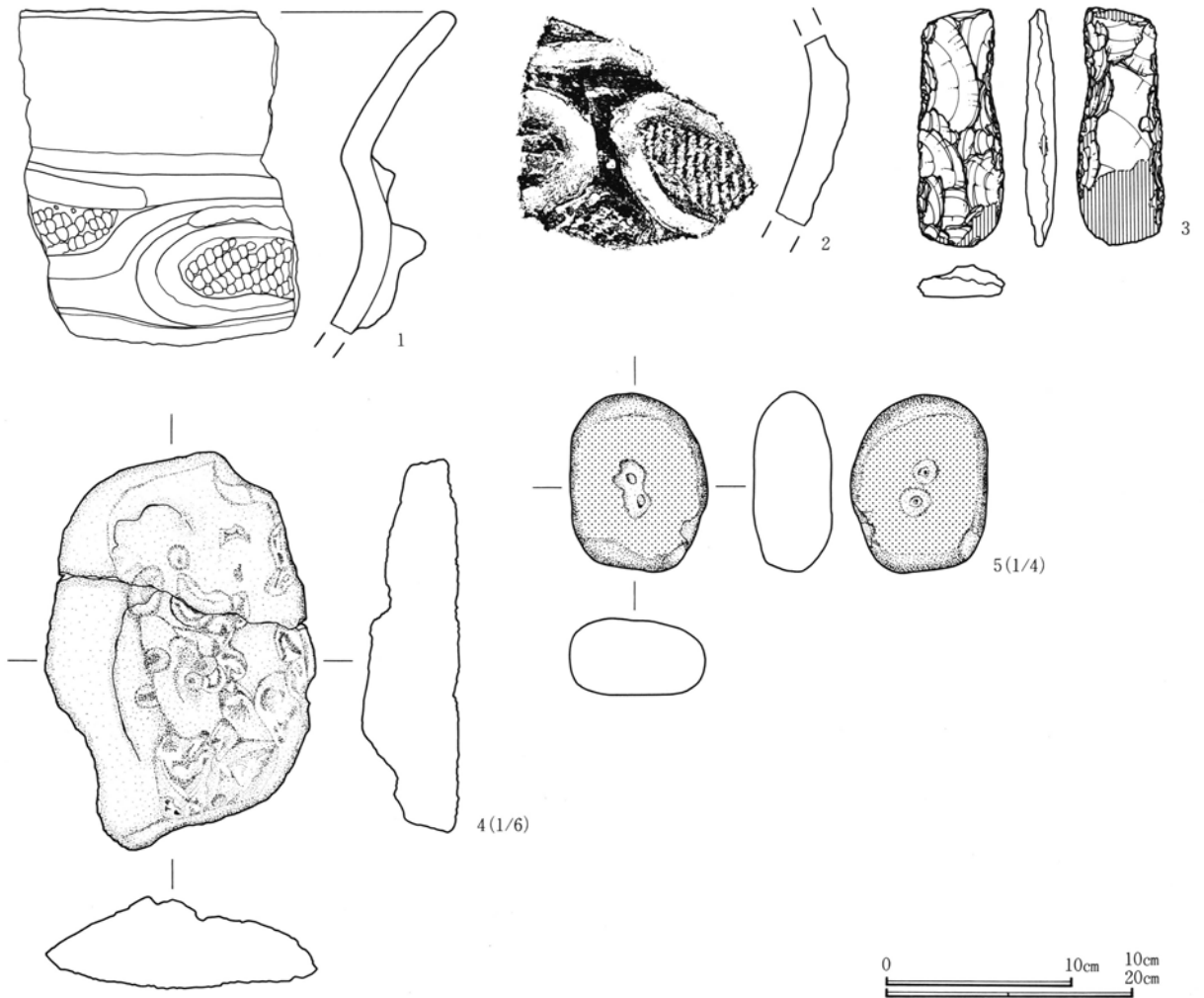


2号集石

位置 75区H-2グリッド 規模 東西3m、南北3.6mの範囲に、大小合わせて36個の礫によって構成される。北西側の1群は列状に配列されている。重複 中期末の敷石住居の36号住居の上面に一部重複する。遺物 中期後半～末の土器片30点と石器類8点をこの集石付近から取り上げた。考察 重複する36号住居は敷石住居であり、同様な配石遺構であることから36号住居の配石の一部ではないかと思われたが、確認された限りでは36号住居の配石に攪乱の痕跡はなく、また36号住居の配石は円礫が中心に用いられていることに対し、この集石は角礫が主体であることなどから別遺構であると思われる。図には掘り込み状の落ち込みが表されているが、黒色土中の掘り込みで確認が困難であったため、このプランが集石の範囲を示すとは限らない。

第210図 1・2号集石

第4章 検出された遺構と遺物



第211図 1号集石出土遺物

1号集石出土土器観察表 (第211図 P L 100)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁部片	①普通 ②灰黄褐色 ③小礫を含む	無文の口縁部が直線的に外反する。頸部は断面半円の隆帯で区画し、区画内は原体LRの単節斜縄文を横位に施文する。	加曾利E3式
2	胴部片	①普通 ②にぶい橙色 ③砂粒と雲母少量を含む	浅い沈線で区画をなし、区画内には原体RLの単節斜縄文を横位に施文する。	加曾利E3式

1号集石出土石器計測表 (第211図 P L 100、102)

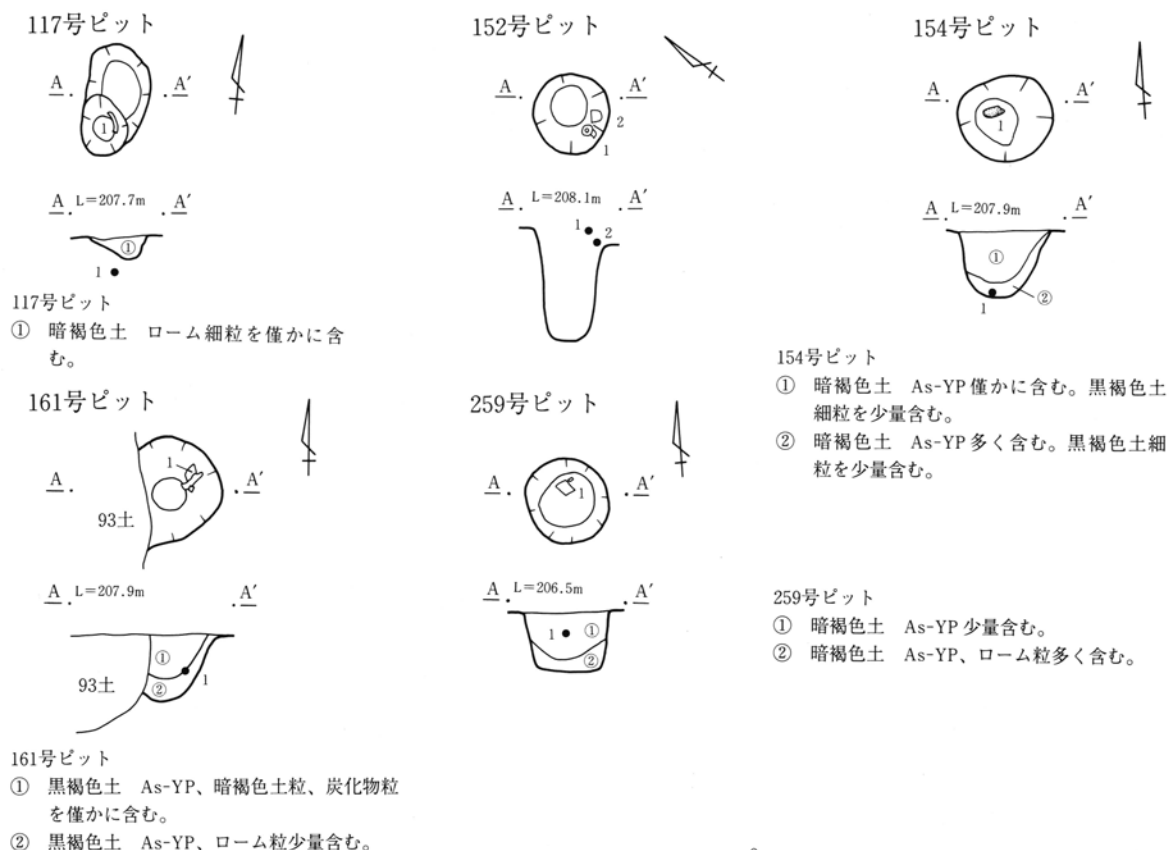
番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
3	打斧	一部欠	① (9.5) ② (3.5) ③ (1.3) ④ 47.6	細粒輝石安山岩	
4	多孔石	完	① 31.6 ② 21.5 ③ 7.8 ④ 4800	粗粒輝石安山岩	
5	凹石	完	① 6.4 ② 7.4 ③ 4.1 ④ 522.1	粗粒輝石安山岩	敲打痕あり。

ピット

今回の調査では358基のピットを検出した。しかしながら、ピットと土坑を分類する明確な基準を持たず、調査担当者の主観的な判断により、ピットと土坑を区別して遺構番号を付した。概ね土坑に比して規模の小さいものをピットとして調査を行っている。今回の報告でも調査時の遺構番号を変更を加えずに用いている。表15にピットの一覧表を掲げたが、ピット番号を付した後、調査によって遺構とは認められなかったもの、掘立柱建物を構成すると認められたもの等が存在するため、欠番が生じている。また、縄文時代以降のピットも検出されているが、併せて報告する。ピットの時期に関しては、遺物の出土が少なかったため、埋没土の様相、重複関係などから判断したものが多い。

ピットの分布を概観すると本遺跡が立地する台地の頂部付近で、狭い平坦部をなしている範囲に多く検出されている。縄文時代の住居、土坑もこの平坦部での検出が主体をなしており、同様の傾向を示している。

今回取り上げたピットは、遺物を主体的に出土しているピットである。152号ピットは縄文時代中期後半(加曾利E 4 式期)の92号土坑と重複しており、本ピットが新しい。154号ピットも中期後半(加曾利E 4 式期)の93号土坑と重複しており、これは本ピットが古い。いずれのピットも当該期の生活の痕跡と考えられるがその性格は不明である。



第212図 117・152・154・161・259号ピット



第4章 検出された遺構と遺物

表15 ピット一覧表 (単位はcm)

番号	区	グリッド	長径	短径	深さ	備考
1	67	B-15	28	24	13	時期不明
2	〃	A-15	29	25	37	縄文
3	〃	〃	26	23	37	〃
4	〃	〃	22	21	15	時期不明
6	〃	〃	20	19	4	〃
8	〃	A-16	34	32	22	縄文
9	〃	〃	28	24	59	〃
10	〃	〃	22	21	31	〃
14	〃	〃	25	20	39	〃
16	66	O-13	10	9	24	時期不明
17	〃	〃	28	22	24	縄文
18	〃	〃	34	24	18	時期不明
19	〃	O-14	24	22	27	〃
20	〃	〃	70	34	13	縄文
21	〃	〃	48	36	12	時期不明
22	〃	O-13	60	50	16	〃
23	〃	〃	54	30	18	縄文
24	〃	〃	26	20	21	〃
25	〃	〃	40	30	27	〃
26	〃	〃	36	30	28	〃
27	〃	〃	48	38	36	〃
28	〃	〃	32	18	17	〃
29	〃	〃	54	32	57	〃
30	〃	〃	30	18	10	〃
31	〃	〃	34	30	21	〃
32	〃	〃	32	28	18	〃
33	〃	O-14	40	38	30	〃
34	〃	〃	46	44	26	〃
35	〃	〃	50	34	37	〃
36	〃	P-14	38	32	24	〃
37	〃	〃	40	30	15	時期不明
38	〃	〃	50	24	11	〃
39	〃	〃	54	30	22	〃
40	〃	〃	24	20	20	〃
41	〃	P-13	80	56	23	縄文
42	〃	〃	44	34	30	〃
43	〃	〃	20	19	22	時期不明
44	〃	〃	52	46	50	縄文
45	〃	〃	38	26	22	時期不明
46	〃	〃	28	22	26	縄文
47	〃	P-14	32	30	20	〃
48	〃	〃	32	30	22	〃
49	〃	〃	34	30	19	〃
50	〃	O-15	32	26	17	時期不明
51	〃	O-16	32	30	22	〃
52	〃	O-17	40	28	21	縄文
53	〃	〃	44	42	25	時期不明
54	〃	N-16	32	28	20	〃
55	〃	N-15	30	20	17	縄文
56	〃	〃	32	30	42	時期不明
57	〃	N-14	30	26	40	縄文
58	〃	〃	18	16	19	〃
59	〃	N-13	79	52	27	〃
60	〃	〃	48	40	40	〃
61	〃	〃	54	38	21	〃
62	〃	O-15	44	42	27	時期不明
63	〃	O-17	24	20	12	縄文
64	〃	〃	31	30	20	時期不明
65	〃	〃	22	16	12	〃
66	〃	〃	34	28	35	縄文

番号	区	グリッド	長径	短径	深さ	備考
67	66	O-15	50	44	28	時期不明
68	〃	N-13	36	32	33	縄文
69	〃	〃	66	30	35	〃
70	〃	N-14	36	34	22	時期不明
71	〃	N-13	42	30	47	縄文
72	〃	〃	28	22	26	〃
73	〃	〃	24	22	27	〃
74	〃	N-14	32	20	28	〃
75	〃	O-16	40	24	36	〃
76	〃	O-17	48	46	38	時期不明
77	〃	〃	26	24	32	縄文
78	〃	〃	22	18	42	〃
79	〃	〃	20	16	25	〃
80	〃	O-18	38	24	34	〃
81	〃	P-17	42	30	43	〃
82	〃	O-16	24	18	32	〃
83	〃	〃	104	48	34	〃
84	〃	〃	32	24	27	時期不明
85	〃	〃	32	28	28	縄文
86	〃	O-14	38	30	35	〃
87	〃	N-13	38	30	41	〃
88	〃	〃	46	40	49	〃
89	〃	O-13	28	26	20	〃
90	〃	O-15	30	24	26	時期不明
91	〃	O-16	38	30	34	縄文
92	〃	〃	24	22	17	〃
94	〃	H-15	42	37	29	〃
95	〃	H-18	30	25	37	〃
96	〃	〃	46	45	40	〃
97	〃	H-19	30	26	40	〃
99	〃	G-19	55	53	39	〃
100	76	G-1	42	34	48	〃
101	〃	〃	31	30	41	〃
102	〃	G-2	57	29	53	〃
103	〃	〃	44	42	47	時期不明
104	〃	H-2	50	45	16	縄文
105	〃	I-2	75	63	60	〃
106	〃	I-1	32	25	21	〃
107	〃	〃	50	40	24	〃
108	66	I-19	34	27	36	〃
111	〃	〃	56	44	54	〃
112	〃	I-18	43	35	24	〃
113	〃	〃	110	105	56	〃
114	〃	〃	30	22	26	〃
115	〃	〃	45	34	27	〃
116	〃	I-17	94	52	35	〃
117	〃	I-16	60	30	15	縄文中期
118	〃	I-15	46	45	49	縄文
119	〃	〃	51	34	24	〃
120	〃	I-16	48	45	45	〃
121	〃	I-15	50	42	50	〃
122	〃	I-14	50	36	34	〃
123	〃	J-14	52	45	31	〃
124	〃	〃	27	25	49	〃
125	〃	〃	55	42	39	〃
126	〃	〃	55	43	46	〃
127	〃	J-15	50	40	55	〃
128	〃	J-17	55	50	50	古墳~平安
129	〃	〃	27	23	34	時期不明
130	〃	J-18	44	37	20	縄文

第2節 縄文時代

番号	区	グリッド	長径	短径	深さ	備考
132	66	J-19	30	29	110	縄文
133	〃	〃	34	32	19	〃
134	〃	〃	50	48	17	時期不明
135	〃	〃	26	25	42	縄文
136	〃	J-20	57	56	31	時期不明
137	〃	〃	54	45	49	縄文
138	76	K-1	61	59	48	〃
139	〃	〃	33	31	27	〃
140	〃	〃	39	35	37	〃
141	〃	〃	44	38	53	〃
142	〃	〃	36	34	31	〃
143	〃	〃	56	55	40	〃
144	〃	〃	42	38	49	〃
145	〃	H-2	50	40	45	〃
146	〃	H-1	56	36	41	〃
147	66	I-18	33	27	48	〃
148	〃	J-14	50	40	39	〃
149	76	N-1	42	38	27	〃
150	〃	〃	35	31	55	〃
151	〃	O-1	54	34	31	〃
152	66	O-20	42	39	62	縄文中期
153	〃	P-20	36	34	40	縄文
154	〃	〃	49	48	40	〃
155	〃	P-19	44	42	37	〃
156	〃	O-19	50	46	50	〃
157	〃	〃	50	45	45	〃
158	〃	〃	52	40	49	〃
159	〃	N-18	60	41	30	〃
160	〃	L-18	45	30	54	〃
161	〃	P-19	60	40	39	〃
162	〃	N-16	34	32	82	〃
163	〃	〃	47	46	64	〃
164	〃	M-16	66	47	27	〃
165	〃	L-17	30	23	31	〃
166	〃	P-19	40	35	33	〃
167	〃	N-18	35	34	36	〃
168	〃	N-20	42	32	36	〃
169	〃	N-17	50	29	35	〃
170	〃	M-17	52	46	44	〃
172	〃	P-12	23	22	68	〃
173	〃	J-19	38	26	25	〃
174	〃	O-20	55	51	49	〃
175	〃	P-19	38	34	53	〃
176	〃	〃	44	40	35	〃
177	〃	P-20	52	48	74	〃
178	〃	L-16	76	49	52	〃
179	76	H-1	26	24	68	〃
180	〃	〃	23	18	40	〃
181	66	I-20	33	28	76	〃
182	〃	J-20	40	34	59	〃
183	〃	〃	34	30	43	〃
184	〃	〃	31	26	54	時期不明
185	76	J-1	34	33	68	縄文
186	〃	I-2	37	34	56	〃
187	〃	〃	40	37	38	〃
188	66	J-18	24	23	43	〃
189	〃	J-19	33	28	59	〃
190	〃	J-18	34	31	37	〃
191	〃	〃	30	22	42	〃
192	〃	〃	27	25	39	〃

番号	区	グリッド	長径	短径	深さ	備考
193	66	J-19	30	28	41	縄文
194	〃	K-19	34	27	52	〃
195	〃	K-18	40	38	47	〃
196	〃	J-18	30	24	46	時期不明
197	〃	K-17	40	26	24	〃
198	〃	〃	42	32	49	〃
199	〃	K-16	26	24	35	縄文
200	〃	I-16	34	22	66	〃
201	〃	〃	30	21	31	〃
202	〃	J-15	26	19	53	〃
203	〃	J-14	25	23	52	〃
204	〃	J-15	40	38	44	〃
205	〃	K-14	20	13	43	〃
206	〃	〃	29	25	46	〃
207	〃	J-13	33	26	52	〃
208	〃	K-13	16	15	49	〃
209	〃	〃	37	36	62	〃
210	〃	K-14	33	32	74	〃
211	〃	J-17	56	28	56	〃
212	〃	I-16	28	24	59	〃
213	〃	M-16	35	34	34	〃
214	〃	L-18	42	36	48	〃
215	〃	〃	50	37	58	〃
216	〃	M-18	49	36	43	〃
217	〃	L-20	36	31	46	〃
218	〃	〃	64	42	58	〃
219	〃	N-16	36	32	32	〃
220	〃	L-20	42	27	52	〃
221	〃	N-18	36	33	3	〃
222	〃	N-17	40	38	38	〃
223	〃	N-16	52	41	58	〃
224	〃	L-15	34	26	49	〃
225	〃	L-19	30	25	55	〃
226	〃	L-20	27	21	50	〃
227	〃	N-17	63	53	49	〃
228	〃	M-16	43	35	26	〃
229	76	N-1	80	51	40	〃
230	〃	M-2	40	39	61	〃
232	66	M-16	42	30	29	〃
233	〃	〃	24	20	46	〃
234	〃	L-15	66	34	27	〃
235	〃	M-18	29	23	38	〃
236	〃	L-14	66	58	26	時期不明
237	〃	〃	40	36	100	縄文
238	〃	〃	58	48	37	〃
239	〃	〃	52	30	30	〃
240	〃	〃	34	28	46	〃
241	〃	〃	48	38	38	〃
242	〃	〃	38	30	27	〃
243	〃	L-13	30	24	39	〃
244	〃	〃	60	34	56	〃
245	〃	〃	50	40	43	〃
246	〃	L-12	30	24	38	〃
247	〃	M-13	48	42	44	〃
248	76	O-1	50	38	37	時期不明
249	〃	〃	32	27	16	〃
250	〃	〃	26	19	18	縄文
251	〃	〃	50	34	44	〃
252	〃	N-2	37	36	21	〃
253	〃	N-1	68	64	61	〃

第4章 検出された遺構と遺物

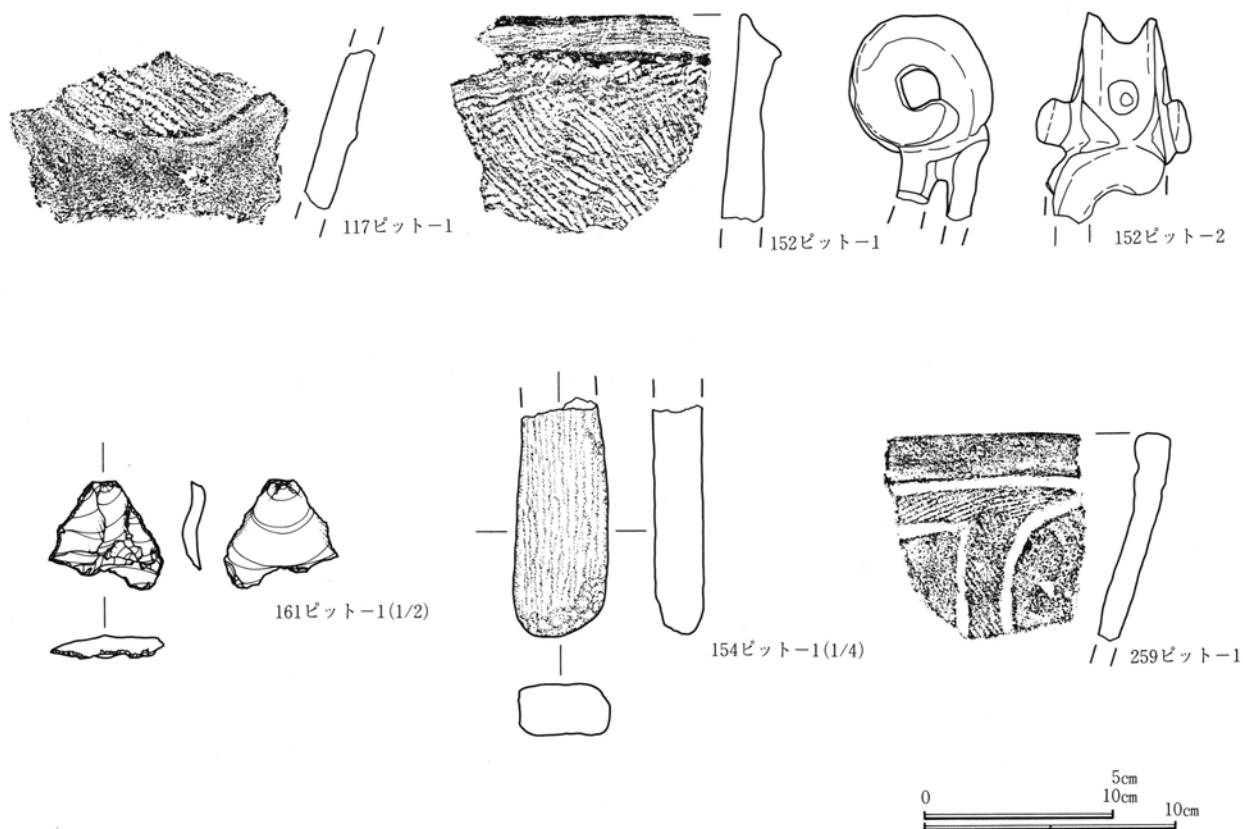
番号	区	グリッド	長径	短径	深さ	備考
254	76	N-2	76	34	45	縄文
255	〃	〃	47	39	36	時期不明
256	〃	〃	32	30	36	縄文
257	66	L-11	35	34	38	〃
258	〃	M-11	36	35	53	〃
259	〃	〃	46	46	28	縄文後期
260	〃	P-12	52	46	69	縄文
261	〃	Q-12	50	45	48	〃
262	〃	〃	35	30	61	〃
263	〃	〃	63	59	67	〃
264	76	P-1	65	45	27	〃
265	〃	〃	60	40	34	〃
266	〃	O-1	30	29	52	〃
267	〃	〃	35	29	19	時期不明
268	〃	〃	37	34	51	縄文
269	〃	N-1	52	45	50	〃
270	66	N-15	36	32	47	〃
271	〃	M-18	46	22	46	〃
272	〃	G-17	30	29	36	〃
273	〃	H-17	32	22	45	〃
274	〃	〃	49	37	58	〃
275	〃	G-19	65	55	51	〃
276	〃	〃	25	20	28	〃
277	〃	〃	34	32	29	〃
278	〃	〃	32	25	25	〃
279	〃	F-19	63	45	42	〃
280	〃	〃	46	38	132	〃
281	〃	〃	40	38	50	〃
282	〃	〃	70	61	42	〃
283	〃	G-20	50	40	29	〃
284	〃	〃	55	45	58	〃
285	〃	〃	29	26	36	〃
286	〃	F-20	84	54	57	〃
287	〃	〃	74	58	32	〃
288	〃	〃	120	94	26	〃
289	〃	〃	45	40	30	〃
290	〃	F-18	31	28	58	時期不明
291	〃	H-19	60	35	27	縄文
292	76	G-1	27	20	32	〃
293	〃	〃	30	24	25	〃
294	〃	〃	28	22	34	〃
295	66	G-20	29	24	61	〃
296	〃	〃	24	22	35	〃
297	〃	G-16	39	35	43	〃
298	〃	F-19	51	47	49	〃
299	〃	G-18	30	28	45	〃
300	〃	〃	40	35	44	〃
303	〃	F-20	66	59	35	〃
304	65	O-20	30	23	13	〃
305	〃	〃	30	22	11	時期不明
306	〃	〃	19	18	17	〃
307	〃	〃	45	27	22	〃
308	〃	〃	20	19	21	〃
312	〃	L-20	24	20	16	縄文
313	75	M-1	24	18	37	〃
314	〃	L-1	18	16	48	時期不明
315	65	O-19	22	20	20	〃
316	76	G-2	32	19	37	縄文
317	〃	〃	44	25	48	〃
318	65	M-20	80	70	40	〃

番号	区	グリッド	長径	短径	深さ	備考
319	65	L-20	27	25	49	縄文
325	75	G-3	38	34	33	古墳～平安
331	〃	F-3	36	34	65	〃
332	〃	〃	42	38	64	〃
334	〃	〃	32	30	46	〃
337	〃	H-2	26	21	20	〃
340	66	E-19	52	48	59	縄文
341	76	E-1	44	38	38	〃
342	〃	〃	22	20	25	〃
343	〃	〃	22	20	35	〃
344	〃	〃	32	26	34	〃
345	〃	〃	26	18	92	〃
346	〃	〃	36	26	17	〃
347	75	H-2	37	36	34	古墳～平安
348	〃	〃	14	13	14	〃
349	65	M-20	30	26	31	縄文
350	〃	L-20	61	44	20	時期不明
351	〃	O-19	106	84	27	〃
352	75	T-1	34	32	60	古墳～平安
353	65	T-20	34	32	64	〃
354	〃	〃	29	23	19	〃
363	〃	S-18	32	30	21	〃
371	〃	T-20	46	45	19	縄文
372	〃	T-19	50	42	22	縄文前期
373	〃	T-20	67	47	70	縄文
374	〃	T-19	40	24	19	〃
375	〃	〃	35	30	12	〃
376	〃	〃	47	35	11	〃
377	〃	〃	45	34	15	〃
378	〃	〃	57	50	16	時期不明
379	〃	〃	28	24	14	縄文前期
380	〃	〃	32	28	22	〃
381	〃	〃	55	28	29	縄文
382	〃	〃	24	20	17	〃
383	〃	〃	26	21	14	〃
384	〃	〃	24	22	16	〃
385	76	B-1	30	27	14	〃
386	〃	〃	37	36	39	〃
387	〃	〃	28	25	18	〃
388	〃	〃	30	26	22	〃
392	66	B-17	14	12	26	〃
393	〃	〃	26	24	26	〃
394	〃	〃	20	19	22	〃
395	〃	〃	20	19	11	〃
396	65	S-19	27	26	8	〃
397	〃	〃	35	33	32	〃
398	〃	S-18	31	27	46	〃
399	〃	〃	27	26	15	〃
400	〃	〃	26	20	25	時期不明
401	〃	T-18	31	27	22	縄文
402	〃	〃	39	31	18	〃
403	〃	S-19	40	38	20	〃
404	66	A-20	36	35	40	古墳～平安
409	〃	B-16	23	11	15	縄文
410	〃	〃	20	12	20	〃
411	〃	A-17	29	26	20	〃
412	75	R-1	30	29	12	〃
413	〃	Q-2	22	20	21	〃



第213図 ピット全体図





第214図 117・152・154・161・259号ピット出土遺物

117号ピット出土土器観察表 (第214図 P L 102)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①普通 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む	断面三角の隆帯で文様を描出したのち、原体RLの単節斜縄文を横位に施文する。	加曾利E 4式

152号ピット出土土器観察表 (第214図 P L 102)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③細砂を含む	断面三角の隆帯を巡らしたのち、原体Lの無節斜縄文を乱雑に施文する。内面磨き。	加曾利E 4式
2 深鉢	把手	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	環状の把手。	中期後半

154号ピット出土石器計測表 (第214図 P L 102)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
1	蔽石	一部欠	①(12.6) ②(5.1) ③(2.7) ④ 308.1	緑色片岩	

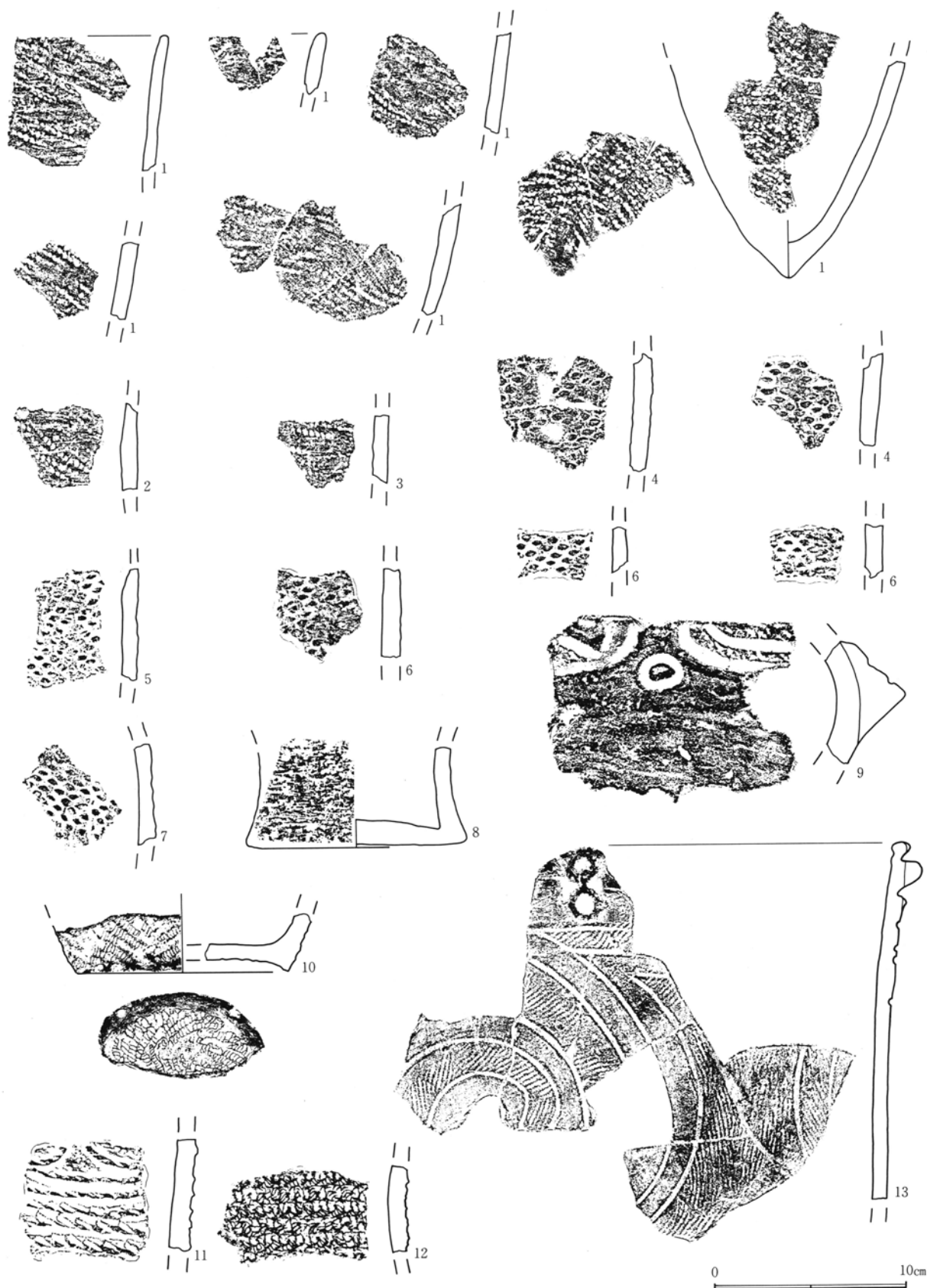
161号ピット出土石器計測表 (第214図 P L 102)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
1	加剝		① 2.85 ② 2.9 ③ 0.6 ④ 2.4	黒耀石	

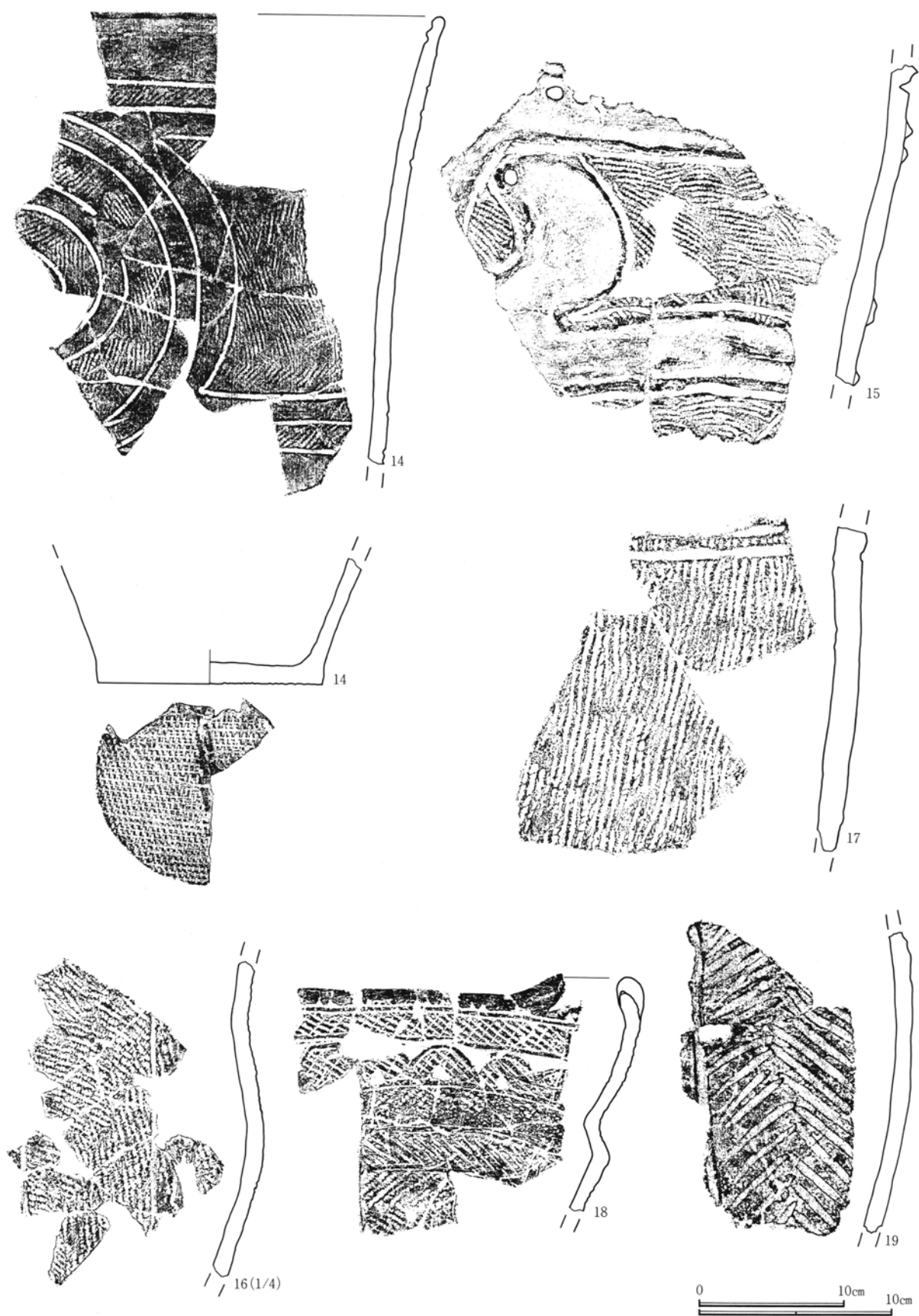
259号ピット出土土器観察表 (第214図 P L 102)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①普通 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	地文に原体L Rの単節斜縄文を方向を変えて施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	称名寺式

8 遺構外出土遺物

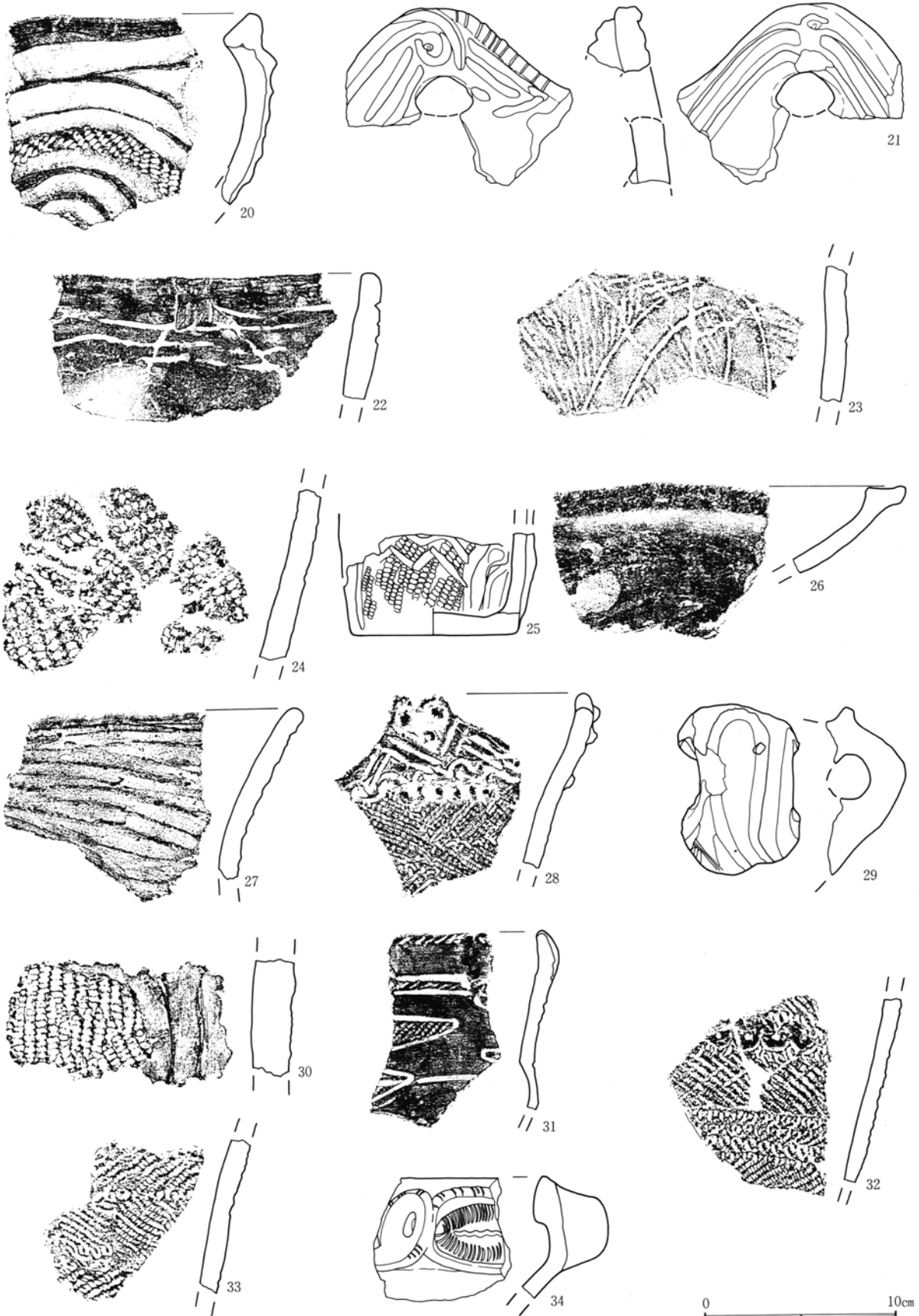


第215図 遺構外出土土器（1）

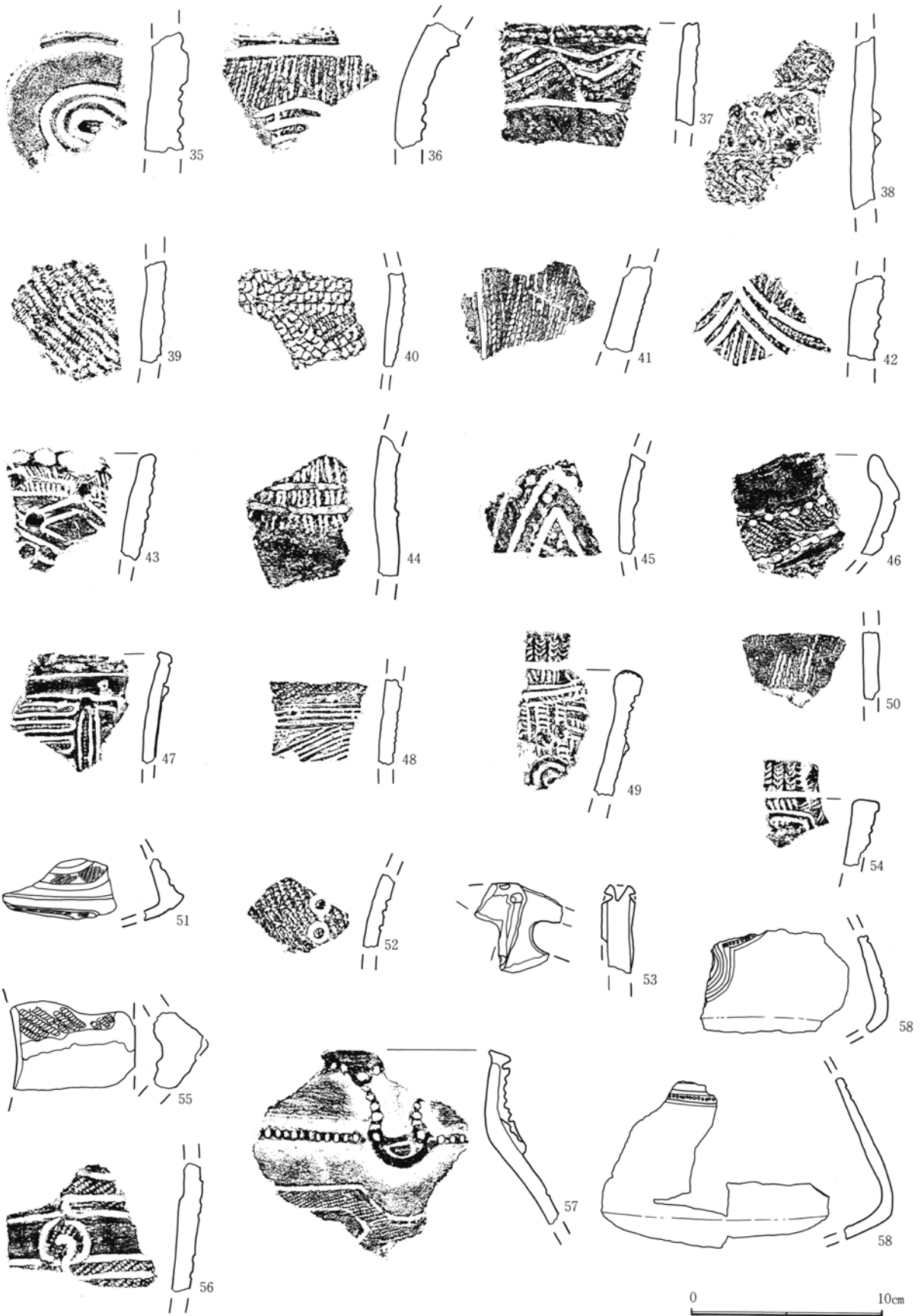


第216図 遺構外出土土器(2)

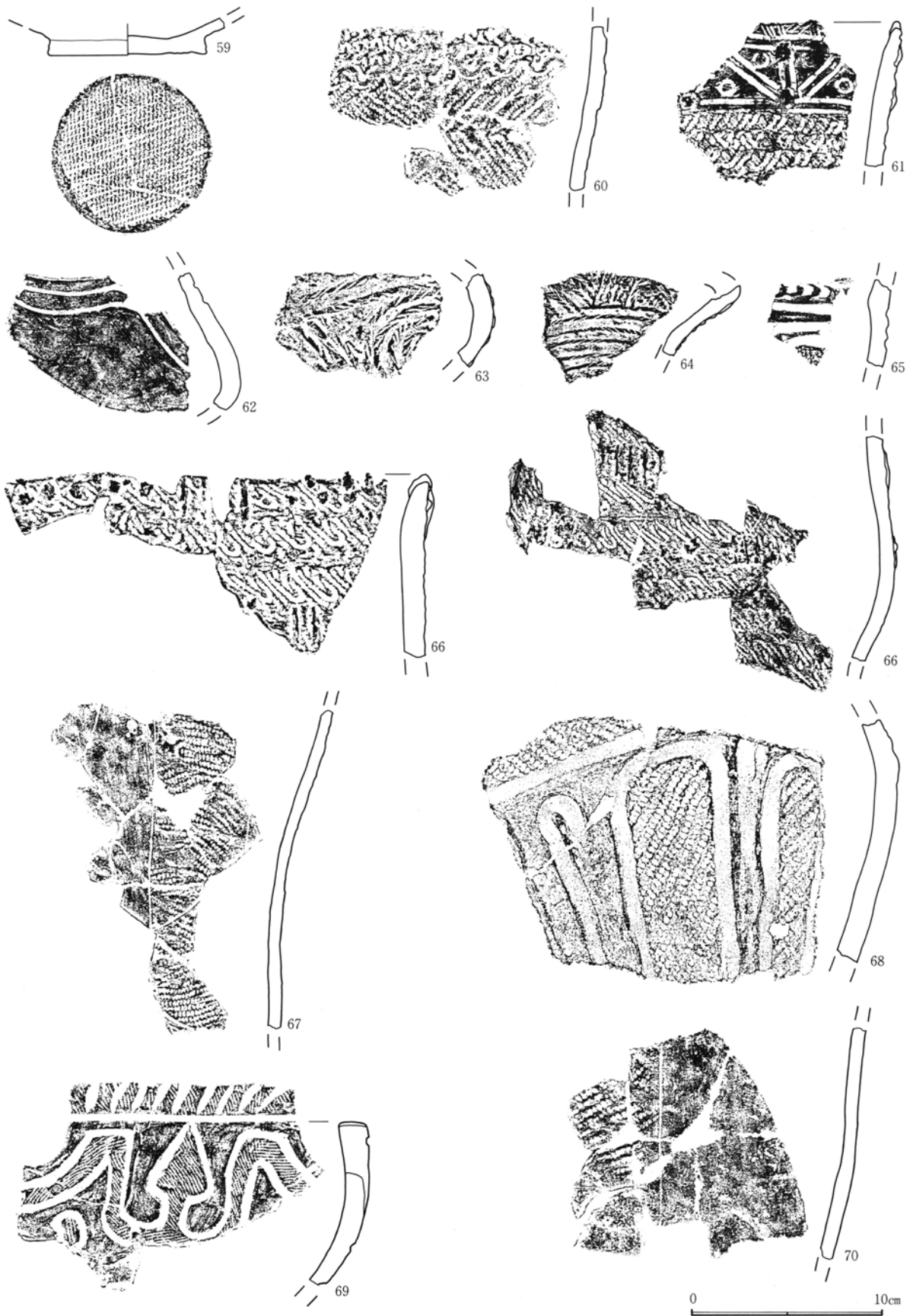




第217図 遺構外出土土器 (3)



第218図 遺構外出土土器(4)



第219図 遺構外出土土器 (5)



第220図 遺構外出土土器(6)

第4章 検出された遺構と遺物

遺構外出土土器観察表 (第215~220図 P L 102~106)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	口縁~底部	①良好 ②にぶい赤褐色 ③石英を含む	口径(18.0)cm。乳房状の尖底で、口縁は平口縁を呈する。 R 1 状の燃糸文を横位に施文する。関東南西部に展開する大浦山式土器の特徴を持つ。	早期初頭 65区 N-19
2	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③石英を少量含む	R 1 条の燃糸文を横位に施文する。1 と同一個体とも考えられる。	早期初頭 65区 N-19
3	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③石英と雲母を少量含む	R 1 条の燃糸文を横位に施文する。1 と同一個体とも考えられる。	早期初頭 65区 N-19
4	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③石英と雲母を少量含む	浅い楕円押型文を横位に施文する。	早期初頭 65区 N-19
5	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③石英と雲母を少量含む	浅い楕円押型文を横位に施文する。4 と同一個体か。	早期初頭 65区 N-19
6	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③石英と雲母を少量含む	浅い楕円押型文を横位に施文する。4 と同一個体か。	早期初頭 65区 N-19
7	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③少量の雲母を含む	浅い楕円押型文を横位に施文する。4 と同一個体か。	早期初頭 65区 O-20
8	底部	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を多量に含む	底径11.6cm。底部、胴部ともに無文。やや括れながら立ち上がる。内、外面になで状の痕跡有り。	前期前半 65区 T-20
9	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	浅鉢の胴張部。原体LRの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	中期後半か 65区 S-19
10	底部1/3	①良好 ②にぶい赤褐色 ③白色鉱物粒を含む	底径11.0cm。上げ底を呈する。胴部には原体0段多条RLおよび0段多条LRの単節斜縄文を羽状に施文する。底部にも0段多条LRの単節斜縄文を施文する。	関山式 65区 S-20
11	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③細砂を含む	細い隆帯を貼付したのち、棒状工具による刻みを施す。	諸磯b式か 65区 R-19
12	胴部片	①良好 ②黒褐色 ③繊維、砂を含む	原体0段多条RLおよび0段多条LRのループ文を施す。	前期前半 65区 T-19
13	口縁部	①良好 ②にぶい赤褐色 ③雲母、白色鉱物粒を含む	口縁に8の字状の突起を貼付する。胴部には原体LRの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で渦巻状の文様を描出する。口縁内側に沈線を1条巡らす。	堀之内式 76区 M-1
14	口縁~底部	①良好 ②にぶい赤褐色 ③雲母、白色鉱物粒を含む	文様、胎土とも13に酷似するが、口縁内側の沈線が2条巡らされている。底部には網代痕。	堀之内式 76区 M-1
15	胴部片	①良好 ②褐灰色 ③砂を含む	断面三角の隆帯で文様を描出したのち、原体RLの単節斜縄文を施文する。さらに隆帯に沿ってなぞりを施す。棒状工具による刺突文を施す。	後期初頭 66区 O-19
16	胴部片	①普通 ②暗褐色 ③砂を含む	原体RLの単節斜縄文を乱雑に施文したのち、棒状工具による沈線を垂下させる。	中期後半か 66区 J-14
17	胴部片	①普通 ②橙 ③雲母、砂を含む	燃糸文を縦位に施文したのち、棒状工具による沈線を2条巡らす。	勝坂式 66区 S-12
18	口縁部片	①良好 ②灰褐色 ③砂を含む	口縁はやや内湾し、刻みを付す。波状口縁を呈する。頸部は括れ、その下部に稜を持つ。口縁部には半截竹管状工具による沈線を巡らしたのち、斜位の格子文を施す。その下位には陰刻によってアーチ状の区画をなし、区画内に格子文を充填する。括れ部には原体LRの単節斜縄文を施文したのち上下に細沈線を巡らす。稜の上部には斜位の沈線文を施し、下部には原体LRとRLの単節斜縄文を羽状に施文する。	前期末~中期初頭 66区 J-18
19	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐 ③細砂を含む	棒状工具による沈線を垂下したのち、浅い沈線で稜形状の文様を描出する。	加曾利E 3 式 曾利式か 66区 I-19
20	口縁部片	①良好 ②にぶい黄橙色 ③砂を含む	原体RLの単節斜縄文を施文したのち、なぞりによって同心円状の文様を描出する。	加曾利E 4 式 66区 T-15
21	口縁飾り	①普通 ②赤褐色 ③雲母、砂を含む	橋状の把手。表面には断面三角の隆帯を貼付する。裏面は凹線で文様を描出する。	勝坂式 66区 S-12
22	口縁部片	①普通 ②にぶい赤褐色 ③砂、少量の雲母を含む	棒状工具による沈線を口縁部に巡らす。	中期中葉 66区 S-12
23	胴部片	①普通 ②橙 ③砂を含む	原体不明の単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	称名寺I式 66区 P-19
24	胴部片	①やや不良 ②橙 ③繊維、細砂を含む	原体RLの単節斜縄文を乱雑に施文する。	黒浜(有尾)式 66区 M-13

第2節 縄文時代

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
25 深鉢	底部	①良好 ②赤褐色 ③砂を含む	底径8.4cm。底部からはほぼ垂直に立ち上がる器形を呈する。原体LRの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による山形の沈線を施す。	勝坂式 66区M-15
26 浅鉢	口縁部片	①普通 ②にぶい褐色 ③雲母、砂を含む	口唇部は外側にやや肥厚し、内側には稜を持つ。外面は無文で、内面は磨き。	中期中葉 66区M-18
27 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい褐色 ③砂を含む	外面になで状の痕跡。内面は磨き。	後期初頭か 66区E-17
28 深鉢	口縁部片	①普通 ②にぶい黄橙 ③繊維、細砂を含む	波状口縁を呈する。波頂部に瘤状の突起を貼付する。半截竹管状工具によるコンパス文を施したのち、同様の工具による山形の沈線を施文する。胴部には直前段合燃 $R < \begin{matrix} R-L \\ L-R \end{matrix}$ および $L < \begin{matrix} L-R \\ R-L \end{matrix}$ を羽状に施文したのち、瘤状の突起を貼付する。橋状を呈する把手。背割り状に凹みを入れる。下部に細沈線を施す。	関山I式 66区H-18
29 深鉢か	把手	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	橋状を呈する把手。背割り状に凹みを入れる。下部に細沈線を施す。	— 66区H-20
30 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	原体LRの単節斜縄文を施文したのち、凹線で文様を描出する。	加曾利E4式 66区A-18
31 深鉢	口縁部片	①良好 ②灰色 ③細砂を含む	口縁はやや内湾し、口唇部には刻みを付す。原体LRの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。外面、内面ともていねいな磨き。	加曾利B式か 66区O-13
32 深鉢	胴部片	①普通 ②灰黄褐色 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条RLおよび0段多条LRのループ文を羽状に施文したのち、半截竹管状工具によるコンパス文を施す。内面磨き。	関山I式 66区M-15
33 深鉢	胴部片	①普通 ②暗灰黄色 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条LRおよび0段多条RLを羽状に施文する。	前期前半 66区J-16
34 深鉢	口縁部片	①普通 ②明褐色 ③砂を含む	刻みのついた隆帯で区画を作り出し、区画内は櫛歯状工具による短沈線と波状の沈線を施文する。	勝坂II式 66区M-20
35 深鉢	胴部片	①普通 ②にぶい赤褐色 ③砂、少量の雲母を含む	棒状工具による沈線で同心円状の文様を描出する。	中期中葉 66区K-19
36 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂、小礫を含む	Rの燃糸を縦位に施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	勝坂式 66区A-19
37 深鉢	口縁部片	①普通 ②灰黄褐色 ③砂を含む	口縁は角頭状を呈し、頂部には竹管状工具による刺突文を施す。胴部には沈線で文様を描出したのち、同様の刺突文を施す。	前期末～中期初頭 66区D-19
38 深鉢	胴部片	①普通 ②にぶい赤褐色 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条RLのループ文を施文したのち、瘤状の突起を貼付する。内面は磨き。	関山I式 66区A-20
39 深鉢	胴部片	①普通 ②橙 ③繊維、砂を含む	原体0段多条RLの単節斜縄文を横位に施文する。	関山式 66区G-14
40 深鉢	胴部片	①普通 ②にぶい橙 ③繊維、細砂を含む	原体0段多条LRのループ文を施文する。	関山I式 66区M-15
41 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂、少量の雲母を含む	Rの燃糸を縦位に施文し、棒状工具による沈線を施す。	勝坂式 66区O-20
42 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂、少量の雲母を含む	Rの燃糸を縦位に施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	勝坂式 66区A-20
43 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい橙 ③繊維、細砂を含む	口縁部には波状の突起。半截竹管状工具による沈線を施したのち、瘤状の突起を貼付し、刻みを付す。	関山I式 66区A-20
44 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい褐色 ③細砂を含む	Rの燃糸を縦位に施文したのち、棒状工具による沈線を横位に施す。	勝坂式 66区A-18
45 深鉢	胴部片	①普通 ②にぶい褐色 ③細砂を含む	棒状工具による沈線でΛ型の文様を描出する。	後期前半か 66区C-19
46 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい褐色 ③少量の砂を含む	口縁はやや内湾し、内側に肥厚する。胴部には原体LRの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による刺突文を2列施す。	加曾利E4式 66区Q-11
47 深鉢	口縁部片	①良好 ②にぶい橙 ③細砂を含む	平口縁で内側にわずかに肥厚する。細い隆帯と棒状工具による沈線で文様を描出したのち、針状の工具による刺突文を施文する。	後期(堀之内式か) 66区Q-11
48 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③細砂、小礫を含む	原体LRの単節斜縄文を施文したのち、半截竹管状工具による沈線を、横位、斜位に施文する。内面磨き。	諸磯b式 66区H-18
49 深鉢	口縁部片	①良好 ②橙 ③繊維、細砂を含む	口縁に半截竹管状工具による刻みを付した突起を貼付する。胴部には半截竹管状工具による沈線と刺突文を施したのち、瘤状の突起を貼付する。	関山I式 66区A-17
50 深鉢	胴部片	①良好 ②灰褐色 ③雲母、砂を含む	原体不明の燃糸を縦位に施文する。	加曾利E3式 66区B-18

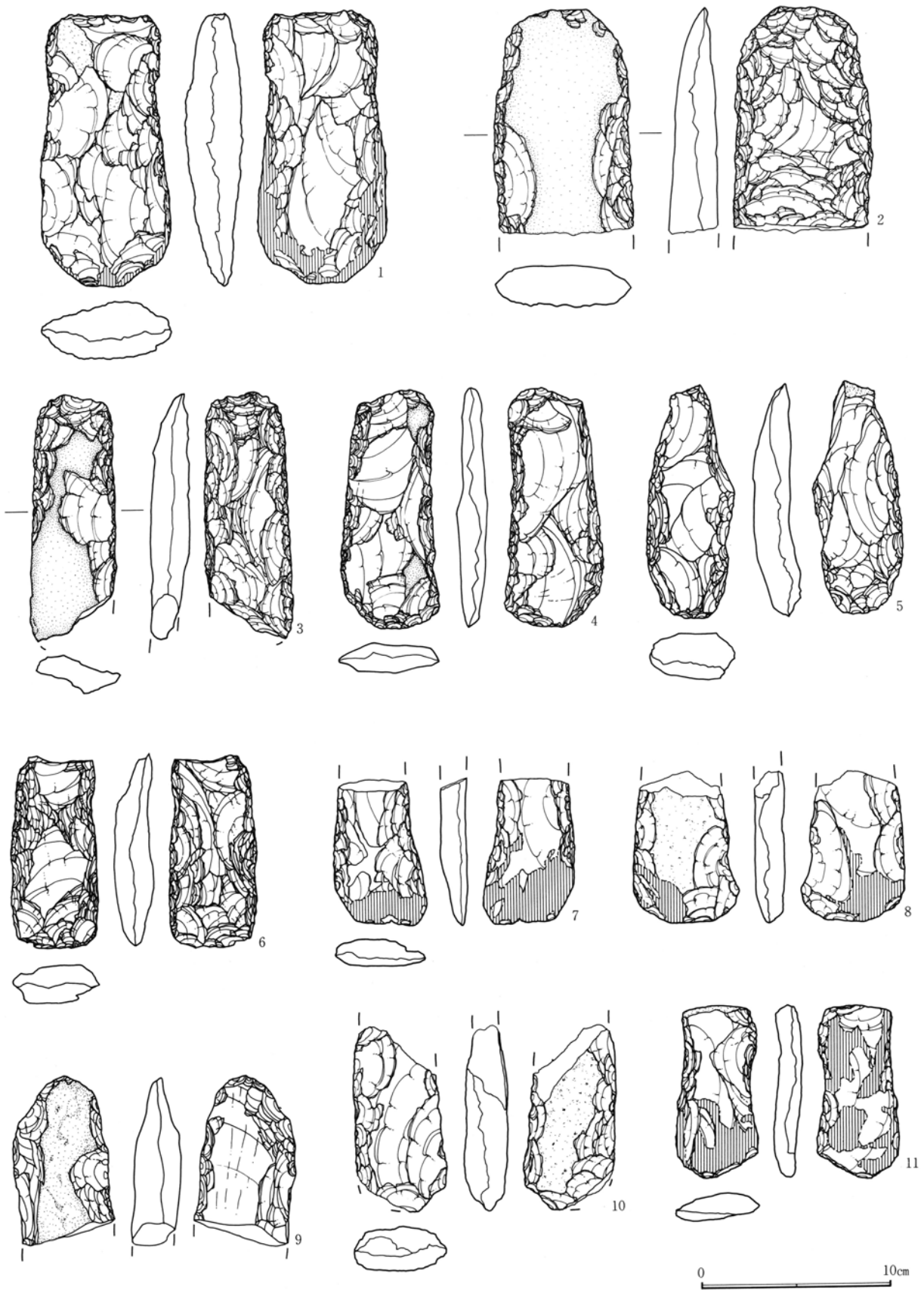
第4章 検出された遺構と遺物

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
51	胴部片	①良好 ②褐色 ③砂を含む	胴部が張り、稜を持つ。棒状工具による沈線で文様を描出したのち、原体R Lの単節斜縄文を充填する。	称名寺I式か 66区N-16
52	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	原体R Lの単節斜縄文を施文したのち、竹管状工具による刺突文を施文する。	諸磯a式か 66区A-19
53	口縁部突起	①普通 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	T字型の中央上部に棒状工具による刺突文を施し、そこから背割り状の隆帯を垂下させる。頂部にも棒状工具による刺突。	— 66区H-20
54	口縁部片	①普通 ②にぶい黄橙 ③繊維、細砂を含む	波状口縁の頂部付近と思われる。頂部は平坦なつまみ状を呈す。口唇部には半截竹管状工具による刺突文を施す。	関山I式 66区A-18
55	把手	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	橋状の把手か。1つの面に原体L Rの単節斜縄文を施文する。	中期後半か 66区表採
56	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	原体L Rの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で文様を描出する。	後期前半 66区表採
57	口縁部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	断面半円の隆帯を巡らせ、文様を描出する。その隆帯に棒状工具による刻みと、刺突文を施す。胴部には沈線で文様を描出したのち、原体L Rの単節斜縄文を充填する。	後期 67区西側谷地トレ ンチ
58	胴部片	①良好 ②褐灰色 ③白色鉱物粒を含む	外面はていねいな磨き。細沈線と小刺突文で文様を描出する。胴の下部が張る器形。	後期 75区P-3
59	底部	①良好 ②黒褐色 ③白色鉱物粒を含む	底径8.4cm。底面に網状痕。底部から緩く開いて立ち上がる器形を呈する。焼成、胎土が58に似る。	後期 75区P-3
60	胴部片	①やや不良 ②にぶい赤褐色 ③繊維、砂を含む	原体不明のループ文と原体0段多条L Rおよび0段多条R Lの羽状縄文を施文したのち、半截竹管状工具によるコンパス文を施文する。	関山式 75区表採
61	口縁部片	①良好 ②灰黄褐色 ③繊維、細砂を含む	口唇部には刻みを付す。半截竹管状工具による沈線で文様を描出したのち、竹管状工具による刺突文と瘤状突起を施す。胴部には原体0段多条R Lおよび0段多条L Rのループ文を羽状に施文する。	関山I式 75区R-2
62	胴部片	①良好 ②赤褐色 ③砂を含む	表面はていねいな磨き。棒状工具による沈線で文様を描出する。	後期 75区H-3
63	胴部片	①良好 ②にぶい褐色 ③砂を含む	細い隆帯を貼付して文様を描出したのち、刻みを付す。	諸磯式 75区表採
64	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	細い隆帯を貼付して文様を描出したのち、刻みを付す。	諸磯式 75区表採
65	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	半截竹管状工具による爪形文と沈線で文様を描出する。	中期 75区Q-1
66	口縁~胴部	①普通 ②橙 ③繊維、細砂を含む	口縁は平口縁で波状の突起を貼付する。原体0段多条L Rおよび0段多条L Rのループ文を施文したのち、棒状の貼付文と瘤状の突起を貼付する。	関山I式 76区A-1
67	胴部片	①普通 ②にぶい橙 ③砂を含む	キャリパー型の器形を呈する。原体L Rの単節斜縄文を乱雑に施文したのち、棒状工具による細い沈線を垂下させる。	加曾利E 4式 76区O-1
68	胴部片	①良好 ②褐灰色 ③砂を多量に含む	原体L Rの単節斜縄文を施文したのち、蕨手状の凹線を施す。	加曾利E 4式 76区F-1
69	口縁部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂、少量の石英を含む	口縁は台形様を呈する。口唇部に原体L Rの単節斜縄文を施文し、棒状工具で刻みを付す。胴部は棒状工具による沈線で文様を描出したのち、原体L Rの単節斜縄文を充填する。内面は磨き。	称名寺I式期 搬入品か 76区O-1
70	胴部片	①普通 ②にぶい橙 ③砂を含む	原体R Lの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による細沈線を垂下させる。67と同一個体か。	加曾利E 4式 76区O-1
71	口縁部片	①普通 ②灰褐色 ③砂、少量の石英を含む	波状口縁を呈する。断面三角の隆帯で口縁部を区画し、凹線と沈線で文様を描出する。胴部は櫛歯状工具による沈線を施文したのち、断面台形の低い隆帯を貼付する。	加曾利E 3式 76区D-2
72	口縁部片	①やや不良 ②赤褐色 ③繊維、細砂を含む	原体R Lの単節斜縄文を横位に施文する。	前期前半 76区A-1
73	口縁部片	①普通 ②明赤褐色 ③砂を含む	波状口縁を呈する。棒状工具による沈線で楕円形、渦巻状の文様を描出する。	中期中葉か 76区L-1
74	口縁部片	①普通 ②橙 ③繊維、細砂を含む	波状口縁を呈する。また口縁には波状の突起を作り出す。頸部には櫛歯状工具による沈線で文様を描出したのち、原体直前段合熱L-L R-R R・L Lを横位に施文する。	関山式 76区P-1
75	口縁部片	①普通 ②にぶい黄褐色 ③繊維、細砂を含む	半截竹管状工具と棒状工具による沈線で文様を描出したのち、瘤状の貼付文を施す。下位には原体0段多条L Rの単節斜縄文を横位に施文する。	前期前半（有尾式か） 76区J-1

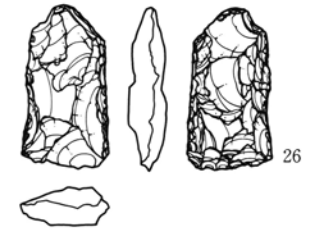
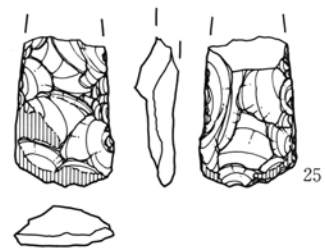
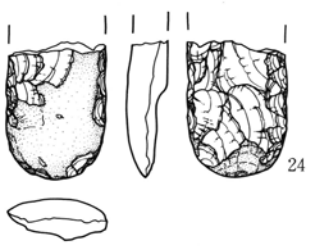
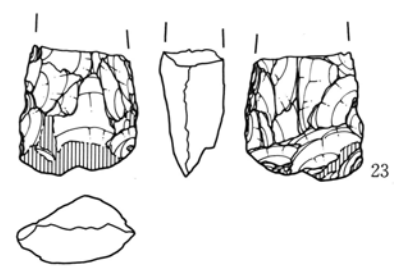
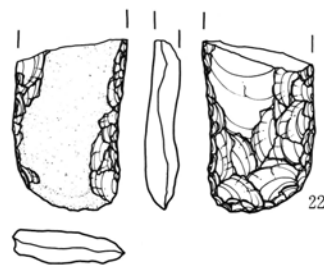
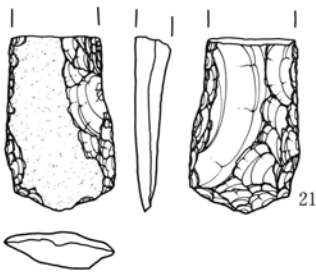
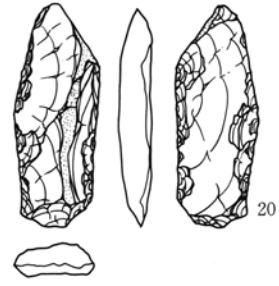
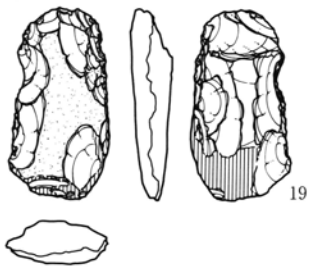
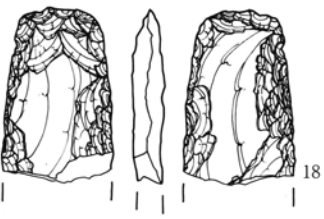
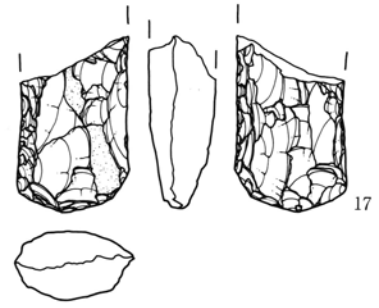
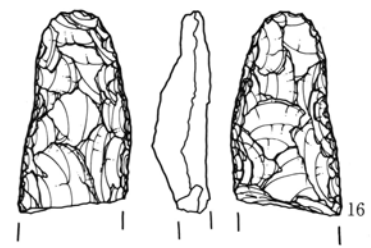
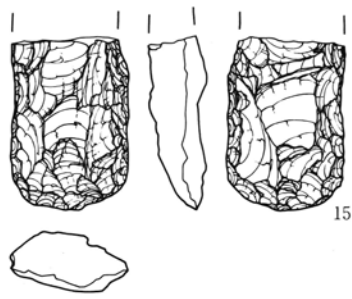
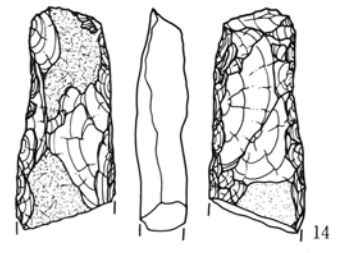
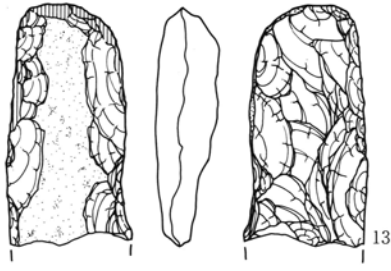
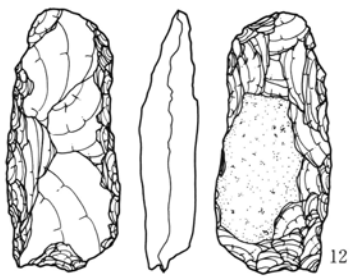
第2節 縄文時代

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
76 浅鉢か	口縁部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	波状口縁を呈する。有刻隆帯と沈線で文様を描出する。口縁内側にも円形の文様を作り出す。内、外面磨き。	後期か 76区M-1
77 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③石英を含む	原体Rの燃糸を施文したのち、平行する隆帯を垂下。低い隆帯で文様を描出する。	勝坂Ⅱ式か 66区R-20
78 深鉢	口縁部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂、少量の石英を含む	波状口縁を呈する。口唇部は内側に肥厚する。棒状工具による沈線で渦巻状の文様を描出する。	加曾利E4式 76区H-1
79 浅鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を含む	半截竹管状工具による爪形文を付した隆帯と同様の工具による沈線で文様を描出する。	勝坂式 76区E-2
80 深鉢	胴部片	①良好 ②赤褐色 ③白色鉱物粒を含む	半截竹管状工具による沈線と篋状工具で格子文を斜位に施文する。	前期末～中期初頭 76区E-2
81 深鉢	口縁部片	①良好 ②赤褐色 ③砂粒を含む	口縁部は断面三角形の隆帯で区画し、区画内に短沈線を施文する。	勝坂式 75区H-3
82 小型深鉢	口縁～底部	①良好 ②明赤褐色 ③砂、小礫を含む	口径10.2cm、底径5cm、器高12.2cm。口縁部に有刻沈線を1条巡らす。胴部は原体RLの単節斜縄文を縦位に施文したのち、棒状工具による沈線を垂下させる。	中期後半 66区H-19
83 深鉢	胴部片	①普通 ②にぶい黄褐色 ③砂粒を含む	底部に近い胴部片。内面に有機物の炭化物付着。外面は無文で磨き。	中期後半か 75区G-3
84 土製品	完存	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂粒を含む	長径6.8cm、短径3.7cm、中心に径3mmの孔が貫通する。表面には沈線で文様を描出する。土笛と思われる。	後期前半か 65区T-18
85 深鉢	胴上位～ 胴下位	①普通 ②黒褐色 ③繊維を含む	断面台形の突帯がめぐり、この突帯上に縄文の端部の圧痕文を施文する。胴部は原体0段多条RLの単節斜縄文と0段多条LRの単節斜縄文を羽状に施文する。器形は直線的で胴上部が開く。	黒浜式か 66区M-13 屋外埋甕と思われる。
86 土製品	ほぼ完存	①良好 ②黒褐色 ③砂粒を含む	径2.8cm。中央に径2mmの孔が貫通する。表面はよく磨き上げられる。土玉。	— 66区L-19

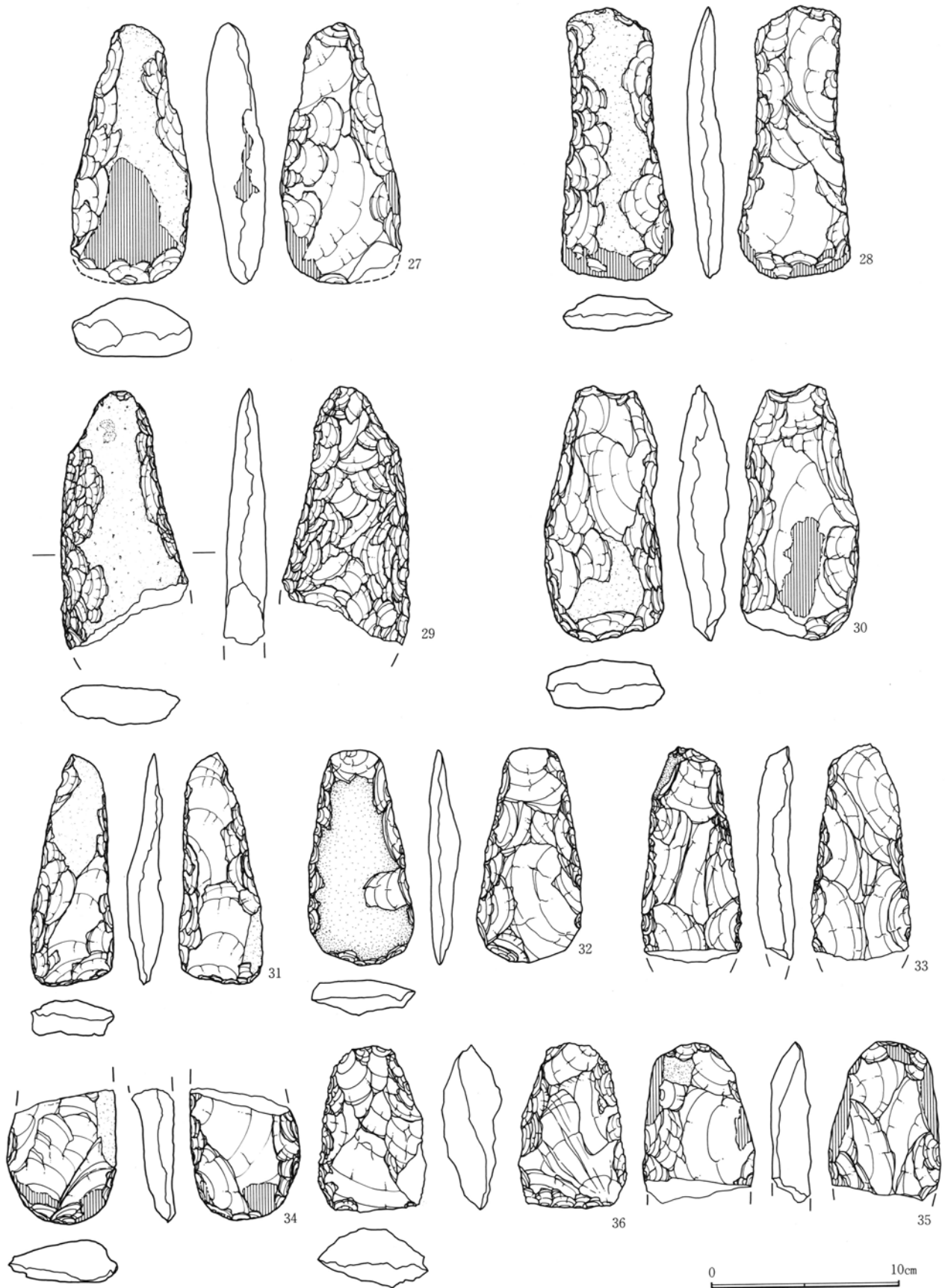




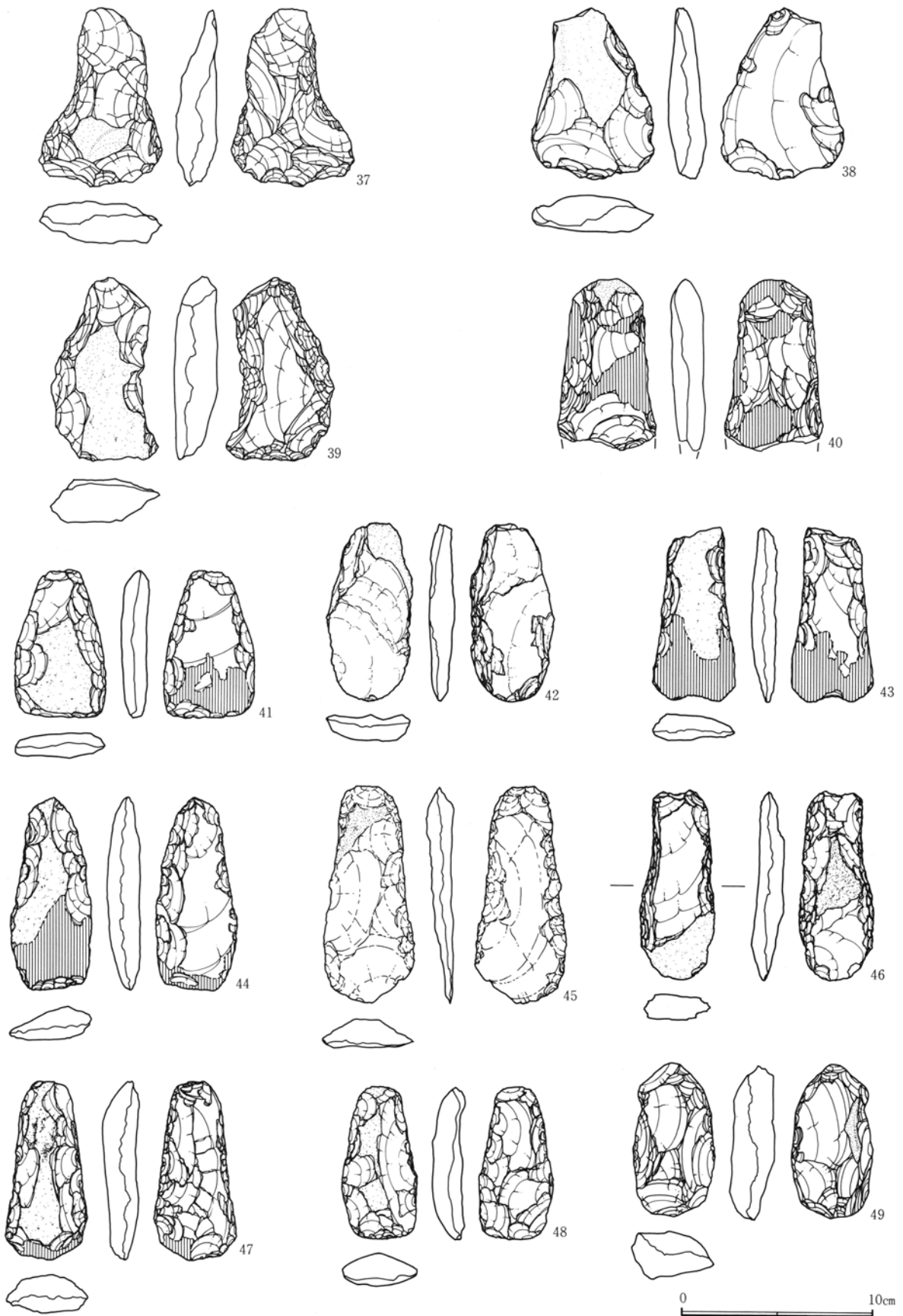
第221図 打製石斧 (1)



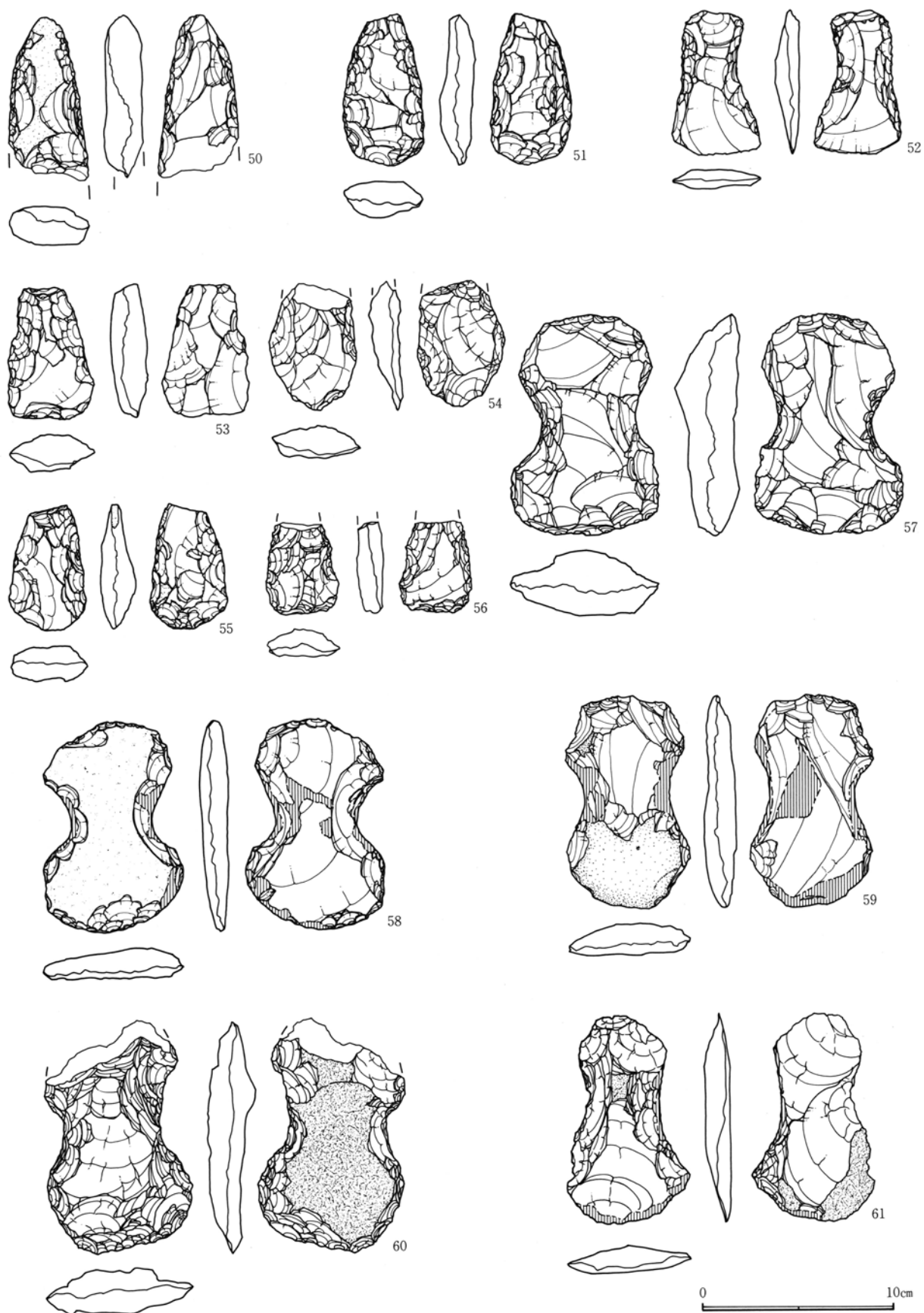
第222図 打製石斧(2)



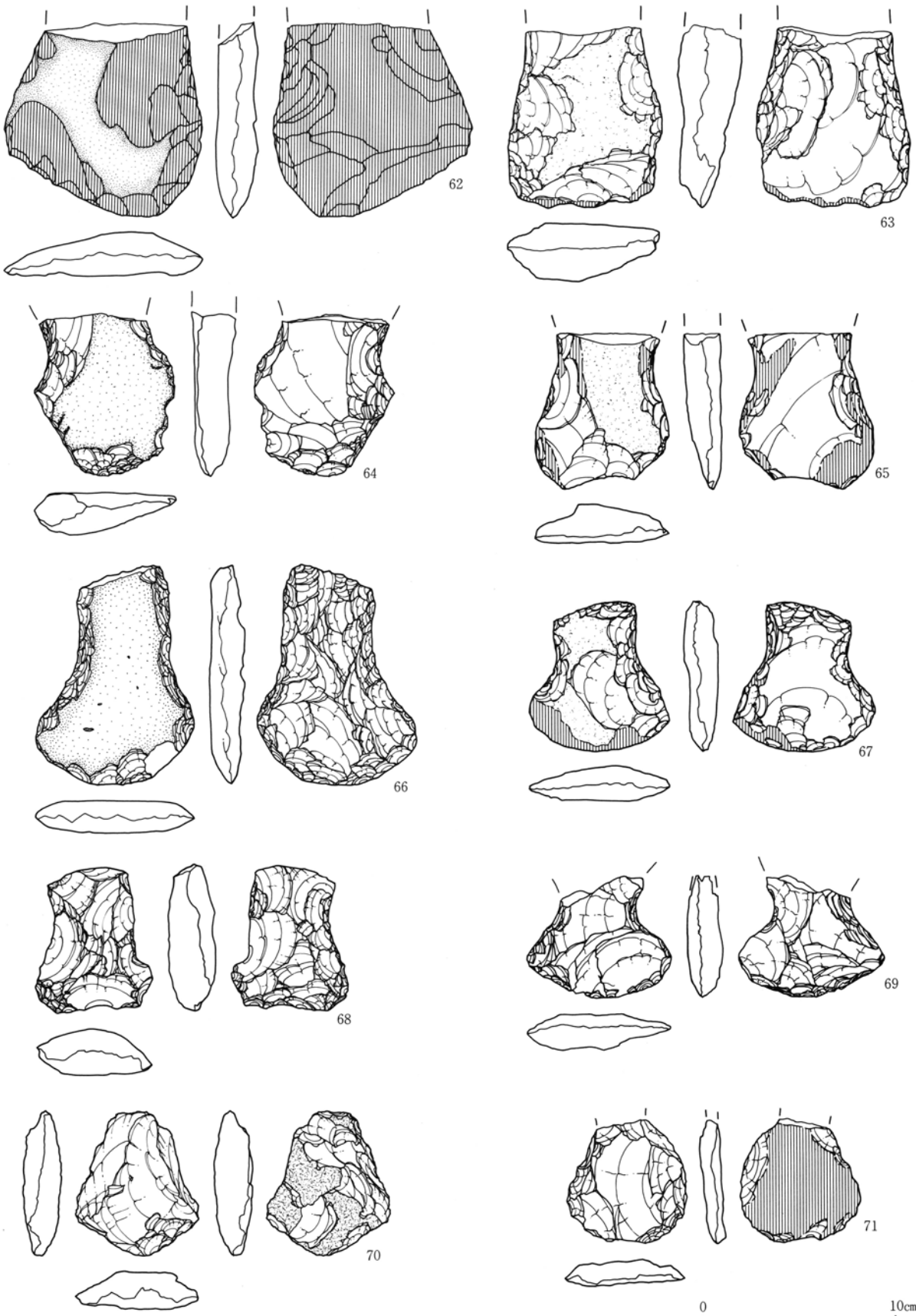
第223図 打製石斧 (3)



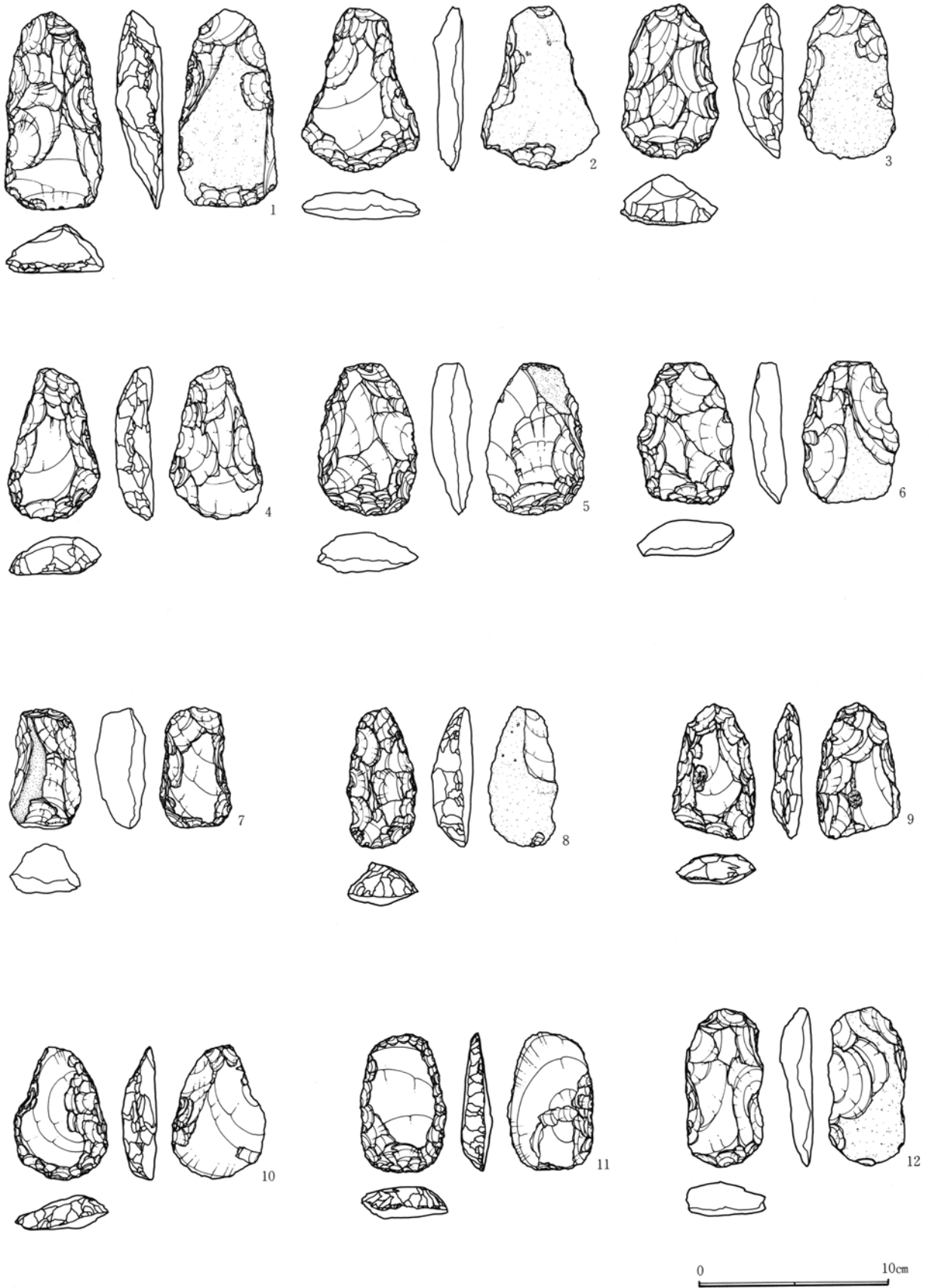
第224図 打製石斧（4）



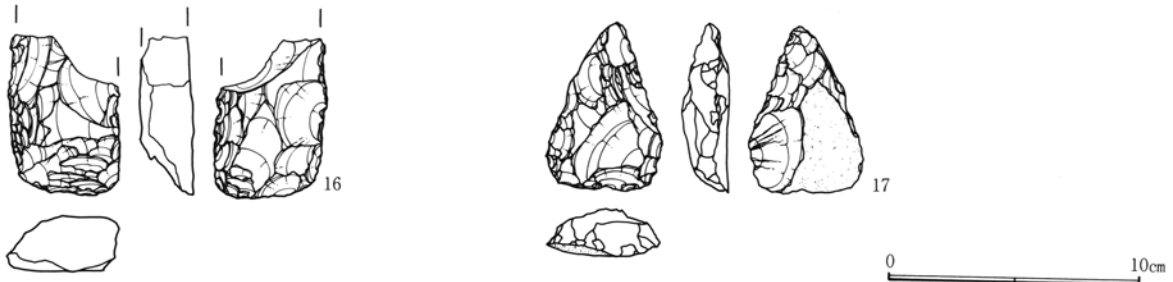
第225図 打製石斧 (5)



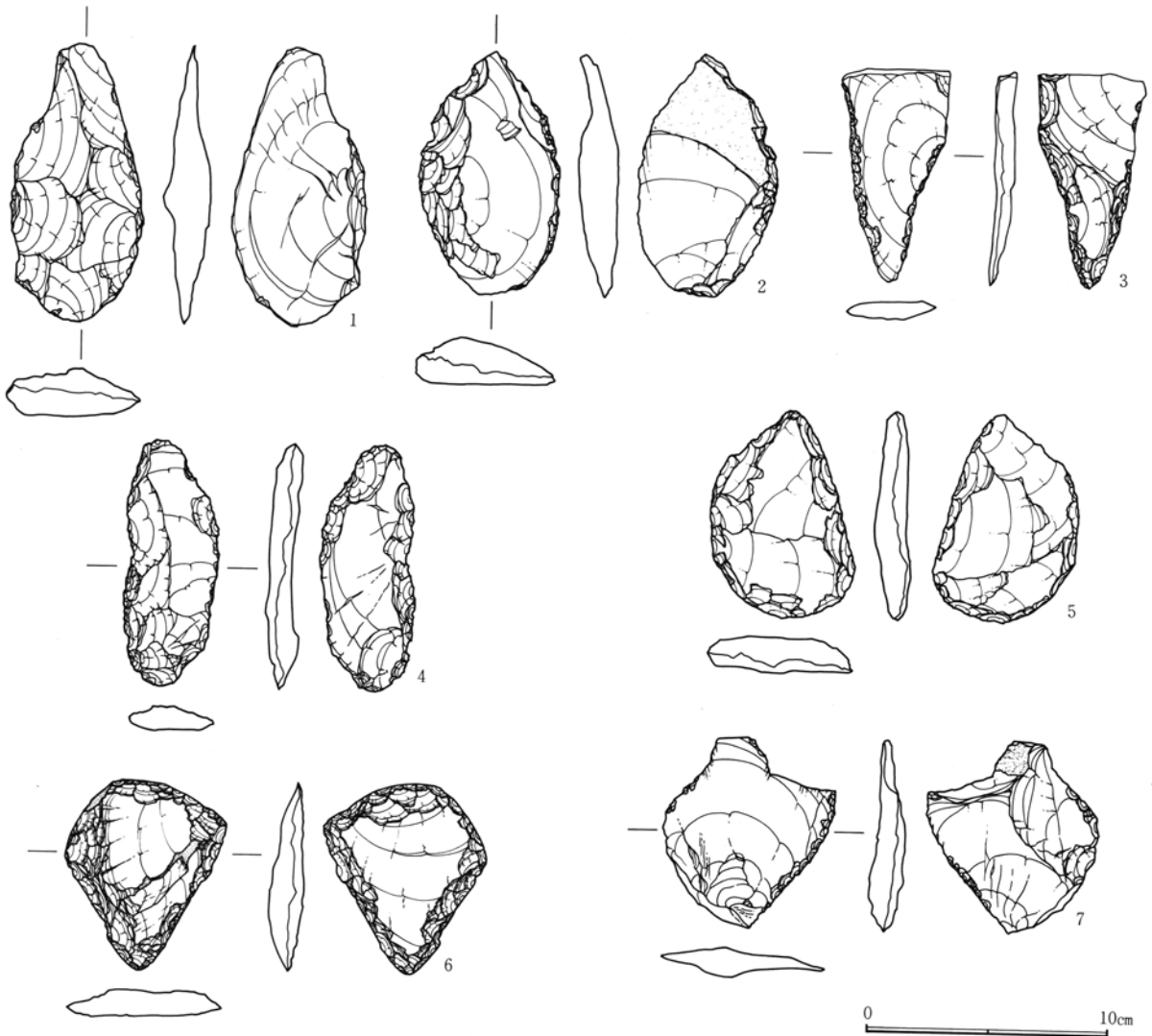
第226図 打製石斧 (6)



第227図 斧状石器（1）

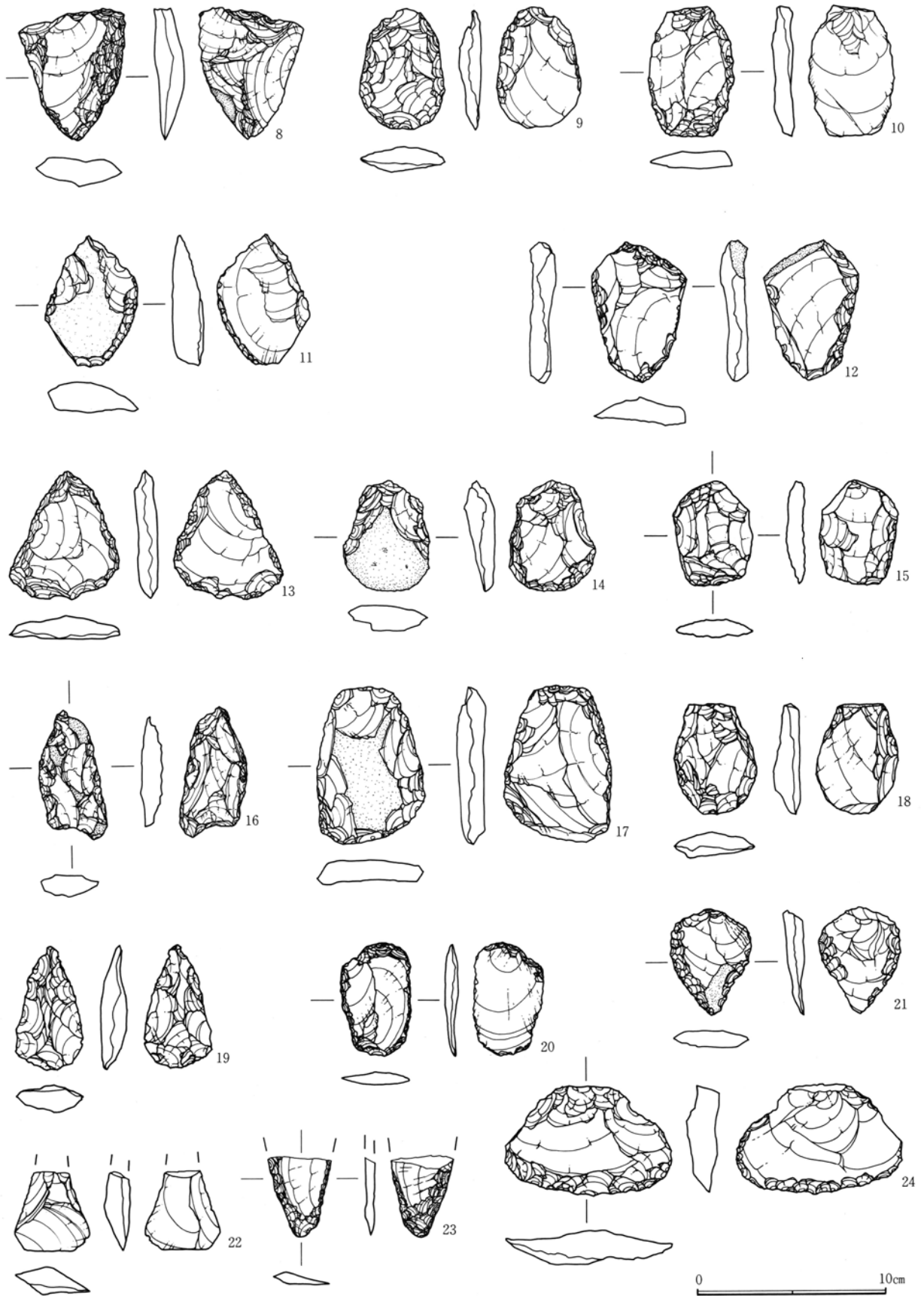


第228図 鏡状石器 (2)

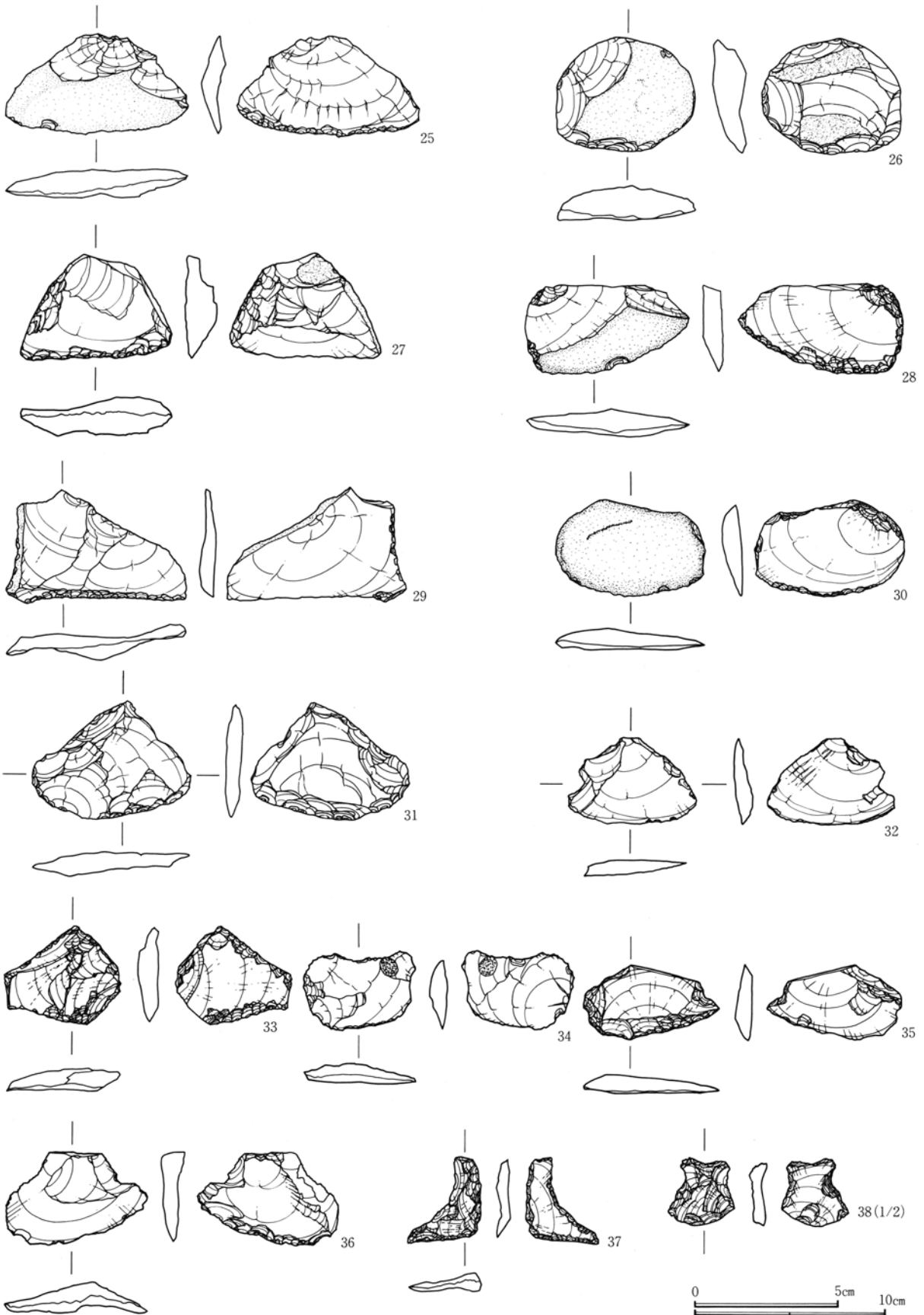


第229図 スクレイパー (1)





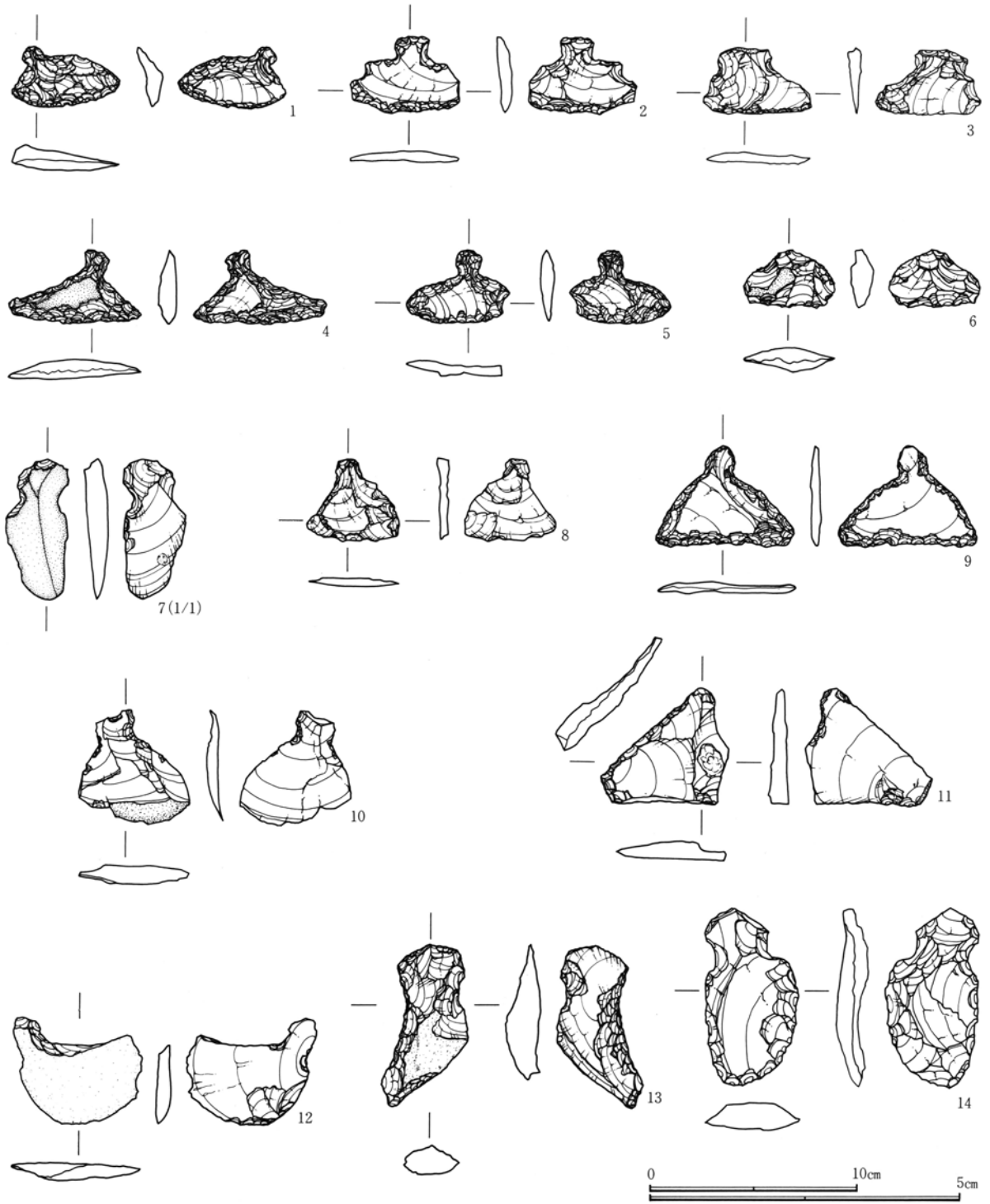
第230図 スクレイパー (2)



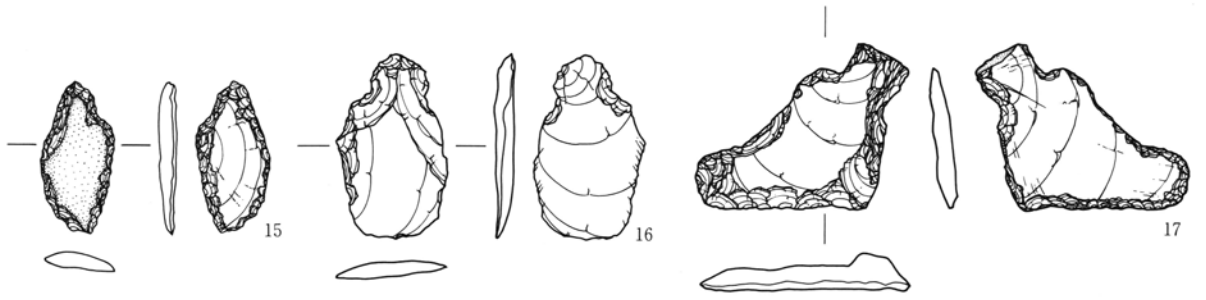
第231図 スクレイパー (3)



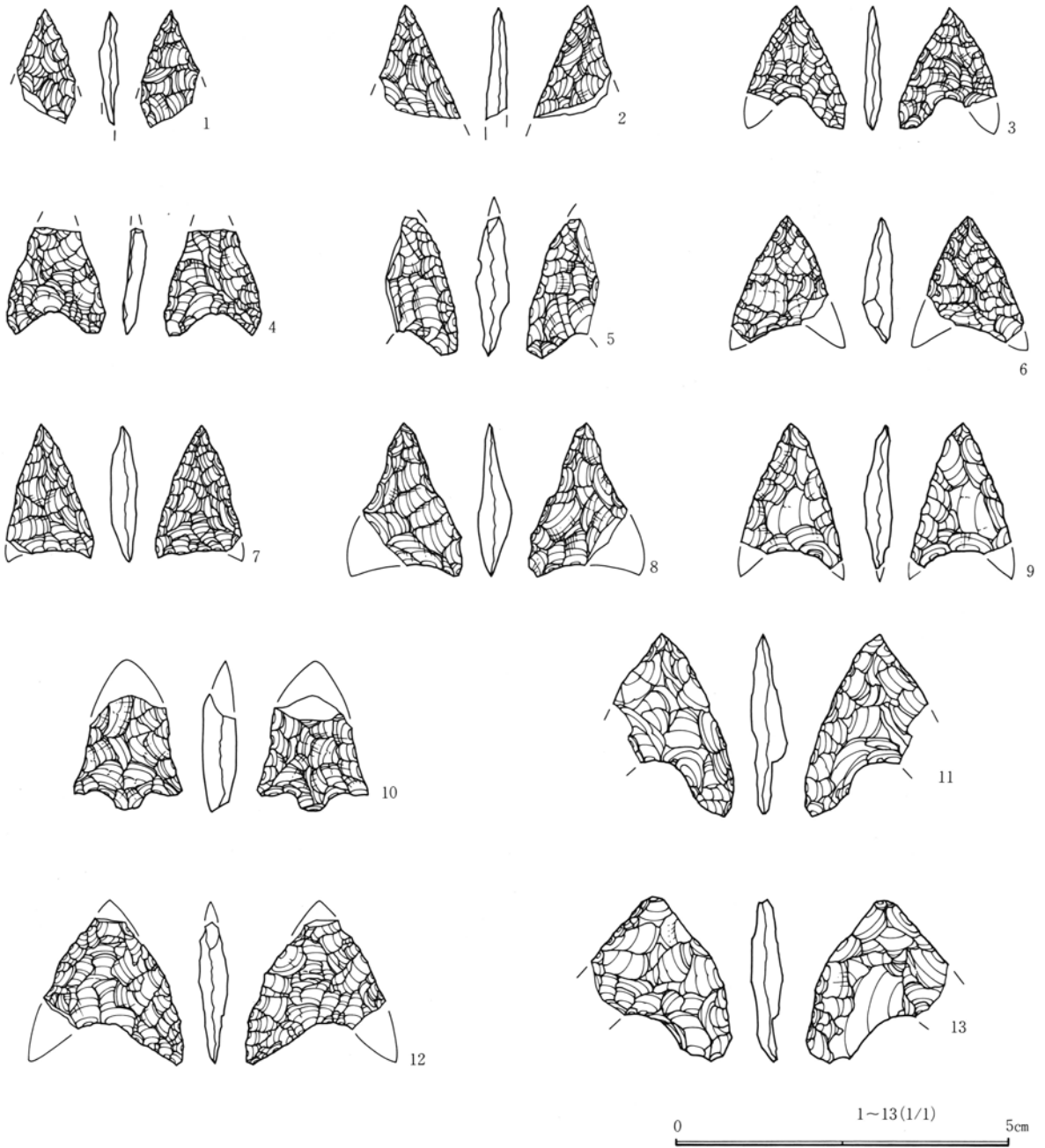
第232図 スクレイパー (4)



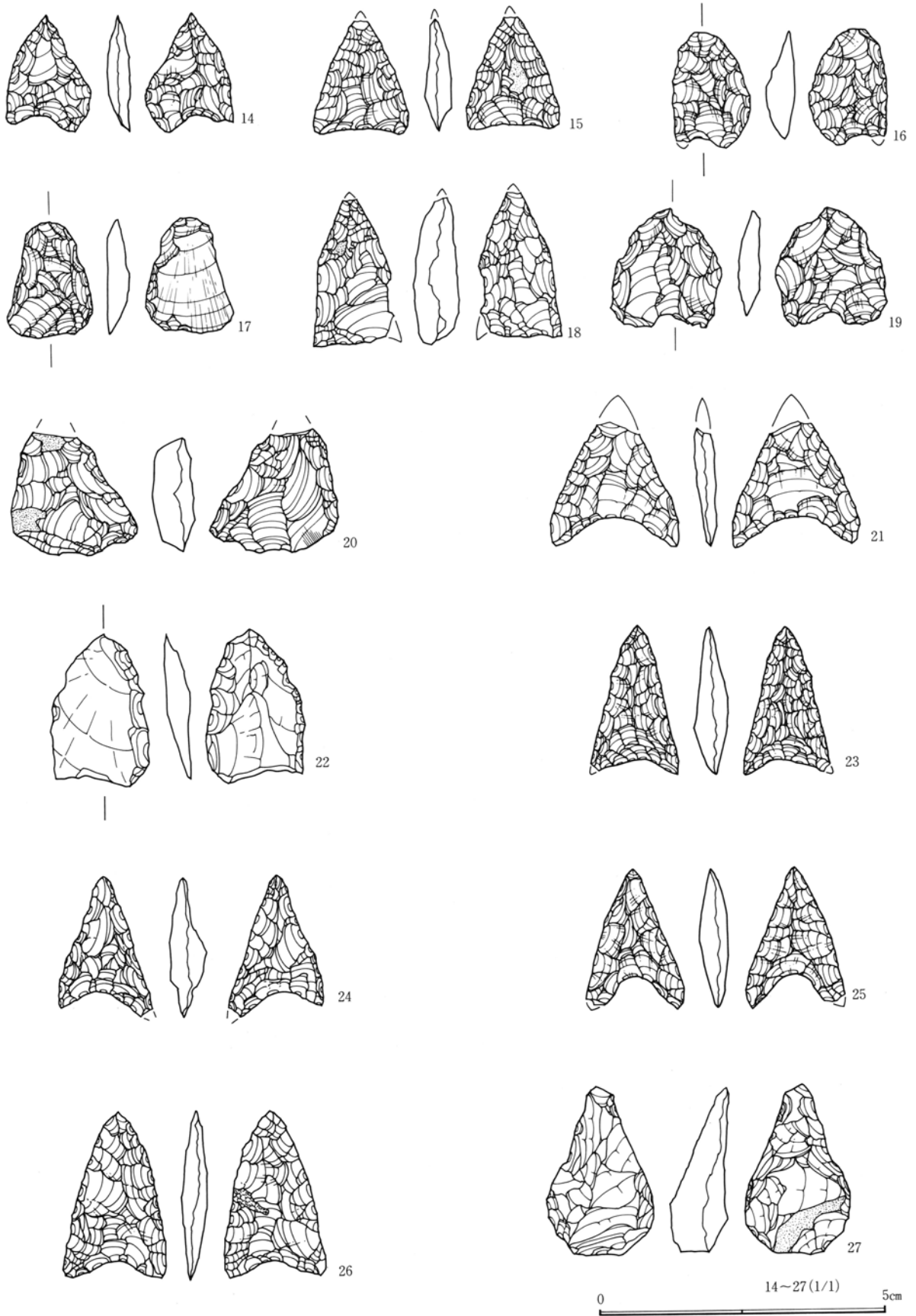
第233図 石匙 (1)



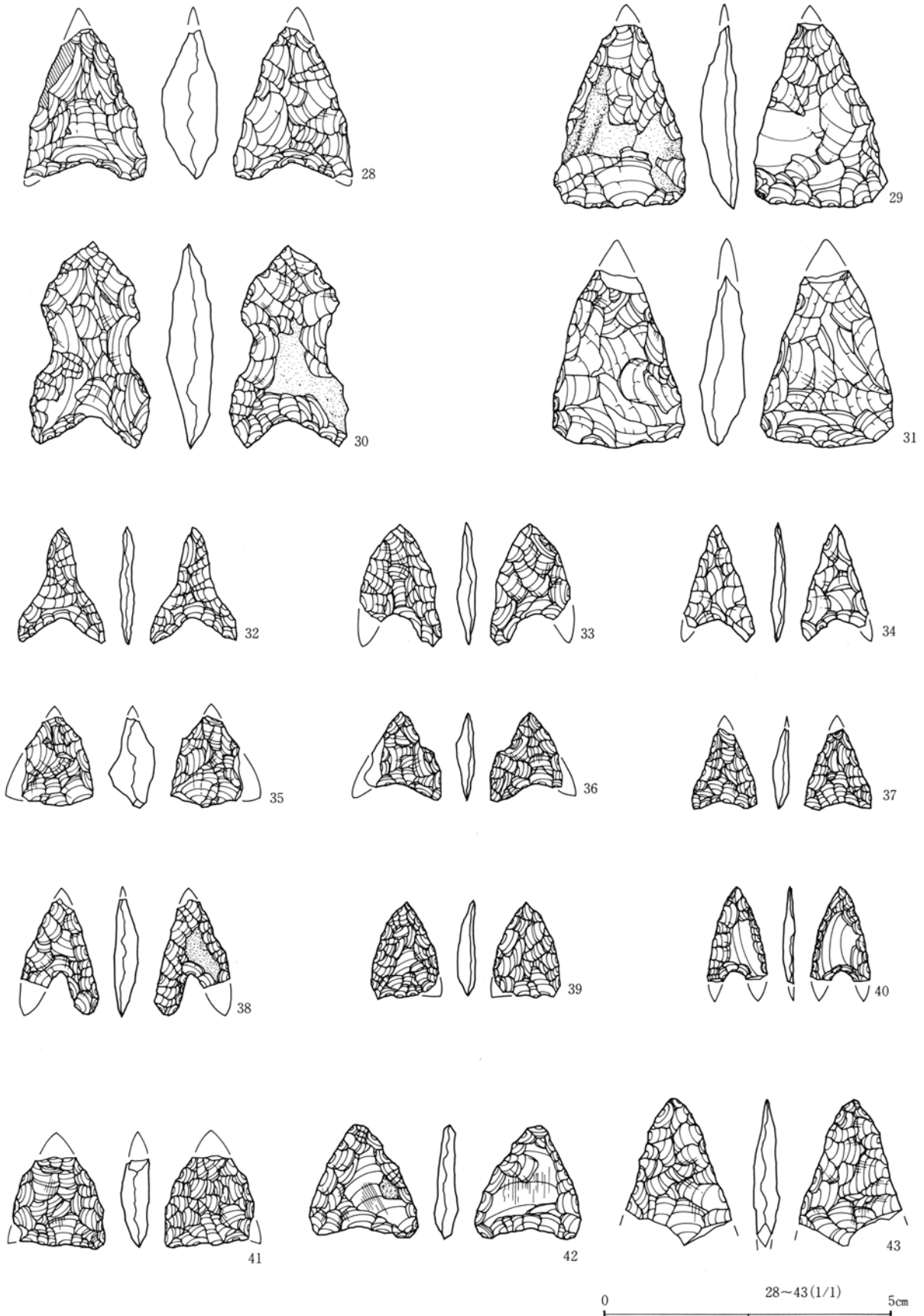
第234図 石匙 (2)



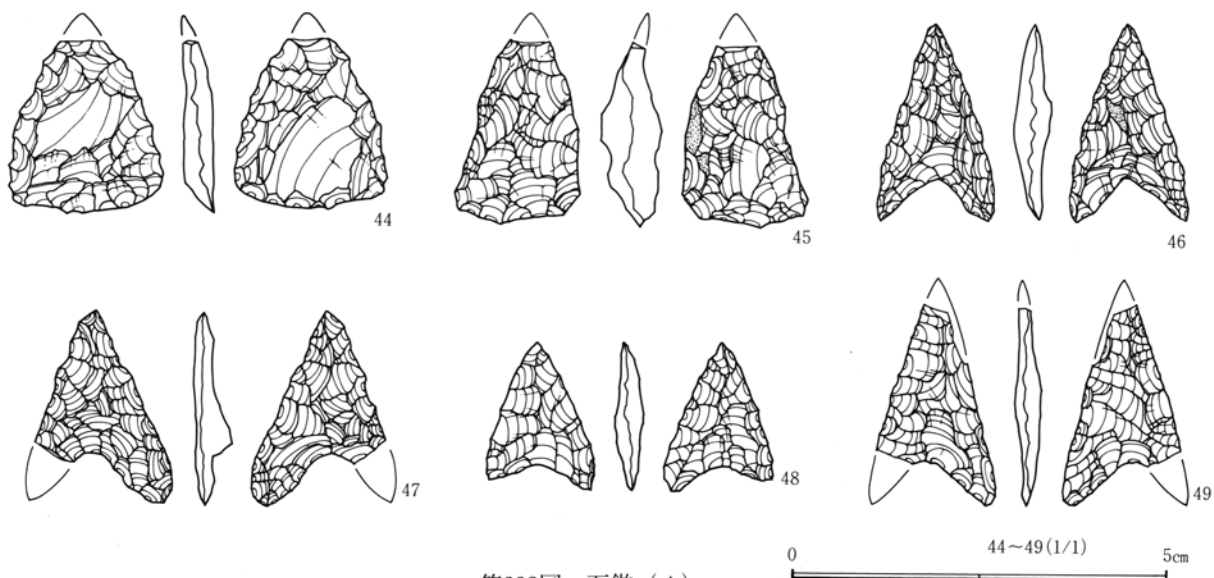
第235図 石鏃 (1)



第236図 石鏃(2)



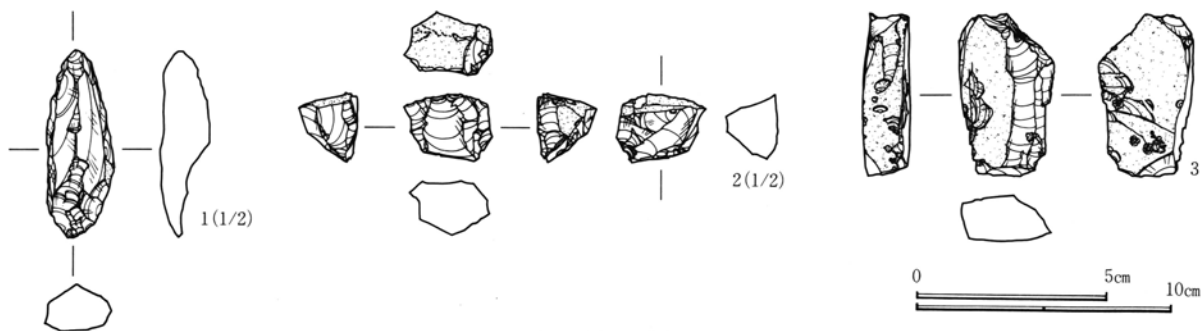
第237図 石鏃 (3)



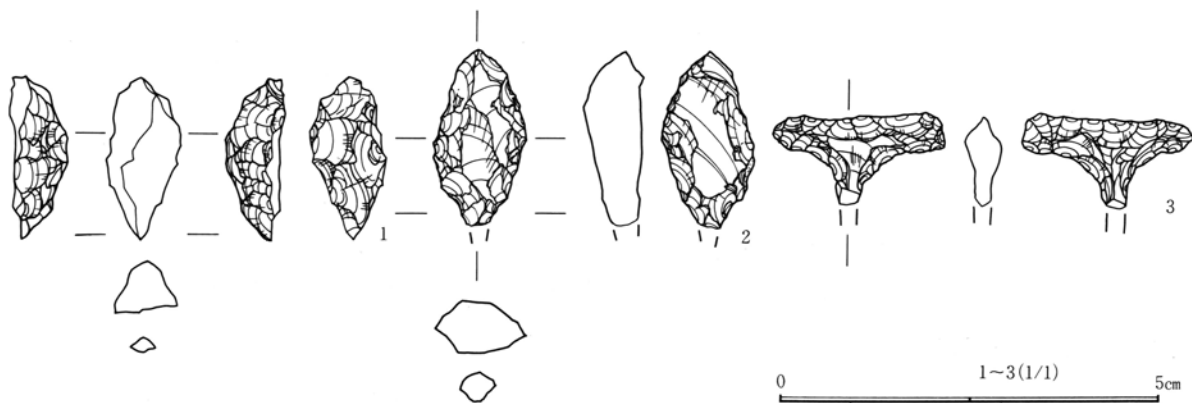
第238図 石鏃 (4)



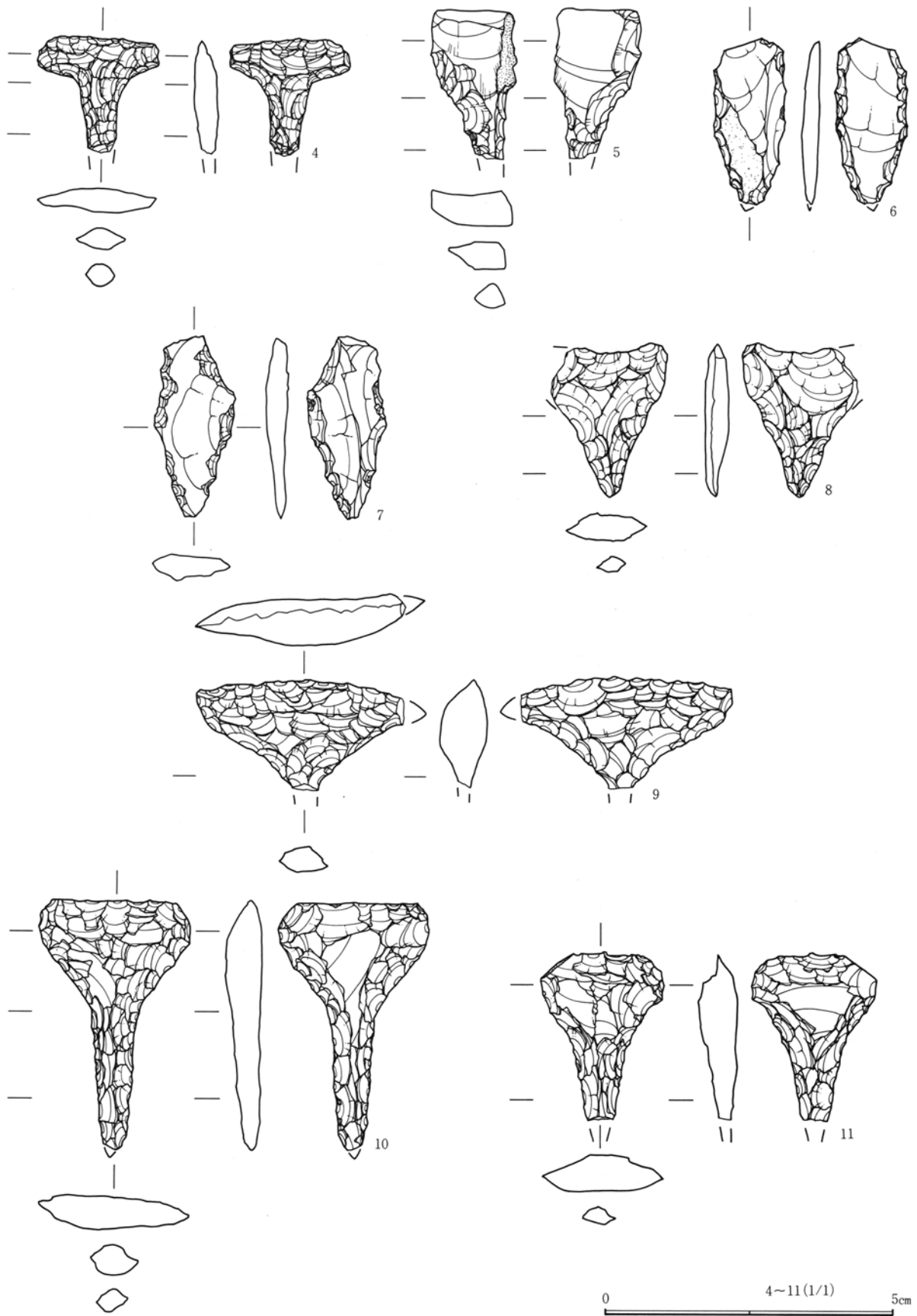
第239図 ピエスキュー



第240図 石核

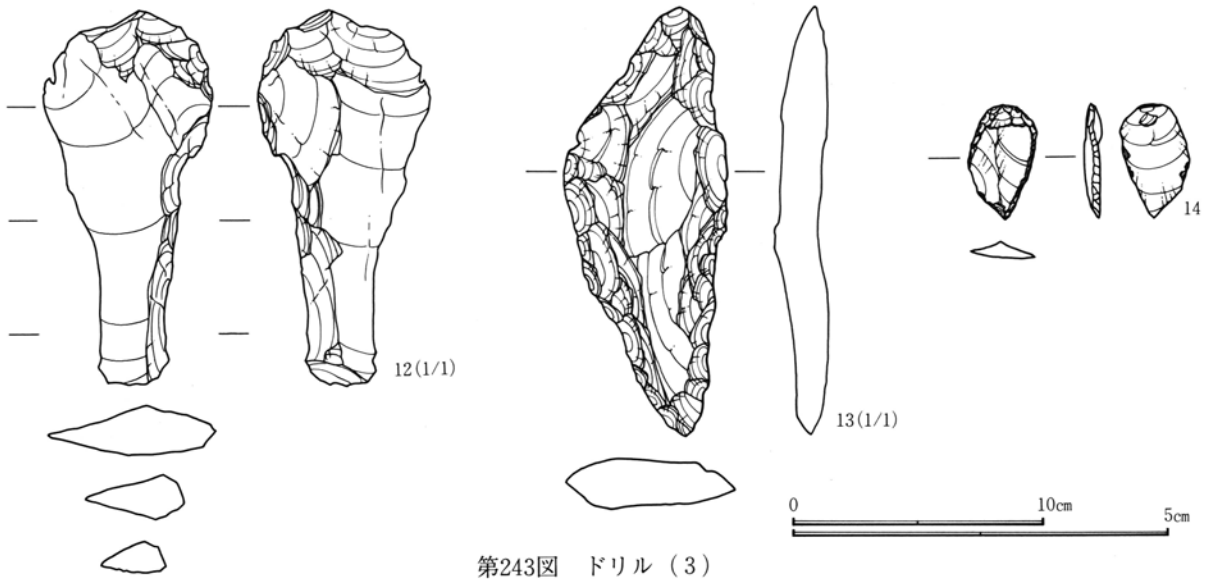


第241図 ドリル (1)

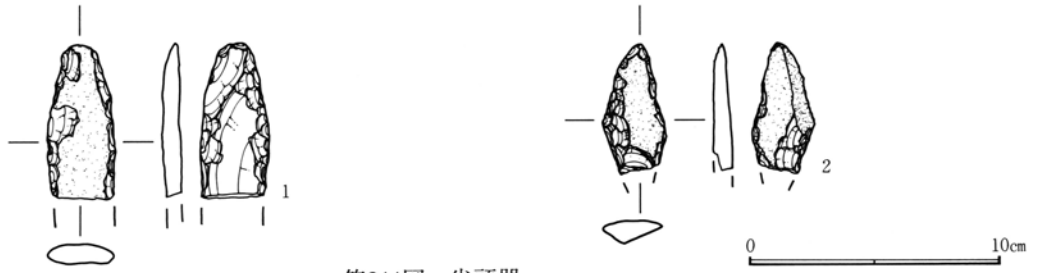


第242図 ドリル (2)

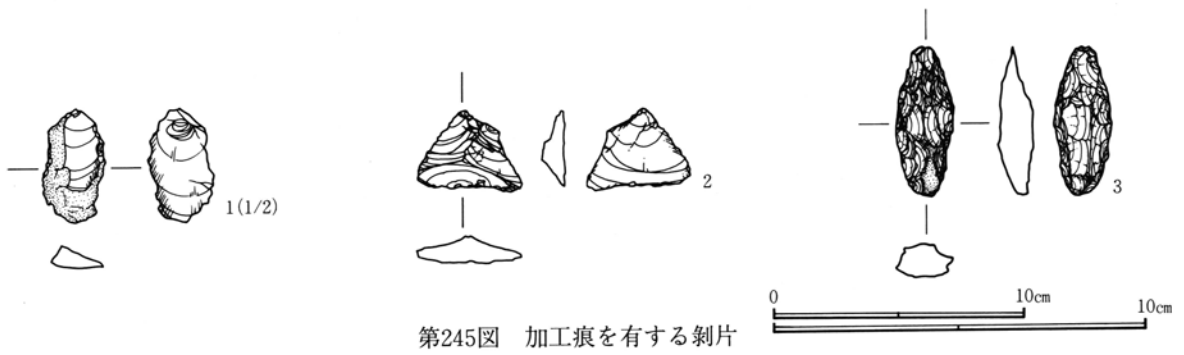




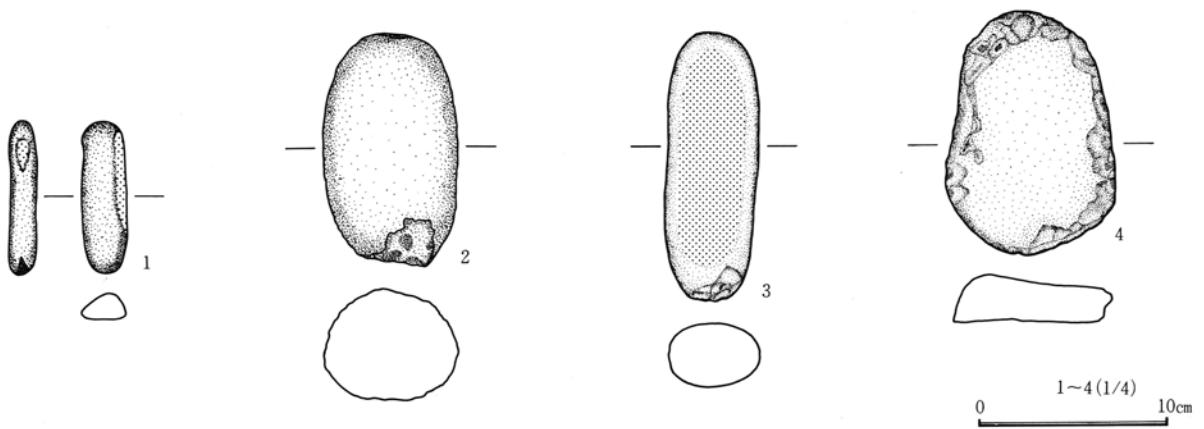
第243図 ドリル (3)



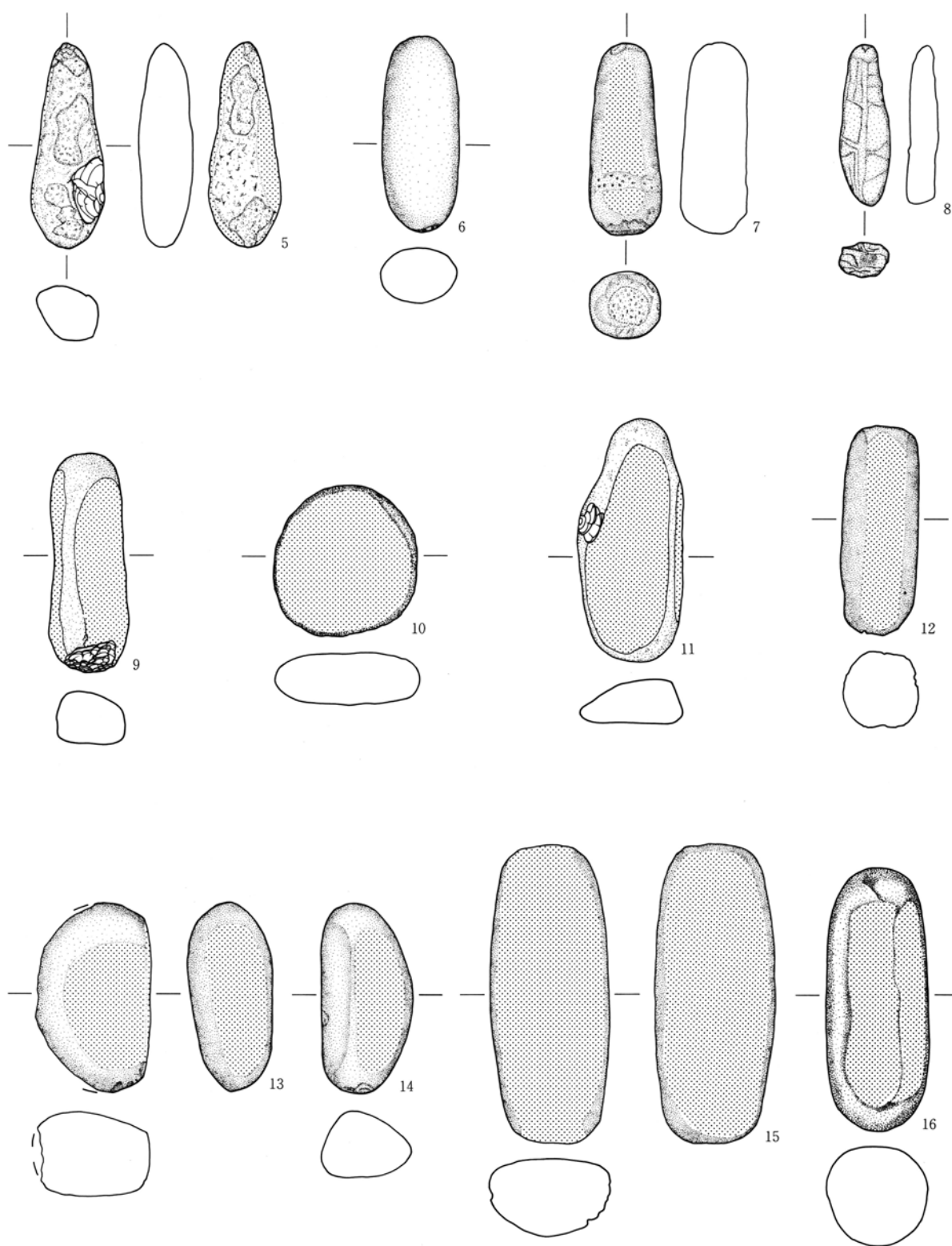
第244図 尖頭器



第245図 加工痕を有する剥片

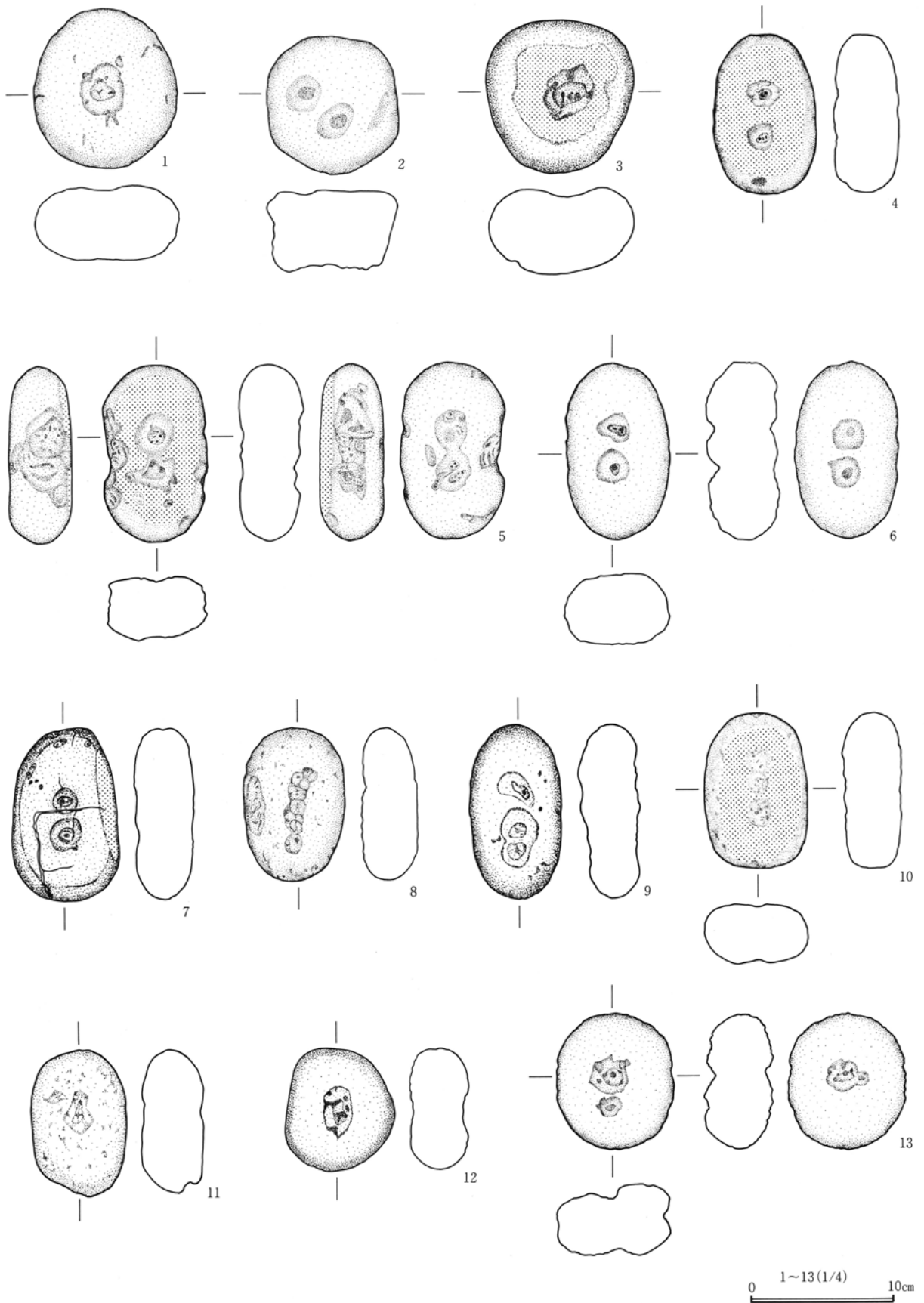


第246図 敲石・磨石 (1)

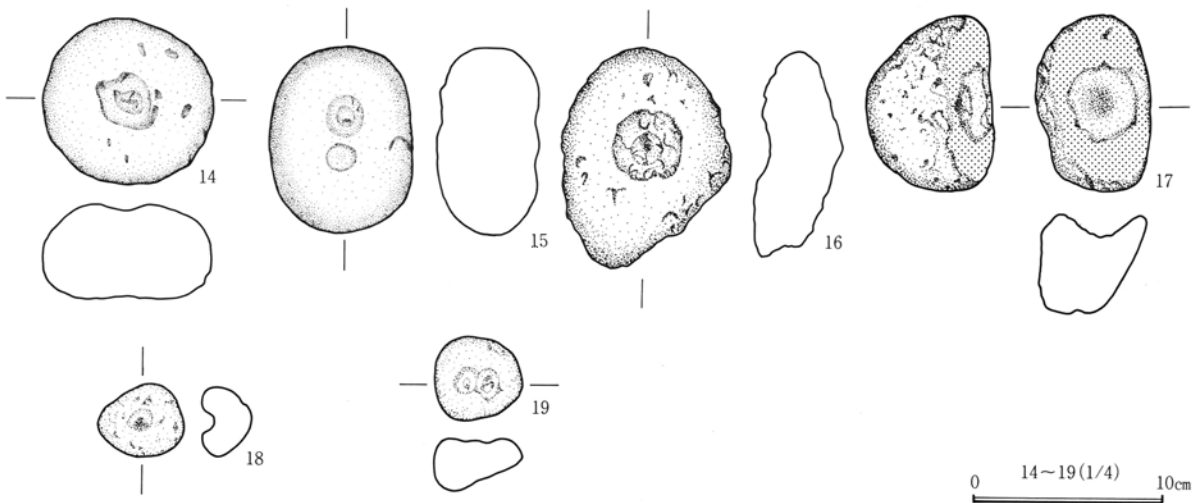


0 5~16(1/4) 10cm

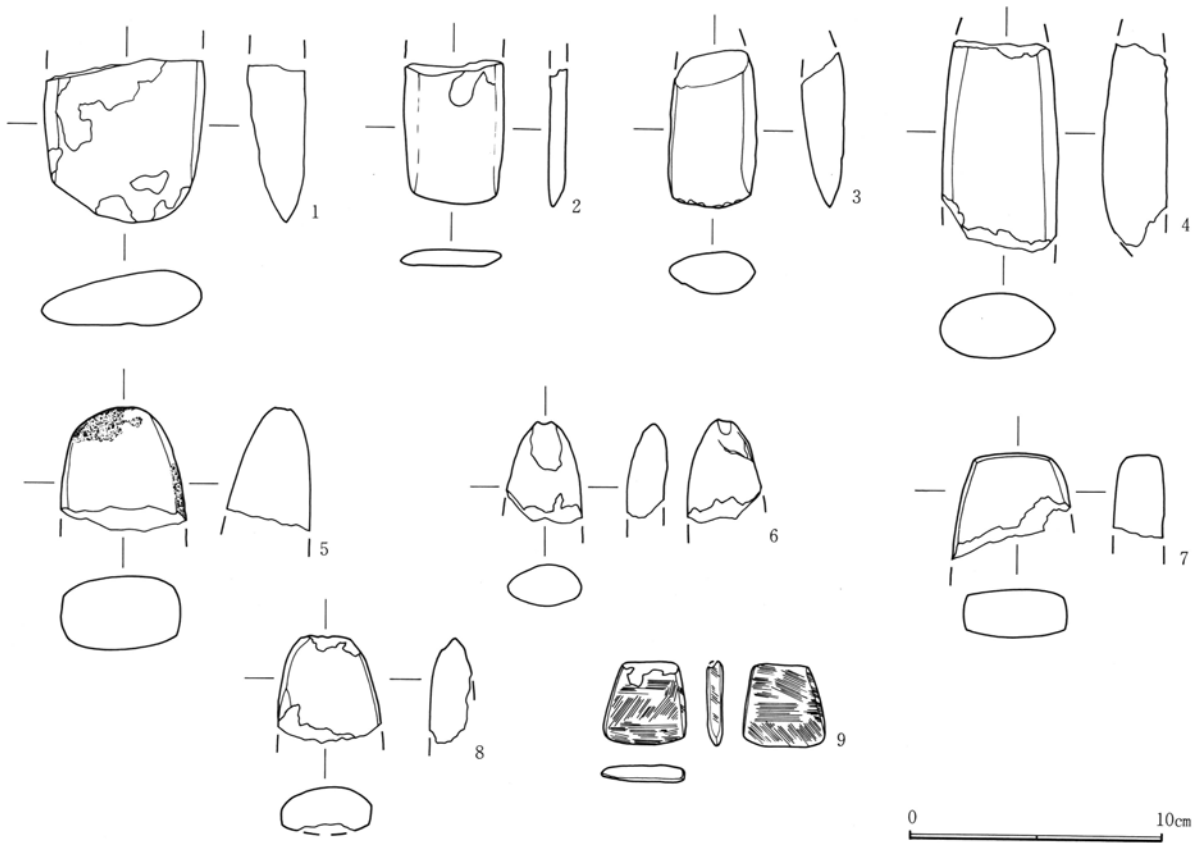
第247図 敲石・磨石(2)



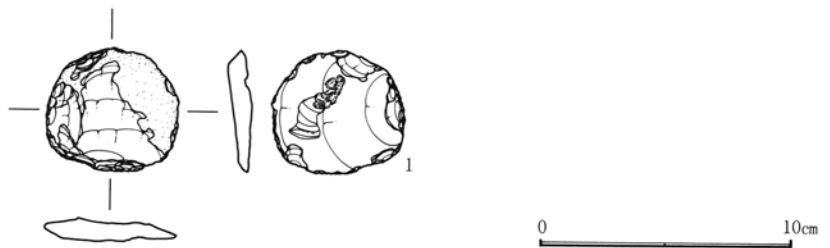
第248図 凹石 (1)



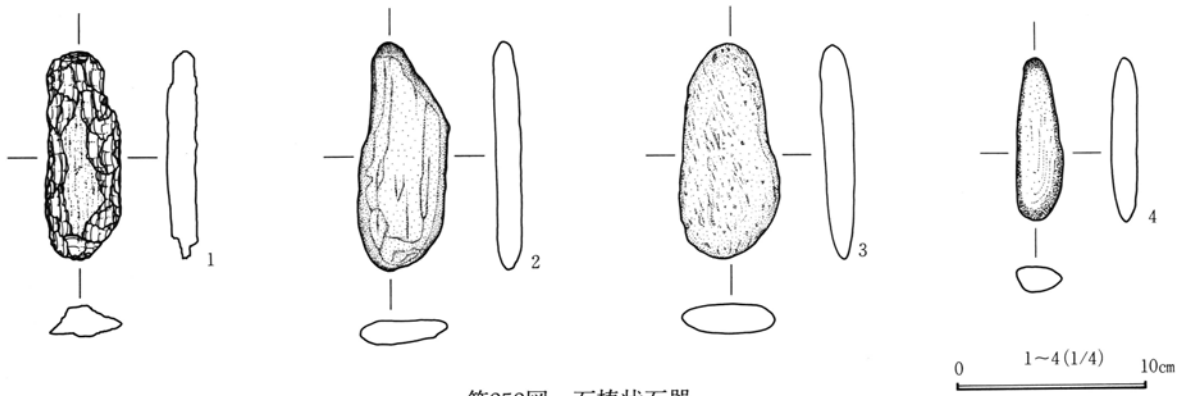
第249図 凹石 (2)



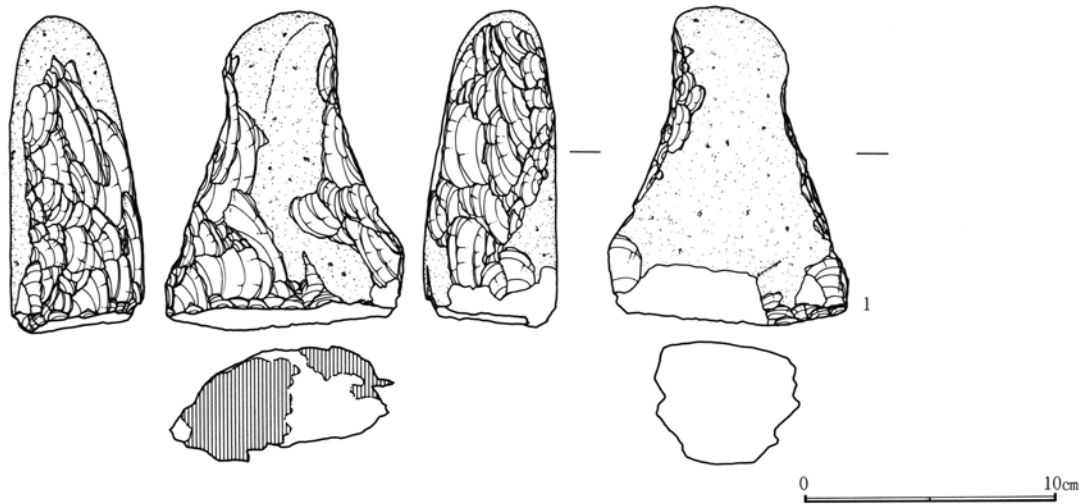
第250図 磨製石斧



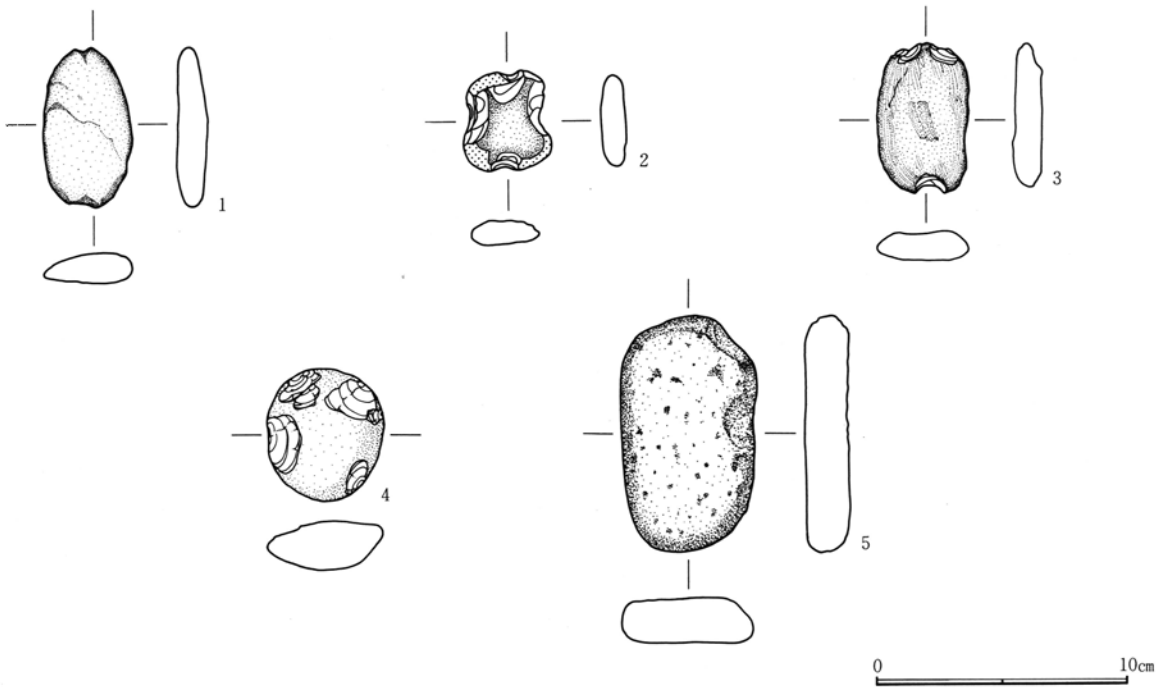
第251図 石製円盤



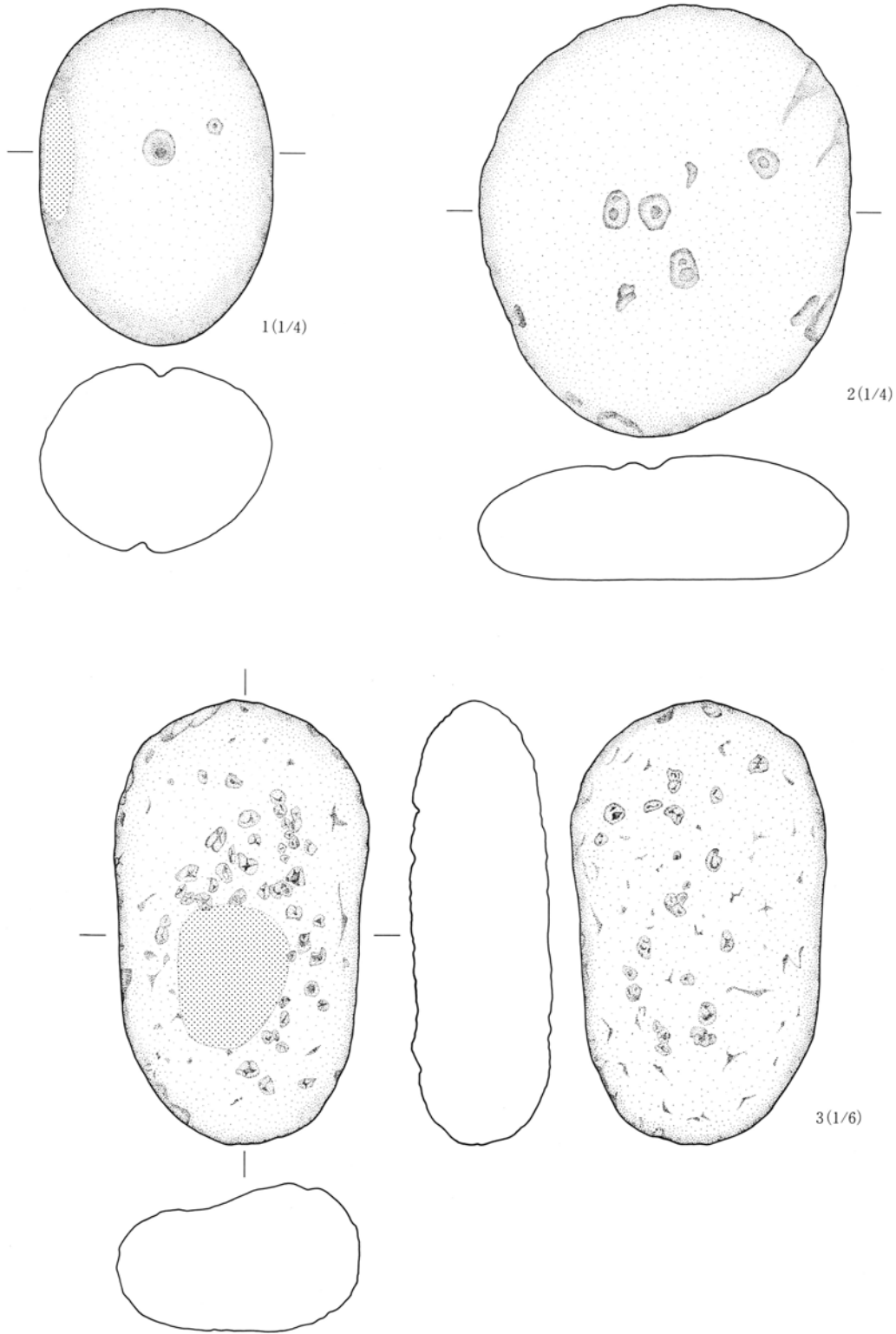
第252図 石棒状石器



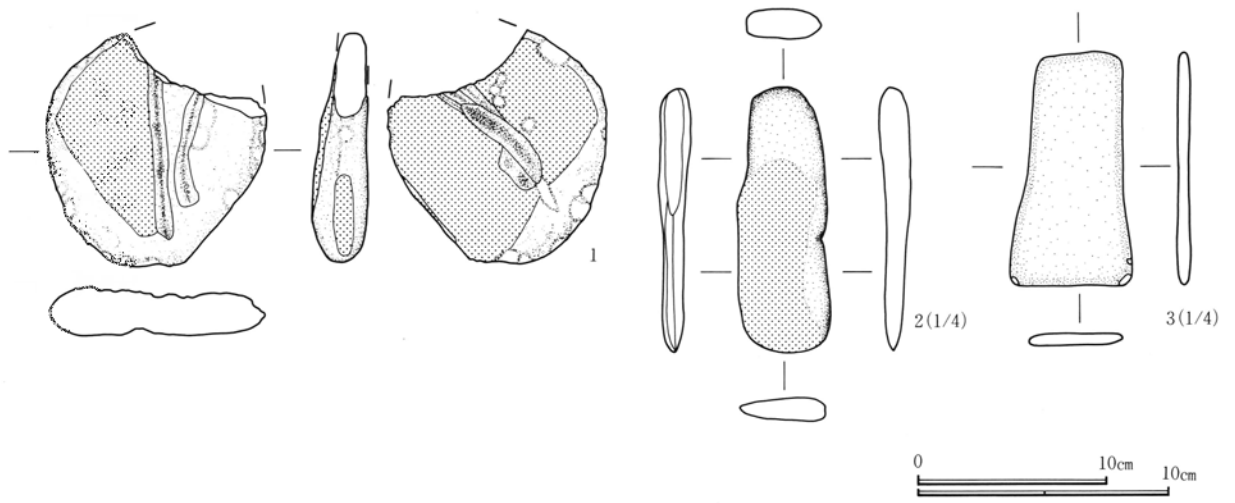
第253図 スタンプ形石器



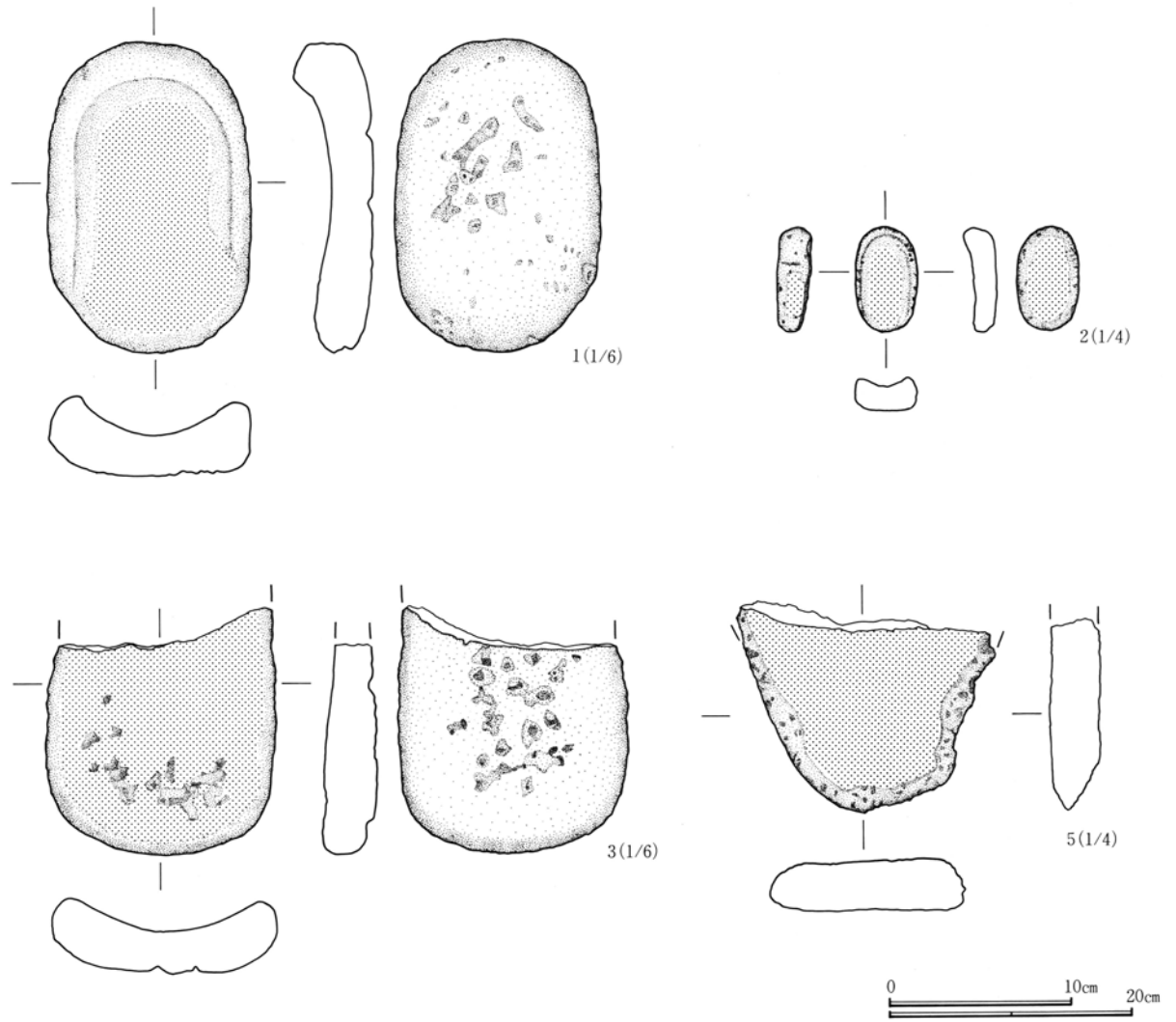
第254図 石錘・浮子



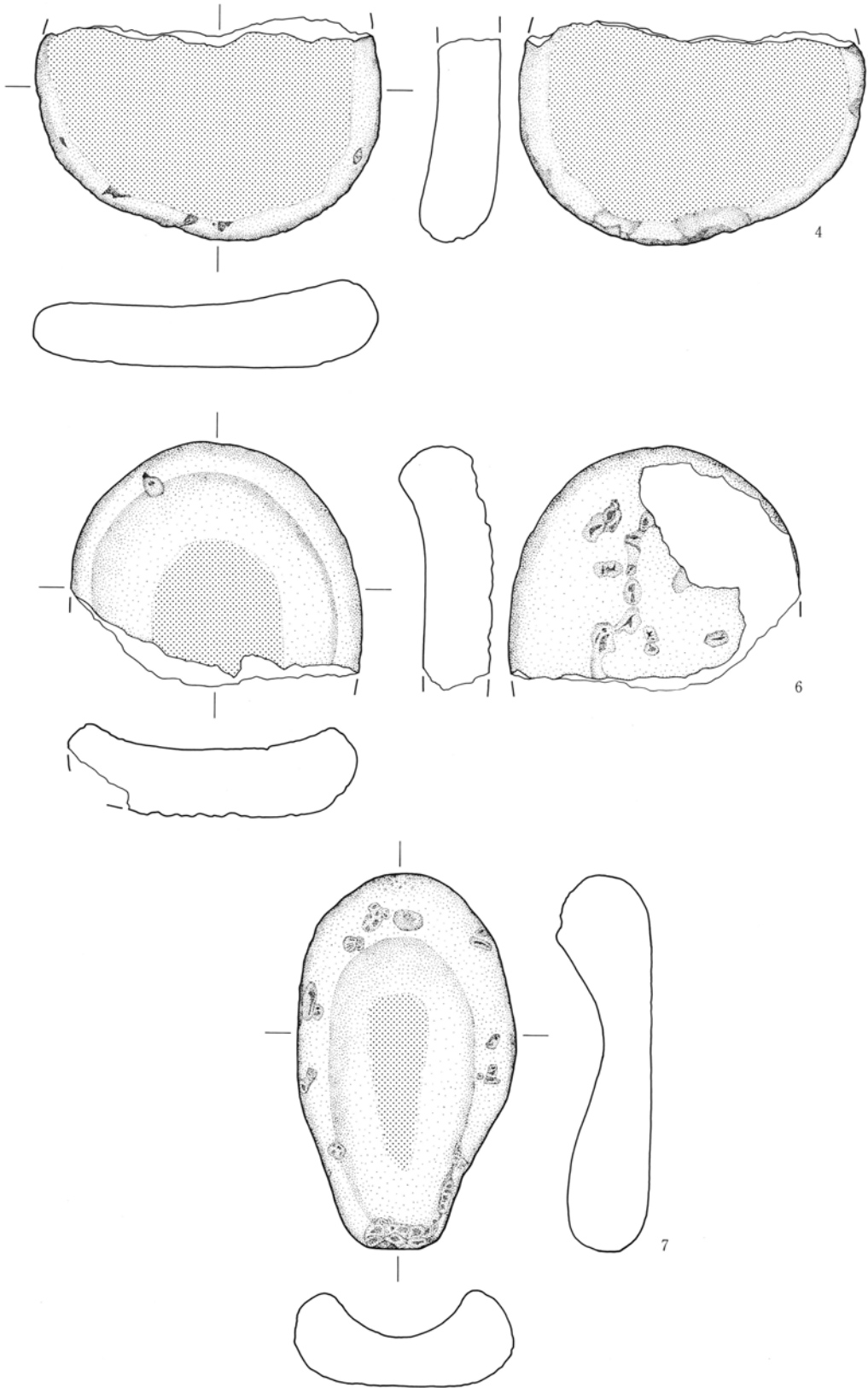
第255図 多孔石



第256図 砥石



第257図 石皿 (1)



第258図 石皿 (2)



第4章 検出された遺構と遺物

遺構外出土石器計測表

打製石斧 (第221~226図 P L107~109)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	基部一部欠	①(14.3) ②(6.8) ③(3.05) ④ 324.9	粗粒輝石安山岩	66区 J-18	
2	1/2	①(11.8) ②(7.3) ③(2.6) ④ 316.0	粗粒輝石安山岩	66区 L-20	
3	刃部欠	①(12.9) ②(4.6) ③(2.1) ④ 136.5	粗粒輝石安山岩	66区 H-20	
4	完	① 12.5 ② 5.3 ③ 1.6 ④ 118.5	黒色頁岩	66区 T-12	
5	完	① 12.1 ② 4.7 ③ 2.5 ④ 146.2	黒色頁岩	66区 L-20	
6	一部欠	①(10.0) ②(4.6) ③(2.1) ④ 125.0	細粒輝石安山岩	66区 L-18	
7	1/2	①(7.7) ②(4.9) ③(1.4) ④ 58.6	黒色頁岩	66区表採	
8	基部欠	①(7.9) ②(5.5) ③(1.6) ④ 87.4	粗粒輝石安山岩	66区表採	
9	刃部欠	①(8.9) ②(5.4) ③(2.6) ④ 131.4	黒色頁岩	76区 P-1	
10	一部欠	①(9.7) ②(4.85) ③(2.4) ④ 126.6	粗粒輝石安山岩	66区表採	
11	完	① 9.1 ② 4.4 ③ 1.7 ④ 76.3	粗粒輝石安山岩	66区表採	
12	刃部欠	①(10.4) ②(4.5) ③(2.3) ④ 126.1	粗粒輝石安山岩	66区表採	
13	刃部欠	①(9.5) ②(5.0) ③(2.5) ④ 159.7	粗粒輝石安山岩	66区表採	
14	刃部欠	①(8.9) ②(5.0) ③ 2.1 ④ 93.2	黒色頁岩	66区表採	
15	基部欠	①(6.8) ②(4.7) ③(2.3) ④ 77.2	細粒輝石安山岩	76区 D-2	
16	刃部欠	①(8.0) ②(4.5) ③(2.3) ④ 84.1	黒色頁岩	66区 N-19	
17	1/2	①(6.8) ②(4.8) ③(2.7) ④ 87.7	黒色頁岩	66区表採	
18	1/2	①(6.9) ②(4.5) ③(1.3) ④ 57.5	粗粒輝石安山岩	66区 L-20	
19	一部欠	①(7.55) ②(4.1) ③(1.7) ④ 55.2	黒色頁岩	75区 G-3	
20	完	① 8.2 ② 3.4 ③ 1.3 ④ 43.7	細粒輝石安山岩	66区表採	
21	基部欠	①(7.0) ②(4.4) ③(1.4) ④ 45.6	粗粒輝石安山岩	75区 G-3	
22	基部欠	①(6.8) ②(4.5) ③(1.3) ④ 53.6	黒色頁岩	75区 Q-2	
23	刃部片	①(5.2) ②(4.6) ③(2.6) ④ 70.8	黒色頁岩	66区表採	
24	基部欠	①(5.4) ②(4.0) ③(1.6) ④ 44.1	細粒輝石安山岩	66区表採	
25	1/2	①(5.9) ②(3.9) ③(1.7) ④ 39.4	黒色頁岩	65区 S-19	
26	一部欠	①(6.5) ②(3.5) ③(1.5) ④ 35.4	黒色頁岩	75区 H-4	
27	完	① 13.8 ② 6.5 ③ 3.1 ④ 297.6	粗粒輝石安山岩	66区 O-19	
28	完	① 14.5 ② 5.9 ③ 2.0 ④ 167.2	粗粒輝石安山岩	66区表採	
29	刃部欠	①(13.6) ②(6.8) ③(2.1) ④ 290.6	粗粒輝石安山岩	75区 P-2	
30	一部欠	①(13.4) ②(6.4) ③(2.7) ④ 295.4	粗粒輝石安山岩	75区 G-3	
31	完	① 12.2 ② 4.4 ③ 1.9 ④ 92.9	黒色頁岩	66区 N-15	
32	完	① 11.4 ② 5.6 ③ 1.7 ④ 121.9	ホルンフェルス	76区 N-1	
33	刃部欠	①(11.4) ②(5.3) ③(2.0) ④ 135.8	粗粒輝石安山岩	76区 P-1	
34	基部欠	①(7.0) ②(5.8) ③(2.2) ④ 90.6	細粒輝石安山岩	75区 G-3	
35	刃部欠	①(8.5) ②(6.0) ③(2.1) ④ 146.6	黒色頁岩	76区 P-1	
36	一部欠	①(8.7) ②(5.8) ③(3.2) ④ 150.6	粗粒輝石安山岩	65区表採	
37	完	① 9.2 ② 6.3 ③ 2.1 ④ 111.8	黒色頁岩	66区 J-18	
38	一部欠	①(8.9) ②(6.4) ③(2.0) ④ 115.6	黒色頁岩	65区 T-17	
39	一部欠	①(9.6) ②(5.6) ③(2.3) ④ 136.0	黒色頁岩	66区 L-15	
40	刃部欠	①(8.9) ②(5.1) ③(1.8) ④ 107.2	細粒輝石安山岩	76区 N-1	
41	完	① 7.6 ② 4.7 ③ 1.4 ④ 66.7	粗粒輝石安山岩	75区 G-2	
42	完	① 9.2 ② 4.4 ③ 1.3 ④ 58.6	細粒輝石安山岩	66区 J-20	
43	一部欠	①(9.1) ②(4.3) ③(1.4) ④ 57.0	粗粒輝石安山岩	66区表採	
44	完	① 10.0 ② 4.3 ③ 1.8 ④ 75.5	粗粒輝石安山岩	66区 O-20	
45	完	① 11.3 ② 4.8 ③ 1.5 ④ 68.9	ホルンフェルス	66区表採	
46	完	① 9.9 ② 3.7 ③ 1.7 ④ 65.1	細粒輝石安山岩	66区 L-19	
47	完	① 9.3 ② 4.3 ③ 1.8 ④ 79.8	黒色頁岩	66区 L-17	
48	完	① 7.9 ② 3.9 ③ 1.8 ④ 64.7	粗粒輝石安山岩	66区 A-18	
49	完	① 8.0 ② 4.3 ③ 2.4 ④ 87.8	黒色頁岩	76区 D-2	
50	刃部欠	①(8.6) ②(4.2) ③(2.1) ④ 80.4	黒色頁岩	66区表採	
51	完	① 8.0 ② 4.1 ③ 2.0 ④ 68.2	黒色頁岩	66区 Q-17	
52	完か	① 7.5 ② 4.6 ③ 1.3 ④ 38.9	黒色頁岩	66区 I-17	
53	完	① 6.8 ② 4.5 ③ 1.4 ④ 68.3	黒色頁岩	66区 H-15	
54	基部欠	①(6.6) ②(4.6) ③(1.8) ④ 48.4	黒色頁岩	66区表採	
55	完	① 6.5 ② 4.1 ③ 1.75 ④ 51.3	黒色頁岩	66区表採	
56	基部欠	①(4.7) ②(3.8) ③(1.4) ④ 30.4	硬質泥岩	65区表採	
57	完	① 11.5 ② 7.8 ③ 3.5 ④ 284.6	黒色頁岩	66区 P-19	
58	完	① 7.4 ② 11.0 ③ 1.6 ④ 141.0	黒色頁岩	75区 H-3	
59	完	① 11.1 ② 6.5 ③ 1.7 ④ 133.1	細粒輝石安山岩	66区表採	

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
60	一部欠	①(12.0) ②(7.7) ③(2.2) ④ 217.2	細粒輝石安山岩	66区 P-15	
61	完	① 10.9 ② 6.4 ③ 1.3 ④ 88.0	黒色頁岩	76区 L-1	
62	1/2	①(10.0) ②(10.3) ③(2.2) ④ 290.9	灰色安山岩	75区 T-1	
63	1/2	①(9.3) ②(8.0) ③(3.1) ④ 263.1	粗粒輝石安山岩	66区 S-13	
64	基部欠	①(8.4) ②(7.4) ③(2.3) ④ 144.0	黒色頁岩	66区 N-19	
65	1/2	①(8.0) ②(7.0) ③(2.0) ④ 124.6	黒色頁岩	65区 S-18	
66	一部欠	①(11.3) ②(8.3) ③(1.8) ④ 206.9	灰色安山岩	66区 L-20	
67	2/3	①(7.8) ②(7.4) ③(1.8) ④ 98.3	珪質頁岩	67区 A-14	
68	基部欠	①(7.5) ②(6.0) ③(2.4) ④ 114.2	黒色頁岩	66区 N-19	
69	1/2	①(7.6) ②(6.3) ③(1.9) ④ 74.8	細粒輝石安山岩	76区 D-2	
70	一部欠	①(7.7) ②(6.4) ③(1.8) ④ 88.1	細粒輝石安山岩	66区表採	
71	1/2	①(6.1) ②(5.9) ③(1.2) ④ 57.6	灰色安山岩	66区 K-18	

## 篋状石器 (第227、228図 P L 109)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 10.4 ② 5.2 ③ 2.5 ④ 130.5	黒色頁岩	66区表採	
2	完	① 8.5 ② 6.0 ③ 1.6 ④ 74.2	細粒輝石安山岩	65区 T-19	
3	完	① 8.1 ② 5.2 ③ 2.6 ④ 108.2	黒色頁岩	75区 G-4	
4	完	① 8.1 ② 4.9 ③ 2.0 ④ 80.5	黒色頁岩	66区 O-16	
5	完	① 7.9 ② 5.2 ③ 2.3 ④ 89.9	黒色頁岩	76区 N-1	
6	完	① 7.4 ② 5.1 ③ 1.9 ④ 84.9	黒色頁岩	66区 H-18	
7	完	① 6.3 ② 3.8 ③ 2.7 ④ 68.3	細粒輝石安山岩	76区 K-1	
8	完	① 7.3 ② 3.4 ③ 2.3 ④ 59.7	黒色頁岩	66区表採	
9	完	① 7.2 ② 4.3 ③ 1.6 ④ 56.5	黒色頁岩	66区 S-14	
10	完	① 7.0 ② 4.8 ③ 1.8 ④ 54.7	黒色頁岩	66区表採	
11	完	① 7.2 ② 4.5 ③ 1.8 ④ 58.3	黒色頁岩	66区 N-18	
12	完	① 8.3 ② 4.1 ③ 1.8 ④ 60.9	黒色頁岩	66区表採	
13	完	① 6.8 ② 4.6 ③ 1.4 ④ 46.0	黒色頁岩	76区 P-1	
14	一部欠	①(5.9) ②(3.4) ③(1.3) ④ 28.4	黒色頁岩	66区 O-16	
15	完	① 6.6 ② 3.8 ③ 1.6 ④ 45.7	黒色頁岩	66区 G-17	
16	1/2	①(6.3) ②(4.5) ③(2.2) ④ 64.8	黒色頁岩	75区 H-3	
17	完	① 6.7 ② 4.6 ③ 1.7 ④ 49.7	黒色頁岩	66区 I-13	

## スクレイパー (第229~232図 P L 110)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 11.4 ② 5.5 ③ 2.0 ④ 89.7	細粒輝石安山岩	66区表採	
2	完	① 10.0 ② 5.9 ③ 2.0 ④ 94.9	黒色頁岩	66区表採	
3	一部欠	①(8.8) ②(4.5) ③(0.9) ④ 34.9	黒色頁岩	66区表採	
4	完	① 10.0 ② 3.8 ③ 1.4 ④ 57.0	黒色頁岩	66区表採	
5	完	① 8.5 ② 6.0 ③ 1.5 ④ 74.1	粗粒輝石安山岩	75区 F-3	
6	完	① 7.8 ② 6.7 ③ 1.4 ④ 66.4	細粒輝石安山岩	66区表採	
7	完	① 7.9 ② 7.2 ③ 1.5 ④ 53.9	黒色頁岩	66区 M-13	
8	完	① 6.9 ② 5.7 ③ 1.6 ④ 56.6	黒色頁岩	76区 B-1	
9	完	① 6.3 ② 4.5 ③ 1.3 ④ 35.9	黒色頁岩	76区 A-1	
10	完	① 6.8 ② 4.6 ③ 1.2 ④ 39.0	黒色頁岩	66区表採	
11	完	① 6.8 ② 4.9 ③ 1.7 ④ 51.9	黒色頁岩	66区 N-13	
12	完	① 7.4 ② 5.0 ③ 1.4 ④ 50.7	黒色頁岩	76区 P-1	
13	完	① 6.8 ② 5.8 ③ 1.2 ④ 42.4	黒色頁岩	66区 A-17	
14	完	① 5.8 ② 4.5 ③ 1.5 ④ 36.7	黒色頁岩	76区 B-1	
15	ほぼ完	① 5.5 ② 4.2 ③ 1.0 ④ 26.3	黒色頁岩	表採	
16	完	① 7.8 ② 3.6 ③ 1.1 ④ 26.2	黒色頁岩	66区 K-19	
17	完	① 5.5 ② 3.9 ③ 1.0 ④ 25.1	黒色頁岩	66区 S-15	
18	完	① 5.8 ② 4.4 ③ 1.4 ④ 34.9	黒色頁岩	66区 I-17	
19	完	① 6.5 ② 3.6 ③ 1.4 ④ 29.4	黒色頁岩	66区 J-19	
20	完	① 5.9 ② 3.7 ③ 0.7 ④ 16.2	黒色頁岩	66区 S-19	
21	完	① 5.5 ② 4.3 ③ 1.2 ④ 21.1	黒色頁岩	66区 M-13	
22	一部欠	① 4.1 ② 4.0 ③ 1.4 ④ 20.1	黒色頁岩	66区表採	
23	1/2	①(4.2) ②(3.3) ③(0.5) ④ 7.7	黒色頁岩	66区 M-14	
24	完	① 5.7 ② 8.8 ③ 1.8 ④ 86.3	黒色頁岩	66区 M-20	
25	完	① 5.2 ② 9.5 ③ 1.5 ④ 48.7	黒色頁岩	76区 L-1	
26	完	① 6.0 ② 7.3 ③ 1.3 ④ 79.7	細粒輝石安山岩	76区 D-2	

第4章 検出された遺構と遺物

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石 材	出土位置	備 考
27	完	① 7.7 ② 6.6 ③ 2.4 ④ 79.1	黒色頁岩	66区M-18	
28	完	① 4.6 ② 8.6 ③ 1.4 ④ 58.6	黒色頁岩	76区B-1	
29	完	① 5.9 ② 9.4 ③ 1.9 ④ 49.7	黒色頁岩	76区A-1	
30	完	① 5.0 ② 7.7 ③ 1.1 ④ 48.9	黒色頁岩	66区G-17	
31	完	① 6.1 ② 8.3 ③ 1.3 ④ 52.9	頁岩	76区I-2	
32	完	① 4.5 ② 6.6 ③ 1.0 ④ 23.8	黒色頁岩	66区S-20	
33	完	① 5.1 ② 6.1 ③ 1.1 ④ 30.4	黒色頁岩	76区M-1	
34	完	① 4.0 ② 5.9 ③ 0.9 ④ 22.9	灰色安山岩	66区表採	
35	完	① 3.9 ② 7.05 ③ 1.0 ④ 24.8	黒色頁岩	66区Q-15	
36	完	① 4.9 ② 7.3 ③ 1.6 ④ 36.3	黒色頁岩	66区表採	
37	完	① 4.5 ② 3.8 ③ 0.9 ④ 6.5	硬質頁岩	66区A-20	
38	1/3	① (2.3) ② (2.3) ③ (0.6) ④ 2.8	黒耀石	66区S-17	
39	完	① 2.7 ② 2.2 ③ 0.7 ④ 4.1	黒耀石	76区O-2	
40	完	① 2.2 ② 1.9 ③ 0.8 ④ 2.1	黒耀石	66区L-19	

石匙 (第233、234図 P L 110)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石 材	出土位置	備 考
1	完	① 2.8 ② 5.2 ③ 1.2 ④ 14.2	黒色安山岩	65区T-19	
2	完	① 3.6 ② 5.3 ③ 0.7 ④ 12.9	黒色頁岩	66区A-20	
3	完	① 3.1 ② 5.2 ③ 0.7 ④ 9.7	黒色頁岩	66区表採	
4	完	① 3.5 ② 6.4 ③ 0.9 ④ 13.2	黒色頁岩	76区表採	
5	一部欠	① (3.5) ② (4.9) ③ (0.7) ④ 9.5	赤碧玉	66区L-15	
6	一部欠	① (2.3) ② (4.4) ③ (1.2) ④ 11.9	黒色頁岩	76区M-1	
7	完	① 2.2 ② 1.0 ③ 0.4 ④ 0.7	黒耀石	65区表採	
8	完	① 3.9 ② 4.4 ③ 0.6 ④ 8.2	黒色頁岩	66区表採	
9	完	① 4.8 ② 6.7 ③ 0.6 ④ 15.3	黒色頁岩	76区N-1	
10	未製品	① 5.5 ② 5.4 ③ 1.0 ④ 15.2	黒色頁岩	66区M-13	
11	未製品	① 5.5 ② 6.2 ③ 1.8 ④ 31.5	黒色頁岩	66区G-17	
12	完	① 5.1 ② 6.3 ③ 0.9 ④ 21.4	黒色頁岩	66区A-20	
13	一部欠	① (7.7) ② (4.2) ③ (1.7) ④ 35.0	黒色頁岩	75区G-3	
14	完	① 5.7 ② 3.0 ③ 1.0 ④ 16.5	黒色頁岩	66区L-17	
15	完	① 6.0 ② 3.0 ③ 0.7 ④ 10.3	黒色頁岩	66区K-13	
16	完	① 7.3 ② 4.5 ③ 0.8 ④ 22.7	黒色頁岩	66区M-18	
17	完	① 6.6 ② 8.4 ③ 1.5 ④ 45.0	黒色頁岩	76区A-1	

石鏃 (第235~238図 P L 111、112)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石 材	出土位置	備 考
1	基部欠	① (1.2) ② (0.9) ③ (0.3) ④ 0.4	黒耀石	66区G-16	
2	基部欠	① (1.7) ② (1.2) ③ (0.3) ④ 0.4	黒耀石	66区表採	
3	基部欠	① (1.8) ② (1.5) ③ (0.3) ④ 0.4	黒耀石	66区H-14	
4	先端部欠	① (1.4) ② (1.5) ③ (0.25) ④ 0.6	黒耀石	66区I-17	
5	1/2	① (2.1) ② (1.1) ③ (0.5) ④ 0.8	黒耀石	66区J-18	
6	基部欠	① (1.85) ② (1.4) ③ (0.45) ④ 0.7	黒耀石	66区K-18	
7	基部欠	① (2.0) ② (1.3) ③ (0.4) ④ 0.8	黒耀石	66区I-20	
8	基部欠	① (2.3) ② (1.5) ③ (0.5) ④ 1.2	チャート	66区N-13	
9	基部欠	① (1.5) ② (2.1) ③ (0.4) ④ 0.9	黒色頁岩	66区T-17	
10	先端部欠	① (2.7) ② (2.7) ③ (0.5) ④ 1.3	黒色頁岩	66区表採	
11	基部欠	① (1.8) ② (1.4) ③ (0.55) ④ 1.4	黒色安山岩	66区O-16	
12	基部、先端部欠	① (1.1) ② (1.1) ③ (0.45) ④ 1.3	黒耀石	66区表採	
13	基部欠	① (1.8) ② (1.95) ③ (0.4) ④ 1.6	黒色安山岩	66区表採	
14	完か	① 1.7 ② 1.2 ③ 0.4 ④ 0.9	黒耀石	66区T-11	
15	先端部欠	① (2.0) ② (1.7) ③ (0.5) ④ 1.1	黒耀石	66区G-15	
16	未製品	① 2.0 ② 1.4 ③ 0.5 ④ 1.2	黒耀石	66区H-20	
17	未製品	① 2.0 ② 1.5 ③ 0.4 ④ 1.2	黒耀石	66区表採	
18	一部欠	① (2.5) ② (1.4) ③ (0.8) ④ 2.4	黒耀石	66区M-15	
19	未製品	① 2.1 ② 1.9 ③ 0.4 ④ 1.7	黒耀石	66区L-17	
20	基部、先端部欠	① (2.05) ② (2.2) ③ (0.75) ④ 3.3	チャート	66区O-15	
21	先端部欠	① (2.2) ② (2.3) ③ (0.4) ④ 1.3	黒色頁岩	66区L-17	
22	未製品	① 2.5 ② 1.6 ③ 0.4 ④ 1.8	粗粒輝石安山岩	66区表採	
23	ほぼ完	① 2.6 ② 1.5 ③ 0.6 ④ 1.5	チャート	66区B-20	

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
24	未製品	① 2.4 ② 1.65 ③ 0.65 ④ 1.35	チャート	66区G-14	
25	ほぼ完	① 2.4 ② 1.7 ③ 0.5 ④ 1.5	黒色頁岩	66区K-20	
26	完	① 2.9 ② 1.8 ③ 0.5 ④ 1.6	黒耀石	66区G-17	
27	未製品	① 2.9 ② 1.85 ③ 0.95 ④ 4.5	黒色頁岩	66区G-17	
28	先端部欠	① (2.55)② (2.15)③ (0.85)④ 4.2	チャート	66区H-16	
29	先端部欠	① (3.15)② (2.35)③ (0.65)④ 3.8	黒耀石	66区M-14	
30	完	① 3.55 ② 2.1 ③ 0.8 ④ 4.3	黒耀石	66区O-13	
31	先端部欠	① (3.05)② (2.3) ③ (0.8) ④ 5.8	珪質頁岩	66区表採	
32	完	① 2.0 ② 1.6 ③ 0.3 ④ 0.4	チャート	65区L-20	
33	基部欠	① (2.1) ② (1.4) ③ (0.4) ④ 0.7	黒耀石	65区N-19	
34	基部欠	① (2.0) ② (1.2) ③ (0.3) ④ 0.5	チャート	65区S-18	
35	基部、先端部欠	① (1.5) ② (1.2) ③ (0.8) ④ 1.1	黒耀石	75区表採	
36	基部欠	① (1.5) ② (1.3) ③ (0.3) ④ 0.4	黒耀石	75区表採	
37	先端部欠	① (1.3) ② (1.1) ③ (0.3) ④ 0.3	黒耀石	75区G-3	
38	基部、先端部欠	① (2.0) ② (0.3) ③ (0.4) ④ 0.6	黒耀石	75区H-3	
39	ほぼ完	① 1.6 ② 1.1 ③ 0.3 ④ 0.6	黒耀石	76区B-1	
40	基部欠	① (1.65)② (1.1) ③ (0.25)④ 0.3	黒耀石	76区C-2	
41	先端部、基部欠	① (1.5) ② (1.6) ③ (0.5) ④ 1.3	黒耀石	76区B-1	
42	完	① 1.9 ② 1.9 ③ 0.45 ④ 1.1	黒耀石	76区L-1	
43	基部欠	① (2.5) ② (1.9) ③ (0.45)④ 1.2	黒耀石	75区F-3	
44	先端部欠	① 2.3 ② 2.0 ③ 0.4 ④ 2.1	チャート	67区西谷	
45	先端部欠	① (2.4) ② (1.6) ③ (0.8) ④ 2.6	黒耀石	75区Q-1	
46	完	① 2.6 ② 1.6 ③ 0.5 ④ 1.3	チャート	76区O-1	
47	基部欠	① (2.5) ② (1.8) ③ (0.5) ④ 1.1	チャート	75区表採	
48	完	① 1.9 ② 1.5 ③ 0.4 ④ 0.7	チャート	76区N-1	
49	基部、先端部欠	① (2.6) ② (1.6) ③ (0.4) ④ 1.0	黒耀石	75区S-2	

## ピエスエスキュー (第239図 P L 112)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 3.3 ② 3.1 ③ 1.1 ④ 11.6	チャート	65区S-18	

## 石核 (第240図 P L 112)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1		① 5.0 ② 1.8 ③ 1.3 ④ 10.8	黒耀石	65区R-19	
2		① 1.8 ② 2.35 ③ 1.4 ④ 6.0	黒耀石	76区D-2	
3		① 6.4 ② 3.8 ③ 1.85 ④ 55.6	黒耀石	76区H-1	

## ドリル (第241～243図 P L 113)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 2.2 ② 1.0 ③ 0.8 ④ 1.2	黒耀石	66区S-20	
2	1/2	① (2.3) ② (1.25)③ (0.8) ④ 2.0	黒耀石	76区L-1	
3	一部欠	① (1.1) ② (2.3) ③ (0.5) ④ 0.7	黒耀石	66区K-13	
4	一部欠	① (2.0) ② (2.1) ③ (0.4) ④ 1.2	チャート	表採	
5	一部欠	① (2.6) ② (1.5) ③ (0.6) ④ 2.5	黒耀石	75区I-2	
6	一部欠	① (2.85)② (1.25)③ (0.3) ④ 1.5	黒色頁岩	66区G-17	
7	完	① 3.1 ② 1.4 ③ 0.4 ④ 1.8	黒色頁岩	66区K-13	
8	一部欠	① (2.6) ② (2.0) ③ (0.4) ④ 2.3	黒色頁岩	75区G-2	
9	一部欠	① (2.0) ② (3.7) ③ (0.8) ④ 5.6	チャート	66区L-17	
10	ほぼ完	① 4.35 ② 2.6 ③ 0.65 ④ 5.1	黒色頁岩	65区Q-20	
11	一部欠	① (2.95)② (2.15)③ (0.7) ④ 3.2	黒色頁岩	表採	
12	未製品	① 4.95 ② 2.3 ③ 0.8 ④ 6.0	黒色頁岩	66区H-15	
13	一部欠	① (5.7) ② (2.2) ③ (0.7) ④ 9.1	黒色頁岩	76区L-1	
14	完	① 4.5 ② 2.7 ③ 0.7 ④ 7.9	黒色頁岩	65区T-20	

## 尖頭器 (第244図 P L 133)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	1/2	① (4.1) ② (1.8) ③ (0.5) ④ 5.5	黒色頁岩	76区O-1	
2	完か	① 5.2 ② 2.5 ③ 0.9 ④ 11.8	黒色頁岩	75区T-1	

第4章 検出された遺構と遺物

加工痕を有する剥片 (第245図 P L 113)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1		① 2.95 ② 1.7 ③ 0.6 ④ 2.2	黒耀石	75区H-3	
2		① 3.3 ② 4.2 ③ 1.1 ④ 7.7	硬質頁岩	76区E-2	
3		① 5.8 ② 2.3 ③ 1.4 ④ 18.7	黒色頁岩	76区O-1	

敲石・磨石 (第246、247図 P L 114)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 8.15 ② 2.45 ③ 1.4 ④ 48.2	流紋岩	66区K-18	
2	完	① 12.0 ② 7.2 ③ 5.95 ④ 717.1	粗粒輝石安山岩	65区T-19	
3	完	① 14.3 ② 5.05 ③ 3.3 ④ 436.5	粗粒輝石安山岩	66区O-19	
4	完	① 12.8 ② 8.4 ③ 2.6 ④ 452	粗粒輝石安山岩	66区表採	
5	完	① 13.5 ② 4.9 ③ 3.6 ④ 293.5	黒色頁岩	75区H-2	
6	完	① 12.9 ② 5.1 ③ 3.6 ④ 459.0	粗粒輝石安山岩	75区G-3	
7	完	① 12.6 ② 4.8 ③ 4.4 ④ 449.8	粗粒輝石安山岩	66区表採	
8	完	① 10.6 ② 3.35 ③ 2.3 ④ 99.0	珪質準片岩	75区Q-1	
9	完	① 14.5 ② 5.25 ③ 3.5 ④ 433.7	粗粒輝石安山岩	76区P-1	
11	完	① 16.0 ② 6.7 ③ 3.1 ④ 510.2	変質安山岩	76区H-1	
10	完	① 9.9 ② 9.6 ③ 3.4 ④ 497.6	粗粒輝石安山岩	76区O-1	
12	完	① 13.8 ② 5.2 ③ 5.0 ④ 558.1	粗粒輝石安山岩	66区表採	
13	完	① 12.5 ② 7.7 ③ 5.6 ④ 678.6	粗粒輝石安山岩	75区H-2	
14	完	① 12.5 ② 6.2 ③ 4.3 ④ 488.5	粗粒輝石安山岩	75区I-2	
15	完	① 19.0 ② 8.0 ③ 5.15 ④ 1230	粗粒輝石安山岩	表採	
16	完	① 17.5 ② 6.7 ③ 6.7 ④ 1265	粗粒輝石安山岩	66区J-15	

凹石 (第248、249図 P L 114)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 11.1 ② 10.1 ③ 5.2 ④ 781.2	粗粒輝石安山岩	75区G-3	
2	完	① 9.7 ② 9.4 ③ 5.8 ④ 698.5	粗粒輝石安山岩	75区Q-2	
3	完	① 10.8 ② 10.5 ③ 5.9 ④ 1034	粗粒輝石安山岩	76区G-1	
4	完	① 11.2 ② 7.25 ③ 4.6 ④ 597.8	粗粒輝石安山岩	66区Q-17	
5	完	① 12.3 ② 7.5 ③ 4.5 ④ 597.2	粗粒輝石安山岩	66区表採	
6	完	① 12.5 ② 7.3 ③ 5.0 ④ 529.6	粗粒輝石安山岩	66区表採	
7	完	① 12.0 ② 7.6 ③ 4.2 ④ 608.1	粗粒輝石安山岩	76区F-1	
8	完	① 10.8 ② 7.2 ③ 4.0 ④ 397.0	粗粒輝石安山岩	75区Q-2	
9	完	① 12.1 ② 6.5 ③ 4.35 ④ 405.5	粗粒輝石安山岩	76区E-2	
10	完	① 10.8 ② 7.3 ③ 4.2 ④ 505.3	粗粒輝石安山岩	66区M-19	
11	完	① 10.0 ② 6.8 ③ 4.3 ④ 362.4	粗粒輝石安山岩	66区表採	
12	完	① 8.6 ② 7.7 ③ 4.2 ④ 373.2	粗粒輝石安山岩	66区L-17	
13	完	① 9.5 ② 8.3 ③ 5.0 ④ 471.0	粗粒輝石安山岩	66区M-13	
14	完	① 8.7 ② 9.1 ③ 5.0 ④ 514.6	粗粒輝石安山岩	66区B-17	
15	完	① 9.95 ② 7.7 ③ 5.45 ④ 598.5	粗粒輝石安山岩	66区P-20	
16	一部欠	①(11.7) ②(9.2) ③(4.7) ④ 416.7	粗粒輝石安山岩	65区S-18	
17	完	① 9.3 ② 6.1 ③ 5.3 ④ 187.2	二ツ岳軽石	65区R-20	一部被熱
18	完	① 3.8 ② 4.6 ③ 2.6 ④ 21.4	軽石	66区表採	
19	完	① 4.4 ② 4.8 ③ 2.8 ④ 82.8	粗粒輝石安山岩	66区表採	

磨製石斧 (第250図 P L 115)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	1/2	① (6.5) ② (6.4) ③ (2.3) ④ 160.0	変玄武岩	66区A-16	
2	1/2	① (5.7) ② (4.0) ③ (0.7) ④ 28.2	珪質頁岩	66区I-13	
3	1/2	① (6.2) ② (3.5) ③ (1.7) ④ 65.2	変玄武岩	76区P-1	
4	1/2	① (8.3) ② (4.6) ③ (2.6) ④ 188.1	変玄武岩	66区表採	
5	1/3	① (4.9) ② (5.0) ③ (3.2) ④ 119.9	変輝緑岩	66区L-19	
6	基部片	① (4.0) ② (2.9) ③ (1.6) ④ 26.1	変玄武岩	66区表採	
7	基部片	① (4.2) ② (4.7) ③ (2.0) ④ 58.3	変輝緑岩	76区D-2	
8	基部片	① (4.2) ② (4.1) ③ (1.8) ④ 39.5	変質蛇紋岩	66区J-14	
9	一部欠	① (3.3) ② (3.4) ③ (0.7) ④ 12.9	蛇紋岩	65区表採	

## 石製円盤 (第251図 P L115)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 4.9 ② 5.2 ③ 0.9 ④ 30.2	変玄武岩	75区F-3	

## 石棒状石器 (第252図 P L115)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 11.0 ② 4.0 ③ 1.7 ④ 92.5	雲母石英片岩	75区P-3	
2	完	① 12.0 ② 4.5 ③ 1.3 ④ 128.5	緑色片岩	66区P-19	
3	完	① 11.3 ② 5.4 ③ 1.6 ④ 137.9	雲母石英片岩	66区表採	
4	完	① 8.7 ② 2.5 ③ 1.45 ④ 50.2	緑色片岩	76区O-1	

## スタンプ形石器 (第253図 P L115)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 12.6 ② 9.5 ③ 5.3 ④ 682	粗粒輝石安山岩	75区Q-1	

## 石錘・浮子 (第254図 P L115)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 6.25 ② 3.5 ③ 1.15 ④ 38.3	砂岩	66区A-20	石錘
2	完	① 3.9 ② 2.75 ③ 0.95 ④ 19.1	珪質準片岩	66区N-18	〃
3	完	① 5.6 ② 3.6 ③ 1.1 ④ 43.2	黒色片岩	75区G-2	〃
4	未製品	① 5.3 ② 4.7 ③ 1.9 ④ 49.6	硬質泥岩	65区T-18	〃
5	完	① 9.4 ② 5.4 ③ 1.8 ④ 47.5	軽石	76区F-1	浮子

## 多孔石 (第255図 P L115)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 20.7 ② 14.2 ③ 11.3 ④ 4250	粗粒輝石安山岩	67区A-16	
2	完	① 26.3 ② 22.7 ③ 7.5 ④ 7800	粗粒輝石安山岩	66区P-20	
3	完	① 40.0 ② 23.5 ③ 13.0 ④ 18400	溶結凝灰岩	66区T-15	

## 砥石 (第256図 P L116)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	一部欠	① (9.2) ② (8.7) ③ (2.0) ④ 155.9	牛伏砂岩	66区M-13	
2	完	① 14.0 ② 4.8 ③ 1.6 ④ 130.1	砂岩	65区T-19	
3	完	① 12.4 ② 5.05 ③ 0.7 ④ 93.2	砂岩	65区T-19	

## 石皿 (第257、258図 P L116)

番号	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
1	完	① 25.4 ② 17.1 ③ 6.7 ④ 3500	粗粒輝石安山岩	66区T-14	
2	完	① 5.7 ② 3.35 ③ 1.7 ④ 32.4	粗粒輝石安山岩	66区N-11	
3	1/2	①(18.8) ②(17.8) ③(4.7) ④ 2422	粗粒輝石安山岩	66区J-18	
4	1/2	①(31.9) ②(18.7) ③(5.8) ④ 7000	粗粒輝石安山岩	76区O-1	
5	1/3	①(14.1) ②(11.7) ③(2.8) ④ 630	緑色片岩	75区S-2	
6	1/2	①(22.5) ②(27.0) ③(8.5) ④ 6360	粗粒輝石安山岩	66区T-15	
7	完	① 35.0 ② 20.4 ③ 9.0 ④ 8000	粗粒輝石安山岩	66区表採	

### 第3節 弥生時代

#### 1 遺構遺物の概要

**遺構** 本遺跡で調査された弥生時代の遺構の内訳は、住居5軒、土坑7基である。住居5軒の帰属時期はすべて後期の樽式土器期と考えられる。樽式土器は若狭、飯島、平野らの研究<sup>\*1</sup>によって概ね3期に細分が行われているが、本遺跡の住居は第Ⅲ期に属すると思われる。すなわち、弥生時代後期のうちでも終末期に近い時期といえよう。これは、後述するが、住居内の埋没土中にAs-Cの純層と思われる層が確認されている。現在までのところAs-Cの降下時期は3世紀末～4世紀初頭と考えられているため、本遺跡で調査された集落はほぼこれと同時期ということが出来る。北陸新幹線関連の遺跡では弥生時代の遺構及び遺物の検出例が少なく、集落としては本遺跡が唯一のものとなった。榛名山南麓地域においては平野部での調査例は報告されているが、台地部での調査例は数が少ないこともあり、そうした意味では貴重な例といえよう。

住居の形状を概観してみると、28号住居がやや不明な点はあるが、すべて隅丸方形の平面形状を呈するといえよう。当該期の住居は同様の形状を示す例が一般的であり、本遺跡もそれに該当するものである。28号、35号住居は後世の削平を受けているため、残存があまり良好でないが、他の3軒はいずれもしっかりした掘り込みを持っている。柱穴の構造も時期的には4本主柱穴の構造を示すものが一般的であるが、柱穴が検出できた43、46号住居では同様の構造を示すと思われる。これ以外の住居は柱穴が認められなかったが、これが無主柱の構造を示すものであるかは不明である。

住居の分布をみると、特に規則性は認められず、14号住居は台地頂部付近の平坦部に、28号、35号住居は台地頂部から東向きの斜面への地形変換点付近に占地している。43号、46号住居は東向きの緩やかな斜面上に占地している。

土坑は7基が弥生時代に帰属すると思われる。こ

れらは遺物からの判断であるが、この他にも遺物の出土はないが、埋没土から判断すると弥生時代に含まれると思われる土坑も4基ほど存在している。しかし、決定的な材料に欠けるため時期不明として分類している。59号土坑は遺物から判断すると、中期に属すると思われるが、本遺跡においては当該期の遺構はこの土坑が唯一のものである。これ以外の土坑はすべて樽式期のもので、住居と同時期に当たる。

今回報告した土坑はいずれも円形～楕円形の平面形状を呈し、断面形状は皿形が4基、浅箱形2基、箱形1基に分類できる。

土坑の分布についてもはっきりした傾向は見いだせないが、59号土坑が弥生時代の他の遺構とは離れて占地し、それ以外は当該期の住居と比較的近い位置に占地しているといえよう。

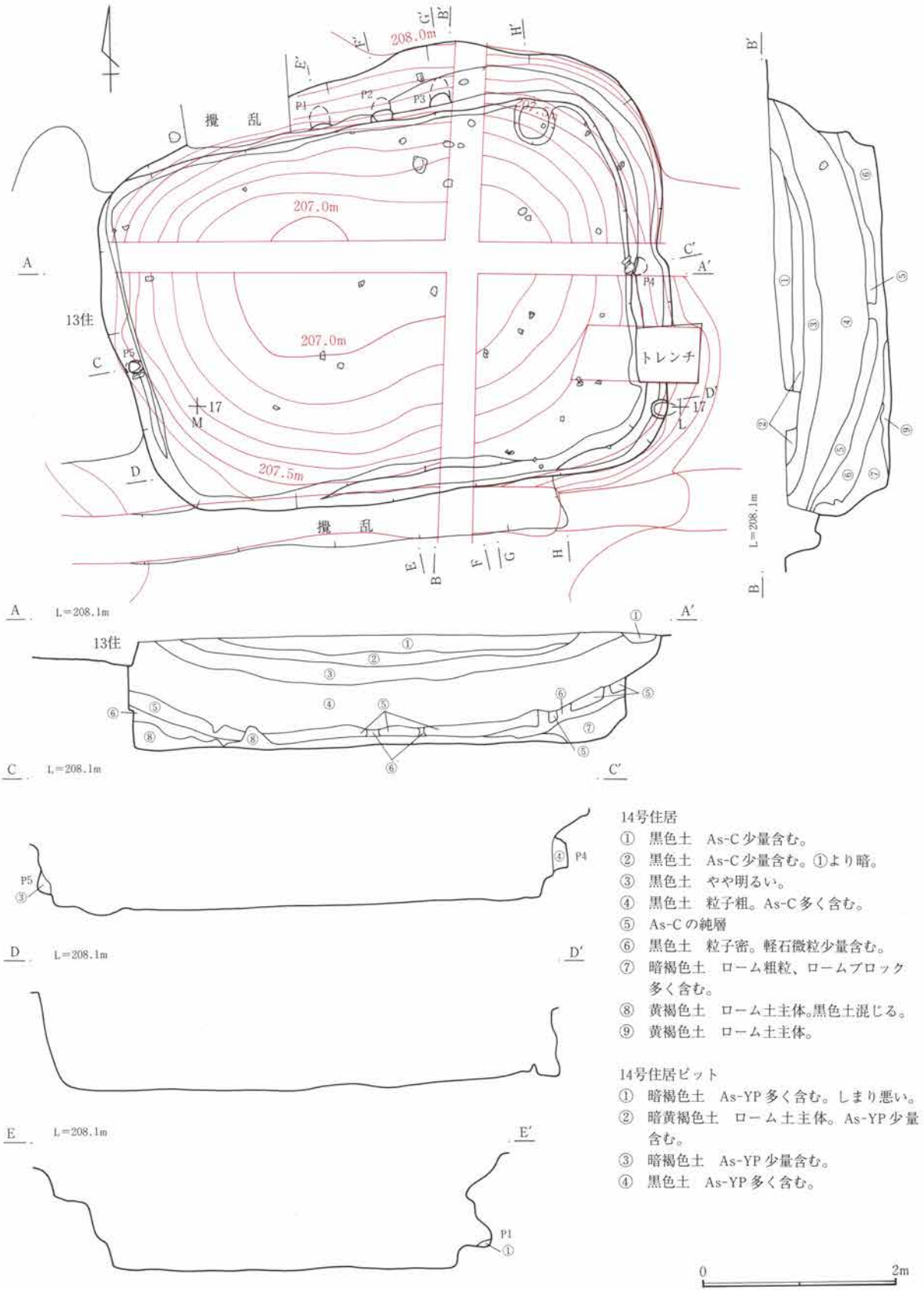
**遺物** 住居から出土した遺物は1,903点を数えるが、小片が多く、その多くは図示しえなかった。その中では43号住居からは比較的良好な資料が得られた。住居間に遺物からは時期差は見られないうえ、当該期の住居どうしに重複は見られないことから、すべての住居が同時期に併存していた可能性もあるが、As-Cの堆積が観察されている住居とそうでない住居とが存在しているため、すべてが同時期に存在していたと結論づけることはできないであろう。

土坑出土の遺物は59号土坑から出土した甕胴部片をのぞくとほとんどが樽式期のものである。120号、186号土坑はやや集中して遺物が出土しているが、それ以外の土坑は遺物の出土が少なかった。

遺構外出土の遺物も時期的には遺構と同様の傾向を示している。その中で、中期の岩櫃山式土器の甕約1/2個体が調査区中央付近北寄りの遺構外から出土している。周囲での遺構確認に努めたが確認にはいたらなかった。

\*1 飯島克巳・若狭徹「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9 1988  
平野進一「解説 弥生時代土器の編年」『群馬県史資料編2』1986等

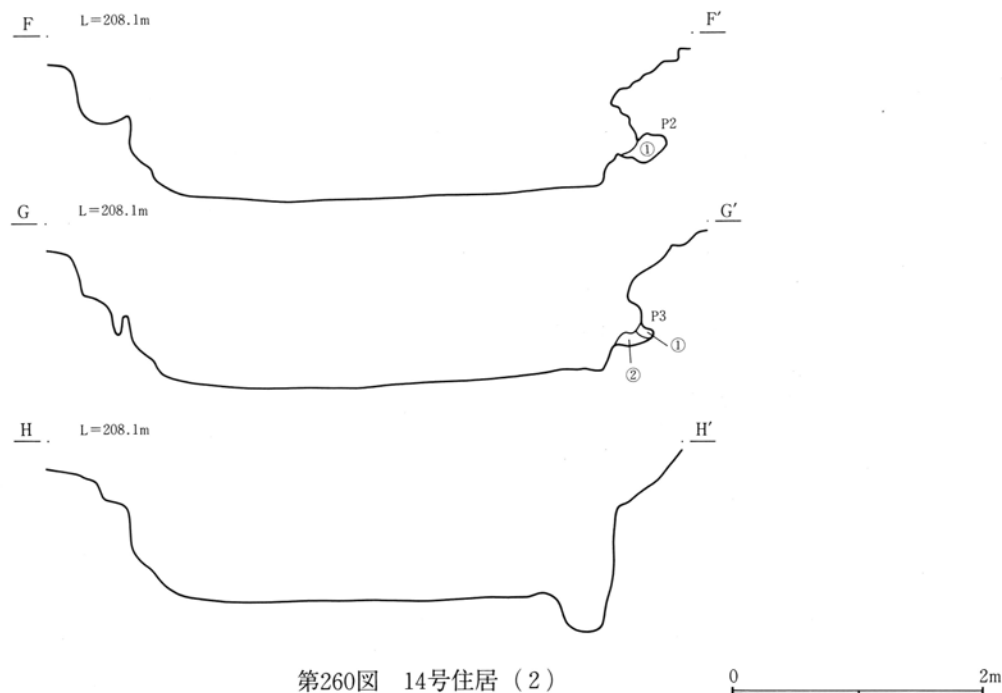
2 竪穴住居



第259図 14号住居 (1)



第4章 検出された遺構と遺物



第260図 14号住居 (2)

14号住居

位置 66区L-17グリッド他 方位 N-80°-E

重複 平安時代の13号住居に切られる。

写真 P L 117

形状 長軸5.24m、短軸3.96mの隅丸長方形を呈する。壁高 1.28mを測る。面積 17.15㎡

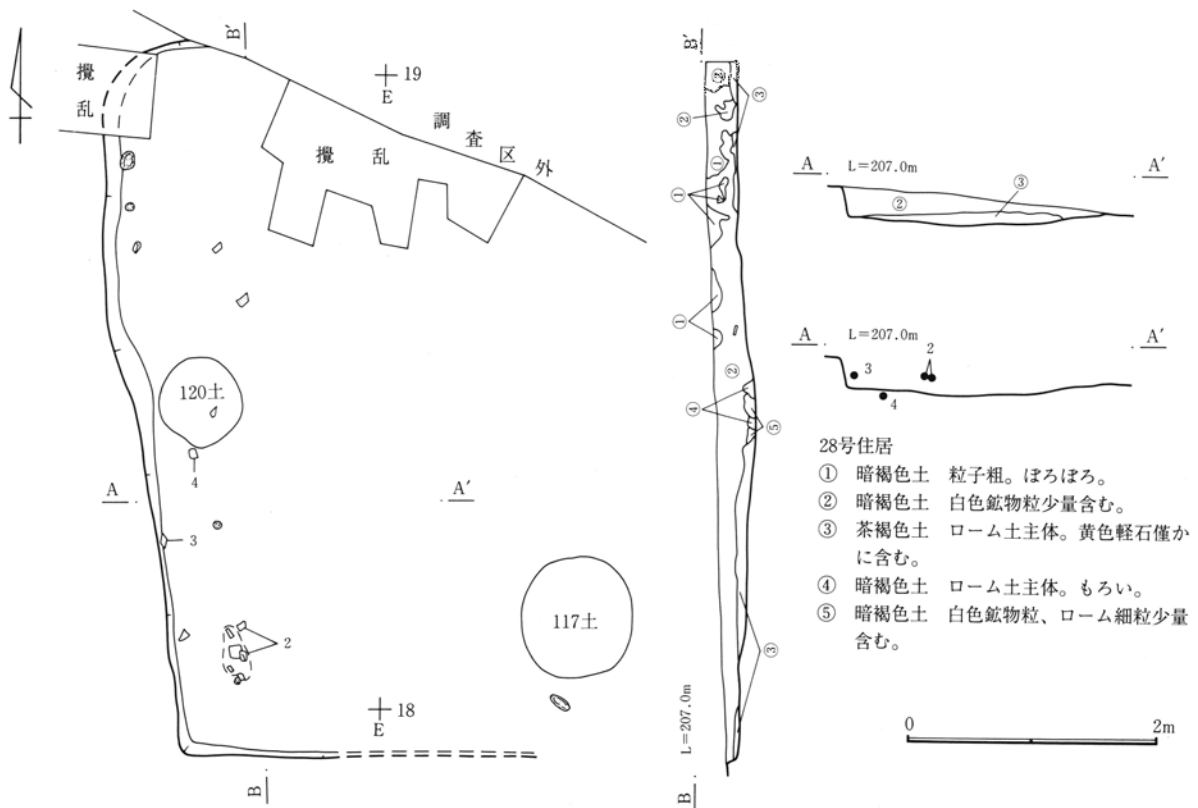
埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。埋没土層にAs-Cの純層と思われる層が見られる。このAs-C層は最大厚で15cmを測る。床面 貼り床は認められなかった。特に硬化した部分も認められなかった。

周溝 検出されなかった。柱穴 床面からは検出されなかった。北側の壁で3基、東西の壁でそれぞれ1基のピットが検出されている。向きから考えて主柱穴とは考えられないが補助的な柱穴の存在も推定される。炉 床面からは検出されなかった。

遺物 埋没土中から縄文土器片171点、弥生土器片5点、土師器片14点、石器類26点が出土している。いずれも小片で図化には至らなかった。

考察 本住居は時期決定の材料となるような遺物の出土がなく、遺物からは時期を決定することが困難である。しかし、埋没土の中にAs-Cの純層と思わ

れる層が検出されている。このAs-Cはレンズ状の堆積状況を呈し、その最下部は住居床面から8cm程の位置である。本住居は三ツ子沢中遺跡が立地する台地上の頂部付近に占地しているため、このAs-Cが流水の影響等を受けているとは考えられず、降下による一次堆積だと考えられよう。As-Cの降下時期は3世紀末から4世紀初頭と考えられているため、本住居はその降下時から時期的にさほど上ることはないであろう。また、後述する43号住居においても本住居と同様のAs-Cの堆積が確認されており、43号住居ではその下位から弥生時代後期の樽式土器が出土している。したがって、本住居の時期は4世紀前半、弥生時代後期の樽式期の竪穴住居といえよう。ただ、本住居は炉が検出されず、遺物の出土もほとんどないことなど、生活の痕跡が認められない。しっかりした平面プランと掘り込みを持っているが、その性格には検討の余地があるといえよう。



第261図 28号住居

28号住居

位置 66区E-18グリッド 方位 N-2°-W

重複 縄文時代と思われる29号住居を切る。また、縄文時代の117号土坑が住居推定プラン内で検出されている。さらに、同時期の120号土坑と重複するが新旧関係は不明である。立木および耕作による攪乱をうける。写真 PL118

形状 調査区外にかかることと削平により住居東側部分を欠くため、全体の形状は不明であるが、残存する1辺は5.63mを測り、隅丸方形を呈するものと思われる。

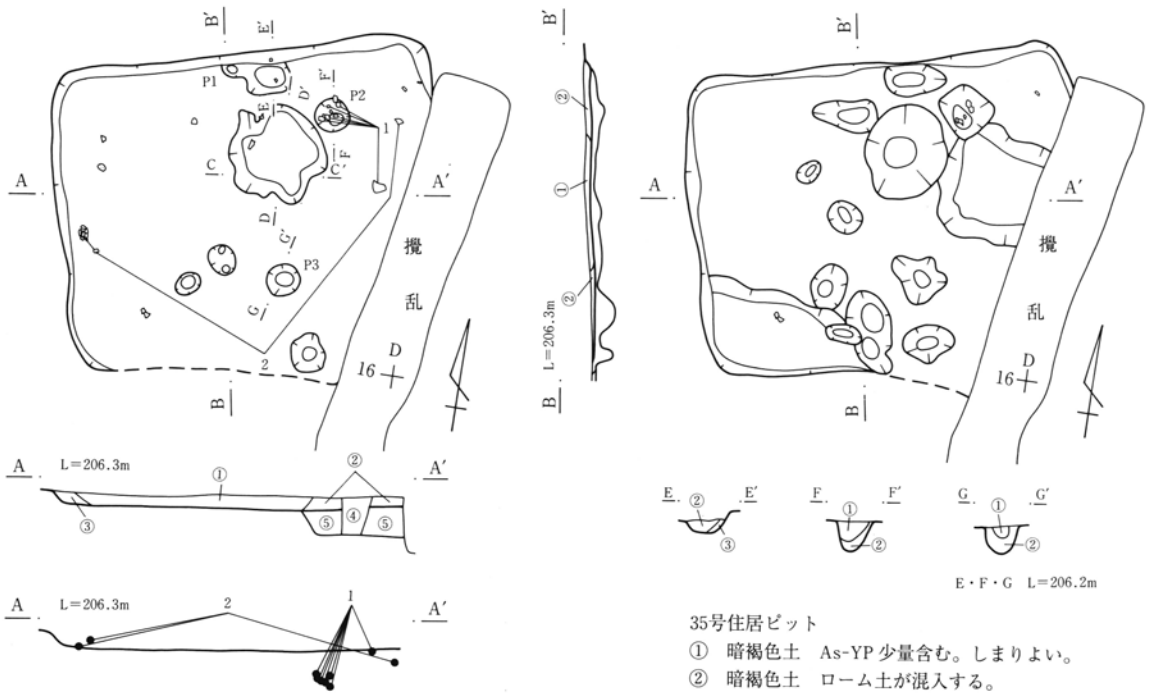
壁高 比較的残存の良好な西壁で24cmを測る。

面積 不明 埋没土 暗褐色土を主体とする。

床面 西側一部分のみの調査であったが特に硬化した部分は認められなかった。周溝、柱穴 ともに検出されなかった。炉 調査された範囲からは検出されなかった。遺物 弥生土器片435点、石器類14点が出土し、そのうち土器片427点と石器類13

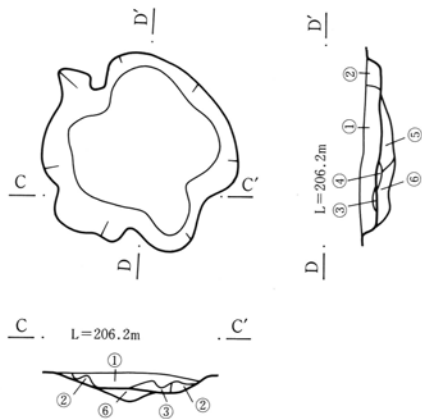
点を一括して取り上げた。その他に埋没土中から縄文土器片71点と土師器片40点が出土している。2は住居南西隅から集中して出土したが、2点が接合したのみであった。

考察 東向きの斜面に立地していたため後世の削平を受けており、住居西側の一部分を調査できたのみである。出土遺物の様相から後期の樽式期の竪穴住居であるといえよう。重複の項でもふれたが、同時期の120号土坑が本住居内から検出されている。両遺構間の土器接合を試みたが、接合には至らなかった。しかし、時期的に近い遺構であるので、120号土坑が本住居に伴うものである可能性は捨てきれない。



35号住居

- ① 黒色土 ローム細粒、黄色軽石僅かに含む。
- ② 黒色土 ローム細粒少量含む。黄色軽石僅かに含む。
- ③ 黒褐色土 ローム細粒少量含む。
- ④ 黒褐色土 ローム細粒少量含む。しまり弱。
- ⑤ 黒褐色土 ローム細粒多く含む。黄色軽石多く含む。



35号住居炉

- ① 暗褐色土 白色鈹微粒、ローム粗粒多く含む。
- ② 黄褐色土 As-YP 多く含む。
- ③ 黄褐色土 ローム土主体。
- ④ 暗褐色土 焼土粒僅かに含む。
- ⑤ 赤褐色土 焼土主体。
- ⑥ 暗黄褐色土 As-YP 僅かに含む。

35号住居ピット

- ① 暗褐色土 As-YP 少量含む。しまりよい。
- ② 暗褐色土 ローム土が混入する。
- ③ 暗褐色土 As-YP 多く含む。

35号住居

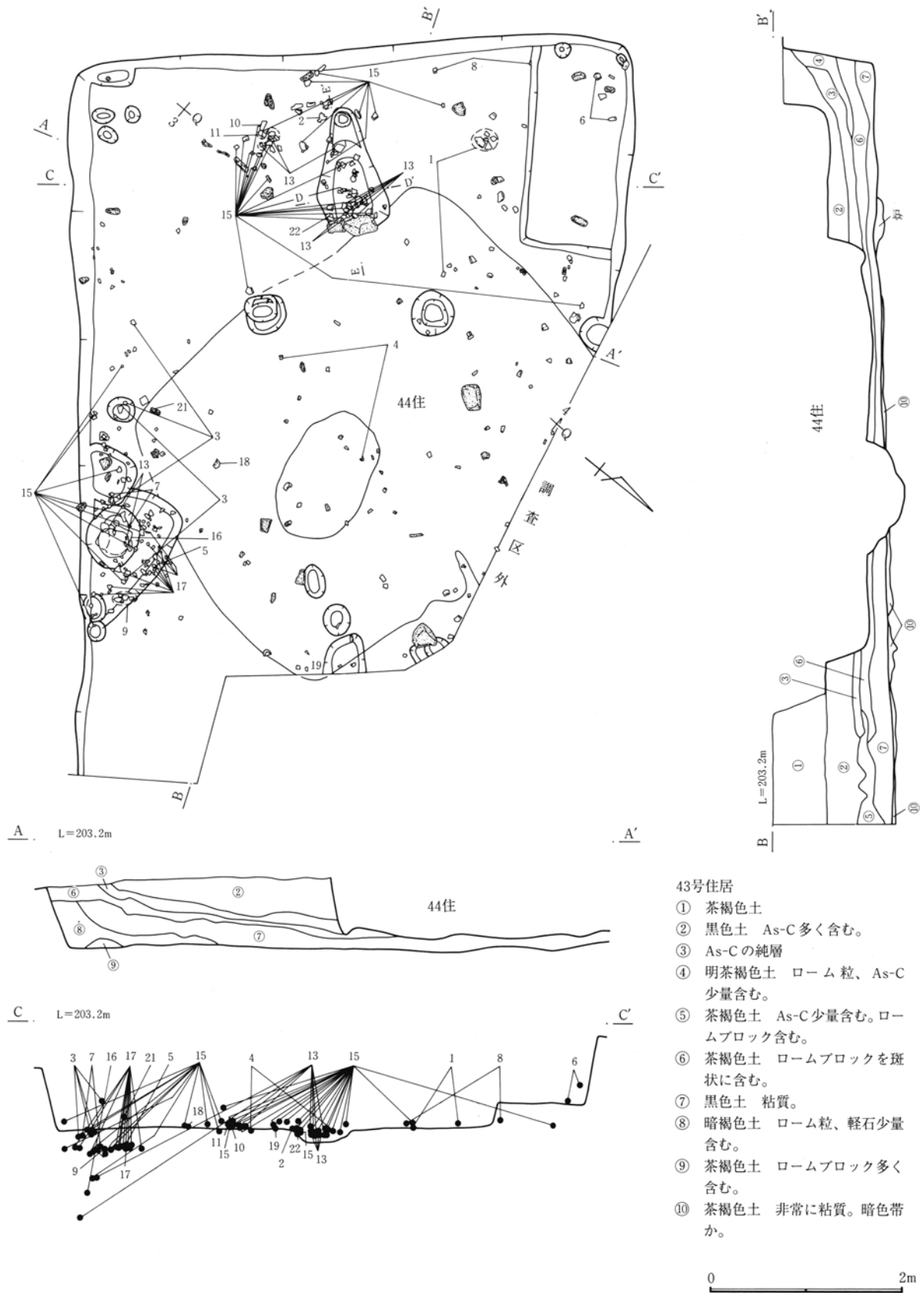
位置 66区D-16グリッド他 方位 N-13°-W  
 重複 現代の耕作溝によって攪乱を受ける。

写真 P L 118

形状 長軸3.02m、短軸2.4mを測る隅丸長方形を呈するものと思われる。壁高 残存の比較的良好的な西壁で6cmを測る。面積 不明  
 埋没土 黒色土を主体とする。床面 特に硬化した部分は認められなかった。東壁寄りに床下土坑状の落ち込みが掘り方調査時に検出された。炉 北壁寄り中央で検出された。不整形の掘り込みを持つ地床炉である。長径0.78m、短径0.75mを測り、床面からの掘り込みは12cmである。遺物 図示した遺物の他、弥生土器片45点が出土している。1はほとんどがP2の埋没土から出土している。2は住居内のやや離れた位置での接合関係を示す。考察 出土遺物の様相から樽式期の竪穴住居であるといえよう。



第262図 35号住居



第263図 43号住居 (1)

43号住居

位置 75区P-3グリッド他 方位 N-135°-W

重複 古墳時代（6世紀中葉）の44号住居が重複するが44号住居の床下土坑以外は本住居の床までは達していない。写真 PL119、120

形状 北西と北東の2辺が調査区外にかかるため、全体の形状は不明だが、短軸5.85mの隅丸長方形を呈するものと思われる。

壁高 南西側の壁で0.93mを測る。

面積 不明 埋没土 As-Cを含む黒色土及び粘性を持つ黒色土を主体とするが、前に述べた14号住居と同様に、埋没土中にAs-Cの純層と思われる層を含む。このAs-C層は最大厚12cmを測る。

床面 埋没土断面観察によって、住居東半部で暗色帯と似た茶褐色土で貼り床を施している状況が看取できた。周溝 検出されなかった。

柱穴 ピットは10本検出された。そのうち位置と形状から、P1とP10が主柱穴に相当すると思われる。本住居はその時期から4本柱穴構造をとると思われるので、残り2本は調査区外になると思われる。

炉 住居南西壁寄り中央で検出された。長軸1.33m、短軸0.69mを測る不整形を呈し、床面からの掘り込みは最大で15cmを測る。東側に礫を2石配している。埋没土は焼土層、および焼土を含む土層を主体とし、炭化物も検出されている。また、東側調査区外にかかる地点で、埋没土に焼土を含むP4が検出されている。規模は前に述べた炉よりもかなり小さいが、第2の炉として使用されていた可能性も推定されるピットである。

住居内土坑 P8は南壁に接して検出された。長径60cm、短径50cm、床面からの掘り込みは87cmを測る。付近からは70点余りの遺物が集中して出土し、ピット内からは16の甕底部が、上に礫が乗ったような状態で出土している。埋没土はしまりが悪く、人為的な埋没が推定される。床面の精査によって検出されているため、本住居に伴う遺構と考えられるが、性格は不明である。

ベッド状遺構 本住居の北西隅から検出された。規

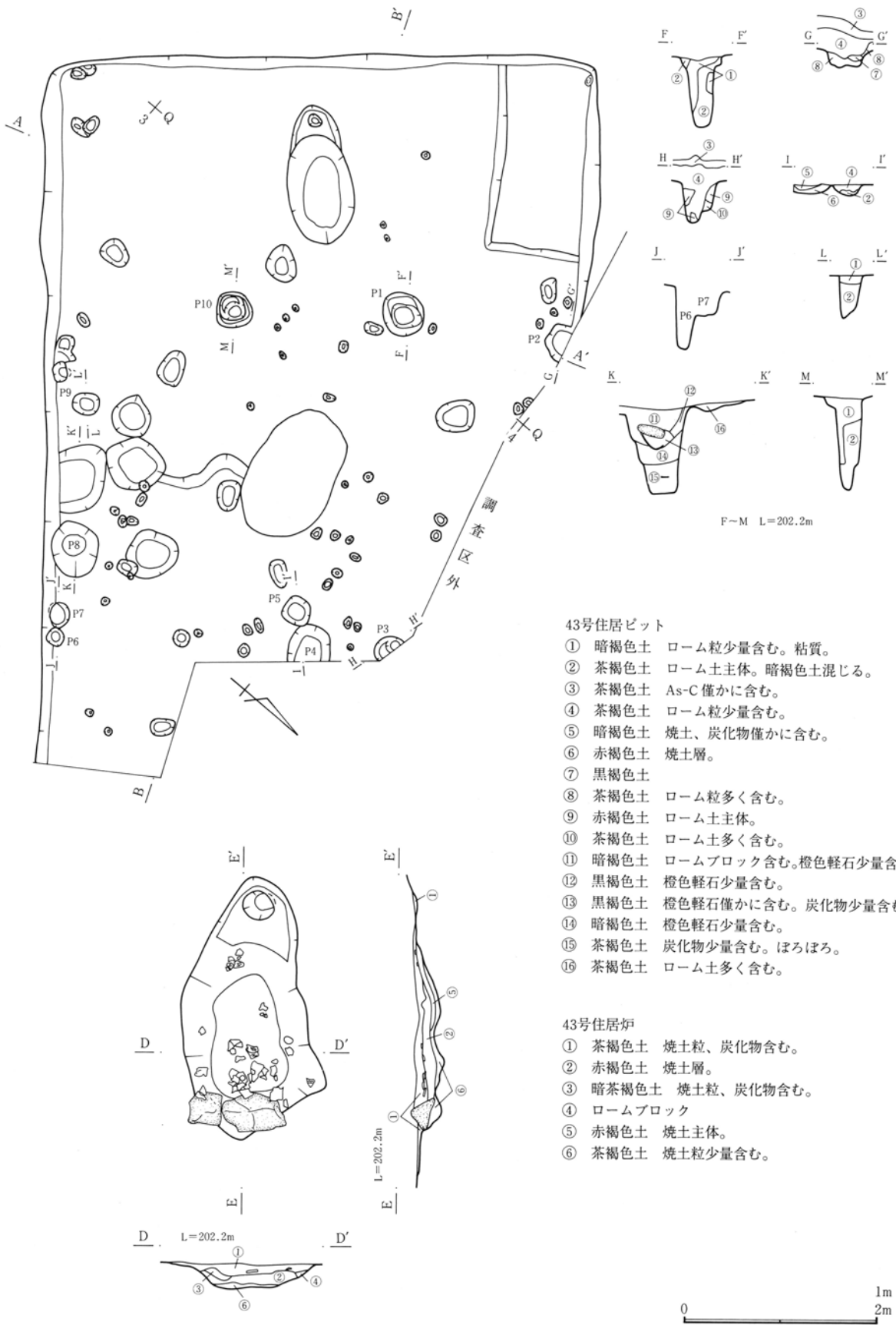
模は長軸2.02m、短軸0.88mで、高さは16~22cmを測る。住居構築の際に造り出されたもので、床面を掘りくぼめたのちに造りつけたものではない。このベッド状遺構はその名の通り、寝台として使われたとされるが、収納スペースあるいは祭壇としての用途も推定される遺構である。<sup>\*1</sup>

遺物 弥生土器片741点と石器類24点が出土し、土器444点は一括して取り上げた。その他に埋没土中から縄文土器片371点と土師器片493点が出土している。土師器片はその多くが重複する44号住居のものと思われる。本住居の遺物出土状態は炉の周辺とP8の周辺に集中する傾向が見られる。13と15は広範囲の接合関係を示しており、P8の底部付近においても接合が見られることから、住居廃絶後にこれらの遺物を廃棄した状況が推定される。22のガラス小玉は炉に流入したような状況で出土している。また、5は器台脚部片と考えられる遺物で、P8付近の掘りくぼめた範囲から出土している。

考察 本住居は14号住居と同様に埋没土中にAs-Cの純層が確認された。14号住居と比較するとその最下部がやや高く位置しているため、As-Cの降下時には14号住居よりも若干埋没が進行していたと思われるが、廃絶時期に関しては、その時点での上屋の存否の条件もあり、一概に14号住居よりも本住居が旧いとは結論できない。しかし、出土遺物の様相から本住居は後期の樽式期の竪穴住居であることは確実であろう。本住居に堆積したAs-Cは、多くを重複する44号住居によって失っている。残存している部分のAs-C上面では樽式土器および古式土師器は確認できなかった。

また、これは14号住居と共通するが、住居の周辺ではAs-Cの堆積は確認されていない。したがって周辺のAs-Cは後世の削平によって取り除かれていると考えられるので、本住居の掘り込みは調査時よりも深かったであろうことが推定される。

\*1 宮本長二郎「住居と倉庫」『弥生文化の研究』7 1986



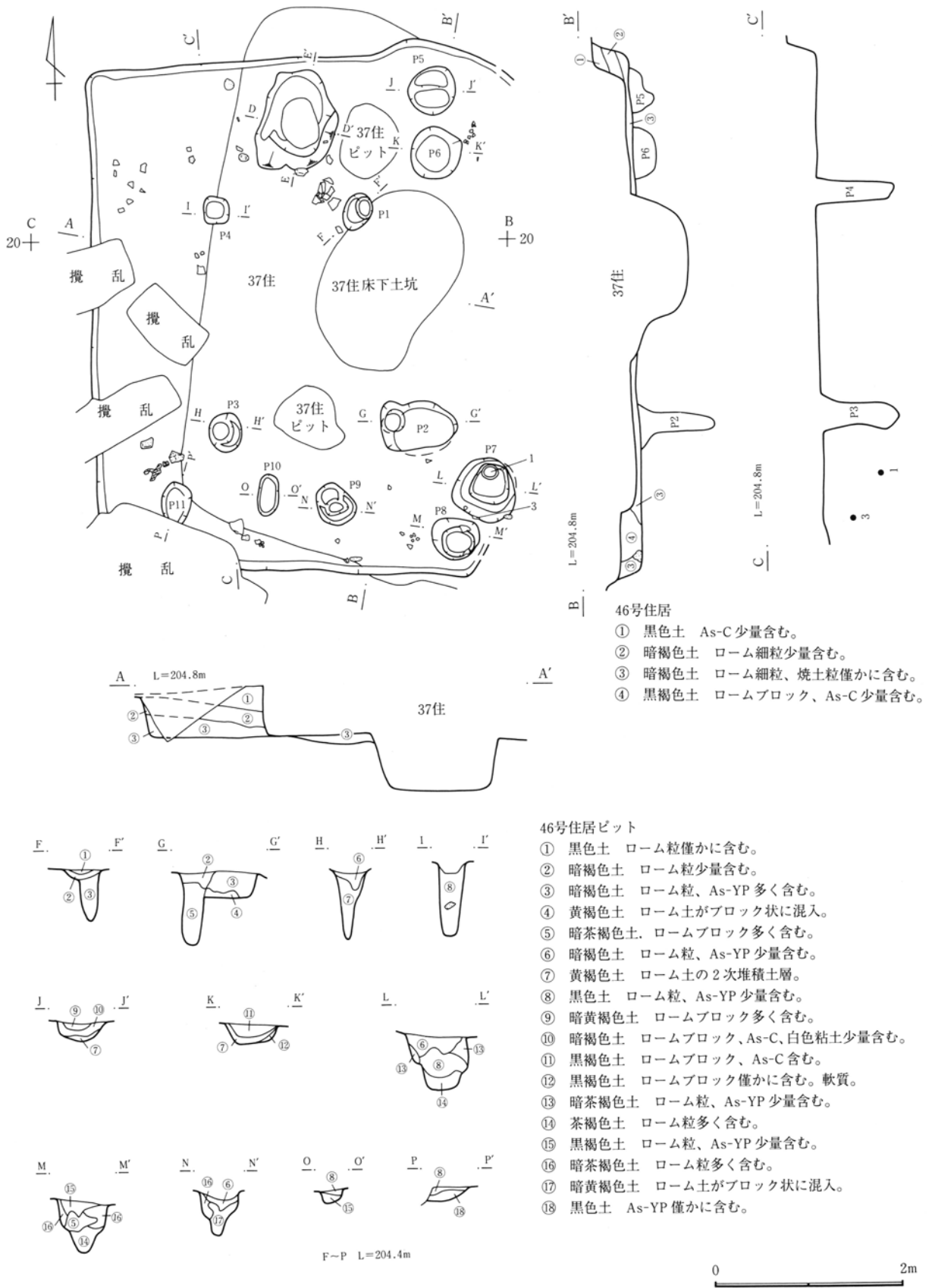
43号住居ピット

- ① 暗褐色土 ローム粒少量含む。粘質。
- ② 茶褐色土 ローム土主体。暗褐色土混じる。
- ③ 茶褐色土 As-C 僅かに含む。
- ④ 茶褐色土 ローム粒少量含む。
- ⑤ 暗褐色土 焼土、炭化物僅かに含む。
- ⑥ 赤褐色土 焼土層。
- ⑦ 黒褐色土
- ⑧ 茶褐色土 ローム粒多く含む。
- ⑨ 赤褐色土 ローム土主体。
- ⑩ 茶褐色土 ローム土多く含む。
- ⑪ 暗褐色土 ロームブロック含む。橙色軽石少量含む。
- ⑫ 黒褐色土 橙色軽石少量含む。
- ⑬ 黒褐色土 橙色軽石僅かに含む。炭化物少量含む。
- ⑭ 暗褐色土 橙色軽石少量含む。
- ⑮ 茶褐色土 炭化物少量含む。ほろほろ。
- ⑯ 茶褐色土 ローム土多く含む。

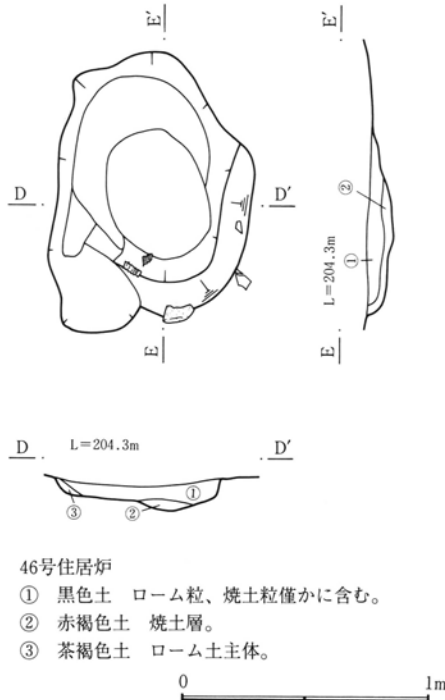
43号住居炉

- ① 茶褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- ② 赤褐色土 焼土層。
- ③ 暗茶褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- ④ ロームブロック
- ⑤ 赤褐色土 焼土主体。
- ⑥ 茶褐色土 焼土粒少量含む。

第264図 43号住居 (2)



第265図 46号住居 (1)



第266図 46号住居(2)

#### 46号住居

位置 66区B-19グリッド他 方位 N-3°-E

重複 古墳時代(7世紀中葉)の37号住居が重複し、本住居の東側半分を失う。

写真 P L120

形状 37号住居の重複によって東半部を失っているが残存する部分から1辺が5.56mを測る隅丸方形を呈するものと思われる。残存が良好でなかったが南東のコーナーが検出されている。また、北辺の一部がやや湾曲し張り出しているが、37号住居の壁と重なるため、誤認の可能性もある。

壁高 残存の良好な西壁で0.63mを測る。

面積 不明

埋没土 ローム粒を含む暗褐色土を主体とする。

床面 特に硬化した部分は確認できなかった。埋没土の土層断面からも貼り床は確認できなかった。

周溝 検出されなかった。

柱穴 ピットは11本が検出された。位置、形状からP1、P2、P3、P4が主柱穴に相当すると思われる。本住居はその帰属時期から考えると4本主柱穴の住居と考えられるため、すべての柱穴が調査さ

れたと思われるが、P1は位置が若干内側に入りすぎているかもしれない。その場合、もう1本の柱穴は37号住居によって壊された部分に存在すると思われる。

炉 住居北壁寄り中央付近から検出された。長軸1.05m、短軸0.78mの楕円形を呈する地床炉である。床面からの掘り込みは13cmを測る。底部付近に焼土が良好に残存していた。

遺物 弥生土器片641点と石器類13点が出土し、そのうち土器片601点と石器類のすべてを一括して取り上げた。土器は小片が多く、図化は3点にとどまった。1はP7の底部付近から出土したものである。3もP7の上端部から出土しており、このピットは柱穴とは異なり、貯蔵穴とも考えられる。また図化しなかったが、炉の南側から当該期の無文の甕胴部片が7点ほどまとまって出土している。

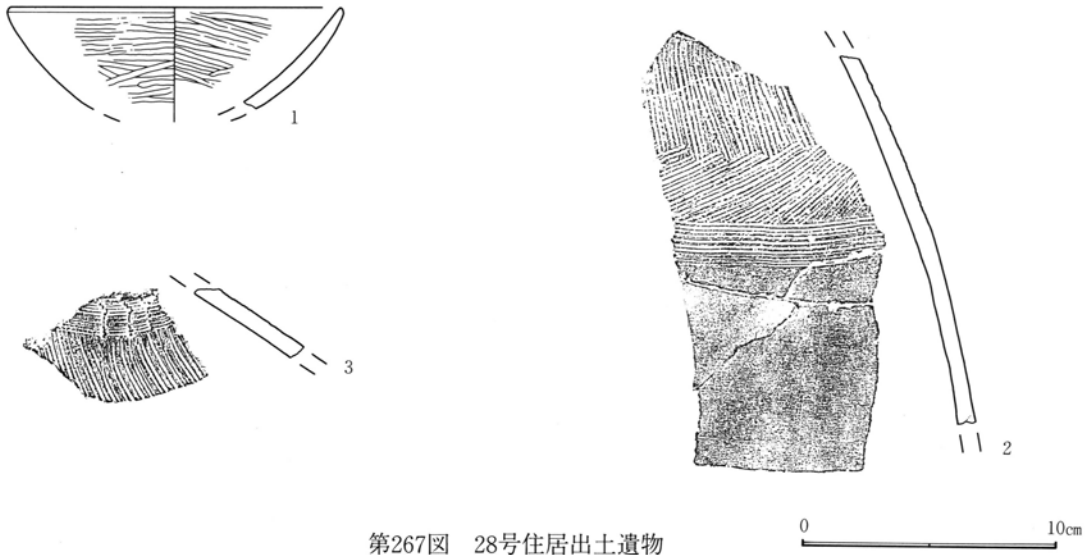
考察 本住居は出土遺物の様相から後期の樽式期の竪穴住居と思われる。これは前に述べた43号住居と同時期と思われる。しかし、14号、43号住居で見られたようなAs-Cの堆積が観察できなかった。多くの部分を37号住居及び耕作による攪乱によって破壊されているため、埋没土を観察できた部分が少なかったが、その中ではAs-Cは確認できていない。このことから、本住居構築時にはAs-Cが降下しており、As-Cを取り除くかたちで住居を掘りくぼめたという考え方と、As-Cの降下時にはまだ上屋が残存しており、住居内には堆積しなかったという2つの考え方ができよう。

遺物の観察からは、43号住居と本住居との間に時期差は見られないことからこのどちらかと結論をだすことは難しい。しかし、そのいずれにしろ本住居はAs-Cの降下をはさんだ前後の時期に帰属するといえよう。そして、As-Cの降下した時点ではこの地域では樽式土器を用いた住居が存在していたと考えられる事例であろう。



第4章 検出された遺構と遺物

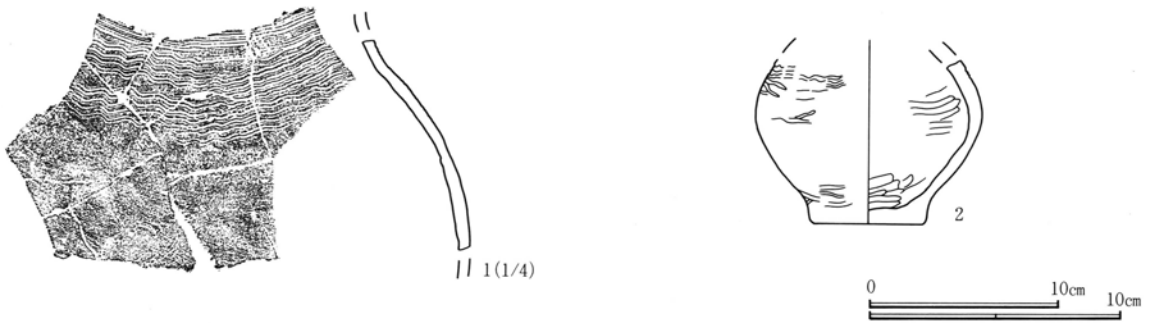
3 住居出土の遺物



第267図 28号住居出土遺物

28号住居出土遺物観察表 (第267図 P L 121)

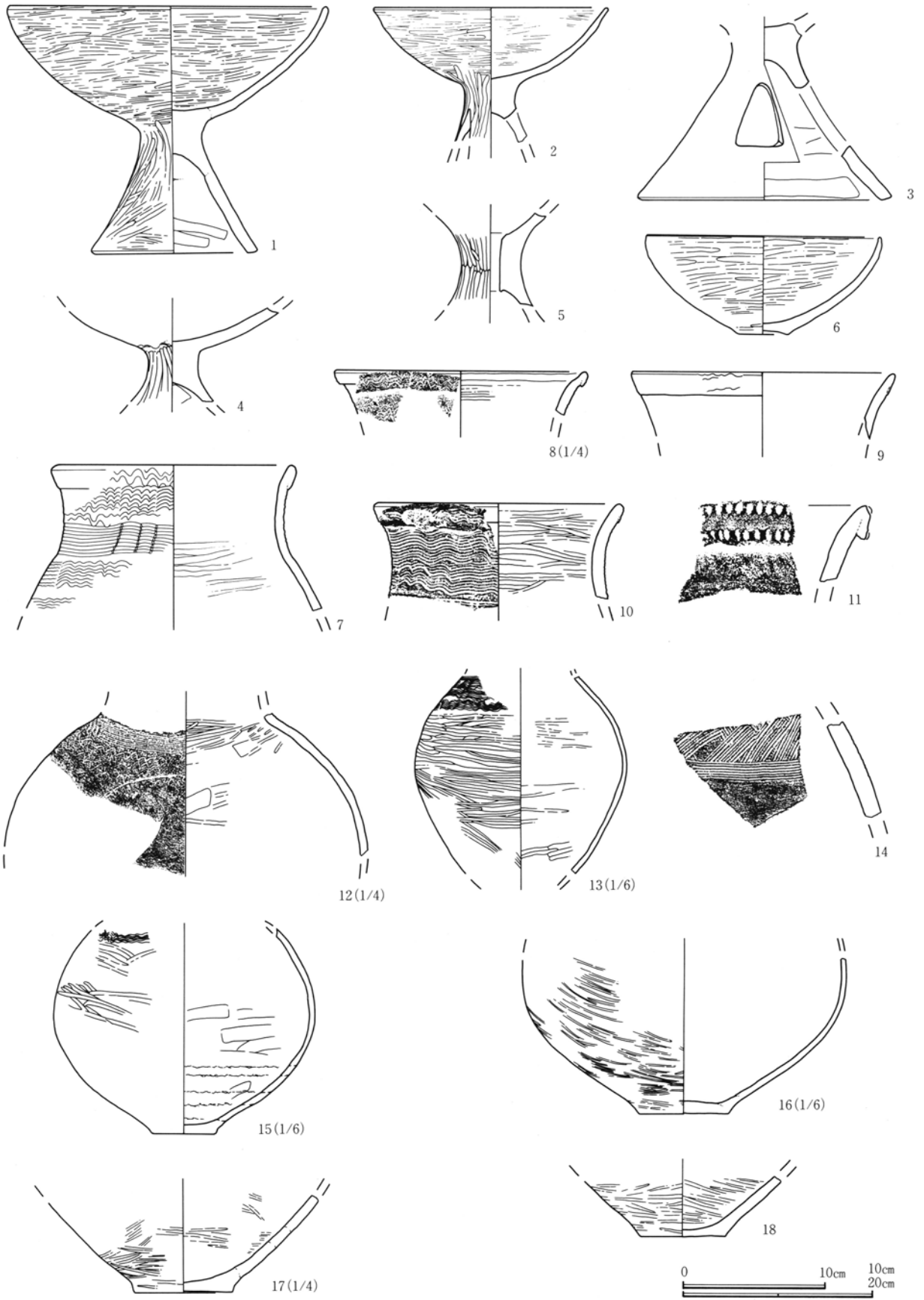
器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
鉢 高坏坏部か	口縁部片	口 <13.4>	①良好	内、外面とも赤色塗彩。内、外面とも横方向の篋磨き。	
	底	—	②暗赤褐色		
	高	—	③砂粒を含む		
甕	肩部片	口 —	①良好	11歯1単位の櫛描文を羽状に施文したのち、肩部に11歯1単位の簾状文を巡らす。施文後に胴部に横方向の篋磨き。	
	底	—	②にぶい黄橙		
	高	—	③砂粒を含む		
甕	肩部片	口 —	①良好	10歯1単位、3連止めの簾状文を施文し、その下位に5歯1単位の櫛描文を斜縦位に施文する。	
	底	—	②淡黄		
	高	—	③砂粒を含む		



第268図 35号住居出土遺物

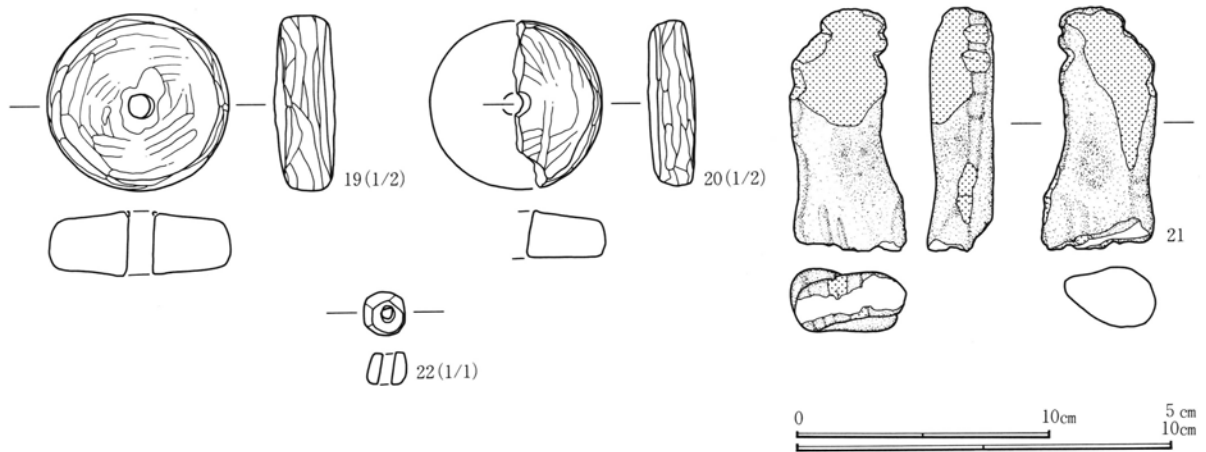
35号住居出土遺物観察表 (第268図 P L 121)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
甕	胴部片	口 —	①良好	球状の胴部。頸部に5歯1単位、3連止めの簾状文を施文し、その下位には9歯1単位の波状文を施文する。外面の胴中位と内面は篋磨き。	
	底	—	②暗褐		
	高	—	③砂粒、少量の雲母を含む		
小型壺	胴上部～	口 —	①良好	胴中位にやや張りを持つ球形の胴部。上部に波状文を施文するが不明瞭である。胴中位は横方向の篋磨き。内面に白色の有機物が付着する。	
	底部	底 4.7	②暗赤灰		
	高	(6.5)	③細砂粒、雲母を含む		



第269図 43号住居出土遺物(1)

第4章 検出された遺構と遺物

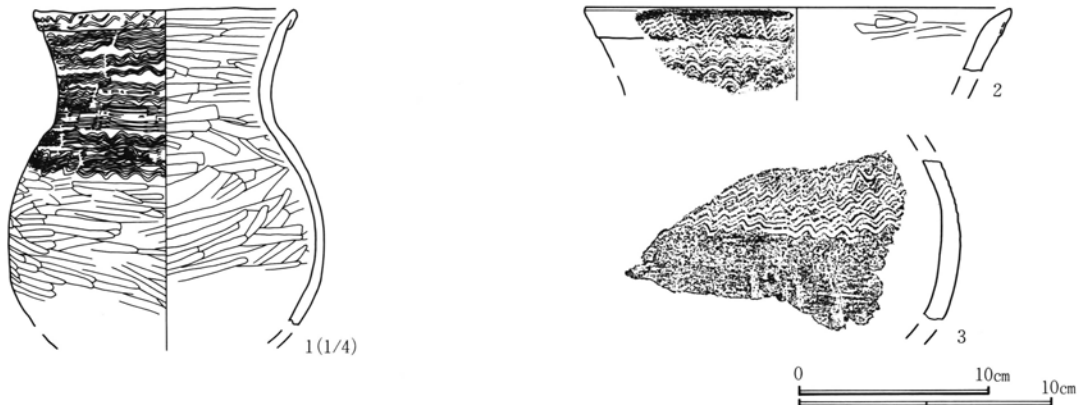


第270図 43号住居出土遺物（2）

43号住居出土遺物観察表（第269、270図 P L 121、122）

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 高 坏	ほぼ完形	口 17.1 底 8.8 高 13.2	①良好 ②橙 ③砂粒、少量の雲母を含む	接合部から裾部にむけて脚部は僅かに外反する。裾端部は強い面取り。坏部内、外面は横方向、脚部外面は縦方向に匏磨き。焼成時の黒斑が内外面に残る。	
2 高 坏	脚部欠	口 12.6 高 (7.2) 底 —	①普通 ②赤褐 ③砂粒を含む	口縁部は僅かに外反する。脚部には三角形と思われるすかしを3ヶ所に穿つ。内、外面とも赤色塗彩し、焼成時に吸炭している。	
3 高 坏	脚部	口 — 底 13.4 高 (9.3)	①良好 ②橙 ③砂粒、少量の雲母を含む	接合部から裾部にむけて僅かに外反する。裾端部は強い面取り。三角形のすかしを3ヶ所に穿つ。	
4 高 坏	脚部接合部	口 — 底 — 高 —	①良好 ②浅黄橙 ③砂粒を含む	脚部はやや大きく開く。坏部内側は黒色。裾部内面に横撫でか。坏部から脚部にかけて、粘土を上からかぶせ、その後横方向の器面調整。	全体的に器面が荒れる。
5 器 台	脚部	口 — 底 — 高 —	①良好 ②橙 ③砂粒を含む	中央に径9mmの孔が貫通する。外面は縦方向の匏磨き。	
6 鉢	1/5	口 <12.5> 底 <2.6> 高 5.2	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂粒を含む	やや上げ底を呈する底部から体部は緩やかに立ち上がる。内、外面とも匏磨き。外面と内面の一部に黒斑が残る。	
7 甕	口縁部片	口 <13.0> 底 — 高 —	①普通 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	折り返し口縁を持つ。折り返し口縁部には5歯1単位の波状文。頸部には簾状文をはさんで7歯1単位の波状文。簾状文は9歯1単位で、3連止め。割付の単位は不明。	
8 甕	口縁部片	口 <18.1> 底 — 高 —	①良好 ②褐色 ③砂粒を含む	折り返し口縁を持つ。折り返し口縁部には7歯1単位の波状文。頸部には単位不明の波状文。口唇部内側は僅かに受口状になっており、横撫での痕跡を持つ。	
9 甕	口縁部片	口 <14.0> 底 — 高 —	①普通 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	折り返し口縁を持つ。折り返し口縁には単位不明の波状文。	
10 甕	口縁部片	口 <13.3> 底 — 高 —	①良好 ②明褐色 ③砂粒、少量の雲母を含む	折り返し口縁を持つ。折り返し口縁部には波状文を施文するが器面が荒れており、単位は不明である。頸部には10歯1単位の波状文、その下位には簾状文。内面は横方向の匏磨きを施す。	
11 甕	口縁部片	口 — 底 — 高 —	①良好 ②灰白 ③砂粒を多く含む	口縁部はやや外反し、折り返し口縁を持つ。折り返し口縁上には棒状工具による刻み目文が2列平行に施文されている。内面は横方向の磨きを施す。	一部器面が荒れている。
12 甕	肩部片	口 — 底 — 高 —	①普通 ②褐色 ③砂粒を含む	9歯1単位の簾状文。8～4連止めで、割付の単位は不明である。その下位に7歯1単位の波状文。内面は横撫で、外面は黒斑有り。	

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
13 甕	胴部	口 — 底 — 高 (21.2)	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む	<p>頸部に単位不明の簾状文。その下に6歯1単位の波状文。内、外面とも横方向の匏磨き。外面胴下部は斜方向の匏磨き。</p> <p>9歯1単位の櫛描文を羽状に施文したのち、8歯1単位の櫛描横線を巡らす。横線文の一部は、下部の匏磨きによって消されている。</p> <p>球形の胴部。外面は6歯1単位の波状文を施文したのち横方向の匏磨き。内面は横方向の器面調整。</p> <p>底部から緩やかに立ち上がり、大きく開く胴部。内、外面とも器面が荒れるが、外面の一部に匏磨きの痕跡。外面胴下半の一部に黒斑有り。</p> <p>底部から胴部はやや湾曲気味に立ち上がる。内外面とも横方向の匏磨き。</p> <p>内、外面とも匏磨き。底部外面を除き赤色塗彩を施す。底部外面は匏磨き。</p> <p>土製。重量39g。全面を匏磨き。</p> <p>土製。全面を匏磨き。</p> <p>長軸方向に擦痕あり。縁辺部にはV字状の擦痕が4ヶ所にある。</p> <p>筒状の小玉で、両端は研磨されている。気泡が多く入る。</p>	
14 甕	肩部片	口 — 底 — 高 —	①良好 ②淡黄 ③細砂粒を含む		
15 甕	胴上位～ 底部	口 — 底 7.0 高 (22.0)	①良好 ②にぶい橙・褐灰 ③砂粒を含む		
16 甕	胴下位～ 底部	口 — 底 10.8 高 (16.7)	①普通 ②灰白 ③砂粒を含む		
17 甕	底部	口 — 底 7.0 高 —	①普通 ②赤褐 ③砂粒を含む		
18 甕	底部	口 — 底 4.6 高 —	①良好 ②暗褐 ③細砂粒を含む		
19 紡錘車	完形	径 4.8 厚 1.7 孔径 0.7	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂粒を含む		
20 紡錘車	1/2	径 4.4 厚 1.25 孔径 0.6	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂粒を含む		
21 砥石	完形か	長 9.8 幅 4.2 厚 2.3			
22 玉	完形	径 5.5mm 孔径 2.1mm 厚 4.0mm			



第271図 46号住居出土遺物

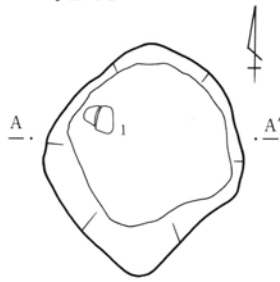
46号住居出土遺物観察表 (第271図 P L122)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 甕	口縁～胴 下位	口 13.8 底 — 高 (16.8)	①良好 ②にぶい黄褐色・橙 ③砂粒、小礫を含む	<p>折り返し口縁を持ち、球形の胴部。折り返し口縁部に5歯1単位の波状文。頸部の簾状文をはさんで上下に5歯1単位の波状文。簾状文は10歯1単位で、2連止めと3連止めで8単位の割付。内面と胴下部は匏磨き。表面の一部に黒斑。</p> <p>折り返し口縁を持つ。折り返し口縁部と頸部には4歯1単位の波状文。内面は横撫で、外面は器面が荒れる。</p> <p>4歯1単位の波状文を施文。内、外面とも横方向の匏磨き。</p>	
2 甕	口縁部片	口 <17.5> 底 — 高 —	①普通 ②にぶい橙 ③砂粒を含む		
3 甕	胴部片	口 — 底 — 高 —	①良好 ②黒褐 ③砂粒、小礫を含む		

第4章 検出された遺構と遺物

4 土坑

59号土坑



A L=208.2m



A' 59号土坑

- ① 黒色土 ロームブロック含む。粒子密。

59号土坑

位置 66区I-18グリッド 写真 PL123

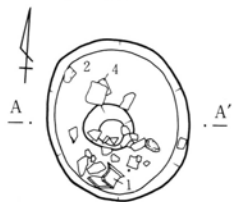
規模 長径1.22m、短径1.06m、深さ20cmを測る。

形状 平面形状は隅丸方形、断面形状は浅箱形を呈する。

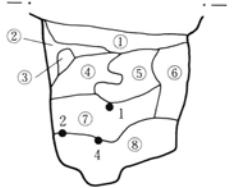
埋没土 黒色土を主体とする。遺物 今回図示した中期の甕胴部片1点が出土したのみである。

考察 遺物から中期に属すると思われる。

120号土坑



A L=206.7m



120号土坑

- ① 黒色土 白色鉍物粒含む。
- ② 黒色土 ローム土少量含む。
- ③ 黒色土
- ④ 黒色土 ローム土を層状に少量含む。
- ⑤ 黒色土 白色鉍物粒僅かに含む。
- ⑥ 黒色土 ローム土含む。
- ⑦ 暗褐色土 白色鉍物粒、炭化物少量含む。
- ⑧ 暗褐色土 ローム土、炭化物含む。

120号土坑

位置 66区E-18グリッド 重複 弥生後期の28号住居の床面で検出された。新旧関係は不明である。

写真 PL123

規模 長径0.85m、短径0.76m、深さ82cmを測る。

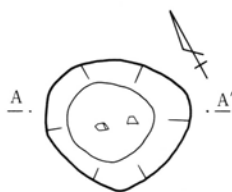
形状 平面形状は円形、断面形状は箱形を呈する。

埋没土 黒色土を主体とする。土層観察から人為的な埋没の可能性が考えられる。

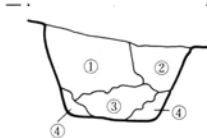
遺物 弥生土器片301点が出土し、そのうち275点を一括して取り上げた。図示した遺物の他は小片が多く、接合関係も見られなかった。

考察 遺物の出土状況から土器を廃棄した状況が推定される。時期は後期の樽式期と考えられる。同時期の28号住居の床面精査中に検出されているため、28号住居よりも前出と考えられるが、住居内の位置からこの住居に伴う土坑とも考えられる。

152号土坑



A L=206.6m



A' 152号土坑

- ① 黒色土 白色軽石粒少量含む。
- ② 暗褐色土 軟質でもろい。
- ③ 暗褐色土 白色鉍物粒少量含む。
- ④ 黄褐色土 ローム土主体。As-YP少量含む。

152号土坑

位置 66区D-18グリッド 重複 弥生時代後期の28号住居のプラン内に位置する可能性もあるが、同住居は削平を受けているため詳細は不明である。

写真 PL123

規模 長径0.77m、短径0.67m、深さ45cmを測る。

形状 平面は円形、断面は箱形を呈する。

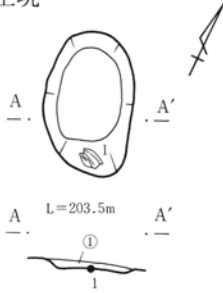
埋没土 黒色土を主体とする。自然埋没と思われる。

遺物 弥生土器片2点が出土しているが、図示にはいたらなかった。考察 出土遺物、埋没土の様相から後期樽式期に属すると思われる。



第272図 59・120・152号土坑

168号土坑

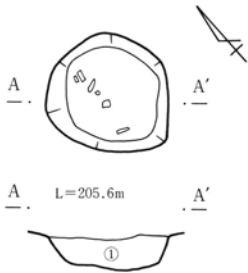


168号土坑  
① 黒色土 As-C 僅かに含む。

168号土坑

位置 65区S-19グリッド 写真 PL123  
規模 長径0.77m、短径0.48m、深さ5cmを測る。  
形状 平面形状は楕円形、断面は皿形を呈する。  
埋没土 黒色土のみで埋没する。  
遺物 図示した甕口縁部片1点のみの出土である。  
考察 残存が不良なため土坑との認定には若干疑問も残るが、遺物から樽式期の土坑と思われる。

183号土坑

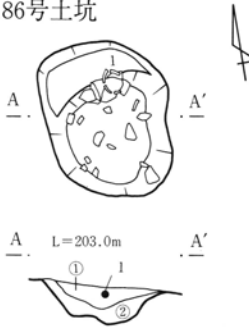


183号土坑  
① 黒褐色土 暗褐色土粒少量含む。橙色軽石僅かに含む。

183号土坑

位置 65区R-18グリッド 写真 PL123  
規模 長径0.67m、短径0.61m、深さ18cmを測る。  
形状 平面形状は円形、断面は皿形を呈する。  
埋没土 黒褐色土のみで埋没する。  
遺物 弥生土器片2点が出土しているが図示にはいたらなかった。  
考察 出土遺物の様相から樽式期の土坑であろう。

186号土坑

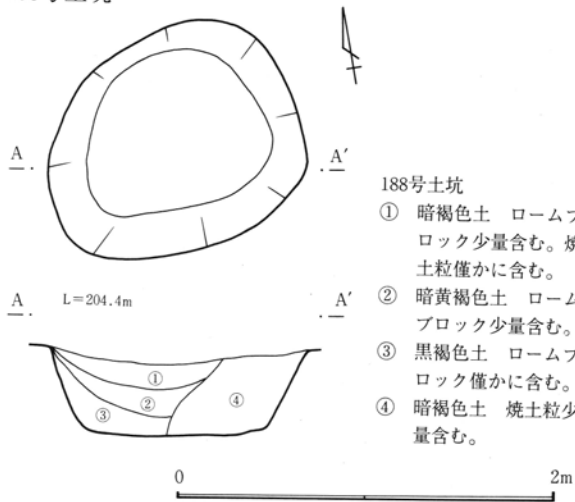


186号土坑  
① 暗褐色土 ローム粒僅かに含む。  
② 明褐色土 ロームブロック含む。

186号土坑

位置 75区R-1グリッド 写真 PL123  
規模 長径0.85m、短径0.67m、深さ18cmを測る。  
形状 平面形状は楕円形、断面は皿形を呈する。  
埋没土 暗褐色土を主体とする。自然埋没と思われる。  
遺物 弥生土器片16点が出土し、そのうち2点を一括して取り上げた。1の甕は土坑内のテラス状の部分に、正位の状態で出土している。  
考察 遺物から樽式期の土坑であろう。

188号土坑



188号土坑  
① 暗褐色土 ロームブロック少量含む。焼土粒僅かに含む。  
② 暗黄褐色土 ロームブロック少量含む。  
③ 黒褐色土 ロームブロック僅かに含む。  
④ 暗褐色土 焼土粒少量含む。

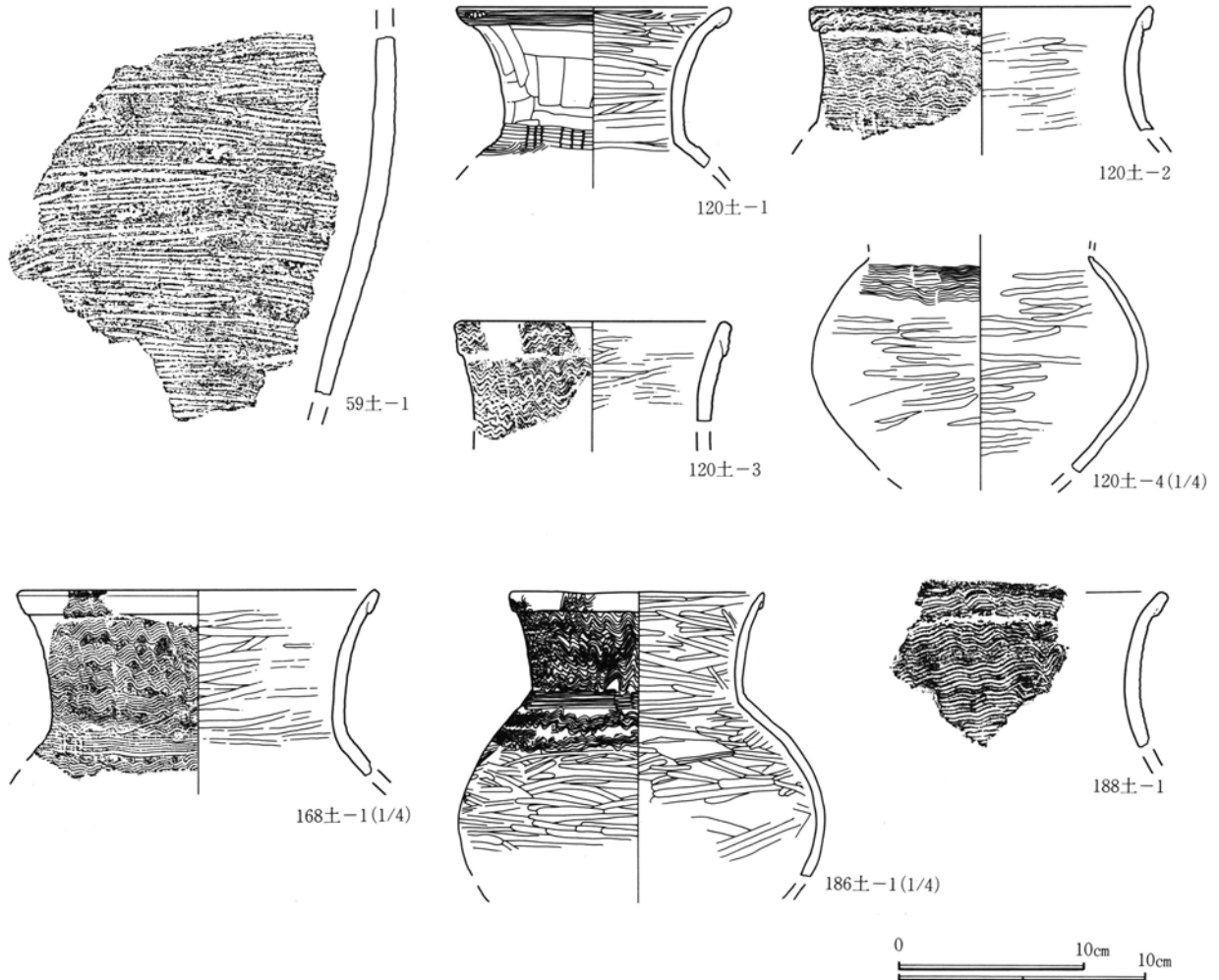
188号土坑

位置 66区A-19グリッド 重複 古墳時代(7世紀中葉)の37号住居の床下で検出された。弥生時代後期の46号住居と重複していた可能性もある。  
写真 PL123  
規模 長径1.45m、短径1.23m、深さ40cmを測る。  
形状 平面形状は円形、断面は浅箱形を呈する。  
埋没土 暗褐色土を主体とする。遺物 1の甕口縁部片が出土したのみである。考察 遺物から樽式期の土坑と判断した。

第273図 168・183・186・188号土坑

第4章 検出された遺構と遺物

5 土坑出土の遺物



第274図 59・120・168・186・188号土坑出土遺物

59号土坑出土土器観察表 (第274図 P L124)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 甕	胴部片	口 — 底 — 高 —	①良好 ②灰黄褐 ③砂粒、小礫を含む	櫛歯状工具による沈線文を横位に施文する。内面に炭化物付着。内面は横方向の器面調整をしている。	

120号土坑出土土器観察表 (第274図 P L124)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 甕	口縁部片	口 <15.0> 底 — 高 —	①良好 ②明黄褐 ③細砂粒を含む	折り返し口縁を持つ。折り返し口縁上にははけ目。頸部上位と下位には横方向の撫で、中位は縦方向の撫で。その下位には7歯1単位の簾状文。3連止めで割付の単位は不明。内面は横方向の磨き。口唇部内面に靫の痕跡有り。	
2 甕	口縁部片	口 <14.0> 底 — 高 —	①普通 ②にぶい赤褐 ③砂粒を含む	折り返し口縁を持つ。折り返し口縁部と頸部には5歯1単位の波状文。その下位には単位不明の簾状文。3連止めで看取できる。	
3 甕	口縁部片	口 — 底 — 高 —	①良好 ②黒褐 ③砂粒、小礫を含む	折り返し口縁部には4歯1単位の波状文。頸部には、はけ目を施したのち、4歯1単位の波状文。口唇部に歪みがある。	
4 甕	胴部片	口 — 底 — 高 —	①普通 ②赤褐 ③細砂粒を含む	やや張りのある球形の胴部。頸部には単位不明の簾状文の下位に、5歯1単位の波状文。胴部の内、外面とも磨き。外面に黒斑が見られる。	

168号土坑出土土器観察表 (第274図 P L124)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 甕	口縁部片	口 <19.8> 底 — 高 —	①良好 ②にぶい褐 ③細砂粒を含む	折り返し口縁を持つ。折り返し口縁部には5歯1単位の波状文。頸部には簾状文を施文したのち、その上下に6歯1単位の波状文。簾状文は7歯1単位で、5連止め。内面は横方向の磨き。	

186号土坑出土土器観察表 (第274図 P L124)

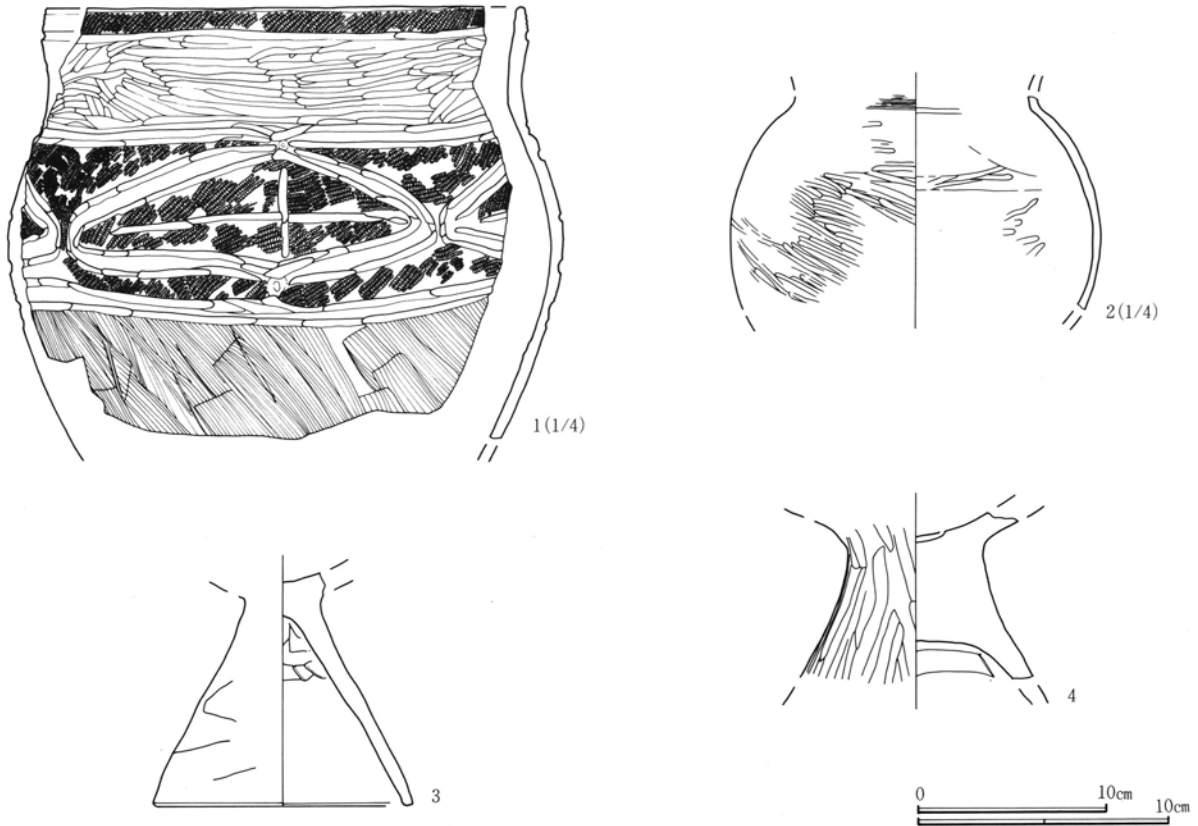
器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 甕	口縁～胴部	口 13.5 底 — 高 (15.3)	①良好 ②赤褐 ③細砂粒を含む	折り返し口縁を持ち、緩く開く頸部。胴部はやや張りのある球状。折り返し口縁部には4歯1単位の波状文。頸部には簾状文を施文後、5歯1単位の波状文。簾状文は9歯1単位で3連止め。割付は6単位。胴部内外面は横方向の鈍磨き。内、外面とも炭化物が僅かに付着する。	

188号土坑出土土器観察表 (第274図 P L124)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 甕	口縁部片	口 — 底 — 高 —	①普通 ②にぶい褐 ③細砂粒を含む	折り返し口縁を持つ。折り返し口縁部には6歯1単位の波状文。頸部には8歯1単位の波状文。内面はやや器面が荒れるが、赤色塗彩の痕跡が一部に残る。	



6 遺構外出土遺物



第275図 遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表 (第275図 P L 124)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 甕	口縁～胴 下位1/2	口 <25.8> 底 — 高 (22.7)	①普通 ②灰褐 ③大きめの砂粒を含む	僅かに開く短い頸部。胴部は緩やかに湾曲する。口縁部には原体LRの単節斜縄文を横位に施したのち、棒状工具による沈線を1条巡らす。頸部は横方向の磨き。胴部上位に木口状工具によるはげ目を施したのち、胴部上位から中位にかけて棒状工具による上下2条の平行沈線文を施し、この間に菱形連繫文を施す。平行沈線文との接点には僅かに瘤状の凸部が見られる。連繫菱形文の区画内には原体LRの単節斜縄文を充填する。内面には横方向の器面調整による砂粒の移動が顕著である。	66区L-20
2 甕	胴部	口 — 底 — 高 —	①普通 ②灰褐 ③砂粒を含む	球形の胴部。頸部には単位不明の簾状文。胴部の外面は磨き。内面には横方向の器面調整が見られる。	65区S-18
3 高坏	脚部	口 — 底 — 高 —	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂粒を含む	接合部から裾部にむけて直線的に開く。裾端部は強い面取りにより平坦面を作る。内面の一部に押さええの痕跡が見られる。外面上位には縦方向、外面下位と内面下位には横方向の器面調整の痕跡が見られる。	75区Q-3
4 高坏	脚部	口 — 底 — 高 —	①良好 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	接合部から裾部にむけて直線的に開く。外面は磨き。脚部内面接合部付近に鈍押しえ痕が残る。外面頸部には僅かに炭化物が付着する。	75区H-2

## 第4節 古墳時代

### 1 遺構、遺物の概要

**遺構** 古墳時代に属すると思われる遺構は、調査された範囲では住居9軒をあげることができる。土坑の中にも古墳時代以降に属するとおもわれるものが検出されているが、遺物の出土がなく、また埋没土からも平安時代との区別が困難であるため、古墳時代と思われるが時期不明と分類せざるをえなかった。この時代の住居を概観すると以下の通りになる。まず、住居の時期を見てみると、6世紀中葉が1軒、6世紀後半が2軒、7世紀中葉が2軒、7世紀後半が3軒、不明1軒という分類になる。したがって、本遺跡の古墳時代の集落は100～150年間ほど継続した集落と考えられ、同時期に併存した可能性があるのは2～3軒ということができる。次に形状で分類してみると、平面形状はすべて方形を呈している。その中では、やや長方形を呈する住居が3軒、正方形に近い住居が4軒、不明2軒となる。時期的な傾向ははっきりとしないが、7世紀代の住居は正方形に近い形状を呈するといえるかもしれない。中での11号住居と37号住居は遺物からみると1四半期分の時期差を持つが、規模、形状とも近似した状況を見せている。主軸方位もほぼ一致しており、同時期併存あるいは建て替えによる移転といった状況を感じさせる組み合わせである。

本遺跡においてはこの時代の住居は比較的しっかりした掘り込みを持っており、9軒の平均で58.2cmを測る。これは第5節で述べる平安時代の竪穴住居と明確な差をみせている。ちなみに、平安時代の住居の掘り込みの平均は31cmである。25号住居は遺物の出土がなく、時期を決定する材料を欠いたが、埋没土の様相とともに、この掘り込みの差から、古墳時代の住居と判断した。

次に竈の位置を分類してみると、竈が検出された8軒のうち、東壁に構築される住居が2軒、北壁に構築される住居5軒、南東隅に構築される住居1軒となる。この傾向から竈の検出されなかった25号住

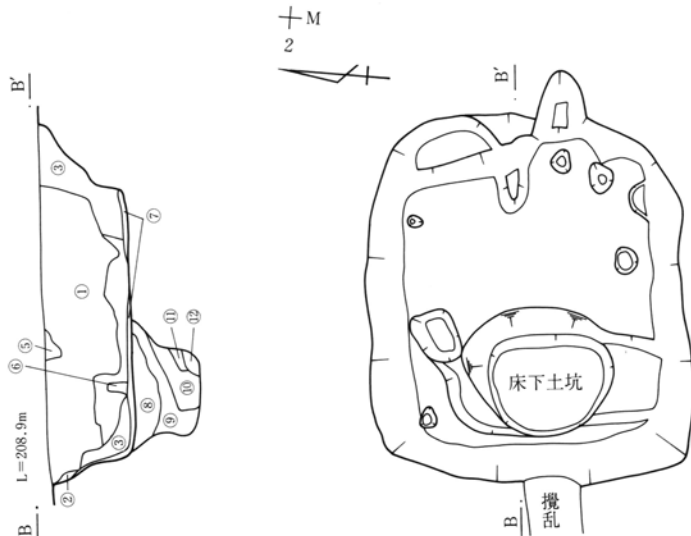
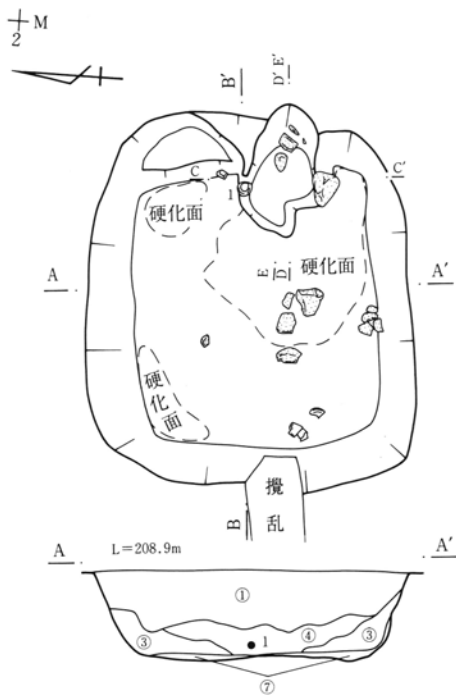
居も北壁に検出されなかったため、東壁に構築されているものと思われる。竈の位置は時期的な傾向は見られないが、唯一南東隅に竈を持つ40号住居は今回の報告の中ではもっとも新しい住居とも考えられるので、こうした時期的な要因があるかもしれない。

住居の分布に特に規則性は見いだせないが、7号、8号、11号、25号、31号住居と37号、38号、40号、44号の2群に分けることができる。これは、前者の1群が、本遺跡が立地する台地の頂部付近の平坦部に占地し、後者の1群がこの台地から東側への傾斜地を避けてその下の平坦面に占地しているということが言えそうである。ただし、これは時期的な移動とは考えられない。

**遺物** 住居の分布で分類した2群は、遺物の出土状態でも差を見せている。すなわち、後者に比較して前者の1群は遺物の出土が少ない傾向がうかがえる。これは後者の1群は傾斜地の下に位置するため、流れ込みの遺物が多いということも考えられよう。

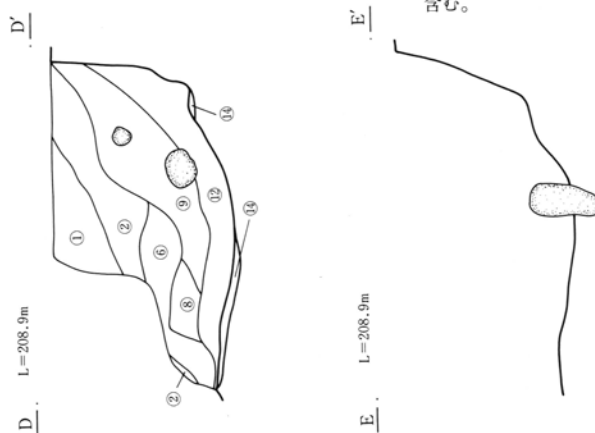
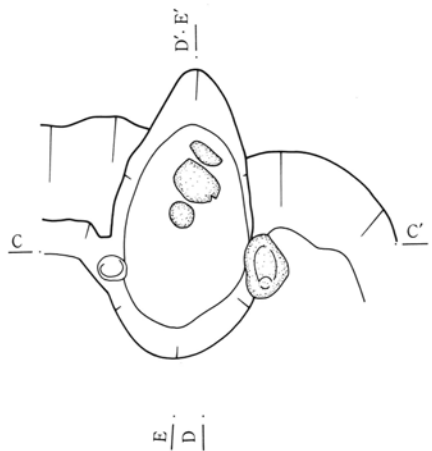
遺構外の遺物も時期的には住居と同様の傾向を示しており、その多くが住居と関連を持つ遺物であるということができよう。

2 竪穴住居



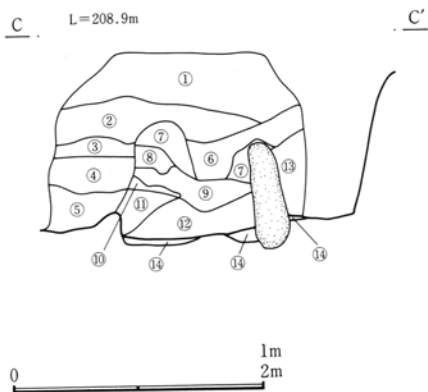
7号住居

- ① 黒色土 As-C多く含む。しまり弱。
- ② 暗褐色土 粒が細かい。
- ③ 黒色土 しまり弱。
- ④ 黒色土 As-C少量含む。
- ⑤ 黒色土 砂状。後の攪乱。
- ⑥ ロームブロック
- ⑦ 黒色土 As-YP多く含む。ローム細粒少量含む。
- ⑧ 暗黄褐色土 As-YP主体。ロームブロック含む。
- ⑨ 黒色土 As-YP少量含む。ローム粗粒少量含む。
- ⑩ 黒色土 As-YP多く含む。ローム粗粒僅かに含む。
- ⑪ 黒色土 As-YP少量含む。
- ⑫ 黒色土 As-YPとロームブロック含む。



7号住居カマド

- ① 黒色土 住居覆土の①層。
- ② 黒褐色土 As-C、ローム微粒少量含む。焼土粒僅かに含む。粒子粗い。
- ③ 黒色土 As-C僅かに含む。ローム微粒僅かに含む。
- ④ 暗褐色土 As-C僅かに含む。ローム細粒少量含む。
- ⑤ 暗褐色土 ローム微粒僅かに含む。
- ⑥ 黄褐色土 ロームブロック主体。焼土粒少量含む。
- ⑦ 黒色土 As-C僅かに含む。ローム細粒僅かに含む。
- ⑧ 暗褐色土 ローム微粒多く含む。焼土粒僅かに含む。黒色土粒少量含む。
- ⑨ 暗黄褐色土 ローム微粒多く含む。焼土粒多く含む。黄色軽石僅かに含む。
- ⑩ ロームブロック
- ⑪ 暗黄褐色土 ⑩に似る。
- ⑫ 暗赤褐色土 黄色軽石僅かに含む。焼土粒多く含む。
- ⑬ 黒色土 黄色軽石僅かに含む。ローム微粒僅かに含む。
- ⑭ 暗赤褐色土 黄色軽石僅かに含む。焼土粒少量含む。



第276図 7号住居

## 7号住居

**位置** 76区M-1グリッド 方位 N-89°-E

**重複** 西壁の一部を耕作による攪乱で破壊される。

**写真** PL125

**形状** 長軸2.92m、短軸2.61mの隅丸長方形を呈する。壁高 0.78mを測る。

**面積** 3.99㎡を測る。埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。観察によると自然に埋没したものと思われる。床面 As-YPを多く含む黒色土を貼っている。竈の手前、径1.5mほどの範囲と住居北西隅及び北東隅で特に硬化した部分が認められた。

**貯蔵穴** 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 西壁中央付近から床下土坑が検出された。径は96×78cm、深さ54cmを測る。

**遺物** 図示した遺物の他、土師器坏片11点と土師器甕片5点が出土している。図示した1は竈左袖の手前床から出土している。

**竈 位置** 東壁中央やや南寄り。

**規模** 全長1.14m、焚き口幅0.46m。

**袖** 右袖には礫を立てて補強材としている。

**支脚** 燃烧部中央に細長い礫を立てて支脚としている。

**考察** しっかりした掘り込みを持っている小型の住居である。出土遺物の様相から6世紀後半の竪穴住居と思われる。

## 8号住居

**位置** 66区K-15グリッド他 方位 N-77°-E

**重複** なし 写真 PL125

**形状** 長軸4.62m、短軸4.38mの長方形を呈する。

**壁高** 0.65mを測る。面積 14.8㎡を測る。

**埋没土** As-Cを含む黒色土、黄色軽石粒を含む黒色土を主体とする。土層観察によると自然に埋没したものと思われる。床面 黒色土を貼っている。

**貯蔵穴** 竈右手前で検出された。規模は径61×42cm、深さ33cmを測る。埋没土層の観察によると人為的な埋没と推定される。

**周溝** ほぼ全周にわたって検出された。最大幅32cm

深さ11cmを測る。

**柱穴** ピットは5本検出された。そのうち、位置、形状からP1、P3、P4、P5が主柱穴に相当すると思われる。掘り方 床面から15cmほど掘り込まれている。床下土坑と思われる掘り込みが中央付近と北東隅付近で検出されている。床下土坑1は径1.30×1.26mで深さ18cmを測る。床下土坑2は径1.40×1.32mで深さ40cmを測る。

**遺物** 図示した遺物の他、土師器坏片14点、土師器甕片23点、須恵器甕片3点が出土している。1と2が住居東半分で出土している他は、散漫な出土状態である。また、今回図示しなかったが、北西隅付近でも編み石と思われる円礫が18点出土している。

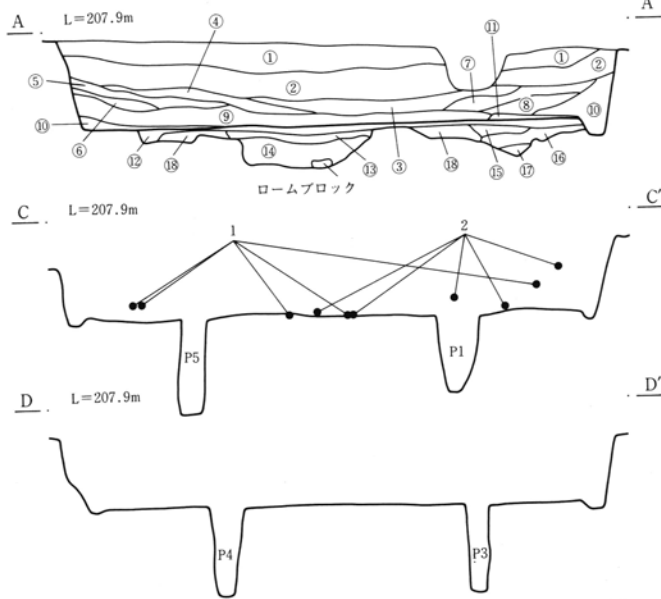
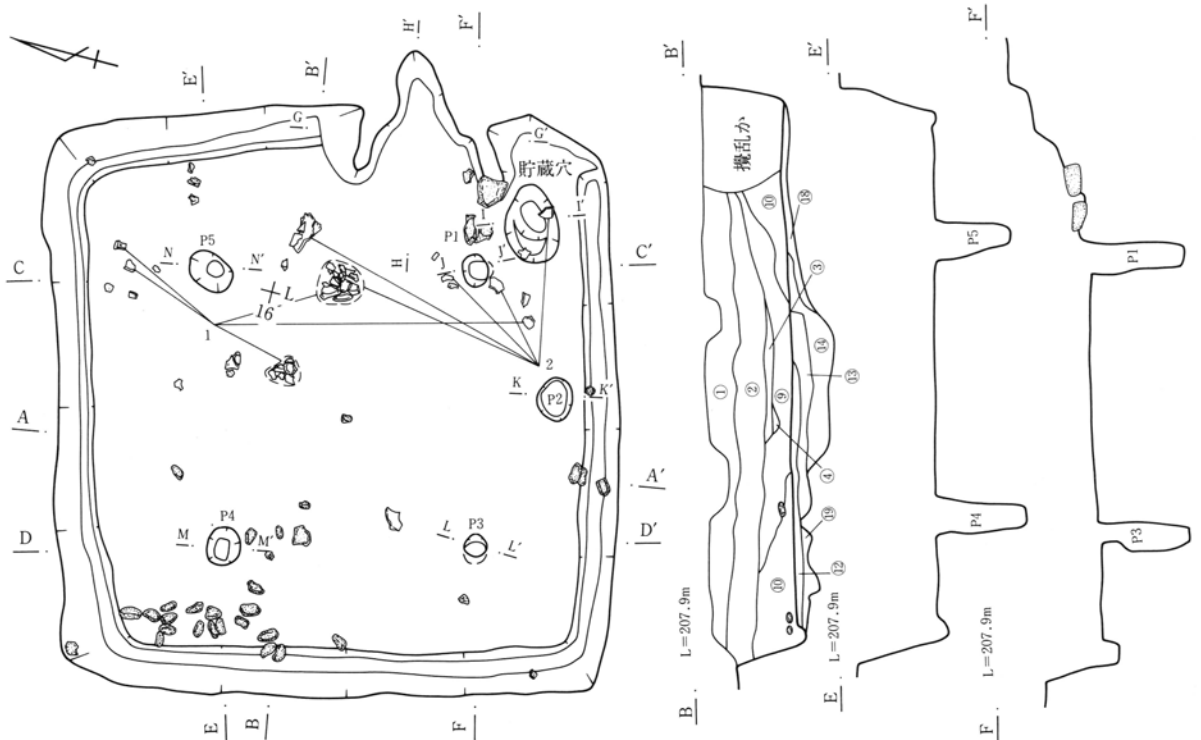
**竈 位置** 東壁中央やや南寄り。

**規模** 全長1.28m、焚き口幅1.30mを測る。

**袖** 黄色軽石を含むローム土で長さ約40cmの袖をハの字状に作り、右袖先端には角礫を置き、補強材としている。また右袖手前で出土した礫は崩落した補強材であると思われる。

**煙道** 住居壁より54cm外に延びるが、上部の構造は残存していない。

**考察** 出土遺物の様相から7世紀中葉の竪穴住居と思われる。



8号住

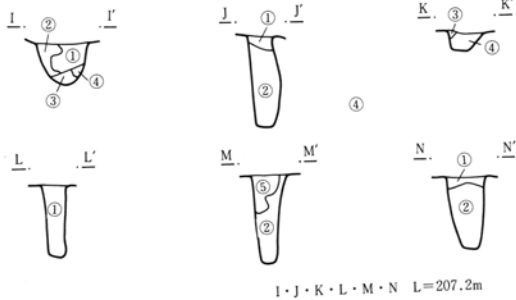
- ① 黒色土 As-C多く含む。
- ② 黒色土 As-C多く含む。ローム微粒少量含む。
- ③ 黒色土 As-C少量含む。ローム微粒多く含む。焼土粒僅かに含む。
- ④ 黒色土 As-C僅かに含む。粒子密。
- ⑤ 黒色土 As-C少量含む。ローム微粒僅かに含む。
- ⑥ 黒色土 As-C僅かに含む。
- ⑦ 黒色土 黄色軽石少量含む。ローム細粒少量含む。
- ⑧ 黒色土 黄色軽石多く含む。ローム粗粒少量含む。
- ⑨ 黒色土 黄色軽石多く含む。ローム微粒少量含む。
- ⑩ 黒色土 黄色軽石多く含む。ローム微粒多く含む。
- ⑪ 黒色土 黄色軽石僅かに含む。炭化物、焼土粒少量含む。
- ⑫ 黒色土 YP少量含む。ローム細粒少量含む。
- ⑬ 黒色土 YP多く含む。
- ⑭ 黒色土 YP少量含む。ロームブロック少量含む。
- ⑮ 黒色土 YP少量含む。ロームブロック多く含む。
- ⑯ 黒色土 YP僅かに含む。ローム細粒僅かに含む。
- ⑰ 黒色土 ロームブロック主体。YP僅かに含む。
- ⑱ 黒色土 YP多く含む。
- ⑲ 黒色土 YP少量含む。

8号住居貯蔵穴

- ① 黒色土 黄色軽石僅かに含む。
- ② 暗褐色土
- ③ 暗褐色土 As-YP多く含む。
- ④ ロームブロック

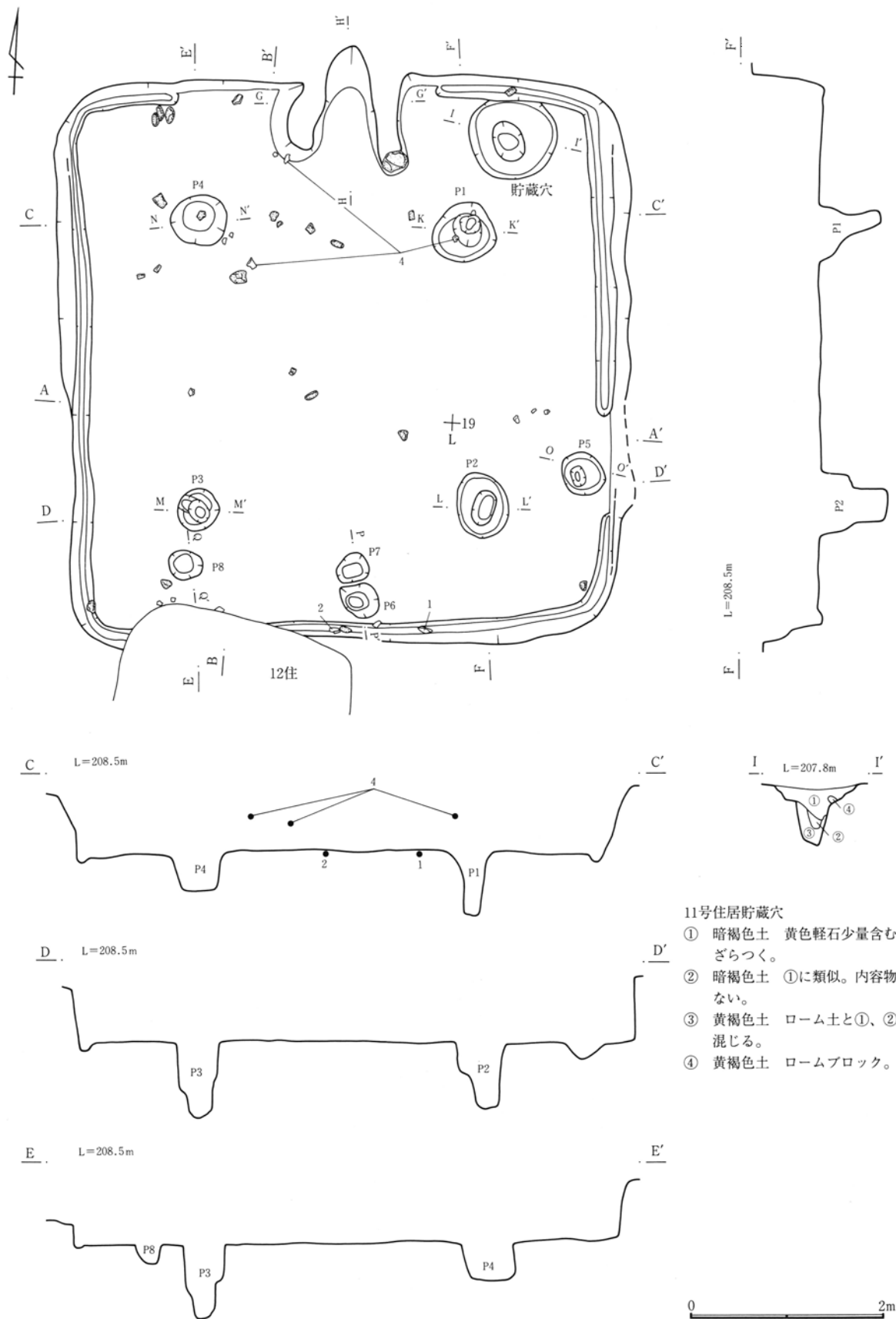
8号住居ピット

- ① 暗褐色土 As-YP、ロームブロック僅かに含む。
- ② 茶褐色土 As-YP多く含む。ロームブロック少量含む。
- ③ 暗褐色土 ローム土が混入する。
- ④ 暗褐色土 As-YP少量含む。
- ⑤ 暗褐色土 ②を含む。



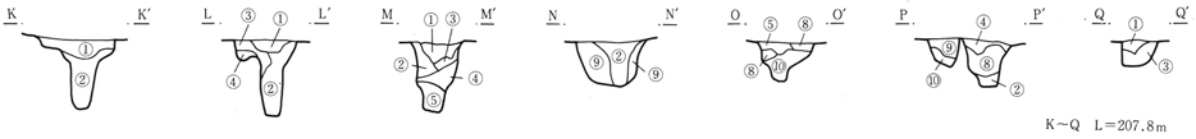
第277図 8号住居(1)





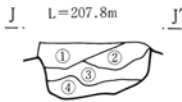
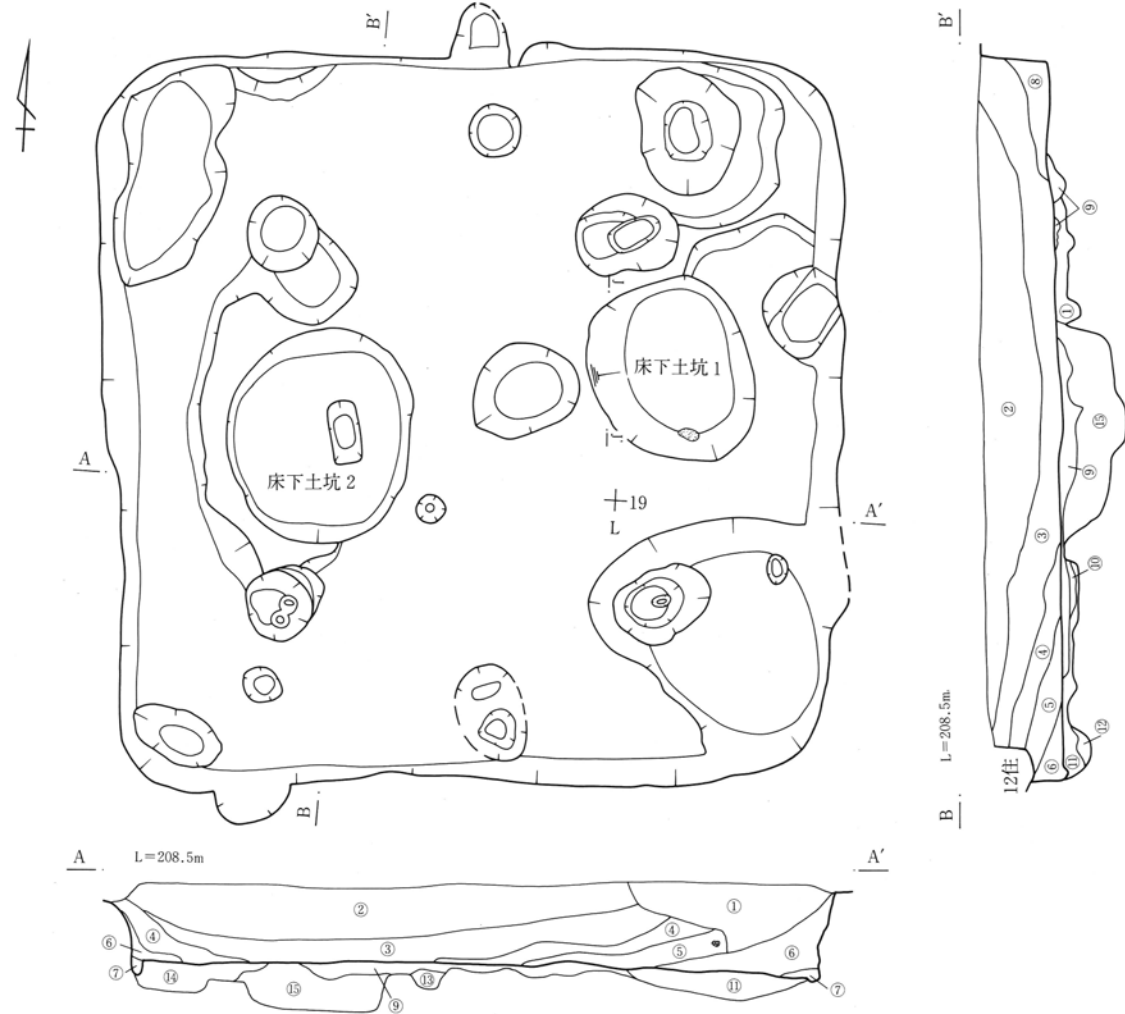
第279図 11号住居 (1)

第4節 古墳時代



11号住居ピット

- ① 黒色土 白色鈣物粒、As-YP 少量含む。
- ② 暗褐色土 白色鈣物粒、As-YP 少量含む。
- ③ 暗茶褐色土 As-YP 多く含む。
- ④ 黒色土 粒子密。
- ⑤ 暗褐色土 白色鈣物粒多く含む。
- ⑥ 茶褐色土 As-YP 僅かに含む。
- ⑦ 黄褐色土 ローム土主体。
- ⑧ 暗褐色土 As-YP 多く含む。
- ⑨ 暗褐色土 ロームブロック多く含む。
- ⑩ 黄褐色土 As-YP 主体。

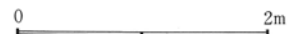


11号住居床下土坑1

- ① 黒色土 As-YP 多く含む。ローム粗粒少量含む。
- ② 黄褐色土 ロームブロック多く含む。As-YP 少量含む。
- ③ 黄褐色土 ロームブロック少量含む。As-YP 多く含む。
- ④ 黒色土 As-YP 多く含む。ロームブロック少量含む。

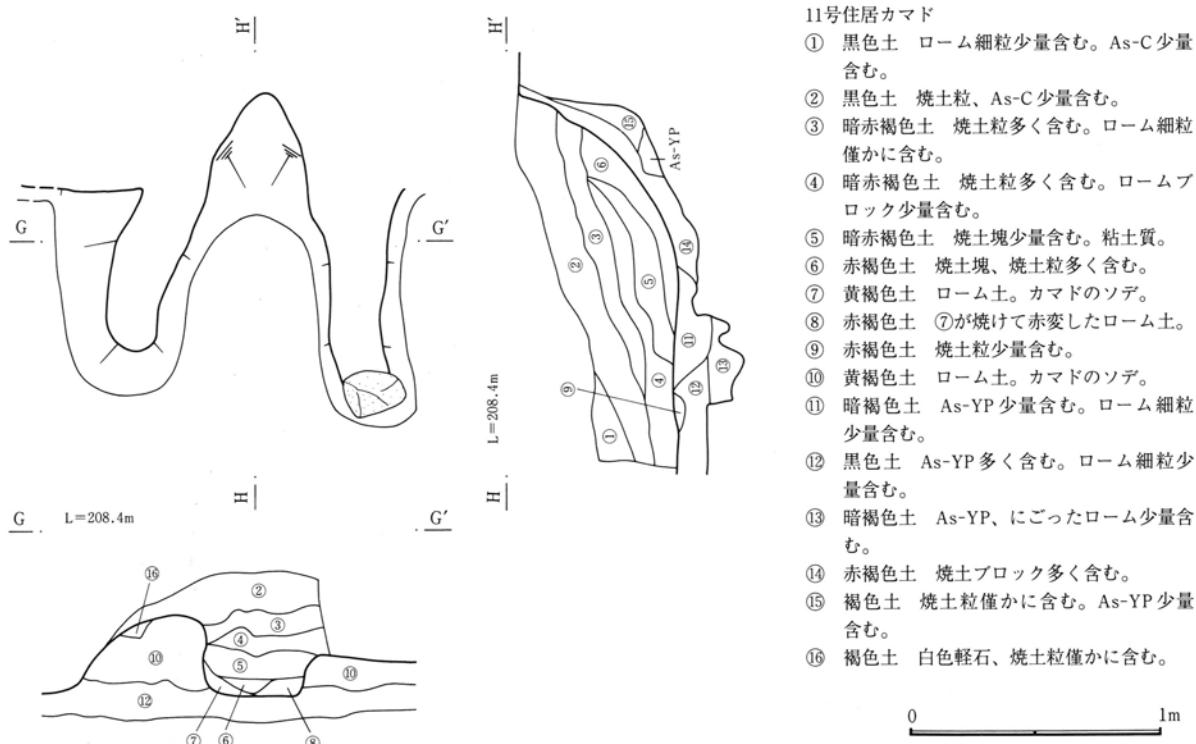
11号住居

- ① 黒褐色土 As-C 多く含む。ロームブロック僅かに含む。
- ② 暗褐色土 ロームブロック少量含む。軟質。
- ③ 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粗粒僅か含む。
- ④ 黒色土 ロームブロック、ローム粗粒少量含む。軟質。
- ⑤ 暗黄褐色土
- ⑥ 黒褐色土
- ⑦ 黄褐色土 As-YP 含む。
- ⑧ 黄褐色土 ローム土を含む。
- ⑨ 暗褐色土 As-YP、黒色土粒を少量含む。
- ⑩ 黄褐色土 ローム土主体。As-YP 少量含む。
- ⑪ 黒色土 As-YP、ローム粗粒少量含む。
- ⑫ 黄褐色土 As-YP 主体。黒色土混じる。
- ⑬ 暗黄褐色土 As-YP、ローム土主体。
- ⑭ 黒色土 As-YP 僅かに含む。ロームブロック多く含む。
- ⑮ 黄褐色土 ロームブロック主体。黒色土僅かに含む。



第280図 11号住居 (2)





第281図 11号住居 (3)

### 11号住居

位置 66区L-19グリッド 方位 N-2°-W

重複 平安時代(10世紀前半)の12号住居が南壁の一部に重複する。本住居の床面までは達していない。

写真 PL126

形状 長軸5.9m、短軸5.7mのほぼ正方形を呈する。

壁高 0.7mを測る。面積 27.5㎡を測る。

埋没土 軟質な暗褐色土を主体とする。観察によると自然に埋没したものと思われる。①層は本住居の埋没土を掘り込むように堆積しているため、本住居調査時には確認されなかった別遺構が存在している可能性がある。床面 貼り床は確認されなかった。特に硬化した部分も認められなかった。

貯蔵穴 竈右手前で検出された。径は88×78cm、深さは63cmを測る。

周溝 東壁の一部をのぞいて、ほぼ全周にわたって検出された。最大幅は21cm、深さは14cmを測る。

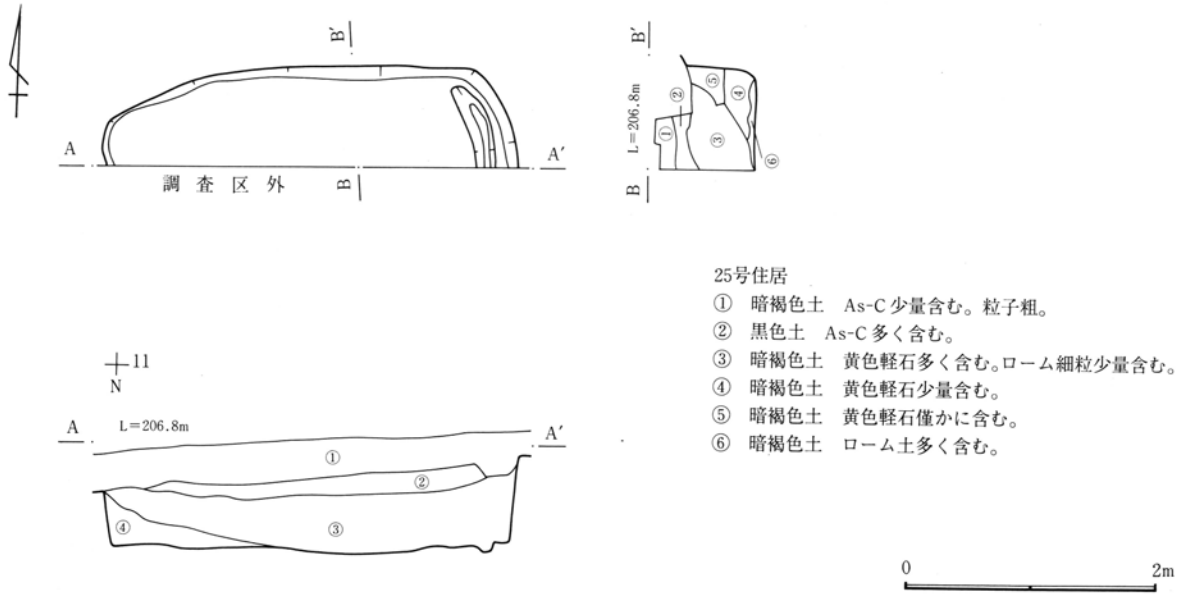
柱穴 ピットは8本検出された。そのうち、位置、形状からP1、P2、P3、P4が主柱穴に相当すると思われる。ただしP4は他の3本よりも浅い。

掘り方 床面から10~25cmほど掘り込まれている。

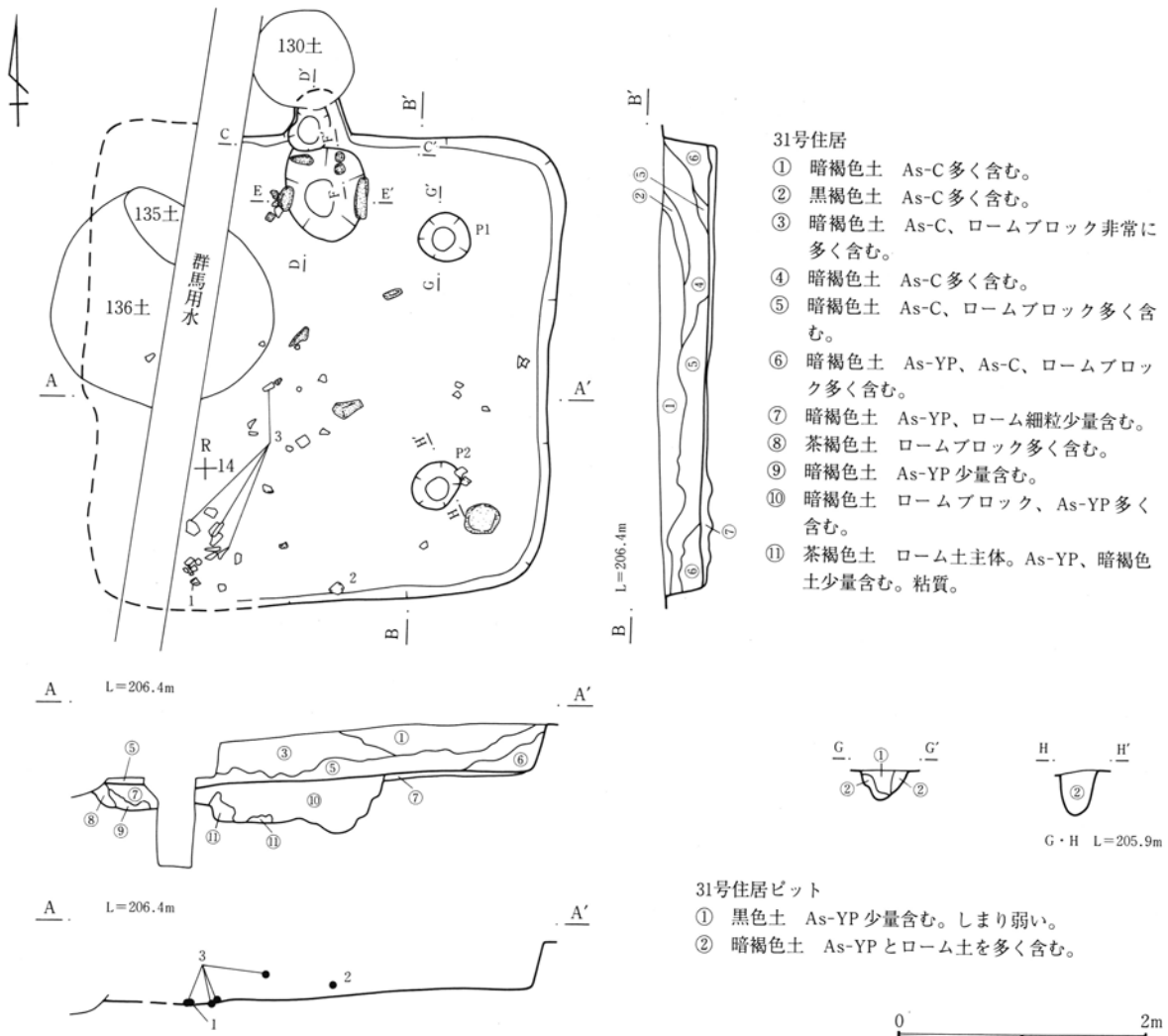
床下土坑が、住居中央やや東壁寄り、中央やや西壁寄りの地点から2基検出されている。東側の床下土坑1は径1.50×1.26m、深さ38cm、西側の床下土坑2は径1.70×1.48m、深さ45cmを測る。また、南東隅からも床下土坑状の掘り込みが検出されている。遺物 図示した遺物の他、土師器坏片10点、土師器甕片53点、須恵器碗片2点、須恵器甕片2点が出土している。1の坏は南壁に立てかけたような状況で出土している。

竈 位置 北壁中央 規模 全長1.27m、焚き口幅0.55mを測る。袖 ローム土で60cmほどの袖をハの字状に作る。右袖先端に礫を置き、補強材としている。燃焼部右側から袖にかけて一部攪乱を受けている。

考察 7世紀第2四半期の堅穴住居である。本遺跡における古墳時代の住居では最大の規模を持つが、遺物の出土は比較的少ない。

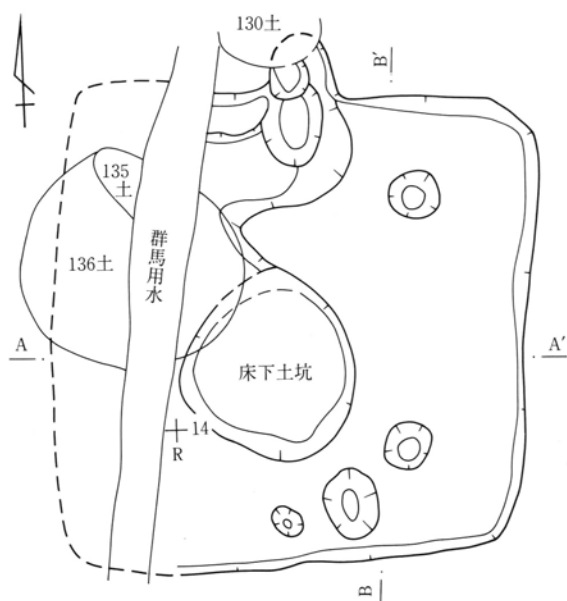


第282図 25号住居



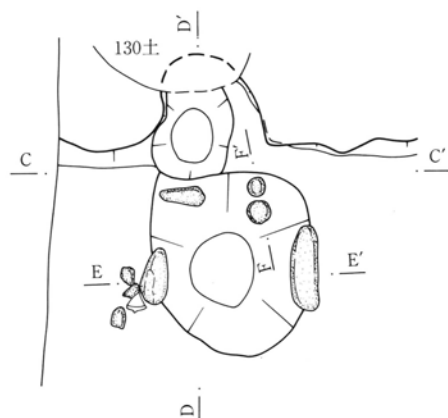
第283図 31号住居 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

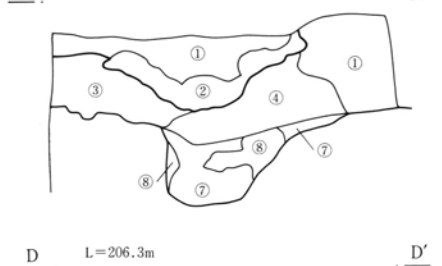


31号住居カマド

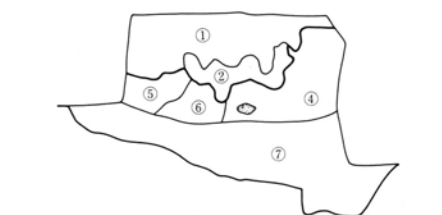
- ① 暗褐色土 As-C多く含む。ロームブロック少量含む。
- ② 褐色土 ローム粗粒非常に多く含む。焼土粒僅かに含む。
- ③ 暗褐色土 As-C多く含む。ローム細粒少量含む。
- ④ 暗褐色土 ローム粗粒多く含む。As-C、焼土粒僅かに含む。
- ⑤ 暗褐色土 ロームブロック、As-C多く含む。
- ⑥ 褐色土 ローム細粒非常に多く含む。焼土粒多く含む。As-C少量含む。
- ⑦ 褐色土 ローム細粒多く含む。ロームブロック含む。As-YP少量含む。軟質。
- ⑧ 黄褐色土 ロームの二次堆積。



C L=206.3m C'



D L=206.3m D'



E L=206.0m E' F L=206.0m F'



第284図 31号住居 (2)

25号住居

位置 66区M-11グリッド 方位 N-84°-E

写真 PL127

形状 大部分が調査区外のため不明だが、1辺が2.98mの方形を呈すると思われる。壁高 0.58mを測る。埋没土 暗褐色土を主体とする。

周溝 東壁の一部で検出された。竈 北壁で検出されなかったため東壁に構築されていると思われる。遺物 出土しなかった。考察 埋没土から古墳時代の住居と判断した。

31号住居

位置 66区Q-14グリッド他 重複 縄文時代の130号土坑を切る。住居床下から縄文時代の135号、136

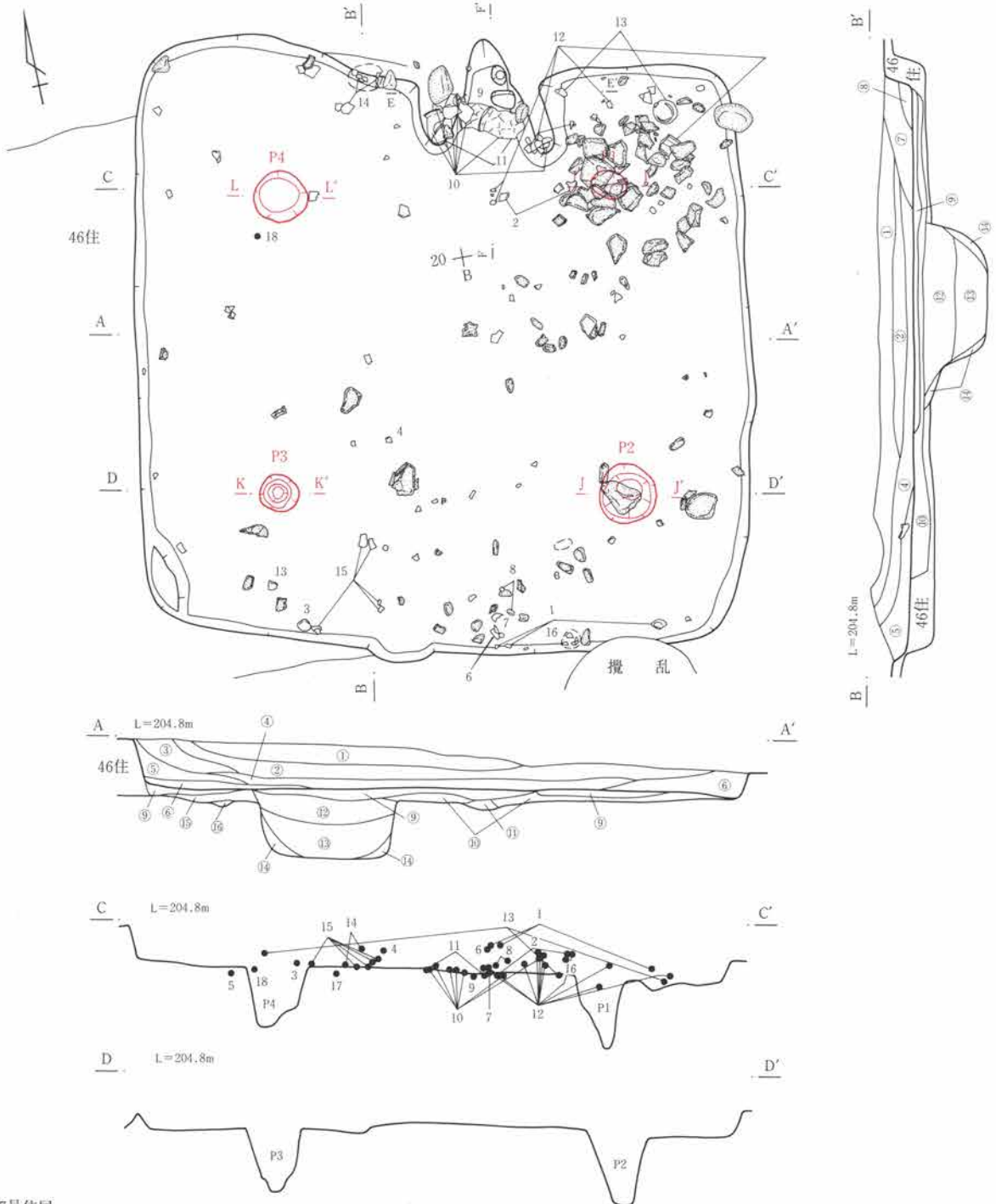
号土坑が検出された。群馬用水、町道によって西壁を失う。写真 PL127

形状 1辺が3.7mの方形を呈すると思われる。

壁高 0.4m 面積 不明。埋没土 As-Cを多く含む暗褐色土を主体とする。柱穴 P1、P2が主柱穴に相当すると思われる。掘り方 床面から5cmほど掘り込まれている。遺物 図示した遺物の他29点の土師器坏、甕片が出土している。

竈 位置 北壁ほぼ中央 規模 130号土坑調査の際に誤って一部を破壊するため全長は不明。焚き口幅は0.62mを測る。袖 残存が不良だが芯材と思われる礫が出土している。

考察 7世紀後半の竪穴住居と思われる。



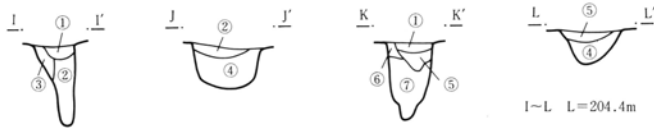
37号住居

- |   |   |
|---|---|
| <p>① 黒色土 As-C多く含む。</p> <p>② 黒色土 As-C少量含む。</p> <p>③ 黒褐色土 As-C少量含む。ローム微粒僅かに含む。</p> <p>④ 黒褐色土 As-C少量含む。ローム細粒僅かに含む。</p> <p>⑤ 黒褐色土 As-C少量含む。ローム細粒僅かに含む。焼土粒僅かに含む。</p> <p>⑥ 黒褐色土 As-C僅かに含む。焼土粒僅かに含む。粒子密。</p> <p>⑦ 黒褐色土 As-C多く含む。焼土粒少量含む。ローム細粒少量含む。</p> <p>⑧ 黒褐色土 As-C僅かに含む。焼土粒僅かに含む。ローム微粒少量含む。</p> | <p>⑨ 黒褐色土 貼り床。ロームブロック、炭化物含む。</p> <p>⑩ 黒褐色土 ロームブロック含む。</p> <p>⑪ 黄褐色土 ロームブロック多く含む。</p> <p>⑫ 黄褐色土 ロームブロック、炭化物含む。</p> <p>⑬ 暗黄褐色土 ロームブロック少量含む。</p> <p>⑭ 黄褐色土 ロームブロック多く含む。</p> <p>⑮ 暗黄褐色土 ロームブロック少量含む。</p> <p>⑯ 暗黄褐色土 ローム土主体。</p> |
|---|---|

第285図 37号住居 (1)

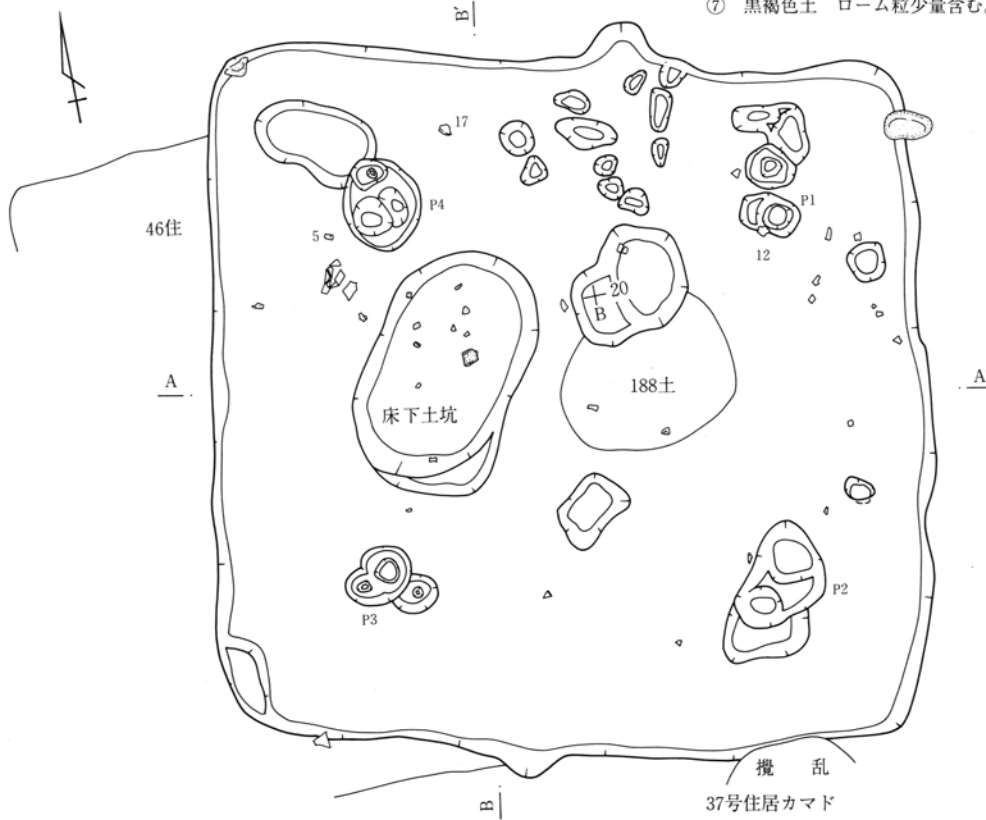
0 2m

第4章 検出された遺構と遺物



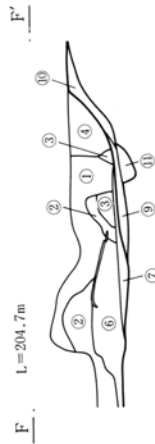
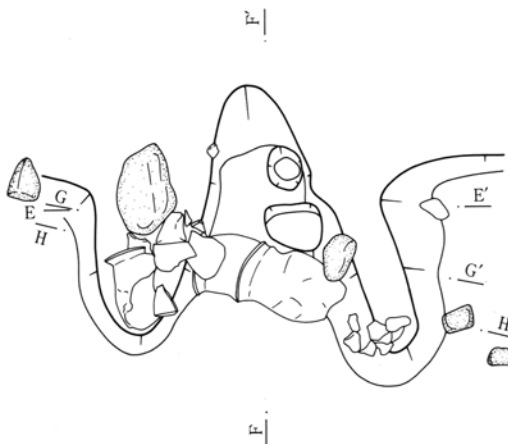
37号住居ビット

- ① 黒色土 ローム粒僅かに含む。ロームブロック含む。
- ② 黒褐色土 ローム粒僅かに含む。焼土粒僅かに含む。
- ③ 黒褐色土 ローム粒少量含む。焼土粒僅かに含む。
- ④ 暗褐色土 ローム粒僅かに含む。焼土粒僅かに含む。
- ⑤ 黒褐色土 ローム粒僅かに含む。しまり弱い。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒少量含む。かたくしまる。
- ⑦ 黒褐色土 ローム粒少量含む。



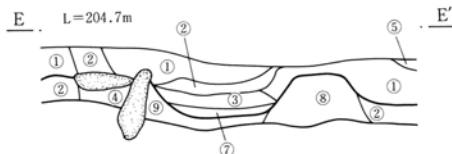
37号住居カマド

- ① 黒褐色土 ローム、焼土、炭化物が混じる。カマドの崩落土。
- ② 黄褐色土 ローム、焼土、炭化物含む。
- ③ 焼土層
- ④ 黄褐色土 ローム、焼土のブロック含む。カマドソデの崩落土。
- ⑤ ロームブロック
- ⑥ 黒色土 As-C、炭化物、焼土多く含む。
- ⑦ 赤褐色土 焼土ブロック、炭化物、As-Cを含む。
- ⑧ カマドソデ粘土 焼土、As-C僅かに含む。
- ⑨ 焼土層
- ⑩ 赤褐色土 焼土主体。ローム粗粒、炭化物多く含む。
- ⑪ 暗褐色土 焼土、炭化物少量含む。



G L=204.7m G'

H L=204.7m H'



第286図 37号住居 (2)

37号住居

位置 66区B-19グリッド他 方位 N-13°-E

重複 弥生時代後期の46号住居を切る。床下から弥生時代後期の188号土坑が検出された。

写真 P L 128

形状 長軸5.8m、短軸5.5mのほぼ正方形を呈する。

壁高 0.4mを測る。面積 25.1m<sup>2</sup>

埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。

床面 炭化物を含む黒褐色土を貼るが軟らかい。

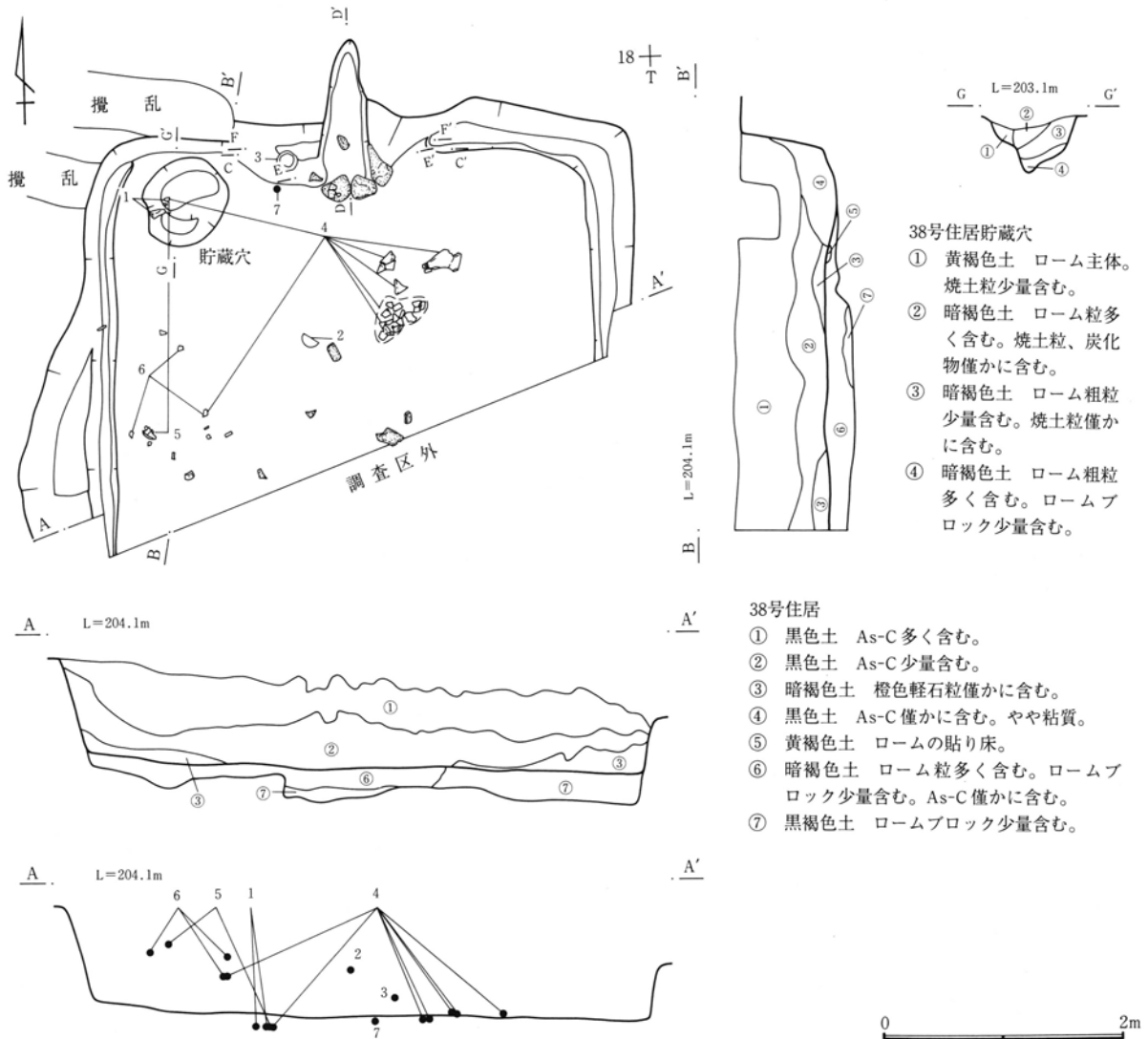
柱穴 P 1～P 4が主柱穴に相当すると思われる。

掘り方 床面から15cmほど掘り込まれている。中央やや西壁寄りで床下土坑が検出されている。径1.91×1.14m、深さ50cmを測る。遺物 図示した遺物

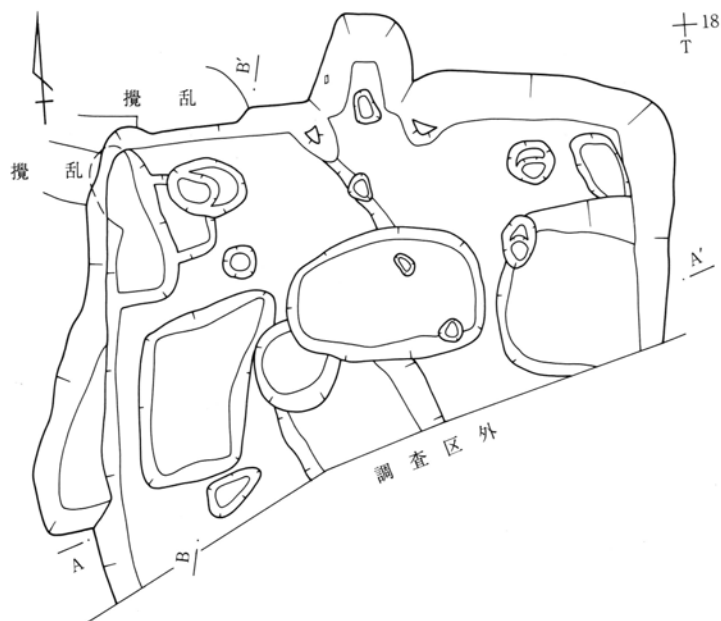
の他、土師器坏片121点、甕片309点、須恵器坏片2点、甕片3点が出土している。竈の右手前に土器および礫が集中して出土している。19の耳環は竈手前の床面から出土しているが詳細な出土位置は記録しなかった。

竈 位置 北壁中央 規模 全長1.1m、最大幅1.05mを測る。袖 ローム土で60cmほどの長さでハの字状に作り、両袖から補強材および芯材と思われる礫が出土している。遺物 長胴甕5個体が焚き口に並べられた状態で出土している。残存 燃烧部に厚さ4～8cmの焼土。天井は崩落している。

考察 7世紀第3四半期の堅穴住居と思われる。



第287図 38号住居 (1)



38号住居

位置 65区T-17グリッド 方位 N-7°-E

写真 PL129

形状 1辺4.6mの隅丸方形を呈すると思われる。

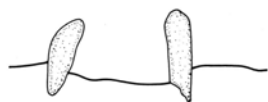
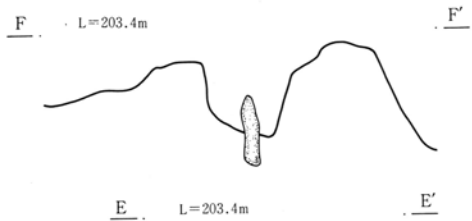
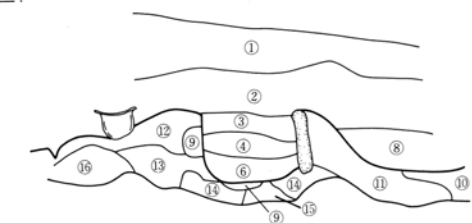
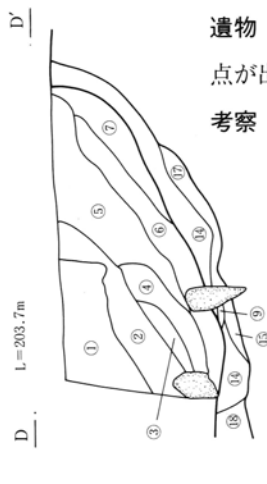
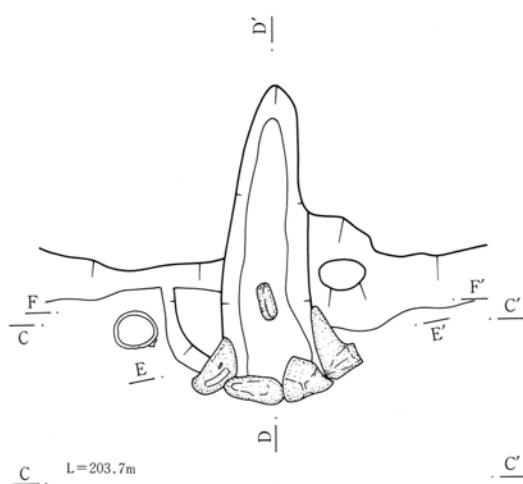
壁高 0.78mを測る。埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。床面 一部に貼床状のローム土が認められる。貯蔵穴 北西隅で検出。径67×62cm、深さ46cm。

掘り方 床面から20cmほど掘り込まれている。住居中央に床下土坑状の掘り込み。

竈 位置 北壁中央 規模 全長1.27m、焚き口幅0.55mを測る。袖 ローム土で作り、芯材と思われる礫が出土している。

遺物 土師器坏、甕片795点、須恵器片5点が出土している。竈左側から完形の甕。

考察 6世紀第3四半期であろう。

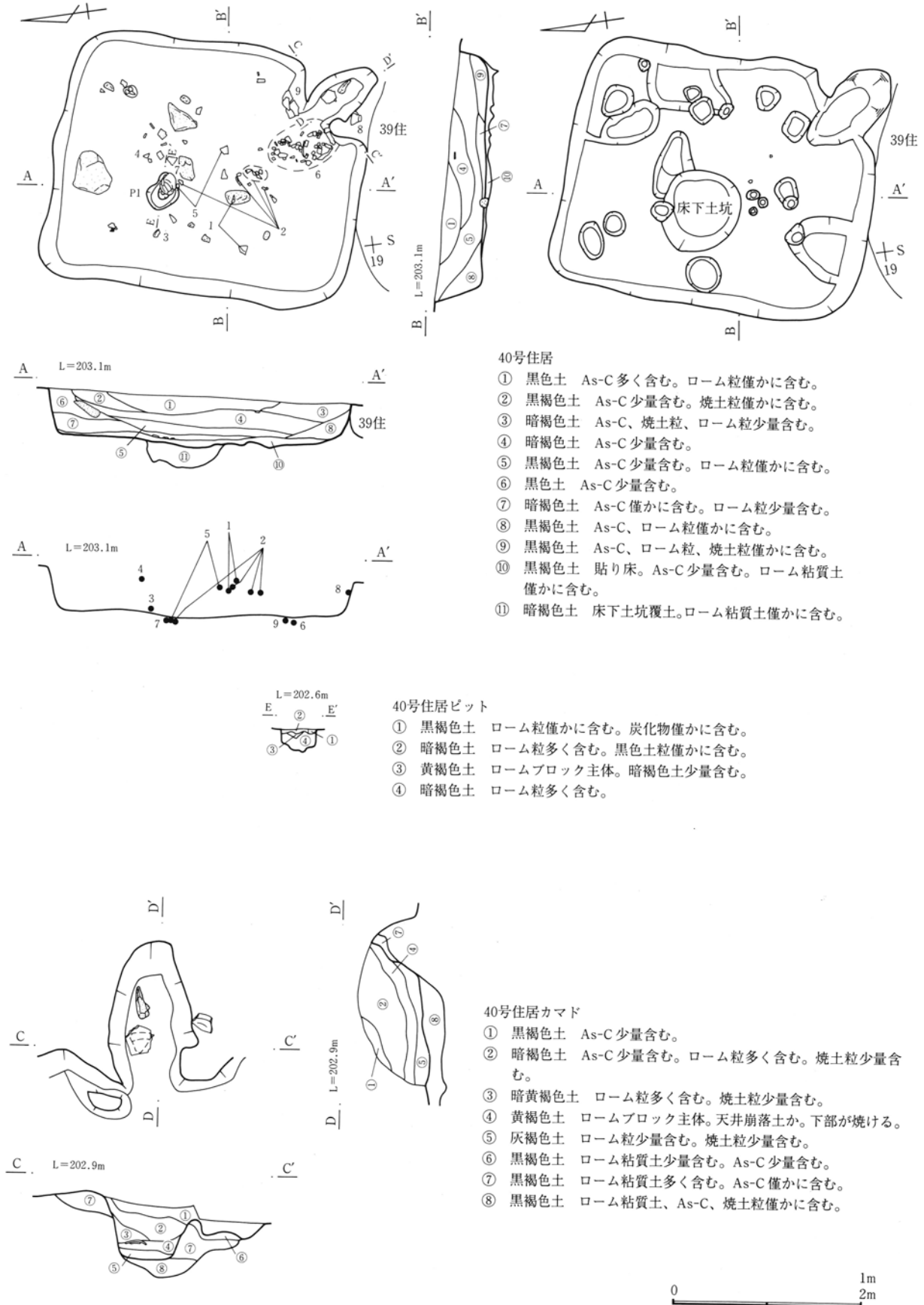


38号住居カマド

- ① 黒色土 As-C少量含む。焼土粒僅かに含む。
- ② 暗褐色土 As-C僅かに含む。焼土粒少量含む。黒色土ブロック少量含む。
- ③ 暗褐色土 焼土粒少量含む。
- ④ 暗褐色土 焼土粒少量含む。黒色土ブロック多く含む。
- ⑤ 褐色土 焼土粒僅かに含む。
- ⑥ 暗褐色土 焼土粒、焼土ブロック少量含む。
- ⑦ 暗褐色土 焼土粒僅かに含む。
- ⑧ 暗褐色土 焼土粒少量含む。As-C少量含む。
- ⑨ 赤褐色土 焼土ブロック。壁の焼けたもの。
- ⑩ 黒褐色土 焼土粒、ローム粒僅かに含む。
- ⑪ 黒褐色土 ローム粒少量含む。焼土粒僅かに含む。
- ⑫ 暗黄褐色土 黄色軽石少量含む。焼土粒僅かに含む。
- ⑬ 暗黄褐色土 黄色軽石少量含む。焼土粒僅かに含む。⑫より暗い。
- ⑭ 暗褐色土 焼土粒少量含む。ローム粒僅かに含む。
- ⑮ 暗褐色土 焼土粒僅かに含む。ややしまる。
- ⑯ 黒褐色土 焼土粒僅かに含む。ローム粒少量含む。
- ⑰ 暗褐色土 焼土粒僅かに含む。
- ⑱ 暗褐色土 焼土粒少量含む。ローム粒僅かに含む。

第288図 38号住居 (2)





第289図 40号住居



#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 40号住居

**位置** 65区R-19グリッド他 **方位** N-150°-E  
**重複** 平安時代（11世紀前半）の39号住居と南東隅で接する。 **写真** P L 130  
**形状** 長軸3.27m、短軸2.67mの隅丸長方形を呈する。 **壁高** 0.45mを測る。 **面積** 6.6㎡を測る。  
**埋没土** As-Cを含む暗褐色土、黒褐色土を主体とする。観察によると自然埋没と思われる。  
**床面** 貼り床は認められなかった。特に硬化した部分も認められなかった。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** ピットは1本検出された。P 1の他に3ヶ所で、深さ2～3cmのピット状の掘り込みが確認されている。 **掘り方** 床面から4～10cm掘り込まれている。住居ほぼ中央で床下土坑が検出されている。径88×80cm、深さ30cmを測る。  
**遺物** 図示した遺物の他、土師器坏片57点、甕片107点、須恵器甕片3点が出土している。6の甕は竈手前でつぶれたような状態で出土しているが、竈から崩落したものとも考えられる。また、住居埋没途中で投げ込まれたと思われる礫が4点ほど出土している。  
**竈** **位置** 南東コーナー部 **規模** 全長0.94m、焚き口幅0.23mを測る。 **袖** ローム土を含む黒褐色土で20cmほどの袖を作る。 **遺物** 埋没途中で流れこんだと思われる甕片が出土している。  
**残存** 燃烧部に天井が崩落した状況が確認できる。  
**考察** 7世紀後半の竪穴住居と思われる。今回の報告の中では、コーナー部に竈を持つ住居は本住居のみである。

##### 44号住居

**位置** 75区P-3グリッド他 **方位** N-13°-E  
**重複** 弥生時代後期の43号住居の埋没土を掘り込んで構築される。床下土坑以外では43号住居を破壊していないと思われる。 **写真** P L 130  
**形状** 住居北西隅が調査区外にかかっているが、長軸4.62m、短軸3.50mの隅丸長方形を呈するものと

思われる。 **壁高** 0.5mを測る。 **面積** 不明  
**埋没土** As-Cを含む黒褐色土を主体とする。観察によると自然埋没と思われる。

**床面** As-C及びロームブロックを含む茶褐色土で貼り床を作るが、あまり踏み固められていない。

**貯蔵穴** 北東隅で検出されている。径は73×65cm、深さ25cmを測る。 **周溝** 調査された範囲ではほぼ全周にわたって検出された。最大幅30cm、深さ8cmを測る。 **柱穴** ピットは1本検出されている。柱穴に相当するかは不明である。

**掘り方** 床面から6cmほど掘り込まれている。住居中央やや東寄りで床下土坑が検出されている。径は1.38×0.86m、深さ25cmを測る。単一の埋没土のため、人為的な埋没が推定される。

**遺物** 図示した遺物の他、土師器坏片200点、甕片258点、須恵器坏片2点、甕片4点、高台部片1点が出土している。重複する43号住居で取り上げた遺物にも本住居の遺物が含まれると思われる。8は比較的広範囲の接合状況を示している。遺物の出土状況は住居の西側に集中する傾向が見られる。

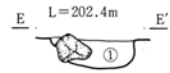
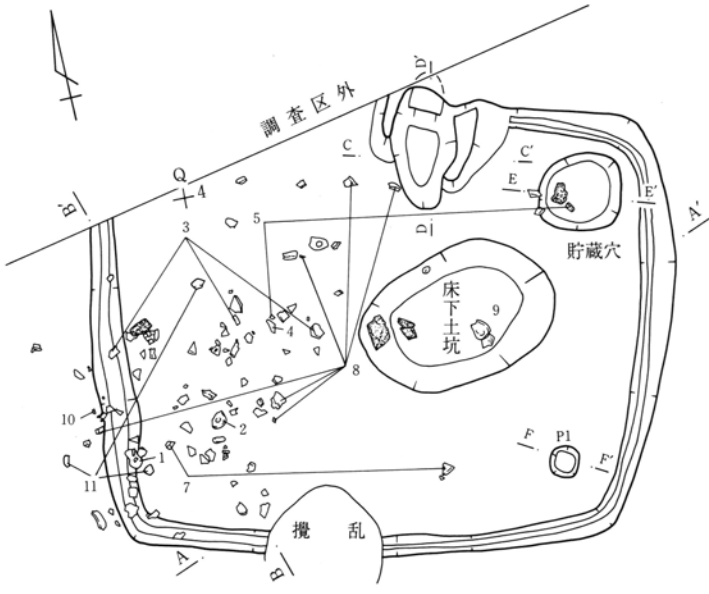
**竈** **位置** 北壁ほぼ中央 **規模** 一部が調査区外にかかるが全長0.9m、焚き口幅0.2mを測る。

**袖** 貼り床と近似する茶褐色土で、60cmほどの袖を馬蹄状に作る。

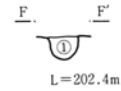
**残存** 燃烧部に4cmほどの焼土が堆積し、天井が崩落した状況が観察できる。

**考察** 出土遺物の様相から6世紀中葉の竪穴住居であると思われる。

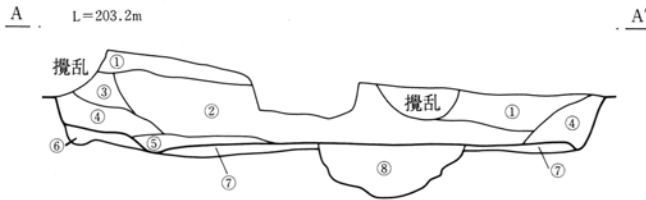
第4節 古墳時代



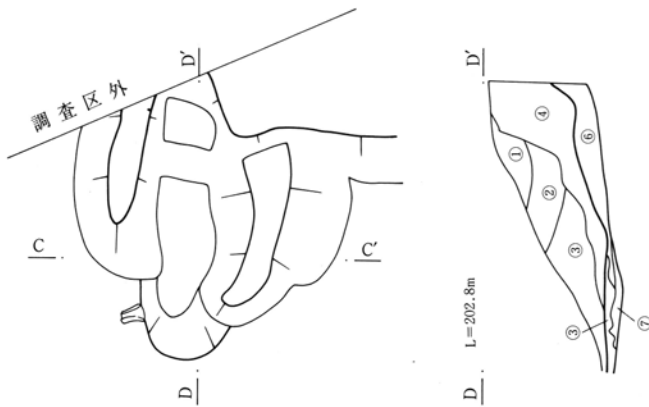
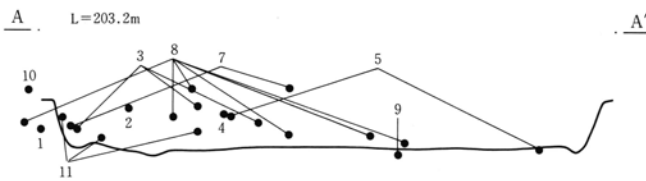
44号住居貯蔵穴  
① 茶褐色土 As-C、焼土粒、炭化物少量含む。



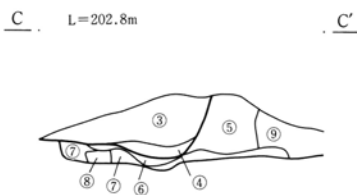
44号住居ピット  
① 暗褐色土 As-C少量含む。



- 44号住居
- ① 黒褐色土 As-C含む。
  - ② 黒褐色土 As-C多く含む。炭化物含む。
  - ③ 暗褐色土 As-C少量含む。
  - ④ 暗褐色土 As-C含む。
  - ⑤ 暗黄褐色土 As-C、粘土ブロック含む。
  - ⑥ 茶褐色土 As-C多く含む。
  - ⑦ 茶褐色土 貼り床。As-C、粘土ブロック含む。
  - ⑧ 黒褐色土 床下土坑覆土。ローム粒、As-C少量含む。



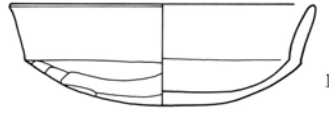
- 44号住居カマド
- ① 黒褐色土 ローム粘質土多く含む。As-C少量含む。
  - ② 暗褐色土 ローム粘質土少量含む。As-C、焼土粒僅かに含む。
  - ③ 黒褐色土 ローム粘質土多く含む。As-C少量含む。焼土粒、炭化物僅かに含む。
  - ④ 赤褐色土 焼土粒主体。
  - ⑤ 茶褐色土 As-C僅かに含む。カマドソデ。
  - ⑥ 赤褐色土 焼土層。
  - ⑦ 黒褐色土 As-C、炭化物少量含む。
  - ⑧ 赤褐色土 焼土ブロック。
  - ⑨ 黒灰色土 粘土ブロック、焼土、炭化物混。



第290図 44号住居

第4章 検出された遺構と遺物

3 住居出土の遺物

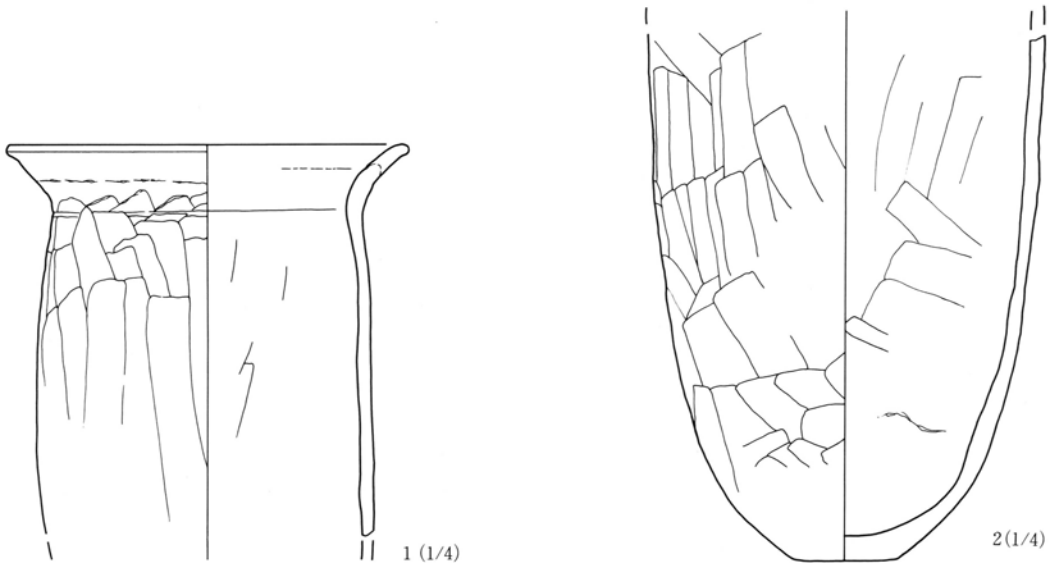


第291図 7号住居出土遺物

0 10cm

7号住居出土土器観察表 (第291図 P L 131)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 坏	口縁一部 欠	口 12.0 底 — 高 4.0	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい黄橙、底部外面は 黒褐色 ③細砂粒を含む	浅い底部から弱い稜を経て口縁は僅かに外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面は撫で。外面は篋削り。	

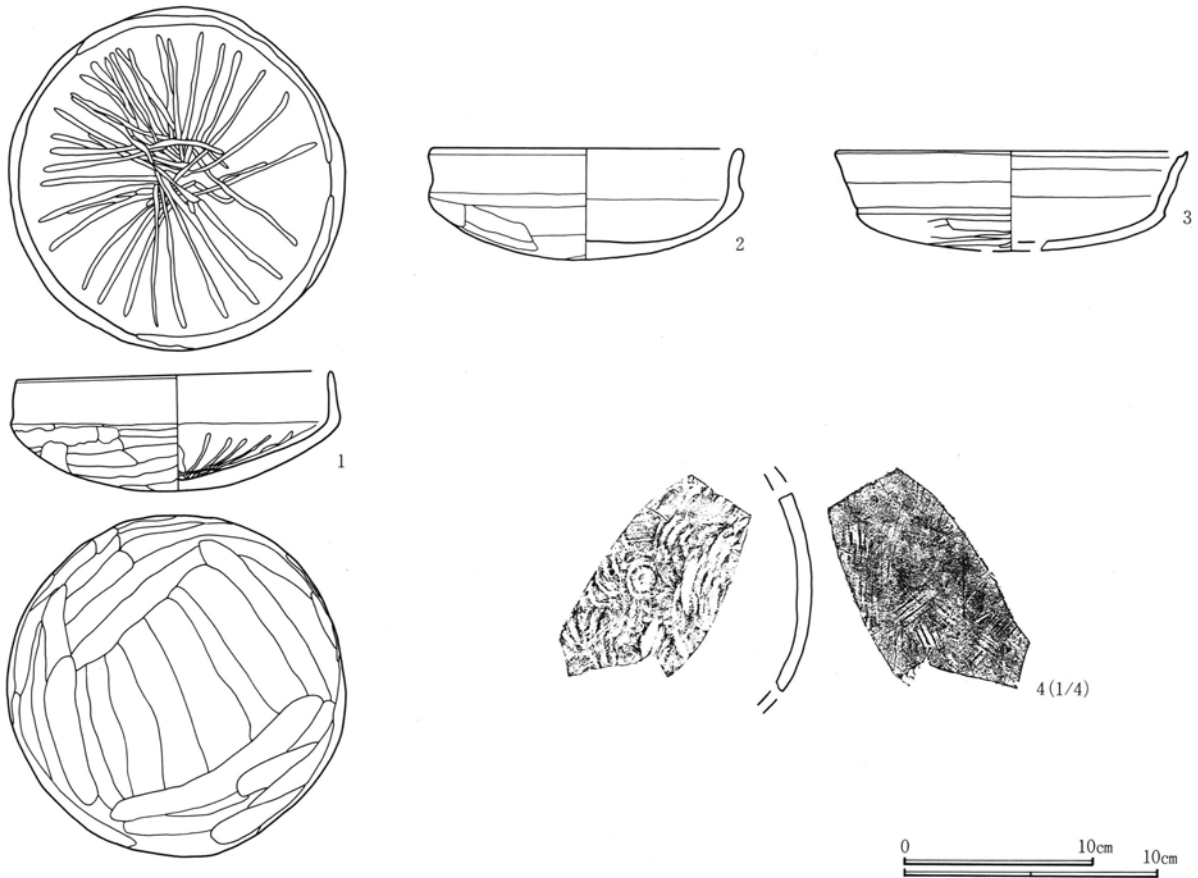


第292図 8号住居出土遺物

0 10cm

8号住居出土土器観察表 (第292図 P L 131)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 甕	口縁～胴 部中位 2/3残存	口 21.2 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒、片岩を含む	ほぼ直線的な胴部から、口縁は湾曲して外反する。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は横位の篋撫で。外面は縦位の篋削り。	
2 土師器 甕	胴中位～ 底部3/4 残存	口 — 底 5.2 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒、片岩を含む	小さな平底の底部から、胴部はやや湾曲して立ち上がる。胴部内面中位は縦位篋撫で、下位は横位篋撫で。胴部外面は縦位篋削り。	

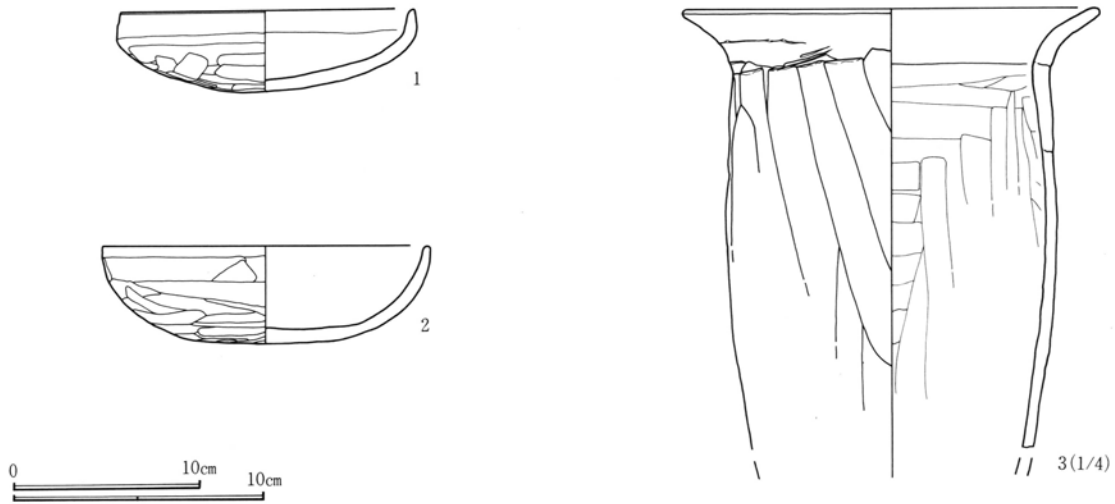


第293図 11号住居出土遺物

11号住居出土土器観察表 (第293図 P L131)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 坏	口縁一部 欠	口 12.6 底 — 高 4.6	①酸化焰、やや硬質 ②黄灰色 ③砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部からやや強い稜を経て、口縁は直立する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面は横撫での後放射状の艶磨き。底部外面は艶削り。	
2 土師器 坏	口縁～底 部3/4残 存	口 12.6 底 — 高 4.4	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部からやや強い稜を経て、口縁は僅かに外反する。口縁部内、外面、底部内面は横撫で。底部外面は艶削り。	
3 土師器 坏	口縁～底 部1/2残 存	口 <13.9> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②明赤褐色 ③細砂粒を含む	浅い底部からやや強い稜を経て、口縁は直線的に外反する。口縁内側端部に1条の沈線が巡る。口縁内、外面、底部内面は横撫で。外面は艶削り。	
4 須恵器 甕	胴部片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②灰白色 ③小礫を含む	内、外面叩き目。	

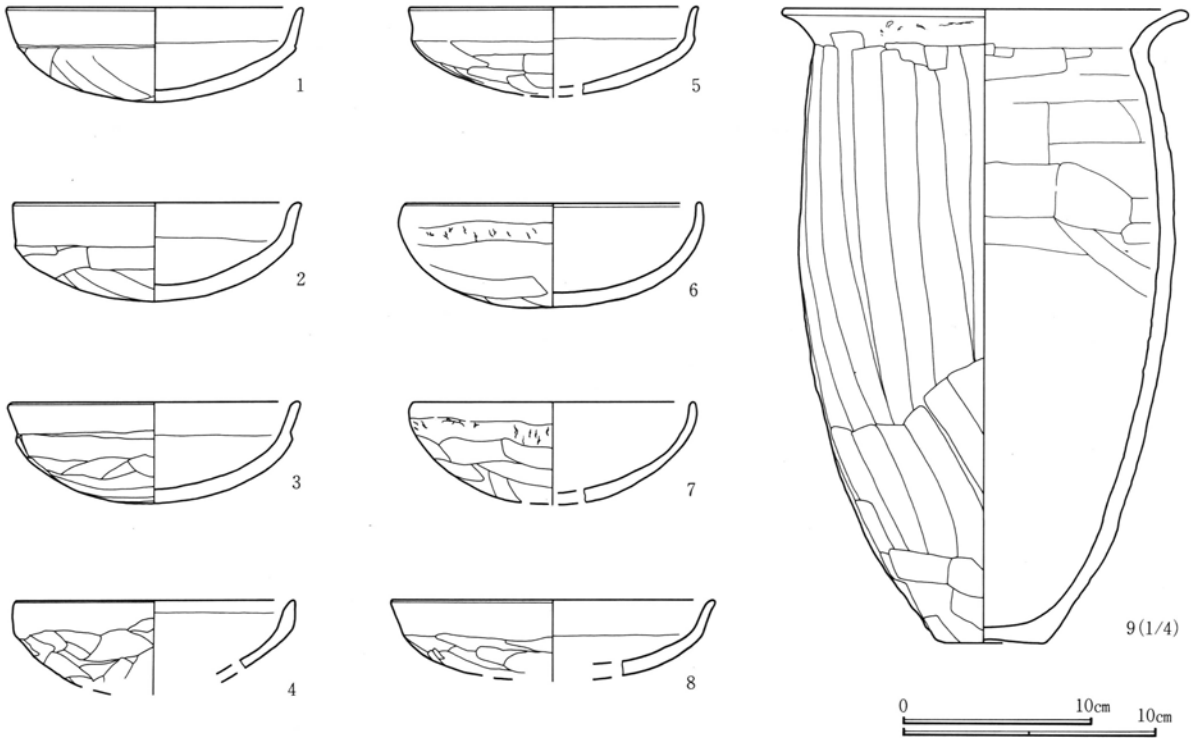
第4章 検出された遺構と遺物



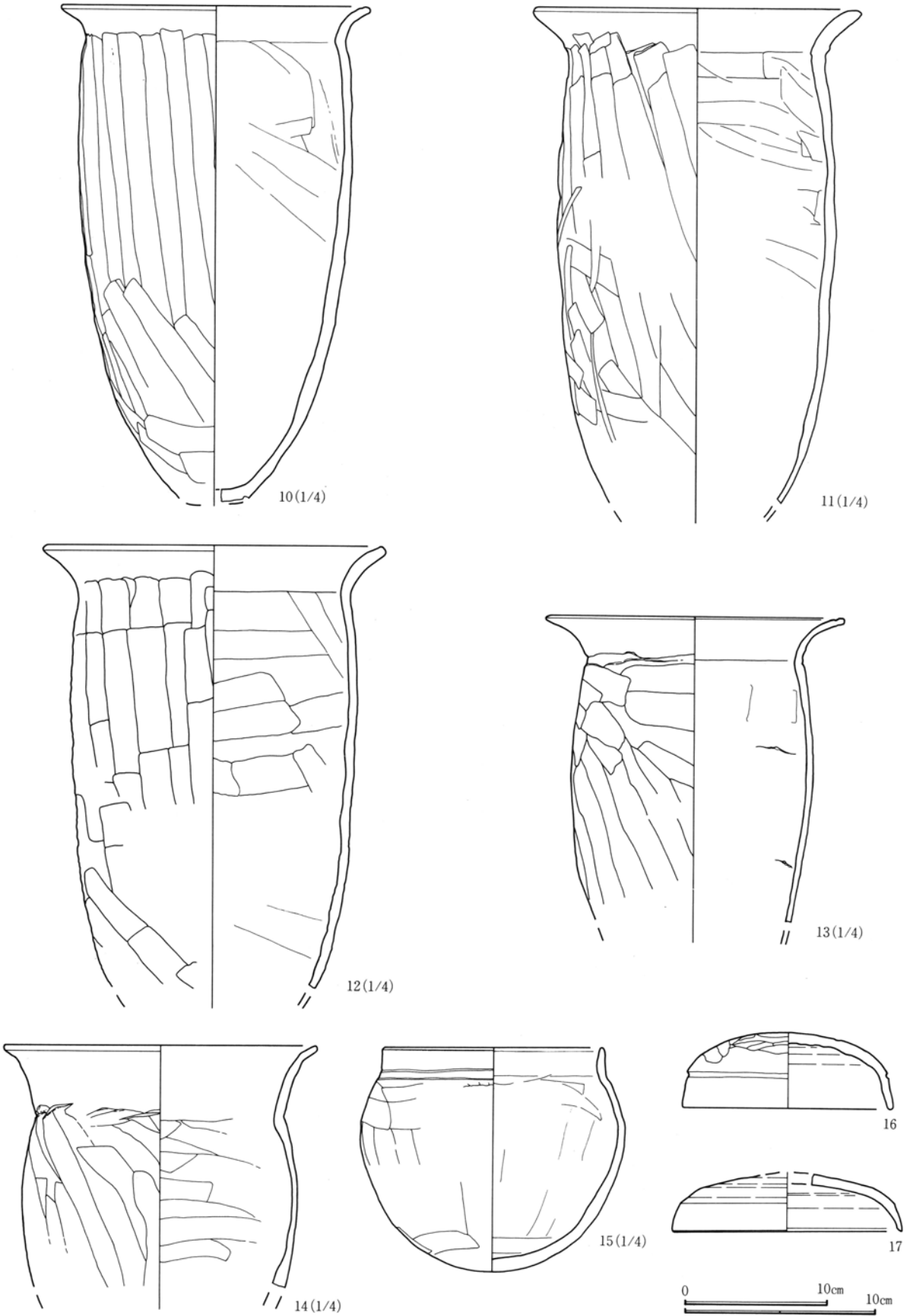
第294図 31号住居出土遺物

31号住居出土土器観察表 (第294図 P L 131)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 坏	口縁一部 欠	口 11.6 底 — 高 3.2	①酸化焰、やや硬質 ②橙 ③砂粒、片岩を含む	緩やかに湾曲する底部から、口縁は直立する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面は横撫で、外面篋削り。	
2 土師器 坏	口縁~底 部1/2残 存	口 <12.9> 底 — 高 3.9	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい褐色 ③砂粒を含む	緩やかな丸底から体部は湾曲して立ち上がり、口縁は短く直立する。口縁部内、外面、体部内面上位は横撫で。体部内面下位撫で。体部外面篋削り。	
3 土師器 甕	口縁~胴 部中位 1/2残存	口 23.0 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒、片岩を含む	胴部上位に僅かに脹らみを持ち、口縁は緩やかに外反する。口縁部内、外面は横撫で、胴部内面は横位及び縦位の篋撫で。胴部外面は斜縦位の篋削り。	



第295図 37号住居出土遺物 (1)



第296図 37号住居出土遺物(2)

第4章 検出された遺構と遺物

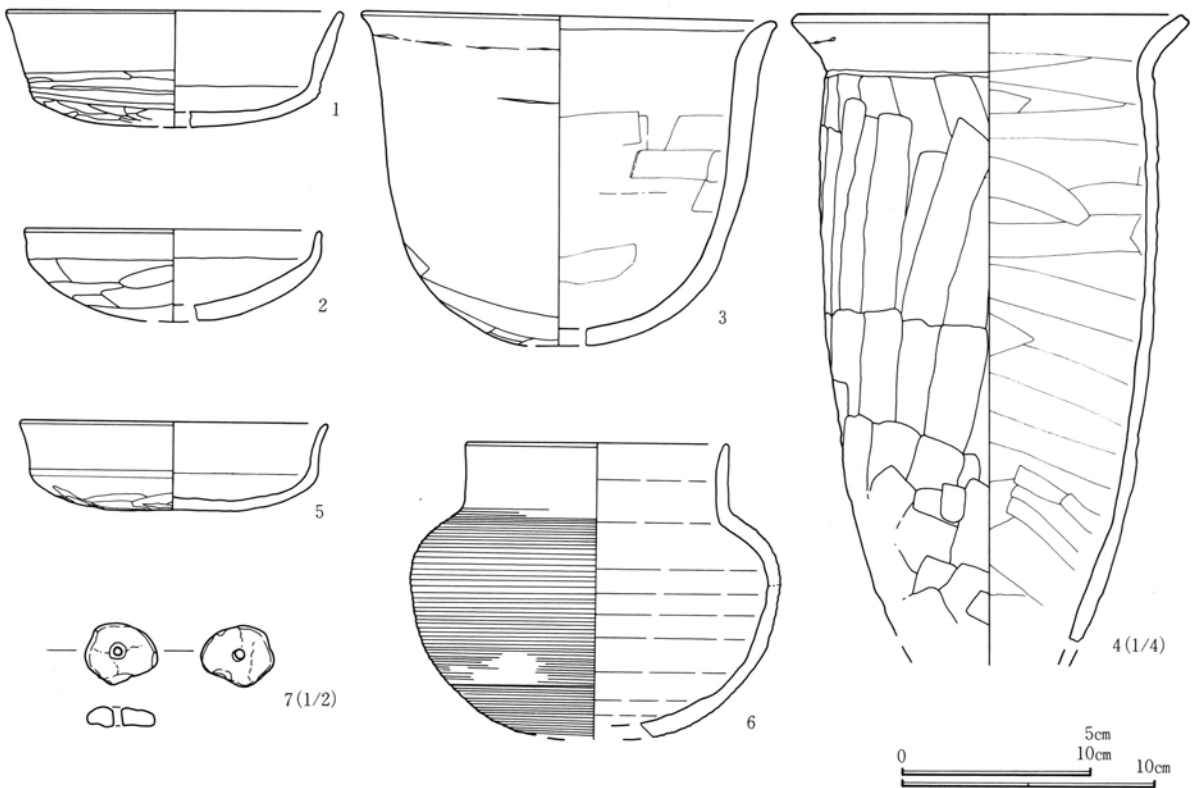


第297図 37号住居出土遺物 (3)

37号住居出土遺物観察表 (第295~297図 P L132、133)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 坏	口縁一部 欠	口 11.7 底 — 高 3.7	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい赤褐色 ③細砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から、弱い稜線を経て口縁部は僅かに外傾する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面横撫で、外面篋削り。	
2 土師器 坏	口縁~底 部2/3残 存	口 11.5 底 — 高 3.9	①酸化焰、やや硬質 ②橙 ③砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から、弱い稜線を経て口縁部は僅かに外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面横撫で。外面篋削り。	
3 土師器 坏	口縁~底 部2/3残 存	口 <11.6> 底 — 高 4.0	①酸化焰、やや硬質 ②橙 ③砂粒を含む	湾曲する底部から、やや強めの稜線を経て口縁は短く外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面撫で。外面篋削り。	
4 土師器 坏	口縁~胴 下位1/2 残存	口 11.1 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい褐色 ③砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から、口縁は短く直立する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面横撫で、外面篋削り。	
5 土師器 坏	口縁~底 部1/2残 存	口 <10.5> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③細砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から、やや強めの稜線を経て、口縁は僅かに外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面横撫で、外面篋削り。	
6 土師器 坏	口縁~底 部1/2残 存	口 11.8 底 — 高 4.1	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒を含む	湾曲する底部から、口縁は短く僅かに内傾する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面撫で、外面篋削り。	
7 土師器 坏	口縁~底 部1/5残 存	口 <11.4> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②明赤褐色 ③細砂粒を含む	湾曲する底部から、口縁は短く僅かに内湾する。口縁外面横撫で。口縁、底部内面撫で。底部外面篋削り。	
8 土師器 坏	口縁~底 部1/5残 存	口 <12.9> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②明赤褐色 ③砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から、やや強めの稜線を経て口縁は緩やかに外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面横撫で、外面篋削り。	
9 土師器 甕	ほぼ完形	口 21.6 底 5.4 高 33.5	①酸化焰、やや硬質 ②明赤褐色 ③砂粒、片岩、雲母を含む	小さな平底の底部から胴部は緩やかに外反して立ち上がり、胴部上位に僅かに脹らみを持つ。口縁は緩やかに外反し、口縁内側に強い稜を持つ。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は篋撫で、外面は縦位及び斜縦位の篋削り。	
10 土師器 甕	底部欠	口 21.6 底 — 高 (34.3)	①酸化焰、やや軟質 ②明赤褐色・黒褐色 ③砂粒、片岩、雲母を含む	平底と思われる小さな底部から、胴部は緩やかに外反して立ち上がり、胴部上位に僅かに脹らみを持つ。口縁は緩やかに外反し、口縁内側にやや強い稜を持つ。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は斜位の篋撫で。胴部上位は縦位の、胴部下位は斜縦位の篋削り。	
11 土師器 甕	口縁~胴 一部、底 部欠	口 23.0 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒、片岩、雲母を含む	胴部は緩やかに外反して立ち上がり、胴部中位に僅かに脹らみを持つ。口縁は緩やかに外反する。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は横位の篋撫で。外面は斜縦位の篋削り。	
12 土師器 甕	口縁~胴 部下位 1/2残存	口 <24.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②明赤褐色 ③砂粒、片岩、雲母を含む	胴部は緩やかに外反して立ち上がり、胴部上位に僅かに脹らみを持つ。口縁は緩やかに外反する。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は横位の篋撫で、外面は縦位の篋削り。	
13 土師器 甕	口縁~胴 部中位	口 20.9 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③細砂粒、雲母を含む	胴部中位に僅かに脹らみを持ち、口縁は緩やかに外反する。口縁内側に弱い稜を持ち、口縁端部に1条の沈線が巡る。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は篋撫で、胴部上位は横位、中位は斜縦位の篋削り。	
14 土師器 甕	口縁~胴 部中位 1/2残存	口 <22.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい褐色 ③砂粒、雲母を含む	胴部は上位に僅かに脹らみを持ち、口縁は屈曲して直線的に外反し、端部はさらに外反する。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は横位の篋撫で、外面は斜縦位の篋削り。	

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
15 土師器 小型甕	口縁～底部2/3残存	口 15.5 底 — 高 15.5	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい橙 ③赤褐色粒を含む	丸底の底部から球形の胴部、口縁は直立気味に立ち上がる。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は匏撫で、外面は匏削り。	
16 須恵器 蓋か	天井部～端部3/4残存	口 11.0 底 — 高 3.95	①還元焰、やや硬質 ②灰色 ③砂粒を含む	天井部と口縁部との境界に1条の沈線が巡る。胴部内面と口縁部外面は轆轤整形。天井部は轆轤整形ののち、匏削り。	
17 須恵器 蓋か	天井部～端部1/3残存	口 <12.0 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②灰白色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。天井部と口縁部との境界に段を持つ。	
18 石製品 垂飾	一部欠	長径 2.2 短径 2.2 厚み 1.4		径4mmの孔が両側穿孔によってあけられる。	滑石製
19 金環		外径 1.9 内径 1.0			



第298図 38号住居出土遺物

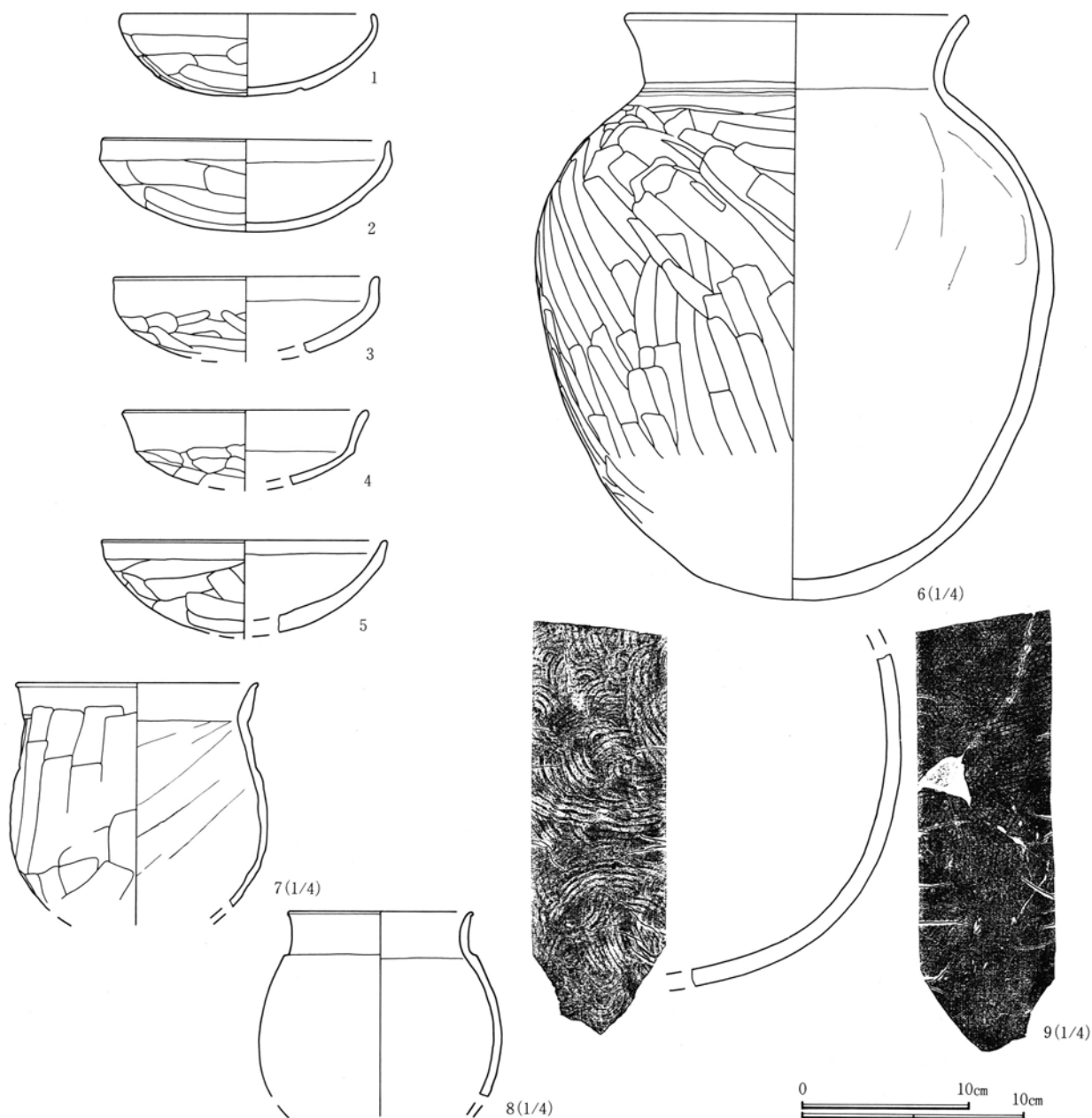
38号住居出土遺物観察表 (第298図 P L 134)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 杯	口縁～底部1/2残存	口 13.4 底 — 高 4.6	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい赤褐色 ③細砂粒を含む	浅い底部から弱い稜を経て、口縁はほぼ直線的に外反する。稜の上位に2～3条の浅い沈線が巡る。口縁部内、外面、底部内面は横撫で。底部外面は匏削り。	
2 土師器 杯	口縁～底部1/2残存	口 11.8 底 — 高 3.6	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③細砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から口縁は短く直立する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面撫で、外面匏削り。	
3 土師器 甌	ほぼ完形	口 16.5 底 — 高 12.9	①酸化焰、やや硬質 ②明褐色 ③砂粒、雲母、石英を含む	丸底から胴部は湾曲して立ち上がり、口縁は短く外反する。口縁部内、外面、胴部上位内、外面は横撫で。胴部下位は匏削り。胴部中位は器表面が荒れて整形技法は不明。	



第4章 検出された遺構と遺物

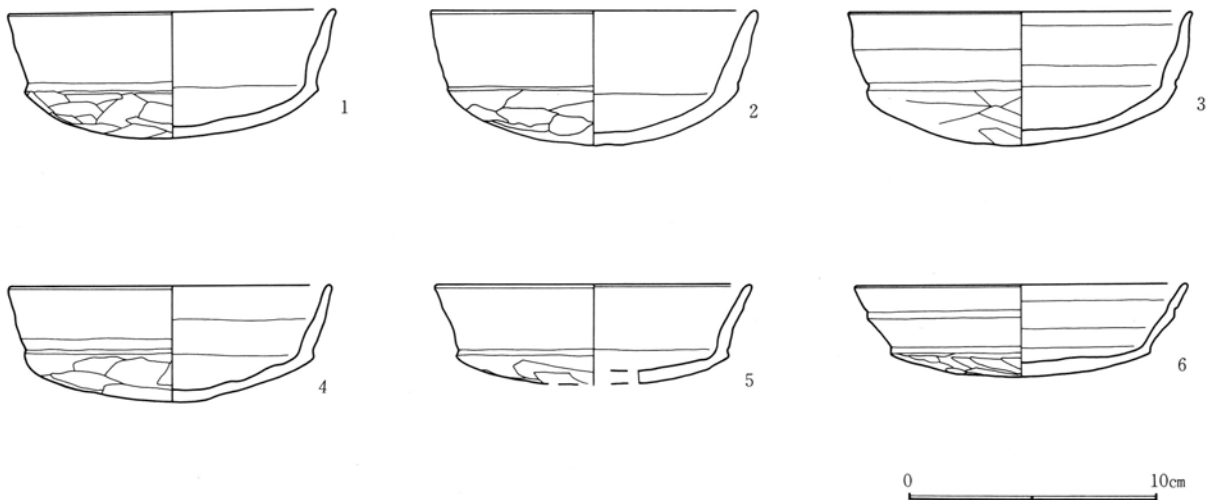
器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
4 土師器 甕	口縁～胴 部下位 4/5残存	口 21.0 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒、片岩、石英を含む	胴部は緩やかに外反しながら立ち上がり、ほぼ直線的な胴部上位を経て、口縁は湾曲して外反する。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は横位の篋撫で。胴部外面は縦位の篋削り。	
5 須恵器 坏	口縁～底 部1/2残 存	口 12.2 底 — 高 3.5	①還元焰、やや硬質 ②灰黄色 ③砂粒を含む	胴部内面と口縁部内、外面は轆轤整形。底部外面は轆轤整形ののち、篋削り。口縁は緩やかに外反する。	
6 須恵器 短頸壺	口縁～胴 部下位 2/5残存	口 <10.5> 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②暗灰色 ③密、砂粒を僅かに含む	やや肩が張り、頸部は短く直立する。内、外面とも轆轤整形。胴部外面はカキ目。内、外面の一部に自然釉。	
7 石製品 垂飾	一部欠	長径 1.9 短径 1.6 厚さ 0.5 重さ 2.0g		径2.5mmの孔がほぼ中央に穿孔される。	滑石製



第299図 40号住居出土遺物

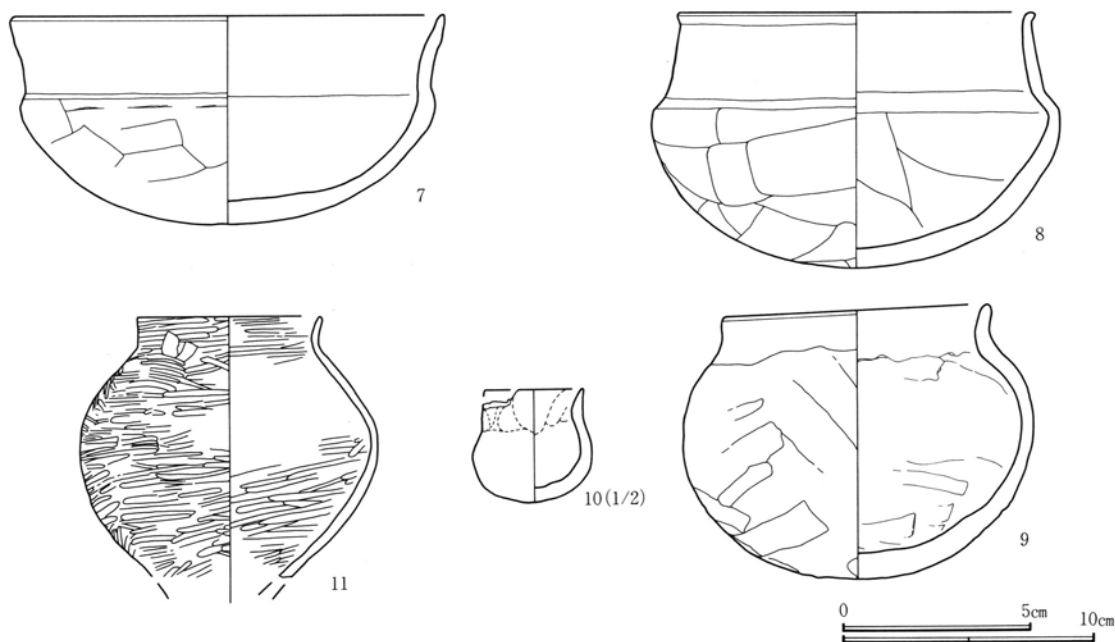
40号住居出土土器観察表 (第299図 P L 134、135)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 坏	完形	口 11.2 底 — 高 3.7	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒を僅かに含む	緩やかに湾曲する底部から、口縁は短く内湾する。口縁部内、外面、底部内面上位は横撫で、底部内面下位は撫で。底部外面は篋削り。	
2 土師器 坏	口縁一部 欠	口 12.8 底 — 高 4.1	①酸化焰、やや硬質 ②橙 ③砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から、口縁は短く直立する。口縁部内、外面、底部内面上位は横撫で、底部内面下位は撫で。底部外面は篋削り。	
3 土師器 坏	口縁～底部1/3残存	口 <12.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から、口縁は直立し口唇部は小さく外反する。口縁部内、外面、底部内面上位は横撫で、底部内面下位は撫で。底部外面は篋削り。	
4 土師器 坏	口縁～底部中位1/3残存	口 <11.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②明赤褐色 ③細砂粒を含む	浅い底部から弱い稜を経て、口縁は緩やかに外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面は撫で、外面篋削り。	
5 土師器 坏	口縁～底部1/3残存	口 <12.7> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②橙 ③細砂粒を含む	緩やかに湾曲する底部から、口縁は短く直線的に外反する。口縁部内、外面、底部内面上位は横撫で、底部内面下位は撫で。底部外面は篋削り。	
6 土師器 甕	口縁～底部4/5残存	口 20.4 底 — 高 34.9	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒を含む	器内の厚い丸底から胴部は緩やかに立ち上がり、最大径を胴部上位で測る、やや肩の張った器形を示す。口縁は屈曲して外反する。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面上位は横位の篋撫で。下位は器面が荒れて不明である。胴部外面上位は横位、斜縦位の篋削り、下位は縦位の篋削り。	
7 土師器 小型甕	口縁～胴部下位3/5残存	口 14.5 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい褐色 ③砂粒を多く含む	胴部下位に僅かに脹らみを持ち、口縁は緩やかに外反する。口唇部はさらに小さく外反する。口縁部内、外面は横撫で。胴部内面は斜位の篋撫で、外面は縦位の篋削り。胴部の器内は薄い。	
8 土師器 小型甕	口縁～胴部1/2残存	口 <11.1> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③赤褐色粒を含む	胴部中位に脹らみを持ち、頭部の段を経て口縁は直立し、口唇部は小さく外反する。口縁部内、外面は横撫で。胴部内、外面は磨滅しているが、内面は斜位の撫で、外面は篋削りののち、撫でによる整形を施すと思われる。	
9 須恵器 甕	胴部片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②灰色 ③砂粒を含む	内、外面とも叩き目。	



第300図 44号住居出土遺物 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

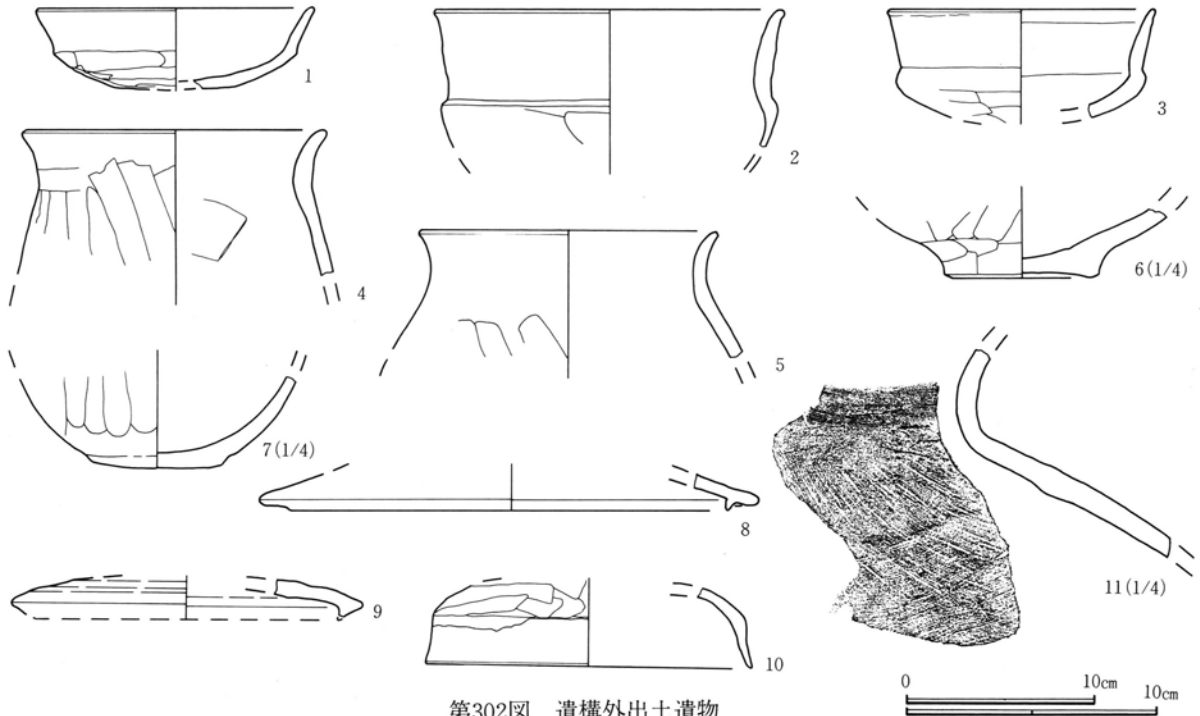


第301図 44号住居出土遺物（2）

44号住居出土土器観察表（第300、301図 P L135）

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 坏	口縁～底部3/4残存	口 13.0 底 — 高 5.0	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③細砂粒を含む	浅い底部からやや強い稜を経て、口縁は直線的に外反する。稜の上位に1条の沈線が巡る。口縁内、外面、底部内面横撫で。外面篋削り。	
2 土師器 坏	口縁～底部4/5残存	口 13.0 底 — 高 5.3	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒を僅かに含む	緩やかに湾曲する底部から弱い稜を経て口縁は直線的に外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面撫で。外面篋削り。	
3 土師器 坏	口縁～底部2/3残存	口 13.6 底 — 高 5.3	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒を含む	浅い底部から弱い稜を経て、口縁は直線的に外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面は撫で、外面篋削り。	
4 土師器 坏	口縁～底部1/2残存	口 12.8 底 — 高 4.5	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒を含む	浅い底部からやや強めの稜を経て、器肉の厚い口縁が直線的に外反する。口縁部内、外面は横撫で、底部内面撫で。外面篋削り。	
5 土師器 坏	口縁～底部1/2残存	口 <12.6> 底 — 高 3.9	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③細砂粒を含む	浅い底部から強い稜線を経て、口縁は緩やかに外反する。口縁部内、外面は横撫で。底部内面は撫で、外面篋削り。	
6 土師器 坏	口縁～底部1/3残存	口 <13.2> 底 — 高 3.6	①酸化焰、やや軟質 ②黒褐色 ③砂粒を含む	浅い底部から強い稜を経て、段を持つ口縁は直線的に外反する。口縁部内、外面、底部内面は横撫で。外面篋削り。	
7 土師器 坏	口縁～底部1/3残存	口 <17.2> 底 — 高 8.2	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③細砂粒を含む	器肉の厚い丸底から体部は湾曲して立ち上がり、弱い稜を経て、口縁は緩やかに外反する。口縁部内、外面横撫で。体部内面は撫で、外面篋削り。	
8 土師器 鉢	胴部一部欠	口 14.2 底 — 高 10.1	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒、赤褐色粒を含む	緩やかに湾曲する体部からやや強い稜を経て、口縁は僅かに内傾し、口唇部は外反する。口縁部内、外面は横撫で。体部内面篋撫で、外面篋削り。	
9 土師器 小型甕	口縁～胴部3/4残存	口 10.7 底 — 高 10.8	①酸化焰、やや軟質 ②灰褐色 ③砂粒、軽石を含む	器肉の厚い底部から球状の胴部が立ち上がり、口縁は湾曲して僅かに外反する。口縁部内、外面は横撫で、体部内面は篋撫で、外面は篋削り。	
10 手捏土器	口縁一部欠	口 2.6 底 — 高 3.0	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③細砂粒を含む	球状の胴部に、口縁は僅かに外反する。口縁、体部の内、外面に指頭痕を残す。	
11 土師器 短頸壺	口縁～胴部下位1/2	口 7.4 底 — 高 <10.4>	①良好 ②橙 ③細砂粒を含む	頸部は短く立ち上がり、端部は外反する。胴部は球形でやや張りを持つ。内、外面とも横方向の篋磨き。口縁内、外面の一部に横撫での痕跡。	

4 遺構外出土遺物



第302図 遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表 (第302図 P L135)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 坏	口縁～底 部1/4	口 <11.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい褐色 ③細砂粒を含む	緩やかに湾曲する体部から、やや強い稜線を経て口縁は湾曲して外反する。体部外面は篋削り。	65区R-19
2 土師器 坏	口縁部片	口 <14.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③細砂粒を含む	体部から弱い稜を経て、口縁は僅かに外反する。口縁部内、外面は撫で。体部外面は削りか。	66区表採
3 土師器 坏	口縁部片	口 <10.6> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい橙 ③細砂粒、小礫を含む	緩やかに湾曲する体部から弱い稜を経て、口縁は外傾し、口唇部は僅かに外反する。口縁部内、外面は横撫で。体部外面は篋削り。	75区P-3
4 土師器 小型甕	口縁部片	口 — 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい赤褐 ③砂粒、小礫を含む	口縁は緩やかに外反し、口唇部はさらに小さく外反する。口縁部は内、外面とも横撫で、胴部外面は縦位の篋削り。	65区R-19
5 土師器 小型甕	口縁部片	口 <11.8> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②褐灰 ③細砂粒、小礫を含む	球状と思われる胴部から、口縁は短く外反する。口縁部内、外面は横撫で、体部外面は縦位の篋削り。	75区P-3
6 土師器 甕	底部	口 — 底 7.4 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒を多く含む	僅かに上げ底を呈する底部から、体部は大きく開いて立ち上がる。外面は横位及び斜位の篋削り。	76区D-1
7 土師器 甕	底部	口 — 底 6.9 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	僅かに丸底状の底部から、体部は緩やかに外反して立ち上がる。体部外面は縦位の篋削り。	76区M-1
8 須恵器 蓋	口縁部片	口 <19.8> 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②灰 ③密、白色粒を含む	直線的な体部。かえりは1cmほど内側につき、やや内傾する。	65区T-20
9 須恵器 蓋	口縁部片	口 <13.9> 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②褐灰 ③細砂粒を僅かに含む	やや湾曲する体部。かえりは端部から内傾する。	67区表採
10 須恵器 蓋	口縁部片	口 <12.8> 底 — 高 —	①還元焰、やや硬質 ②褐灰 ③細砂粒を含む	口縁は緩やかに外反する。口縁部内、外面とも轆轤整形。底部は轆轤整形ののち、篋削り。口縁部外面に自然軸。	65区R-19
11 須恵器 甕	肩部片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②黄灰 ③細砂、小礫を含む	頸部は横撫で、体部内面に叩き目。	66区表採

## 第5節 平安時代

### 1 遺構、遺物の概要

**遺構** 今回報告する平安時代の遺構は、住居14軒、土坑8基を数える。このうち、住居を時期的に分類すると、9世紀後半-1軒、10世紀第1四半期-2軒、10世紀第2四半期-2軒、10世紀第3四半期-4軒、11世紀前半-2軒、10世紀代と思われるもの-1軒、平安時代に属すると思われるが細かい時期が不明のもの-2軒ということになる。概していうと平安時代後期の集落ということになり、調査された範囲ではおよそ1世紀半の間、継続した集落ということが出来る。北陸新幹線地域で当該期の集落が調査されている遺跡の中では、神戸宮山遺跡に次いで新しい集落といえよう。

次に住居の形状を分類すると、平面形状は時期による変化は見られず、概ね長方形ということが出来る。また、掘り込みの深さでみると、古墳時代の概要で述べたように、古墳時代の住居と比較すると概して浅い傾向がうかがえる。古墳時代の住居の平均の掘り込みが58cmであるのに対して、平安時代の住居13軒（15号住居は除く）の平均は31cmである。これは構築時の差と考えられるが、平安時代の集落が、古墳時代の集落よりも上位で検出されているため、後世の削平をより強くうけているためとも考えられる。次に竈の位置をみると、北向きの竈を持つのは13号住居1軒のみであり、他は東壁、あるいは東壁隅に竈を持っている。竈が調査区外になったり、削平をうけている住居の中でも、北壁に構築されている住居はなく、東壁あるいは東壁隅に竈を持つと思われるのである。しかし、11世紀代になる39号住居が南東隅に竈を持ち、時期的に近い33号住居の竈が、調査区外になるとはいえ、東壁の南寄りに構築されていることが推定されることから、時期が下ると南東寄りに竈が構築されるということが出来るかもしれない。また、唯一北東隅に竈を持つ26号住居は、今回報告された中では、唯一9世紀代に属する住居であることから、竈の位置については時期的な変遷

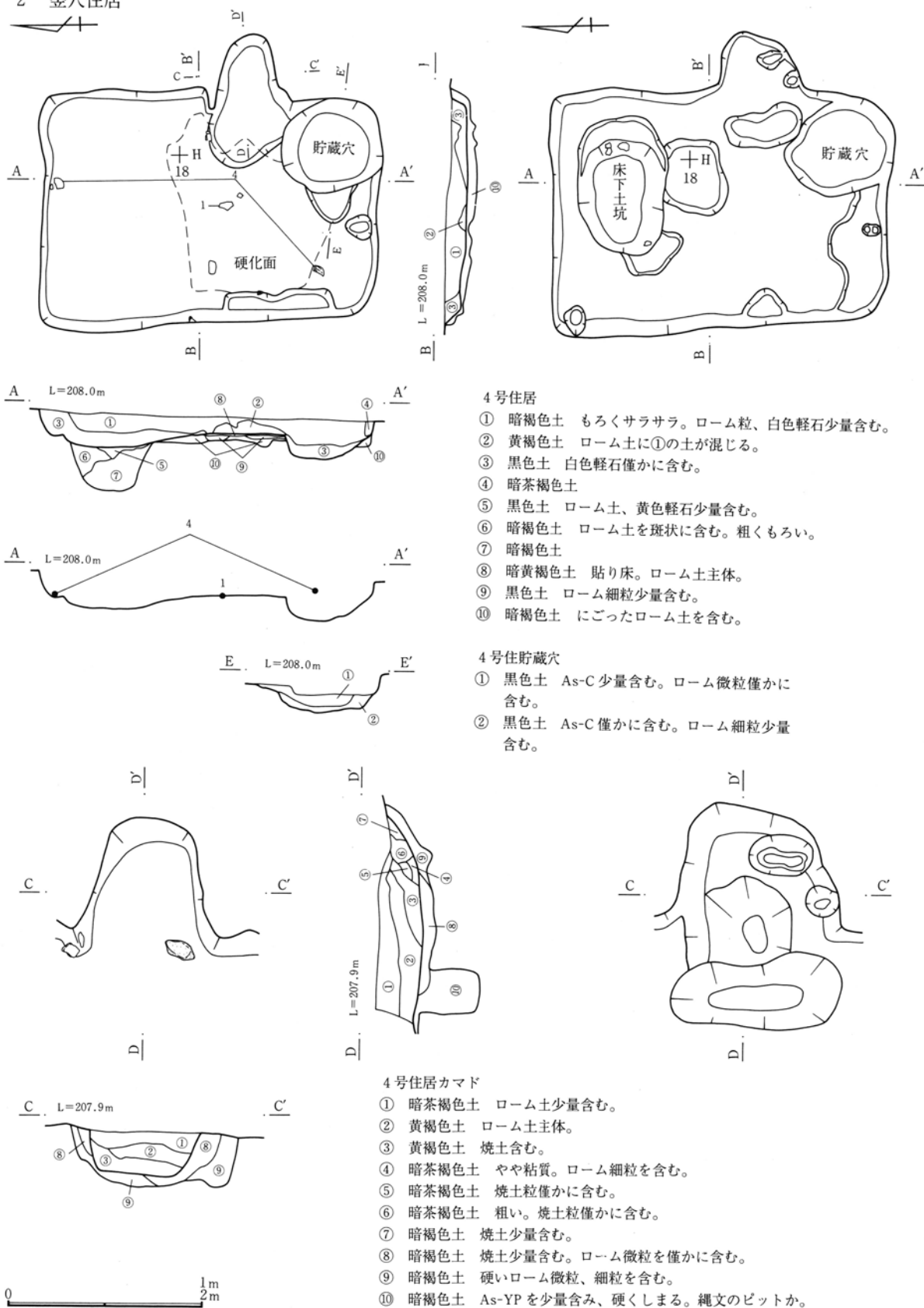
を窺わせる。

住居の分布を概観すると、本遺跡が立地する台地の頂部から東にかけて立地している。また、比較的時期の近い住居2軒が対をなして分布している状況がうかがえる。すなわち、4号と5号、9号と10号、12号と13号、33号と34号、41号と42号などである。これらは重複することなく、隣接して占地されている。時期的に若干の差を持つことから同時期併存とは考えられないが、建て替えによる移転等の状況が推定される。こうした視点で見ると、時期が不明である34号住居も、隣接する33号住居の時期に近いと考えることができるのではないだろうか。

土坑は時期的には明らかでないものが多い。遺物から時期を決定した土坑を含めて、平安時代後期に属するものが多いということはいえよう。分布に関しては8基中7基が住居と重複している。また旧マルバシ区で8基中4基が検出されている。

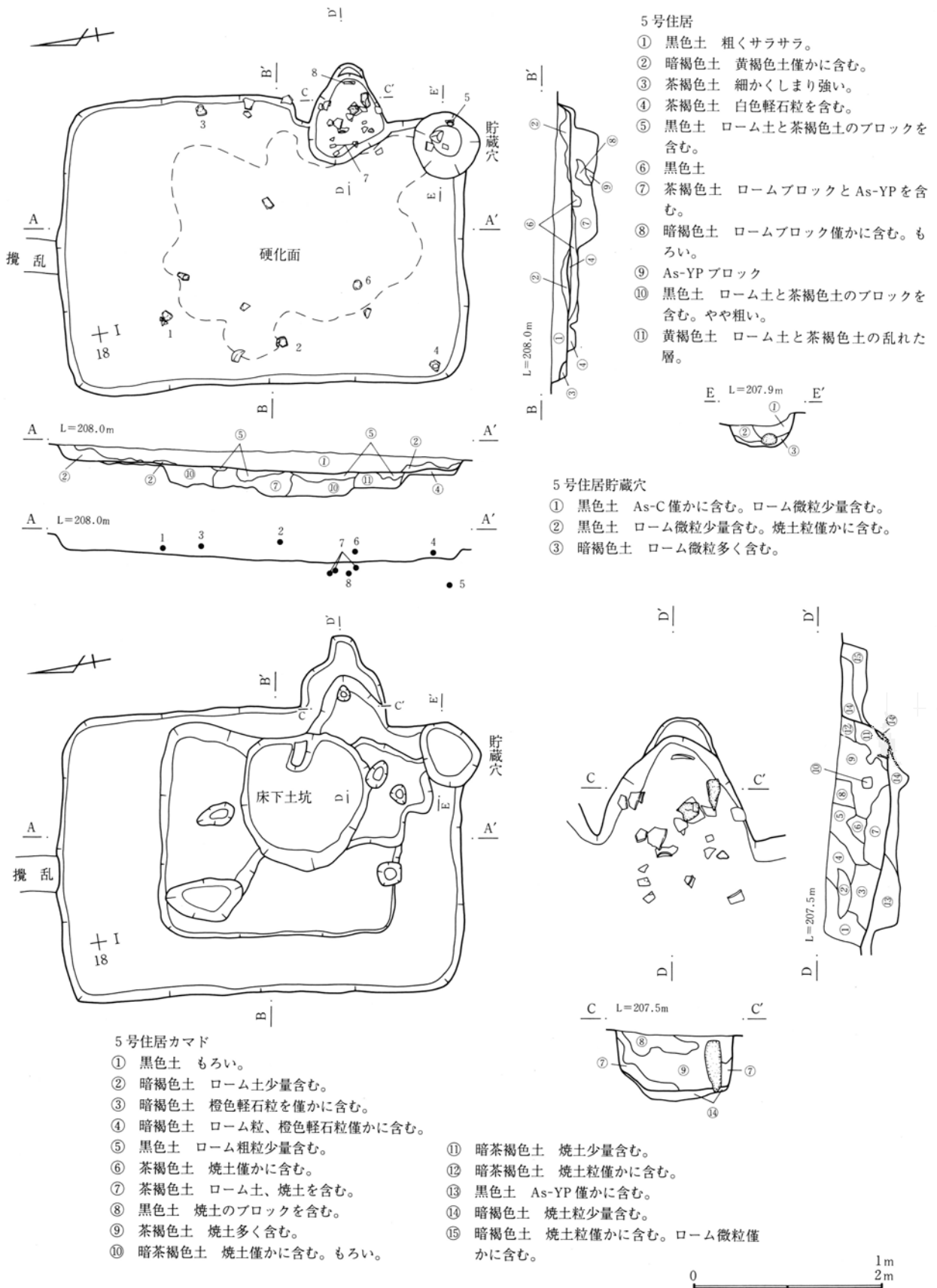
**遺物** 今回報告する遺物の中では、土師質土器の占める割合が高いことがいえよう。「矢田遺跡Ⅶ」（中沢 1997）によると土師質土器は10世紀後半段階に出現するとされており、これは本遺跡においても整合性を持っている。また、これらの土器は時期の上る遺物と比較すると、やや雑な作りのものが多いように思われる。特に高台部などに現れていると言えよう。

2 竪穴住居



第303図 4号住居

第4章 検出された遺構と遺物



第304図 5号住居

4号住居

位置 66区H-17グリッド他 方位 N-94°-E

重複 なし 写真 PL136

形状 長軸3.42m、短軸2.4mの長方形を呈する。

壁高 30cmを測る。面積 6.9m<sup>2</sup>を測る。

埋没土 暗褐色土を主体とする。観察によると自然に埋没したものと思われる。床面 ローム土による貼り床が観察される。住居南半分で、硬化した部分が認められている。

貯蔵穴 竈右手前で検出された。径1.28×1.03m、深さ26cmを測り、ほぼ正円形を呈する。

周溝 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 床面から8cmほど掘り込まれている。住居北壁寄りで床下土坑が検出されている。径1.40×0.88m、深さ58cmを測り、楕円形を呈する。埋没土から人為的な埋没と思われる。

遺物 埋没土中からの出土が多いが、土師器坏片5点、甕片25点、須恵器坏片6点、碗片11点、その他土釜、羽釜片、灰釉陶器破片が出土している。遺物の出土は特に集中する傾向は見られない。

竈 位置 東壁中央やや南寄り 規模 全長0.71m、焚き口幅0.55mを測る。袖 残存が良好でなく、はっきりした袖は確認できないが茶褐色土で短い袖を作っている。右手前に補強材あるいは芯材であったと思われる礫が出土している。

考察 出土遺物の様相から10世紀第3四半期の竪穴住居であると思われる。

5号住居

位置 66区H-17グリッド 方位 N-100°-E

重複 なし 写真 PL136

形状 長軸4.15m、短軸3.02mを測る長方形を呈する。壁高 28cmを測る。面積 11.44m<sup>2</sup>を測る。

埋没土 粗い黒色土を主体とする。住居主体部は自然埋没と思われる。床面 貼り床は認められなかったが、住居中央部において特に硬化した部分が認められた。貯蔵穴 竈右手前で検出された。径70×66cm、深さ28cmを測る。

周溝 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 床下から長軸2.5m、短軸2.1mを測る方形の掘り込みが検出されている。これは埋没土の観察から人為的に埋没した可能性が高い。また、竈手前に竈状の掘り込みも確認されていることから、この方形の掘り込みは本住居の前段階の小型の住居であり、本住居はこの小型住居を埋めて拡張したと考えられる。床下土坑は中央やや東よりで検出された。径1.42×1.48m、深さ20cmを測り、これは本住居構築時に掘られたと思われる。

遺物 土師器坏片5点、甕片40点、須恵器坏片9点、碗片10点、羽釜片11点、他に土釜片、灰釉陶器片等が出土している。遺物の出土状況は散漫な状況を示すが、竈からややまとまった出土が見られる。

竈 位置 東壁中央やや南寄り 規模 全長0.72m、焚き口幅0.75mを測る。袖 短い袖を持つ。残存状態は不良である。

考察 出土遺物の様相から10世紀第2四半期の竪穴住居であると思われる。

6号住居

位置 66区K-20グリッド 方位 N-104°-E

重複 なし 写真 PL137

形状 長軸3.52m、短軸2.98mを測る長方形を呈する。壁高 25cmを測る。面積 7.78m<sup>2</sup>を測る。

埋没土 黒色土を主体とする。観察によると自然に埋没したものと思われる。

床面 As-Cを少し含む黒褐色土を貼って床を作る。貯蔵穴 竈右手前で検出された。径60×56cm、深さ45cmを測る。埋没土中から土器片が出土。

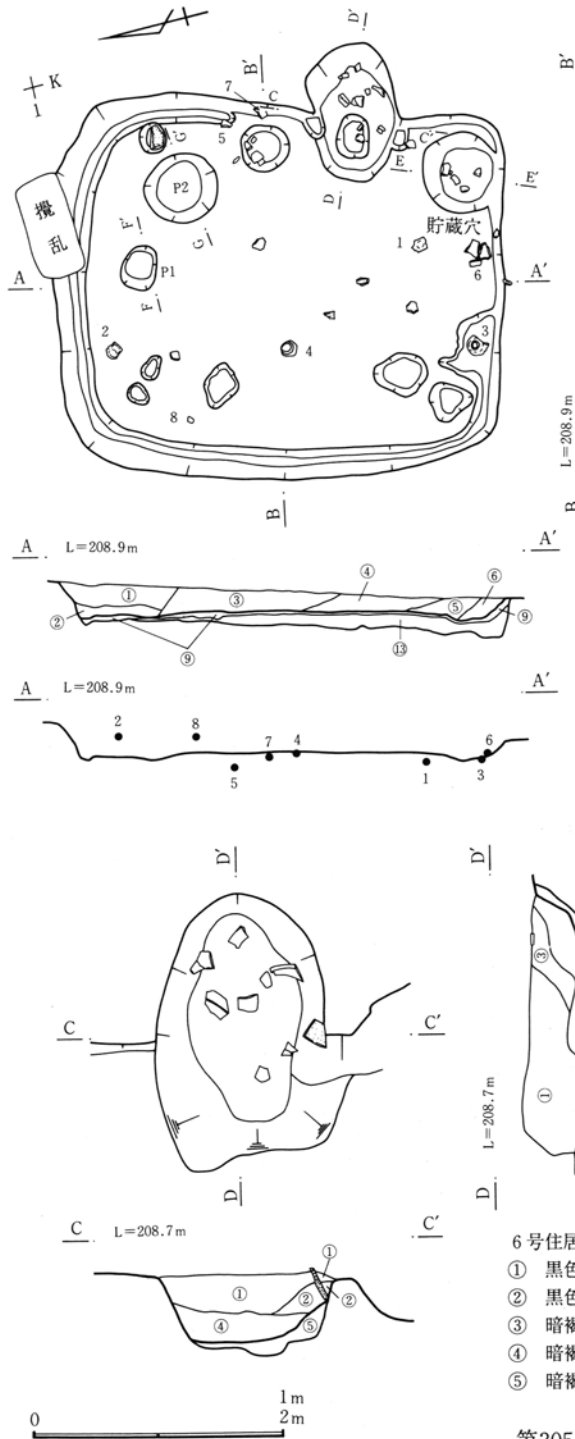
周溝 東壁の一部と南壁の一部をのぞき、検出された。最大幅30cm、深さ8cmを測る。

柱穴 ピットは3本検出されたが、柱穴に相当するかは不明である。掘り方 床面から25cmほど掘り込まれている。

遺物 土師器坏片3点、甕片28点、須恵器坏片11点、羽釜片44点、他に須恵器碗片、土釜片が出土している。遺物出土状況は特に集中した傾向は見られない。



第4章 検出された遺構と遺物



6号住居

- ① 黒色土 As-C少量含む。微粒暗褐色土僅かに含む。
- ② 黒色土 As-C僅かに含む。
- ③ 黒色土 ローム微粒、焼土粒僅かに含む。
- ④ 黒色土 As-C少量含む。
- ⑤ 黒色土 ローム微粒僅かに含む。しまり弱。
- ⑥ 黒色土 ローム微粒僅かに含む。As-C、焼土粒僅かに含む。
- ⑦ 黒色土 As-C僅かに含む。
- ⑧ 黒色土 ローム微粒僅かに含む。
- ⑨ 黒褐色土 床面。白色鉱物粒、As-Cを僅かに含む。
- ⑩ 黒色土 As-C、焼土粒僅かに含む。
- ⑪ 黒色土 As-C、As-YP、焼土ブロックを僅かに含む。軟質。
- ⑫ 黄褐色土 As-YPを含む。軟質。
- ⑬ 暗褐色土 貼り床下面。しまりあり。白色鉱物粒僅かに含む。
- ⑭ 明黄褐色土 貯蔵穴壁の流入土。

6号住居貯蔵穴

- ① 黒色土 As-C少量含む。ローム微粒僅かに含む。
- ② 黒色土 As-C僅かに含む。ローム微粒少量含む。
- ③ 黒色土 ローム微粒少量含む。黄色軽石僅かに含む。

6号住居ピット

- ① 黒色土 ローム細粒少量含む。As-YP少量含む。
- ② 暗黄褐色土 As-YP主体。しまり悪い。

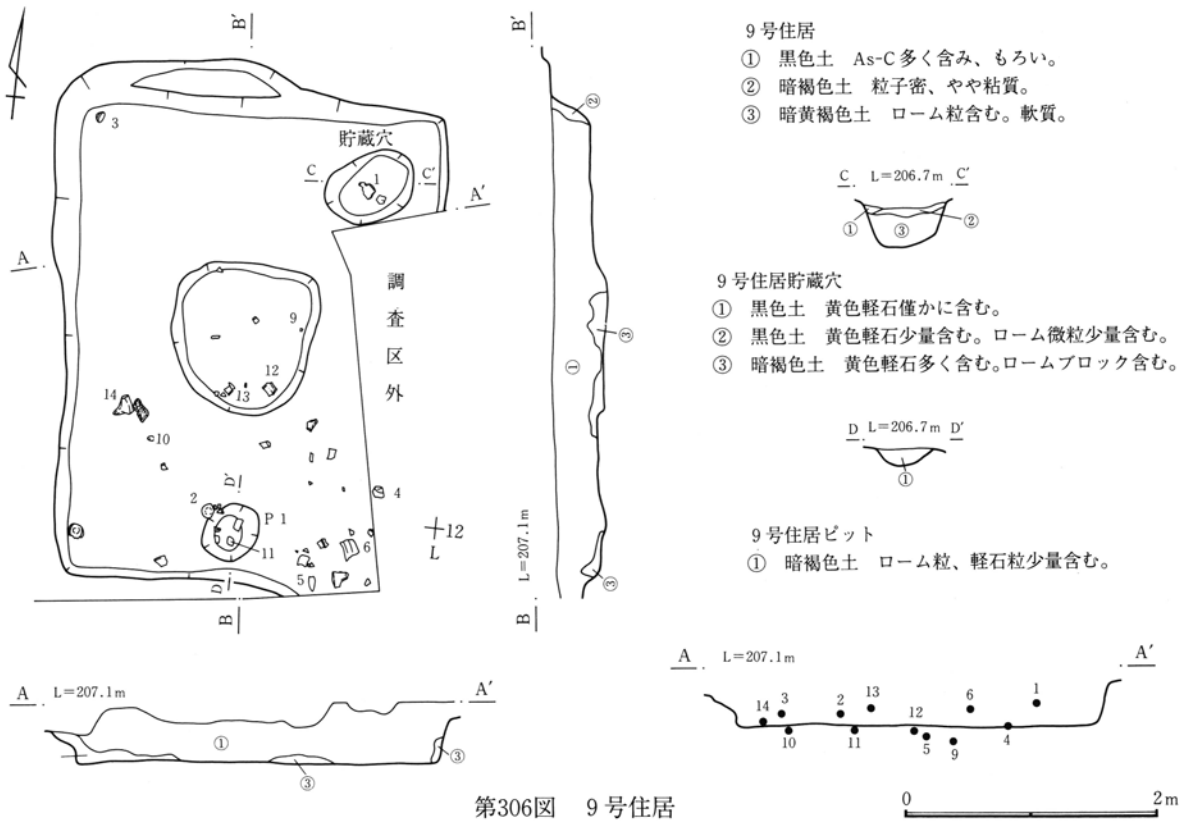
6号住居カマド

- ① 黒色土 As-C少量含む。焼土粒僅かに含む。
- ② 黒色土 ローム細粒少量含む。
- ③ 暗褐色土 ローム微粒多く含む。焼土粒多く含む。
- ④ 暗褐色土 ローム微粒僅かに含む。焼土粒僅かに含む。
- ⑤ 暗褐色土 焼土粒僅かに含む。ローム微粒少量含む。

第305図 6号住居

**竈** 位置 東壁中央やや南寄り 規模 全長1.1m、  
 焚き口幅0.42mを測る。袖 ほとんど残存し  
 していない。遺物 燃焼部から羽釜片が出土し  
 ている。

**考察** 10世紀第2四半期の竪穴住居であると思われ  
 る。



9号住居

位置 66区L-12グリッド他 方位 N-83°-E

重複 なし 写真 P L 137

形状 南東の隅が調査区外にかかるため、全体の形状は不明だが、長軸4.26m、短軸3.10mの長方形を呈すると思われる。

壁高 48cmを測る。面積 不明

埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。自然埋没と思われるが、しまりはよくない。

床面 貼り床は認められなかった。

貯蔵穴 住居北東隅で検出された。径は68×52cm、深さ48cmを測り、楕円形を呈する。

周溝 調査された範囲では検出されなかった。

柱穴 南壁寄りでピットが1本検出されているが柱穴に相当するかは不明である。

掘り方 確認できなかったが、住居中央で床下土坑状の掘り込みを検出している。

遺物 土師器坏片15点、甕片34点、須恵器碗片50点、羽釜片20点が出土している。また、床下土坑状の掘り

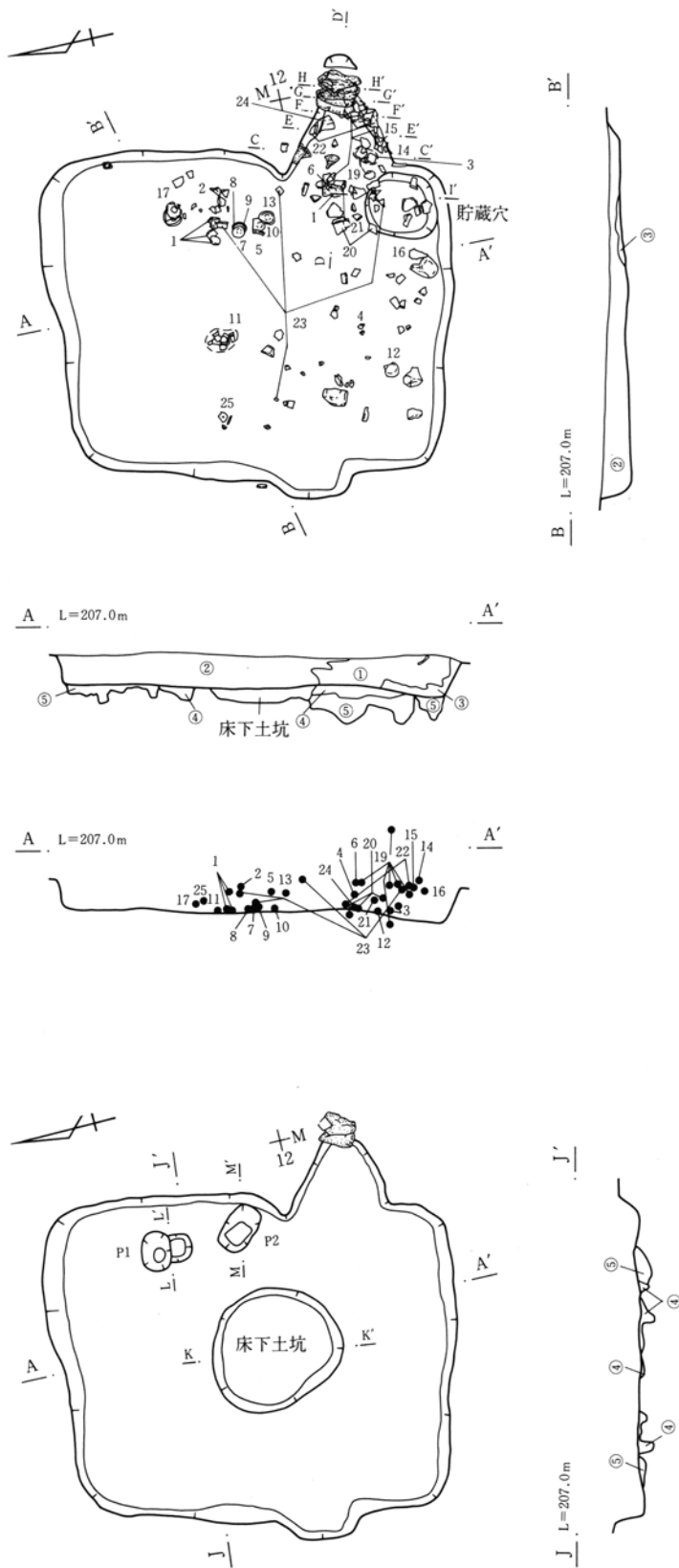
り込み、およびピットから鉄滓が出土している。

また、この掘り込みからはほぼ完形の石製丸鞆が出土している。土器は住居南東隅から南壁に沿った範囲から多く出土している。

竈 調査された範囲では検出されなかった。調査区外にあたる東壁に構築されているものと思われる。

考察 出土遺物の様相から10世紀第1四半期の竪穴住居と思われる。本住居から出土した鉄滓は碗形滓といわれる鉄精錬の際に得られるもので、他にも流動滓といわれる滓が出土している。これは、本住居が製鉄、あるいは精錬に関わることを推定させるものである。14の礫は被熱しており、砥石状の磨面も確認できるため、住居中央にみられる掘り込みが鍛冶炉の可能性は高いが、羽口は出土しておらず、鍛造剥片類の調査は行わなかったため、詳細は不明である。また官人の身につけていたであろう石製丸鞆の出土も本住居の性格を考える上での要因の一つになる。

第4章 検出された遺構と遺物



10号住居

- ① 黒色土 As-C少量含む。
- ② 黒色土 As-C多く含む。もろい。
- ③ 暗褐色土 粒子粗。
- ④ 暗褐色土 ロームブロック多く含む。
- ⑤ 茶褐色土 ローム土主体。しまり強。

10号住居貯蔵穴

- ① 黒色土 ローム細粒僅かに含む。
- ② 暗褐色土 ローム細粒、炭化物僅かに含む。

10号住居床下土坑

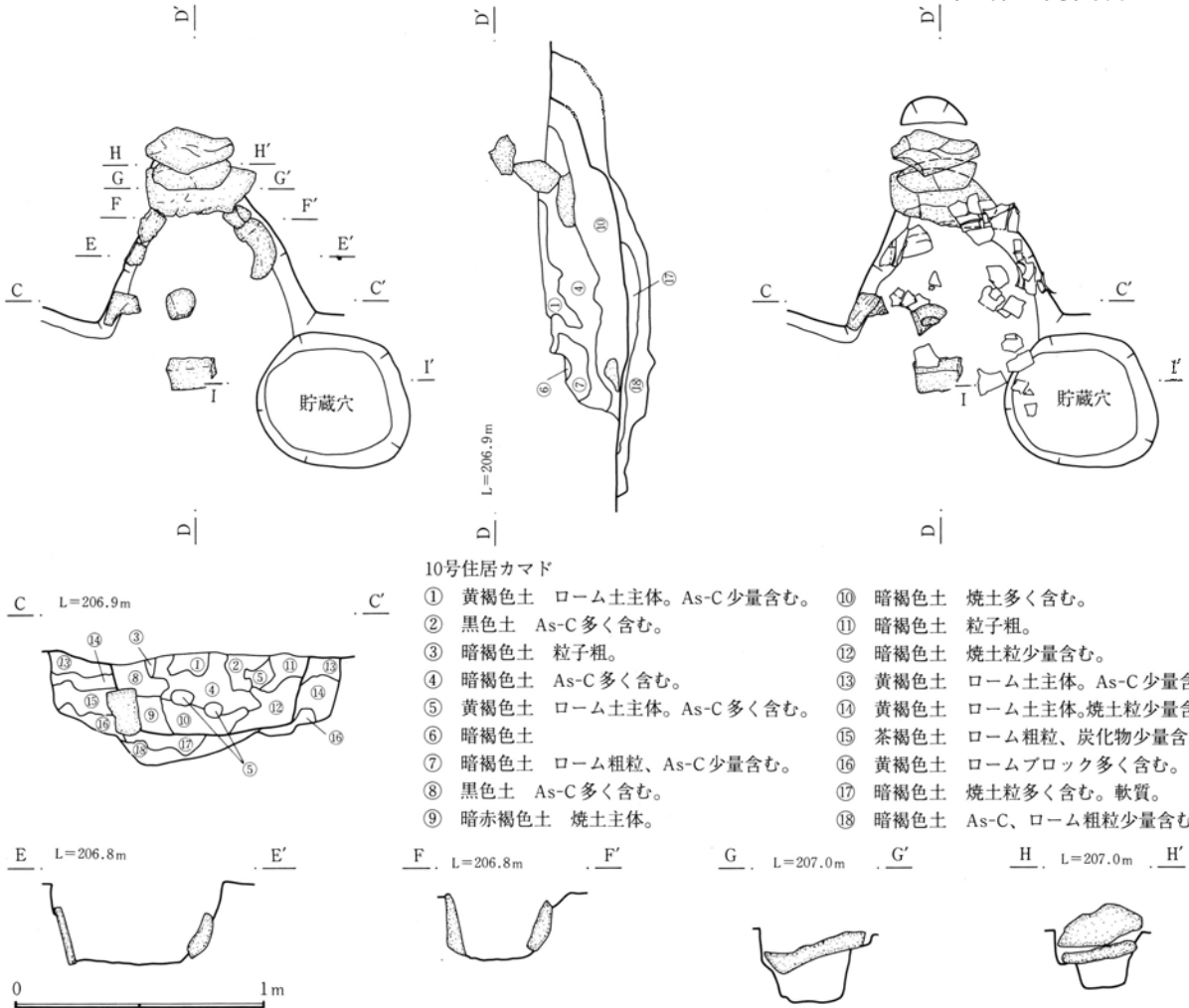
- ① 暗褐色土 ローム細粒少量含む。
- ② 暗褐色土 白色鉱物粒少量含む。
- ③ 黒色土 As-C多く含む。
- ④ 黄褐色土 ローム土主体。As-YP多く含む。
- ⑤ 黄褐色土 As-YP少量含む。
- ⑥ 黄褐色土 As-YP多く含む。
- ⑦ 黄褐色土 As-YP少量含む。
- ⑧ 暗褐色土

10号住居ピット

- ① 暗褐色土 粒子密。
- ② 暗褐色土 As-YP 僅かに含む。
- ③ 暗褐色土 As-YP 少量含む。

0 2m

第307図 10号住居 (1)



第308図 10号住居 (2)

10号住居

位置 66区M-12グリッド他 方位 N-106°-E

重複 なし 写真 P L138

形状 長軸3.4m、短軸2.71mの長方形を呈する。

壁高 40cmを測る。面積 7.68㎡を測る。

埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。

床面 貼り床は認められなかった。住居北側部分でやや硬化した部分が認められた。

貯蔵穴 竈右手前で検出された。径61×52cm、深さ14cmを測り、楕円形を呈する。

周溝 検出されなかった。

柱穴 掘り方調査時に東壁沿いにピットが2本検出されたが、柱穴に相当するかは不明である。

掘り方 床面から8~30cm掘り込まれている。住居ほぼ中央で床下土坑が検出されている。径110×

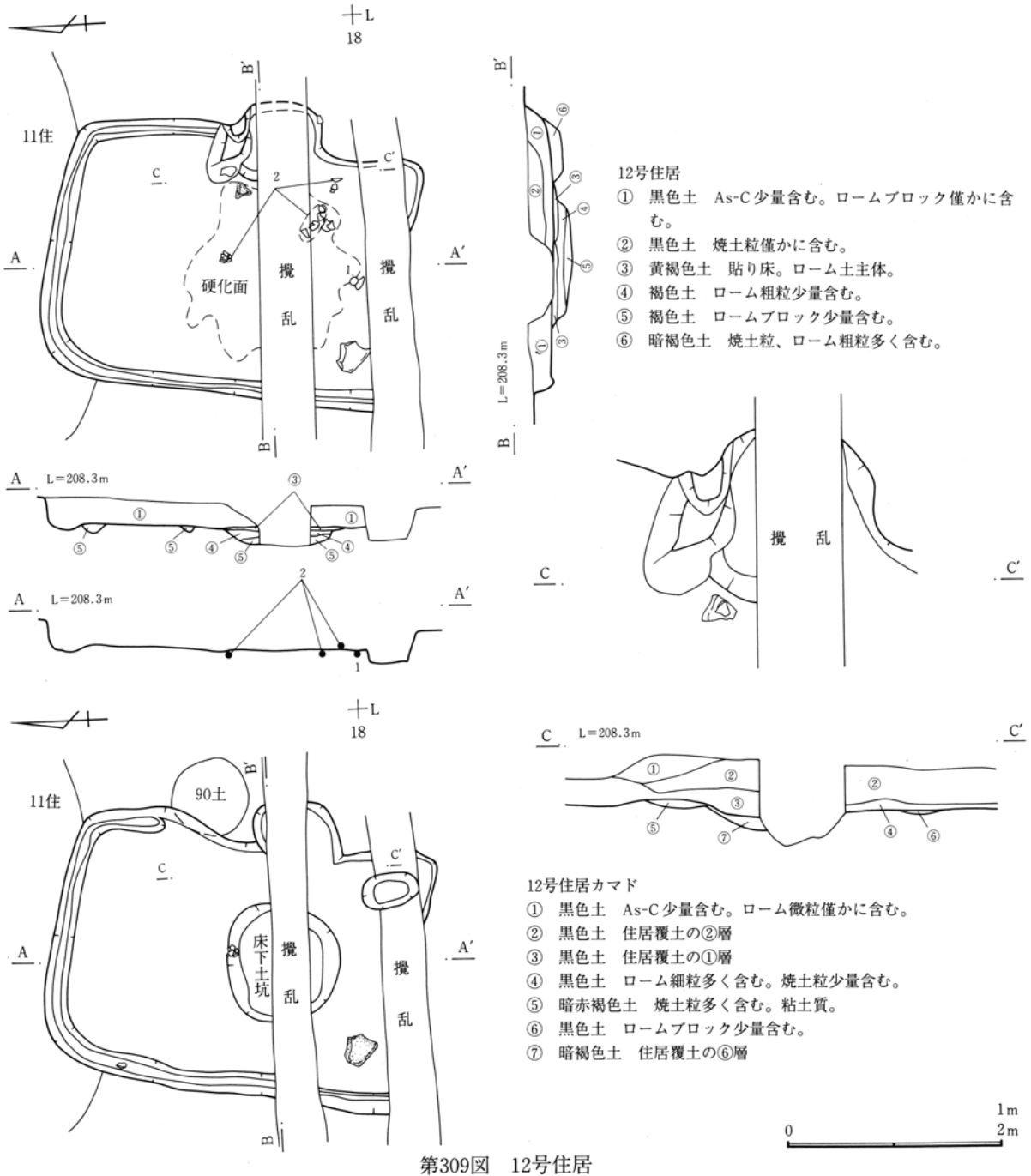
100cm、深さ10cmを測り、ほぼ円形を呈する。

遺物 土師器坏片9点、甕片53点、須恵器坏片20点、椀片9点、羽釜片79点が出土している。このうち、羽釜片は竈からの出土が多く、また、遺物は住居南東部に集中する傾向が見られる。図示した7・8・9の椀はこの3点が重なった状態で、竈左手前床から出土した。25の鉄製紡錘車は中央西壁よりの床から出土している。

竈 位置 東壁やや南寄り 規模 全長0.97m、焚き口幅0.72mを測る。袖 ローム土で短い袖を作る。残存 燃烧部壁に礫を貼り、煙道部に礫を積み上げている。天井部は崩落している。

考察 出土遺物の様相から10世紀第2~第3四半期の竪穴住居であると思われる。

第4章 検出された遺構と遺物



12号住居

位置 66区L-18グリッド他 方位 N-98°-E

重複 古墳時代（7世紀第2四半期）の11号住居の南壁を切る。縄文時代の90号土坑が東壁下で検出された。写真 PL139

形状 長軸3.34m、短軸2.48mの長方形を呈する。

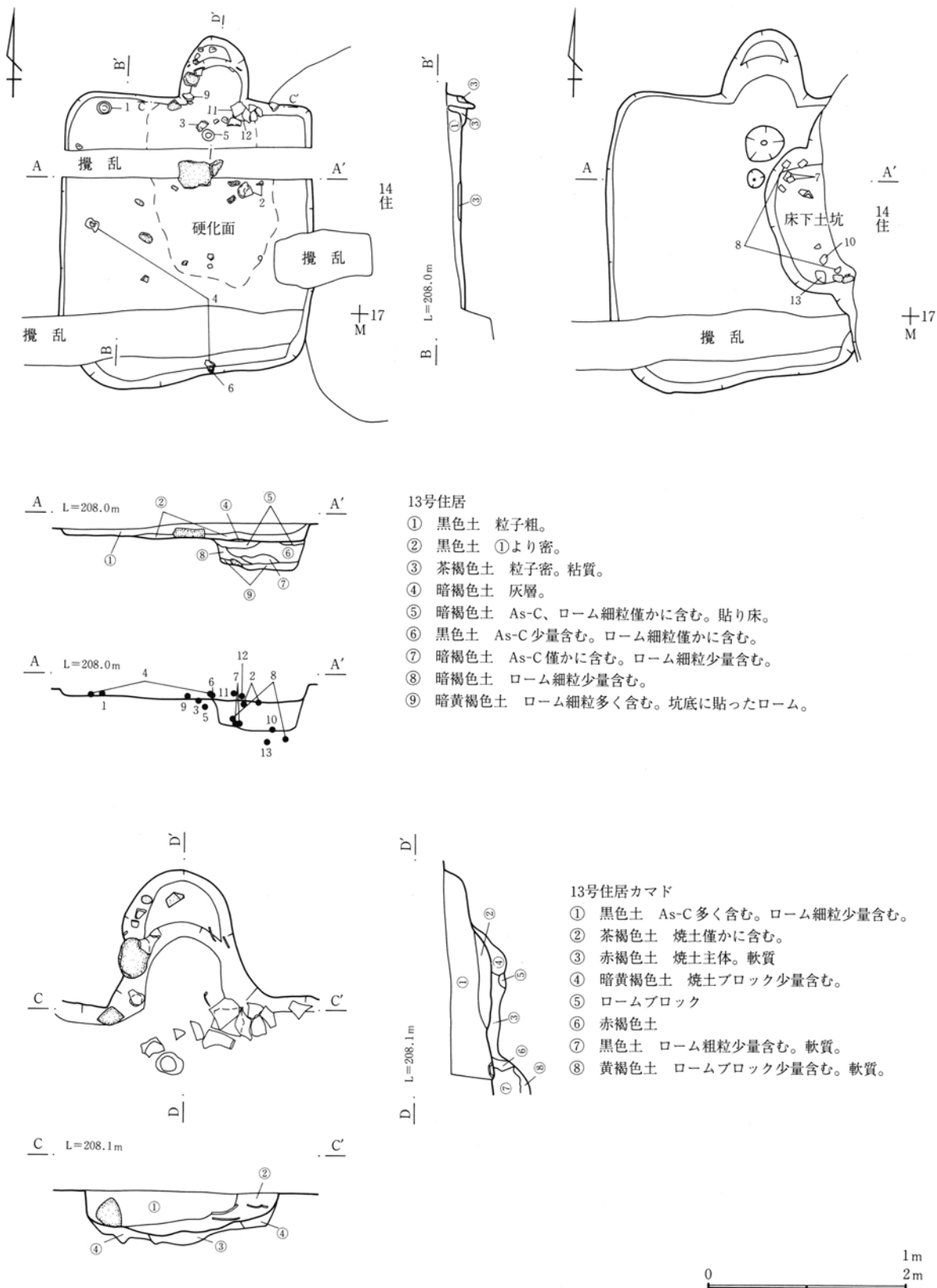
壁高 35cmを測る。面積 不明

埋没土 黑色土を主体とする。床面 住居中央部

でローム土による貼り床。掘り方 住居中央に床下土坑。径1.10×1.02m、深さ15cm。遺物 土師器片20点、須恵器坏片5点、羽釜片3点が出土している。2の土釜は竈手前床から出土した。

竈 攪乱によってほとんど破壊されている。東壁中央やや南寄りに構築され、粘土で短い袖を作っていることが確認できた。

考察 遺物から10世紀第1四半期と思われる。



第310図 13号住居

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 13号住居

**位置** 66区M-17グリッド他 **方位** N-2°-E

**重複** 弥生時代後期の14号住居の上面で検出された。耕作による攪乱をうける。

**写真** P L 139

**形状** 長軸2.94m、短軸2.51mの長方形を呈する。

**壁高** 東壁で20cmを測る。 **面積** 6.47㎡を測る。

**埋没土** 黒色土を主体とする。観察によると自然に埋没したものと思われる。

**床面** 竈手前的一部分で暗褐色土による貼り床を確認した。1.8m×1.2mの範囲で硬化した部分が認められた。 **掘り方** 床調査後、14号住居の調査により、誤って本住居の掘り方の東1/3を破壊してしまった。中央東寄りで検出された床下土坑も半分を破壊されている。残存部によると径1.48×0.88m、深さ28cmを測る。この床下土坑には、坑底にローム土を貼ったような硬化面が認められた。

**遺物** 土師器片14点と須恵器坏片4点、椀片6点、羽釜片12点が出土している。このうち床下土坑から12点が出土している。また、本住居からは墨書土器が3点出土している。

**竈** **位置** 北壁中央 **規模** 全長0.68m、焚き口幅0.52mを測る。 **袖** ほとんど認められなかった。芯材あるいは補強材と思われる礫が左手前に出土している。 **遺物** 右手前から11・12の羽釜片が出土している。

**考察** 出土遺物の様相から10世紀第3四半期の竪穴住居であろう。

##### 15号住居

**位置** 66区N-17グリッド他 **方位** N-90°-E

**重複** 縄文時代前期の17号住居上面で検出された。

**写真** P L 140

**形状** 後世の削平をうけているため、残存がきわめて良くない。竈と東、北壁の一部が調査されたにすぎないが、平面形状は長方形を呈するものと思われる。規模は不明である。

**壁高** 残存する北壁で12cmを測る。 **面積** 不明

**埋没土** 黒色土を主体とする。

**床面** 貼り床は確認されなかった。

**貯蔵穴、周溝、柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** 確認できなかった。

**遺物** 土師器片2点が出土しているが、図示にはいかなかった。

**竈** **位置** 東壁南寄りか **規模** 全長0.38m、焚き口幅0.23mを測る。 **袖** 確認できなかった。

**考察** 平安時代の竪穴住居と思われるが、詳細は不明である。

##### 26号住居

**位置** 66区F-20グリッド他 **方位** N-91°-E

**重複** 時期不明の128号土坑に切られる。耕作によると思われる攪乱をうける。

**写真** P L 140

**形状** 128号土坑および耕作による攪乱のため、東壁、北壁の一部を失うが長軸3.24m、短軸2.86mの長方形を呈するものと思われる。

**壁高** 後世の削平をうけているため、壁の残存はきわめてよくないが、残存の比較的良好的な西壁で18cmを測る。 **面積** 不明

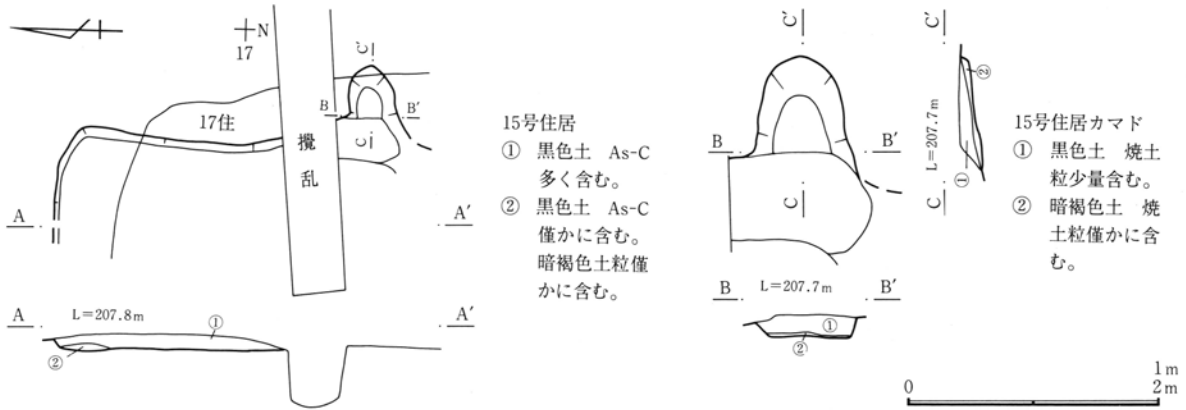
**柱穴** ピットが3本検出されている。いずれも柱穴に相当すると思われるが、やや浅い。

**掘り方** 床面から5～18cm掘り込まれている。

**遺物** 土師器片71点と羽釜片6点、土釜片4点、甕片2点、坏片1点が出土している。接合関係が見られないことから、流れ込みの遺物が多いと思われる。

**竈** 住居北東隅に構築されていたものが、128号土坑によって破壊されているものと思われる。

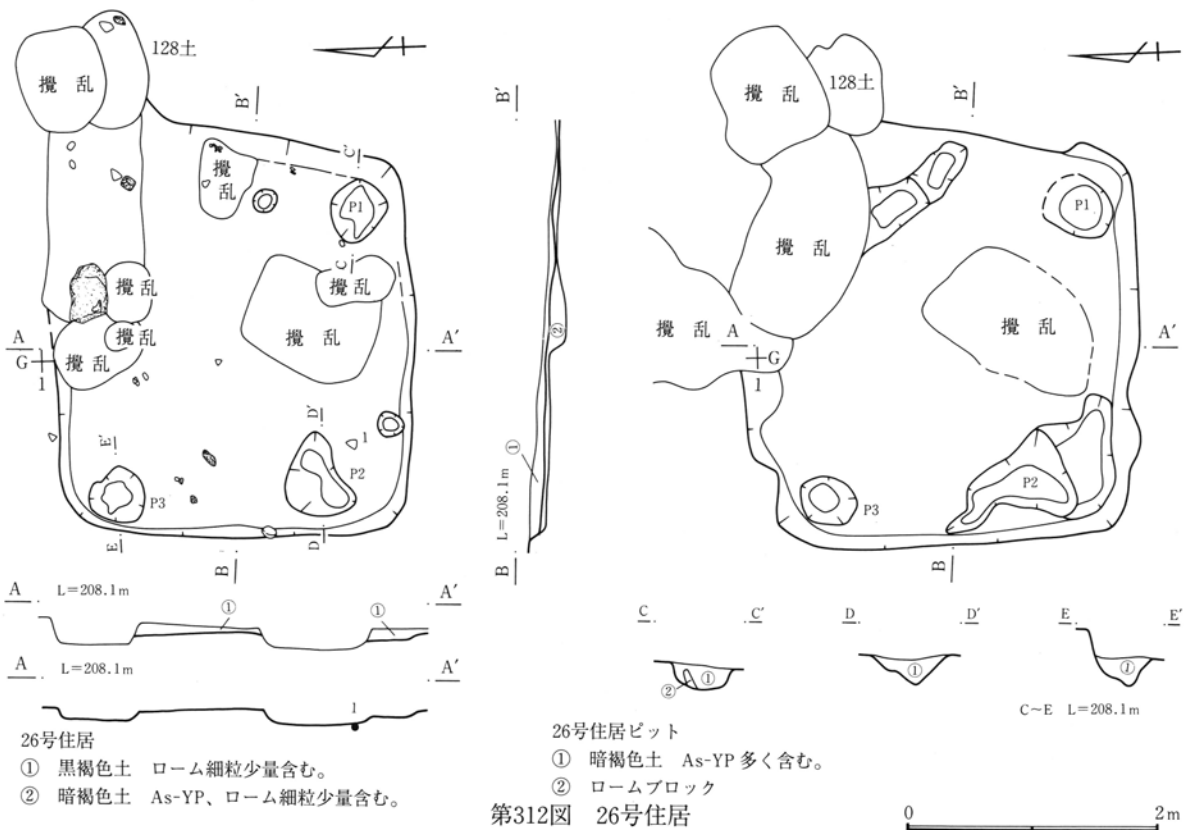
**考察** 出土遺物の様相から9世紀後半の竪穴住居と思われる。



15号住居  
 ① 黒色土 As-C  
 多く含む。  
 ② 黒色土 As-C  
 僅かに含む。  
 暗褐色土粒僅  
 かに含む。

15号住居カマド  
 ① 黒色土 焼土  
 粒少量含む。  
 ② 暗褐色土 焼  
 土粒僅かに含  
 む。

第311図 15号住居



26号住居  
 ① 黒褐色土 ローム細粒少量含む。  
 ② 暗褐色土 As-YP、ローム細粒少量含む。

26号住居ピット  
 ① 暗褐色土 As-YP 多く含む。  
 ② ロームブロック

第312図 26号住居

33号住居

位置 65区M-20グリッド他 方位 N-147°-W

重複 なし 写真 P L 141

形状 住居の約1/2が調査区外にかかるため、全体の規模、形状は不明だが、1辺が2.9mの長方形を呈するものと思われる。壁高 45cmを測る。

面積 不明 埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。床面 粘性のあるローム土を含む黒褐色土を貼り、堅緻な床を造る。貯蔵穴 南西隅と思わ

れる地点で検出された。長径60cm、深さ40cmを測る。

周溝 ほぼ全周する。最大幅28cm、深さ4cmを測る。

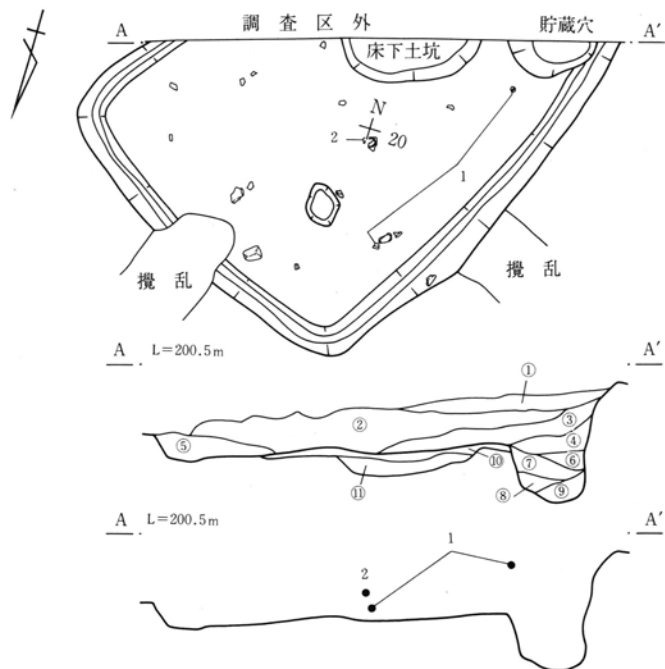
掘り方 床面から6cmほど掘り込まれる。南壁寄り  
 で床下土坑が検出されている。径1.08m、深さ28cm  
 を測る。遺物 土師器片157点と須恵器碗片12点、  
 甕片6点、羽釜片10点が出土している。2の鉄製品  
 はやや浮いた状態で出土している。

竈 調査区外の東壁に構築されていると思われる。

考察 出土遺物の様相から11世紀前半と思われる。



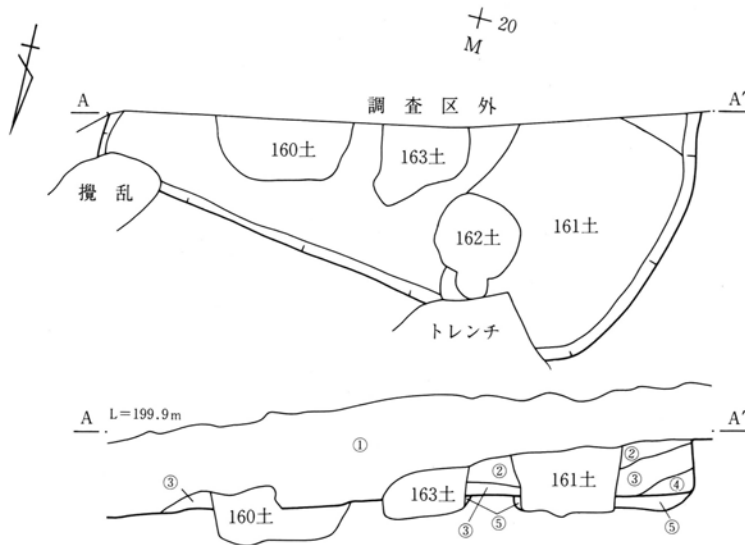
第4章 検出された遺構と遺物



第313図 33号住居

- 33号住居
- ① 黒色土 As-C少量含む。
  - ② 黒色土 As-C少量含む。ローム細粒、炭化物僅かに含む。
  - ③ 黒色土 As-C僅かに含む。
  - ④ 黒色土 As-C僅かに含む。やや粗。
  - ⑤ 黒色土 As-C僅かに含む。ローム細粒僅かに含む。
  - ⑥ 黒色土 貯蔵穴覆土。As-C僅かに含む。ローム微粒僅かに含む。
  - ⑦ 黒色土 貯蔵穴覆土。ローム微粒少量含む。
  - ⑧ 黒色土 貯蔵穴覆土。ローム微粒多く含む。
  - ⑨ 黒色土 貯蔵穴覆土。ローム微粒僅か含む。
  - ⑩ 黒褐色土 貼り床。As-C僅かに含む。粘質のローム土僅かに含む。硬くしまる。
  - ⑪ 黒褐色土 床下土坑覆土。As-C僅かに含む。粘質のローム土少量含む。

0 2m



第314図 34号住居

- 34号住居
- ① 暗灰褐色土
  - ② 黒色土 As-C多く含む。
  - ③ 黒色土 As-C多く含む。②より暗い。
  - ④ 黒色土 As-C少量含む。
  - ⑤ 黒褐色土 白色鉱物粒僅かに含む。

0 2m

34号住居

位置 65区M-20グリッド他 方位 N-96°-E

重複 平安時代と思われる160、161、163号土坑に切られる。縄文時代の162号土坑を切る。

写真 PL141

形状 約2/3が調査区外にかかるが、1辺4.45mの長方形を呈すると思われる。傾斜地のため、東壁は残存が不良で、明瞭な立ち上がりは確認できない。

壁高 西壁で45cmを測る。面積 不明

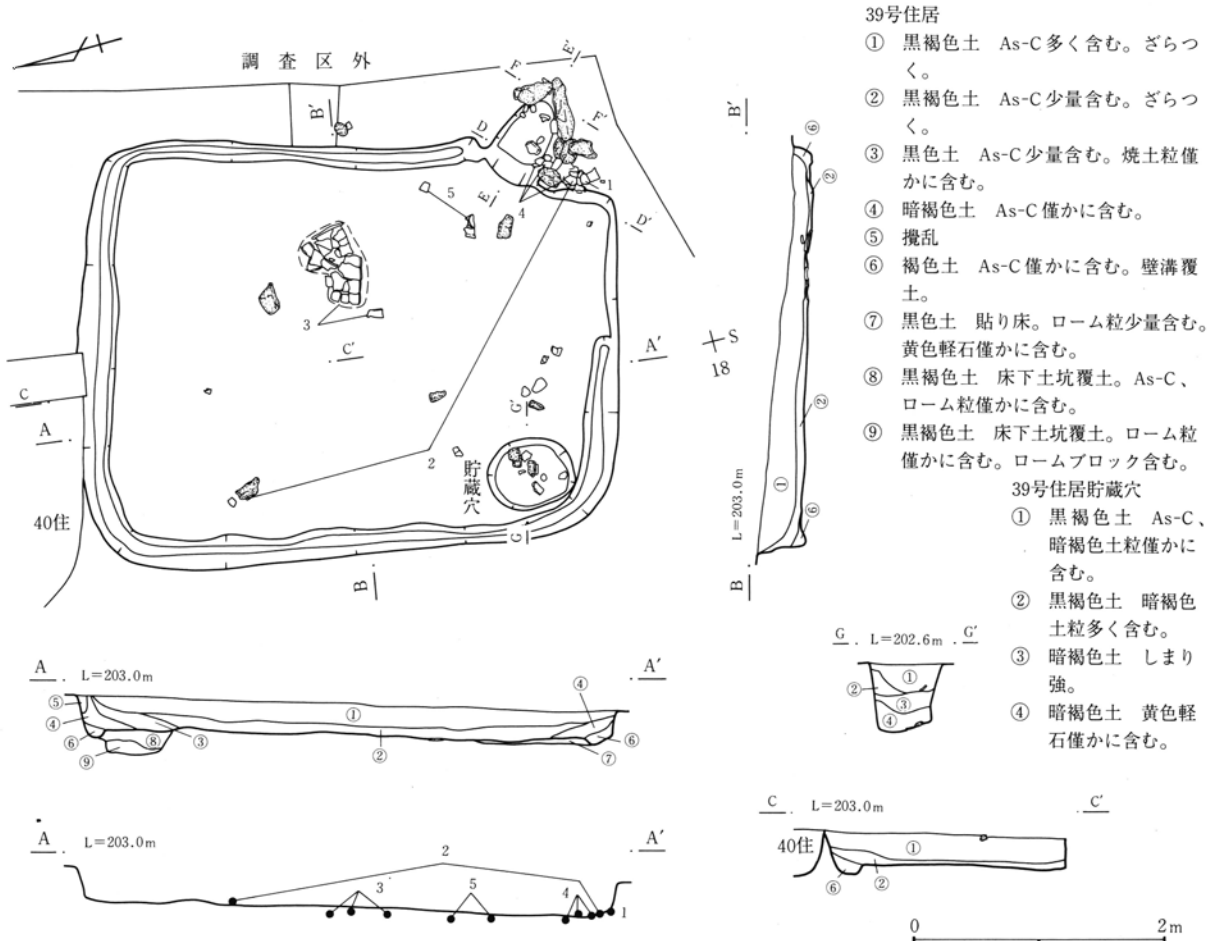
埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。

床面 調査された床面は少ないが、貼り床は認められなかった。掘り方 床面から9cmほど掘り込まれる。遺物 土師器片33点と須恵器坏片6点、椀片2点、灰釉陶器片1点が出土している。いずれも小片で図示にはいたらなかった。

竈 調査区外の東壁に構築されていると思われる。

考察 平安時代の竪穴住居と思われるが、詳細は不明である。

第5節 平安時代



第315図 39号住居 (1)

39号住居

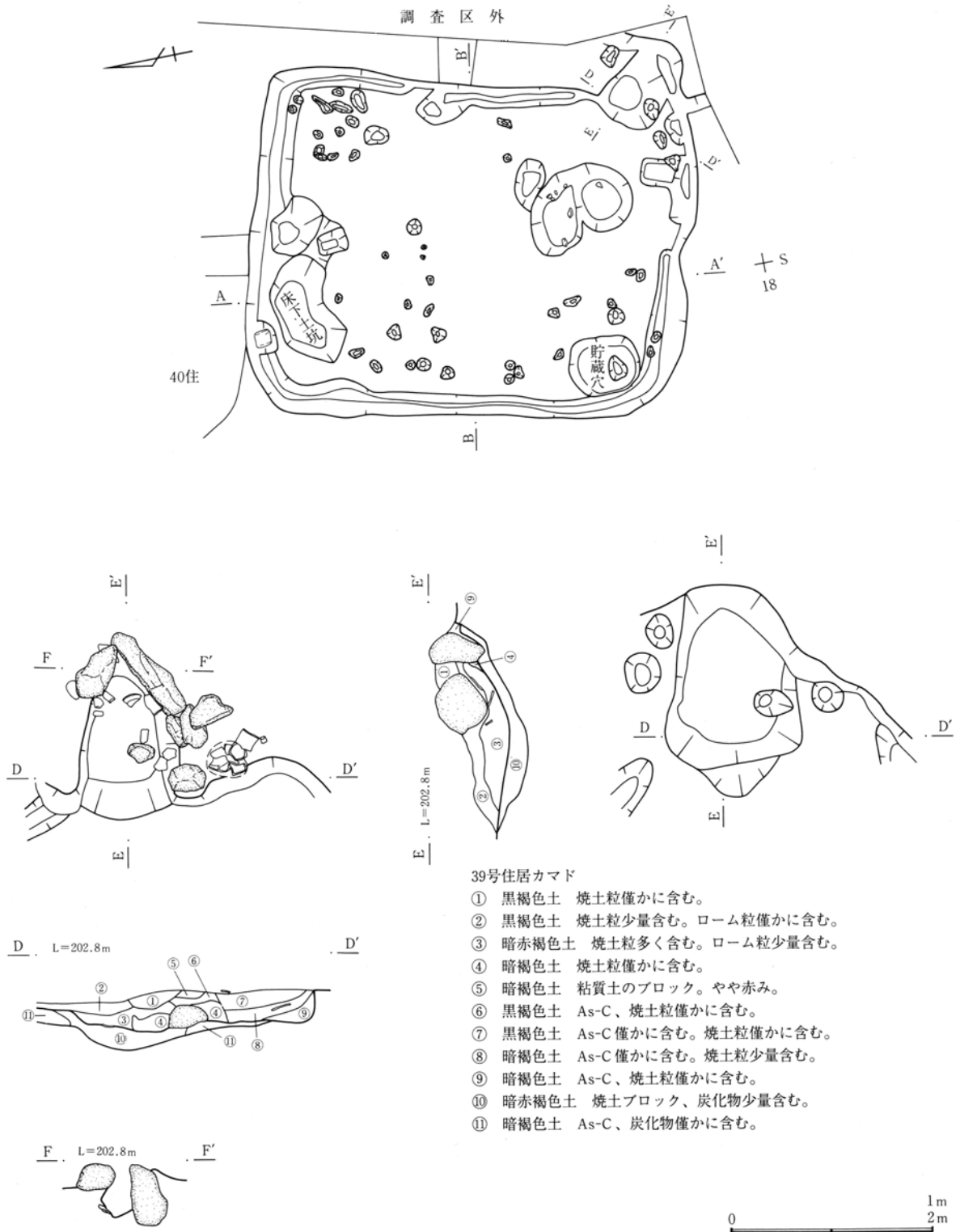
位置 65区R-18グリッド他 方位 N-106°-E  
 重複 古墳時代 (7世紀後半) の40号住居と北壁で接する。写真 PL142  
 形状 長軸4.25m、短軸3.3mの長方形を呈する。  
 壁高 北壁で25cmを測る。面積 11.27m<sup>2</sup>を測る。  
 埋没土 As-Cを含む黒褐色土を主体とする。観察によると自然に埋没した可能性が高い。  
 床面 埋没土層の断面観察によると、南壁寄りの一部で、黒色土による貼り床を確認できた。  
 貯蔵穴 住居南西隅で検出された。径71×58cm、深さ59cmの楕円形を呈する。  
 周溝 南壁の一部をのぞき、検出された。最大幅30cm、深さ6cmを測る。柱穴 検出されなかった。  
 掘り方 ほとんど確認できなかった。北壁に接して床下土坑状の掘り込みが検出されている。  
 遺物 土師器坏片75点、甕片356点、須恵器坏片6点、

碗片10点、甕片7点、羽釜片4点、灰釉陶器片が検出されている。遺物は3の土釜が、床からつぶれた状態で出土しているほかは、竈および貯蔵穴周辺に集中している。また、掘り方調査時に、住居北西隅付近で径15cmほどの黄褐色の粘土塊が出土している。

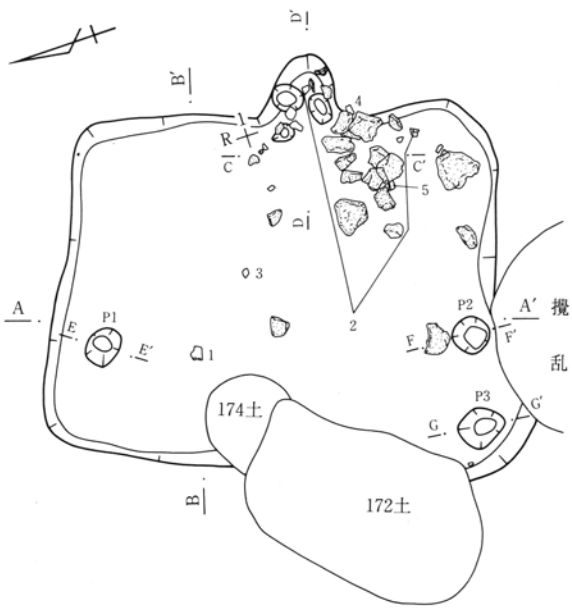
竈 位置 南東コーナー部 全長0.9m、焚き口幅0.65mを測る。袖 ほとんど確認されなかったが、芯材もしくは補強材と思われる礫が出土している。遺物 埋没土中および上面から羽釜片、碗片、土師器片が出土している。これらの土器および竈構築材と思われる礫は住居廃絶後投棄されたものと思われる。

残存 住居外にのびている煙道の補強材と思われる礫が良好に残存している。

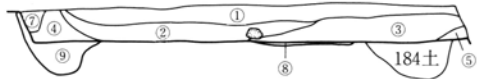
考察 出土遺物の様相から、11世紀第2四半期の竈穴住居であると思われる。



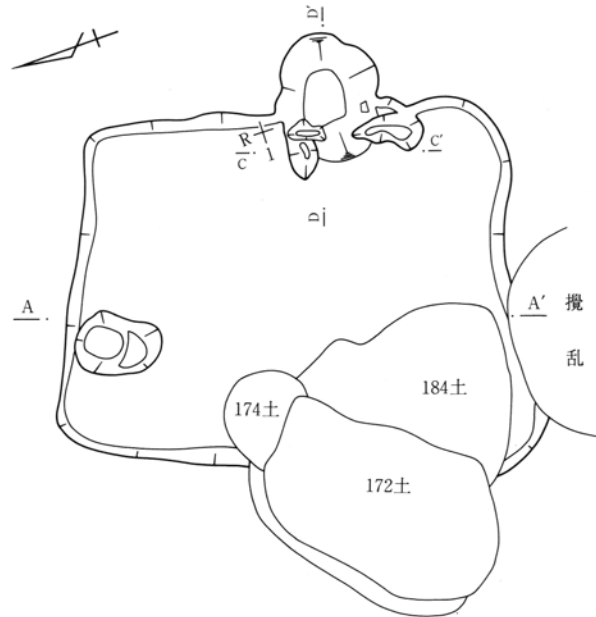
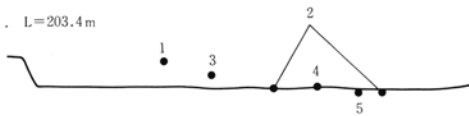
第316図 39号住居 (2)



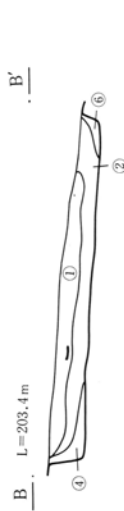
A L=203.4m A'



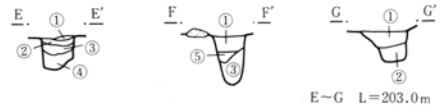
A L=203.4m A'



A A' 攪乱



B L=203.4m

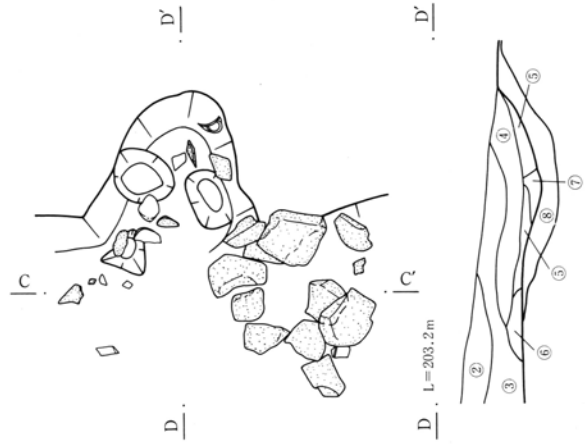


41号住居ビット

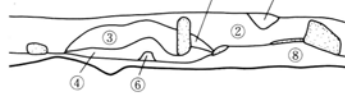
- ① 黒褐色土 ローム粒僅かに含む。
- ② 暗褐色土 黒褐色土僅かに含む。
- ③ 黒褐色土 ローム粒僅かに含む。
- ④ 暗褐色土 ローム粒僅かに含む。
- ⑤ 黒色土 As-C 僅かに含む。

41号住居

- ① 黒褐色土 As-C少量含む。ローム粒僅かに含む。
- ② 黒色土 As-C、ローム粒僅かに含む。
- ③ 黒色土 As-C少量含む。ローム粒多く含む。
- ④ 黒褐色土 As-C、ローム粒僅かに含む。
- ⑤ 黒褐色土 ローム粒少量含む。
- ⑥ 黒褐色土 As-C 僅かに含む。
- ⑦ 攪乱
- ⑧ 黄褐色土 貼り床。ローム粘質土。
- ⑨ 暗褐色土 ローム粒多く含む。しまり弱。



C L=203.2m C'



41号住居カマド

- ① 黒褐色土 ローム粘質土少量含む。
- ② 黒褐色土 As-C、ローム粒僅かに含む。
- ③ 黒褐色土 ローム粒少量含む。
- ④ 暗黄褐色土 ローム土主体。黒色土少量含む。天井の崩落土か。
- ⑤ 暗赤褐色土 焼土粒多く含む。
- ⑥ 暗褐色土 粒子密。
- ⑦ 黒褐色土 ローム粒、焼土粒少量含む。
- ⑧ 暗赤褐色土 焼土粒、炭化物含む。



第317図 41号住居

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 41号住居

**位置** 65区R-20グリッド、75区R-1グリッド他

**方位** N-110°-E **写真** P L143

**重複** 平安時代と思われる172号、174号土坑に切られる。平安時代（10世紀第2四半期）の184号土坑が掘り方調査時に床下から検出された。（184土→41住→174土→172土の順と思われる。）南壁の一部を攪乱によって破壊される。

**形状** 長軸3.80m、短軸2.75mの長方形を呈する。

**壁高** 北壁で32cmを測る。 **面積** 9.11m<sup>2</sup>を測る。

**埋没土** As-Cを含む黒色土及び黒褐色土を主体とする。観察によると自然に埋没したものと思われる。

**床面** 住居中央部付近でローム粘質土による貼り床を確認した。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**周溝** 検出されなかった。 **柱穴** ピットは3本検出されている。いずれが柱穴に相当するかは不明である。 **掘り方** 床下の掘り込みは確認されなかった。 **遺物** 土師器坏片15点、甕片57点、須恵器碗片14点、甕片7点、羽釜片3点、灰釉陶器片4点が出土している。埋没土からの出土が多く、他は竈からの出土が多い。

**竈** **位置** 東壁ほぼ中央部 **規模** 全長0.6m、焚き口幅0.45mを測る。

**袖** ほとんど残存していない。

**遺物** 燃焼部から羽釜片、碗底部が出土している。また、竈左手前から住居南壁沿いにかけて竈の構築材あるいは補強材として用いられたと思われる礫が約15点出土している。

**考察** 出土遺物の様相から10世紀第3四半期の竪穴住居であると思われる。

##### 42号住居

**位置** 75区Q-2グリッド他 **方位** N-117°-E

**重複** なし 後世の攪乱によって東壁の全てと南壁の一部を失う。 **写真** P L143

**形状** 壁の一部を失うため、全体の形状は不明だが台形状の平面形を呈している。本遺跡においては当

該期の住居が台形状の平面形を呈することはないため、北壁のラインを誤認した可能性もある。

**壁高** 残存の比較的良好な西壁で19cmを測る。

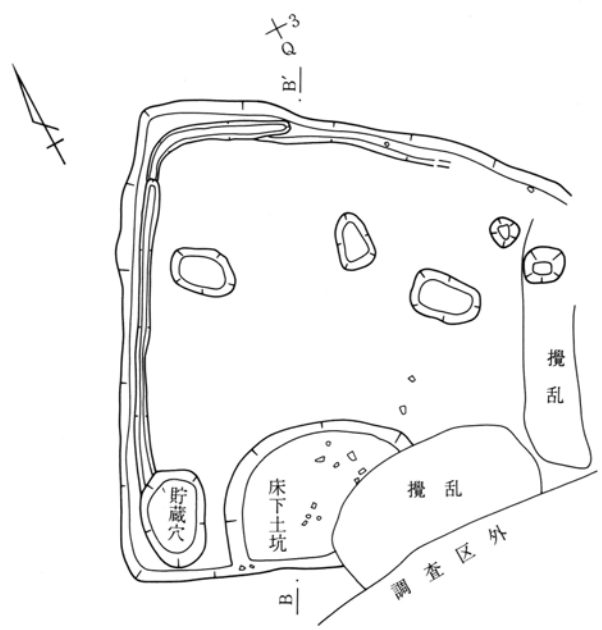
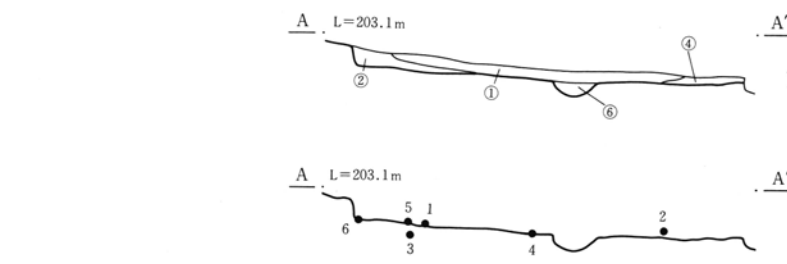
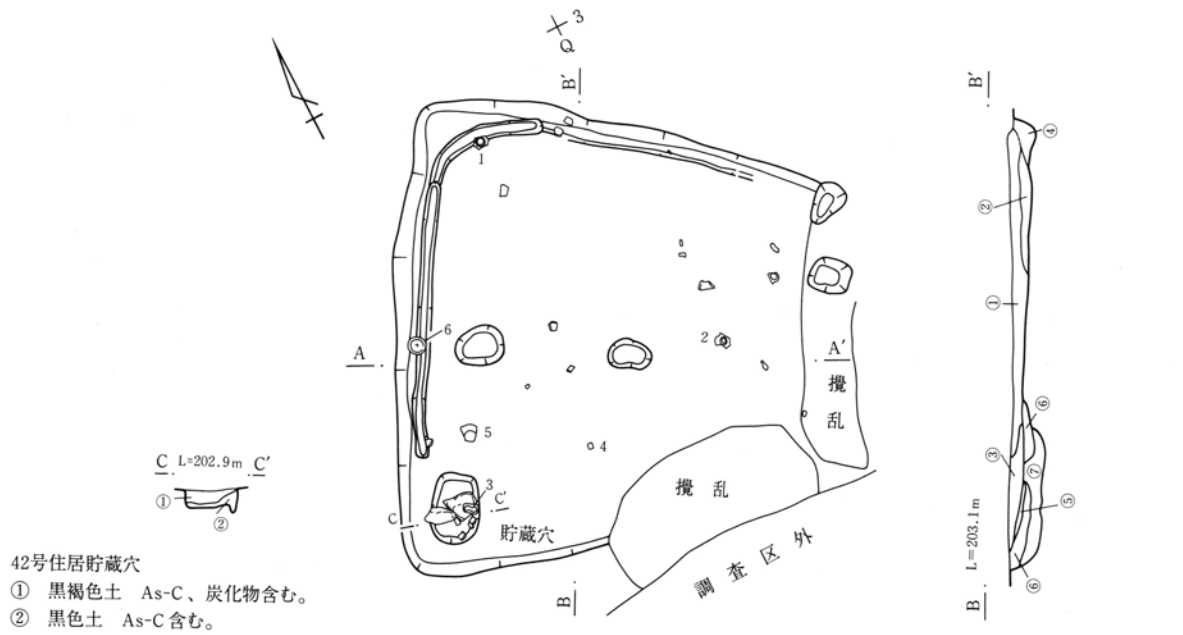
**面積** 不明 **埋没土** As-Cを含む黒褐色土を主体とする。観察によると自然に埋没した可能性が高い。

**床面** 南壁際の床下土坑上で暗褐色土の貼り床が確認された。 **貯蔵穴** 住居南西隅で検出された。径55×40cm、深さ19cmを測る。上面で礫2点と3の耳皿が出土している。 **周溝** 北壁および西壁の一部で検出された。最大幅12cm、深さ9cmを測る。

**柱穴** ピットは住居中央および西壁寄りで検出された。柱穴に相当するかは不明である。 **掘り方** 南壁際で床下土坑が検出された。径1.68×1.06m、深さ14cmを測る。 **遺物** 土師器片32点、須恵器坏片2点、灰釉陶器片4点が出土している。

**竈** 東壁に構築されていたものと思われる。

**考察** 出土遺物の様相から10世紀の住居であろう。

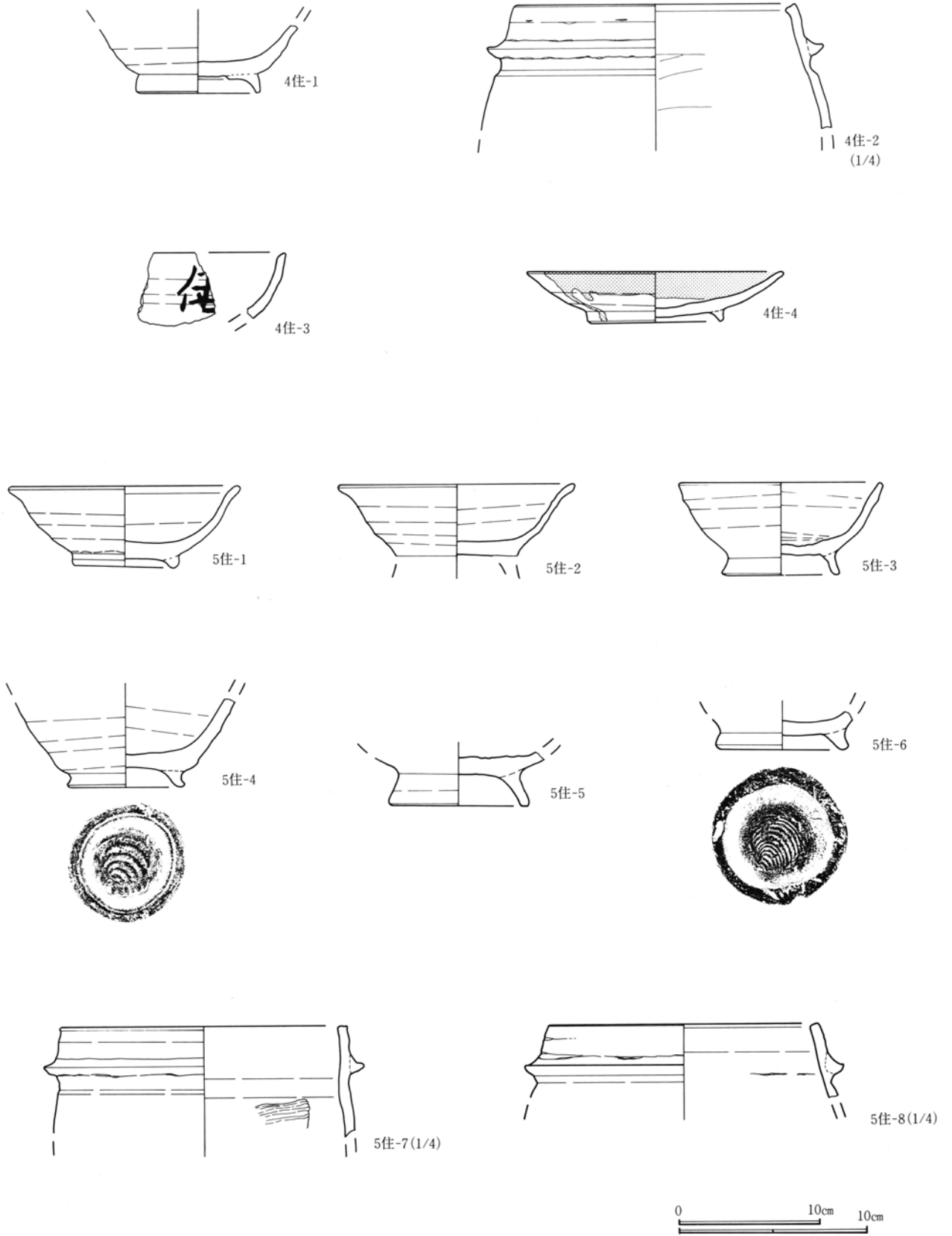


- 42号住居
- ① 黒褐色土 As-C少量含む。
  - ② 黒褐色土 As-C僅かに含む。暗褐色土粒僅かに含む。
  - ③ 暗褐色土 As-C少量含む。粒子密。
  - ④ 暗褐色土 As-C僅かに含む。粒子さらに密。
  - ⑤ 暗褐色土 貼り床。ローム粒僅かに含む。As-C僅かに含む。
  - ⑥ 黒色土 ローム粘質土僅かに含む。As-C僅かに含む。粒子密。
  - ⑦ 黒色土 As-C僅かに含む。



第318図 42号住居

第4章 検出された遺構と遺物



第319図 4・5号住居出土遺物

4号住居出土土器観察表(第319図 P L144)

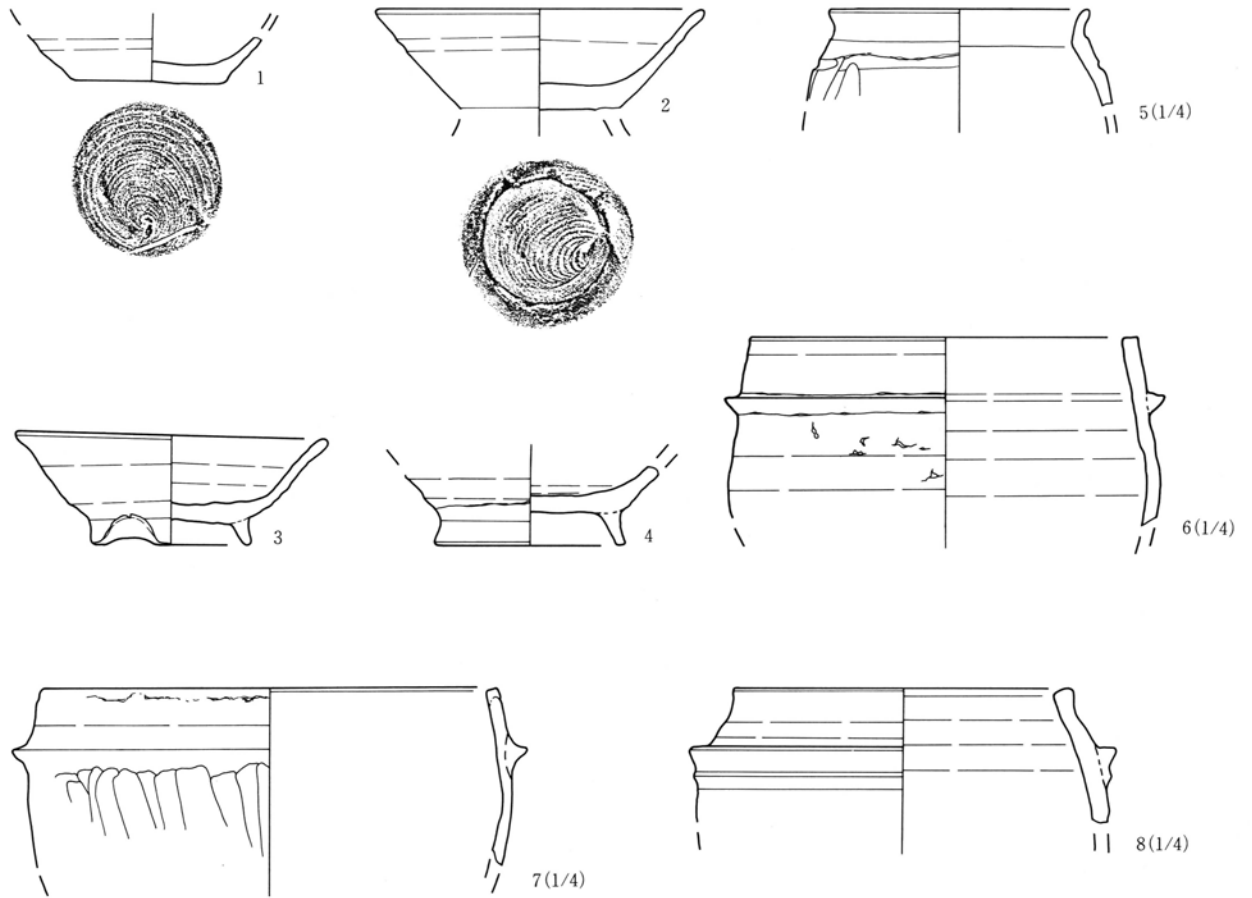
器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 高台付椀	底部 1/4残存	口 — 底 6.6 高 (3.5)	①酸化焰、やや硬質 ②明赤褐色 ③白色粒を含む	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	墨書  大原2号窯式期
2 須恵器 羽釜	口縁部片	口 <20.4> 底 — 高 —	①酸化焰、硬質 ②赤 ③砂粒を含む	口縁部横撫で。胴部縦位の笥削り。罅の下位に括れ。	
3 須恵器 椀か	口縁部片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。湾曲する体部から、口縁は僅かに外反する。	
4 灰釉陶器 高台付皿	口縁一部 欠	口 13.6 底 7.3 高 2.7	①還元焰、硬質 ②灰白色 ③細、極少量の砂粒	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転笥削り。高台を付した底部から体部は湾曲気味に立ち上がる。施釉方法は漬け掛け。	

5号住居出土土器観察表(第319図 P L144)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 高台付椀	体部2/3 残存	口 12.3 底 5.7 高 4.2	①還元焰、やや軟質 ②灰黄色 ③砂粒を極少量含む	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から湾曲気味に立ち上がり、口縁は小さく外反する。	
2 須恵器 高台付椀	体部1/2 残存、高 台欠	口 (12.3) 底 (3.7) 高 (6.3)	①還元焰、やや硬質 ②にぶい黄色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。高台を付した底部から緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁は小さく外反する。	
3 須恵器 高台付椀	口縁～底 部1/3残 存	口 (10.8) 底 4.9 高 6.2	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転糸切り。高台を付した底部から、湾曲気味に立ち上がる。	
4 須恵器 高台付椀	体部～底 部1/2残 存	口 — 底 6.2 高 (4.6)	①酸化焰、やや硬質 ②黄灰色 ③白色粒を含む	内、外面轆轤整形。底部は右回転糸切り。高台を付した底部からほぼ直線的に立ち上がる。	
5 須恵器 高台付椀	底部(高 台)	口 — 底 7.4 高 (2.9)	①還元焰、やや硬質 ②灰色 ③砂、軽石粒を含む	内面は轆轤整形。やや高めの高台を付した底部から、体部は湾曲気味に緩やかに立ち上がる。	
6 須恵器 高台付椀	底部(高 台)	口 — 底 7.0 高 (2.1)	①酸化焰、やや硬質 ②褐灰色 ③砂粒を含む	内面は轆轤整形。底部は右回転糸切り、無調整。高台を貼付。	
7 須恵器 羽釜	口縁部片	口 <20.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。内面に一部横撫で。口縁は僅かに内傾し、端部は強い面取り。	
8 須恵器 羽釜	口縁部片	口 <19.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい黄橙色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。口縁は僅かに内傾し、端部は強い面取り。罅の下位に括れ。	



第4章 検出された遺構と遺物

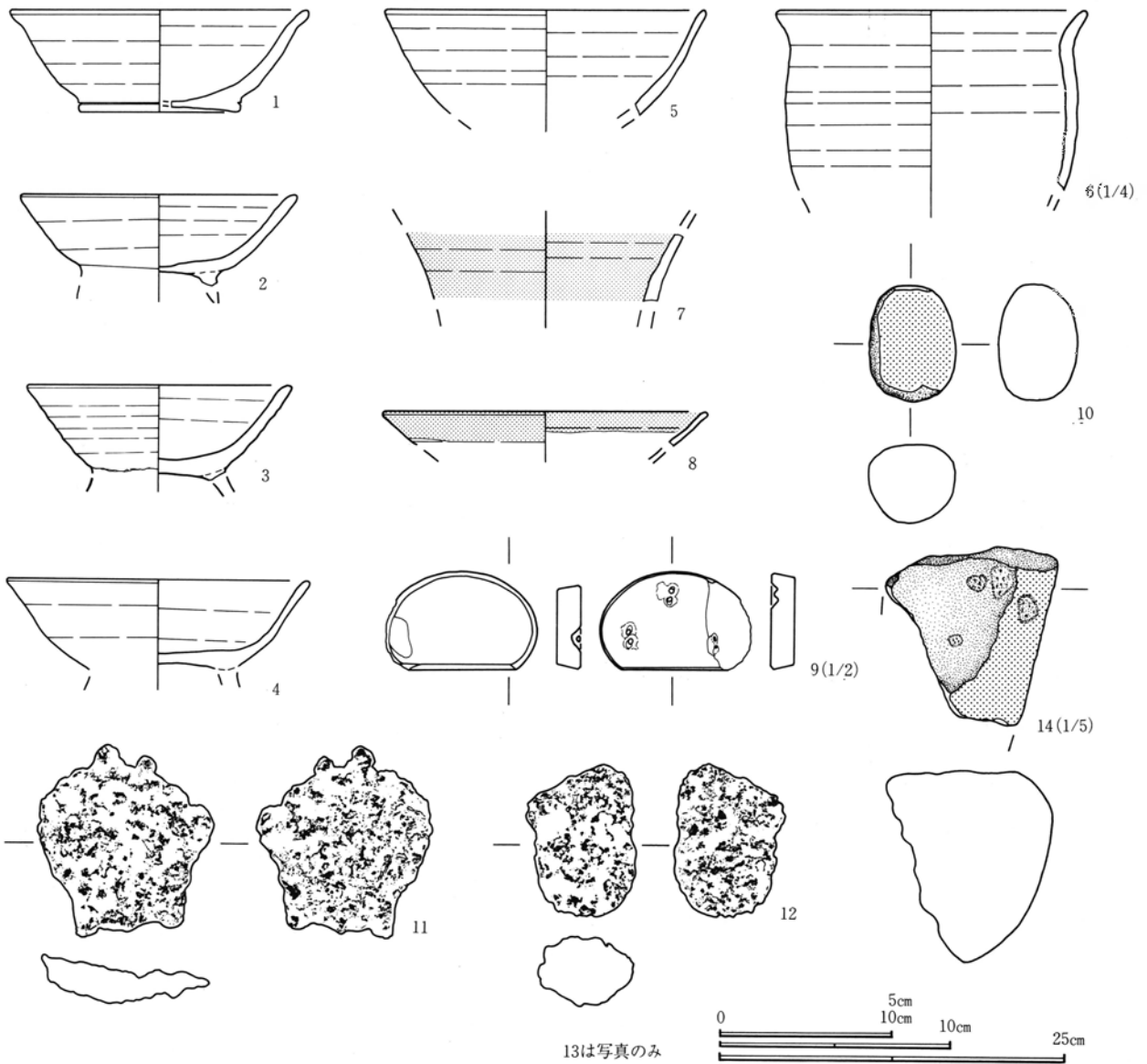


第320図 6号住居出土遺物



6号住居出土土器観察表 (第320図 PL144)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 坏	底部	口 — 底 6.0 高 —	①還元焰、やや軟質 ②赤灰色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り、無調整。体部はやや内湾気味に立ち上がる。	
2 須恵器 高台付椀	口縁~底 部3/5残 存高台欠	口 13.0 底 (6.3) 高 (4.0)	①還元焰、やや軟質 ②にぶい橙色・黒褐色 ③砂粒、雲母を少量含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り、無調整。高台を付した底部からはほぼ直線的に立ち上がり、口縁は僅かに外傾する。	
3 須恵器 高台付椀	口縁部 1/4欠	口 12.4 底 6.4 高 4.3	①還元焰、やや軟質 ②にぶい黄橙色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。粗雑な高台を付した底部から内湾気味に立ち上がり、口縁は小さく外反する。高台の一部がめくれる。	
4 須恵器 高台付椀	底部	口 — 底 7.2 高 —	①還元焰、やや軟質 ②にぶい黄褐色 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。粗雑な高台を付した底部から内湾気味に立ち上がる。	
5 土師器 甕	口縁部 1/3	口 <13.8> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい黄橙色 ③砂粒、小礫を含む	口縁部内、外面横撫で。胴部上位縦位篋削り。脹らみを持つ胴部上位から直線的に外反する口縁部に至る。	
6 須恵器 羽釜	口縁部 1/5	口 <26.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい橙色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。口縁は僅かに内傾し、端部は強い面取り。胴部上位に脹らみを持つ。	
7 須恵器 羽釜	口縁部 2/5	口 <24.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい褐色 ③白色粒を含む	内面轆轤整形。胴部外面縦位の篋削り。脹らみを持つ胴部上位から僅かに内傾する口縁。端部は強い面取り。	
8 須恵器 羽釜	口縁部 1/5	口 <18.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②浅黄色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。口縁はやや内傾し、端部は外側に肥厚する。胴部上位に脹らみを持ち銹はやや変形する。	



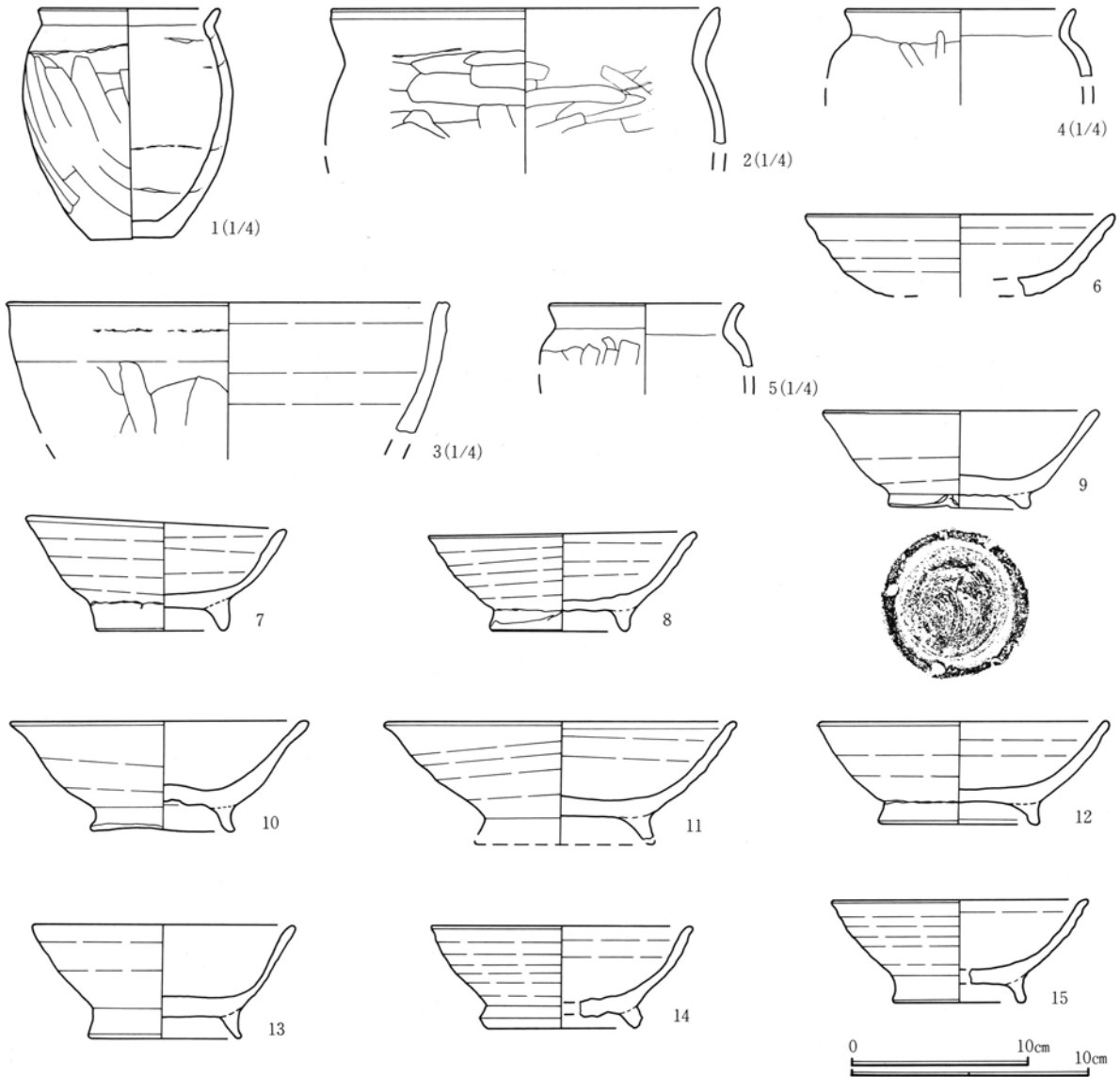
第321図 9号住居出土遺物

9号住居出土遺物観察表 (第321図 P L145)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 坏	口縁～底 部1/2残 存	口 13.0 底 <7.0> 高 4.4	①還元焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転糸切り。体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は小さく外反する。	
2 須恵器 高台付椀	高台欠	口 12.0 底 (5.9) 高 3.95	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐色 ③細砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。高台を付した底部から湾曲気味に立ち上がる。	
3 須恵器 高台付椀	高台欠	口 10.5 底 (5.7) 高 (5.0)	①還元焰、やや硬質 ②灰白色 ③砂粒、軽石粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。やや開き気味の高台を付した底部から、体部はほぼ直線的に立ち上がる。	
4 須恵器 高台付椀	口縁～底 部2/5残 存	口 <13.2> 底 <6.0> 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。高台を付した底部から、体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。	
5 須恵器 椀	口縁～体 部1/4残 存	口 <14.0> 底 — 高 —	①還元焰、やや軟質 ②浅黄色 ③細砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。湾曲する体部から僅かに外反する口縁。	
6 須恵器 土釜	口縁～胴 部1/4残 存	口 <18.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③砂、小礫を含む	輪積み整形で轆轤使用。僅かな脹らみを持つ胴部上位から、口縁は短く直線的に外反する。	

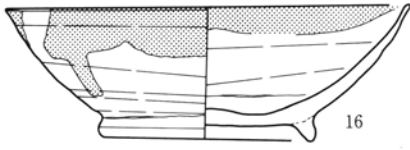
第4章 検出された遺構と遺物

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
7	頸部破片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②灰白色 ③密、ほとんど含まない	やや緑色を帯びた釉。施釉方法は不明。	
8	口縁部破片	口 <14.2> 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②灰黄色 ③密、ほとんど含まない	口縁端部が僅かに外側に肥厚する。	
9	ほぼ完形	長径 4.5 短径 2.8		厚さ0.7cm。潜り穴は3対。うち1対は未貫通。	黒色頁岩製
10	完	長さ 5.0 幅 3.7		表、裏の一部を欠く。 重量96g。	安山岩製
11		長径 8.4 短径 7.7		椀形滓	
12		長径 6.6 短径 4.8		椀形滓	
13		—		流動滓	
14		長さ(12.5) 厚さ(13.5)			二次的被熱

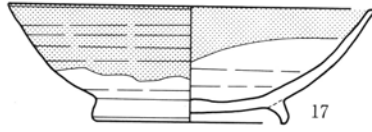


第322図 10号住居出土遺物(1)

第5節 平安時代



16



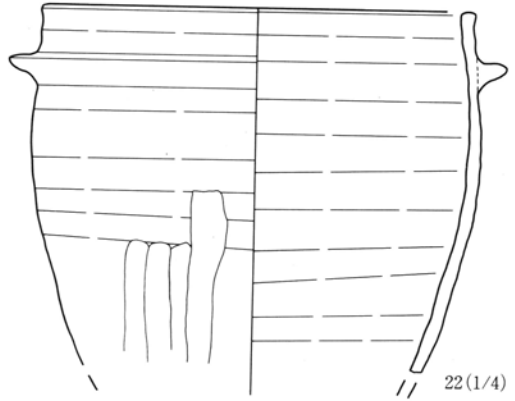
17



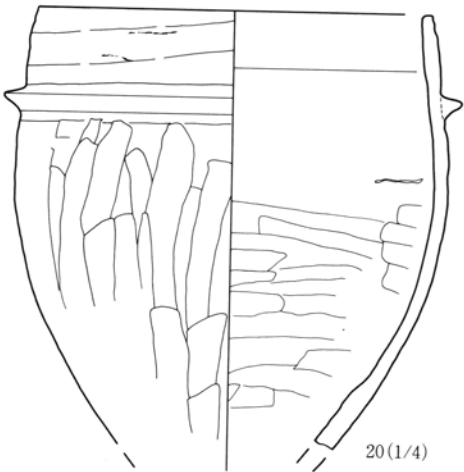
18



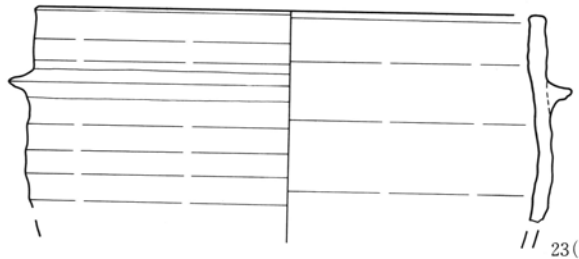
// 19(1/4)



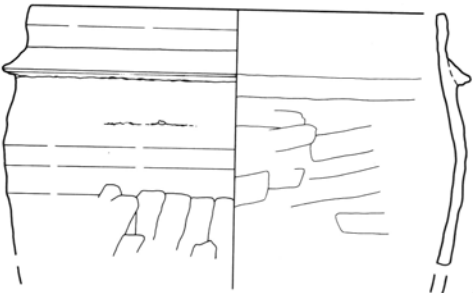
// 22(1/4)



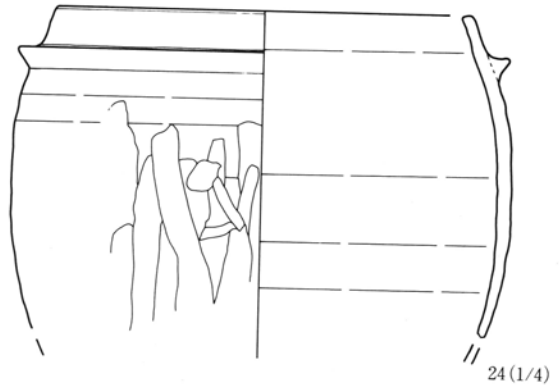
20(1/4)



// 23(1/4)



// 21(1/4)

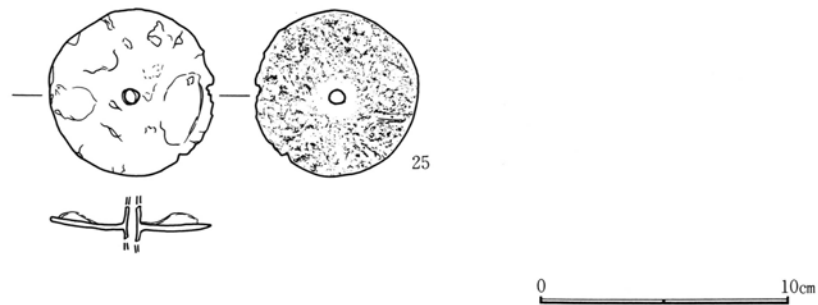


// 24(1/4)



第323図 10号住居出土遺物(2)

第4章 検出された遺構と遺物

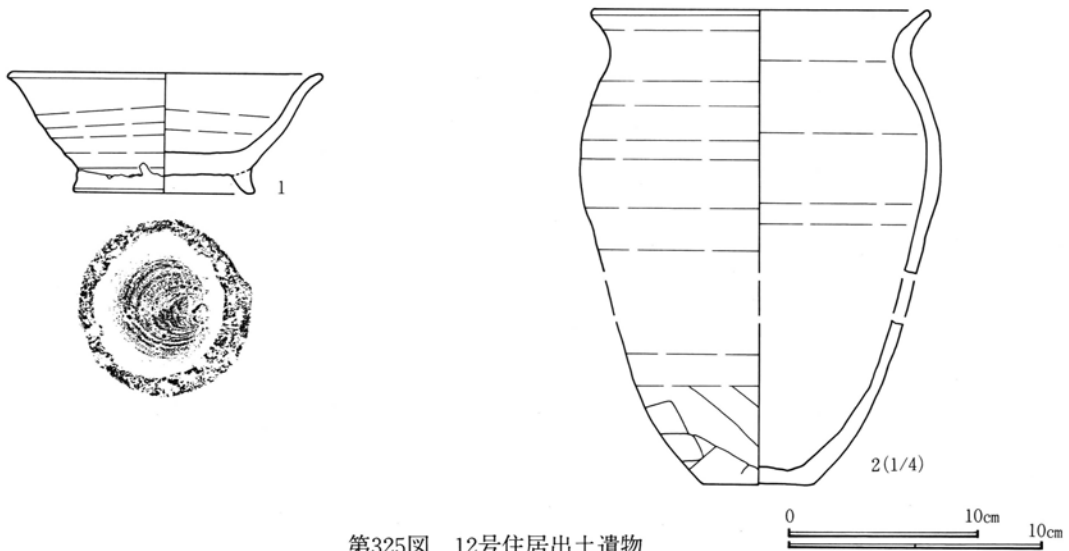


第324図 10号住居出土遺物(3)

10号住居出土遺物観察表(第322~324図 P L 145、146)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考	
1	土師器 小型甕	口縁一部 欠	口 10.3 底 4.6 高 12.9	①酸化焰、やや軟質 ②暗灰黄色 ③砂粒、軽石粒含む	口縁部内、外面横撫で。胴部外面斜縦位の篋削り。胴部上位に脹らみを持ち、口縁は短く屈曲して外反する。	
2	土師器 甕	口縁部 1/5残存	口 <22.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい褐色 ③砂粒を含む	口縁部内、外面横撫で。胴部上位外面横位篋削り。内面は篋撫で。僅かに脹らみを持つ胴部上位から口縁は湾曲して外反する。	
3	土師器 鉢か	口縁部片	口 <25.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②明赤褐色 ③砂粒を含む	口縁部内、外面横撫で。胴部外面縦位篋削り。胴部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は小さく外反する。口縁端部は強い面取り。	
4	土師器 小型甕	口縁部片	口 <10.3> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒を含む	口縁部内、外面横撫で。脹らみを持つ胴部から口縁は屈曲して外反する。	
5	土師器 小型甕	口縁部片	口 <11.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒を含む	口縁部内、外面横撫で。胴部上位は縦位の篋削り。脹らみを持つ胴部から口縁は屈曲して外反する。	
6	須恵器 坏	口縁部片	口 <13.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③密、細砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。体部はやや湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。	
7	須恵器 高台付椀	完形	口 11.0 底 5.7 高 4.8	①還元焰、やや軟質 ②にぶい黄褐色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。粗雑な高台を付した底部から体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	
8	須恵器 高台付椀	ほぼ完形	口 11.3 底 5.1 高 4.2	①酸化焰、やや軟質 ②明赤褐色 ③砂粒、雲母を含む	内、外面とも轆轤整形。粗雑な高台を付した底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がり、口縁は小さく外反する。	
9	須恵器 高台付椀	口縁一部 欠	口 10.7 底 6.2 高 4.2	①酸化焰、やや軟質 ②浅黄橙 ③粗、砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。粗雑な高台を付した底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。高台端部に乾燥時の台の痕跡あり。	
10	須恵器 高台付椀	口縁~底 部3/4残 存	口 12.65 底 6.15 高 4.7	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。やや外湾する粗雑な高台を付した底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。	
11	須恵器 高台付椀	口縁~底 部2/3残 存	口 14.8 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい褐色 ③砂粒、雲母を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転撫で調整。やや開き気味の高台を付した底部から、体部は緩く湾曲気味に立ち上がる。	
12	須恵器 高台付椀	口縁~底 部3/4残 存	口 12.2 底 6.8 高 4.3	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。高台を付した底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	
13	須恵器 高台付椀	口縁~底 部3/4残 存	口 9.8 底 6.3 高 4.7	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい褐色 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。高台を付した底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	
14	須恵器 高台付椀	口縁~底 部1/2残 存	口 11.0 底 <6.85> 高 4.3	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい黄褐色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がる。底部は調整のため、段が付く。	
15	須恵器 高台付椀	口縁~底 部1/4残 存	口 <10.8> 底 5.6 高 4.3	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒、石英を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転糸切り。高台を付した底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
16 灰釉陶器 高台付椀	口縁一部 欠	口 16.0 底 8.4 高 5.4	①還元焰、硬質 ②灰白色 ③密、ほとんど含まない	内、外面とも轆轤整形。底部は切り離し後回転 撫で調整。高台を付した底部から、体部はやや 湾曲気味に立ち上がり、口縁は小さく外反する。 施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式期 か
17 灰釉陶器 高台付椀	口縁一部 欠	口 14.6 底 7.8 高 4.6	①還元焰、硬質 ②灰白色 ③密、赤褐色粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転糸切り。や や内湾する高台を付した底部から、体部は湾曲 して立ち上がり、口縁は僅かに外反する。施釉 方法は刷毛掛け。	光ヶ丘2号窯式 期
18 須恵器 坏か	底部片	口 — 底 <5.6> 高 —	①還元焰、硬質 ②灰色 ③密、白色粒僅かに含む	内、外面とも轆轤整形。外面に施釉。	
19 須恵器 羽釜	口縁～胴 上位1/2 残存	口 <20.4> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。僅かに脹らみを持つ胴 部から口縁は僅かに内傾し、端部の面取りはあ まり強くない。胴部外面縦位の篋削り。	
20 須恵器 羽釜	口縁～胴 下位1/4 残存	口 <21.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい褐色 ③砂粒を含む	口縁部内、外面横撫で。胴部内面篋撫で。外面 縦位の篋削り。僅かに脹らみを持つ胴部上位か ら口縁は直立気味で、端部は強い面取り。	
21 須恵器 羽釜	口縁～胴 上位1/4 残存	口 <22.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒、小礫を含む	口縁部内、外面横撫で。胴部内面篋撫で。外面 縦位の篋削り。僅かに脹らみを持つ胴部上位か ら口縁は直立気味で、端部は強い面取り。	
22 須恵器 羽釜	口縁～胴 部1/5残 存	口 <23.0> 底 — 高 —	①還元焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む	胴部上半と内面は轆轤整形。胴部下位は縦位の 篋削り。胴部はほとんど脹らみを持たず、口縁 は直立気味で僅かに外側に肥厚する。	
23 須恵器 羽釜	口縁～胴 上位1/4 残存	口 <27.0> 底 — 高 —	①還元焰、やや硬質 ②黄灰色 ③砂粒、小礫を含む	輪積み後轆轤整形。口縁部内、外面横撫で。ほ とんど脹らみを持たない胴部から口縁は直立気 味で端部は強い面取り。	
24 須恵器 羽釜	口縁～胴 上位1/8 残存	口 <22.0> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②明赤褐色 ③砂粒を含む	口縁部内、外面横撫で。胴部外面縦位の篋削り。 脹らみを持つ胴部上位から、口縁は内傾し、端 部は強い面取り。	
25 鉄製紡錘車		径 6.6 厚さ 0.2		薄い円盤状。軸は欠く。	

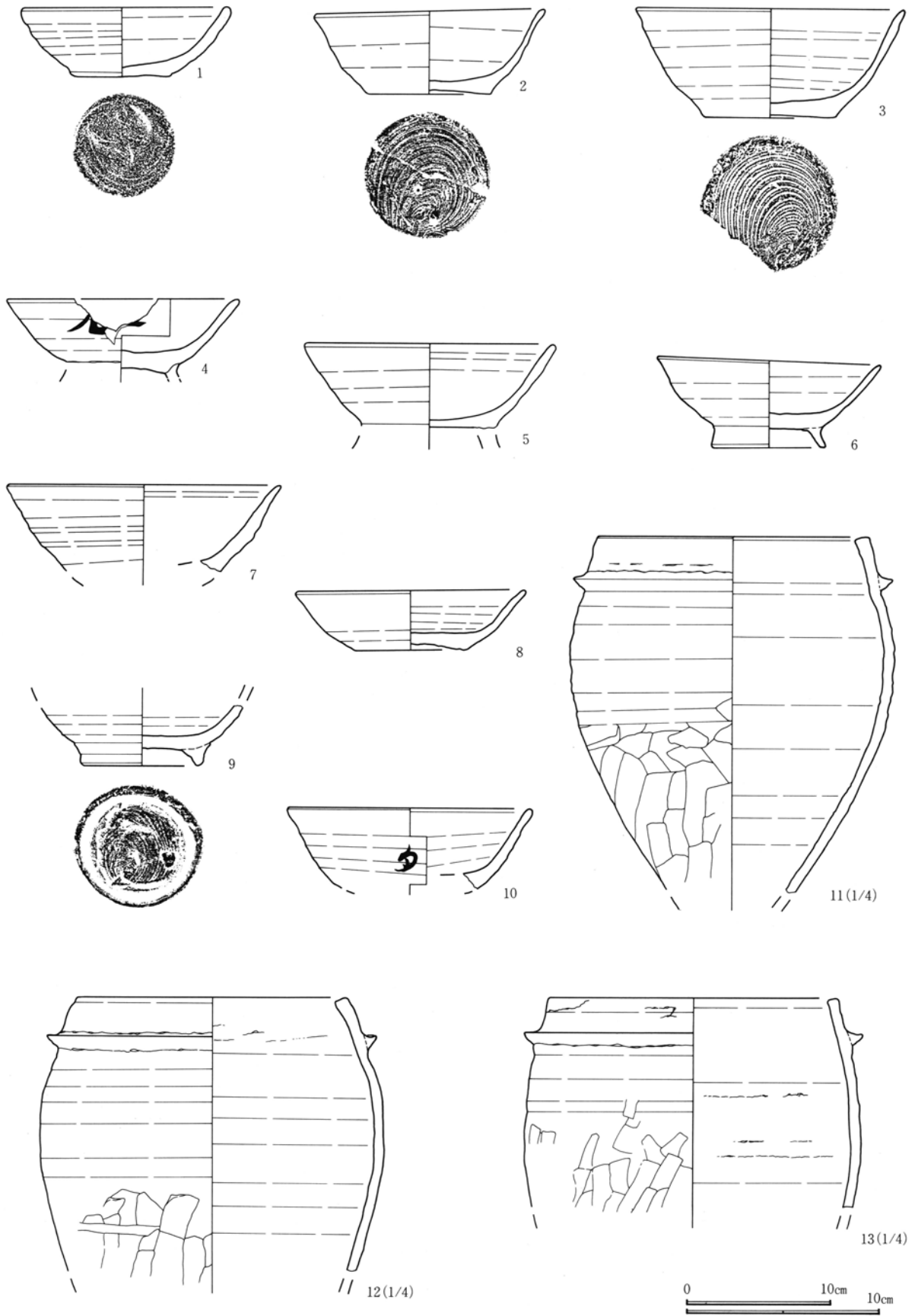


第325図 12号住居出土遺物

12号住居出土土器観察表 (第325図 P L146)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 高台付椀	口縁～底 部1/2残 存	口 <12.4> 底 7.0 高 4.7	①還元焰、やや硬質 ②灰色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。無 調整。粗雑な高台を付した底部から、体部は湾 曲気味に立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。	
2 須恵器 土釜	口縁～胴 部上位、 底部	口 <18.0> 底 6.0 高 <25.0>	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい褐色、にぶい橙 ③砂粒を含む	輪積み整形で轆轤使用。胴部下位は斜縦位の篋 削り。脹らみをもつ胴部上位から、口縁は小さく 直線的に外反する。	

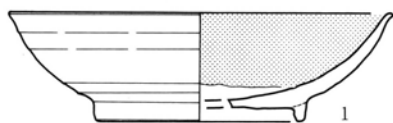
第4章 検出された遺構と遺物



第326図 13号住居出土遺物

13号住居出土土器観察表 (第326図 P L 146、147)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 坏	完形	口 10.9 底 5.3 高 3.65	①還元焰、やや硬質 ②浅黄色 ③細砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り、無調整。平底の底部から体部はやや湾曲気味に立ち上がる。内面に墨書か。	
2 須恵器 坏	口縁～底部2/3残存	口 12.0 底 6.4 高 4.4	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい褐色 ③細砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は左回転糸切り、無調整。僅かに上げ底を呈する底部から体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。	
3 須恵器 坏	口縁～底部1/3残存	口 <14.0> 底 7.0 高 5.6	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は左回転糸切り、無調整。器内の厚い底部から体部はやや湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。	
4 須恵器 高台付碗	口縁～底部4/5残存	口 12.2 底 — 高 —	①還元焰、やや軟質 ②浅黄色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底面は右回転糸切り、無調整。高台を付した底部から体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。	墨書
5 須恵器 高台付碗	口縁～底部3/4残存	口 13.0 底 6.1 高 (4.3)	①酸化焰、やや軟質 ②褐色 ③細砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から体部はほぼ直線的に立ち上がる。	
6 須恵器 高台付碗	口縁～底部1/2残存	口 <11.6> 底 5.9 高 4.3~4.7	①還元焰、やや軟質 ②灰色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。粗雑な高台を付した底部から体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	
7 須恵器 碗	2/3残存 底部欠	口 14.4 底 — 高 (4.5)	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③細砂粒を僅かに含む	内、外面とも轆轤整形。体部はほぼ直線的に立ち上がる。	
8 須恵器 坏	口縁～底部1/3残存	口 <12.0> 底 <6.0> 高 3.1	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい橙 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り、無調整。やや上げ底を呈する底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	
9 須恵器 高台付碗	底部	口 — 底 6.4 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい黄橙 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。高台を付した底部から、体部は湾曲気味に立ち上がる。	
10 須恵器 碗	口縁部片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、やや硬質 ②灰黄色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。器内の厚い底部から体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	墨書「夕」
11 須恵器 羽釜	口縁～胴部1/4残存	口 <19.0> 底 — 高 (24.6)	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	口縁内、外面、胴部上位は横撫で。胴部下位は斜縦位の篋削り。脹らみを持つ胴部上位から口縁はやや内傾し、端部は強い面取り。	
12 須恵器 羽釜	口縁～胴部1/4残存	口 <18.8> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい橙 ③砂粒、小礫を含む	口縁内、外面、胴部上位は横撫で。胴部下位は縦位の篋削り。脹らみを持つ胴部上位から口縁は内傾し、端部は強い面取り。	
13 須恵器 羽釜	口縁～胴部1/4残存	口 <20.2> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②橙 ③砂粒、小礫を含む	口縁内、外面、胴部上位は横撫で。胴部中位は斜縦位の篋削り。僅かに脹らみを持つ胴部中位から口縁はやや内傾し、端部は強い面取り。	



0 10cm

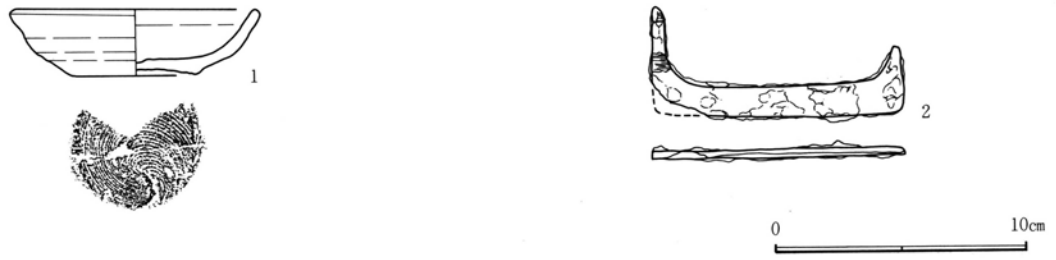
第327図 26号住居出土遺物

26号住居出土土器観察表 (第327図 P L 147)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 灰釉陶器 高台付頸	口縁～底部1/8残存	口 <15.2> 底 <8.3> 高 4.3	①還元焰、硬質 ②灰白色 ③密、ほとんど含まない	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から体部は丸みを持って開き、口縁は僅かに外反する。施釉方法は不明。	光ヶ丘1号窯式期か
2 灰釉陶器 長頸壺	口縁部片	口 <15.2> 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②黒、胎土は赤褐色 ③密、ほとんど含まない	内、外面とも轆轤整形。施釉方法は不明。	



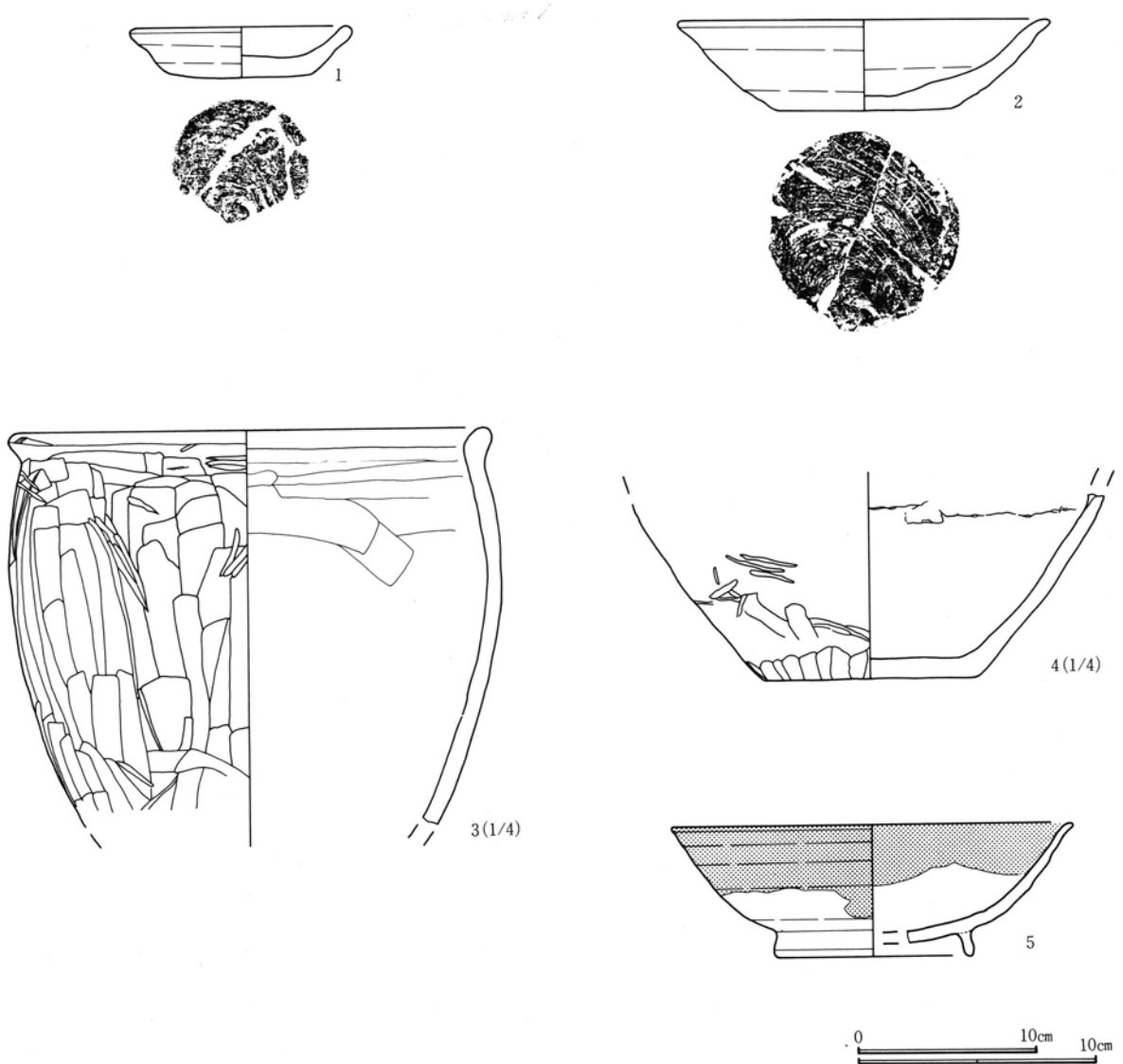
第4章 検出された遺構と遺物



第328図 33号住居出土遺物

33号住居出土遺物観察表 (第328図 P L 147)

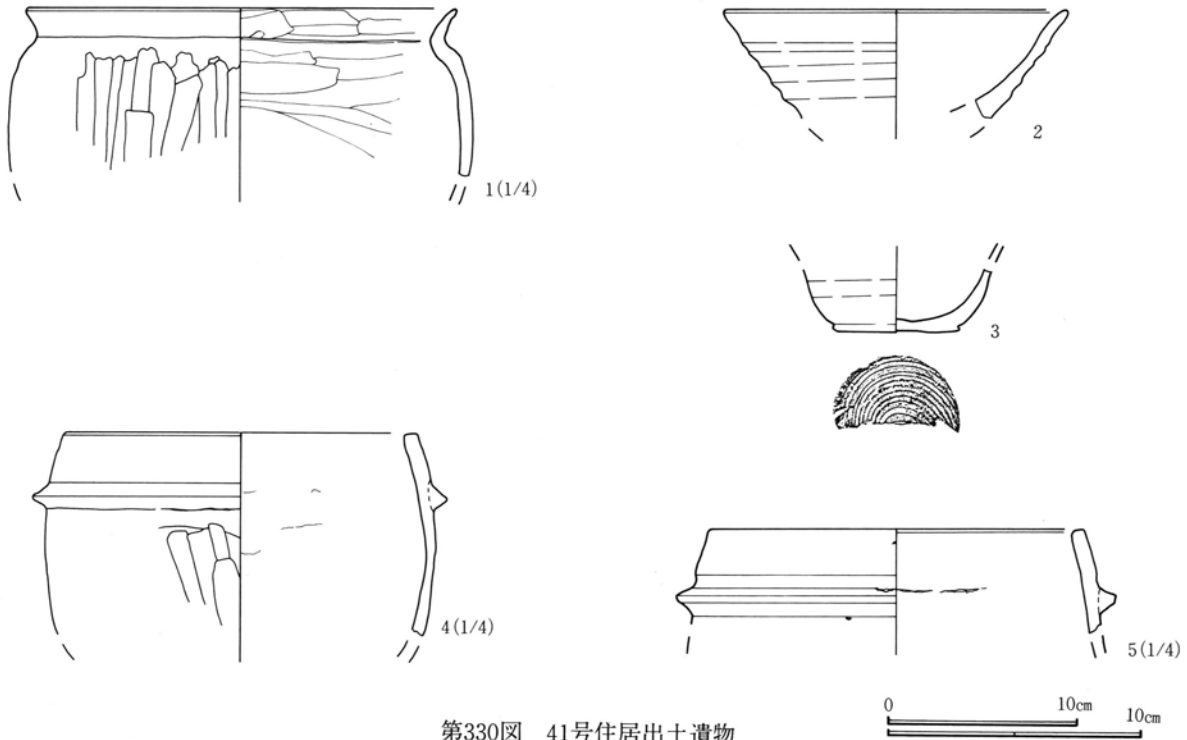
器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1	口縁～底部3/4残存	口 9.9 底 4.8 高 2.25	①酸化焰、やや軟質。 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む。	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り、無調整。やや上げ底を呈する底部から、体部は湾曲して立ち上がる。 火打ち金か。	
2	一部欠	幅 10.0 厚さ 0.3			



第329図 39号住居出土遺物

39号住居出土土器観察表 (第329図 P L 147、148)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 小皿	口縁～底 部2/3残 存	口 9.3 底 6.0 高 2.1	①酸化焰、やや軟質 ②橙 ③砂粒、雲母を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転糸切り、無調整。器肉の厚い平底の底部から体部はほぼ直線的に開く。	
2 須恵器 坏	口縁～底 部2/3残 存	口 <15.6> 底 7.3 高 3.8	①酸化焰、やや軟質 ②灰褐色 ③砂粒、雲母を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転糸切り。器肉の厚い底部から体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。	
3 土師器 土釜	口縁～胴 部下位	口 27.1 底 — 高 (22.0)	①酸化焰、やや軟質 ②灰褐色 ③砂粒を含む	胴部外面は縦位の篔削り。内面横撫で。僅かに脹らみを持つ胴部上位から、口縁は短く屈曲して外反する。	
4 土師器 土釜	胴下位～ 底部	口 — 底 12.0 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②明赤褐色 ③砂粒を含む	胴部内面篔削り。外面横撫で。胴部下位に縦位の篔削り。底面は全面に砂粒。平底の底部から体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	
5 灰釉陶器 高台付椀	口縁～底 部1/4残 存	口 <16.8> 底 <8.4> 高 5.5	①還元焰、硬質 ②灰白色 ③密、ほとんど含まない	内、外面とも轆轤整形。やや内湾する高台を付した底部から体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。釉は刷毛掛け。	光ヶ丘1号窯式期

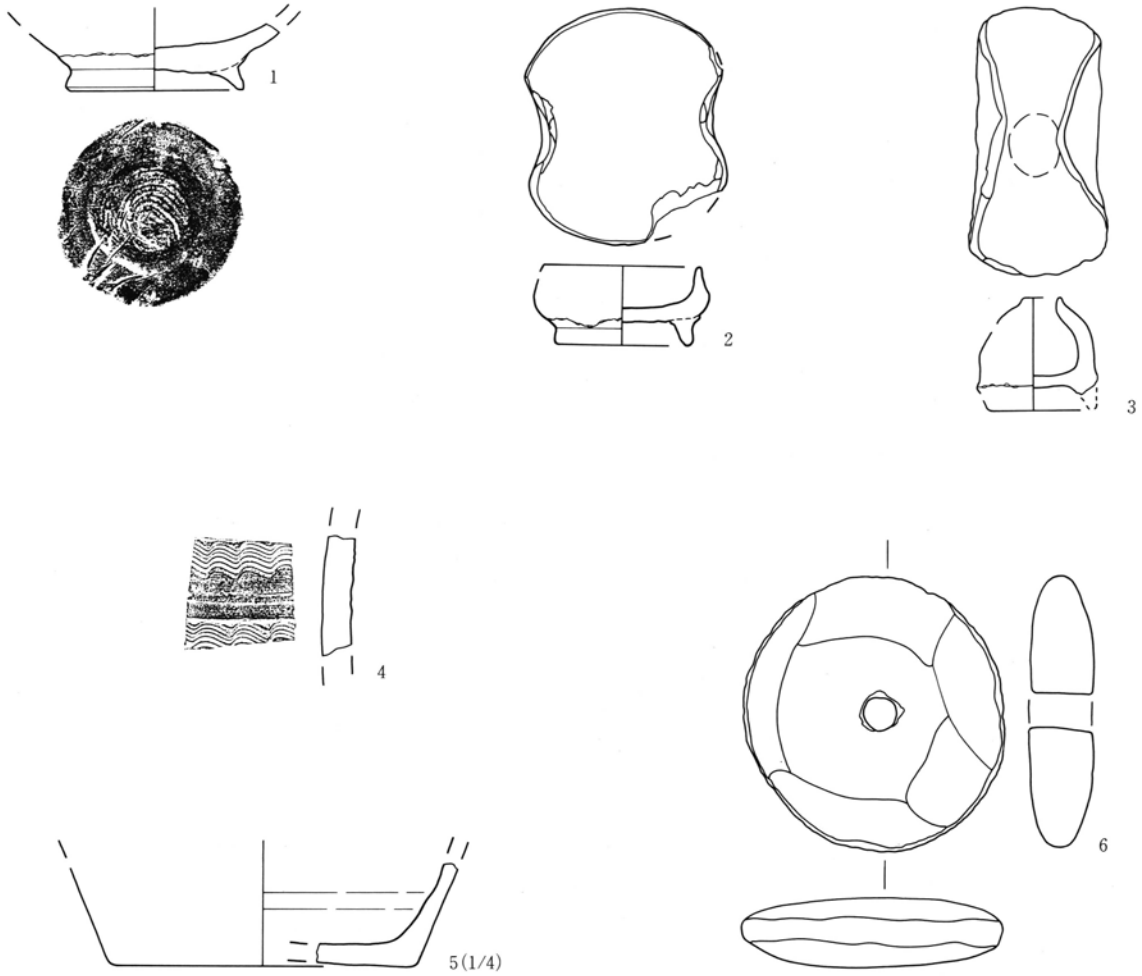


第330図 41号住居出土遺物

41号住居出土土器観察表 (第330図 P L 148)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 甕	口縁部 1/5残存	口 <22.6> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②明赤褐色 ③砂粒を含む	内面、口縁外側は横撫で。胴部は縦位の篔削り。胴部上位に脹らみを持ち、口縁は短く直線的に外反する。	
2 須恵器 椀	口縁～体 部1/5残 存	口 <13.6> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。体部はほぼ直線的に開く。	
3 須恵器 椀	底部1/2 残存	口 — 底 5.0 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③白色粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転糸切り、無調整。体部は湾曲気味に立ち上がる。	
4 須恵器 羽釜	口縁部片	口 <18.6> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐色 ③砂粒、小礫を含む	脹らみのある胴部上位から、口縁は僅かに内傾し、端部は強い面取り。内面と口縁部外側は横撫で、胴部は縦位の篔削り。	
5 須恵器 羽釜	口縁部片	口 <19.8> 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②灰褐色 ③砂粒、小礫を含む	口縁は僅かに内傾し、端部は強い面取り。内、外面とも横撫で。	

第4章 検出された遺構と遺物



第331図 42号住居出土遺物

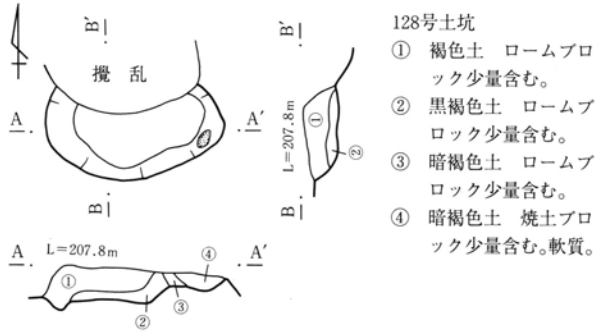


42号住居出土遺物観察表 (第331図 P L 148)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 椀	高台部	口 — 底 7.0 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。貼り付け高台。底部は右回転糸切り。	
2 須恵器 耳皿	口縁一部 欠	口 9.3 底 5.4 高 3.1	①還元焰、やや軟質 ②灰色 ③小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。粗雑な高台を付した底部から、口縁は横に開き、両端を摘み上げる。底部は回転糸切り。	
3 須恵器 耳皿	口縁の一部、高台	口 10.6 底 — 高 (3.8)	①還元焰、やや軟質 ②灰色 ③細砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から口縁は横に開き、端部は僅かに外反する。両端を摘み上げる。	
4 須恵器 甕か	破片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②外面黒褐色、内面灰色 ③密、ほとんど含まない	外面は施釉。8歯1単位の波状文を施文する。	
5 須恵器 甕	底部	口 — 底 <16.0> 高 —	①還元焰、硬質 ②黄灰色 ③細砂、小礫を含む	胴部内面、底部内面に撫での痕跡。胴部外面には篋撫での痕跡。底部から胴部は直線的に立ち上がる。	
6 石製弾み車	完形	長径10.7 短径10.3 厚み 2.7 重 178.0g		ほぼ円形。径1.3cmの孔が中央に貫通する。	二ツ岳軽石製

4 土坑

128号土坑



- 128号土坑
- ① 褐色土 ロームブロック少量含む。
  - ② 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
  - ③ 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
  - ④ 暗褐色土 焼土ブロック少量含む。軟質。

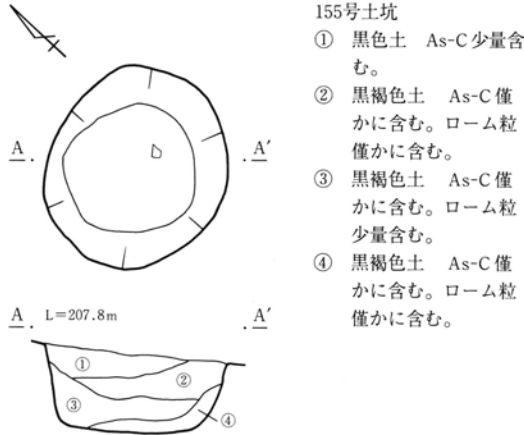
128号土坑

位置 66区F-20グリッド 重複 9世紀後半の26号住居を切る。 規模 径65×35cm、深さ25cmを測る。 形状 平面形状は楕円形、断面形状は不整形を呈する。 埋没土 褐色土を主体とする。

遺物 出土しなかった。

考察 26号住居を切るため、9世紀後半以降と思われる。

155号土坑



- 155号土坑
- ① 黒色土 As-C少量含む。
  - ② 黒褐色土 As-C僅かに含む。ローム粒僅かに含む。
  - ③ 黒褐色土 As-C僅かに含む。ローム粒少量含む。
  - ④ 黒褐色土 As-C僅かに含む。ローム粒僅かに含む。

155号土坑

位置 65区N-20グリッド 重複 なし

写真 P L 149

規模 径106×94cm、深さ43cmを測る。 形状 平面形状は円形、断面形状は浅箱形を呈する。

埋没土 As-Cを含む黒褐色土を主体とする。

遺物 土師器小片が3点出土した。

考察 埋没土から平安時代の土坑と判断した。

160号土坑



- 160号土坑
- ① 黒褐色土 As-C僅かに含む。ローム粒少量含む。
  - ② 黒色土 As-C僅かに含む。ローム粒少量含む。
  - ③ 黒色土 As-C僅かに含む。ローム粒僅かに含む。

160号土坑

位置 65区N-20グリッド 重複 平安時代の34号住居を切る。 写真 P L 149

規模 約1/2が調査区外にかかる。長径150cm、深さ48cmを測る。 形状 円形を呈すると思われる。

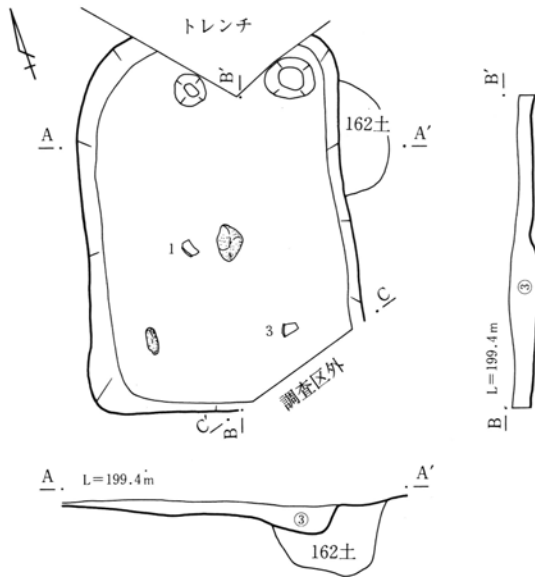
埋没土 As-Cを含む黒褐色土を主体とする。

遺物 図示した遺物の他、土師器小片が3点出土している。

考察 遺物から11世紀前半の土坑と思われる。

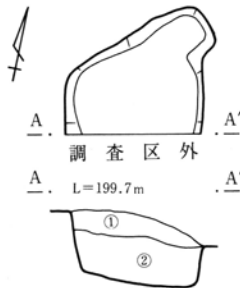
第332図 128・155・160号土坑

161号土坑



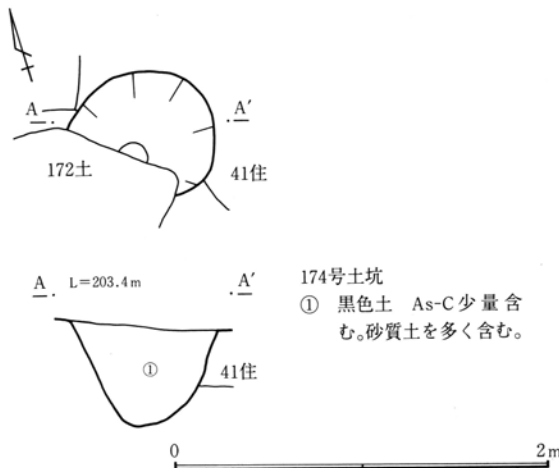
- 161号土坑
- ① 黒色土 As-C 僅かに含む。
  - ② 黒色土 As-C 少量含む。
  - ③ 黒色土 As-C 少量含む。ローム粒僅かに含む。

163号土坑



- 163号土坑
- ① 黒色土 As-C 少量含む。As-Bブロック含む。
  - ② 黒色土 As-C 多く含む。

174号土坑



- 174号土坑
- ① 黒色土 As-C 少量含む。砂質土を多く含む。

第333図 161・163・174号土坑

161号土坑

位置 65区M-20グリッド 重複 平安時代の34号住居を切る。縄文時代前期の162号土坑を切る。

写真 PL149

規模 長軸1.90m、短軸1.42mを測る。掘り込みの確認面からの深さは16cmだが壁面の断面観察によると深さ52cmを測る。形状 一部調査区外にかかるが、平面形状は長方形を呈すると思われる。断面形状は浅箱形を呈する。埋没土 黒色土を主体とする。遺物 図示した遺物の他土師器片38点、須恵器片41点が出土している。34号住居の遺物も含まれると思われる。考察 遺物および重複関係から、平安時代後期の土坑であると思われる。

163号土坑

位置 65区L-20グリッド 重複 34号住居を切る。

写真 PL149

規模 約1/2が調査区外にかかる。長径95cm、深さ36cmを測る。形状 全体の形状は不明だが不整形を呈すると思われる。埋没土 As-Cを含む黒色土を主体とする。遺物 出土しなかった。

考察 埋没土、重複関係から、平安時代後期の土坑であると思われる。

174号土坑

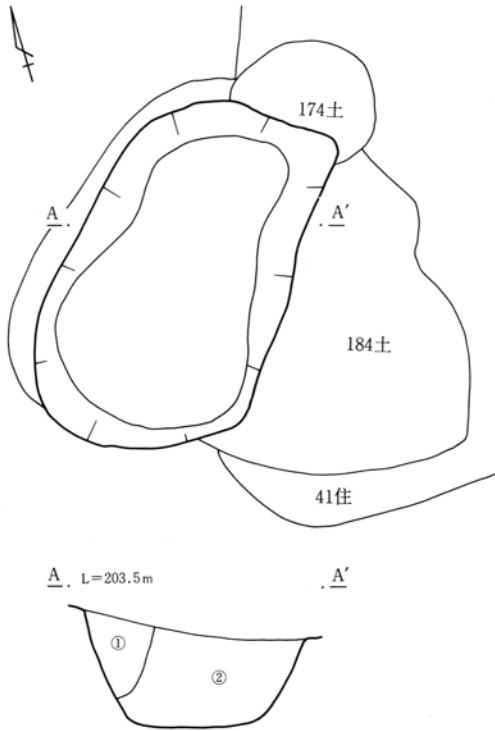
位置 75区R-1グリッド 重複 10世紀第3四半期の41号住居、10世紀第2四半期の184号土坑を切る。172号土坑に切られる。(184土→41住→174土→172土の順と思われる。)

写真 PL149

規模 径80cm、深さ53cmを測る。形状 平面形状は円形を呈すると思われる。断面形状は三角形を呈する。埋没土 砂質土を含む黒色土で埋没する。遺物 出土しなかった。

考察 重複関係から平安時代後期の土坑であると思われる。

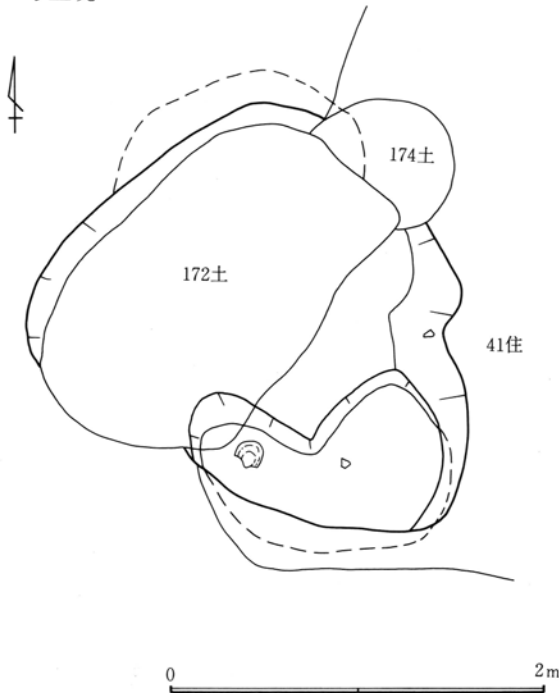
172号土坑



172号土坑

- ① 黒褐色土 As-C少量含む。暗褐色土ブロック少量含む。
- ② 黒色土 As-C多く含む。ローム粒僅かに含む。

184号土坑



第334図 172・184号土坑

172号土坑

**位置** 75区R-1グリッド **重複** 10世紀第3四半期の41号住居、10世紀第2四半期の184号土坑、平安時代後期の174号土坑を切る。(184土→41住→174土→172土の順と思われる。)

**写真** P L 149

**規模** 径197×115cm、深さ53cmを測る。

**形状** 平面形状は楕円形、断面形状は箱形を呈する。

**埋没土** As-Cを含む黒色土を主体とする。

**遺物** 出土しなかった。

**考察** 調査時は後述する184号土坑の一部と考えられたが、埋没土の判断から別土坑とした。時期は重複関係から平安時代後期以降ということが出来る。

184号土坑

**位置** 65区R-20グリッド **重複** 10世紀第3四半期の41号住居、平安時代後期の172号、174号土坑に切られる。 **写真** P L 149

**規模** 径245×175cm、深さ121cmを測る。

**形状** 重複によってかなりの部分を破壊されているため、全体の形状は不明だが、平面形状は不整形を呈するのではないと思われる。断面形状は南北では袋状を呈する。

**埋没土** 調査時の所見ではAs-Cを含む黒褐色土であった。

**遺物** 図示した遺物の他、土師器小片が2点出土している。1の碗は坑底から出土している。

**考察** 本土坑は41号住居の掘り方調査時に検出され、当初から粘土採掘坑との推定であった。重複関係が複雑であったため、埋没土層断面を記録できなかったが、粘土採掘坑と結論づけられるような材料を得ることはできなかった。しかし、坑底に掘り込みがみられ、袋状の断面を示すことなどから、粘土採掘坑としての可能性はあると思われる。

第4章 検出された遺構と遺物

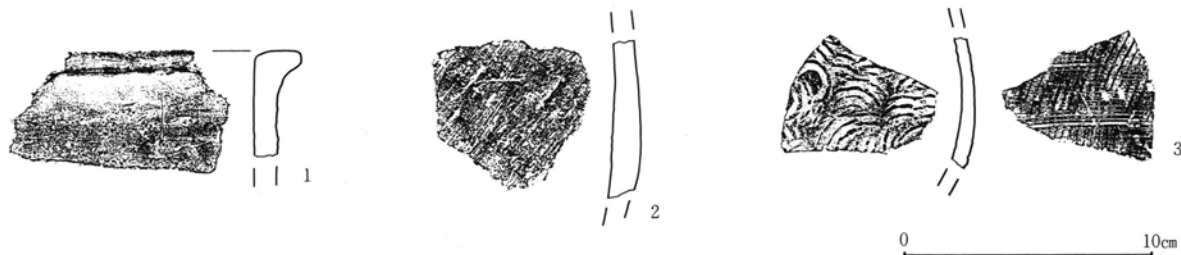
5 土坑出土の遺物



第335図 160号土坑出土遺物

160号土坑出土土器観察表 (第335図 P L 150)

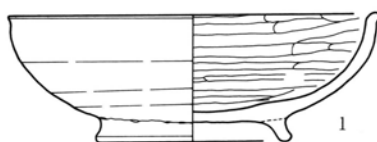
器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 小皿	口縁～底 部1/4	口 <8.2> 底 <5.6> 高 1.6	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい赤褐 ③細砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。器肉の厚い底部から口縁は直線的に立ち上がる。	



第336図 161号土坑出土遺物

161号土坑出土土器観察表 (第336図 P L 150)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 土釜	口縁部片	口 — 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②褐色 ③砂粒を含む	直線的に立ち上がり、口唇部は外反する。外面は篋削り、内面は横撫で。	
2 土師器 甕	胴部片	口 — 底 — 高 —	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい赤褐 ③砂粒を含む	外面に篋削り。長胴甕の胴部と思われる。	
3 須恵器 甕	胴部片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、硬質 ②灰黄 ③細砂粒を含む	内、外面とも叩き目。	

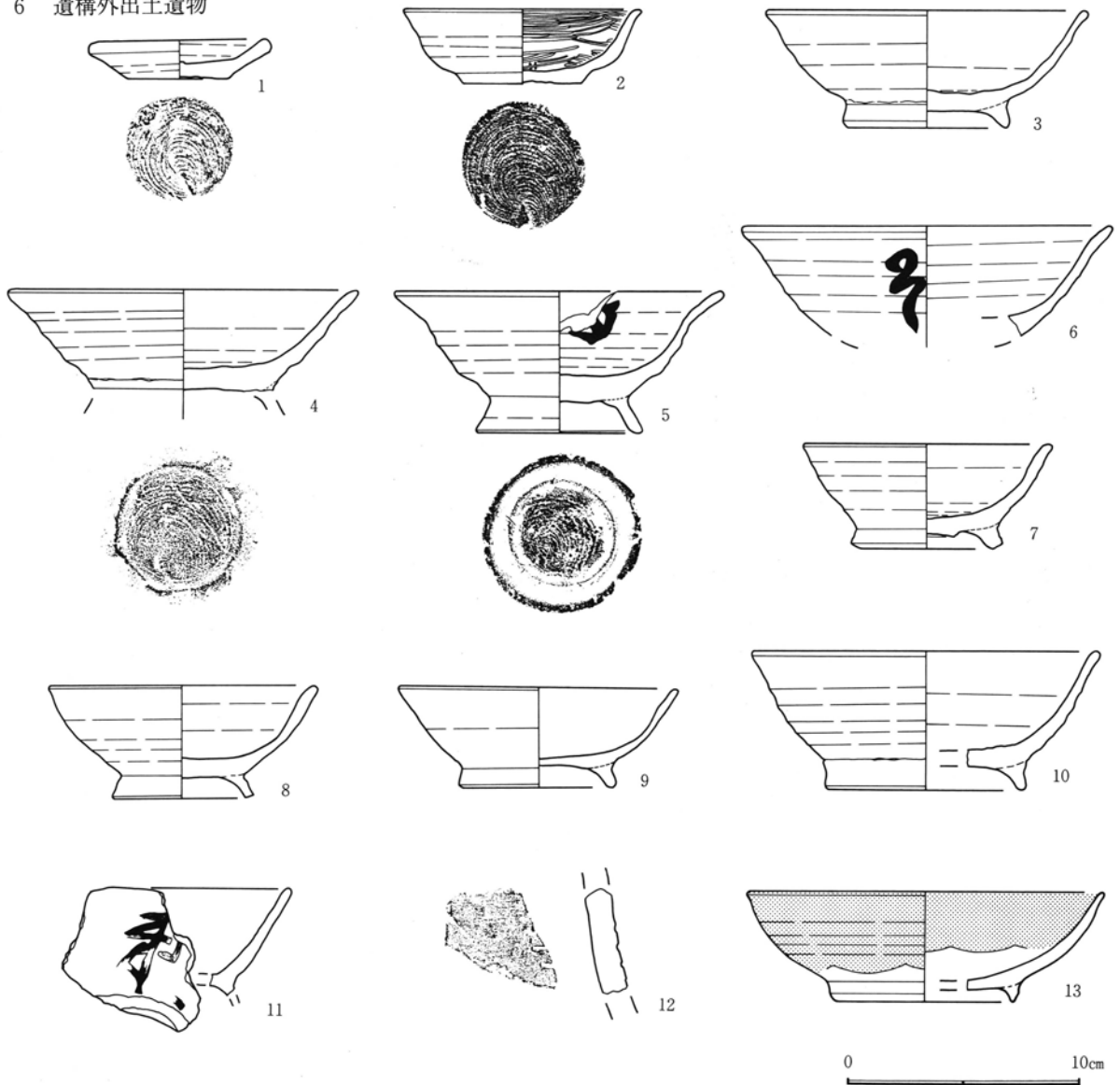


第337図 184号土坑出土遺物

184号土坑出土土器観察表 (第337図 P L 150)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 須恵器 高台付椀	口縁～底 部2/3	口 14.6 底 7.8 高 5.0	①酸化焰、やや軟質 ②橙、内面は黒 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。内面はその後篋磨き。底部は右回転糸切りののち、撫で調整。高台を付した底部から体部は湾曲して立ち上がり、口唇部は小さく外反する。内面は吸炭による黒色。	

6 遺構外出土遺物



第338図 遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表 (第338図 P L150)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 土師器 小皿	完形	口 7.8 底 4.3 高 1.7	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい橙、黒色 ③細砂、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。器内の厚い底部から、体部はほぼ直線的に開く。	75区G-2
2 須恵器 坏	口縁～底部1/3	口 <10.2> 底 5.0 高 5.2	①酸化焰、やや硬質 ②にぶい褐色 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り、無調整。平底の底部から体部は湾曲して立ち上がり、口縁は小さく外反する。体部内面は篋磨き。	75区Q-3
3 須恵器 高台付椀	口縁～底部1/5	口 <13.7> 底 7.1 高 5.0	①還元焰、やや軟質 ②にぶい黄橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から湾曲気味に立ち上がり、口縁は小さく外反する。	66区L-18
4 須恵器 高台付椀	口縁～底部1/2	口 <14.8> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②灰黄 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。高台を付した底部からほぼ直線的に立ち上がり口縁は僅かに外反する。	66区Q-11
5 須恵器 高台付椀	口縁～底部1/2	口 <14.0> 底 8.0 高 6.0	①還元焰、やや軟質 ②灰白 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は右回転糸切り。高めの高台を付した底部から、体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。	墨書「夕」か 66区Q-11

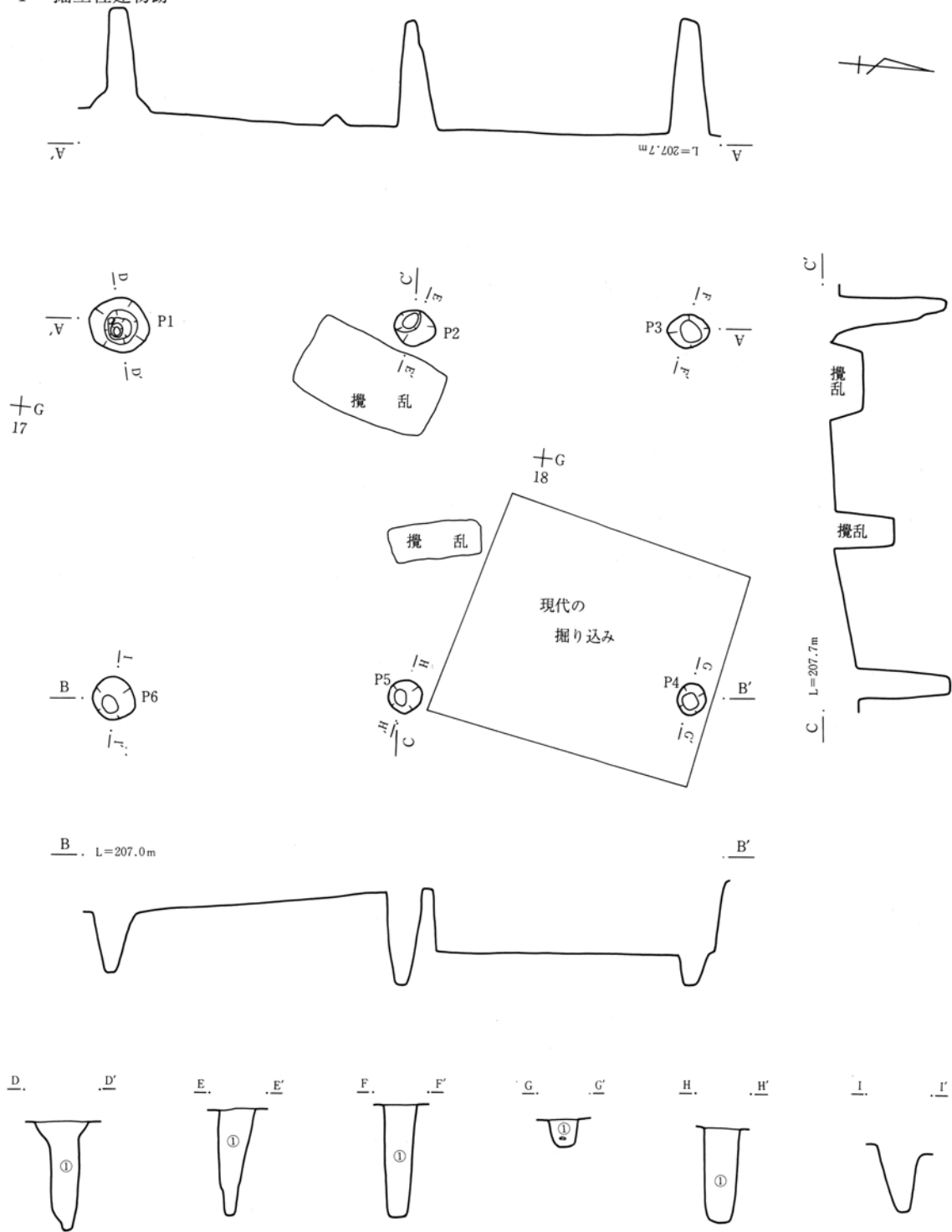


第4章 検出された遺構と遺物

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
6 須恵器 椀	口縁部片	口 <15.7> 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。湾曲気味の体部から口縁は緩やかに外反する。	墨書 66区T-18
7 須恵器 高台付椀	口縁～底部1/3	口 <10.6> 底 6.4 高 4.5	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい赤褐 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から体部は湾曲気味に立ち上がる。口唇部は小さく外反する。底部に高台貼付時の撫での痕跡が強く残る。	66区表採
8 須恵器 高台付椀	口縁～底部1/3	口 <11.4> 底 6.0 高 4.8	①酸化焰、やや硬質 ②橙 ③砂粒を含む	内、外面とも轆轤整形。底部は回転糸切り。高台を付した底部から体部は湾曲気味に立ち上がる。	66区南側道路部
9 須恵器 高台付椀	口縁～底部2/3	口 <12.0> 底 6.7 高 4.4	①酸化焰、やや硬質 ②暗褐 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形ののち、横撫で。底部は右回転糸切り。高台を付した底部から体部はやや湾曲気味に立ち上がる。	表採
10 須恵器 高台付椀	口縁～底部1/3	口 <14.8> 底 <8.6> 高 5.9	①還元焰、やや軟質 ②灰黄 ③砂粒、小礫を含む	内、外面とも轆轤整形。高台を付した底部から体部は緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁は僅かに外反する。	75区Q-2
11 須恵器 高台付椀	口縁部片	口 — 底 — 高 —	①酸化焰、やや軟質 ②にぶい橙 ③砂粒を含む	高台を付したと思われる底部から体部は直線的に立ち上がる。体部外面に墨書。	墨書「第」か 76区表採
12 須恵器 甕か	小片	口 — 底 — 高 —	①還元焰、やや軟質 ②灰白 ③細砂粒を含む	甕の胴部か。外面に刻字と思われる痕跡。	66区G-15
13 灰釉陶器 高台付椀	口縁～底部1/6	口 <15.0> 底 <7.6> 高 4.6	①還元焰、硬質 ②灰白 ③密、ほとんど含まない	内、外面とも轆轤整形。底部は切り離し後回転撫で調整。高台を付した底部から、体部はやや湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反する。	大原2号窯式期か 66区表採

第6節 近世以降および時期不明の遺構

1 掘立柱建物跡

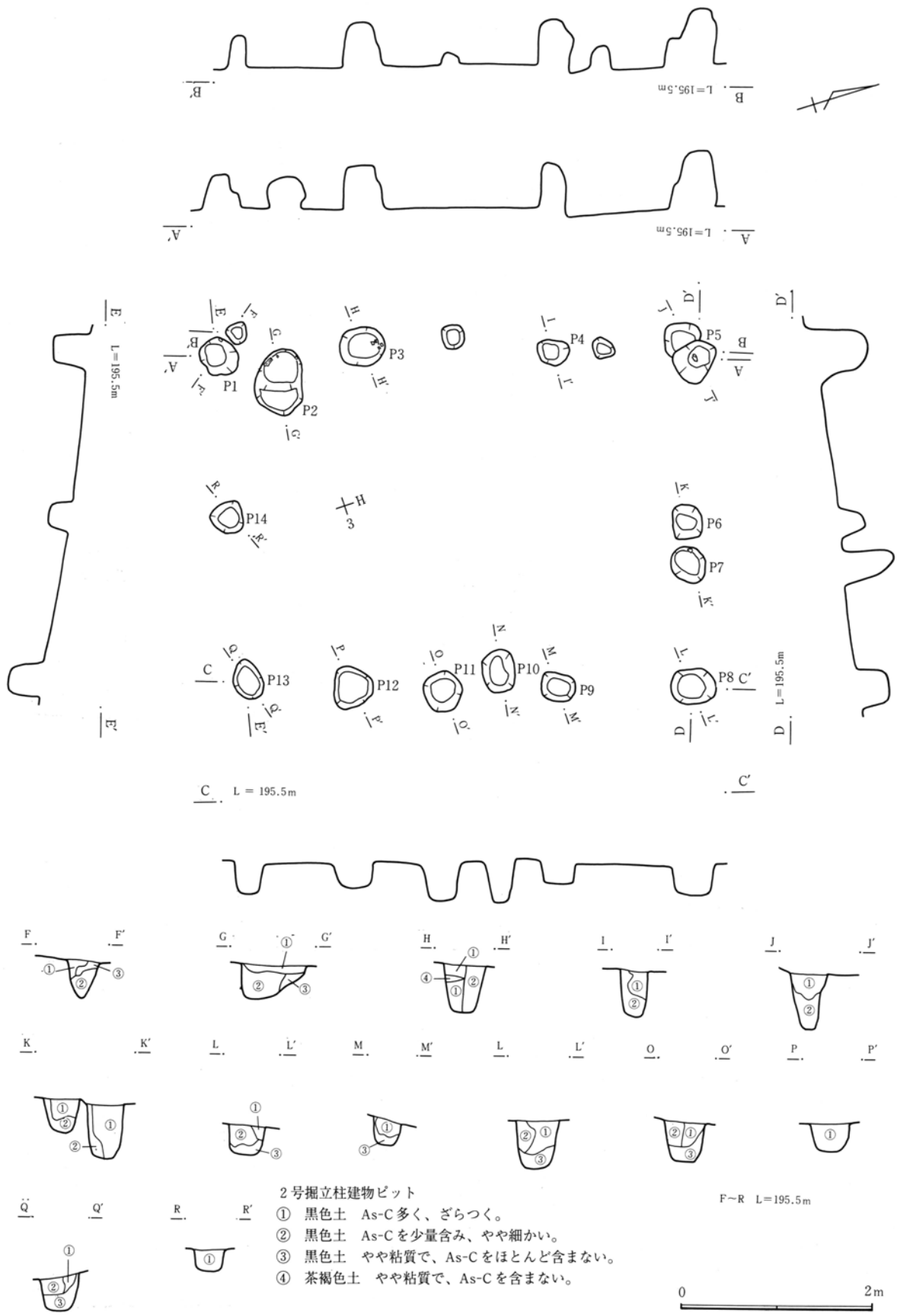


1号掘立柱建物ピット

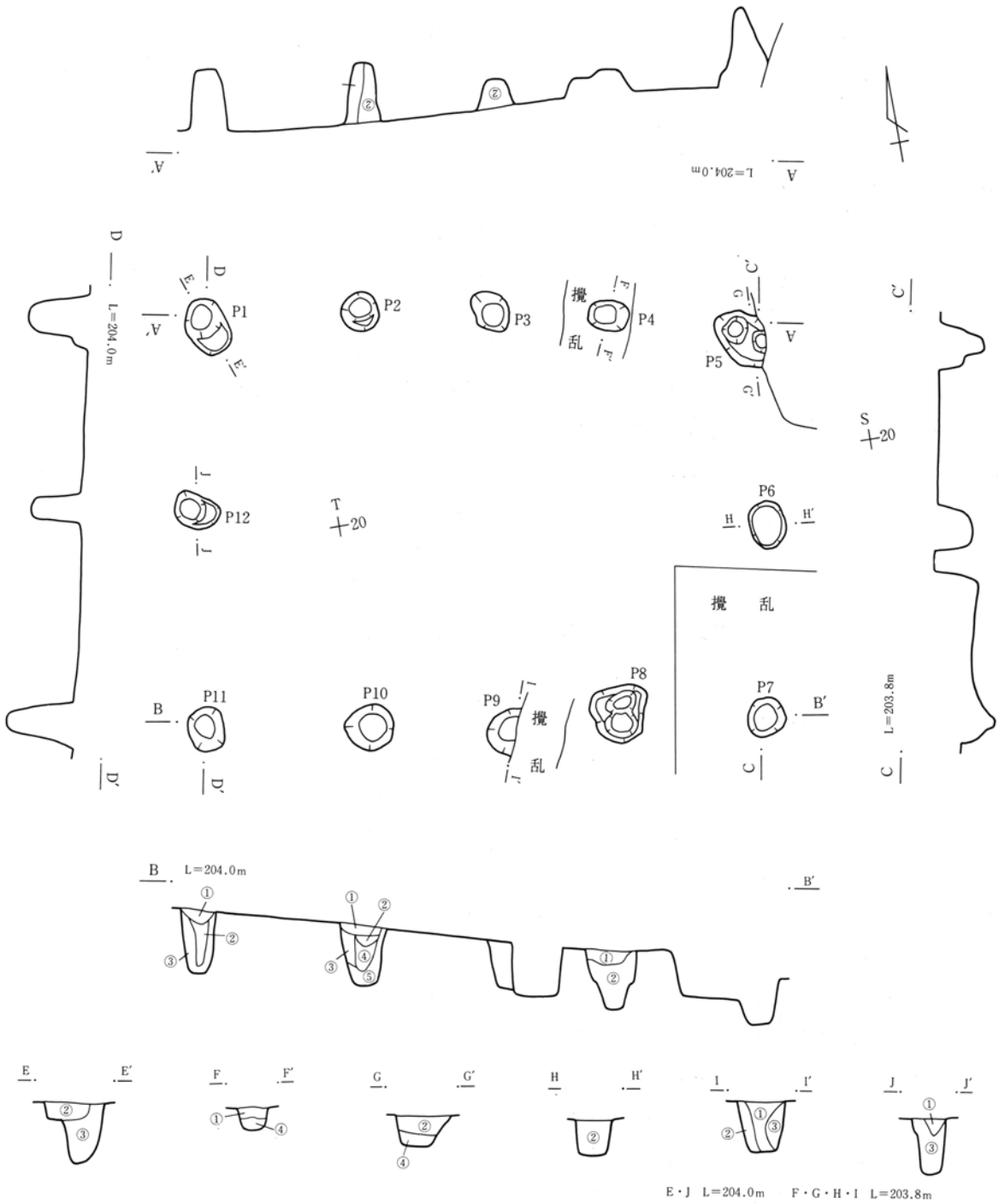
① 暗褐色土 As-YPを少量含む。しまりがある。

D・E・F・H・I L=207.7m G L=207.0m

第339図 1号掘立柱建物



第340図 2号掘立柱建物



3号掘立柱建物ビット

- ① 黒褐色土 As-C少量含む。
- ② 黒色土 As-Cを僅かに含む。ローム粒僅かに含む。
- ③ 黒色土 As-Cを僅かに含む。
- ④ 黒色土 As-Cを僅かに含む。暗褐色土ブロック少量含む。
- ⑤ 黒色土 As-Cを僅かに含む。ロームブロック少量含む。

第341図 3号掘立柱建物

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 1号掘立柱建物

**位置** 66区G-17グリッド他 **方位** N-6°-W  
**重複** なし 後世の攪乱によりP4は底部付近まで削平される。 **写真** PL151  
**規模** 梁行2間(東辺5.30m、西辺5.40m)、桁行1間(南辺3.60m、北辺3.50m)である。  
**面積** 18.83㎡を測る。  
**形状** 長方形を呈する。 **柱穴** 6本検出されている。掘り方はほぼ円形で、しっかりした掘り込みを持つ。柱穴底面の標高は206.38mから206.58mの間である。柱間寸法は、梁方向のP1～P3間が2.78m、2.62m、P6～P4間が2.74m、2.74mを測る。桁方向のP1～P6間は3.48m、P3～P4間は3.46mを測る。柱痕は平面では確認できなかったが、P1、P2の断面から判断すると柱の径は8～10cm程度と思われる。  
**考察** 小規模であるが整った平面形を呈する掘立柱建物である。埋没土から古墳時代以降の掘立柱建物と思われるが、遺物が出土せず、時期を決定できる材料に欠けるため、詳細な時期は不明である。

##### 2号掘立柱建物

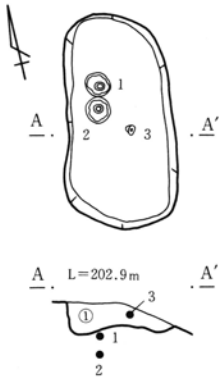
**位置** 75区G-3グリッド他 **方位** N-19°-E  
**重複** なし **写真** PL151  
**規模** 梁行3間(東辺4.62m、西辺4.98m)、桁行2間(南辺3.40m、北辺3.38m)である。  
**面積** 16.63㎡を測る。 **形状** やや台形様の長方形を呈する。 **柱穴** 14本検出されている。このうちP2、P7、P10、P11は本建物の柱穴にならないと思われる。柱穴底面の標高は194.43mから194.97mの間であり、やや標高差が大きいように思われる。これは本建物が東に向く傾斜地に占地していることも影響していると思われる。掘り方はほぼ円形を呈し、掘り込みはしっかりしているが、確認面からはあまり深くない。柱間寸法は梁方向のP1～P5間が1.50m、1.96m、1.56mで、P13～P8間が1.16m、2.18m、1.42mを測る。桁方向のP5～P8間が1.72m、1.72mで、P1～P13間が

1.70m、1.72mを測る。柱痕は平面、断面とも確認できなかった。 **考察** 平面形はやや歪みを持っている。埋没土から古墳時代以降の掘立柱建物と思われるが、遺物が出土せず、時期を決定できる材料に欠けるため、詳細な時期は不明である。

##### 3号掘立柱建物

**位置** 65区S-19グリッド他 **方位** N-80°-W  
**重複** 縄文時代後期の45号住居、縄文時代と思われる191号土坑の上面で検出された。  
**写真** PL151  
**規模** 梁行4間(南辺5.16m、北辺5.10m)、桁行2間(東辺3.60m、西辺3.72m)である。  
**面積** 18.84㎡を測る。 **形状** 長方形を呈する。 **柱穴** 12本検出された。掘り方はほぼ円形を呈し、しっかりした掘り込みを持つが、確認面からの掘り込みはあまり深くない。柱穴底面の標高は202.62mから203.26mの間である。柱間寸法は梁方向のP1～P5間が1.42m、1.26m、1.08m、1.24mで、P11～P7間が1.54m、1.28m、1.08m、1.26mを測る。桁方向ではP5～P7間が1.82m、1.84mで、P1～P11間が1.80m、2.01mを測る。柱痕は平面では確認できなかったが、P11の土層断面から判断すると6～8cm程度であったと思われる。  
**考察** 平面形はやや歪みを持つが、柱穴は整った配列を示す掘立柱建物である。埋没土から古墳時代以降の掘立柱建物と思われるが、遺物が出土せず、時期を決定できる材料に欠けるため、詳細な時期は不明である。

2 土坑  
190号土坑



190号土坑  
① 黒色土 白色軽石少量含む。

190号土坑

位置 66区C-18グリッド 重複 なし

写真 PL152

規模 径113×53cm、深さ15cmを測る。

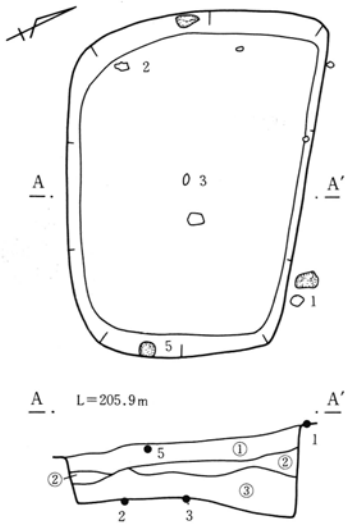
形状 平面形状は楕円形、断面形状は浅箱形に近い。

埋没土 黒色土を主体とする。

遺物 図示した2枚の陶器皿と寛永通宝21枚が出土している。

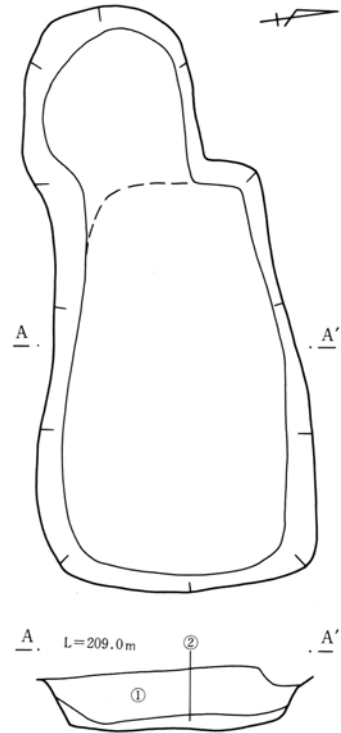
考察 土坑上部はかなり削平を受けていると思われる。出土遺物から判断すると17~18世紀の墓坑の可能性が高い。表土掘削中、本土坑付近より人骨が出土していたが、再埋葬をするため、位置を記録しなかった。本土坑に関連する可能性も考えられる。

4号土坑



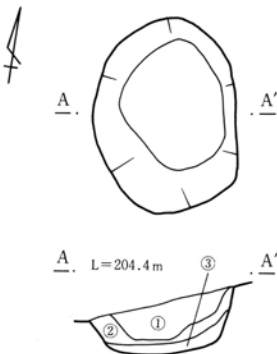
4号土坑  
① 黒褐色土 もろくサラサラ。  
② 黒褐色土 粒子密。  
③ 黒褐色土 炭化物多く含む。

26号土坑



26号土坑  
① 黒色土 As-C多く含む。  
暗褐色土粒僅かに含む。  
② 黒色土 As-C、暗褐色土粒僅かに含む。

8号土坑



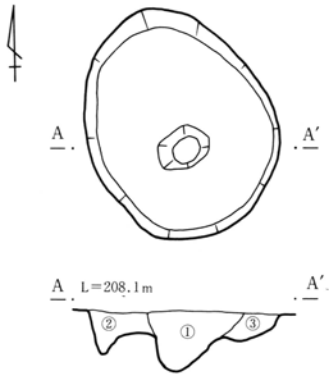
8号土坑  
① 黒色土 As-C少量含む。  
炭化物少量含む。  
② 暗褐色土 ローム細粒少量含む。  
③ 黄褐色土 ローム土主体。  
暗褐色土粒僅かに含む。



第342図 190・4・8・26号土坑

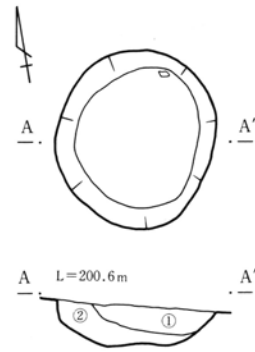
第4章 検出された遺構と遺物

49号土坑



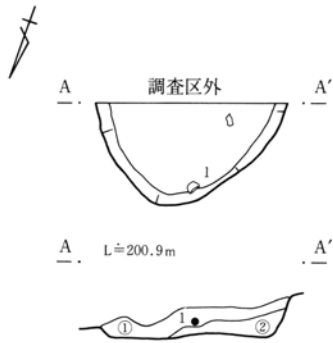
- 49号土坑
- ① 黒褐色土 白色軽石少量含む。ローム粗粒僅かに含む。
  - ② 黒褐色土 白色軽石僅かに含む。
  - ③ 暗褐色土 白色軽石少量含む。ローム粗粒僅かに含む。

156号土坑



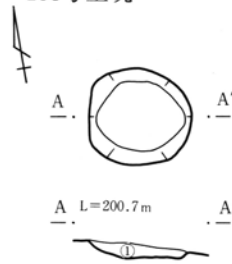
- 156号土坑
- ① 黒色土 As-C少量含む。軟質。
  - ② 黒色土 As-C僅かに含む。軟質。

157号土坑



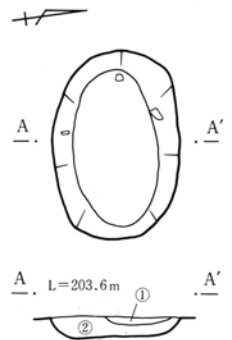
- 157号土坑
- ① 黒色土 As-C少量含む。
  - ② 暗褐色土

158号土坑



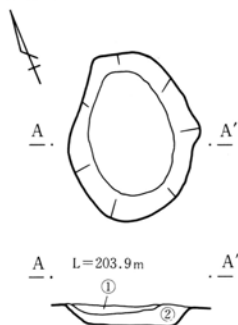
- 158号土坑
- ① 黒色土 As-C僅かに含む。

169号土坑



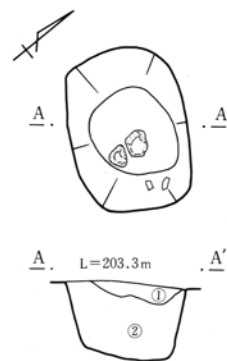
- 169号土坑
- ① 黒褐色土 As-C僅かに含む。
  - ② 黒色土 As-C僅かに含む。

170号土坑



- 170号土坑
- ① 黒褐色土 As-C僅かに含む。
  - ② 黒色土 As-C僅かに含む。

176号土坑

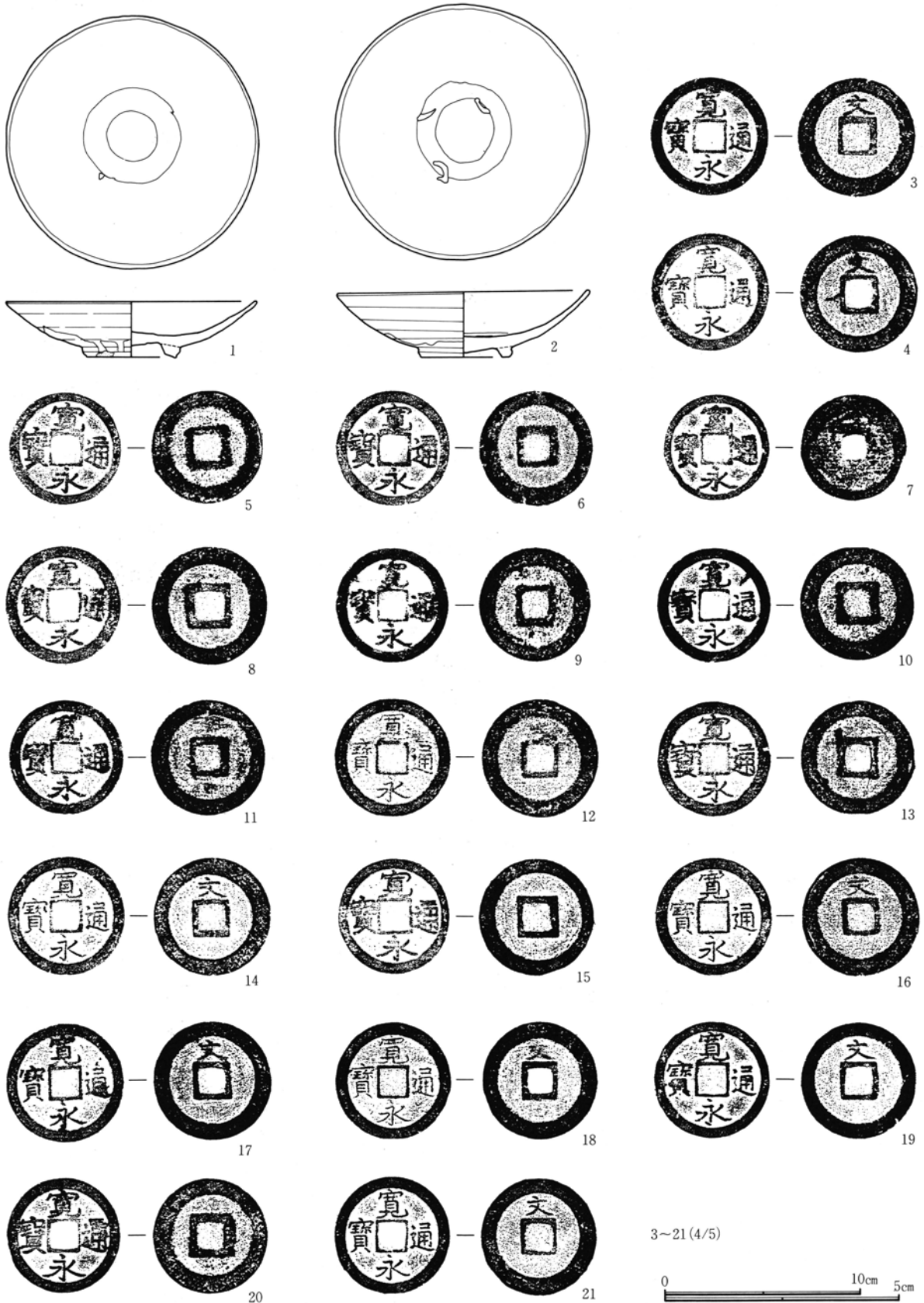


- 176号土坑
- ① 黒色土 As-C少量含む。
  - ② 黒褐色土 As-C僅かに含む。



第343図 49・156～158・169・170・176号土坑

3 土坑出土の遺物



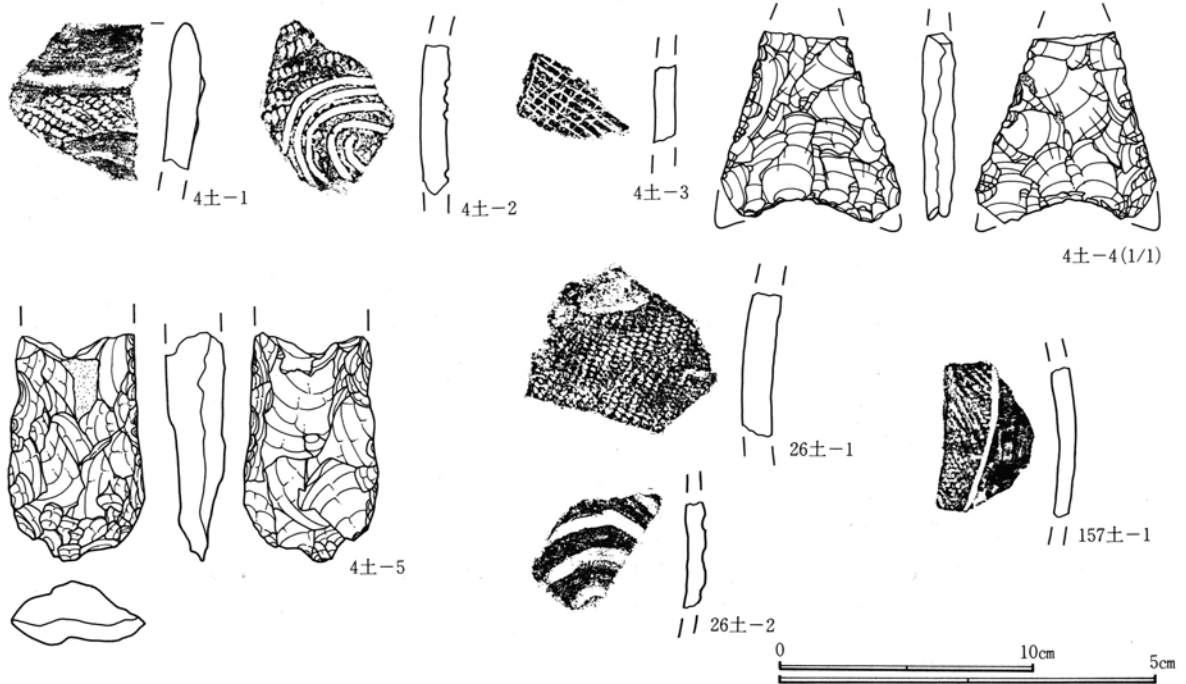
第344図 190号土坑出土遺物



第4章 検出された遺構と遺物

190号土坑出土土器観察表 (第344図 P L 155)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	備考
1 肥前陶器(嬉野内野山西窯)皿	完	口 12.8 底 4.5 高 2.8	① — ② — ③ —	高台無軸。見込み蛇の目軸はぎ。高台付近は削りによる整形を行っている。ドブ掛けの灰釉の上に(青)緑釉を掛けている。釉薬の厚い部分と二度掛けした部分には貫入が見られる。見込み部分にはトチンの痕がのこる。	17C末~18C
2 肥前陶器(嬉野内野山西窯)皿	完	口 13.0 底 4.8 高 3.4	① — ② — ③ —	高台無軸。見込み蛇の目軸はぎ。高台付近は削りによる整形を行っており飛びカンナ状の跡が残る。ドブ掛けの灰釉の上に(青)緑釉を掛け油滴状に流れ美しい。厚く掛けられた釉薬部分には貫入が多く入る。見込み部分にはトチンの痕が残る。	17C末~18C



4号土坑出土土器観察表 (第345図 P L 155)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②灰褐色 ③細砂、少量の雲母を含む	断面三角の隆帯を巡らしたのち、原体LRの単節斜縄文を横位に施文する。	加曾利E4式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい赤褐色 ③砂を含む	原体LRの単節斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で渦巻状の文様を描出する。	加曾利E3式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②橙 ③砂を含む	楕歯状工具による格子文を施文する。	前期末~中期初頭

4号土坑出土土器計測表 (第345図 P L 155)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
4	石鏃	1/2	① (2.1) ② (2.4) ③ (0.5) ④ 2.4	黒耀石	
5	打斧	1/2	① (8.8) ② (5.3) ③ (2.3) ④ 127.5	粗粒輝石安山岩	

26号土坑出土土器観察表 (第345図 P L 155)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい橙 ③砂を含む	原体LRの単節斜縄文を横位に施文する。	加曾利E3式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③砂を含む	棒状工具による沈線で同心円状の文様を描出する。	加曾利E3式

157号土坑出土土器観察表 (第345図 P L 155)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②にぶい黄橙 ③細砂を含む	棒状工具による沈線を垂下させたのち、原体LRの単節斜縄文を縦位に施文する。	後期初頭

4 列石

列石

位置 67区P-1~66区Q-16グリッド

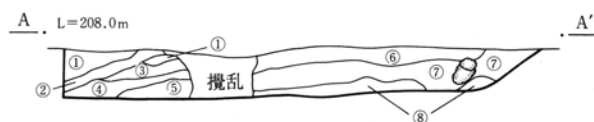
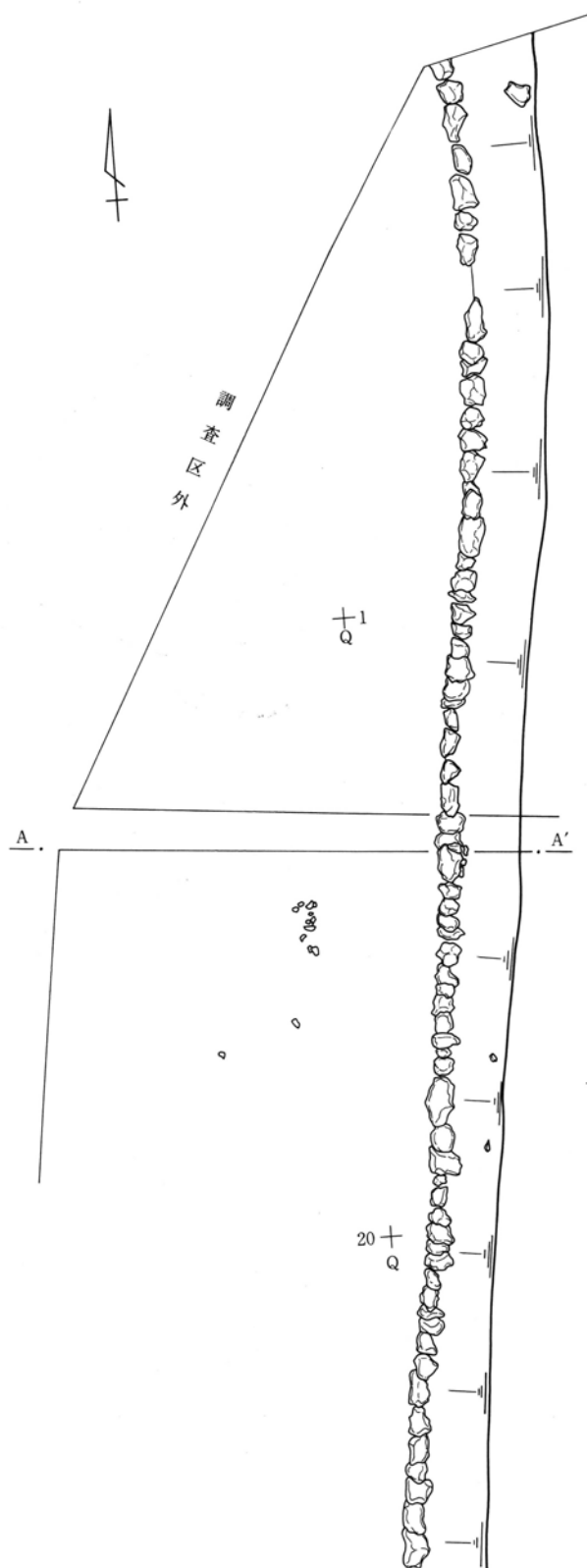
方位 北部N-8°-E 南部N-12°-E

重複 縄文時代中期の32号住居の上面で検出された。住居確認面まで達していない。

写真 PL153

形状 ほぼ直線状である。北部の全長は12.08m、南部の全長は5.23mを測る。使用されている礫はほとんどが地山に含まれる安山岩と思われる。特に加工の痕跡が認められるものはなかった。

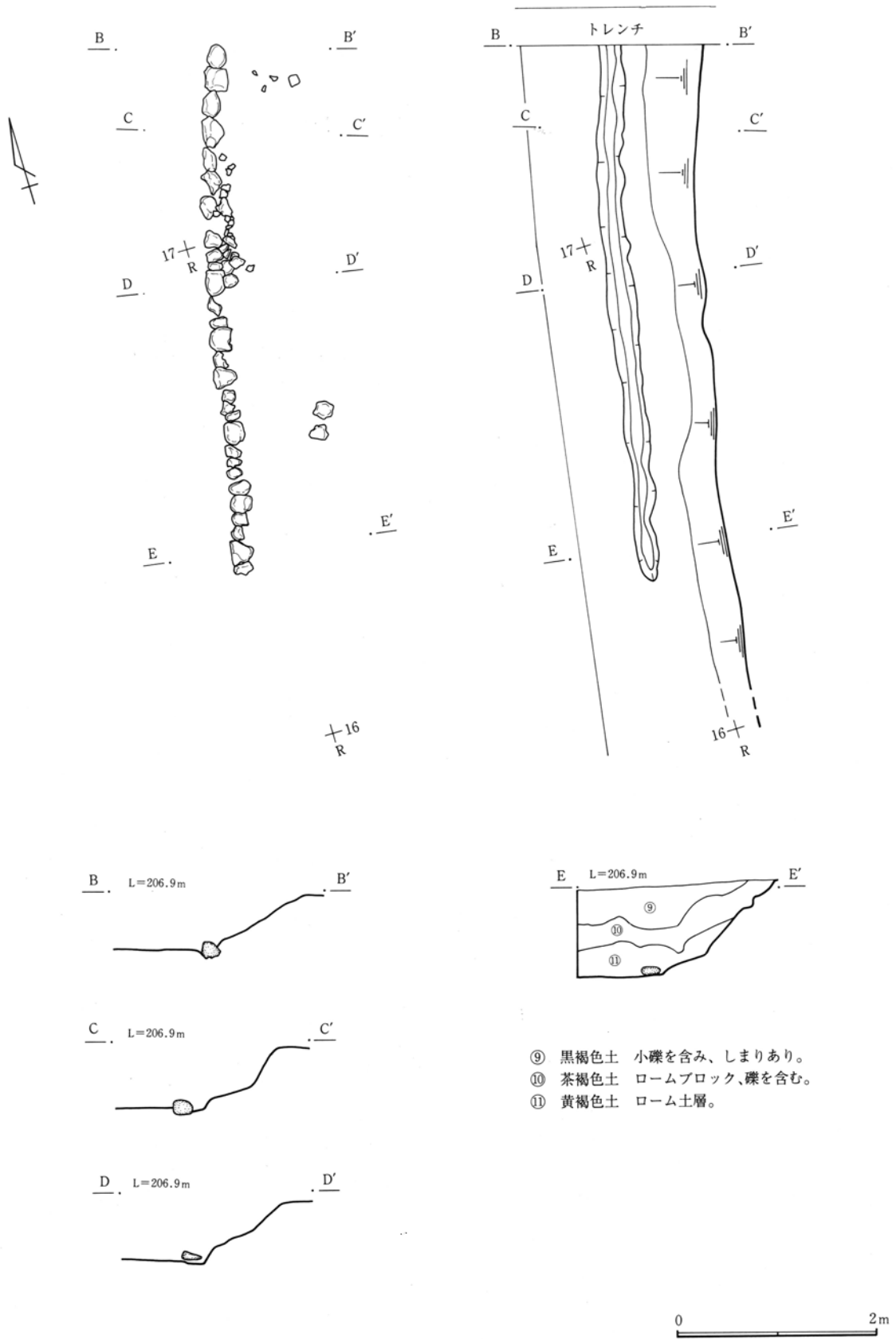
考察 北部と南部に分かれて検出されており、中間に11mの断絶があるが、走行方向が近似することや東側からの斜面下に位置することなどから一連のものとして判断した。北部の断面観察からは人為的な埋没が考えられる。この列石の位置は傾斜が強くなる変換点にあたるため、斜面の土止めの列石と思われる。時期は遺物が出土していないが、層位的な判断から近世以降の所産と思われる。



- ① 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- ② 暗褐色土 As-YPとローム粒非常に多い。
- ③ 暗褐色土 やや明るくAs-YP少量含む。
- ④ 暗褐色土 ローム土多く含む。
- ⑤ 黒色土 白色軽石粒僅かに含む。
- ⑥ 黒色土 白色軽石混じりで、硬くしまる。
- ⑦ 暗褐色土 白色軽石少量含む。ローム粒僅かに含む。
- ⑧ 暗褐色土 やや明るく細かい。白色軽石少量含む。

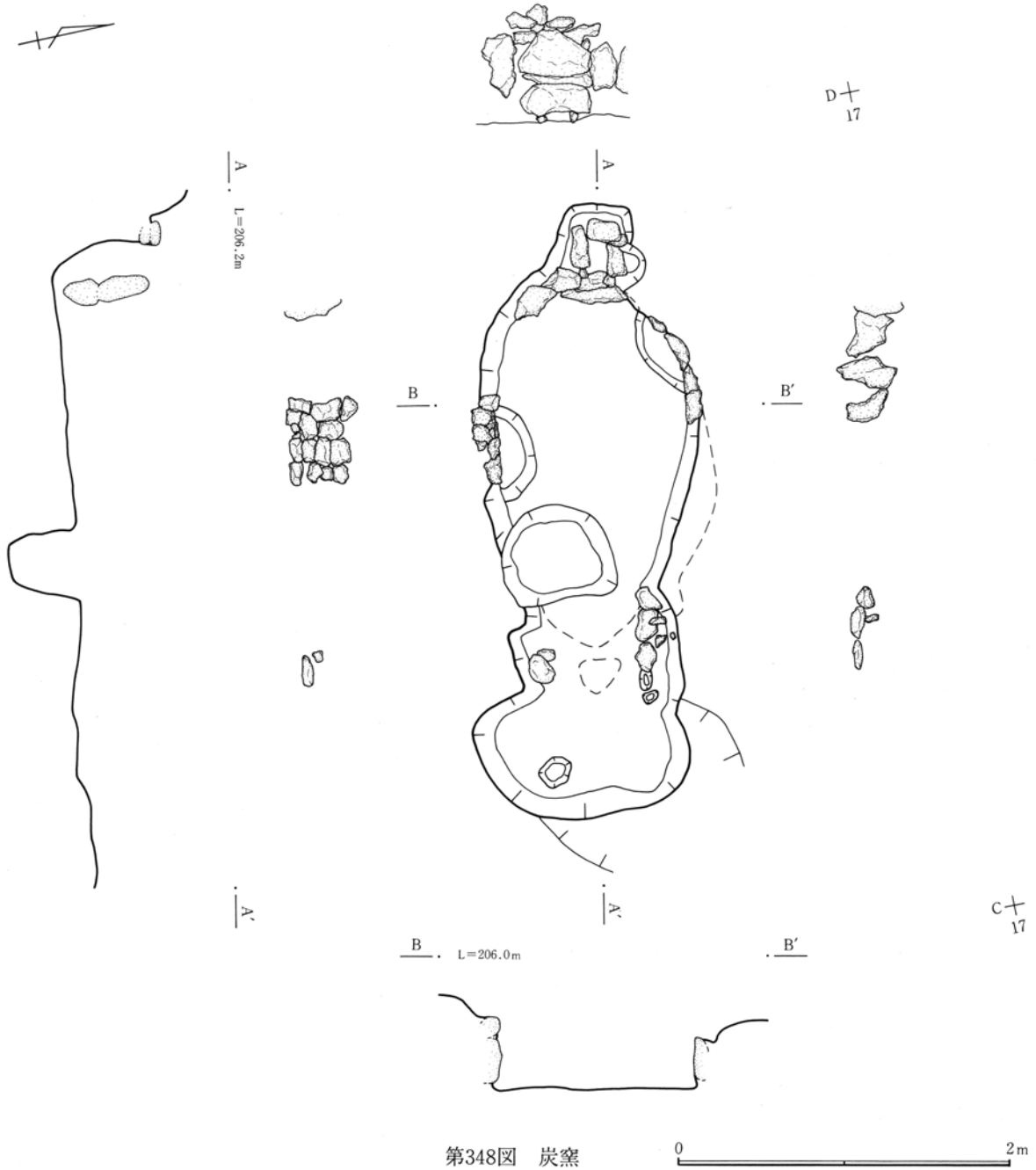


第346図 列石 (1)



第347図 列石 (2)

5 炭窯



第348図 炭窯

炭窯

位置 66区C-16グリッド 写真 PL153

形状 炭化室の形状は無花果形を呈する。一部に石を用いる土窯である。炭化室左手前にピットが検出されているが、この炭窯に伴うものかは不明である。焚き口前庭部には長径1.3m、深さ5cmほどの楕円形の掘り込みが確認できた。

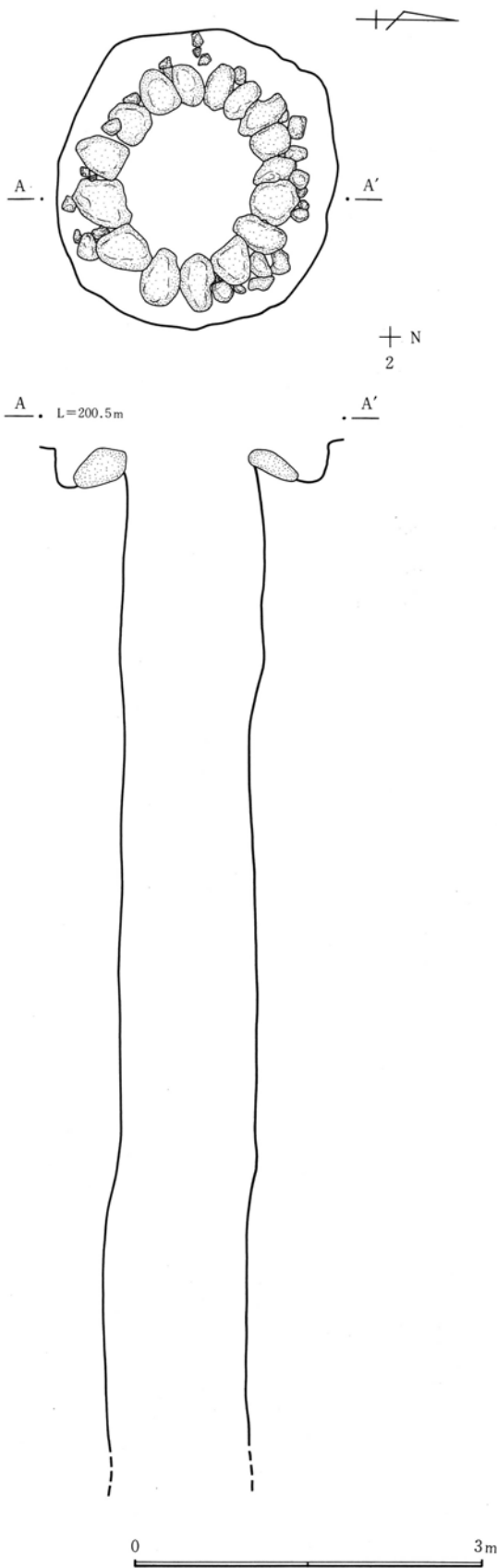
規模 炭化室の全長2.4m、最大幅1.12m、焚き口

幅0.48mを測る。奥壁には礫を用いて煙道を構築している。煙道長は0.60m、煙道直径は0.20mを測る。窯体底部と壁面はよく焼けている。

遺物 出土していない。

考察 調査時に地権者からうかがった話によると、昭和30年代頃まで使用していたとのことであった。構築された年代ははっきりしていない。

6 井戸



1号井戸

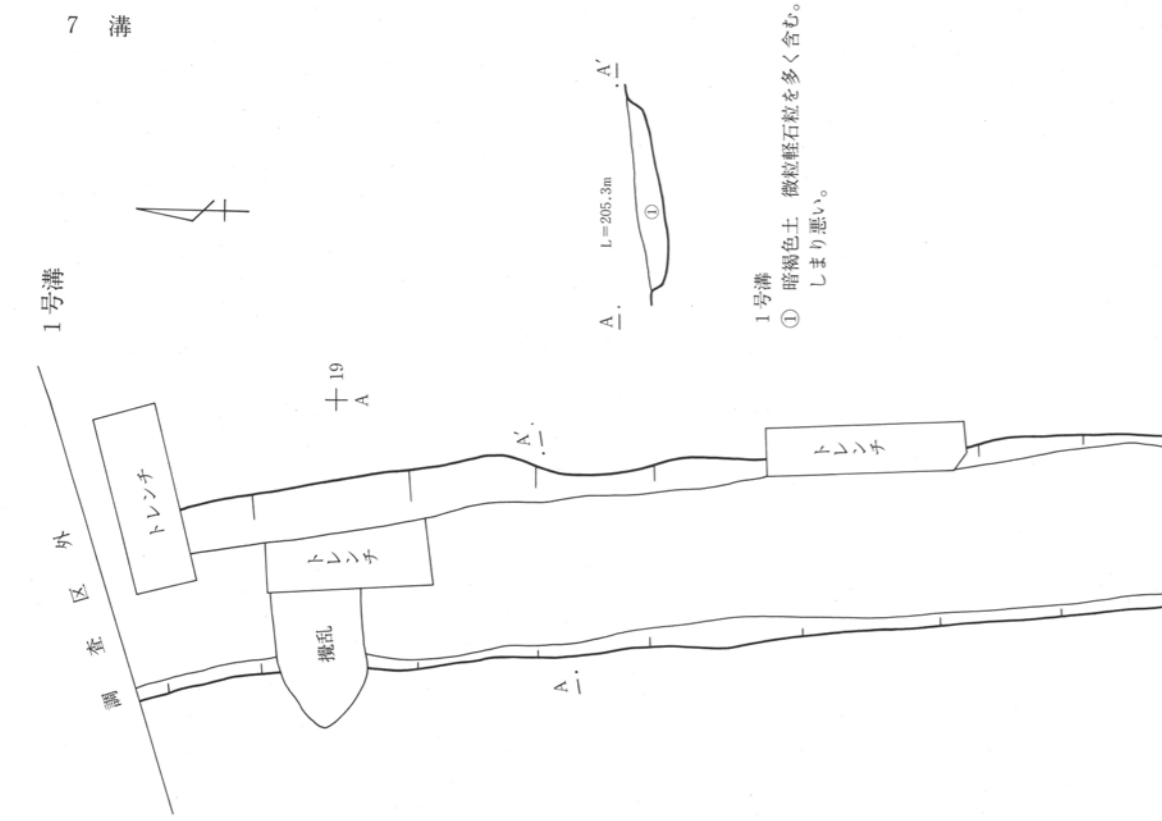
位置 75区N-1グリッド 重複 なし

写真 PL153

規模、形状 上面は径2.7m×2.4mの円形に掘りくぼめ、長径50cm程の磔を16石並べている。井戸本体の口径は約1.2mで、下位でもほとんど変化はない。埋没土 磔、小磔を含み、人為的な埋没と思われる様相であった。

考察 この井戸は地権者宅の床下で検出され、当初、調査担当者と発掘作業員によって調査を開始したが、深度が増してきて危険となったため、業者に委託して掘削を行うことになった。およそ9mに達した時点で酸欠、崩落等の危険が予測されるため、調査をうち切った。この時点で湧水はほとんど認められなかった。時期に関しては、遺物の出土がなかったため、遺物からの判断はできなかったが、地権者からの聞き取りによると、戦後間もない頃掘削し、榛名町のこの地域に上水道が引かれるまでの間、使用していたとのことであった。掘削の深度は正確に計測したわけではないが、「15m位は掘った、という話を聞いている」とのことであった。

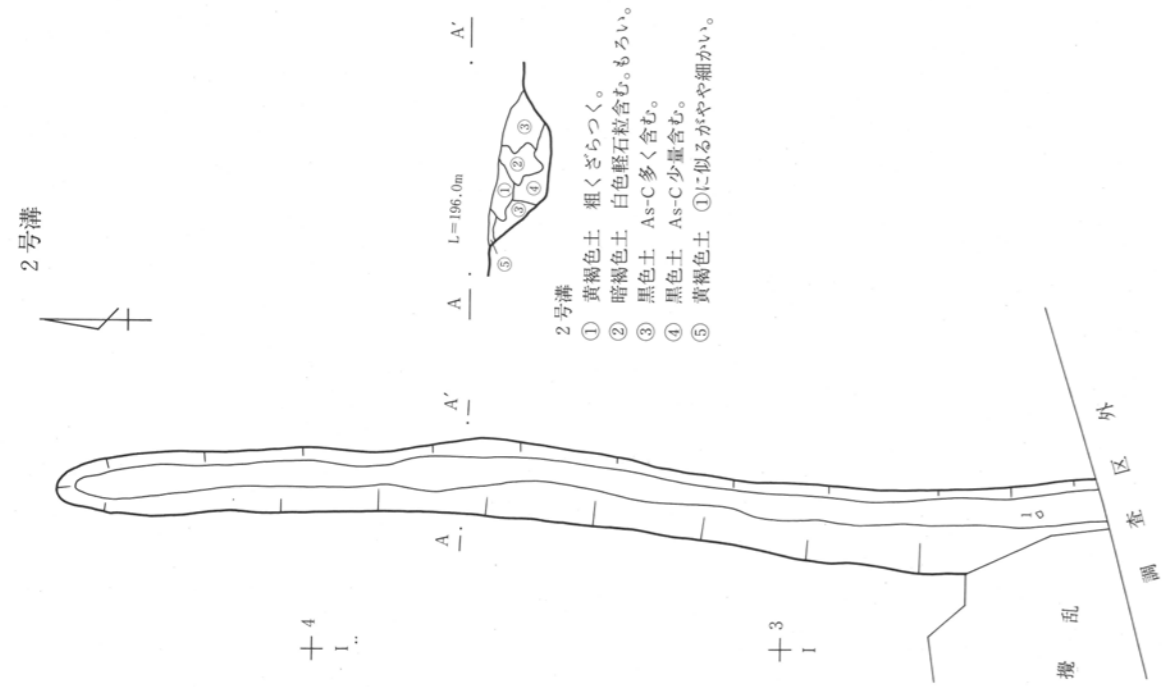
第349図 井戸



1号溝

位置 67区A-19グリッドから66区T-12グリッドにかけて検出された。重複 8号土坑、14号土坑。いずれも本溝が新しい。写真 PL 154 形態 ほぼ直線状であるが、中央付近 (A-17グリッドからA-14グリッドにかけて)で断絶が見られる。また、南端は徐々に浅くなり、明瞭な立ち上がりを検出できないまま、消滅している。規模は長さ34.8m (断絶部分を含む)、幅は最大で2.08mを測る。深さは断面観察部で40cmである。走行方向はN-8°-Wで、ほぼコンターに沿った方向である。埋没土 暗褐色土を主体とする。

遺物 縄文時代中期後半から後期初頭の土器片17点、石器類2点が出土している。いずれも小片で図化に至らない。考察 出土遺物が縄文土器に限られるため、縄文中期後半から後期初頭の所産と考えたが、層的に見るとやや上位に位置し、埋没土も新しい様相を見せるため、縄文時代以降の可能性が高い。



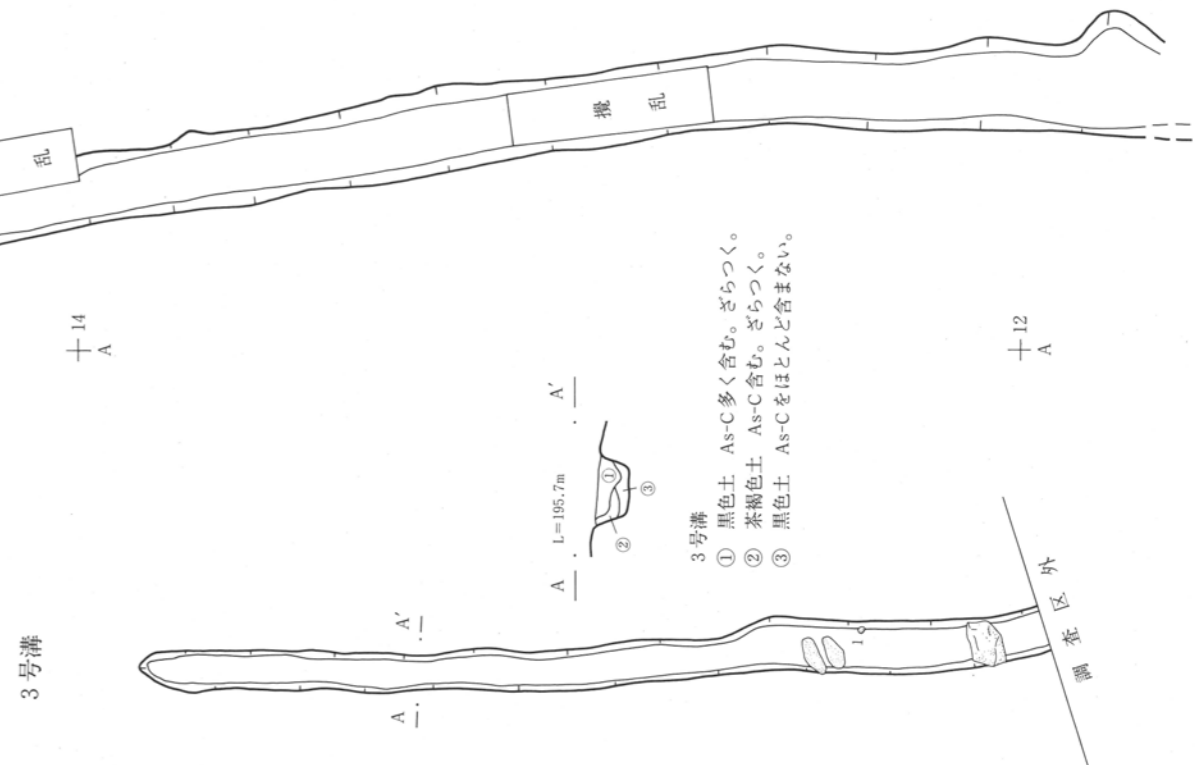
2号溝

位置 75区H-4グリッドからH-2グリッドにかけて検出され、南側調査区外へ延びる。重複 後述する3号溝と一部重複する。本溝が新しい。写真 PL 154

形態 ほぼ直線状で緩やかに蛇行する。規模は長さ11.2m、最大幅80cm、断面観察部での深さ26cmを測る。走行方向はN-1°-Eで、ほぼコンターに沿っている。埋没土 埋没土中にAs-Cを含む。

遺物 図示した遺物の他、縄文中期後半から後期初頭の土器片17点と石器類8点が出土している。

考察 出土遺物は縄文土器に限られるが、いずれも流入したと思われる。埋没土の様相から縄文時代以降の可能性が高い。



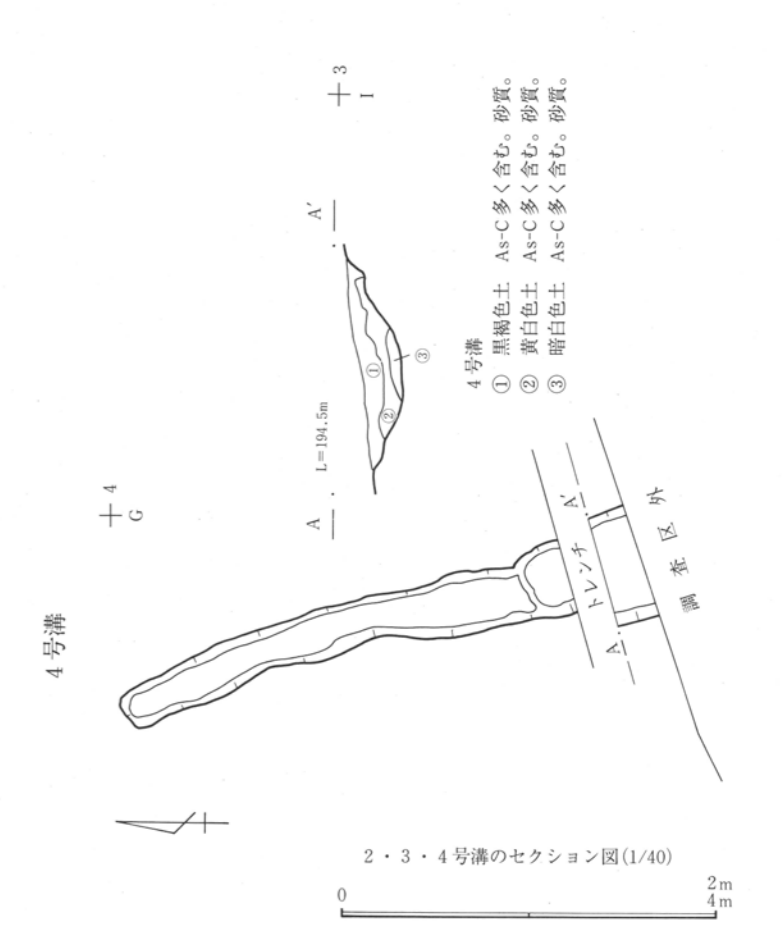
3号溝

位置 75区H-4グリッドからH-2グリッドにかけて検出され、南側調査区外へ延びる。重複 後述する3号溝と一部重複する。本溝が新しい。写真 PL 154

形態 ほぼ直線状で緩やかに蛇行する。規模は長さ11.2m、最大幅80cm、断面観察部での深さ26cmを測る。走行方向はN-1°-Eで、ほぼコンターに沿っている。埋没土 埋没土中にAs-Cを含む。

遺物 図示した遺物の他、縄文中期後半から後期初頭の土器片17点と石器類8点が出土している。

考察 出土遺物は縄文土器に限られるが、いずれも流入したと思われる。埋没土の様相から縄文時代以降の可能性が高い。



4号溝

第350図 1～4号溝

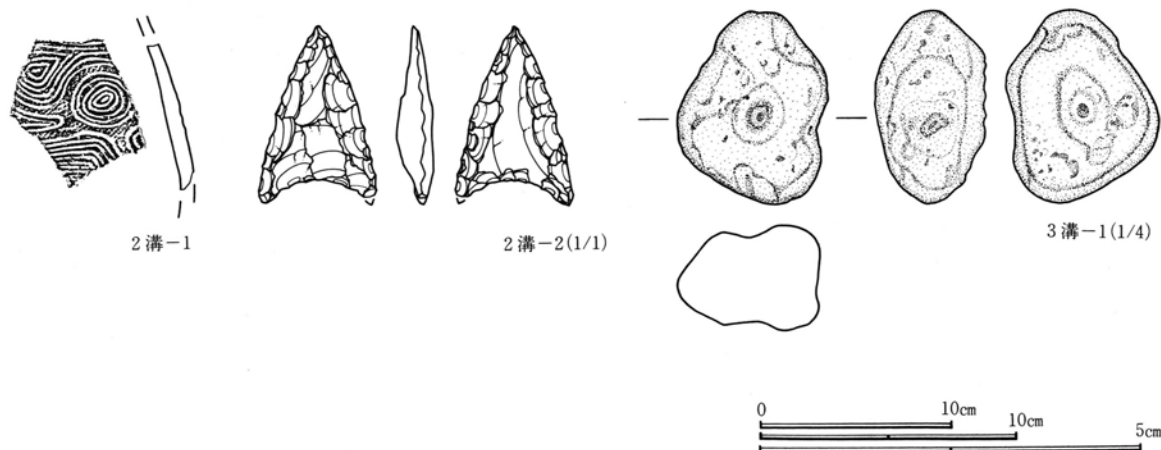


3号溝

**位置** 75区H-4グリッドからH-2グリッドにかけて検出され、南側調査区外へ延びる。**重複** 前述した2号溝と一部重複する。本溝が下位から検出されたため、本溝が古いと思われる。**写真** P L 154  
**形態** ほぼ直線状である。規模は長さ9.6m、最大幅52cm、断面観察部での深さ20cmを測る。走行方向はN-3°-Wで、ほぼコンターに沿った方向である。**埋没土** As-C混じりのざらついた土を主体とする。**遺物** 縄文時代中期後半から後期初頭にかけての土器片36点と石器類12点が出土している。図示した遺物の他はいずれも小片である。**考察** 出土遺物は縄文土器に限られるが、いずれも流入したものと思われる。埋没土の様相から縄文時代以降の可能性が高い。

4号溝

**位置** 75区G-3グリッドで検出された。南端をトレンチによって破壊されるが、南側は調査区外へ延びていると思われる。**写真** P L 154  
**形態** ほぼ直線状である。規模は長さ5.7m、最大幅80cm、断面観察部での深さ23cmを測る。走行方向はN-17°-Wでコンターを斜めに切る方向である。**埋没土** As-Cを含む砂質土を主体とする。**遺物** 縄文時代中期後半の土器片3点と石器類1点が出土しているが、いずれも小片で図化に至らない。**考察** 出土遺物は縄文土器に限られるが、いずれも流入したものと思われる。埋没土の様相から縄文時代以降の可能性が高い。



第351図 2・3号溝出土遺物

2号溝出土土器観察表 (第351図 P L 155)

番号	部位	①焼成 ②色調 ③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②黒褐色 ③細砂粒を含む	地文に原体LRの単筋斜縄文を施文したのち、棒状工具による沈線で同心円状の文様を描出する。	

2号溝出土石器計測表 (第351図 P L 155)

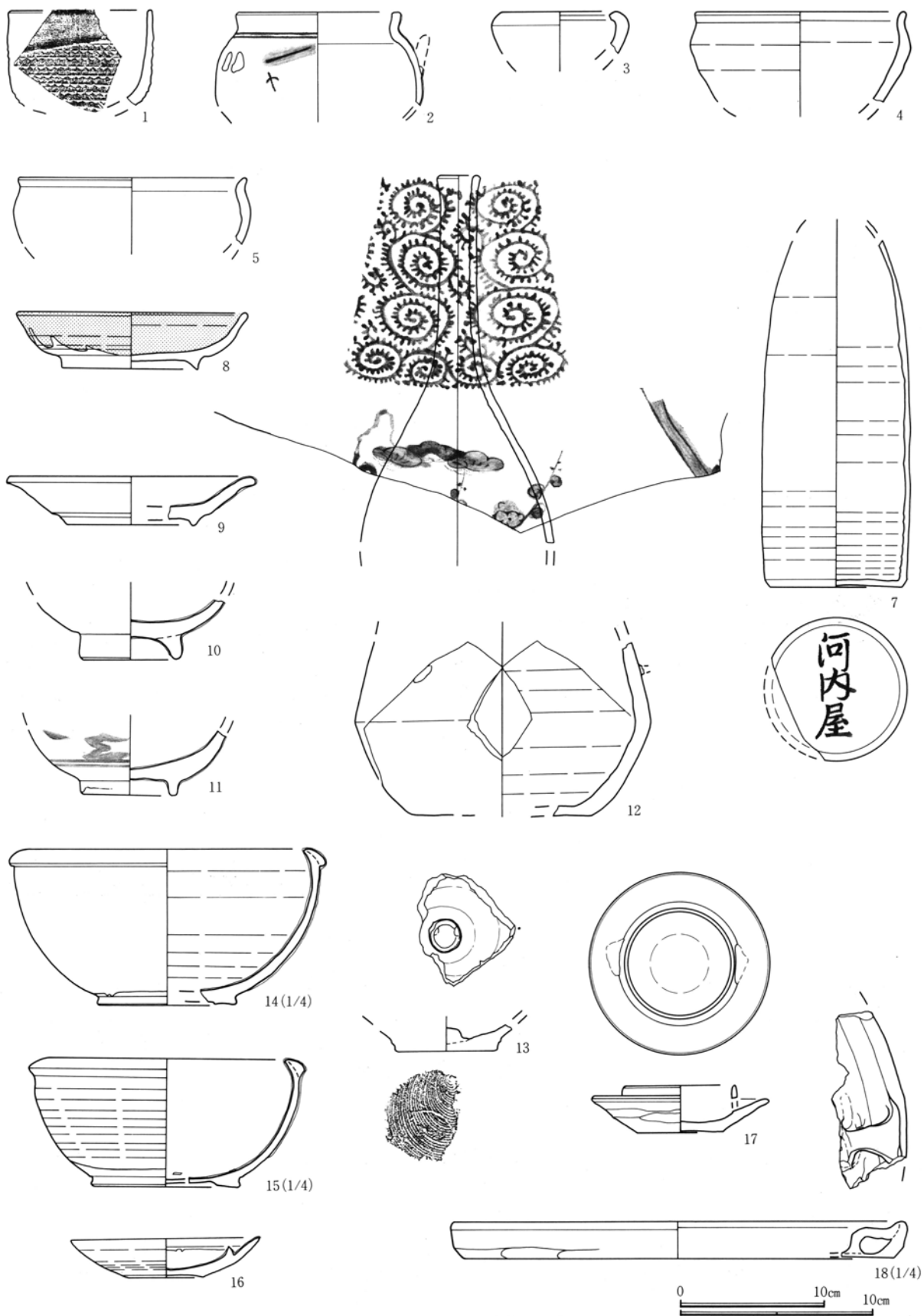
番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
2	石鏃	完	① 2.35 ② 1.55 ③ 0.5 ④ 1.2	黒色頁岩	

3号溝出土石器計測表 (第351図 P L 155)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	備考
1	凹石	完	① 10.2 ② 8.1 ③ 6.0 ④ 526.4	安山岩	

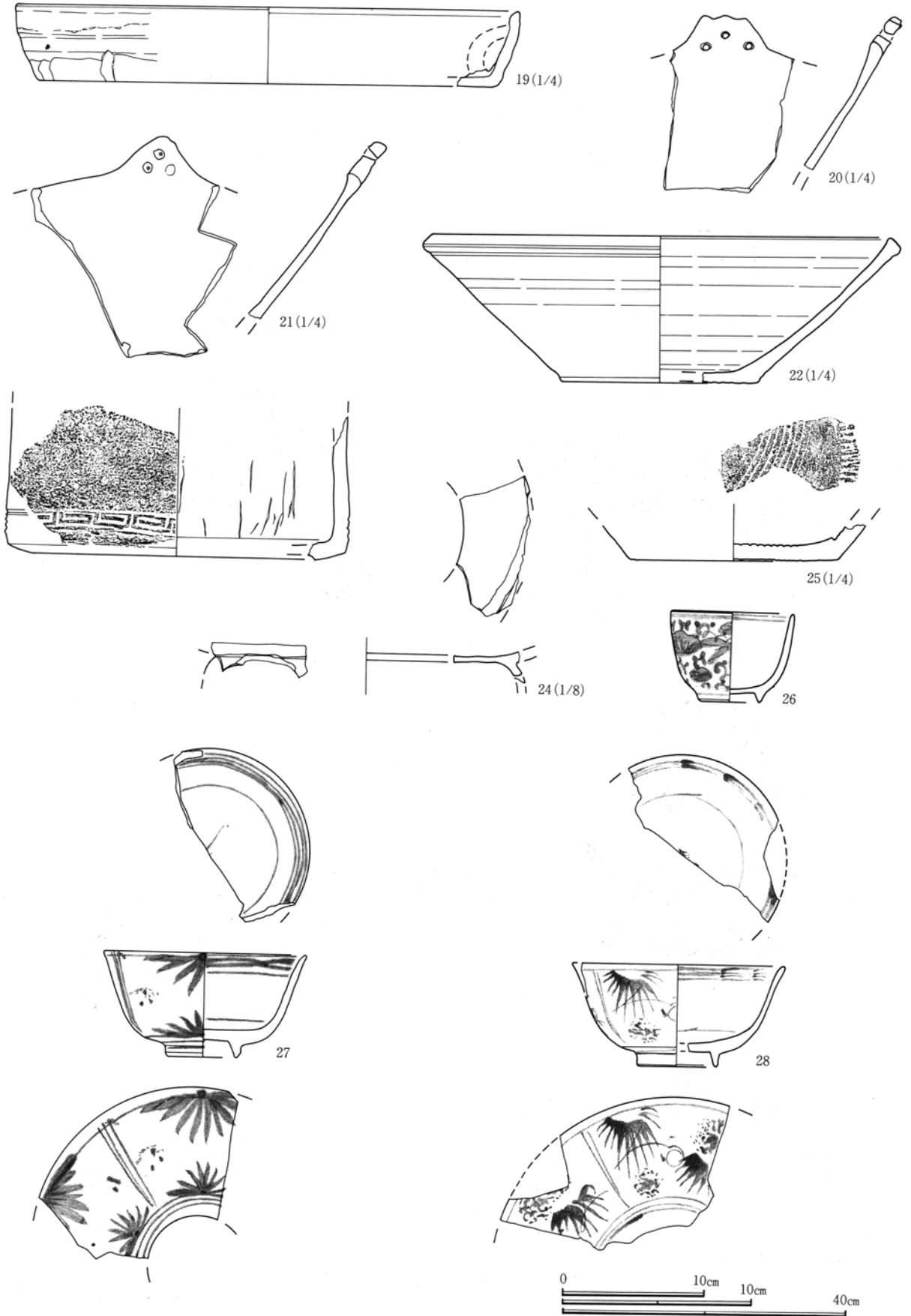


8 遺構外出土遺物

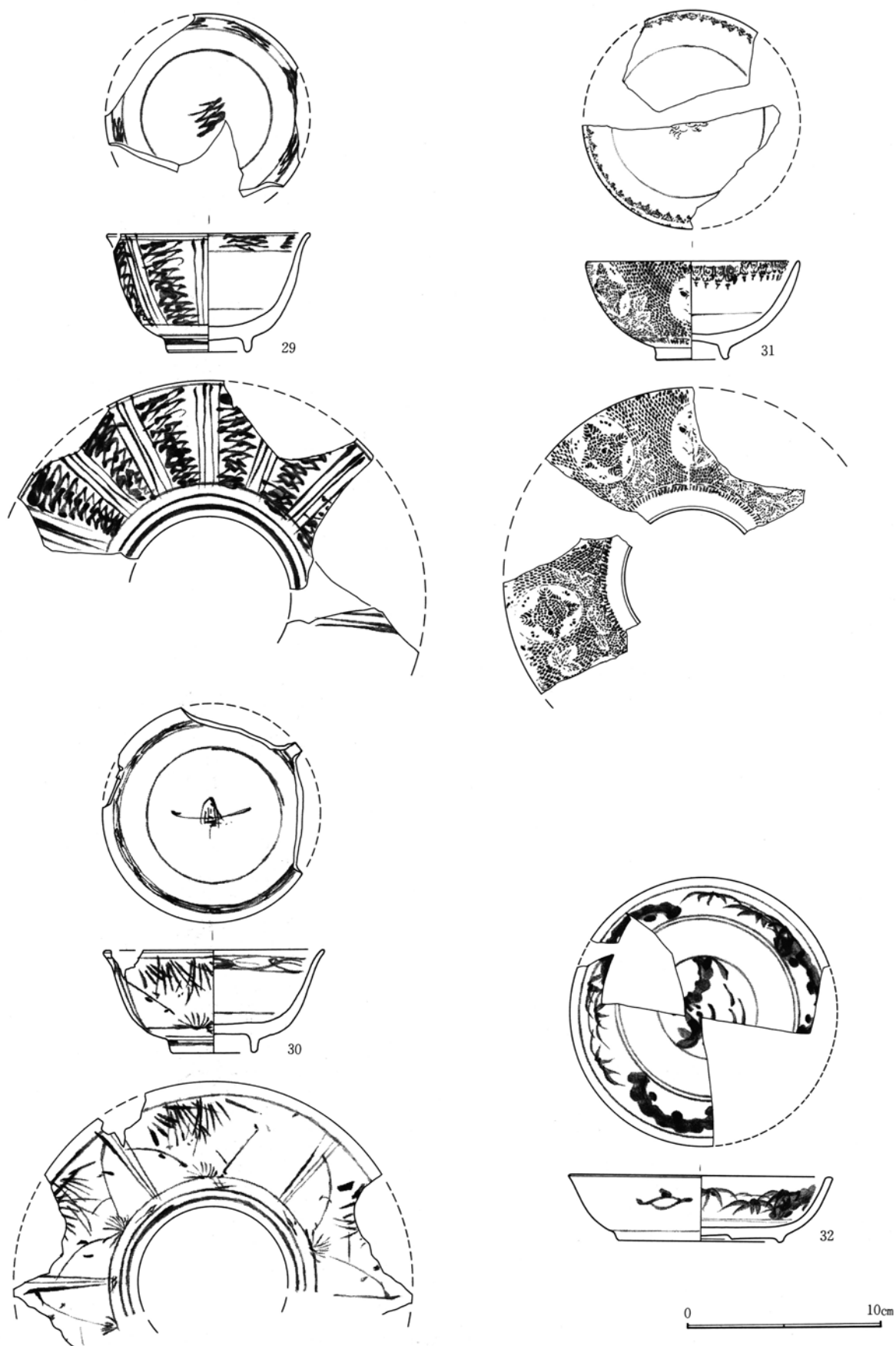


第352図 遺構外出土遺物 (1)

第6節 近世以降および時期不明の遺構

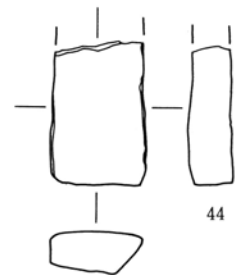
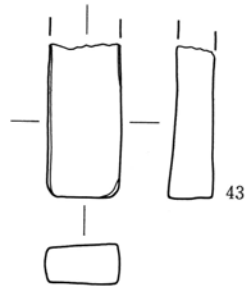
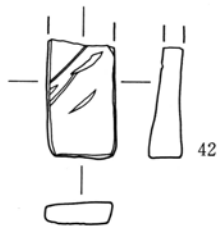
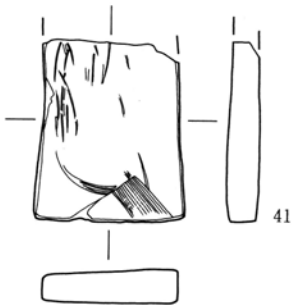
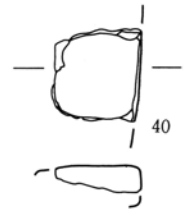
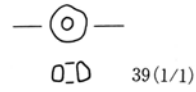
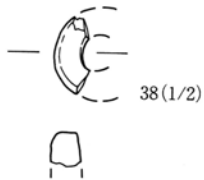
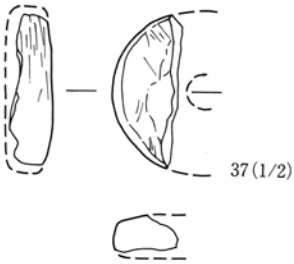
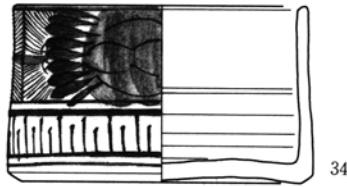
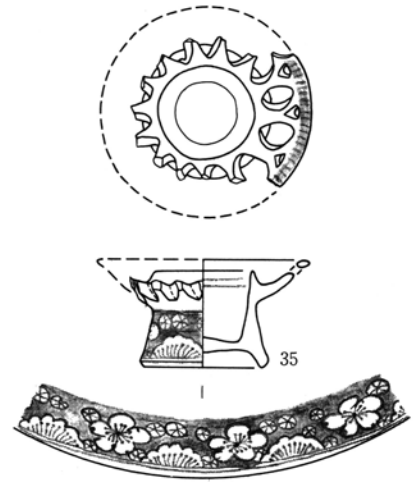


第353図 遺構外出土遺物(2)

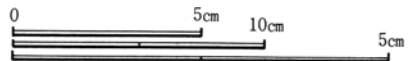


第354図 遺構外出土遺物 (3)

第6節 近世以降および時期不明の遺構



36は写真のみ



第355図 遺構外出土遺物(4)

第4章 検出された遺構と遺物

遺構外出土遺物観察表 (第352~355図 P L 156、157)

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	出土位置	備考
1 瀬戸・美濃陶器 鍔茶碗	口縁片	口 <7.4> 底 — 高 (4.9)		掛分け。 内面と外面の口縁部付近に鉄軸がある。 外面胴部下位に灰色の軸が掛けられている。	65区R-20	18~19C後半
2 相馬・益子陶器 土瓶	口縁片	口 <8.4> 底 — 高 (4.8)		外面は三彩。土瓶蓋受けから内面は無軸。内面にロクロ目がある。外面肩部に吊手突起の欠損部分がある。(二耳)耳は土を捻ってつけたものであり、対する場所に注ぎ口があることが推定される。	66区A-18	19C (明治以降)
3 陶器 乗燭	口縁片	口 <5.8> 底 — 高 (2.2)		内外面とも天目軸が掛けられている。 体部は丸味をもち上位で最大径をもつ。 口縁部は内側にまるめ込まれている。	65区R-20	
4 瀬戸陶器 天目茶碗	口縁片	口 <11.0> 底 — 高 (4.7)		口縁部への立ち上がりの屈折が緩く丸味をもつ特色があらわれている。内外面とも軸が掛けられている。	66区D-18	17C
5 瀬戸陶器 天目茶碗	口縁片	口 <11.8> 底 — 高 (3.4)	②にぶい赤褐色	口縁部から体部へと大きく膨らむ。器高は低いタイプのものと考えられる。	表採	17C後半
6 磁器染付 細頸瓶	口~胴上位	口 3.2 底 — 高 (19.0)		頸部には蛸唐草文・胴部には梅花文が施文されている。体部中位から底部にかけて欠損している。	66区表土	18~19C
7 陶器 燗德利	1/2	口 — 底 <17.9> 高 (6.8)		外面には黄褐色の釉薬がかけられている。釉薬には細かな貫入が見られる。内面および底部は無軸。内面にはロクロ目が明瞭に残る。外面底部縁辺は面取りを行っている。外面底部に墨書により河内屋と記されている。	75区R-1	19C
8 瀬戸・美濃陶器 灰釉の皿	1/4	口 <12.0> 底 7.5 高 (2.95)	③胎土はきめが細かいがφ5mmの礫を含む他、赤褐色、白色の鉱物粒を含む	削り出し高台で断面は三角形。釉薬は内面と外面上半に施釉されている。見込み部分に鉄軸による文様があるが判読不明。内面底部にハマ痕がある。	75区Q-1	18C
9 瀬戸・美濃陶器 灰釉陶器皿	1/6	口 <13.0> 底 <6.7> 高 2.5	②灰オリーブ色 ③きめは細かいがφ7mmの礫を含む他、赤褐色と白色の鉱物を含む	釉薬は内面と外面上半部にみられる。貫入が見られる。高台は削り出しである。	75区Q-1	19C
10 呉器手 碗	底部	口 — 底 5.3 高 3.1	②淡黄 ③割れ口からみる胎土は比較的粗い	高台部に施釉を行っており、畳付のみ無軸である。淡黄色釉に施釉された部分には貫入が見られる。	75区Q-1	18C
11 波佐見陶胎染付 碗	底部	口 — 底 <5.1> 高 (3.5)	②オリーブ灰色 ③胎土は暗灰色	暗灰白釉による釉薬は高台畳付部をのぞいて全面に施釉されている。外面には呉須による絵が描かれているが判読できない。	75区Q-1	18C前半
12 瀬戸・美濃陶器 徳利・鎗釉	1/5	口 — 底 <9.0> 高 (9.0)	②外面・暗赤褐色 内面・にぶい黄褐色	鉄軸を外面に施し内面には鉄軸がたれている。底部は糸切り痕が残る。	75区R-1	18C末
13 瀬戸陶器 土瓶もしくは 甕の蓋	破片	口 — 底 — 高 (1.3)	②にぶい橙色	内外面とも鉄軸がかかる。内面は糸切り痕が残る。端部は土瓶等の口縁部にのる。つまみは残る。全体の1/3が残りほぼ中央部のみである。	66区表採	
14 瀬戸・美濃陶器 鉢もしくは片 口陶器	1/2	口 22.0 底 <9.6> 高 11.0	②オリーブ黄色	内外面とも釉薬がかけられているが高台部は無軸である。内面底にハマの痕が残る。片口部分を欠損する。	66区表採	19C
15 瀬戸・美濃陶器 鉢もしくは片 口陶器	1/2	口 16.5 底 10.0 高 8.8	②浅黄色	内外面とも釉薬がかけられている。外面高台部付近は無軸。口縁部は厚い。内面底部にハマ痕が4個確認できる。完形ならばハマは5個になることが推測される。	66区表採	19C
16 信楽 灯明皿	1/2	口 9.8 底 3.8 高 2.0		内面には灰色釉がみられ貫入がある。油うけ(芯うけ)端部は軸ハゲ状況である。	66区表採	19C

第6節 近世以降および時期不明の遺構

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	出土位置	備考
17 志戸呂 灯明皿	完形	口 9.2 底 4.4 高 2.4		内面と外面の上位部分には鉄釉が掛けられている。	65区表採	19C
18 軟質陶器 焙烙 (内耳造り)	1/4	口 <32.0> 底厚 0.3 高 2.5	①良好 ③黄白色土・茶色・灰褐色の砂がまじる	口縁は横撫で。耳付近は取付け時の歪みが多少ある。	65区R-20	時期不明
19 軟質陶器 焙烙	1/4	口 <37.7> 底厚 0.7 器壁厚 0.9	①良好 ②暗褐色 ③きめの細かい粒を使用	外面底部と胴部下半以外は横方向に撫で整形を行っている。外面胴部下半は横方向に笥押さえを行っている。単位は幅1.8cm・長さ4.0cmほどである。これは底部と胴部を接合した段階の成形痕と考えられる。	75区Q-1	
20 軟質陶器 土鍋	口縁片	口 — 底 — 高 —	②にぶい黄橙色	口縁部には吊手突起があり、上部は三ツ山状を呈している。吊手突起には内側から外側に向けて穴が3個穿ってある。	75区R-1	
21 軟質陶器 土鍋	口縁片	口 — 底 — 高 —	②灰色	口縁部には三角形の吊手突起がある。吊手突起には内側から外側に向けて穴が3個穿ってある。うち2個が貫通し1個は未貫通である。穴は形骸化している物と考えられる。	66区表採	時期不明
22 軟質陶器 土鍋	1/5	口 <34.0> 底 <14.0> 高 10.5	②黒褐色	焼きしまっている。内外面とも横撫でが行われている。特に口縁部外面は丁寧に造られている。	76区C-3	近世
23 軟質陶器 火鉢	1/4	口 — 底 <24.0> 高 (10.2)	①良好 ②褐色	体部下位に雷文が一周している。雷文上位に沈線が一条めぐる。	66区B-20	19C
24 軟質陶器 火鉢	底部片1/8	径 <31.0> 底厚 0.8 高 (4.6) 脚部厚 1.1	②黒褐色	しっかりとした焼き上がりである。アーチ状の高台が付くが欠損部分が多く形状不明である。アーチ状部分には面取りが行われている。底部中央には灰落としの穴があげられている。脚部は内外面とも横撫でが行われている。底部と器壁の最下部に櫛目が見られる。	66区B-19	
25 備前系? 播鉢	底部片	口 — 底 <14.8> 高 2.5	②暗赤灰色 ③暗灰色砂粒と白色粒を多量に含む		65区R-19	近世
26 瀬戸磁器 湯呑み	1/5	口 <6.9> 底 <3.3> 高 4.7		横線文で上下に区画された間に花と唐草文を施文している。釘彫後、ダミ絵付。内面口縁部は2本の横線がある。施釉は高台畳付を除く全面にある。光沢のある白色地に染付による文様が描かれているがボテッとした感じである。	66区表採	19C前
27 瀬戸・美濃磁器 端反の碗	1/2	口 <10.8> 底 <3.6> 高 5.5		上下に横線文、縦に3本の区画線により仕切られた中に文様を描く。白色地に呉須による文様が内外面にある。光沢がある。	76区C-3	19C前半
28 瀬戸・美濃磁器 端反の碗	1/3	口 <10.8> 底 <3.8> 高 5.4		上下に横線文、縦に2本の区画文で仕切られた中に笹文に雪の染付が行われている。白色地にコバルトによる染付けであり光沢がある。	65区R-18	19C前半
29 瀬戸・美濃磁器 碗	2/3	口 10.6 底 4.4 高 6.1		上下に横線文、縦方向に4本の区画線による割付の中に鋸歯状交叉文を施文している。施釉は高台畳付を除く全面に行われている。内面には口縁付近と見込みに文様が描かれている。光沢のある白色地に呉須による染付である。	65区R-18	明治
30 瀬戸・美濃磁器 端反の碗	1/2	口 11.4 底 4.4 高 5.3		外面文様は竹に草。見込みは寿文の染付がある。高台畳付部分は無釉。白色地に染付が美しい。	66区表採	
31 磁器 碗	1/3	口 <11.0> 底 3.6 高 4.9		施釉は高台畳付を除く全面に施される。光沢のある白色地にコバルトによる摺絵が行われている。幾何学的な草花文を描く。摺絵による文様のずれが生じている。見込部に染付文様がある。	66区表採	明治
32 肥前磁器 皿	1/3	口 13.6 底 8.4 高 3.4		内面には笹に雪文を、外面には退化した唐草文が施されている。ロクロ成形。底部は蛇の目凹高台づくりである。	66区表採	19C

第4章 検出された遺構と遺物

器種	部位残存	計測値	①焼成 ②色調 ③胎土	成形・器形・文様の特徴等	出土位置	備考
33 肥前磁器 皿	1/3	口 14.5 底 7.6 高 4.1		内面はコバルトにより山と帆掛け舟2艘、屋形船1艘が描かれる。ロクロ成形後型打ち成形を行っている。底部は蛇の目凹高台づくりである。灰白色の釉薬を口縁端部と外面底部を除き全面に掛けている。コバルトによる染め付けが行われている。 豊付のみ無釉。台部はしっかりとしたつくりであり内面は空洞化している。 体部から口縁部にかけて広がるが、みごとに胎土を落とし透かしをつくっている。染付は脚部外面に梅花の文様を散りばめ口唇部内面には幾何学文様がある。	66区表採	19C末～幕末
34 肥前磁器 段重	1/3	口 11.8 底 12.2 高 7.0			66区表採	幕末以降
35 瀬戸・美濃磁器 杯台	1/3	口 <8.4> 底 4.7 高 4.3			66区表採	幕末～明治

遺構外出土遺物計測表 (第355図 P L 158)

番号	器種	残存	計測値 ①長さ ②幅 ③厚さ ④重量	石材	出土位置	備考
36	古銭					繊維、粃殻痕付着。 推定径 4.3 推定径 2.4
37	紡錘車	1/3	① — ② — ③ — ④ 10.2	滑石	66区A-17	
38	有孔石製品	1/4	① — ② — ③ — ④ 2.1	蛇紋岩	66区M-17	
39	ガラス玉	完形	① 0.2 ② 0.5 ③ 0.3 ④ 0.16		66区O-15	
40	砥石	破片	① (3.7) ② (3.7) ③ (1.1) ④ 16.5	砥沢石	66区表採	
41	砥石	1/2	① (7.1) ② (6.0) ③ (1.3) ④ 99.3	流紋岩	66区C-17	
42	砥石	1/2	① (4.6) ② (2.7) ③ (1.3) ④ 22.5	砥沢石	76区D-1	
43	砥石	1/2	① (6.1) ② (2.9) ③ (1.9) ④ 54.3	流紋岩	66区S-16	
44	砥石	1/2	① (5.7) ② (3.9) ③ (1.8) ④ 61.0	砥沢石	75区R-1	

## 第5章 科学分析

### 第1節 三ツ子沢中遺跡出土炭化材の樹種同定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

三ツ子沢中遺跡は、群馬郡榛名町大字三ツ子沢に所在する遺跡である。遺跡では、縄文時代後期初頭の住居跡が検出され、うち18号住居跡からは建築材と思われる木材が炭化して出土している。ここでは、これら建築部材としての炭化材の樹種を検討した。

#### 2. 樹種の記載と結果

炭化材は、乾燥後比較的保存の良い部分を選び、実体顕微鏡下で横断面について観察し、片刃カミソリなどを用いて横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柁目と同義）の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製JSM T-100型）で観察する。以下に、結果を表1に示し、炭化材標本の記載と同定の根拠を示す。

表1. 出土炭化材の樹種

試料No	出土位置	樹種
1	18号住居跡	ク リ
2	〃	ク リ
3	〃	ク リ
4	〃	ク リ
5	〃	ク リ
6	〃	ク リ
7	〃	トネリコ属
8	〃	ク リ
9	〃	ク リ

ク リ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1a~1c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性であり、2~13細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科ク リ属のク リの材と同定される。ク リは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。



## 第5章 科学分析

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版2a~2b.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3個並び、以後径を減じた管孔がやや塊状に分布する環孔材である。また、木部柔細胞は周囲状もしくは連合翼状である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性1~2細胞幅、3~10細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、モクセイ科のトネリコ属の材と同定される。トネリコ属の樹木には、トネリコ(*F. japonica*)やシオジ(*F. spaethiana*)あるいはヤチダモ(*F. mandshurica*)などがあり、全国の温帯に分布する。木材は、弾力があり、家具材やバットなどに利用される。

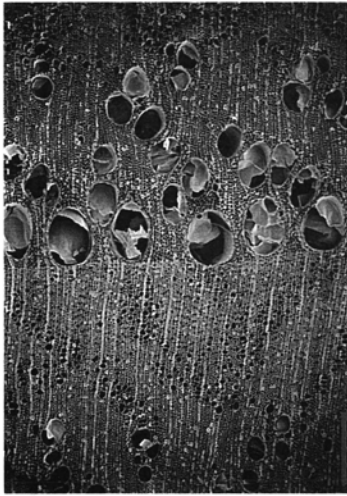
### 3. 考察

18号住居跡から出土した炭化材は、その多くがクリ材であり、1点のみがトネリコ属の樹木であることが判明した。一般的に、縄文時代の住居跡の建築材や燃料材などは、クリ材が多く検出される例が多いようであるが、当遺跡においても同様の状況が見られた。この食糧源としてのクリの材が、建築材あるいは燃料材として利用される背景として、周辺域にクリの樹木が多いことが挙げられる。関東平野中央部や南部においては、縄文時代中期から後期にかけて、クリ属の花粉化石が多産する傾向が見られる(辻ほか, 1987; 清永, 1993)。三ツ子沢中遺跡周辺における当時の植生は、花粉化石などの調査が必要であるが、先の関東平野など他地域での傾向と同様ではないかと推察される。

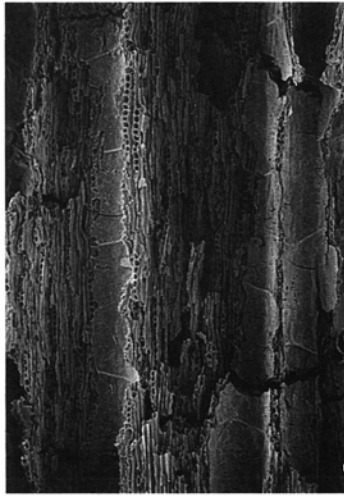
#### 引用文献

- 清永丈太(1993) 花粉分析からみた相模平野西部、歌川低地周辺域における完新世後半の植生変遷史. 第四紀研究, 32:31-40  
辻誠一郎・橋屋光孝・鈴木 茂(1987) 川口市赤山陣屋跡遺跡の花粉化石群集. 川口市遺跡調査会編「赤山・古環境編」、105-130.

図版. 三ツ子沢中遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



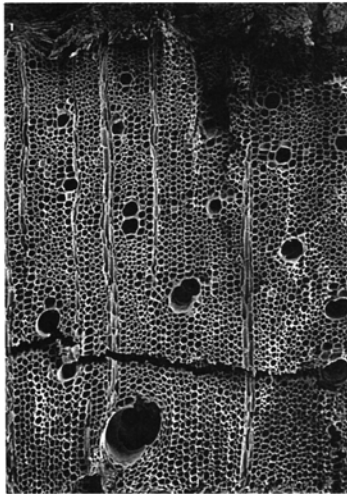
1a. クリ (横断面) ber : 1mm



1b. 同 (接線断面) ber : 0.5mm



1c. 同 (放射断面) ber : 0.5mm



2a. トネリコ属 (横断面) ber : 0.5mm



2b. 同 (接線断面) ber : 0.1mm

## 第6章 調査の成果とまとめ

### 三ツ子沢中遺跡の敷石住居

#### —群馬県内検出の敷石住居の集成を通して—

はじめに

三ツ子沢中遺跡では5軒の柄鏡形敷石住居が検出された。柄鏡形敷石住居については、その形態の特殊性、時間的・空間的限定性の故から古くから研究の対象とされてきている。最近では山本暉久氏、本橋恵美子氏、秋田かな子氏、石井寛氏らが盛んに研究の成果を発表されている。筆者は柄鏡形敷石住居の性格や発生について論ずるにはその任にないが、群馬県内で検出された柄鏡形敷石住居の集成をとおして、三ツ子沢中遺跡の敷石住居の位置を明らかにするとともに、これからの敷石住居研究の参考としていただきたいと思う。

#### 1、群馬県内検出の敷石住居

群馬県内の敷石住居については石坂茂氏の集成<sup>\*1</sup>があるが、それによると74遺跡、約160軒とあるが、約15年を経て、その後の資料の増加により、管見にふれたところによると以下の表のとおり133遺跡、336例（未報告の事例を含む。）に達している。この中には組織的な発掘調査によらない例もあるため、資料検討の対象となり得ないものも多いが、これらの集成資料に若干の統計的処理を与えて、三ツ子沢中遺跡の敷石住居の占める位置を明らかにしたい。

##### ①時間的分布

今回の集成の中で、時期が明らかになったものは336例中235例である。これを時期別に集計すると下表のとおりである。

時 期	軒数	割合(%)
加曾利E 3式期	27	11.4
加曾利E 4式期	95	40.3
称名寺式期	57	24.2
堀之内式期	56	23.7
加曾利B式期	1	0.4

表16 敷石住居時期別集計表

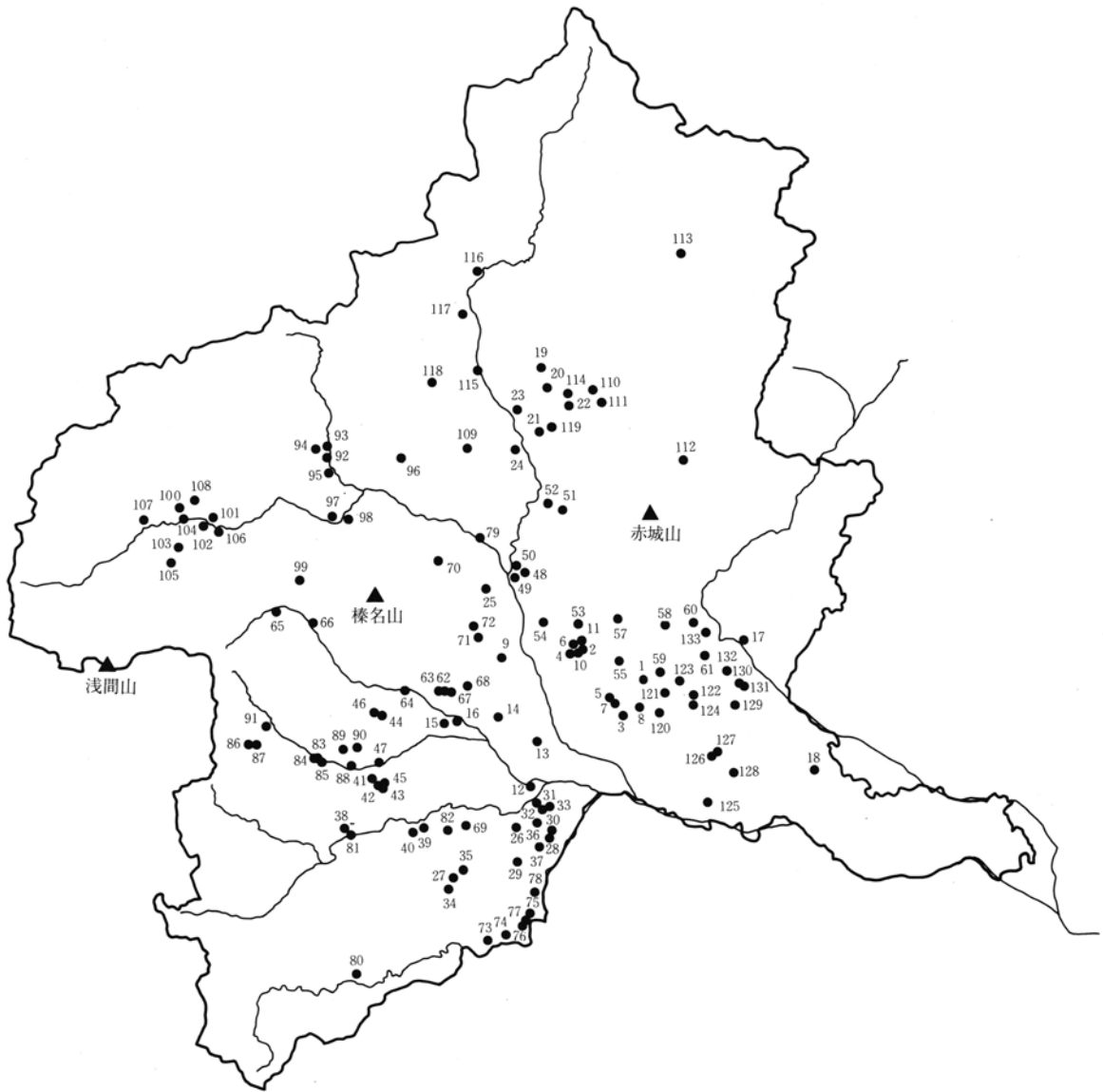
称名寺式期、堀之内式期は、それぞれⅠ、Ⅱ（1、2）期に細分すべきではあるが、参考とした報告書中に細分されていないものが多かったため、今回は特に細分をおこなわなかった。

この集計によると、県内の敷石住居は加曾利E 3式期に出現し、加曾利E 4式期にはピークを迎え、若干数を減らしながら、堀之内式期まで継続し、加曾利B式期にはほとんど姿を消す、といった消長が看取できる。（ちなみに堀之内式期に分類した住居のうち、堀之内2式と記載のあった例は10例である。）他地域でも、加曾利B式期になると事例がきわめて少なくなっており、加曾利BⅠ式期よりも新しい事例はないようである。

##### ②空間的分布

県内の敷石住居が検出された遺跡の分布は第356図のとおりである。南東の平野部でやや分布が薄い傾向が見られるものの、特に偏った分布は見られない。これは、県内の縄文時代の遺跡の分布図と重ね合わせてもそれほど大きな差がないものと思われる。すなわち、同時期の遺跡があれば敷石住居も存在する可能性がある、といえるだろう。

これを前にあげた時期ごとの分布図にしたものが第357図から第360図である。加曾利E 3式期の分布を見ると、NO.50の三原田遺跡をのぞくと南西部に集中していることがわかる。県内の同時期の集落に関して、関根慎二氏の集成<sup>\*2</sup>をみると、これよりもかなり大きな分布状況であることがわかる。したがって、加曾利E 3式期においては、敷石住居はかなり限定的存在であったことが推測できよう。そして、これは山本暉久氏らが述べておられる、敷石住居の発生と伝播、すなわち中部山地地域に初現を見、まず関東山地地域へ広がっていったとする考え方<sup>\*3</sup>に整合するものであろう。ただし、NO.39の田篠中原遺跡、NO.46の野村遺跡では加曾利E 3式古段階と思われる事例も検出されており、柄鏡形敷石住居の発生に関する重要な資料となりうるであろう。



第356図 群馬県内における柄鏡形敷石住居の分布



第357図 加曾利E3式期の柄鏡形敷石住居の分布



第358図 加曾利E 4 式期の柄鏡形敷石住居の分布



第359図 移名寺式期の柄鏡形敷石住居の分布



第360図 堀之内式期の柄鏡形敷石住居の分布



第6章 調査の成果とまとめ

次の加曾利E4式期になると、県内での分布は全県的な広がりを呈するようになる。そして、称名寺期では、やや山間部における分布が薄くなる傾向はあるものの、同様な分布を示し、堀之内式期に至っている。

③埋甕について

敷石住居内における埋甕の性格、意味に関しては川名弘文、山本暉久両氏のすぐれた研究成果\*4があるので、それらを参考にさせていただきながら、群馬県内の様相を概観してみたい。まず、山本氏が柄鏡形(敷石)住居址内検出埋甕事例を集成\*5されているので、その中から埋甕の設置位置と時期を取り出してクロス集計したのが以下の表である。ただし群馬県の事例に関しては筆者の集成をもとにした。

なお、埋甕の設置位置はアルファベットで表してあるが、その意味するところは以下の通りである。

A：連結部 B：柄部先端部 C：柄部空間  
D：主体部空間（炉近辺を含む）

神奈川

	総数	A	B	C	D	A+B	A+C	A+D	B+D	C+D	%
E3	5	4	1								5.7
E4	64	12	27	3		19		1	1		73.6
称名寺	8	2	5	1							9.2
堀之内	7	1	2	2	1						8.1
加曾利B	3		3								3.4
	87										

東京

	総数	A	B	C	D	A+B	A+C	A+D	B+D	C+D	%
E3											
E4	44	10	21	1	3	8			1		73.3
称名寺	12	6	4			1		1			20
堀之内	4	3	1								6.7
加曾利B											
	60										

埼玉

	総数	A	B	C	D	A+B	A+C	A+D	B+D	C+D	%
E3	1	1									1.5
E4	34	11	10		1	8			2	2	49.2
称名寺	33	13	10	1	1	8					47.8
堀之内	1	1									1.5
加曾利B											0
	69										

千葉

	総数	A	B	C	D	A+B	A+C	A+D	B+D	C+D	%
E3											
E4	6	4			1	1					20.7
称名寺	17	10		1	3	3					58.6
堀之内	6	1		1	3			1			20.7
加曾利B											
	29										

長野

	総数	A	B	C	D	A+B	A+C	A+D	B+D	C+D	%
E3	5	1	1		2						8.9
曾利IV	2	2									3.6
E4	35	20	5		6	2	1				62.5
曾利V	6	6	5		1						10.7
称名寺	2	1			1						3.6
堀之内	6	1	1		3						10.7
加曾利B											
	56										

群馬

	総数	A	B	C	D	A+B	A+C	A+D	B+D	C+D	%
E3	18	8	4		2	4					20
E4	53	22	6	1	9	15					58.9
称名寺	17	10	2	1	3	1					18.9
堀之内	2		1		1						2.2
加曾利B											
	90										

表17 埋甕を持つ敷石住居の県別集計表

これらの表からまずいえることは、南関東諸地域に比較して群馬、長野では古くから柄鏡形敷石住居内での埋甕祭祀が行われているという点である。群馬では加曾利E 3式期の占める割合が20%、長野ではE 3式期、曾利IV式期をあわせると12.5%であるのに対し、南関東では最も割合の高い神奈川でも5.7%である。さらに千葉、東京にいたっては加曾利E 3式期の柄鏡形敷石住居内での埋甕は検出されていないようである。これは、敷石住居内の埋甕祭祀が中部高地地域を中心とする長野、あるいは群馬県南西部で発生し、次第に南関東へ伝播していったことの証左となろう。また、群馬県内の集計を、敷石住居全体の時期別集計と比較してみると、敷石住居全体では11.4%をしめるにすぎないE 3式期の住居が、埋甕を持つ敷石住居の中では20%を占めている。同様に全体では40.3%のE 4式期が、埋甕を持つ敷石住居では58.9%を占めている。さらに、各時期毎に埋甕を持つ敷石住居の割合を集計してみると、以下の通りである。

	敷石住居	埋甕を持つ住居	割合(%)
E 3	27	18	66.7
E 4	95	53	55.8
称名寺	57	17	29.8
堀之内	56	2	3.6

表18 埋甕を持つ敷石住居の時期別集計表

この集計から明らかなように、敷石住居内における埋甕祭祀は、加曾利E 3式期、すなわち敷石住居発生時に最も盛行し、次第に衰退していったといえよう。これは、敷石住居発生と同時に埋甕祭祀が盛んになったと理解するのではなく、住居内埋甕祭祀が発展する過程において敷石住居が発生したと考えるべきであろう。そしてこれは、住居内における祭祀が発展していく過程で敷石住居が発生したとする山本氏の主張<sup>\*6</sup>を裏付けるものであると考えられる。また、住居内埋甕祭祀の消長と、敷石住居全体の消長には若干のタイムラグが見られる。これは加曾利E 4式期において、住居内埋甕祭祀に代わる祭祀形態が存在したと考えるべきではないだろうか。

次に埋甕の設置位置についてであるが、群馬および、長野においてはいずれの時期もA、すなわち連結部（住居主体部と張出部との接続地点）が多数を占めているが、南関東地域ではB、すなわち柄部先端部の割合が高くなっている。また、埋甕を連結部と柄部先端部に埋設しているA+B類型でははっきりした傾向が見られる。まず、群馬以外の地域ではE 4式期～称名寺式期に限られている。埼玉、千葉では称名寺式期が多いが、中心は加曾利E 4式期と見ることができよう。これに対し群馬では同じようにE 4式期が中心であるが、E 3式期にA+B類型が見られている。これは前にあげたNO.39の田篠中原遺跡、NO.46の野村遺跡での事例である。この両遺跡とも発生段階に近い時期の敷石住居が検出されており、この結果とも合わせて、典型的な柄鏡形敷石住居の成立との関連を考える必要がありそうである。

#### ④連結部石囲施設について

本遺跡の16号住居の連結部に見られる、石囲炉状の石組みは石坂茂氏によって「箱状石囲い」と呼称され<sup>\*7</sup>、また鈴木徳雄氏は「連結部箱状石囲施設」と呼称している<sup>\*8</sup>。本稿では「連結部石囲施設」として進めていきたい。

この連結部石囲施設は筆者の集成によると、群馬県内では17例を数えることができる。時期別に見ると加曾利E 4式期9例、称名寺式期4例、堀之内式期3例である。この連結部石囲施設は焼土を持たないところから石囲炉とは区別されているようであるが、筆者の集成によると、被熱している例も存在している。(NO.86入山仁田遺跡03号住居)

この連結部石囲施設に関してはここにあげた石坂、鈴木両氏によって検討が行われているが、両氏ともこの連結部石囲施設は、その設置位置、構造から連結部に設置された埋甕と同様の性格を想定しており、木村収氏も同じ機能を持つ施設との見方をしている<sup>\*9</sup>。筆者もこの点に関しては異論はないが、被熱している例が存在していること、またこの連結部石囲施設内に埋甕を設置している例もあること、

(NO.50三原田遺跡8-7号住居、NO.57市之関前田遺跡SI33号住居、NO.9熊野谷遺跡J-1号住居、NO.103滝原Ⅲ遺跡1号住居)、また住居内埋甕例の少ない堀之内式期において、埋甕を持つ敷石住居よりも1例ではあるが多いこと、この連結部石囲施設を持つ敷石住居は他の部分には埋甕をほとんど持たないことなどからさらに検討が必要であると思われる。

⑤柱穴配置について

柄鏡形敷石住居は壁柱穴構造を持つと認識されていることが多いと思われるが、それはどの程度妥当性を持つものであるか、検討してみたい。柄鏡形敷石住居の柱穴配置に関して、的確な分類を行い詳細な検討を行っている榎原功一氏の論攷\*<sup>10</sup>があるので、今回はその分類に従って、県内検出の敷石住居の柱穴配置の分類を行った。

柱穴の分類

I類 (支柱穴タイプ) 主体部内の柱穴が支柱穴の

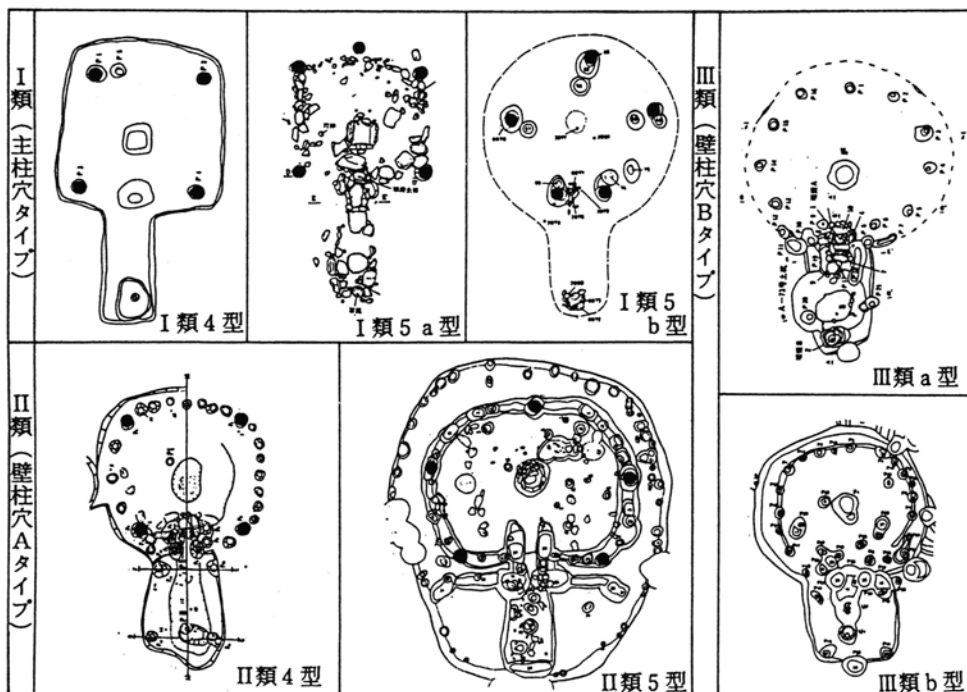
みの場合で、4本柱穴 (I類4型)、5本柱穴 (I類5型)がある。I-5型はさらに、柱穴内空間が方形的なタイプ (I類5a型)と柱穴内空間が正五角形に近いタイプ (I類5b型)に細分される。

II類 (壁柱穴Aタイプ) 主体部内柱穴は壁柱穴であるが、柱穴規模が大きな柱穴 (支柱穴状柱穴)が混在している。I類と同様に支柱穴状柱穴が4本 (II類4型)、5本 (II類5型)がある。

III類 (壁柱穴Bタイプ) 壁柱穴で、個々の柱穴規模が同程度である (III類a型)か、交互に大小の柱穴が配置する (III類b型)。

榎原氏の分類によると、それぞれの柱穴配置の類型により、敷石、縁石、環礫形態に差があるとのことである。

県内の敷石住居の柱穴配置と時期のクロス集計を行ったのが以下の表である。柱穴が検出されなかった事例が多く、集計できたのは74例にとどまった。



(黒いドットは支柱及び支柱状柱穴)

第361図 柄鏡形住居の柱穴類型 (榎原 1995より転載)

一覧表では分類に迷う事例も存在したが、下の表ではその類型で集計を行った。

	I-4	I-5a	I-5b	II-4	II-5	II類	III-a	III-b	III類	合計
加曾利E 3	1						2			3
加曾利E 4		3	1	1	2	1	20	1		29
称名寺				1	1		26		1	29
堀之内	1						10		2	13
	2	3	1	2	3	1	58	1	3	74

表19 柱穴配置の時期別集計表

群馬県内では、各時期を通じてⅢ類、特にⅢ-a型が中心を占めている。Ⅰ類は中期末に限られ、敷石住居としては古いタイプといえるようである。

(堀之内式期でⅠ類に分類したNO.105の古屋敷遺跡例は昭和34年の発掘で、実測図等がなく、略図からの筆者の判断であるためやや信頼性に欠ける。) E 4式期の中で、Ⅰ類とⅡ類が混在しているが、どちらが先行するタイプであるか、あるいは同時期に存在するのか、詳細な検討は今後の課題である。しかし、称名寺式期、堀之内式期において、Ⅲ類が主体となっていることから、Ⅰ類あるいはⅡ類からⅢ類へと変遷していった過程は想定できよう。

本稿では柱穴配置の時期的変遷のみを取り上げたが、今後は榑原氏も述べておられるように、柱穴配置の変遷と敷石形態(緑石、環礫を含む)の推移との検討も必要であると思われる。

#### ⑥敷石形態について

敷石の形態については、その分類が多岐にわたり、かつ残存状態によって分類が異なる可能性が高いため、類型化は困難であるといわざるを得ない。しかし、典型的な類型も存在していることは明らかなので、いくつかの形態に絞って検討してみたい。

#### ア. 全面敷石タイプ

従来、敷石住居の全面敷石タイプは発生期から成立期にかけて多く見られると認識されていたようである。そこで、今回集成した事例の中で、全面敷石と判断された71例について、時期別に集計してみたところ、下のような結果が得られた。

	軒数	該期の事例中での割合(%)
加曾利E 3	5	18.5
加曾利E 4	42	44.2
称名寺	10	17.5
堀之内	14	25.0

表20 全面敷石タイプの時期別集計表

ここで、特徴的なのは、堀之内式期における、全面敷石タイプの割合の高さである。県内の敷石住居においては、全面敷石タイプから、住居主体部の壁際に沿って小礫や土器片などを土とともに盛り上げて、土手状の高まりを巡らすタイプ(これを石坂茂氏は周縁部環礫と呼称しており\*<sup>11</sup>、主体部床面には敷石を施さないタイプと敷石を施すタイプとがある。)あるいは、炉の周囲から柄部にかけての住居中央部に直線的に敷石を施すタイプなどに変遷していく過程が想定されていたが、この全面敷石タイプの割合の高さは意外な結果といえよう。ただし、環礫タイプや中央部の直線的なタイプが後期の敷石住居に現れてくることは、後述するように明らかである。

また、E 3式期では全面敷石タイプが18.5%にとどまっているが、該期において敷石形態が判定できた事例は27例中14例にすぎないことを考慮しなければならないであろう。

#### イ. 環礫タイプ

前に述べたように、この環礫タイプについては石坂茂氏が詳細な検討を与えている\*<sup>12</sup>ので、性格、特徴などに関しては参照していただきたい。本稿ではこの環礫を持つタイプの敷石住居の時期的分布を明らかにし、変遷を推測するにとどめさせていただく。

今回の集成では、環礫をもつ敷石住居は34例が確認できた。これを時期別に集計すると以下の通りである。

	軒数	該期の事例中での割合(%)
加曾利E 3	0	—
加曾利E 4	5	5.2
称名寺	20	35.1
堀之内	8	14.3

表21 環礫タイプの時期別集計表

## 第6章 調査の成果とまとめ

この集計には環礫を持ち、他の部分にも敷石が施されている事例を含んでいる。これからわかるように、環礫をもつ敷石住居は後期に特徴的な敷石形態といえよう。また、今回の事例のE4式期の5例のうち、3例は主体部床面全面に敷石を施し、さらに環礫が巡るタイプである。このことから、全面敷石タイプから環礫タイプへの移行途上の中間的なタイプであるということができるとはならないだろうか。

ウ、中央部タイプ

ここで取り上げる敷石形態は、住居中央部に限って敷石が施されるタイプである。主体となるのは炉から柄部にかけて直線的に敷石が施されるタイプであるが、これ以外にも柄部から奥壁まで続く例や、炉まで達していないで、連結部までの例も含まれている。全部で25例確認されたが、時期別集計は以下の通りである。

	軒数	該期の事例中での割合(%)
加曽利E3	1	3.7
加曽利E4	2	2.1
称名寺	9	15.8
堀之内	13	23.2

表22 中央部タイプの時期別集計表

時期を下るに従って割合が高くなる傾向が看取できる。先ほどの環礫タイプの事例と併せて、後期になると住居主体部には敷石を施さなくなる方向に推移していくことが裏付けられるといえよう。

### ⑦炉について

炉に関しては、石囲炉を柄鏡形敷石住居のメルクマールの一つとしている例がある\*<sup>13</sup>ように、石囲炉が多数を占めていることは容易に想像できる。今回の集成での実数をあげてみると、石囲炉を持つ例は174例にのぼる。これは、総数の半数以上であり、炉が検出されなかった事例が含まれていることを加味すれば、かなりの高率になることが考えられる。そして、この174例のうち、中に埋甕を持つ事例は20例で、加曽利E4式期～堀之内式期まで、各時期にわたっている。石囲をもたない地床炉は、後期に多い傾向が看取できるため、住居主体部に敷石を施

す行為が炉の形態にも影響しているといえよう。

## 2、三ツ子沢中遺跡の敷石住居

三ツ子沢中遺跡では初めに述べたように、5軒の敷石住居が検出されている。それぞれの事例について、これまで検討してきた県内の事例の集成を参考に検討を加えてみたい。なお、各住居の事実記載と重複する部分もあるが、ご容赦いただきたい。

### ①1号住居

時期は加曽利E4式期である。住居全体の半分程度しか調査できなかったため、柄部を含め、不明な部分が多い。

埋甕：調査された範囲では検出されなかった。

柱穴配置：壁柱穴構造を呈しており、Ⅲ-a型に分類できる。

敷石形態：一部にしか認められなかったが、調査時の検討がやや不十分であったため、これが本来の状態であったのか、抜き取りや攪乱などでこの部分が残存したのかの判断ができていない。そのため、敷石形態については信頼性に欠ける点はある。

本住居は西向き斜面に占地しており、その南側半分の調査であったため、柄部も確認されていないが、柄部が傾斜方向の西側に存在すると仮定し、この敷石が本来の形態だとすると、奥壁部のみの敷石ということになる。しかし、県内の資料の分析から奥壁部のみの敷石例はほとんどなく、柄部の敷石を想定したとしても類例が少ない。したがって本住居は抜き取り、あるいは攪乱によって主体部床面の敷石を失っていると考えることが妥当であろう。

炉：礫の出土状況から石囲炉であったことが推定される。該期の敷石住居としては一般的な傾向といえよう。

### ②16号住居

時期は称名寺Ⅱ式期である。

埋甕：炉の北西で検出された。埋設位置の分類ではDである。また、本住居は連結部石囲施設を持っている。前に挙げたように、連結部石囲施設を持つ敷石住居は他の部分に埋甕を持つ例がほとんどない

め、本住居の埋甕はその位置がやや特殊である点を含め、埋甕としての性格を検討する必要があると思われる。本住居の連結部石囲施設からは、焼土や灰は検出されなかったし、配石が被熱している様子も見られなかった。したがって本住居のこの施設は炉として使われたものではなく、前に述べたように連結部における埋甕と同様の機能、性格を持っていたものと推測される。

柱穴配置：分類ではⅢ-a型に分類される。本住居の帰属する称名寺式期では最も多数を占めるタイプである。

敷石形態：住居主体部で炉の周囲に敷石が確認されなかった部分が存在している。この部分で確認された床面のレベルは周囲の敷石面よりも低いため、この部分の敷石は何らかの原因で失われたものと思われる。したがって、全面タイプの敷石形態と分類することが妥当であろう。とすると、称名寺式期では、比較的少ないタイプである。また、事実記載の中でも述べたように、本住居に施された敷石は被熱している。同様な例はNO. 1の大道遺跡、NO. 9の熊野谷遺跡で確認されており、比較、検討が必要であると思われる。

炉：住居主体部はほぼ中央において、石囲炉が検出されている。

### ③18号住居

出土遺物からの時期は加曾利E 4式期から称名寺I式期である。

埋甕：検出されなかった。ただし、連結部からピットが検出されており、埋甕の抜き取り痕とも考えられる。しかし、連結部にピット、あるいは土坑の存在する例も報告されており、(NO. 2芳賀北曲輪遺跡、NO. 86入山仁田遺跡)石坂茂氏が連結部埋甕が連結部土坑への変遷を想定している\*<sup>14</sup>ように、単純に埋甕の抜き取りとは判断できないかもしれない。ただし、連結部ピットの事例は称名寺Ⅱ式期以降に限られ、石坂氏も称名寺Ⅱ式期から堀之内式期にかけての変遷ととらえているため、本住居での例は埋甕の存在も否定できない。

柱穴配置：連結部付近で柱穴が認められなくなるため、Ⅱ類の可能性も捨てきれないが、ほぼ同規模の柱穴が壁際に巡るため、Ⅲ-a型に分類できると思われる。

敷石形態：環磔+一部の敷石形態である。本住居の時期を加曾利E 4式期ととらえるならば、前に挙げた環磔タイプの事例の検討から、一部に残る敷石は主体部全面に施されていたものの残存部となる可能性も考えられよう。

環磔の性格について、石坂氏の論攷\*<sup>15</sup>の中で、住居構造の一部と見る機能論的な解釈と住居の廃棄に関する祭祀的性格を有するとする解釈の2つをあげている。石坂氏は前者の解釈をとっておられるが、本住居では環磔の中に直立した状態で炭化した柱材が検出されており、住居構築時に環磔が存在していたことは明らかである。したがって住居構造の一部とする解釈に妥当性があるといえよう。また、この環磔の中には加曾利E 4式期の両耳壺の破片が撒かれたような状態で出土しており、何らかの祭祀的な行為が想像される。これは、環磔の祭祀的性格を裏付けるものとも考えられるが、本住居では称名寺I式期と思われる遺物も主体的に出土していることから、廃棄時の祭祀とするよりも、構築時の祭祀的行為と考えたい。

炉：住居主体部中央で石囲炉が検出された。環磔タイプの住居では、土坑炉の割合がやや高くなる傾向が見られるが、石囲炉は多数を占めるタイプである。

### ④36号住居

出土遺物からの時期は加曾利E 4式期である。

埋甕：調査された範囲からは検出されなかった。

柱穴配置：柱穴は検出できなかった。

敷石形態：扁平な磔を主体部全面に敷き詰め、さらに環磔が巡るタイプである。前に述べたように、E 4式期で環磔を持つ敷石住居は、全面に敷石を施す割合が高いが、本住居もその例にもれない。全面敷石タイプから環磔タイプへの移行形態と考えることができるのではないだろうか。

炉：石囲炉が検出されている。

## 第6章 調査の成果とまとめ

### ⑤45号住居

出土遺物から時期は堀之内1式期と思われる。本遺跡内では最大の規模の柄鏡形敷石住居である。今回の集成では規模に関しては言及しなかったが、NO.8の荒砥二之堰遺跡の例のように、この時期の敷石住居は規模が大きくなる傾向があると思われる。

埋甕：連結部で検出された。群馬県内では埋甕を持つ堀之内式期の敷石住居は少なく、中でも連結部に埋甕を持つ例は本住居のみである。

柱穴配置：同規模の柱穴による壁柱穴構造を持っているのでⅢ-a型であろう。堀之内式期においてはⅢ-a型の事例がほとんどであり、さらに環礫タイプの敷石形態を持つ住居は1例を除き、Ⅲ-a型である。

敷石形態：主体部床面には敷石を施さない、環礫みのタイプである。荒砥二之堰遺跡以外では類例が少ないが、後期の敷石住居では出現率の高い敷石形態であるといえよう。

炉：主体部中央付近で焼土が検出されている。石囲炉の可能性もあるが、堀之内式期では土坑炉の出現率も高い。

以上、三ツ子沢中遺跡で検出された敷石住居について検討してみたが、いずれも当該期においては出現率の高い、言い換えればポピュラーなタイプの敷石住居であるということができるようである。ただし、16号住居の連結部石囲施設に関しては今後も検討の必要があると思われる。

### おわりに

群馬県内の敷石住居の集成を通して、三ツ子沢中遺跡の敷石住居についてその位置を明らかにしようと試みてきたわけであるが、単なる資料の操作にとどまってしまう、何ら結論を引き出せないままになってしまった。筆者の力量不足という他はない。今回言及できなかった住居形態、敷石形態の細かい分類、あるいは他県の状況との比較、同一遺跡内の一般的な竪穴住居との比較等今後も課題となる事項は

山積している。今後も資料を収集し、検討していきたいと考えているので、関係諸氏からのご批判、ご教示をいただければ幸いである。

今回の集成にあたり、資料をご提供いただいた関係諸機関、諸氏のみなさまにはこの場を借りて篤くお礼を申し上げたい。

### 引用・参考文献

- \* 1 石坂茂 「柄鏡形住居址について」『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- \* 2 関根慎二 「白川傘松遺跡 遺構編」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- \* 3 山本暉久 「敷石住居」『縄文文化の研究』8 1982
- \* 4 川名弘文 「柄鏡形住居址の埋甕に見る象徴性」『土曜考古』第10号 1985  
山本暉久 「柄鏡形（敷石）住居と埋甕祭祀 上・下」『神奈川考古』第32.33号 神奈川考古同人会 1996. 1997
- \* 5 注4の（山本1996. 1997）による
- \* 6 山本暉久 「敷石住居出現のもつ意味 上・下」『古代文化』第28巻2.3号 1976
- \* 7 石坂茂 「縄文時代の遺構」『仁田遺跡・暮井遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- \* 8 鈴木徳雄 「敷石住居址の連結部石囲施設」『群馬考古学手帖』Vol. 4 1994
- \* 9 木村收 「白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- \* 10 櫛原功一 「柄鏡形住居の柱穴配置」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第6集 1995
- \* 11 注1に同じ
- \* 12 注1に同じ
- \* 13 赤山容造 「三原田遺跡 住居編」群馬県企業局 1980
- \* 14 注7に同じ
- \* 15 注1に同じ

遺跡番号	住居番号	遺跡名	遺跡名称	所在地	時期	形状	柱穴	敷石	規模	炉	埋設位置	柄部方向	備考	文献
1	1	大道	118号住居址	前橋市西大室町	堀ノ内2	円形	Ⅲ-a	炬～柄部	5.27×3.82	石囲	なし	南南西		1
1	2	大道	126号住居址	前橋市西大室町	堀ノ内2	円形	Ⅲ-a	柄部	6.2×5.12	石囲	B	南西	敷石被熱	1
1	3	大道	128号住居址	前橋市西大室町	不明	円形	Ⅲ-a	柄部一部	6.20×5.12	石囲	なし	南	残存不良。敷石被熱。	1
1	4	大道	131号住居址	前橋市西大室町	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	柄部+環礫	8.02×4.31	なし	なし	南東	敷石被熱	1
1	5	大道	132号住居址	前橋市西大室町	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	炬～柄部+環礫	5.82×3.86	石囲	なし	南		1
2	6	芳賀北曲輪	敷石1号住居跡	前橋市勝沢町	E4	円形	Ⅲ-a	柄部全面	7.6×5.2	石囲	D	南東	柄部円形。石棒。	2
2	7	芳賀北曲輪	敷石2号住居跡	前橋市勝沢町	称名寺Ⅰ	方形	Ⅲ-a	炬～柄部	6.4×4.8	石囲・五角形	なし	南西	連結部石囲施設。柄部縁石。	2
2	8	芳賀北曲輪	敷石3号住居跡	前橋市勝沢町	称名寺Ⅱ	円形	不明	柄部+環礫	7.0×5.0	石囲	なし	南南東	連結部ピット	2
2	9	芳賀北曲輪	敷石4号住居跡	前橋市勝沢町	称名寺	円形	不明	柄部+環礫	6.4×5.0	土坑	なし	南東	連結部石囲施設	2
2	10	芳賀北曲輪	JH-22号住居跡	前橋市勝沢町	E4	円形	I-5b	主体部縁石	3.4×2.9	石囲	A	南西		2
3	11	荒砥前原	C区3号住居	前橋市二宮町	E4	円形	Ⅲ-a	全面	3.5×3.3	石囲	A	南東	連結部と炉の間に石棒	3
3	12	荒砥前原	2T-1号住居	前橋市二宮町	E4	不明	不明	全面	不明	石囲・方形	なし	北	炉北側に立石	3
4	13	小神明		前橋市小神明町	E4	不明	不明	柄部のみ	3×3.5程度	石囲	なし	東南東		4
5	14	笄井		前橋市笄井町	後期	不明	不明	全面	不明	石囲・五角形	なし	不明	大正15年調査	4
6	15	九科	61号住居	前橋市勝沢町	不明	円形	不明	全面	不明	なし	なし	南南西		5
6	16	九科	66号住居	前橋市勝沢町	不明	円形	Ⅲ-a	全面	不明	なし	なし	南西		5
7	17	今井白山	I区23号住居	前橋市今井町	E4	不明	不明	不明	不明	なし	なし	不明	残存不良	6
8	18	荒砥二之堰	27号住居	前橋市飯土井町	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	環礫	7.28×5.6	土坑	B	南	柄部長2.2	7
8	19	荒砥二之堰	28号住居	前橋市飯土井町	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	環礫	7.92×6.15	土坑	なし	南東	柄巾2.34	7
8	20	荒砥二之堰	29号住居	前橋市飯土井町	堀ノ内1	円形	Ⅲ-a	環礫	6.4×6.8	土坑	なし	南東		7
8	21	荒砥二之堰	30号住居	前橋市飯土井町	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	環礫	6.8×5.42	土坑	なし	南東	柄巾2.28	7
8	22	荒砥二之堰	31号住居	前橋市飯土井町	称名寺Ⅰ	円形	Ⅲ-a	環礫	7.96×5.68	石囲	なし	南東	炉石に石棒	7
8	23	荒砥二之堰	32号住居	前橋市飯土井町	称名寺Ⅰ	円形	Ⅲ-a	環礫	5.05×4.68	石囲・方形	D	南		7
8	24	荒砥二之堰	33号住居	前橋市飯土井町	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	環礫	9.16×5.32	埋設	C		柄巾1.98	7
8	25	荒砥二之堰	34号住居	前橋市飯土井町	堀ノ内1	円形	Ⅲ-a	環礫	8.03×5.25	埋設	なし	南	柄巾2.44	7
8	26	荒砥二之堰	35号住居	前橋市飯土井町	堀ノ内1	円形	Ⅲ-a	環礫	11.32×8.96	土坑	なし	南東	連結部西側縁石・柄巾2.72	7
9	27	熊野谷	J-1号住居址	前橋市青梨子町	E4	六角形	不明	全面	7.2×4.5	土坑	A+B	南東	連結部石囲に埋設。敷石被熱。	8
10	28	芳賀東部団地	J6号住居	前橋市鳥取町	E4	六角形	Ⅲ-a	全面+環礫	8.2×7.7	石囲・方形	なし	南西	奥壁に縁石	9
10	29	芳賀東部団地	J8号住居	前橋市鳥取町	称名寺Ⅰ	円形	Ⅲ-a	炬～柄部+環礫	5.1×3.75	石囲・埋設	A	西南西		9
10	30	芳賀東部団地	J9号住居	前橋市鳥取町	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	環礫+奥壁	5.2×5.0	石囲	なし	南西		9
10	31	芳賀東部団地	J10号住居	前橋市鳥取町	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	炬～柄部+環礫	7.0×3.6	石囲	なし	南西	連結部狭い	9
10	32	芳賀東部団地	J11号住居	前橋市鳥取町	E4	方形	Ⅲ-a	環礫	4.4×4.26	石囲・埋設	なし	南西		9
10	33	芳賀東部団地	J13号住居	前橋市鳥取町	E4	方形	Ⅲ-a	全面+環礫	5.7×4.7	石囲	A	南西	柄部先端縁石	9
11	34	芳賀北部団地		前橋市勝沢町									未報告6軒	10.11
12	35	田端	B区39号住居	高崎市阿久津町	堀ノ内2	不明	不明	炬～連結部	不明	石囲・埋設	なし	北西		12
12	36	田端	B区97号住居	高崎市阿久津町	堀ノ内2	不明	不明	炬～柄部	不明	石囲	なし	西北西	柄部広がる	12
13	37	万相寺	2号住居址	高崎市阿久津町	堀ノ内1	円形	Ⅲ-a	連結部+柄部	径4mほど	石囲・土器敷	なし	南東		13
14	38	大八木箱田池I	6号住居址	高崎市大八木町	E4	円形	不明	炬周辺	径7mほど	石囲	なし	南西	残存不良	14
15	39	若田	12号住居	高崎市若田町	堀ノ内	方形	Ⅲ類	環礫あり	3.5×3.2	石囲	なし	不明	連結部石囲施設	15
16	40	大島原		高崎市八幡町										16
17	41	千綱谷戸94	敷石住居跡	桐生市川内町	堀ノ内	隅丸方形	不明	全面	1辺4.5m程度	石囲	なし	不明		17
18	42	東長岡戸井口	35号住居	太田市東長岡	堀ノ内	円形	不明	不明						注1

表23 群馬県内検出の柄鏡形敷石住居一覽表-1



道路番号	住居番号	遺跡名	遺構名称	所在地	時 期	形 状	柱穴	敷 石	規 模	模 様	炉	埋 藏 設 置 位 置	柵 部 方 向	備 考	文 献 注 1
18	43	東長岡戸井口	50号住居	太田市東長岡	称名寺	円形	不明				土坑か				注1
19	44	東長岡戸井口	55号住居	太田市東長岡	称名寺	円形	Ⅲ-a	連結部			不明	A	南	土器片が圍繞。埋藏はE4。	注1
20	45	発知寺沢(仮)		沼田市池田	不明	不明	不明	不明	不明		不明	不明	不明	18	
20	46	上光寺	1号敷石住居跡	沼田市下発知	堀ノ内2	六角形	不明	全面	8×5.6程度	石囲	石囲	なし	北西	連結部立石	19
20	47	上光寺	1号敷石遺構	沼田市下発知	堀ノ内	方形	不明	全面	5×4程度	埋藏	埋藏	なし	不明	不確定	19
21	48	諏訪(仮)		沼田市沼須	不明	不明	不明	不明	不明		不明	不明	不明		20
22	49	下清水	2号住居跡	沼田市上久屋	E4	円形	不明	主体部縁石	5.7×4.4	なし	なし	D	南東		21
23	50	寺人	17号住居址	沼田市薄根	E4	円形	不明	奥壁	径3.4m	石囲	石囲	なし	不明	残存不良	22
24	51	篠尾(仮)		沼田市下川田	不明	不明	不明	不明	不明		不明	不明	不明	2軒確認のこと	20
25	52	空沢第1次	JH-1号住居跡	渋川市行幸田	E4	六角形	I-5a	全面	5.2×2.8	石囲	石囲	A	南東	連結部廊下状。石棒。	23
25	53	空沢第2次	JH-2号住居跡	渋川市行幸田	E4	六角形	Ⅱ-4	全面							24
25	54	空沢第3次	JH-24号住居跡	渋川市行幸田	E4	六角形	Ⅱ-4	全面	4.2×4.1	石囲	石囲	A	南東		25
25	55	空沢第5次	JH-26号住居跡	渋川市行幸田	E4	隅丸方形	Ⅲ-a	全面	6.3×4.3	石囲	石囲	B	南東		26
26	56	白石大御堂	第1号敷石住居跡	藤岡市白石	E4	楕円	不明	全面	5.0×3.10	石囲	石囲	B	南東	先端部埋藏は3個体	27
26	57	白石大御堂	第2号敷石住居跡	藤岡市白石	E4	円形	不明	柄部+主体部縁石	5.30×3.70	石囲	石囲	A+B	南東	埋藏正位	27
27	58	馬渡戸		藤岡市上日野	E4	不明	不明	不明	不明		不明	不明	不明		28
28	59	山間	BJ-1号住居跡	藤岡市藤岡	堀ノ内1	円形	Ⅲ-a	なし	8.4×6.5	土坑	土坑	なし	南	掘り込みなし	29
29	60	高木(仮)		藤岡市高山	不明	不明	不明	不明	不明		不明	不明	不明		28
30	61	光徳寺裏山		藤岡市山崎	E4	円形	Ⅲ-a	不明	5.42×4.90	土坑	土坑	なし	不明	S25調査	29
31	62	西原	J-4号住居跡	藤岡市篠塚	E4										29
31	63	西原	J-5号住居跡	藤岡市篠塚	E4										29
32	64	薬師裏	BJ-1号住居址	藤岡市上栗須	堀ノ内1	隅丸方形	不明	炉一柄部	5.5×3.95	石囲	石囲	なし	北		30
33	65	上栗須薬師裏	1区3号住居	藤岡市上栗須	不明	円形	不明	全面	径5.42m	石囲	石囲	なし	南西		31
33	66	上栗須薬師裏	1区6号住居	藤岡市上栗須	堀ノ内	円形	不明	全面	6.8×5.3	なし	なし	なし	南東		31
34	67	細谷戸		藤岡市上日野	堀ノ内	不明	不明	不明	不明		不明	不明	不明		28
35	68	坂野		藤岡市上日野	堀ノ内	不明	不明	炉辺部	不明		石囲・埋藏	なし	不明	S32調査	29
36	69	中大塚	1号敷石住居	藤岡市中大塚	E4	六角形	不明	全面+環礫	6.7×4.4	石囲・埋藏	石囲・埋藏	A+B	南	埋藏2基。連結部狭い廊下状。	29
37	70	平地前		藤岡市東平井											32
38	71	南蛇井増光寺	B-124号住居跡	富岡市南蛇井	E4	不明	不明	炉辺部	不明		石囲・埋藏	なし	不明	残存不良	33
38	72	南蛇井増光寺	C170号住居跡	富岡市南蛇井	E3新	隅丸方形	Ⅲ-a	全面	3.65×3.50	石囲	石囲	不明	南	柄部失	34
38	73	南蛇井増光寺	C363号住居跡	富岡市南蛇井	堀ノ内1	円形	Ⅲ-a	全面	7.0×2.8		石囲	なし	南	連結部から腕状列石延びる	34
38	74	南蛇井増光寺	C368号住居跡	富岡市南蛇井	堀ノ内2	円形	不明	全面	7.0×X	土坑	土坑	なし	南	敷石抜き取り	34
38	75	南蛇井増光寺	E22号住居跡	富岡市南蛇井	堀ノ内2	円形	不明	全面	径4.5m程度	石囲・埋藏	石囲・埋藏	D	南東	残存不良。E46号住と重複。	35
38	76	南蛇井増光寺	E46号住居跡	富岡市南蛇井	堀ノ内1	円形	不明	不明	径3.7m程度	埋藏	埋藏	なし	不明	残存不良。E22号住と重複。	35
38	77	南蛇井増光寺	C2号集石	富岡市南蛇井	E3新	不明	不明	全面	不明		石囲	B	南	連結部石囲施設(焼土)	34
38	78	南蛇井増光寺	C1号配石	富岡市南蛇井	E3新	不明	不明	不明	不明		石囲	I基	不明	残存不良。埋藏理設置不明。	34
39	79	田篠中原	1号配石遺構	富岡市田篠	E3	円形	不明	炉辺	2.75×2(残存僅)	石囲	石囲	なし	不明	掘り込みなし。柄部無し。	36
39	80	田篠中原	2号配石遺構	富岡市田篠	E3	不明	不明	炉辺	不明	土坑	土坑	D	不明	掘り込みなし。柄部無し。	36
39	81	田篠中原	5号配石遺構	富岡市田篠	E3	円形	不明	全面	3.7×3.5	石囲	石囲	D	不明	掘り込みなし。柄部無し。	36
39	82	田篠中原	8号配石遺構	富岡市田篠	E4	円形	不明	柄部+主体部縁石	3.95×2.30	石囲・埋藏	石囲・埋藏	A	南	掘り込みなし	36
39	83	田篠中原	17号配石遺構	富岡市田篠	E3	円形	不明	不明	不明	石囲	石囲	なし	不明	掘り込みなし	36
39	84	田篠中原	23号配石遺構	富岡市田篠	E4	円形	不明	柄部+主体部縁石	6.4×3.0	石囲	石囲	B	南東	埋藏2基	36

表23 群馬県内検出の柄鏡形敷石住居一覽表-2

遺跡番号	住居番号	遺跡名	遺構名称	所在地	時期	形状	柱穴	敷石	規模	炉	埋藏位置	柄部方向	備考	文献
39	85	田篠中原	26号配石遺構	富岡市田篠	E 4	不明	不明	柄部+主体部縁石	4.8×3.4	埋藏	B	南東	掘り込みなし	36
39	86	田篠中原	24号配石遺構	富岡市田篠	E 4	方形	不明	柄部+主体部縁石	7.2×3.3	不明	A+B	南東	埋藏2基	36
39	87	田篠中原	36号配石遺構	富岡市田篠	E 3	凹形小	不明	柄部+主体部縁石	6.0×3.6	石囲	A+B	北東	埋藏2基。掘り込みなし。	36
39	88	田篠中原	37号配石遺構	富岡市田篠	E 3	六角形	不明	柄部+主体部縁石	6.4×3.7	石囲	B	南東	掘り込みなし	36
39	89	田篠中原	38号配石遺構	富岡市田篠	E 3	不明	不明	不明	不明	不明	B	南東か	主体部欠。掘り込みなし。	36
40	90	内匠上之宿	7号住居跡	富岡市内匠	堀ノ内2	楕円形	Ⅲ-a	柄部	8.12×3.84	石囲	なし	西		37
40	91	内匠上之宿	20号住居跡	富岡市内匠	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	A+B	西	不確実	37
40	92	内匠上之宿	228号土坑	富岡市内匠	堀ノ内2	凹形小	不明	柄部+主体部縁石	不明	不明	なし	南東か	不確実	37
41	93	中野谷天神原	J-3号住居址	安中市中野谷	E 4	方形	不明	全面か	4.6×X	石囲か	なし	南か		38
41	94	中野谷天神原	J-4号住居址	安中市中野谷	堀ノ内1	凹形	不明	不明	6.8×5.8	土坑か	なし	南	敷石すべて抜き取り	38
41	95	中野谷天神原	J-5号住居址	安中市中野谷	称名寺Ⅱ	凹形	Ⅲ-a	柄部+環磔	7.4×4.9	埋藏か	なし	南		38
41	96	中野谷天神原	J-7号住居址	安中市中野谷	堀ノ内1	凹形	不明	炉~柄部	6.4×4.5		なし	南		38
41	97	中野谷天神原	J-8号住居址	安中市中野谷	E 4~称名寺Ⅰ	凹形	不明	炉~柄部	7.6×5.7	地床炉か	なし	南東	2軒重複。建て替えか	38
41	98	中野谷天神原	J-9号住居址	安中市中野谷	称名寺Ⅱ	凹形	Ⅲ-a	炉~柄部	7.4×X	石囲・埋藏	なし	南東		38
42	99	中野谷天畑	J-8号住居址	安中市中野谷	E 4	凹形	不明	全面か	5.2×3+α	なし	A+B	南	埋藏2基	38
43	100	中野谷下宿東	J-4号住居	安中市中野谷	堀ノ内	凹形	不明	炉~柄部	長径6m程度					39
43	101	中野谷下宿東	J-9号住居	安中市中野谷	堀ノ内	凹形	Ⅲ-a	炉~柄部	7.8×5.1	石囲				39
43	102	中野谷下宿東	J-10号住居	安中市中野谷	堀ノ内	凹形	不明	炉~柄部		石囲				39
44	103	北原	J-1号住居	安中市東上秋間	堀ノ内	凹形	Ⅲ-a	柄+縁石	6.8×4.4	石囲	B	南		40
45	104	中野谷中島	J-18号住居	安中市中野谷	E 4	凹形	不明	柄+縁石	不明	石囲	A+B	南	他に15軒	注2
46	105	野村	J-11号住居	安中市東上秋間	E 4	凹形	不明	柄+縁石	5×3.2	なし	なし	南西		注3
46	106	野村	J-12号住居	安中市東上秋間	E 3	凹形	不明	主体部縁石	5.6×3.0	石囲	A+B	南	埋藏2基	注3
46	107	野村	J-13号住居	安中市東上秋間	E 3新	凹形	不明	全面か	6.5×3.3	石囲	A	南		注3
46	108	野村	J-14号住居	安中市東上秋間	不明	凹形	不明	縁石か	径3.9m程度	石囲	なし	不明		注3
46	109	野村	J-15号住居	安中市東上秋間	E 3新	凹形小	不明	不明	5×3.4	石囲	A+B	南	埋藏2基	注3
46	110	野村	J-16号住居	安中市東上秋間	不明	不明	不明	不明	径5.8m程度	石囲	なし	不明		注3
46	111	野村	J-17号住居	安中市東上秋間	不明	不明	不明	不明	径4.8m程度	石囲	なし	不明		注3
46	112	野村	J-18号住居	安中市東上秋間	E 3新	凹形	不明	全面	6.3×3.4	石囲か	B	南		注3
46	113	野村	J-21号住居	安中市東上秋間	E 3新	凹形	不明	柄部+縁石	5.4×3.2	石囲か	A+B	南	埋藏2基	注3
46	114	野村	J-22号住居	安中市東上秋間	不明	凹形	不明	不明	5.6×3.4	石囲	B	南		注3
47	115	柳瀬畑跡		安中市原市	加善利B	不明	不明	炉辺	不明	石囲・埋藏	不明	不明	S29調査	41
48	116	小室	1号住居	北橋村小室	E 4	六角形	Ⅲ-b	全面		石囲	A	ほぼ南		42
49	117	八崎前中後	I-J-3号住居	北橋村八崎	称名寺Ⅱ	凹形	Ⅲ-a	炉辺+環磔	7×5.5	石囲	なし	西		注4
49	118	八崎前中後	II-J-1号住居	北橋村八崎	称名寺Ⅱ	凹形	Ⅲ-a	全面	8×6.5	石囲	なし	南西	連結部から腕状列石	注4
49	119	八崎前中後	II-J-3号住居	北橋村八崎	称名寺Ⅱ	凹形	不明	炉~柄部	4×3.4	石囲	なし	南西	II-J-2住と重複	注4
49	120	八崎前中後	III-J-1号住居	北橋村八崎	称名寺Ⅱ	凹形	不明	不明	不明	石囲	なし	南西		注4
49	121	八崎前中後	III-J-2号住居	北橋村八崎	称名寺Ⅱ	凹形	Ⅲ-a	環磔	不明	不明	なし	不明		注4
49	122	八崎前中後	IV-J-4号住居	北橋村八崎	称名寺Ⅱ	凹形	Ⅲ-a	柄部+環磔	6.5×5	石囲	なし	南西		注4
50	123	三原田	I-36住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	石囲	D	東か	埋藏石蓋	43.44
50	124	三原田	I-45住居	赤城村三原田	E 4	凹形	Ⅲ-a	全面か	3.0×2.9	石囲	A	南		43.44
50	125	三原田	I-48住居	赤城村三原田	称名寺Ⅰ	凹形小	不明	炉~柄部+環磔	不明	石囲	D	北か		43.44
50	126	三原田	I-56住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	石囲か	Aか	南東か		43.44

表23 群馬県内検出の柄形敷石住居一覽表-3

遺跡番号	遺跡名	遺構名称	所在地	時期	形状	柱穴	敷	石	規模	炉	埋藏位置	柄部方向	備考	文献
50 127	三原田	1-57住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	全面か	全面か	径5.0m程度	石囲	なし	南か		43.44
50 128	三原田	1-66住居	赤城村三原田	称名寺	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	Aか	南西か	埋蔵石蓋	43.44
50 129	三原田	1-73住居	赤城村三原田	E 3新	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	A	南西か		43.44
50 130	三原田	1-85住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	D	南か		43.44
50 131	三原田	2-1住居	赤城村三原田	称名寺I	方形	Ⅱ-5か	環状か	環状か	8.5×5.5	石囲	なし	南西	炉から石棒。2-16住と重複。	43.44
50 132	三原田	2-2住居	赤城村三原田	称名寺I	不明	不明	不明	不明	7×4.5程度	土坑か	なし	南西		43.44
50 133	三原田	2-9住居	赤城村三原田	E 3新	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	A	南		43.44
50 134	三原田	2-10住居	赤城村三原田	E 4	凹形か	Ⅲ-aか	柄部	柄部	7.6×5.2程度	石囲	A+B	南西	埋蔵2基	43.44
50 135	三原田	2-11住居	赤城村三原田	称名寺I	凹形か	Ⅲ-aか	不明	不明	主体部5.0m程	石囲	A	南西		43.44
50 136	三原田	2-12住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	なし	不明		43.44
50 137	三原田	2-15住居	赤城村三原田	称名寺I	不明	不明	不明	不明	5.2×4程度	石囲	A	西	2-1住と重複	43.44
50 138	三原田	2-16住居	赤城村三原田	称名寺I	不明	不明	不明	不明	不明	石囲・埋蔵	A	南		43.44
50 139	三原田	2-19住居	赤城村三原田	E 4	六角形か	不明	全面	全面	主体部3.5×4程度	石囲	A	西		43.44
50 140	三原田	2-35住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	A	西		43.44
50 141	三原田	2-57住居	赤城村三原田	称名寺Ⅱ	楕円形か	不明	全面か	全面か	8×4.8程度	不明	なし	南西	柄部広い	43.44
50 142	三原田	3-1住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲・埋蔵	D	南か	奥壁部多孔石。硬玉製大珠。	43.44
50 143	三原田	3-3住居	赤城村三原田	E 3新	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	Aか	南か		43.44
50 144	三原田	3-5住居	赤城村三原田	E 3	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	Aか	南西か		43.44
50 145	三原田	3-27住居	赤城村三原田	称名寺Ⅱ	凹形	Ⅲ-a	不明	不明	径6.0m程度	土坑か	なし	南東か	奥壁部石棒	43.44
50 146	三原田	3-34住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	D	南西か		43.44
50 147	三原田	3-47住居	赤城村三原田	E 3新	凹形か	不明	不明	不明	径4.2m程度	石囲	なし	南西		43.44
50 148	三原田	3-R1住居	赤城村三原田	不明	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	なし	不明		43.44
50 149	三原田	4-6住居	赤城村三原田	E 4	楕円形	Ⅲ-a	全面か	全面か	6.4×4.4程度	石囲	A+B	南西	埋蔵2基。奥壁部石棒。	43.44
50 150	三原田	4-15住居	赤城村三原田	E 3新	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	Aか	南西		43.44
50 151	三原田	4-16住居	赤城村三原田	不明	凹形か	不明	不明	不明	径4.6m程度	石囲	なし	不明		43.44
50 152	三原田	4-R1住居	赤城村三原田	不明	凹形か	不明	不明	不明	不明	石囲	なし	不明		43.44
50 153	三原田	5-7住居	赤城村三原田	称名寺I	六角形	不明	主体部縁石	主体部縁石	主体部4.0×4.0	石囲	なし	南西	奥壁部注口土器	43.44
50 154	三原田	5-11住居	赤城村三原田	E 3新	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	A	南か		43.44
50 155	三原田	5-19住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲・埋蔵	Aか	東か	埋蔵入れ子	43.44
50 156	三原田	6-1住居	赤城村三原田	E 4	凹形か	Ⅲ-a	不明	不明	径5.0m程度	石囲	なし	不明		43.44
50 157	三原田	6-7住居	赤城村三原田	称名寺I	凹形か	不明	柄部+主体部縁石	柄部+主体部縁石	5.8×3.3	石囲	なし	南		43.44
50 158	三原田	6-45住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	なし	南西	連結部石囲施設	43.44
50 159	三原田	7-11住居	赤城村三原田	E 3新	凹形か	Ⅲ-aか	不明	不明	径5.6m程度	石囲	なし	不明		43.44
50 160	三原田	7-29住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	D	不明		43.44
50 161	三原田	7-R4住居	赤城村三原田	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	石囲	A+B	南東	埋蔵2基	43.44
50 162	三原田	8-7住居	赤城村三原田	称名寺I	楕円形か	不明	全面か	全面か	6×3.8程度	石囲	A	南西	連結部石囲施設に埋蔵	43.44
51 163	中山の集落跡		赤城村深山	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	3軒確認とのこと	20
52 164	藤木住居跡		赤城村長井	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		28
53 165	西所替戸		富士見村小暮	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		45
54 166	陣馬・庄司原	J-5号住居	富士見村横室	称名寺I	凹形	不明	柄部全面	柄部全面	不明	土坑か	A	南西		注5
54 167	陣馬・庄司原	J-7号住居	富士見村横室	E 4	方形	Ⅲ-a	柄部+環状	柄部+環状	6.2×5.8	石囲	なし	南	奥壁部は河原石で間隔があく	注5
55 168	西小路	6号住居	大胡町茂木	E 4	隅丸方形	不明	奥壁~柄部	奥壁~柄部	6.95×5.0	石囲	なし	南東	奥壁に大石棒	46

表23 群馬県内検出の柄鏡形敷石住居一覽表-4

遺跡番号	住居番号	遺跡名	遺構名称	所在地	時期	形状	柱穴	敷石	石	規模	炉	埋設位置	柄部方向	備考	文献
55	169	西小路	7号住居	大胡町茂木	E 4	円形	不明	全面か	全面か	6.4×5.5	石囲	A+B	南	埋設2基。先端部埋設は石蓋。	46
56	170	天神A		大胡町茂木											47
57	171	市之関前田	SI13	宮城市市之関	E 4	円形	Ⅲ-a	全面	全面	4.5×3	石囲	なし	南	連結部石囲施設に埋設	注6
57	172	市之関前田	SI33	宮城市市之関	E 4	不明	Ⅲ-a	全面	全面	5.7×3.6	石囲	A	東	連結部石囲施設	注6
57	173	市之関前田	SI35	宮城市市之関	E 4	楕円	Ⅲ-a	炬～柄部	炬～柄部	5.8×5.2	石囲		南	連結部石囲施設	注6
57	174	市之関前田	SI36	宮城市市之関	E 4	円形	Ⅲ-a	中央部+柄部	中央部+柄部	6×3.8	石囲	A+B	南	埋設2基	注6
57	175	市之関前田	SI38	宮城市市之関	E 4	円形	Ⅲ-a	不明	不明	4×3.6	石囲	なし	不明		注6
58	176	安通	1号敷石住居	柏川村室沢	称名寺Ⅱ	五角形	不明	全面	全面	6.3×5.0		なし	不明	張出部縁石	48
59	177	後原		柏川村深津											10
60	178	上鶴ヶ谷	1号配石遺構	新里村鶴ヶ谷	堀ノ内	不明	不明	炬～柄部か	炬～柄部か	不明	石囲	なし	南東か	残存不良	49
60	179	上鶴ヶ谷	5号配石遺構	新里村鶴ヶ谷	堀ノ内	円形か	不明	環状か	環状か	径4.3m程度	不明	なし	不明	環状配石か	49
60	180	上鶴ヶ谷	8号配石	新里村鶴ヶ谷	堀ノ内Ⅰ	円形か	不明	主体部縁石か	主体部縁石か	径6.0m程度	なし	なし	不明		49
61	181	大屋H		新里村新川											50
62	182	白川笹塚	9号住居址	榛名町白岩	E 4	方形か	不明	全面か	全面か		石囲・埋設	なし	南		注7
63	183	高浜広神	13号住居	榛名町高浜	E 4	円形か	不明	全面か	全面か	5×4.1程度	石囲	A	南西		51
63	184	高浜広神	23号住居	榛名町高浜	E 4	円形	Ⅱ類か	全面か	全面か	5.85×4.3	石囲	A	南	埋設石蓋	51
64	185	高権		榛名町下室田	堀ノ内Ⅰ	不明	不明	炬辺か	炬辺か	不明	石囲	なし	不明	S32調査	41
65	186	川浦(仮)		倉淵村川浦	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		52
66	187	長井敷石住居跡		倉淵村権田	堀ノ内	方形	不明	全面	全面	3×2.8	石囲・方形	なし	西か	連結部石囲施設	52.53
67	188	白川傘松	Ⅱ区1号住居址	箕郷町白川	E 4	方形	Ⅲ-a	全面か	全面か	5.7×3.8	石囲	A+B	東	埋設2基	54
67	189	白川傘松	Ⅱ区8号住居址	箕郷町白川	E 3	円形か	不明	不明	不明	径5m程度	不明	なし	南か		54
67	190	白川傘松	Ⅱ区9号住居址	箕郷町白川	E 4	円形	不明	不明	不明	7.3×4.5程	石囲	なし	南		54
67	191	白川傘松	Ⅱ区10号住居址	箕郷町白川	E 4	円形	不明	炬辺	炬辺	径3.5m程	石囲	Aか	南東		54
67	192	白川傘松	Ⅱ区11号住居址	箕郷町白川	E 3	円形	不明	不明	不明	不明	石囲	Aか	南か	残存不良	54
68	193	保渡田Ⅱ	1号住居址	群馬町保渡田	E 4	楕円	不明	全面	全面	不明	石囲・土器敷	なし	西か		55
69	194	丸子山	D区3号住居	子持村北牧	称名寺Ⅱ	楕円	不明	柄部+奥壁	柄部+奥壁	主体部3.8×3.2	石囲・埋設	なし	南西	斜面を掘り込んで構築	注8
70	195	薬師(仮)		伊香保町	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	伊香保町誌	56
71	196	新井第Ⅱ	敷石遺構	榛東村新井	後期	方形か	不明	全面か	全面か	不明	不明	不明	不明		57
72	197	茅野		榛東村											58
73	198	坂原	石組遺構	鬼石町	E 4か	不明	不明	不明	不明	2.5×2.0(残存)	不明	なし	不明	S43	59
74	199	保美露山	第1号住居址	鬼石町	不明	楕円形か	不明	不明	不明	4.8×4.3	石囲	なし	不明	S43	59
75	200	金剛寺下		鬼石町	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		60
76	201	謙原		鬼石町美原	堀ノ内Ⅰ	円形	不明	炬辺+環状	炬辺+環状	4.2×3.6	石囲	なし	不明	S12発見	41
77	202	橋下		鬼石町	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		60
78	203	八塩		鬼石町	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		60
79	204	神保比良(仮)		吉井町神保	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		61
80	205	神ヶ原		中里村神ヶ原	後期初頭									S39調査	62
81	206	下鎌田	44号住居跡	下仁田町馬山	E 3	円形	不明	柄部	柄部	不明	石囲	なし	東		63
81	207	下鎌田	47号住居跡	下仁田町馬山	E 4	円形	不明	全面か	全面か	5.65×4.95	石囲炉	なし	南東		63
81	208	下鎌田	111号住居跡	下仁田町馬山	E 4	円形	不明	全面か	全面か	主体部5m四方	石囲	A	南東か		63
82	209	白倉下原	A区37号住居	甘栗町白倉	堀ノ内Ⅰ	隅丸方形	不明	全面か	全面か	4.51×2.96	埋設	なし	北		64
82	210	白倉下原	A区97号住居	甘栗町白倉	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ類か	不明	不明	径4.9m程度	埋設	なし	不明	同時期の住居と重複	64

表23 群馬県内検出の柄鏡形敷石住居一覧表-5

遺跡番号	住居番号	遺跡名	遺構名称	所在地	時期	形状	柱穴	敷	石	規模	炉	埋設位置	柄部方向	備考	文献
82	211	白倉下原	B区26号住居	甘楽町白倉	E 4	五角形	Ⅱ-5	全面	石	6.48×3.88	石囲	なし	南	連結部石囲施設	64
82	212	白倉下原	B区89号住居	甘楽町白倉	E 4	不明	不明	柄部	土坑	不明	土坑	A+B	南東	連結部埋入れ子。柄部埋設2基。	64
82	213	白倉下原	C区76号住居	甘楽町白倉	堀ノ内1	円形	不明	柄部	土坑	6.23×3.52	土坑	なし	西		64
82	214	白倉下原	C区77号住居	甘楽町白倉	堀ノ内1	円形	不明	如辺+柄部小	石囲・埋設	4.99×3.47	石囲・埋設	なし	南西		64
83	215	行田梅木平	10号住居跡	松井田町行田	称名寺Ⅱ	円形	Ⅱ-4か	如~柄部小	石囲	8.1×5.2	石囲	なし	南東		65
83	216	行田梅木平	65号住居跡	松井田町行田	E 3新	円形	Ⅰ-4か	如~柄部小	なし	5.55×3.25	なし	なし	東		65
83	217	行田梅木平	61号住居跡	松井田町行田	E 4	円形	不明	全面か	石囲	5.95×3.70	石囲	A+B	南西	埋設2基	65
84	218	新堀東源ヶ原	183号住居跡	松井田町新堀	E 4	円形	不明	全面か	不明	7.7×X	B	A	南東		66
85	219	行田大道北		松井田町行田	後期初頭	円形	Ⅲ-aか	全面	石囲	主体部径5m程	石囲	なし	不明	連結部石囲施設	67
86	220	入山仁田	01号住居跡	松井田町入山	E 4	不明	不明	全面か	石囲・方形	径2.4mか	石囲・方形	なし	不明		68
86	221	入山仁田	03号住居跡	松井田町入山	称名寺Ⅱ	不明	Ⅲ-aか	不明	石囲・方形	半径2.5mか	石囲・方形	D	南東	連結部石囲施設(被熱)	68
86	222	入山仁田	08号住居跡	松井田町入山	称名寺Ⅱ	円形	不明	全面か	土坑	径4.75m	土坑	なし	南	連結部にピット	68
86	223	入山仁田	10号住居跡	松井田町入山	称名寺Ⅱ	円形	不明	柄部全面+中央部	埋設	5.54×3.85	埋設	なし	東	連結部ピット	68
87	224	入山藤井	01号住居跡	松井田町入山	E 4	円形	不明	全面か	石囲・埋設	径4.3m	石囲・埋設	なし	南東	連結部石囲施設	68
88	225	二軒在家二本杉	2号住居跡	松井田町二軒在家	堀ノ内	円形	不明	如~柄部	石囲・埋設	6.0×3.7	石囲・埋設	なし	南南東	柄部立石	69
89	226	国衛朝日		松井田町国衛	称名寺	六角形	不明	柄部+環状	不明	8.9×6.3	不明	なし	南東		注9
90	227	下増田上田中		松井田町下増田	不明	六角形	不明	柄部+緑石	石囲	不明	石囲	B	南東		注9
91	228	坂本北裏		松井田町坂本	不明	六角形	不明	全面か	石囲	3.71×3.75(主体部)	石囲	なし	南東		注9
92	229	久森	1号住居	中之条町上沢渡	E 4	六角形	不明	全面か	方形・土坑	4.2×4.2	方形・土坑	B	南西		70
92	230	久森	2号住居	中之条町上沢渡	E 4	八角形	不明	全面か	石囲・方形	3.42×4.26	石囲・方形	D	南西		70
92	231	久森	3号住居	中之条町上沢渡	E 4	六角形	不明	全面か	埋設	4.24×4.4	埋設	B	南西	埋設2基。石蓋あり。	70
93	232	四万途中	第1号住居跡	中之条町四万	E 4か	隅丸方形	不明	全面か	石囲	3.3×3.1	石囲	なし	不明		71
94	233	棚泉戸		中之条町沢渡	不明	不明	不明	全面か	石囲	不明	石囲	なし	不明		71
95	234	清水		中之条町山田	堀ノ内	不明	不明	如周辺か	石囲・円形	不明	石囲・円形	なし	不明	祭壇3基と石組みの報告	72
96	235	宿制	10号住居址	中之条町大塚	E 4	円形	不明	不明	石囲	5.6×5.7	石囲	A	南		73
96	236	宿制	11号住居址	中之条町大塚	E 4	円形	不明	不明	石囲	5.3×4.4+α	石囲	A	南西		73
96	237	宿制	12号住居址	中之条町大塚	E 4	円形	不明	不明	石囲か	3.8×4.5	石囲か	A	南	埋設逆位	73
97	238	郷原	J-6号住居	吾妻町郷原	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	不明	なし	不明	残存不良	74
98	239	玉科		吾妻町深沢	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		28
99	240	堀井戸		吾妻町森生	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		28
100	241	櫛Ⅱ	1号住居	長野原町	堀ノ内1	円形	不明	全面	不明	不明	不明	なし	南	残存1/2	75
100	242	櫛Ⅱ	2号住居	長野原町	堀ノ内1	円形	不明	不明	不明	径6.0m	不明	なし	南	残存不良	75
100	243	櫛Ⅱ	3号住居	長野原町	堀ノ内1	隅丸方形	不明	不明	不明	不明	不明	なし	不明	残存不良	75
100	244	櫛Ⅱ	4号住居	長野原町	堀ノ内1	円形	不明	不明	不明	不明	不明	なし	不明	残存不良	75
101	245	長野原一本松	5-10号住居	長野原町一本松	堀ノ内か	円形	不明	如~柄部	不明	3.5×X	不明	なし	南	緑石のみ。残存不良。	75
101	246	長野原一本松	5-22号住居	長野原町一本松	堀ノ内か	円形	不明	主体部緑石	石囲か	径4.0m程度	石囲か	A	不明		注10
101	247	長野原一本松	6-3号住居	長野原町一本松	E 4	円形	不明	全面か	石囲	径2.5m程度	石囲	なし	南西		注10
102	248	向原	区2号住居址	長野原町	堀ノ内1	円形	不明	全面か	石囲	主体部4.8×4.8程度	石囲	なし	南		注10
102	249	向原	C区6号住居址	長野原町	E 4か	六角形	不明	全面	石囲	主体部5.0×4.7	石囲	なし	北東	連結部石囲施設	76
103	250	滝原Ⅲ	1号住居跡	長野原町	E 4	不明	不明	不明	石囲	不明	石囲	なし	南東	連結部石囲施設。中に土器。	77
104	251	坪井	敷石住居	長野原町	E 4か	円形	Ⅲ-aか	全面か	石囲	6.4×5.2程度	石囲	なし	南東	柄部緑石	78
105	252	古屋敷住居址		長野原町応桑	堀ノ内か	方形	Ⅰ-4か	全面か	石囲か	2.7×2.7	石囲か	不明	不明	S34発掘	79

表23 群馬県内検出の柄鏡形敷石住居一覽表-6

遺跡番号	住居番号	遺跡名	遺構名称	所在地	時期	形状	柱穴	敷石	規模	炉	埋設位置	柄部方向	備考	文献
106	253	横壁中村	19-X-24-a号住居	長野原町横壁	E 4									注11
106	254	横壁中村	28-W-3-a号住居	長野原町横壁	堀ノ内1									注11
106	255	横壁中村	29-B-1-a号住居	長野原町横壁	堀ノ内1									注11
106	256	横壁中村	29-B-2-a号住居	長野原町横壁	称名寺									注11
106	257	横壁中村	29-B-4-b号住居	長野原町横壁	称名寺									注11
106	258	横壁中村	29-B-5-a号住居	長野原町横壁	称名寺~堀ノ内									注11
106	259	横壁中村	29-E-3-a号住居	長野原町横壁	E 4									注11
106	260	横壁中村	29-E-6-a号住居	長野原町横壁	称名寺									注11
106	261	横壁中村	30-F-1-a号住居	長野原町横壁	堀ノ内小									注11
107	262	今井東平	敷石住居状遺構	孺恋村今井										注11
108	263	赤岩(仮)		六合村赤岩	不明	不明	不明	不明	不明	石囲埋巻	なし	南か	連結部石囲施設	80
109	264	中山	1号住居	高山村中山	E 4	六角形	I-5a	全面	5.5×3.4	石囲	なし	西	連結部石囲施設	72
110	265	寺谷	10号住居址	白沢村下古語父	E 4	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	覆巻の記載あり	81
111	266	高平		白沢村高平	堀ノ内小	六角形	不明	環鑿+一部	径4m程度	不明	不明	不明	S31調査。連結部に何らかの施設。	82
112	267	高泉石器時代跡		利根村根利	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		20
113	268	土出北原		片品村土出	堀ノ内	円形か	不明	全面	8.9×5.8	土坑	なし	南西		注12
114	269	宮山(仮)		川場村生品	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		20
115	270	梨ノ木平	1号住居	月夜野町月夜野	E 4	五角形	I-5a	全面	5.9×4.4	石囲	A	南		83
116	271	大穴石器時代住居		水上町大久保		長方形	不明	全面か	4.5×3.6	石囲	不明	不明	S12発掘	10.84
117	272	乾田		水上町小仁田		円形	不明	炉辺	1.9×1.4(残存)	石囲	D	不明	S10発掘	10.84
118	274	布施		新治村布施	堀ノ内小	円形	不明	環鑿+炉辺か	径3m程度	石囲	不明	不明	S34調査	82
119	275	糸井太夫	7号住居跡	昭和村糸井	堀ノ内2	不明	不明	全面か	径5.6m程度	石囲	なし	不明	S32調査	41
119	276	糸井太夫	8号住居跡	昭和村糸井	称名寺I	円形	不明	全面	6.9×4.2	石囲	A	西	埋巻正位	86
119	277	糸井太夫	9号住居跡	昭和村糸井	堀ノ内2	円形	不明	炉~柄部	7+α×4.8	石囲	方形	西	未報告8軒	86
120	278	五目牛洞山	2号住居	赤堀町五目牛	称名寺I	六角形	不明	全面	4.2×2.7	石囲	方形	南西	炉壁に石棒。柄部側に石敷き。	87
121	279	今井柳田	18号住居	赤堀町今井	後期	円形	不明	環鑿+右奥	径3.7m	土坑	なし	南東	連結部かまち状配石で区画	86
121	280	今井柳田	26号住居	赤堀町今井	称名寺I	円形	不明	炉~柄部	4.7×5.0	石囲	方形	南東	柄部1.6×1.2	88
122	281	曲沢	2号住居	赤堀町曲沢	後期	円形	不明	不明	4.35×5.3	方形土坑	なし		石棒破片	88
122	282	曲沢	6号住居	赤堀町曲沢		円形			4.6×4.5	石囲				89
122	283	曲沢	17号住居	赤堀町曲沢	堀ノ内1	円形				石囲				89
122	284	曲沢	26号住居	赤堀町曲沢	E 4	円形				石囲				89
122	285	曲沢	27号住居	赤堀町曲沢		円形				石囲				89
122	286	曲沢	47号住居	赤堀町曲沢		円形				石囲				89
122	287	曲沢	13号住居	赤堀町曲沢		楕円形				石囲				89
122	288	曲沢	52号住居	赤堀町曲沢		円形				石囲				89
122	289	曲沢	64号住居	赤堀町曲沢		円形				石囲				89
122	290	曲沢	109号住居	赤堀町曲沢		円形				石囲				89
122	291	曲沢	111号住居	赤堀町曲沢		円形				土坑				89
122	292	曲沢	116号住居	赤堀町曲沢		円形				石囲				89
123	293	社北第II		赤堀町野										50
124	294	東村曲沢	5号住居	佐波郡東村曲沢	称名寺I	円形	III-a	不明	8×7.6	石囲	なし	不明		90

表23 群馬県内検出の柄鏡形敷石住居一覧表-7

遺跡番号	遺跡名	遺構名称	所在地	時期	形状	柱穴	敷	石	規	模	炉	埋設位置	柄部方向	備	考	文献
125	北米岡G	2号配石	境町	堀之内Ⅱか	円形	Ⅲ-a	全面				石囲	なし	南東			72,91
126	一丁目	J-6号住居跡	新田町大根	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	柄部		5.9×4.2		石囲	なし	南東	連結部狭い		92
127	北宿観音前	A-5号住居	新田町大根	称名寺Ⅰ	円形	Ⅲ-a	柄部		6.27×4.10		土坑	A+B	南西	埋設2基		93
128	上江田西田	2号住居跡	新田町上江田	後期初頭	円形か	不明	柄部		径4m程度		石囲埋設	なし	不明			94
129	中原	D-6-1号住居	藪塚本町藪塚	堀ノ内	六角形	不明	全面(柄部失)		径3.2m		石囲方形	なし	南	連結部石囲施設		95
130	阿佐美	2号住居址	笠懸町阿佐美	不明	方形か	不明	柄部+主体部縁石		5.3×X		石囲	A	北東			96
131	阿佐美第8次		笠懸町阿佐美	称名寺か	不明	不明	不明		不明		不明	不明	不明			97
132	沢田		笠懸町阿佐美													98
133	瀬戸ヶ原A区	J-6号住居跡	大間々町桐原	E 4	円形	Ⅱ-5か	柄部+縁石か		6.9×4.5		石囲	D	南			99
134	三ツ子沢中	1号住居	榛名町三ツ子沢	E 4	円形か	Ⅲ-a	裏壁か		4.8×4.6		石囲か	不明	不明			本誌
134	三ツ子沢中	16号住居	榛名町三ツ子沢	称名寺Ⅱ	円形	Ⅲ-a	全面か		5.4×4.1		石囲	D	南	連結部石囲施設		本誌
134	三ツ子沢中	18号住居	榛名町三ツ子沢	E 4~称名寺Ⅰ	円形	Ⅲ-a	環礫+一部		6.18×4.03		石囲	Aか	南	焼失住居		本誌
134	三ツ子沢中	36号住居	榛名町三ツ子沢	E 4	隅丸方形	不明	全面+環礫		径3.3m程度		石囲	不明	不明			本誌
134	三ツ子沢中	45号住居	榛名町三ツ子沢	堀之内Ⅰ	円形	Ⅲ-a	環礫		10.3×7.0		土坑か	Aか	南東			本誌

表23 群馬県内検出の柄鏡形敷石住居一覧表-8

## その他参考文献

- 秋田かな子「柄鏡形住居の一構造 張出部をめぐる空間処遇の理解」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第6集 1995
- 石井寛「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』9 1998
- 上野佳也「敷石遺構の性格」『論争学説 日本の考古学』2 1988
- 江坂輝彌「配石遺構とは」『考古学ジャーナル』No.254 1985
- 郷田良一「いわゆる「柄鏡形住居址」について」『研究紀要』7 千葉県文化財センター 1982
- 鈴木秀雄「埼玉県内における柄鏡形住居の地域的様相(その1)」『研究紀要』第13号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997
- 鈴木保彦「環礫方形配石遺構の研究」『考古学雑誌』第62巻第1号 日本考古学会 1976
- 村田文夫「続・柄鏡形住居址考」『考古学ジャーナル』No.170 1979
- 村田文夫「柄鏡形住居址考」『古代文化』第25巻 4号 1975
- 本橋恵美子「縄文時代の柄鏡形敷石住居址の発生について」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第6集 1995
- 本橋恵美子「縄文時代における柄鏡形住居址の研究(1)(2)」『信濃』第40巻 8.9号 1988
- 森 貢喜「縄文時代における敷石遺構について」『福島考古』第15号 1974
- 山本暉久「石柱・石壇をもつ住居址の性格」『日本考古学』第1号 1994
- 山本暉久「敷石住居終焉のもつ意味(1)(2)(3)(4)」『古代文化』第39巻 1号~4号 1987
- 山本暉久「柄鏡形(敷石)住居と石棒祭祀」『縄文時代』7 1996
- 山本暉久「敷石住居出現のもつ意味 上・下」『古代文化』第28巻 2.3号 1976
- 山本暉久「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考古』第9号 神奈川考古同人会 1980
- 神奈川県立埋蔵文化財センター かながわ考古学財団『パネルディスカッション 敷石住居の謎に迫る 記録集』1997
- 敷石住居検出事例参考文献
- 1 「横俵遺跡群Ⅱ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
  - 2 「芳賀北曲輪遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990
  - 3 「荒砥前原遺跡・赤石城址」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
  - 4 「前橋市史」前橋市史編纂委員会 1973
  - 5 「小神明遺跡群Ⅳ 湯気遺跡 九料遺跡」前橋市教委 1986
  - 6 「今井白山遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
  - 7 「荒砥二之堰遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
  - 8 「熊野谷遺跡」前橋市教委 1989
  - 9 「芳賀東部団地遺跡Ⅲ」前橋市教委 1990
  - 10 「群馬県遺跡大事典」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
  - 11 「文化財調査報告書」第5集 前橋市教委 1975
  - 12 「田端遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
  - 13 「万相寺遺跡」高崎市教委 1985
  - 14 「大八木箱田池Ⅰ遺跡」高崎市教委 1983
  - 15 「まえあし」第11号 東国古文化研究所 1971
  - 16 「日本考古学年報」28 日本考古学会 1977
  - 17 「平成6年度発掘調査概報」桐生市教委 1995
  - 18 「池田村史」池田村史編纂委員会 1952
  - 19 「発知南部地区遺跡群 上光寺遺跡」沼田市教委 1996
  - 20 「遺跡台帳 東毛編」群馬県教委 1972
  - 21 「上久屋地区遺跡群」沼田市教委 1993
  - 22 「寺入遺跡」沼田市教委 1987
  - 23 「空沢遺跡 第1次」渋川市教委 1978
  - 24 「空沢遺跡 第2次」渋川市教委 1980
  - 25 「空沢遺跡 第3次」渋川市教委 1982
  - 26 「空沢遺跡 第5次」渋川市教委 1985
  - 27 「白石大御堂遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
  - 28 「群馬の遺跡」群馬県教委 1964
  - 29 「藤岡市史 資料編」藤岡市史編纂委員会 1993
  - 30 「小野西部地区遺跡群」藤岡市教委 1990
  - 31 「上栗須寺前遺跡群2」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
  - 32 「年報」16 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
  - 33 「南蛇井増光寺遺跡Ⅰ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
  - 34 「南蛇井増光寺遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
  - 35 「南蛇井増光寺遺跡Ⅴ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
  - 36 「田篠中原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
  - 37 「内匠上之宿遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
  - 38 「中野谷地区遺跡群」安中市教委 1994
  - 39 「中野谷地区遺跡群発掘調査概報」安中市教委 1993
  - 40 「北原遺跡」安中市教委 1996
  - 41 「先史遺跡考」みやま文庫52 みやま文庫 1973
  - 42 「小室遺跡」北橋村教委 1968
  - 43 「三原田遺跡」第2巻 群馬県企業局 1990
  - 44 「三原田遺跡 住居編」群馬県企業局 1980
  - 45 「富士見村誌」富士見村教委 1974
  - 46 「西小路遺跡」大胡町教委 1994
  - 47 72と同じ
  - 48 「稲荷山K1・安通・洞A3遺跡」粕川村教委 1981
  - 49 「上鶴ヶ谷遺跡」新里村教委 1982
  - 50 「年報」17 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
  - 51 「高浜広神遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
  - 52 「倉湖村誌」倉湖村誌編集委員会 1975
  - 53 「権田敷石住居跡報告」上毛史学5 1954
  - 54 「白川傘松遺跡 遺構編」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
  - 55 「昭和56年度埋蔵文化財調査略報」群馬町教委 1982
  - 56 「伊香保誌」伊香保町役場 1970
  - 57 「新井第Ⅱ地区遺跡群発掘調査概報」榛東村教委 1985
  - 58 「茅野遺跡概報」榛東村教委 1991
  - 59 「下久保ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書」下久保ダム埋蔵文化財調査委員会 1968
  - 60 「鬼石町誌」鬼石町教委 1974
  - 61 「遺跡台帳 西毛編」群馬県教委 1972
  - 62 「尾崎研究室研究調査報告第3輯」群馬大学尾崎研究室 1969
  - 63 「下鎌田遺跡」下仁田町遺跡調査会 1997
  - 64 「白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
  - 65 「行田梅木平遺跡」松井田町遺跡調査会 1997
  - 66 「新堀東源ヶ原遺跡」松井田町遺跡調査会 1997
  - 67 「西毛の古代」山武考古学研究所 1996
  - 68 「仁田遺跡・暮井遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
  - 69 「二軒在家二本杉遺跡」松井田町教委 1992
  - 70 「上沢渡遺跡群 久森遺跡」中之条町教委 1985
  - 71 「中之条町誌」1 中之条町誌編纂委員会 1976
  - 72 「群馬県史 資料編」1 群馬県史編纂委員会 1988
  - 73 「大塚遺跡群 宿制遺跡」中之条町教委 1985
  - 74 「郷原遺跡」吾妻町教委 1985
  - 75 「櫛Ⅱ遺跡」長野原町教委 1990
  - 76 「向原遺跡」長野原町教委 1996
  - 77 「滝原Ⅲ遺跡」長野原町教委 1997



## 第6章 調査の成果とまとめ

- 78 「坪井遺跡Ⅱ発掘調査概要」 長野原町教委 1998
- 79 「長野原町誌」 長野原町 1976
- 80 現地説明会資料 孺恋村教委 1997
- 81 「寺谷遺跡発掘調査報告書」 白沢村教委 1980
- 82 「コイノス」XIV 群馬大学歴史研究部 1959
- 83 「梨の木平遺跡」 群馬県教委 1977
- 84 「上毛及上毛人」第240号 上毛郷土史研究会 1937
- 85 「毛野」第2号 毛野研究会 1931
- 86 「糸井太夫遺跡」 昭和村教委 1995
- 87 「五目牛洞山遺跡発掘調査概報」 赤堀町教委 1980
- 88 「今井柳田遺跡発掘調査概報」 赤堀町教委 1982
- 89 「曲沢遺跡発掘調査概報」1.2 赤堀町教委 1979. 1980
- 90 「東村曲沢遺跡」 佐波郡東村教委 1979
- 91 「境町北米岡G・H地点遺跡発掘調査報告書」 境町教委 1976
- 92 「大根南遺跡群」 新田町教委 1993
- 93 「北宿・観音前遺跡」 新田町教委 1993
- 94 「年報」14 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 95 「中原遺跡」 蕨塚本町教委 1986
- 96 「笠懸村の原始古代」 笠懸村教委 1983
- 97 「笠懸町内遺跡Ⅱ」 笠懸町教委 1995
- 98 「笠懸町内遺跡Ⅰ」 笠懸町教委 1993
- 99 「瀬戸ヶ原遺跡A区」 大間々町教委 1999

注1 木津博明氏ご教示による。

注2 井上慎也氏ご教示による。

注3 千田茂雄氏ご教示による。

注4 長谷川福次氏ご教示による。

注5 福田貫之氏ご教示による。

注6 小川卓也氏ご教示による。

注7 関根慎二氏ご教示による。

注8 石井克己氏ご教示による。

注9 壁伸明氏ご教示による。

注10 諸田康成氏ご教示による。

注11 調査担当者からのご教示による。

注12 水田稔氏、桜岡正信氏ご教示による。

## 発掘調査報告書抄録

ふりがな	みつござわなかいせき						
書名	三ツ子沢中遺跡						
副書名	北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第12集						
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告						
シリーズ番号	第260集						
編集者	池田政志						
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511						
発行年月日	2000年3月25日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号				
みつござわなかいせき 三ツ子沢中	群馬県群馬郡榛名町 大字三ツ子沢	10321	00379	36°22'21" 138°55'27"	19940401 } 19950814	6,485	鉄道（北陸新幹線） 建設に伴う事前調査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
	集落	旧石器	文化層1面	石器	541点	AT層直下	
		縄文	前期住居9軒 中期中葉住居1軒 中期後半住居7軒 後期前半住居2軒 不明1軒 土坑158基	土器・石器		早期初頭土器	
		弥生	後期住居5軒 土坑7基	蛇紋岩製玉斧		うち敷石住居5軒	
		古墳	後期住居9軒	土器・石器		埋没土中にAs-Cの純層を含む住居	
		平安	後期住居14軒 土坑8基	土師器・須恵器		住居から金銅製耳環	
	祭祀	江戸	墓坑1基	土師器・須恵器・灰釉陶器		陶器皿・古銭	



# 写 真 图 版





遺跡から榛名山を望む



旧石器出土状況



旧石器出土状況



旧石器出土土層断面



旧石器出土状況



旧石器出土状況



旧石器出土状況



旧石器出土状況



旧石器出土状況

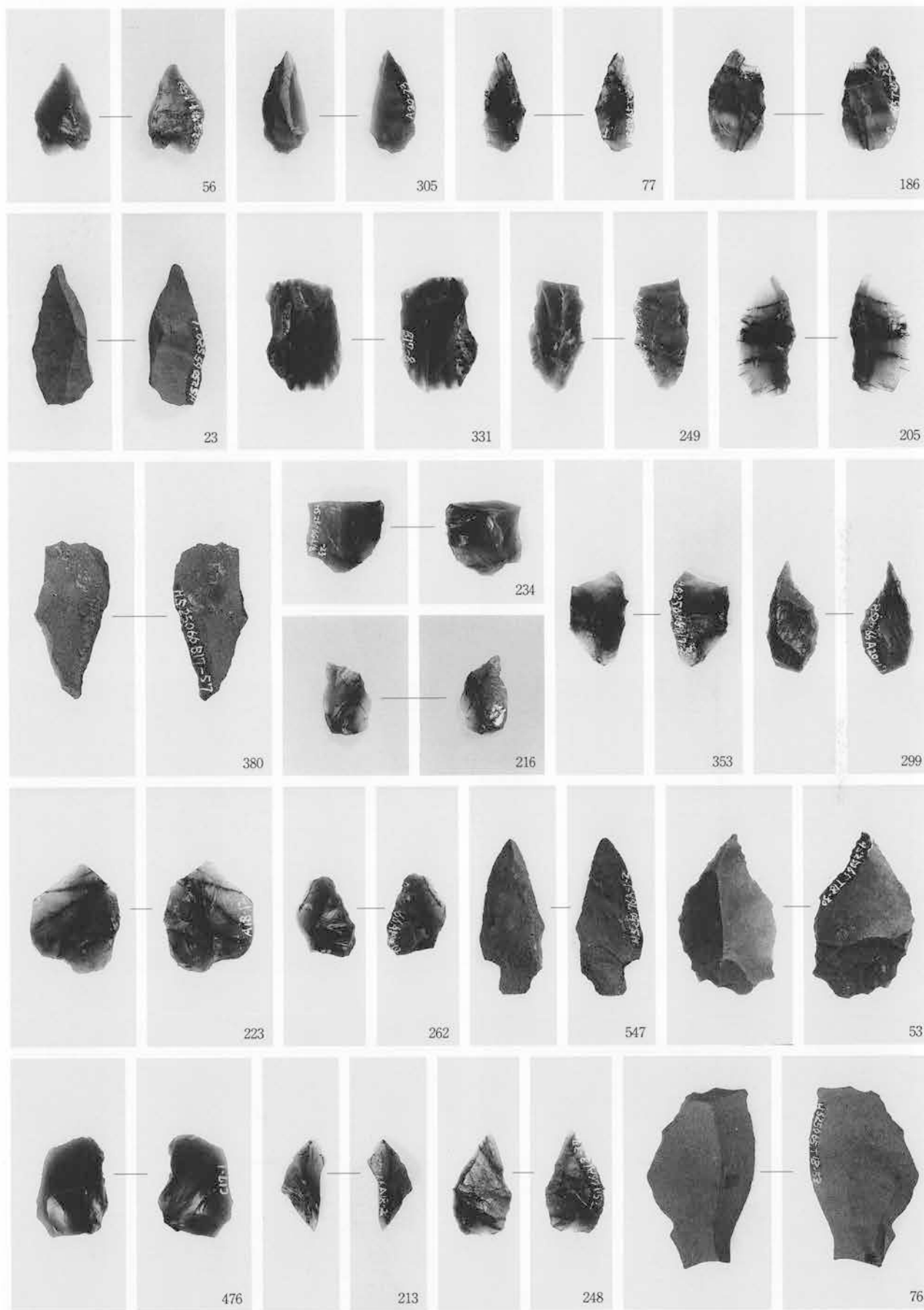


旧石器出土状況

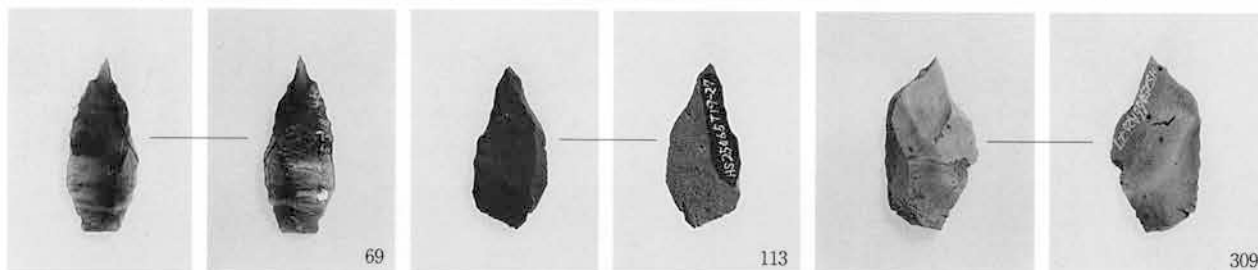


旧石器調査風景

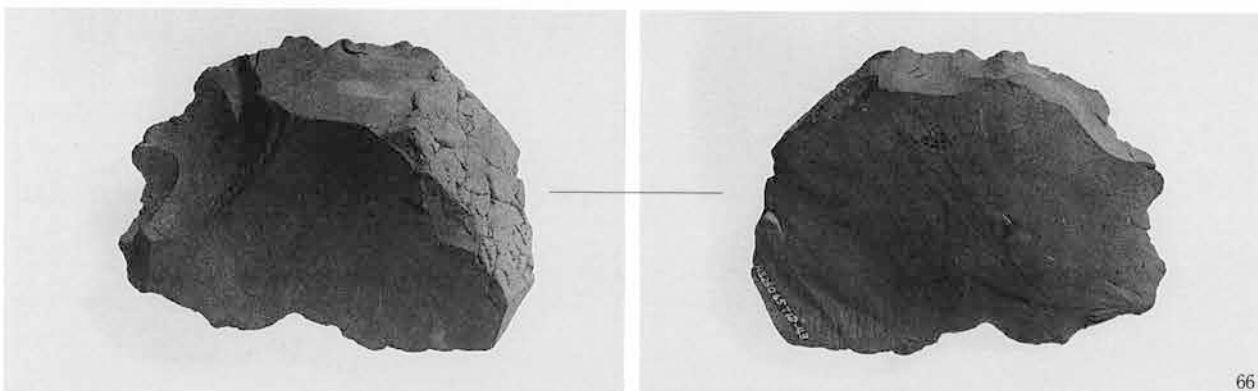
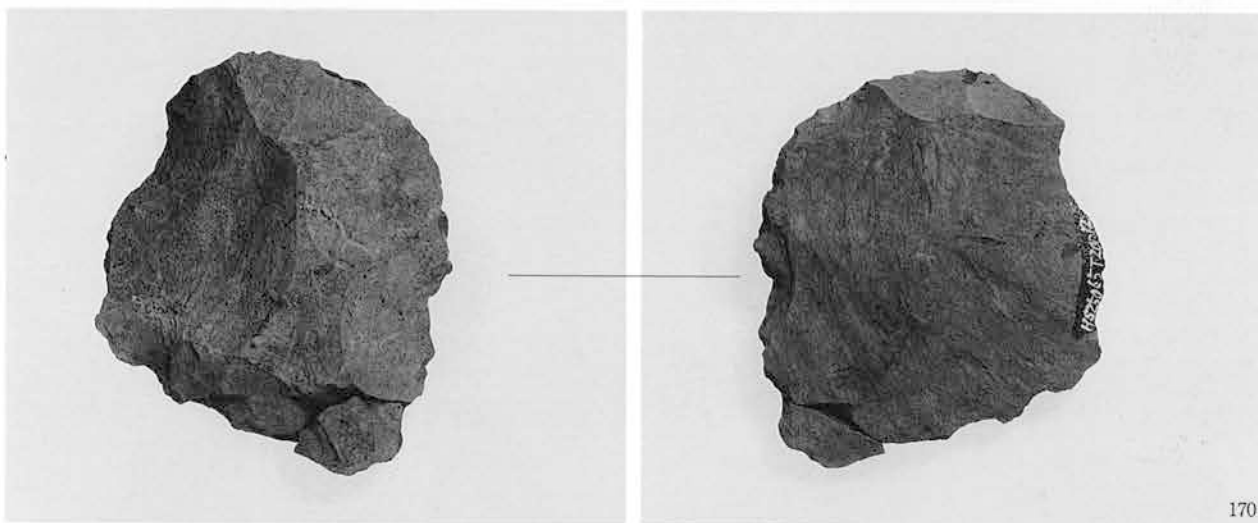
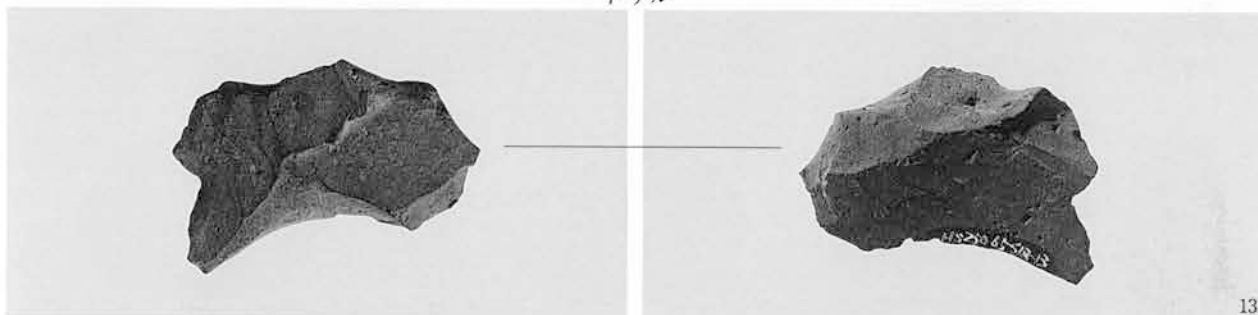




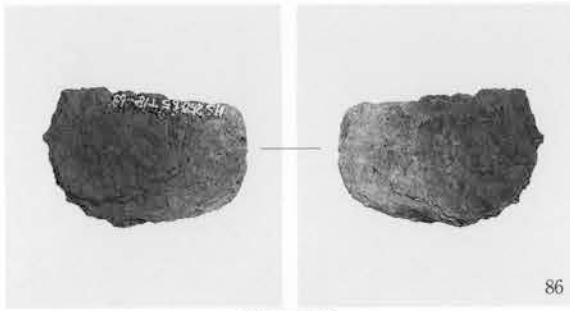
ナイフ形石器



ドリル

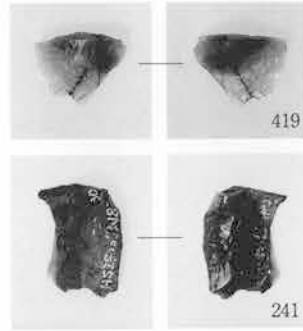


スクレイパー



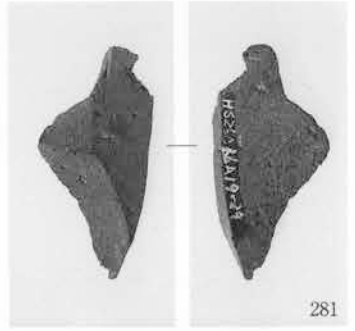
86

磨製石斧



419

241



281



395

285

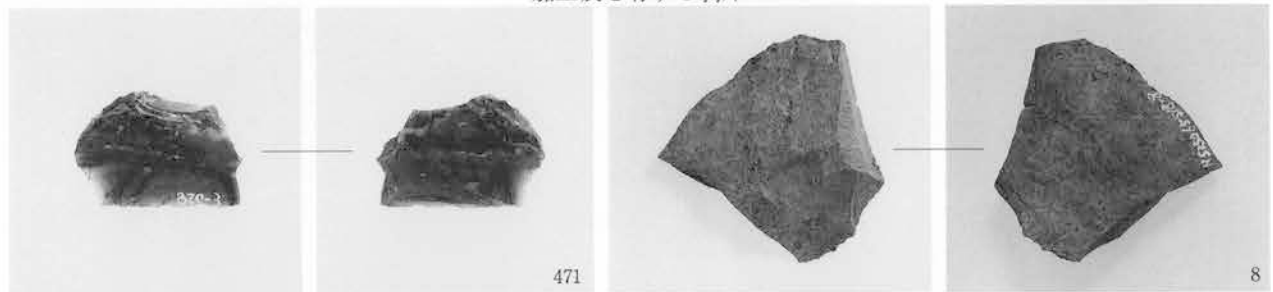
303



265

219

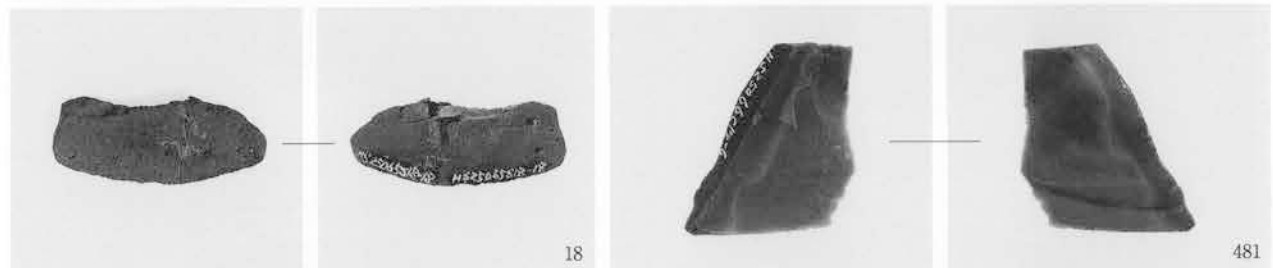
加工痕を有する剥片



370-3

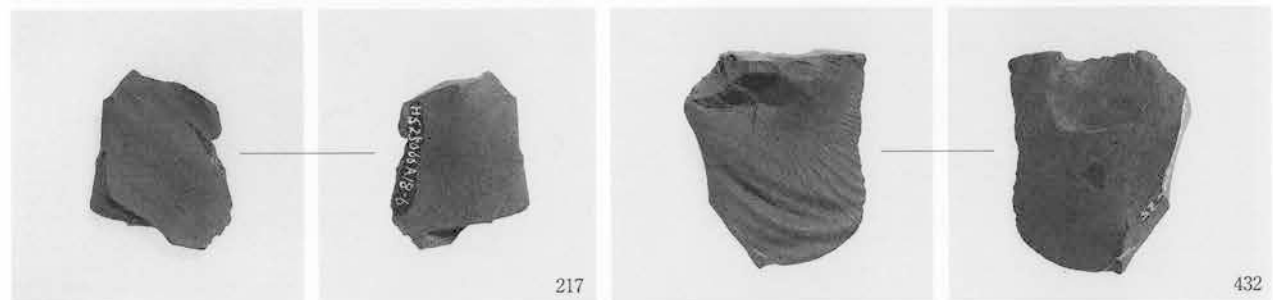
471

8



18

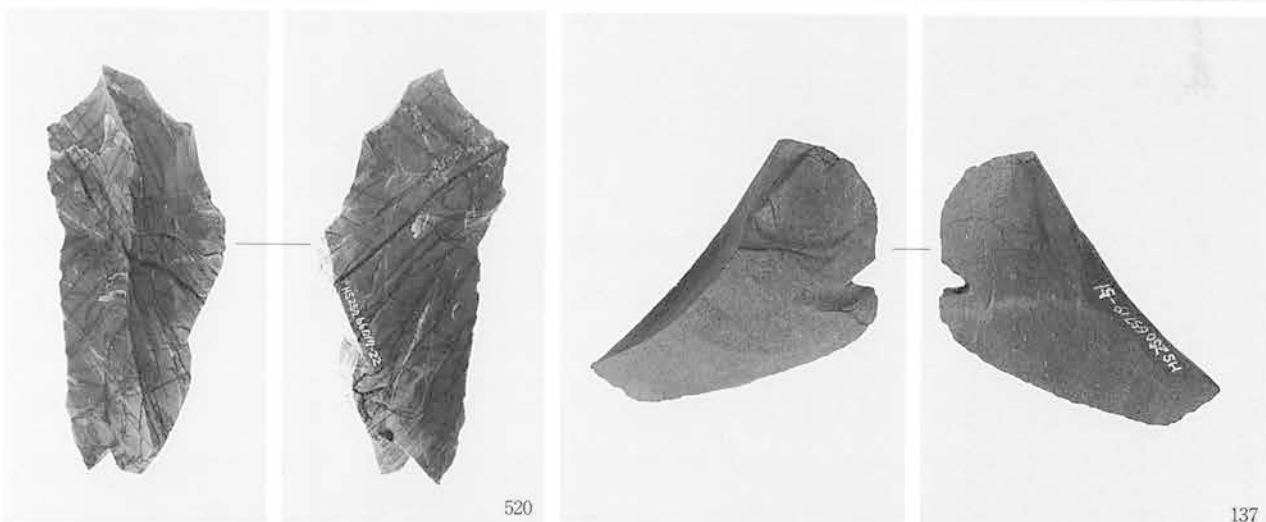
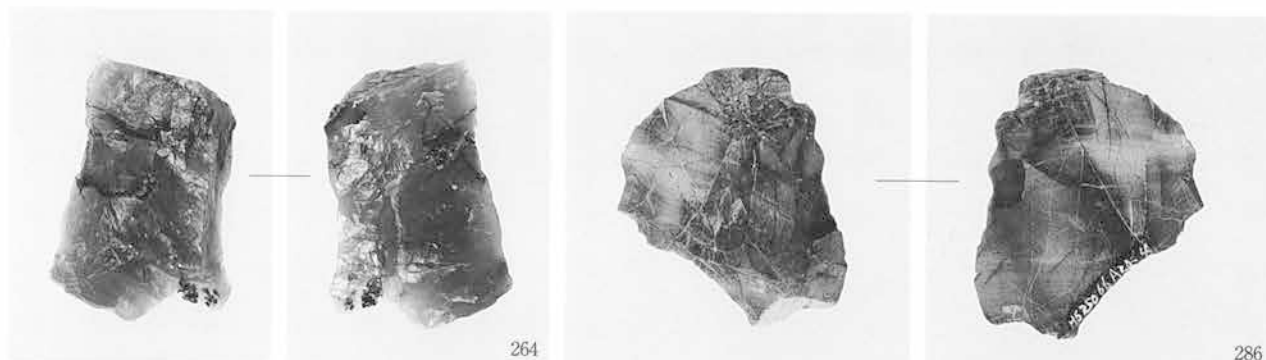
481



217

432

使用痕を有する剥片 (1)



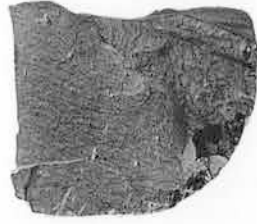
使用痕を有する剥片 (2)



208



45



475

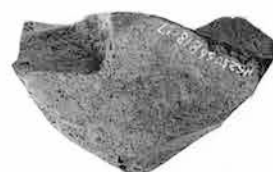


100



426

石核 (1)

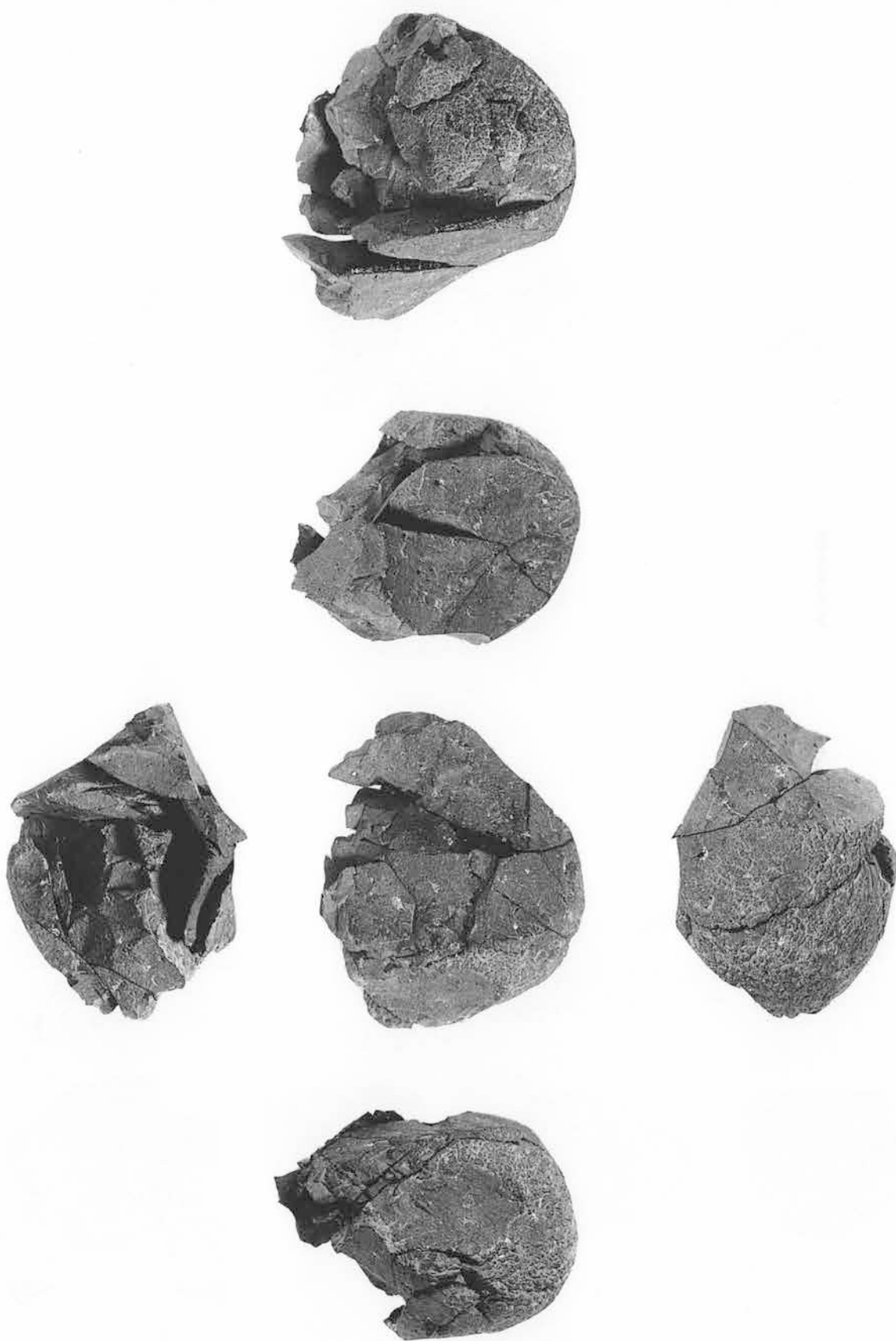


424

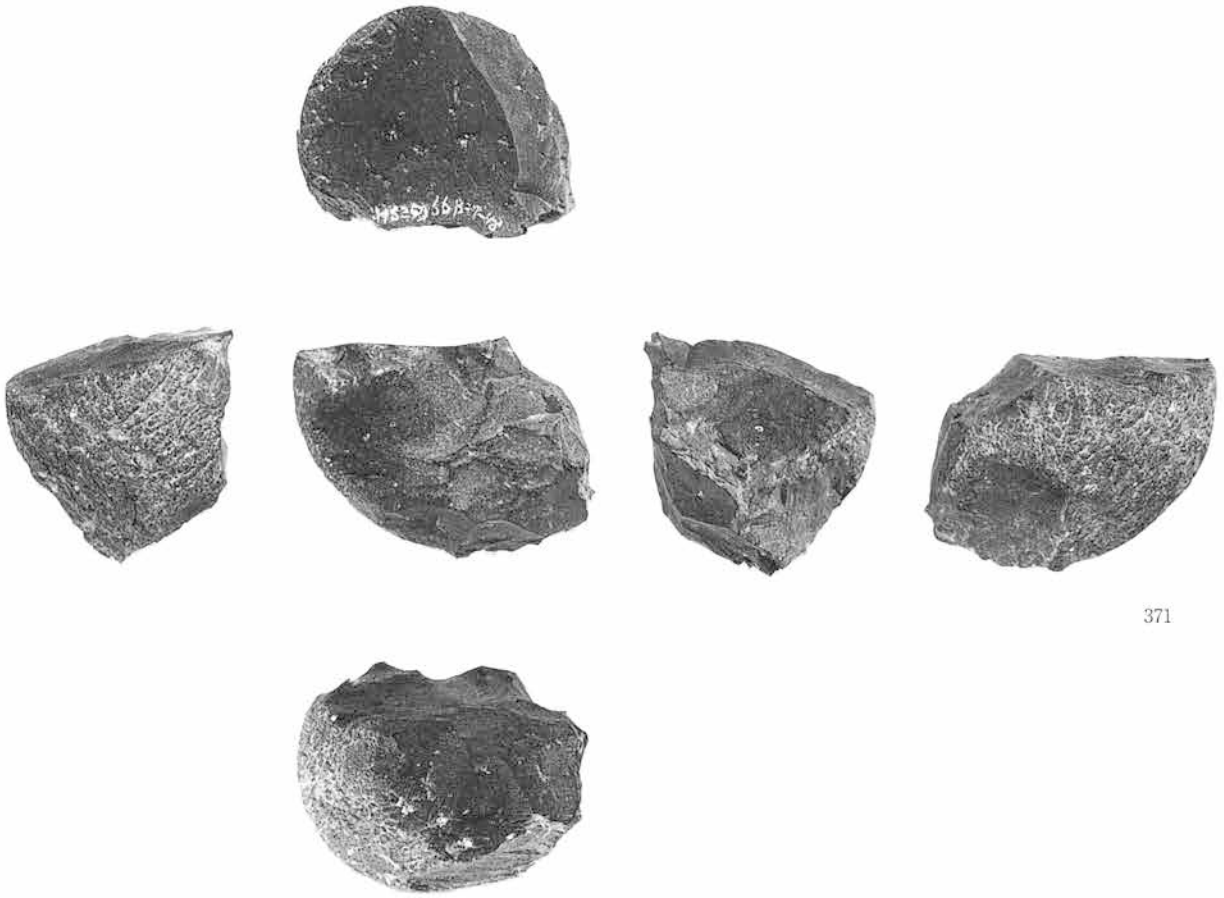


246

接合資料-1



接合資料-1 (1)

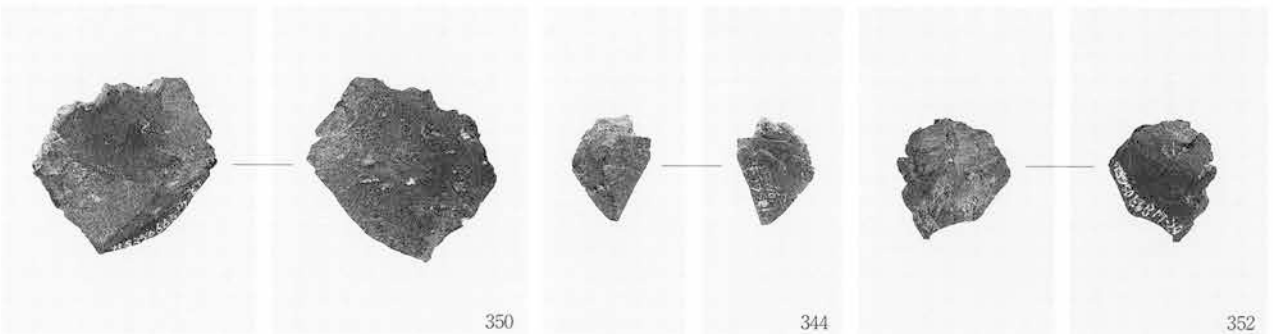


371



376

339



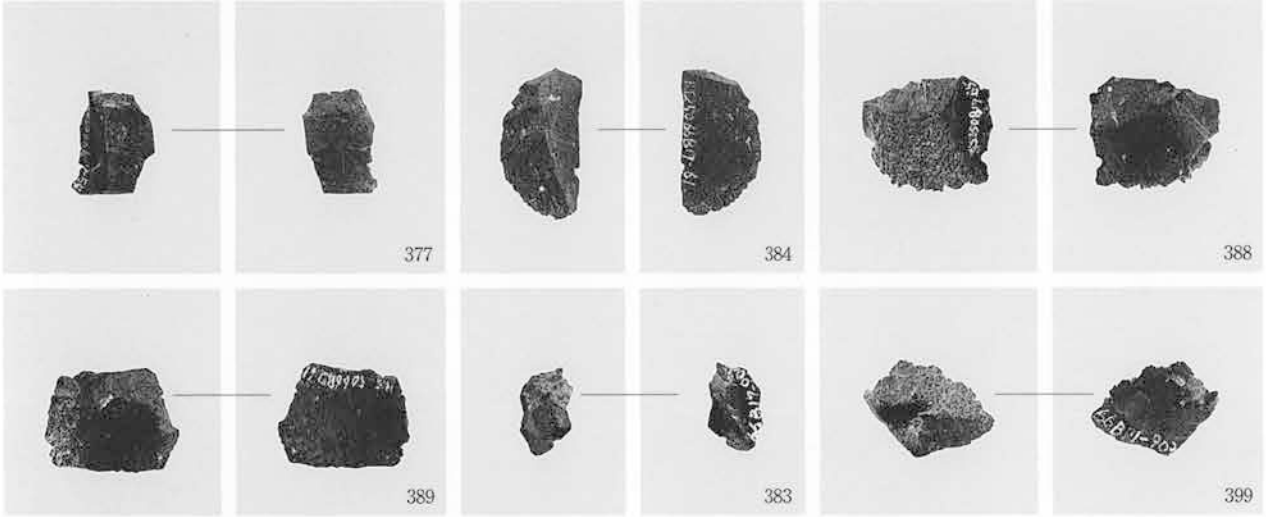
350

344

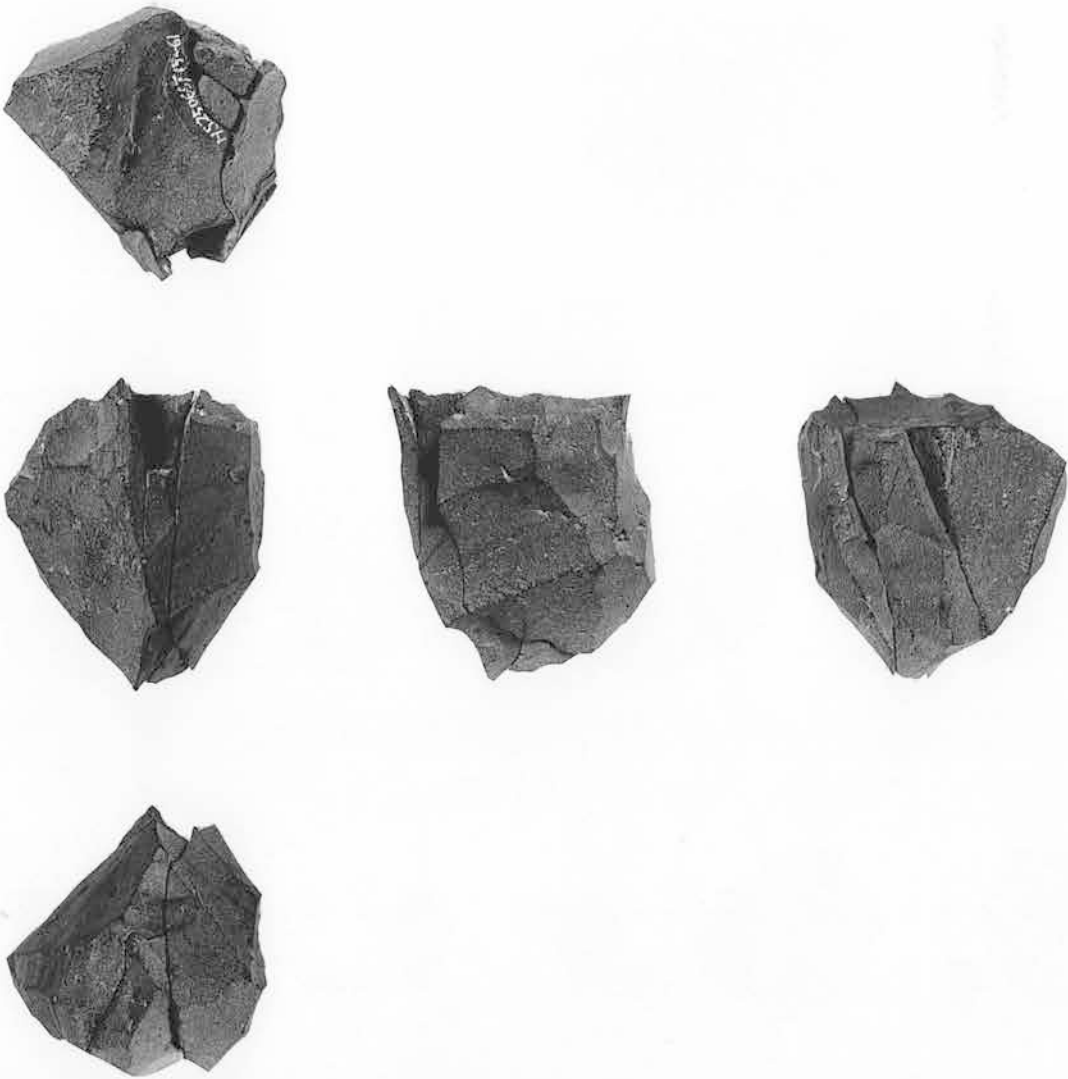
352



接合資料-1



接合資料-3





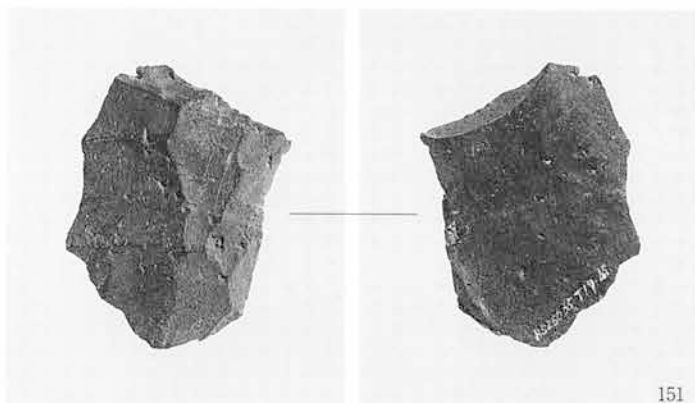
147



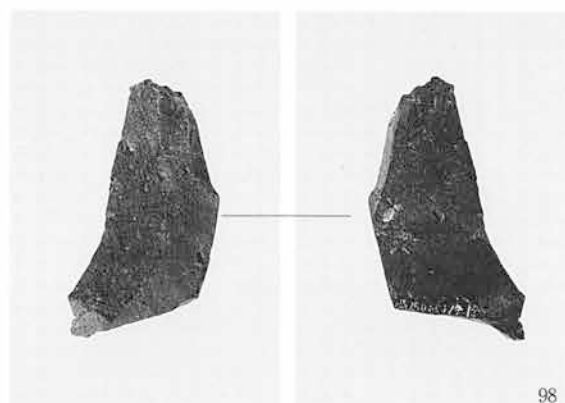
99



132

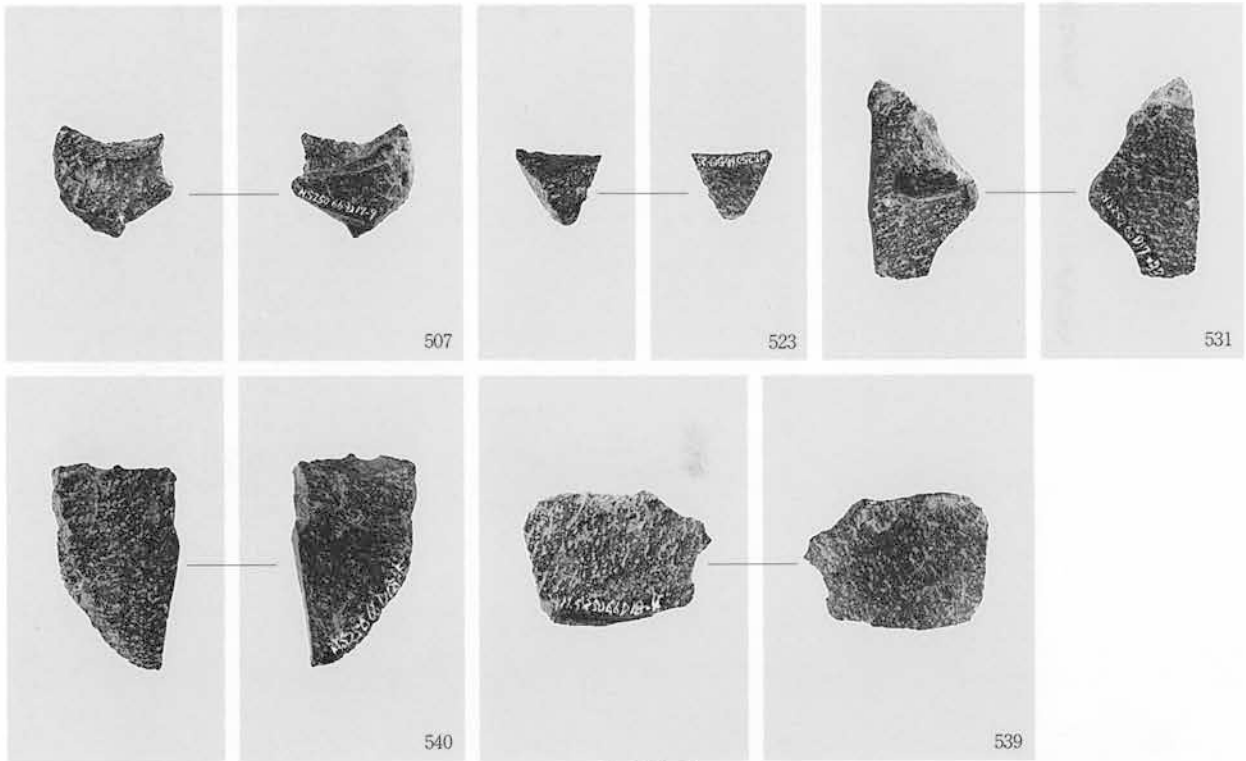


151



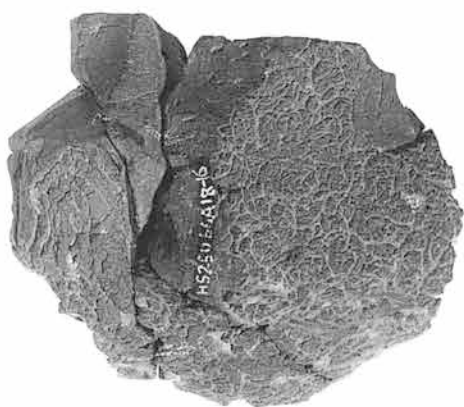
98

接合資料-4

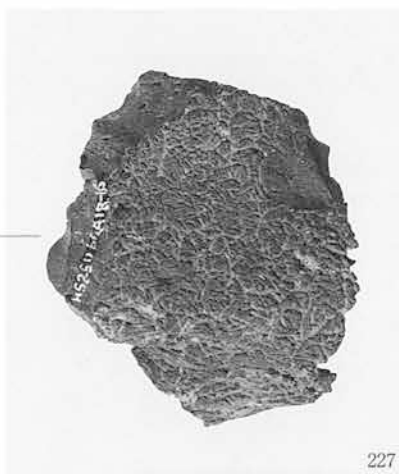
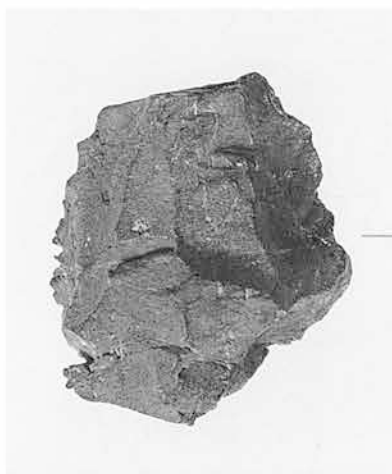


接合資料-4

接合資料-5



240



227

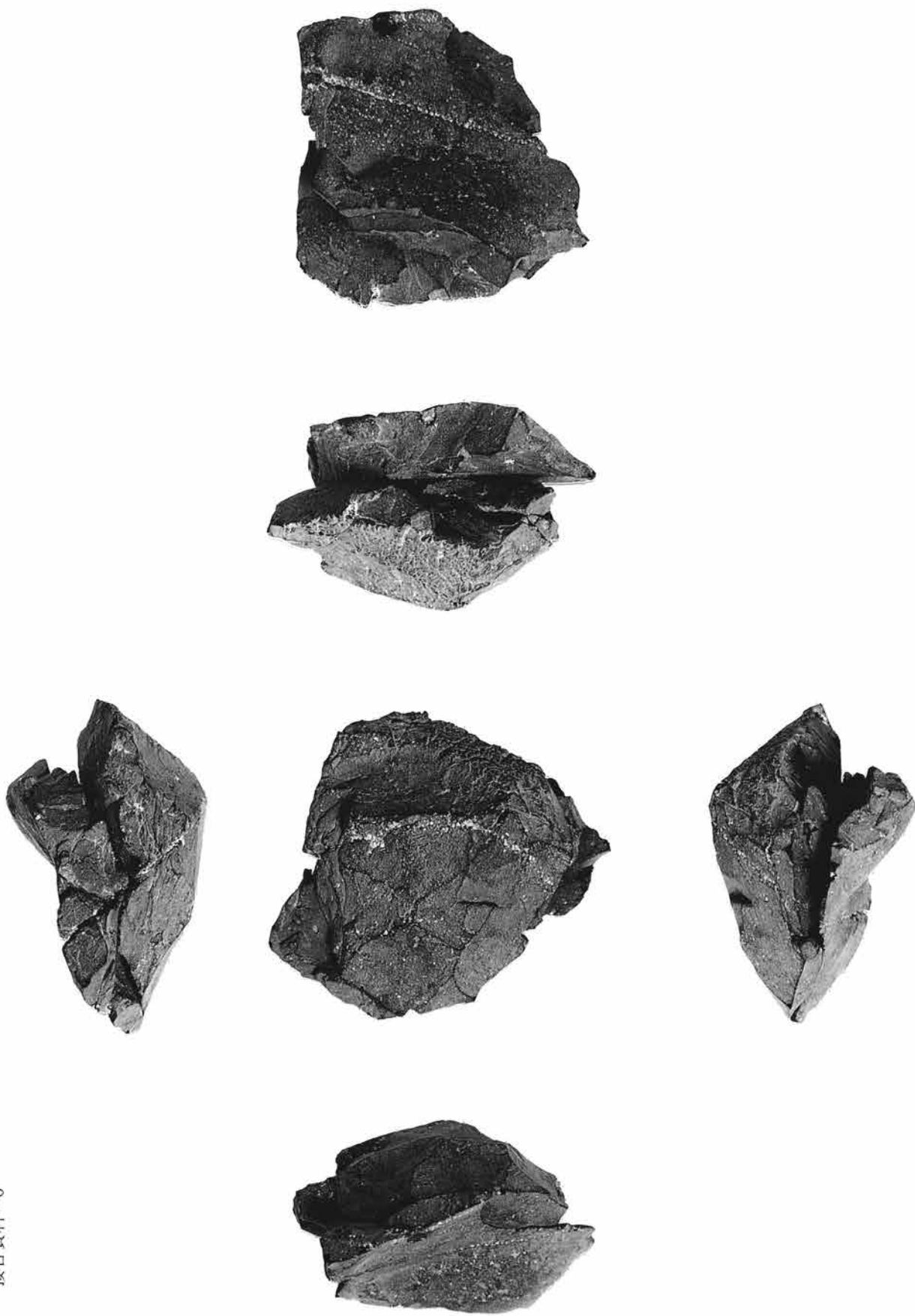


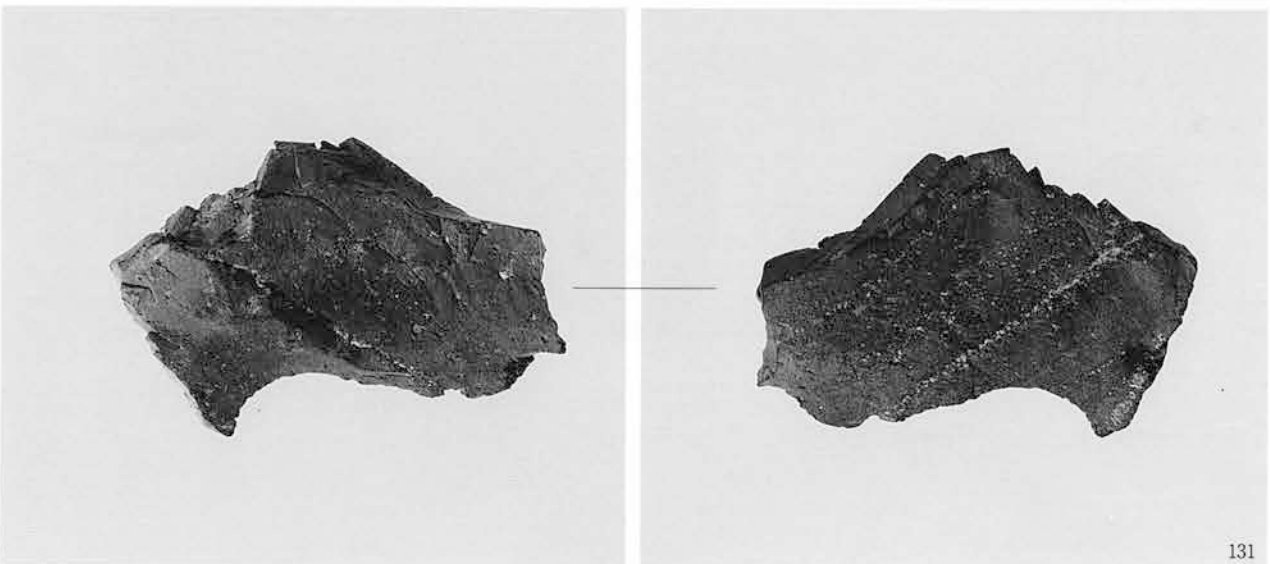
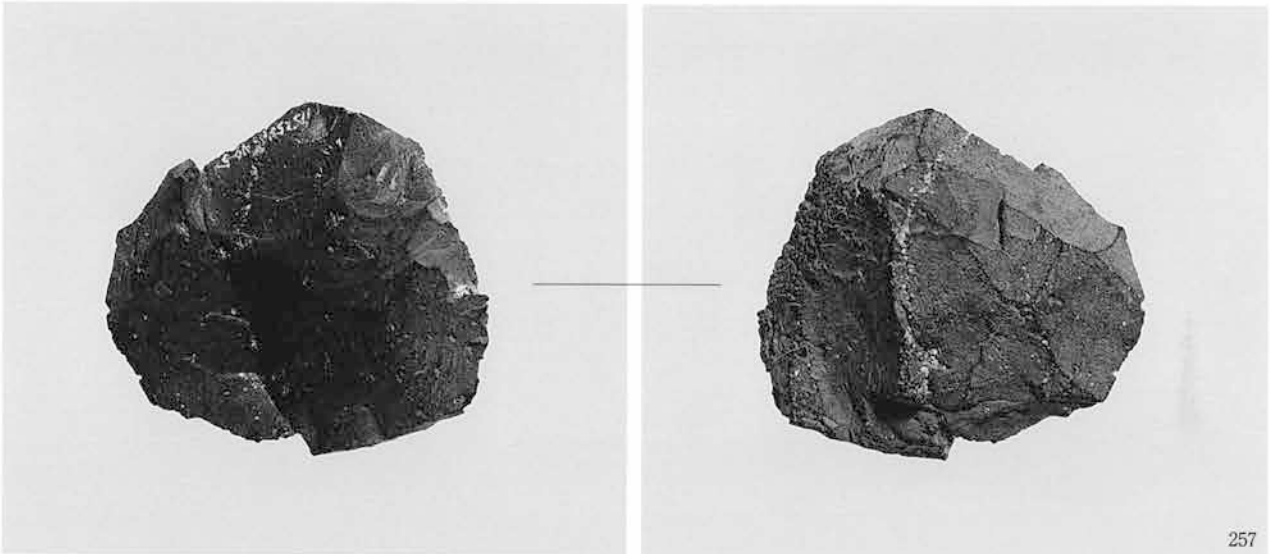
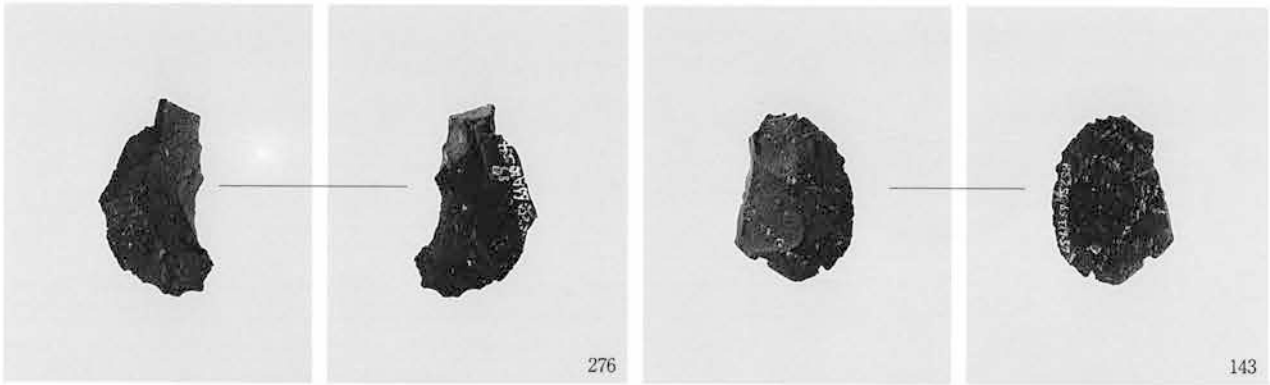
228



10

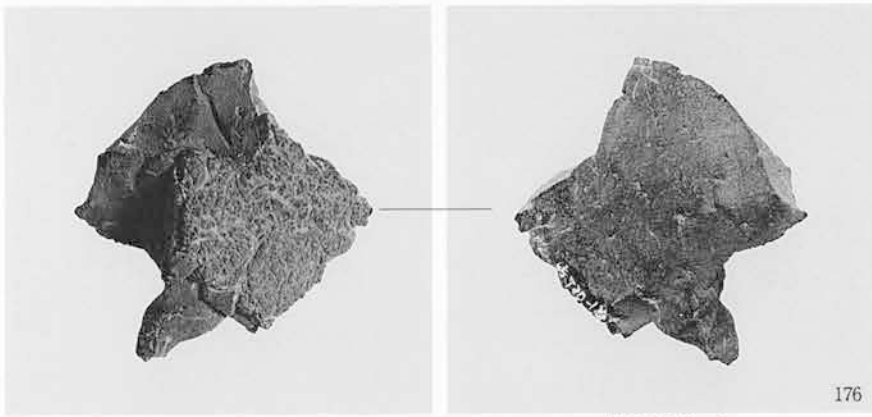
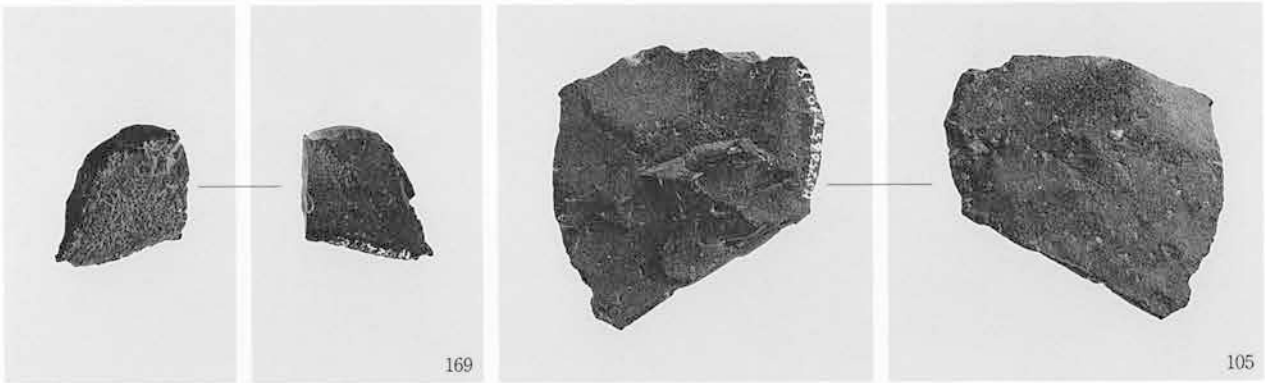
接合資料-5





接合資料-6 (2)

接合資料-9



接合資料-9

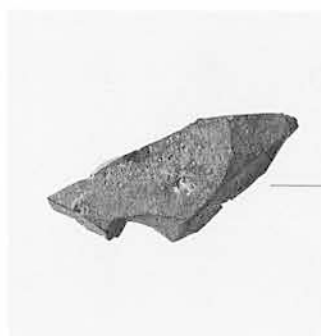
接合資料-10



140



133

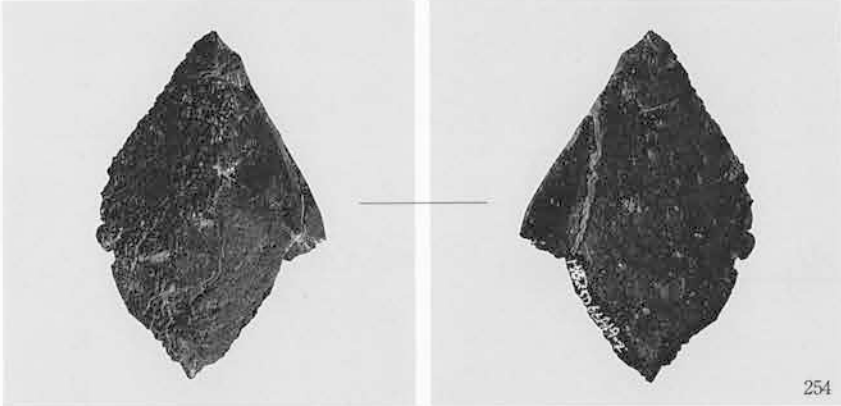
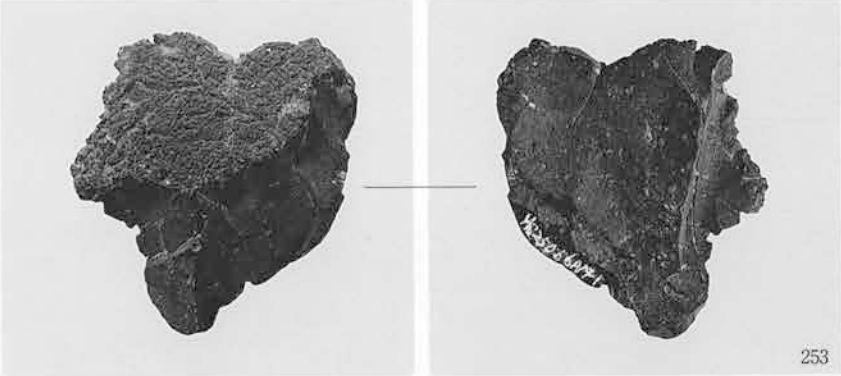


89

接合資料-10

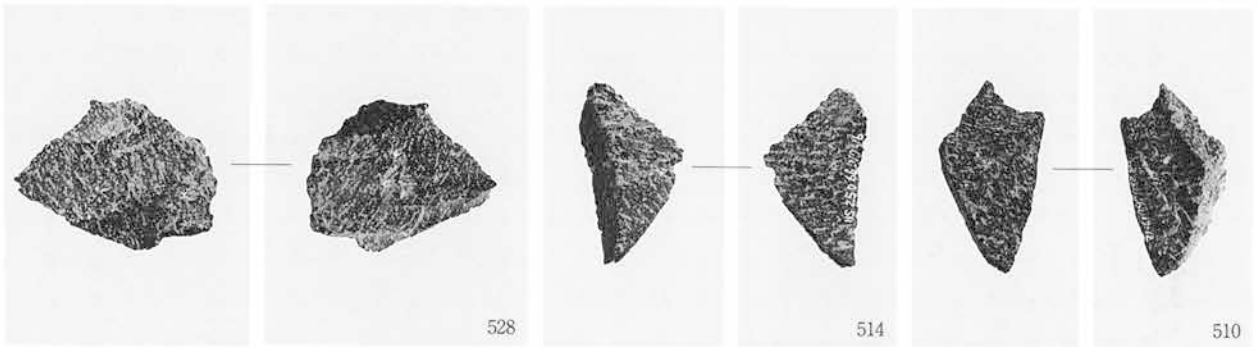
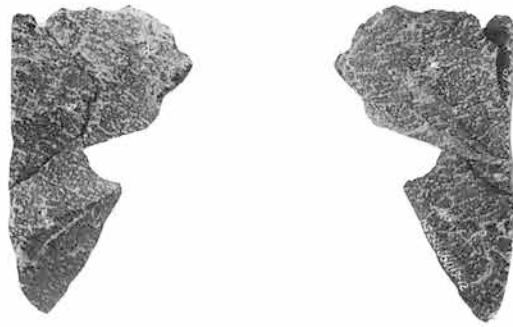


接合資料-11



接合資料-11

接合資料-15



接合資料-17



接合資料-18



接合資料-19



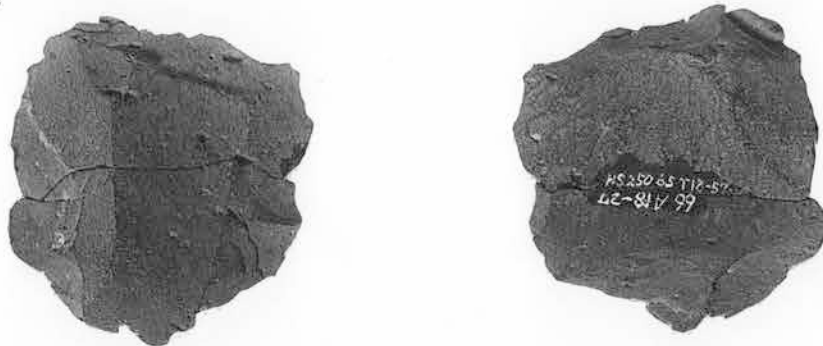
接合資料-20



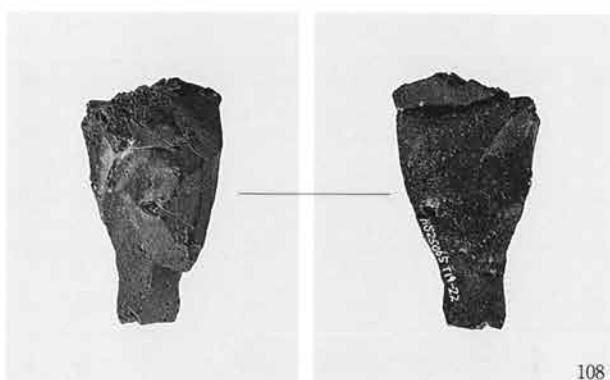
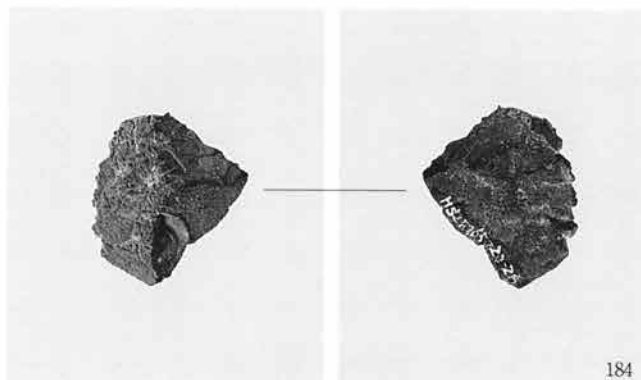
接合資料-21



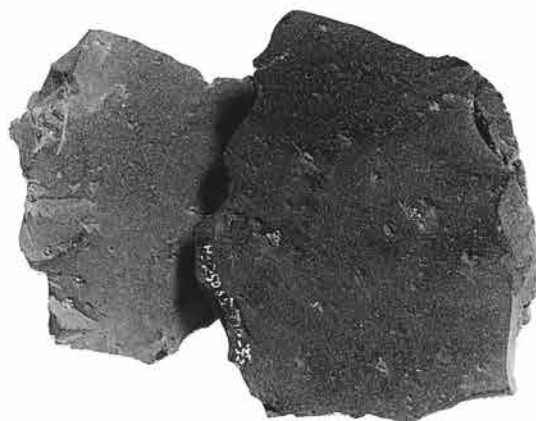
接合資料-25



接合資料-28

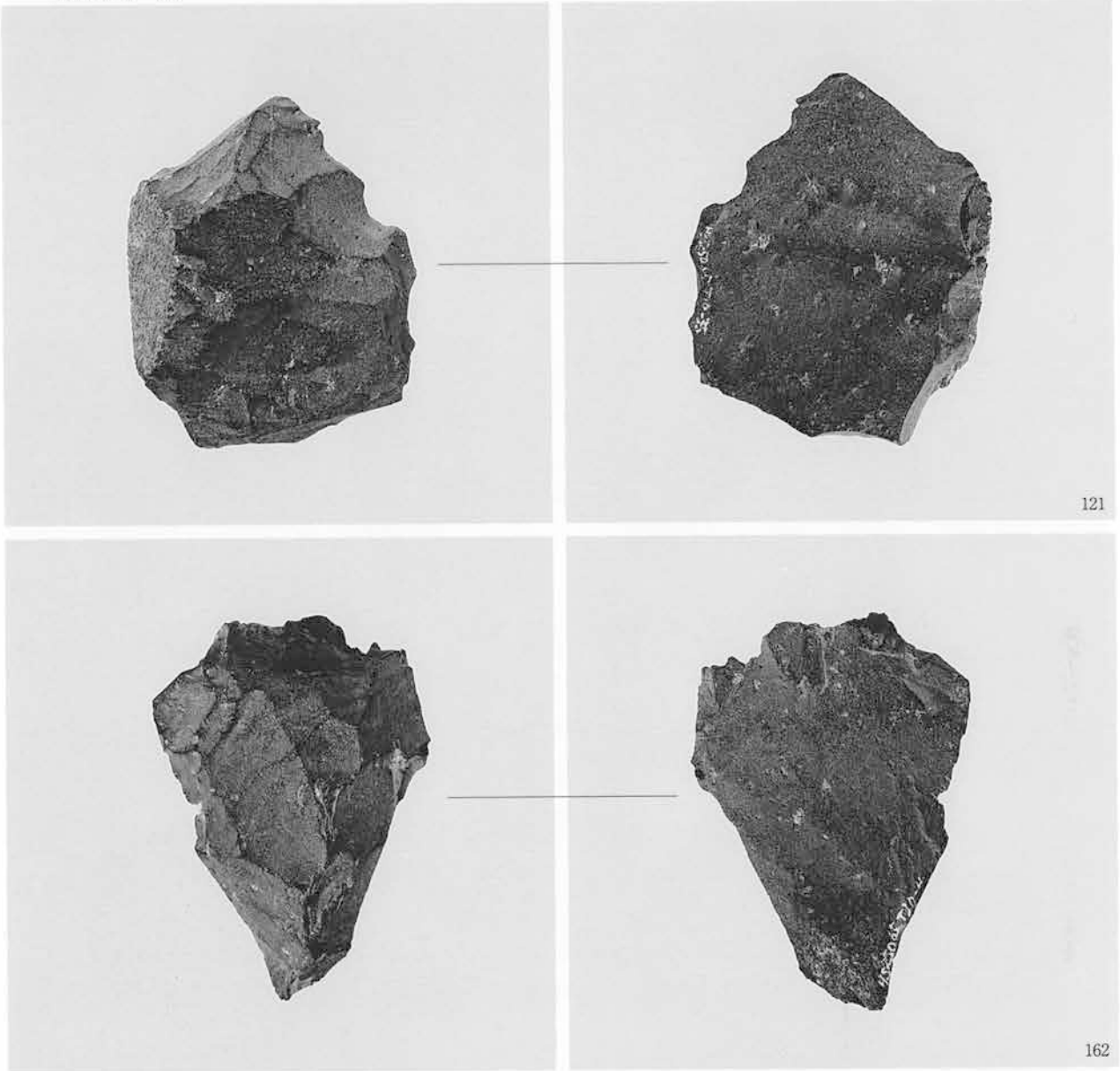


接合資料-30



接合資料-28・30 (1)

接合資料-30



接合資料-31



接合資料-30 (2)・31

接合資料-35



224



347

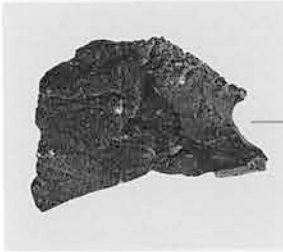
接合資料-37



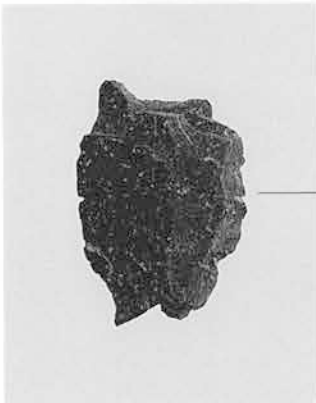
接合資料-39



接合資料-41



接合資料-45



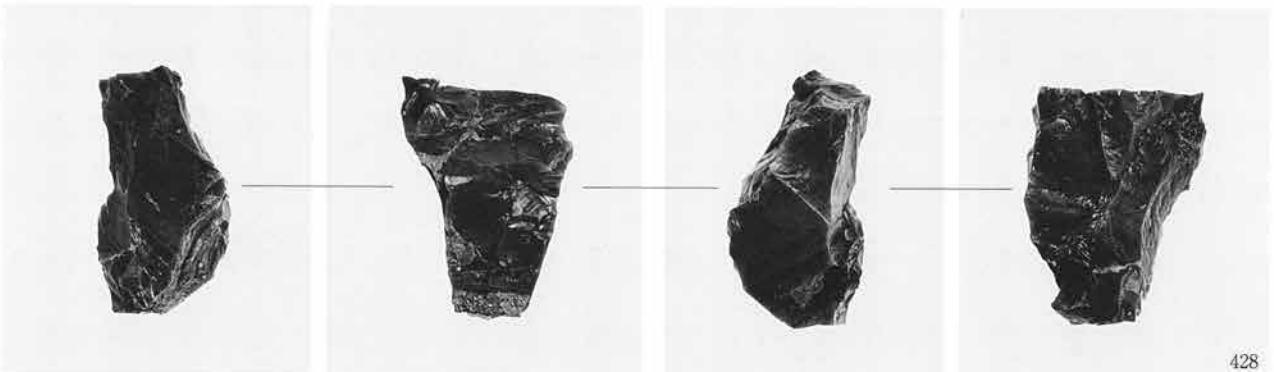
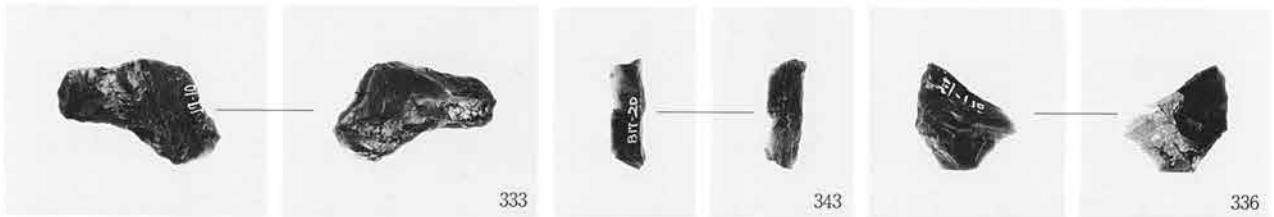
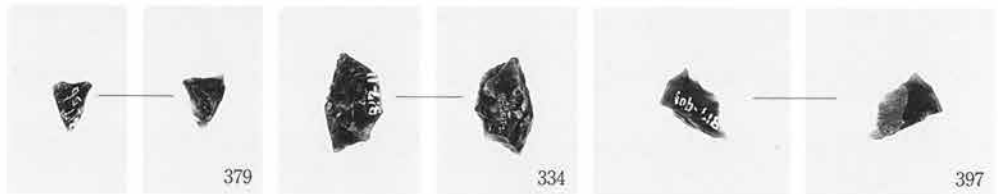
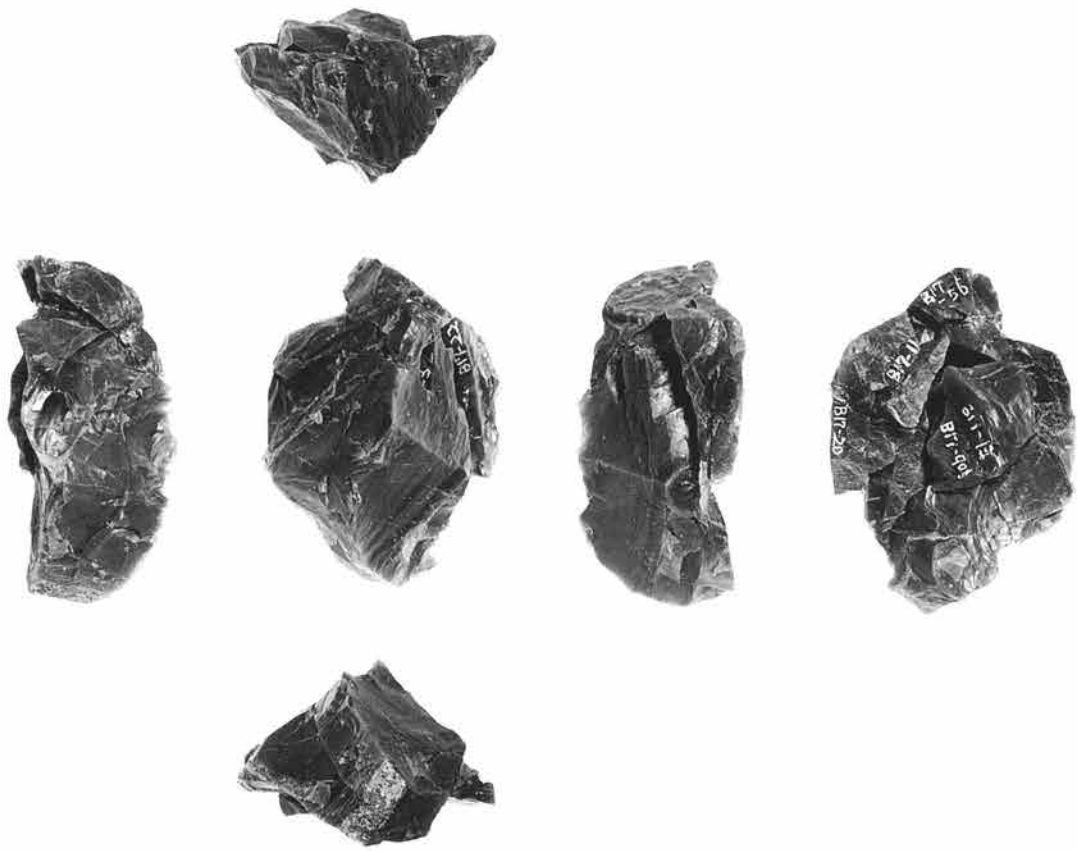
接合資料-46



接合資料-47



接合資料-2



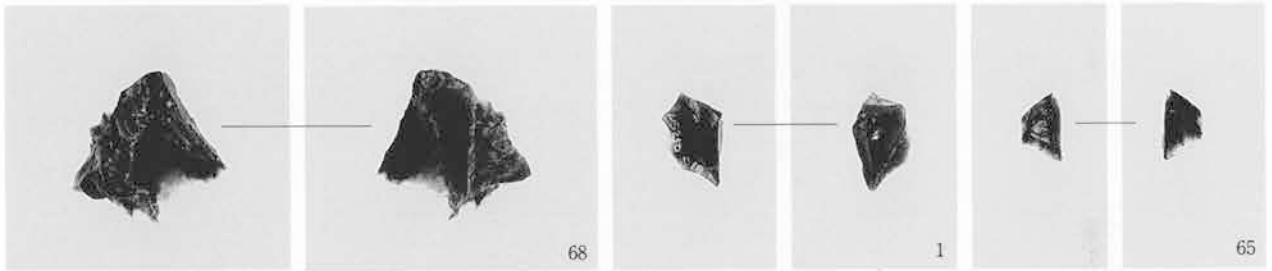
接合資料-2 (1)



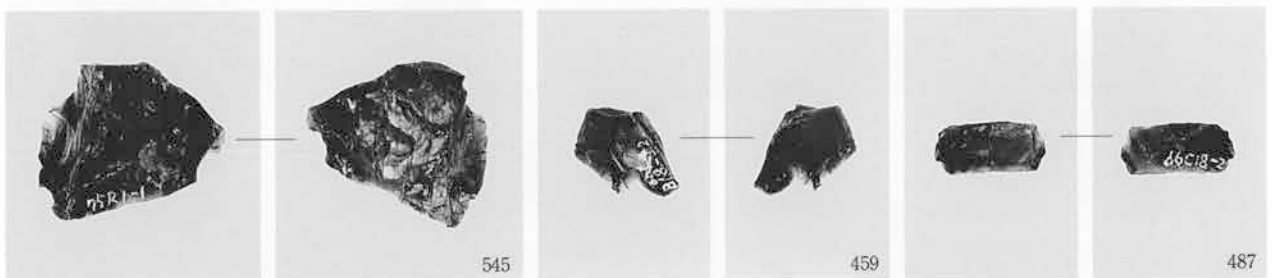
接合資料-2



接合資料-8



接合資料-13



接合資料-22



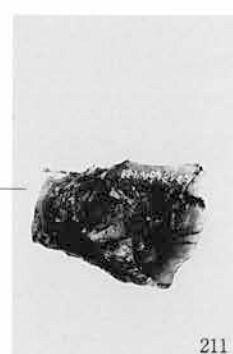
接合資料-26



接合資料-29



接合資料-33



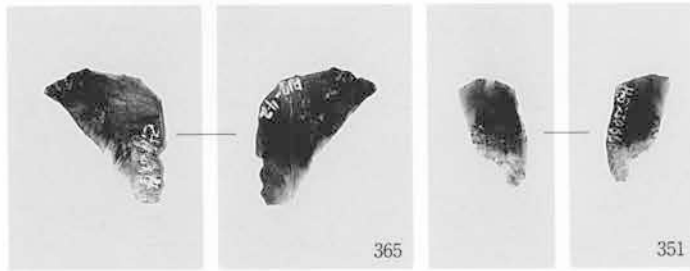
221

211

接合資料-34



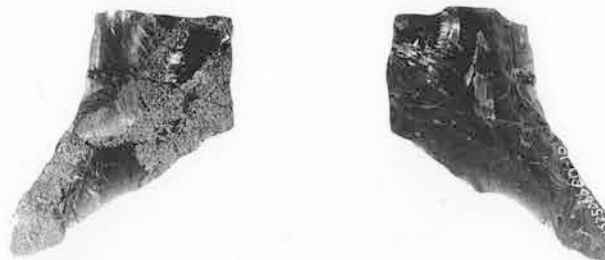
接合資料-38



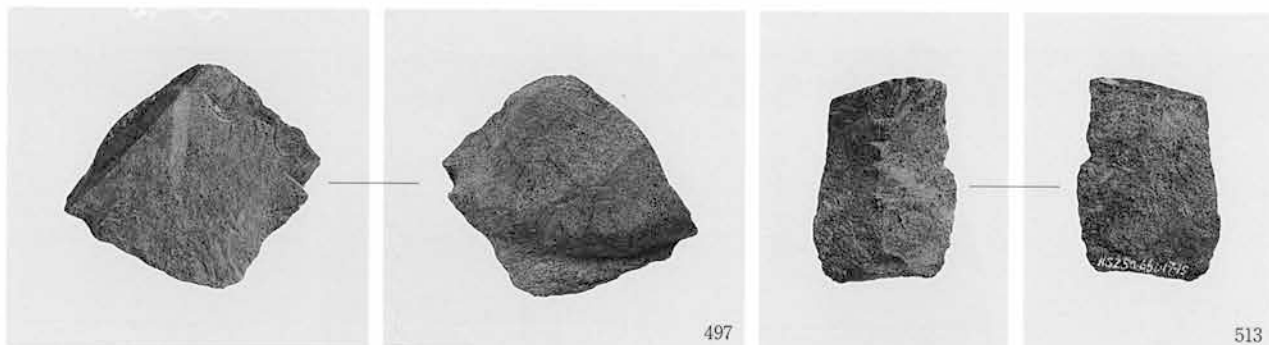
接合資料-43



接合資料-44



接合資料-14



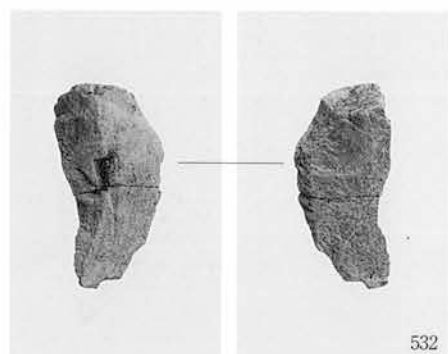
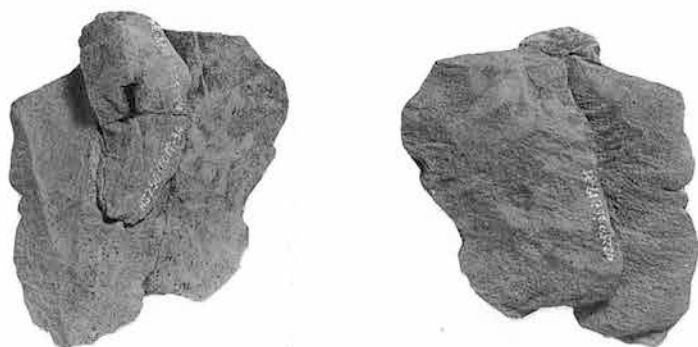
497

513



533

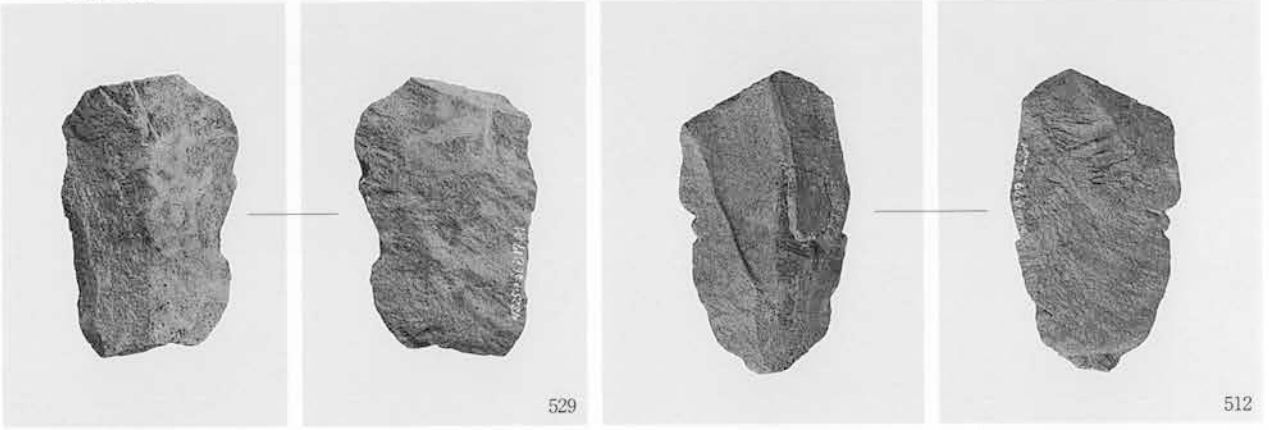
接合資料-16



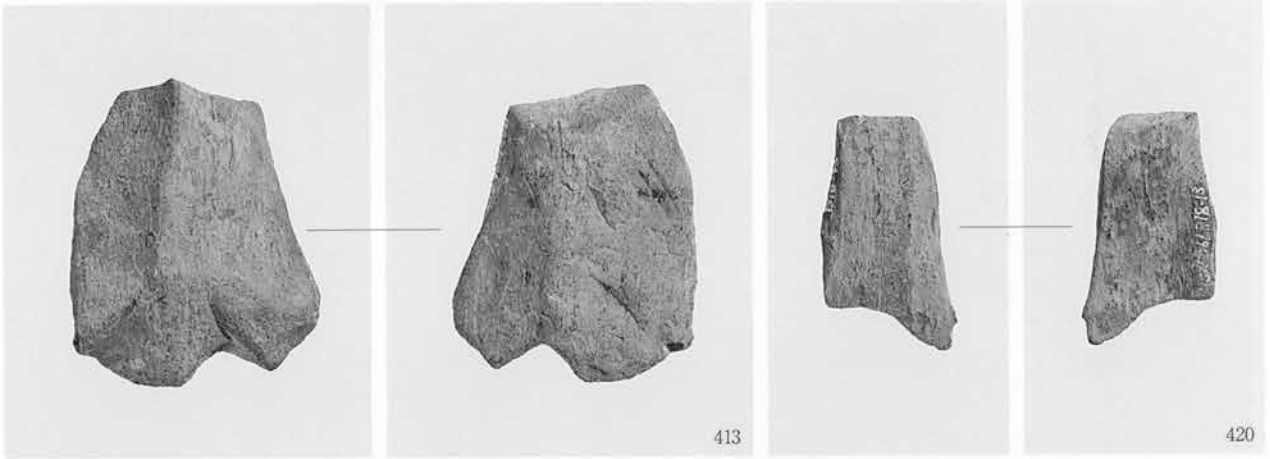
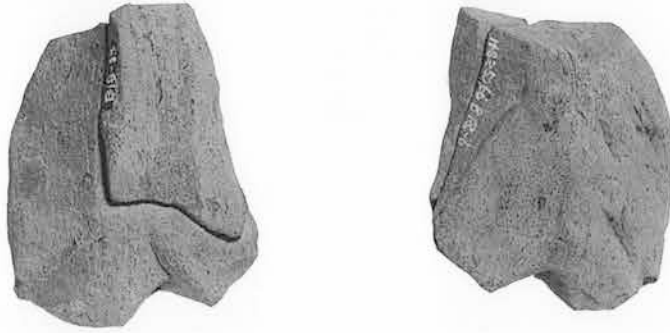
532

接合資料-14・16 (1)

接合資料-16



接合資料-40



接合資料-42



接合資料-32

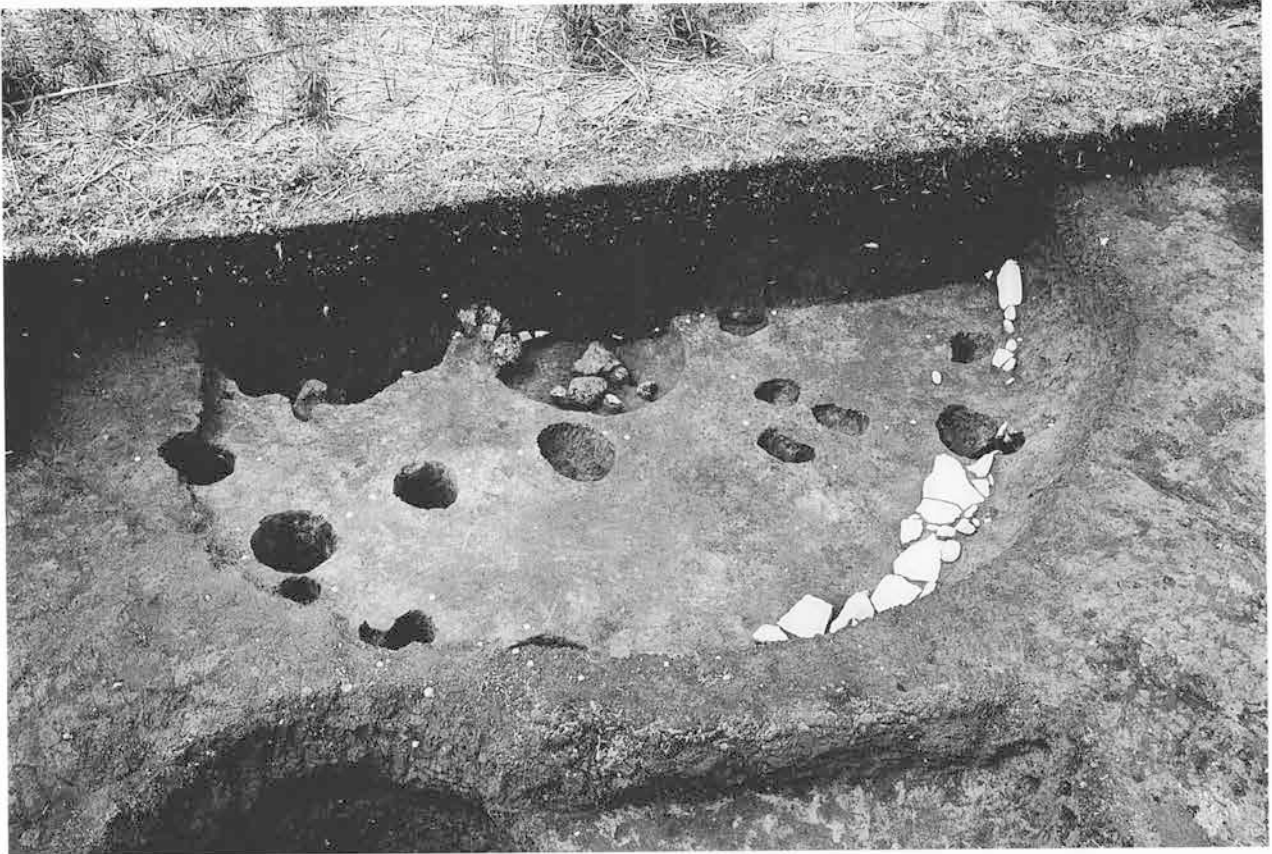


接合資料-36



接合資料-23





1号住居 全景（南から）



1号住居 土層断面（南から）



1号住居 遺物出土状況（南から）



1号住居 敷石部（西から）



1号住居炉 全景（南から）



2号住居 全景 (西から)



2号住居 遺物出土状況 (西から)



2号住居 土層断面 (南から)



2号住居炉 全景 (西から)



3号住居 全景 (西から)



3号住居 遺物出土状況 (西から)



3号住居 土層断面 (南から)



3号住居炉 全景 (西から)





16号住居 全景（南から）



16号住居 遺物出土状況（南から）



16号住居 主体部（東から）



16号住居 柄部（南から）



16号住居 主体部から柄部を望む（北から）



16号住居 敷石取上後全景 (南から)



16号住居 連結部石囲施設 (南から)



16号住居炉 全景 (北から)



16号住居掘り方 全景 (南から)



17号住居 全景 (東から)



17号住居 遺物出土状況 (東から)



17号住居 土層断面 (東から)



17号住居炉 全景 (南から)



18号住居 全景（南から）



18号住居 遺物出土状況（南から）



18号住居 敷石部分（西から）



18号住居 炉 全景（南から）



18号住居 炭化材出土状況（南から）



19・20号住居 全景（西から）



19号住居 遺物出土状況（南から）



19号住居炉 全景（南から）



20号住居 遺物出土状況（西から）



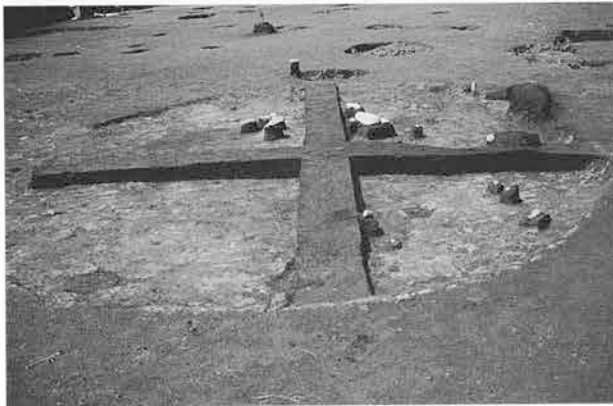
20号住居炉 全景（南から）



21号住居 全景（南西から）



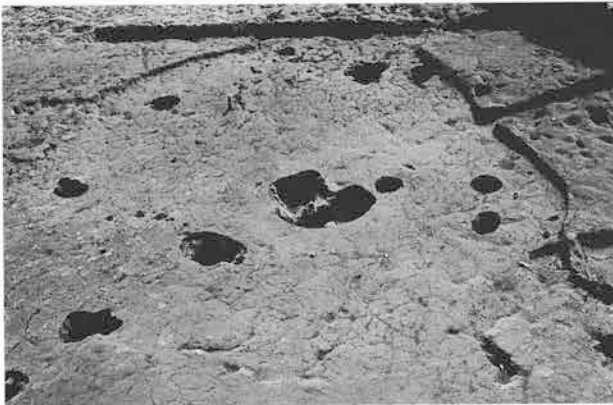
21号住居 遺物出土状況（西から）



21号住居 土層断面（東から）



21号住居 土層断面（南から）



22号住居 全景（西から）



22号住居 遺物出土状況（西から）



22号住居 土層断面（北から）



22号住居 玦状耳飾り出土状況（南東から）



23号住居 全景（北から）



23号住居 遺物出土状況（北から）



23号住居 土層断面（東から）



23号住居炉 全景（南から）



23号住居 炉体土器内土層断面（南から）